

ファイアーエムブレム  
聖痕の覚醒

ヒアデス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ファイアーエムブレム「紋章の謎」と「覚醒」の間の時代、王子クロスとその息子にして初代聖王カイルの二世代にわたる物語。

# 目次

クロス編		
第1話	海から来た公女	1
第2話	グランベルの目的	8
第3話	地震そして聖痕	20
第4話	蛮族の襲撃	37
第5話	思わぬ助け	52
第6話	瞳に聖痕に宿す子	67
カイル編		
第7話	屍と巨竜	81
第8話	自警団ルッツと傭兵アイク	94
第9話	氷の王	110
第10話	建国	124
第11話	ペレジア帝国	142
第12話	ラーズ	156
第13話	皇帝ユベン	168
第14話	潜入と脱出	183
第15話	グラデイウス	199
第16話	破壊の竜 ギムレー	214
第17話	ペレジアの新たな王	229
軍司令		
第18話	ワーレン 法律顧問と魔道	248
第19話	聖痕の覚醒	262

第20話	フェリア首脳会談	—	270
第21話	同じ	—	281
第22話	ヴァルム大陸	—	294
第23話	神竜の巫女とソンシン	—	310
第24話	マスタープルフ	—	332
第25話	最後通牒	—	353
第26話	皇帝との会談	—	363
第27話	オーブ	—	385
第28話	第一次ヴァルム大戦	開戦	—
第29話	敗戦	—	393
第30話	チェイニー	—	434

第31話	捕らわれのカーシャ	—	448
第32話	参戦 脱出	—	467
第33話	コマンド	—	483
第34話	決戦	—	498
第35話	ヴァルム一の騎士	—	512
第36話	赤い人魂	—	530
第37話	二振りのファルシオン	—	541
第38話	休戦	—	562
第38話外伝	決戦前夜1	テリウス	—
(十タグエル)	—	—	569
決戦前夜2	フェリア・商人たち・ペレ	—	—

669	決戦前夜 9	カイルとカーシャ	第4話	消滅	824
660	決戦前夜 8	アイクとララベル	正史エンディング	後	804
	警団		正史エンディング	前	789
	決戦前夜 7	アルバレア・ヴァルム・自	第4話	終わりと始まり	781
	決戦前夜 6	ソシン	第4話	封印	765
611	決戦前夜 5	ノーヴァ・竜族	正史		625
	決戦前夜 4	魔道士たち・アンリ	第4話	神の力	736
	ワーレン		第4話	乱心	715
	決戦前夜 3	ペレジア2・商人たち2	第4話	神竜	701
	ジア		第3話	復活	683
					583
					595
					636
					650
					625
					746
					736
					715
					701
					683
					824
					814
					804
					789
					781
					765
					625
					746
					736
					715
					701
					683

第47話 異郷の旅人

I F エンディング 前

I F エンディング 後

|

|

|

841

848

866

## クロス編

## 第1話 海から来た公女

## アカネイア大陸

かつてこの地では人と竜の争いが幾度も繰り広げられていた。英雄王マルスが封印の盾を完成させメデイウスを封印しマルスがアカネイア連合王国の盟主に即位してからは現代にいたるまでも人同士の争いは絶えず行われていたが人と竜の争いはこの千年間行われることは無くよく言えば安定している悪く言えば停滞した時代だった。

その安寧はこのタリスの地で覆される。

港町タリス、千年前は国だったが王女シーダがマルスの妃として嫁いで以来、元々他の国よりはるかに小さいため、治安維持のための部隊の常駐を条件に国号を捨て一つの町となった。

そのタリスの店で青い髪の若者が買い物をしていた。

「このガラス細工ください」

「彼女への贈り物かい？」

「いやいや、父へのお土産ですよ。タリス由来のものに目がなくて」

「土産ねえ、そういうや今パレスから王子様が部隊を引き連れて町を視察してるって聞か」

主人の言葉に若者はぎくりとして、

「ぼ、僕はただの平民ですよ。王子が視察なんて初めて聞いたな」

主人は若者が兵士ではないかと思つて訪ねてみたのだ。しかしこの反応は……

「まさかとは思うが、いや思いますがあなた様は——」

主人が言い終わらないうちに若者の後頭部を男が小突く。

「何をやっているんですクロス。まだ視察は終わっていませんよ」

「ごめ、すみません。ジェイクス隊長」

クロスと呼ばれた若者の謝罪を聞きながら男は主人に愛想笑い、

「うちの新兵が失礼しました。商品はちゃんと買わせますのでどうかお許しを」

男は主人に頭を下げ若者を引つ張つていった。だがサボった兵士へのお咎めがある程度だとは思えない。やはりあのお方は、主人は先ほど気付いた若者の正体に確信を抱いていた。

「王子、勝手に町へ出られては困ります。タリスへはあくまで視察に来たんですよ」



店から離れてほどなく男は若者から手を放し目付け役として注意した。

「ごめんごめん。視察中だと買物できるとは思えなかったからさ」

若者の名はクロス。この大陸を統べるアカネイア連合王国の王子だ。

「陛下への手土産なら領主が用意していますよ。部隊が常駐し治安が良くなったとはいえ海賊が現れないとは限りません。どうか御身を大切に」

クロスのお目付け役を担っているのはジェイクス。20代の若さながら中隊の隊長を務めている。

「海賊なんてもう何百年も前から現れてないって聞くよ。しかもパレスの部隊まで来ている時に限って……」

その時海岸から悲鳴が上がった。

「船だ!」「海賊か!」「あんなバカでかい船で」「ペラティからの軍じゃないか?」

クロスだけでなくジェイクスも海賊がやってくるなんて夢にも思っていなかった。思わず二人は顔を見合わせて、

「すぐに部隊を招集します。タリスの治安部隊もすぐに駆けつけてくるでしょう。王子は領主館に」

「僕もいくよ。部隊を率いて視察に来たって触れ込みを流して危なくなったら館に逃げ隠れていたんじゃないから失望されるよ」

この後も説得を試みるもクロスは折れず、絶対に最前線に出ないことを条件に同行を許し、一度領主館へ戻り部隊を率いて船が来たという東の海岸に駆け付けた。

東の海岸には巨大な船が4隻近づいていた。アカネイアと国交を結んでいるのは西のヴァルム大陸だけで東には別の大陸を確認したこともなかった。そのためタリスの東には船を停泊するための港が存在しない。

パレス部隊とタリス部隊が合流し、野次馬を抑えながら展開し船を警戒していた。その時船から男が大声で兵たちに呼びかけた。矢を恐れているのか物陰に隠れて姿はよく見えない。

「俺たちは海賊じゃない！ この大陸と交易するために来た国の船だ」

兵士たちは動揺し警戒しながらおかしな真似をすれば容赦なく追い払うと言って、タリス西の港へ移動するように促し数人の下船を許可した。

それからしばらくの時間をかけて奥に控えていた一番大きな船から数人の兵士が下船し始めた。

「どこの町から来た？ 東に異国があるなんて聞いたこともない」

タリスの部隊長が尋ねるものの件の船から降りた兵士はこちらの言葉が分からないらしく手ぶりで少し待つように頼んできた。ほどなく商人風の男が下りてくる。

『我々は南東の大陸からこの大陸と交易するためにやってきた。どうかこの国の国王陛

下にお目通りいただきたい』

商人の通訳を介して彼らはこのような要求を突き付けてきた。先ほど大声で呼びかけたのもこの商人らしい。

「まさかパレスまで案内するわけにいかないだろう」「いずれにしても領主さまの許可が必要だ。領主さまを国王だと思いかもしれない。そうなったら適当にはぐらかして帰ってもらおう」

隊長が側近とそんなやり取りをしている間に、

「王子、お待ちください」

ジェイクスの制止も振り切りクロスは前に兵士たちの前に進み出て、

「私はアカネイアの王子クロスと申します。よろしければ私がお話を伺いましょう」

双方の兵士たちが戸惑いながらクロスに注目した。こんな巨大な船が遠い大陸からやってくるなどアカネイアの技術では信じられないことでクロスは直感的に彼らが本当に未知の大陸からやってきたことを信じ、彼らと親交を深めればこの国の発展につながると思ひジェイクスとの約束を忘れ彼らと接触しようとした。

相手の兵士たちは信じていないようでも返事を返さずクロスをしばらく注視した後内々で相談を始める。そんな時船から新たな人物が下りてきた。侍女らしき女性が必死で止めようとしている。

侍女を説得した後下りてきたのは長い銀髪をおろし、足元まで覆った豪華なドレスとドレスとは裏腹に額を簡素なサークレットで覆った美しい女性だった。

『お初にお目にかかりますクロス様。わたくしはユグドラル大陸にあるグランベル王国のバーハラ公爵家の公女ユリナ。貴国をはじめ、この大陸の国々と国交を結ぶためにやってきました』

このときクロスはユリナにみほれていた。残念だったのは彼女の言葉を復唱していたのは商人のおっさんだったことだ。

クロス クラス：ロード

マルスの子孫でアカネイア連合王国の王子。大陸を統べる次期国王であるため、自分と対等に話せる人がいないことに寂しさを感じている。

ユリナ クラス：シャーマン

「聖戦の系譜」のユリアの子孫。グランベル王政復古後にバルド直系のセリスが即位したためバーハラ家は公爵となった。近年父を病で亡くし、兄が爵位を継いだため家督争いの芽を摘み取るために縁談を勧められる日々を送り、縁談話から逃げるため成り手が見つからなかったアカネイアへの使節団の団長に志願した。

ジェイクス クラス：パラディン  
クロスのお目付け役。好奇心旺盛なクロスに振り回される苦労人。

## 第2話 グランベルの目的

クロス率いるタリス視察部隊そしてユグドラルなる大陸から来た公女ユリナ擁する使節団はタリスで食料等の補給を行い一泊した後、海沿いにワーレン経由でパレスまで来た。

ユリナらはパレス城に到着してから客室を借りて正装に着替え、副官のヨーゼフ伯爵と通訳の男とともに王の前で膝をついていた。

現アカネイア王グスタフ、初老に差し掛かり青髪に白髪を混ぜながらも威厳のあるたずまいで来客と対面している。

「ユリナ殿、貴公らは誠に東の大陸から来たと申すか。我が大陸は西のヴァルム大陸と交易をおこなっているため海の向こうに興味がないわけではない。だが東にそのような大陸があるなど聞いたことがない」

ユグドラルは東ではなく南東に位置するのだがユリナは王の間違いを訂正せず、自国の主張を述べることにした。細かいところは交流を深めていくうちに理解してもらえればよい。

『疑念はごもつともです。ユグドラル大陸の国々も西のリーベリア大陸に足を踏み入れ

るまでは生まれ育った地を離れるという考えに至りませんでした。そこではグランベルいえ大陸にはない様々な資源・生産物があり、リーベリアとの交易は我が国に多大な恩恵をもたらしてくださいました。貴国にも我が国にはないものがあるでしょう。競合する他国との戦いに明け暮れ消耗を繰り返す我が国を助けると思い貴国との交易をご検討して頂きたい。それが我が国の王の望みです』

ユリナはグランベル王からの親書と親書の内容を通訳がアカネイア語に直した写しを差し出し宰相が受け取り安全を確認した後グスタフに手渡した。

「確かに受け取った。しかしそなたの話がまだ信じられないというのが正直なところだ」

『無理ありません。そこでわたくしから提案があります。我が使節団の一部が帰国する際、貴国から何名様かグランベルに案内したいと思えます』

使節の交換、これは大陸間という途方もないことに限らず隣国間との交流でも行われていることだ。

「ふむ、では交易の監督はどうするつもりだ？ ユグドラルという大陸は我が大陸からはるかに離れていると聞く。問題が起こってもすぐ駆けつけることが出来まい」

『そこで陛下にお願いがございます。交易を見届けるために我々が貴国に留まるための大使館を設置して頂けないでしょうか？』

ユリナの二つ目の提案にグスタフだけでなくアカネイア側の重臣が戸惑った。

「たいしかん？ 誰か知っている者はいるか？」

グスタフの問いに重臣の誰もが首を横に振る。アカネイアとヴァルムにおいて使節とは他国へ赴くものであり、長期間駐在するものではなかった。ユリナは慌てて、

『申し訳ありません。説明を忘れていました。大使とは他国に駐在しその国に滞在する自国民の保護、監督をするユグドラルとリーベリアで採用されている制度でございます』

「アカネイアに常駐か。確かにその手もあるが…」

グスタフは説明された大使の制度に感嘆しつつも頭を抱える。見知らぬ相手のために施設を譲渡ましてや建設などできない。

「臣下と相談するためしばし時間をいただきたい。海を越えてきた客人を王宮でもてなしたいのは山々だがそなたらは信用されていない。不便を強いることになるだろう」

『かしこまりました。パレスやワーレンで宿を探します。無論住民の方々に迷惑をかけるよう兵士たちには交代で街を出入りしてもらい、残りは町の付近に天幕を張って過ごしてもらいます。それでおそれながら陛下にお尋ねしてもよろしいでしょうか？』

「なにかね？」

グスタフの許しを得てユリナは気になっていたことを尋ねる。



『クロス王子からお聞きしたのですが、この大陸には貴国以外の国は本当にないのでしょうか？ ユグドラルも二千年も前は帝政となったグランベルに統一されていましたが20年もたたずに分裂し王政に戻しました。大陸を統一し千年間も維持しているなど驚きを禁じえませんか』

グスタフはこのときようやく自国がユグドラルより進んでいるところを見つけて安堵した。

ユリナらは謁見の前にグランベルからの贈り物として莫大な財貨や高級品を納めた。その中にはアカネイアとは製法や材質が異なる品も多い。何よりこれらの品に加えて大軍や軍を維持するための水・食料を収納できる造船技術はアカネイアより優れていてグスタフや重臣たちは驚かされてばかりいたのだ。

突然異なる地からやって来て交易を始めたい。言葉だけだったら王への謁見もかなわずつまみ出されるところだろう。

そんな内心を隠しながらグスタフはアカネイア連合王国の実情を語る。

「いいや、正確にはアカネイア一国ではない。この大陸にはアカネイアの他にアリテイア・グルニア・マケドニア・オレルアンの4つの国があるが、そのすべてがアカネイア連合王国に参画しそのうちのアカネイアを含めて4国の王を余が兼務している。西方のグルニアだけは別の王がいるがアカネイアの公爵位を与え余の臣下ということに

なっている。だが余はグルニア王に無理な強要をするつもりはない。かの国と国交が結べるかはそなた次第だ」

『はい。アカネイアのすべての国と良き関係が築けるよう努力いたします』

ユリナらが父王と謁見している間、クロスは訓練場でジエイクスにしごかれていた。正体不明の集団の前に決して出ないという約束を破られた腹いせもあつたのかジエイクスは容赦してくれなかった。

そうでなくともクロスは日々激しい剣術の訓練に明け暮れていた。護身や王族のたしなみという理由だけではない。今のアカネイアにおいて王と認められるには神剣ファルシオンを振るうことができるという条件があるからだ。ファルシオンは選ばれたものしか扱うことができないらしく、王族であつても相当の鍛錬を積んだものしか振るうこともできず歴代王はいずれも成人の儀で神剣を振るって見せた。今のアカネイアの王子はクロスただ一人だけだが、他に継承者がいないからと言つてファルシオンを振るえない王を出してしまつては現王朝の正当性をめぐつて争いの火種となるだろう。マルスのアカネイア王即位まもなく起きた前王朝復権派による反乱の時のように。

クロスはボコボコにのされようやく本日の訓練終了を言い渡された。湯浴みにでも行こうと城中に戻る途中で大量の本を拾っている男を見つけ手伝つた。

「ありがとうございマス。おや、あなたはユリナ様と一緒にイタ？」

「クロスです。グランベルからの使節団の方ですか？」

なまりがあるが流暢なアカネイア語を話す黒髪の男は目につなぎあわせたような両目用のモノクルをかけている。

「ええ、学者として同行を許されマシタ。アルバと申しマス」

クロスにとつて学者とはクロスに国の歴史を教えている家庭教師の類だ。若干苦手だと思いつつ使節団に対してユリナにだけいい顔をするわけにもいかない。

「何を調べていらっしやるんですか？ やはりこの国や大陸の生産物でしょうか」

「ええ、それも調べている最中ですが。クロス王子は竜を知っていますか？」

クロスは打って変わって目を輝かせ、

「もちろんです！ このアカネイア大陸では千年前に暗黒竜は封印され、他の竜も人と友好を持つようになった。その偉業を成し遂げたのが我が王家の始祖マルスだと聞いています」

自分の一族が王でいられるのもマルスの伝説によるもの。その祖先に恥じぬように王にふさわしい跡継ぎになりこの大陸を発展させていかねば。それがクロスが剣術に励み、進んだ技術を持つ異国人と接触しようとする理由だった。

「それはすごい！ 先祖様をお持ちデスネ。ユグドラルではほとんどの国の王は神の血を与えられた戦士の末裔だと言われているのデス。最近の歴史研究では戦士に血を与え

た神の正体がアカネイアから来た竜ではないかと言われているのです」

「そうでしたか。アカネイアの神話にも守護神ナーガという神様が出てくるのですが、その神は千年前までは巨人の神だと言われていました。ですが竜と交流を持ったマルスによって神竜という一番強い竜の王様だということがわかりました」

「なんと、偶然とは思えませんね。グランベルの始祖ヘイムに血を与えた神もナーガとこののだそうデス。ますます先ほどの説に信憑性が増してきましたネ。私はその竜に興味があつて使節団が派遣される前にアカネイアに渡つてこの大陸の風土・伝説を調べていマシタ。言葉はまだまだ勉強中ですケド」

苦笑するアルバに合わせてクロスも笑みを返し、

「グランベルとアカネイアの交流がうまくいくことを心から願っています。我が家と竜は浅からぬ縁。何か聞きたいことがあればぜひ訪ねに来てください」

「ええ、その時はぜひご協力をお願いします。王子にとつても両国が親しくなればユリナ様とも仲良くなれるでしょうシ」

アルバにからかわれ、クロスが赤面している間にアルバは拾い終わった本を抱えて庭を出て行つた。

ユリナとの謁見が終わった日の翌日、グスタフ王は重臣を集めて会議を行っていた。

「ユグドラルとやらから来たかの者たちと国交を結ぶべきか、諸君らの意見を聞きたい」

グスタフの問いに重臣はそろって反対の意を表明した。

「どこぞの賊がさらってきた娘にでたらめを言わせているに決まっています」

「いえ、本当だった方が恐ろしい。我が国より進んだ技術を持つ異国がこの大陸を侵略しようとしているかもしれないと考えると」

「遠い海を渡って侵略する益があるのか？ 現に我々も東の方に大陸があるなど知らなかったのだぞ。あつたとしてもかなり遠く、行き来に危険が伴う。……いや……あのような者たちと親しくなるべきとは言いませんが」

重臣の意見にグスタフはやはりという気持ちで息を吐く。

ユリナたちの持ってきた品に使われている技術に驚かされたグスタフとしては異大陸の存在を信じてはいないがユリナたちを適当にもてなしたうえで彼女らの出身地を聞き出し、利益になりそうなら交流を持とうと考えていたのだ。だがそれもあきらめざるを得ないようだ。その時

「父上、皆様、私からよろしいでしょうか？」

クロスが声をあげた。

クロスの側で控えていたジェイクスが止めようとするがグスタフから許しが得た。

「クロス王子、うむ、申してみよ」

「ユリナ殿たちの持つている技術は優れたものです。彼女たちから納められた品を私も拝見しましたが物を見る目をまだ備えていない私にも優れたものだともわかります。特に眼鏡などは皆様の中にも愛用され始めている方がいると耳にしたのですが」

眼鏡、アルバの掛けていた両眼用のモノクルだった。

諸侯の何人かは目をそらしたり、咳ばらいを始める。老年に差し掛かりものを見るのがつらくなった彼らにとって眼鏡は思いがけない拾いものだった。

クロスは続けて

「彼女たちから受け取ってばかりで帰ってくれというのは大陸を治めているアカネイアとしてはあさましいと思います」

クロスの言葉に重臣の一人がいきり立つ。

「王子お言葉が過ぎますぞ！」

「申し訳ありません。感情的になって言いすぎてしまいました」

重臣の叱責にクロスは失言に気付き素直に頭を下げる。重臣は謝意を受け取りながらも続けて言った。

「彼らには十分な返礼を与える。ですが彼らは王子のおっしゃるようによい優れた技術を持つている。それが我が国や大陸に害を与えるために使われない保証がありますか？」

「先ほどアンセム侯爵がおつしやられていたように彼女たちにはアカネイア大陸を侵略し、統治していくには長い航海を繰り返す必要がある。ユグドラルの航海技術でも安全な船旅を確立できる水準に達していません。戦争を起こさず、交易で利益を蓄えていく。そのための監督として我が国に留まりたい。ユリナ殿の言い分は納得できる部分があります。我が国にとつても他国の技術を盗む機会です。どうかユグドラルとの交流の件、よい検討をしていただけるようにお願いします」

クロスは父と重臣たちに先ほどより深く頭を下げた。

ワーレン某所

密会に使われる店で顔を隠したヨーゼフ伯爵とアルバが会っていた。

「この大陸への駐留、うまく事が運びそうだ。公女様とあの色ボケ王子には感謝せんとな」

「それはよかった。あの青年とおしやべりしただけで帰国ではわびしすぎますからね」

ヨーゼフはアルバに杯を傾けながら問う。

「それでどうだ。竜の居所の見当はついているのか？」

「ドルーアかマケドニアという国に隠れ里があるようですね。王家ともめていた一派も竜を根絶やしにせんと探し回って見つけ出せなかつたくらいですから簡単にはいかないでしょう。クロス王子の信用を得るためにも数年は時間をいただきたいですね」

「遠大な割にのんきな返事を返すアルバにヨーゼフは苛立ち、

「このために宰相殿と私がどれだけ根回しをしたと思っている。3年だ。3年以内に結果を出せなければ貴様の首を切り落とし、我々は貴様に騙されたということにさせてもらおう」

「怖い怖い。では公女様とも仲良くさせていただきますよ。それなら王子にも近づきやすい」

「好きにしろ。お前がどんな性癖を持っていようと結果を出してくれればいい。公女がどんな醜聞にまみれようと知ったことか」

互いに杯が空になったのを見計らいヨーゼフが命じる。

「宰相閣下の命令だ。ユグドラルを混乱に陥れた偽神たる竜を見つけ出せ」  
偽神の抹殺。それこそがユリナの知らないグランベルの本当の目的だった。

ヨーゼフ クラス：バロン

グランベルの伯爵。ユリナのお目付け役で使節団の実権を握っている。宰相からの密命を受けて竜を探し出すために使節団に潜り込む。あわよくば竜の血を飲みゲツシユの一部解除で弱体化した王家に成り代わる野望を持っている。



アルバ クラス：マージファイター

グランベルの学者。普段は経済・文化の学者として貴族や市井と交流しているが本来は生物学に傾倒しており、ユグドラルで神と呼ばれていた竜に興味を持ちアカネイア大陸を探っていた。

## 第3話 地震そして聖痕

「ユリナ、パレスへ行こう」

「申し訳ありません。公務がありますので」

ユリナから初めて出会った時のような笑顔でデートを断られるクロス。

「そんなに忙しそうに見えるけど、国交を結べなかったのをまだ怒ってるのかい？」

クロスの返しにユリナは頬を引きつらせながら

「クロス様のせいではありません。わたくし達の誠意が足りなかったのです」

「だったら遊びに行くぐらいいいじゃないか」

「クロス様、今期も神剣を振れなかったそうですね。ナンパの真似をしていないで特訓

なさったらどうです？ 遊びに誘う元気もなくなるぐらいに」

「う……」

ユリナからの反撃にクロスはたじろぐ。

アカネイアの王位継承者は成人の儀までに半年ごとに王の御前でファルシオンを振れるかの試験を行う。クロスはユリナと会ってから2回ほどこの試験の機会があったがいずれも失敗に終わり成人の儀まであと4年に迫っていた。現在のアカネイアでは

20歳を迎えて成人となる。

「訓練はしているよ。朝早くジエイクスに頼んで相手をしてもらっていたんだ」

実際クロスの今日の訓練は終わりを告げられていた。手のママがその証拠なのだがユリナにボロボロになった手をあまり見せたくなくて口だけになり、言い訳じみて聞こえてしまう。

「僕はやることを済ませた。ユリナは？ 本当に公務があるなら手伝うよ。これでも王子だ。書類仕事だってできる」

「……。まあ、私も実は終わらせていたり」

これは嘘だ。実務は副官のヨーゼフ伯爵が取り仕切っており、ユリナにはたまに王宮から訪れる客人の接遇くらいの役目しか与えられず、読書か魔法の練習しかすることがなかった。パレスの大きな書店はかなりの蔵書があり、1年前の貢ぎ物の返礼としてパレス高官に頼めば王宮の書庫の本の閲覧や借りることも可能だったので退屈はしなかったが。ただし王宮では監視が付き、借りる際には機密に触れる本が入ってないか点検が行われるのもつばら市内の書店で済ませるのがほとんどだ。

ユリナが率いるグランベル使節団がアカネイア大陸に来て1年。

クロスの擁護は実らず。ユリナらは信用できないとして国交は結ばなかった。だが恩恵を受けて追いつ返すのは道理に反するというグスタフ王の意向によって貢ぎ物の返礼の一部としてノルダの郊外にある空き屋敷を譲り受け増設の手配までしてくれた。強引に追いつ返して復讐されに來られても困るといふ判断もある。

ユリナは何度も交渉を申し入れようとしたがヨーゼフの「今は滞在が認められただけでも十分かと。何度も食いつくと逆に不信心を持たれます。今はアカネイアの方々とうちとけ信用される時を待つのがよろしいでしょう」といふ言葉に従わざるを得なかった。

使節団の団長はユリナになっているが実権はヨーゼフが握っており、ユリナが使節団を動かしたり活動の方針を決める際はヨーゼフの許可が必要で、逆にヨーゼフはユリナが持つ権限を代行に行使することができた。

唯一グスタフが直接統治していないグルニアは王への謁見の許可も下りず、元々西方にあるグルニアはカダイン共々ヴァルム大陸との交易が盛んで国交を結べても交易による利益の見込みはあまりなかった。

「なら問題ない。美味しい店でもきれいな装飾品の店でも案内するよ」

「わかりました。訓練疲れで倒れても置いて行つて構わないのでしたら」

ユリナも実はまんざらでもない。せっかくの外交生活、屋敷にこもるよりパレスを見て回る方が有意義に違いない。それにクロスはユリナの好みの方だ。ユリナの好きな伝記の主人公によく似ている。祖母からよく聞かされたあの――

「聖王セリスか」

パレスに来て買うものを選び、注文したものを後日ノルダ屋敷に運ぶように各店主に頼み喫茶店で紅茶を飲んでいる最中にユリナからユグドラルの英雄の話聞かされたクロスはその名をつぶやいた。

「ええ、我が家では代々子供にセリスの話聞かせて育てるそうです。セリスがいなければユグドラルは帝国の圧政に苦しみ続け、後に反乱が起こって帝国を牛耳っていた暗黒教団や魔皇子を倒せたとしても遅すぎて疲弊しきって大昔に滅んでいたでしょうね」

祖母に聞かせられた時と同じように自らも熱くセリスの話をクロスに聞かせるユリナ。クロスとしてはセリスに妬みを感じているが、距離が近づいてうれいような複雑な心境である。

二千年前のユグドラル大陸の聖戦の後、ユリアは民の憎しみを一身に集める存在だった。民が苦しんでいる中、ユリアも他の皇族同様父が搾取した富で贅沢して暮らしていたに違いないと思われるのである。実際にはユリアの兄ユリウスが母ディアドラを殺害、ユリアを追放した後父アルヴィスを軽視しているグランベルの重臣を取り込んで宮廷に根を張り圧政を進めており、ユリアも逃亡中満腹を感じたことすらない生活を送っていたのだが民はそんなことを知る由もなくユリアを憎み、セリスを救世主としてもてはやしセリスが一騎打ちでユリウスを討つたとする詩まであった。そのためアカネイアとは違い王朝交代は順当に進みユリアは夫を迎え公爵夫人となった。

バーハラ家では夫がともに聖戦を戦った関係であることもあり良き妻、良き母のユリアを冷遇することは無かったがやはりセリスの英雄譚が好まれた。ユリアが子らにセリスの話を経験的に話していたのもある。

「そういえばユリナもアカネイア語がうまくなったね。アカネイアで生まれ育つたと言つても違和感がないよ」

セリスへの賛美にさすがに辟易としていたクロスは話題を変える。ユリナはむつと

しながらもさすがに熱が入り過ぎたと反省し新しい話題に応じる。

「家庭教師が優秀ですから。時々アルバ先生が何の学者なのかわからなくなるぐらい色々なことに博識です」

アルバはアカネイアの文化・歴史の研究をしながらユリナにアカネイア語を教えていた。屋敷の関係者の中では数少ないクロスとユリナの仲を応援している人物なのでクロスもすっかり仲良くなりよく暗黒・英雄戦争の話話を話していた。マルスが妹のようにかわいがっていた神竜族の王女のこと、それでも飽き足らずアルバは王宮の書庫に入り浸り、監視の目も気にせず歴史本を読み漁った。今アルバはマケドニアへ調査に赴いている。

夕暮れになり喫茶店を出たクロスとユリナはふと足を抱えている男を見つけた。

「ううっ……」

「大丈夫ですか?」

ユリナは思わず男に駆け寄る。

「ああ、足を打つてな。く…、しばらく動けなさそうだ。下手すれば今夜は野宿かな」

「見たところ傷はなさそうだが、ユリナ杖は持つてる?」

クロスは履物をめくりあげ足の様子を見ながらユリナに尋ねるが

「ごめんなさい、こんなことが起こると思わなくて」

クロスはユリナにいいと言いながら男の腕に手を添え

「歩けますか。パレスも外れになると夜は危ない。僕たちが付き添いますよ」

「すまないな。せつかくのデートの邪魔をして」

「デ、デートじゃありません。それにそんなところに置いていたら心配で眠れなくなつてしまいます」

ユリナはデートという言葉に慌てて否定しながらクロスが持っているのは反対側の肩を支える。

二人は男を支えながら男が示す通りの方向に歩きいつしか日は落ち、路地裏に入ってしまった。そこで待ち受けていたのは、

「よお、いい服着てるな。俺たちみたいな貧民に恵んでくれよ」

数人の男だった。今の時代盗賊は森や山でなく街中で生活を送りながらひっそりと略奪を行うのである。クロスとユリナはお忍びの旅装を着ていたが彼らにとつては縫った跡がないだけで極上の品だった。

「男の方は下着は勘弁してやるからさ」

「おいおい、女は全部脱げってか？ いや女は俺たちと酒場で一晚遊ぶだけで許してや



ろうぜ」

「よし、話は決まった。男は持ち物と下着以外の服を脱いで渡せ。女は俺たちと一緒に来い」

話も何もごろつきたちが勝手に言ってるだけでクロスたちは口を出していない。クロスは男をユリナに任せてごろつきの前に出て拳を振りかぶる。

「どけ、女」

「きやつ！」

「うぐ……」

クロスは背後からの攻撃にうめく。

クロスとユリナに介助されていたはずの男がユリナを突き飛ばし、クロスを殴りつけたのだ。

「わりいな、おめえら坊ちゃんお嬢ちゃんは恩が仇で返されるもんだって知らないんだろうな」

「貴様！」

クロスは男をにらみようとするが。

「やっちまえ」

「おおっ！」

ごろつきたちが襲い掛かりクロスに殴りかかろうとするのでかなわなかった。  
その時

『ほとばしれ！雷光のごとく！ ライトニング』

ごろつきの2人が光に吹き飛ばされる。

ユリナが魔道書を手に詠唱を唱えていたのだ。

クロスはごろつきたちがひるんだすきを逃さず一番近くの男の急所を殴りつけ昏倒させ、クロスの気迫にすぎんだ男を殴る。

「なめんな」

ごろつきのリーダーがクロスを斧を取り出し、クロスへ振りかぶるもクロスはそれをよけリーダーのみぞを殴りつけるが斧を取り落とすも一発ではのびず、クロスを殴打し、怒声をあげる。

「おめえら出てこい。男は殺せ、女はこの場で犯す」

クロスたちが逃げた時のために周りを囲んでいたごろつきの応援が姿を現す。

「へへっ、そう言うのを待ってたぜ。酒場へ連れて行って怯える女と飲むのいいもんだがな」

舌なめずりをしながら迫る男たちを前にクロスとユリナはなんとか逃げ道を探っていると。

「お前たちそこでなにをしている！」

ごろつきたちの背後から別の声が出てきた。

それと同時に屈強な男たちが彼らを包囲した。いや、女も一人混ざっている。

「自警団？ くそ、いいところぞ」

ごろつきたちはせめてもの抵抗を試み、自警団に襲い掛かる。しかし相手にならず次々と取り押さえられていく。

「く、邪魔だ」

ドカッ

「う……」

「ユリナ！」

クロスたちをだましていた男はユリナを殴りつけ、クロスが駆け寄っている隙に逃げようとした。しかし、

グラグラ……

あたりの地が揺れ、男は転び続く地震で身動きが取れない隙に自警団に捕縛された。

「ユリナ、大丈夫か！ それは!？」

ユリナの様子にクロスが戸惑っていると横から声をかけられる。

「大丈夫か？」

自警団の団長らしき男だった。

「はい、ただ彼女が」

団長はユリナに駆け寄る。

「君、怪我をしたのか」

ユリナは額を抑え首を振るばかりだった。

「ハロルド、どきな」

女団員が団長を押しつけユリナの体を調べ怪我がないことを確認するが顔は覆って見せてくれない。

「顔にけがはあるかい。葉草を置いておくから傷があるなら連れの男に塗ってもらうんだ」

そう言い葉草袋を置いて女はユリナから離れ団長とともにクロスと対面する。

「ありがとうございます。あなたが噂のアカネイア自警団」

クロスは団長と女に礼を言い自警団か尋ねる。

「おお、俺は団長のハロルドだ」

「副団長のエルフィだ。災難だったね…と言いたいがデートは時間と場所を考えてするもんだ」

「面目ないです」

謝るクロスにエルフィは肩をバンバンたたき、

「でもアンタ数人相手に筋がいい方だ。どうだい？ 彼女を守る力をつけるためにも自警団に入って町の安全を守るってのは」

そんなことを言うエルフィにハロルドは彼女の手をクロスから離し、

「やめとけやめとけ」

そうエルフィに言った後クロスに向かつて

「あんた、アカネイアの王子だろ。王様から勲章をもらったときあんたの顔を見たことがある」

「はい。僕はクロス。この国の王子です。アカネイア自警団の活躍は子供のころからあこがれていましたから」

アカネイア自警団。兵士とは別にアカネイア王国の治安を守る組織である。設立は千年前にさかのぼり最初はアカネイア自由騎士団という名前だったが、一代後には騎士でない構成員がほとんどを占めアカネイア自警団に改称した。

クロスが王子だと聞くとエルフィは肩をすくめ、

「なんだ。王子様を自警団に入れるわけにはいかないね」

「では彼女は王子に任せて我々は市内を回ろう。さっきの地震の被害はかなり大きそうだ。王子、あんたもデートはいい加減切り上げてさっさと帰るんだ。また地震が来るか

もしれない」

クロスに別れを告げハロルドたちは自警団を引き連れて去っていく。

クロスはユリナに告げる。

「もう誰もいないよ。大丈夫だ。顔をあげて」

ユリナは恐る恐る額からは手を離さず顔を見せる。

「クロス様……見ましたか？」

クロスはこくりとうなずく。自警団の活躍のことではない。

殴られた拍子でサークレットが割れ露わになったユリナの額からは文様が浮かんでいた。

「ナーガの血を濃く受け継ぐものの証、「聖痕」というものです。この聖痕からもたらされる力により私たちの一族は光魔法の力を強く行使できる。二千年前と比べたら弱体化したそうですが」

二千年前のユグドラル大陸、聖戦の後もかの地ではヴェルダン平定、アグストリア統一戦争などの争いが続いていた。そんな中後者のアグストリアの戦争のさなか、突如その現象は起きた。聖戦士の血を引き継ぐものうち神から授かった血の因子が少ない者からはその力が失われ、聖痕を持つ者もかつての因子が少ない者並みにその力が弱くなった。神器も同様である。この現象を人々は自分たちが与えた血の力で争いを続け

る戦士たちへの「神の怒り」と呼んで恐れおののいた。

これはナーガの思念体の認可により起こった「ゲツシユ」の一部解除で竜の血を争いに用いることへの戒めであり、このとき竜の血の因子の多くを洗い流すことで当時聖痕を持つ者が存在しないロプトの血も完全に消し去る目論見もありそれは成功した。

「この聖痕のことは誰にも言わないでください。ユグドラル人なら知っていますことです。私が聖痕を他人に直接見せてはならないという家訓がありますので。私の一族もアカネイアの王子であるあなたの口を封じることができないでしょうがもうこうして会うことはできなくなります」

ユリナは強くクロスに忠告する。

「わかった誰にも言わない。送っていいこう。さ、手を取って」

「ええ、でも屋敷が見えたら別れましょう。一人で散策している間にサークレットを落としたと言いますから」

クロスとユリナは途中馬車を拾いノルダへ戻っていく。

城ではジェイクスがクロスを待つており早速今日のお咎めを受けた。

「ご無事ですかクロス様？ パレスも夜は安全とは言えません。せめて日が昇ってから

一刻半には帰り支度を始めていただけませんか」

「ごめんなさい」

クロスは素直に謝る。

「それで、またユリナ殿とデートですか。クロス様には婚約者もいるのですよ。ただの平民や位の低い貴族なら愛妾にすることもできますがユリナ殿は危険すぎます」

「ジェイクスまでユリナを疑っているのか。詐欺師や賊があんなに上品な振る舞いができるものか。それに彼女らが持ち僕らに与えたものはアカネイアにもヴァルムにもないものだ」

「賊ではないでしょうな。1年彼らの様子を見れば誰でもわかります。ですが本当ならなおさらです。相手は他国の人間で公爵令嬢です。愛妾など向こうの家が許さないでしょう。それにクロス様の婚約者グルニア王女ユミス様はどうされるのです？ グルニアもアカネイア連合ではごく小さいので反抗はしてこないでしょうが、グルニアを軽視しているとアカネイアが弱体化したときに厄介な火種になる」

ジェイクスの説得にクロスはたじろかず、

「その時はグルニアに僕から謝罪する。土下座だつてして見せるさ。そうすればグルニア王も自分たちが軽視されてるなんて思わないだろう。むしろユグドラルの貴族と縁を結び彼らの力を借りることができるようになればアカネイアは弱体化どころか発展



だつてできる。眼鏡をかけるようになった重臣たちを見たかい？ 彼らは以前よりはるかに効率よく書類を片付けてくれるようになった」

「そう簡単な話ではないのですが、まあおいおい話し合ひしましょう……その代わり数日間を外へ出ないでください。訓練も中止、素振りをするにしても木刀です」

出入りだけでなく訓練まで中止となるとデートのお咎めの罰ではなさそうだ。

「地震のことか？」

「ええ、いつ再発するかわからない。せめて原因がわかるまでは。ユリナ殿にも同じ注意がされているでしょう。デート中に大怪我をするユリナ殿を見たくなければ絶対に守ってください」

クロスは大きくうなづく。

一月後、地震の原因がフレイムバレルの噴火によるものと判明し地震はあれから起きることは無かったが、何千年噴火しなかった火山の噴火はすさまじく火山灰が大陸中に降り注いだ。特にカダイン・オレルアンの被害は深刻で住民は食糧危機に見舞われた。

国王グスタフはすぐに救援を送つたが、アカネイア本国も食料が充足しているとはいえず困り果てていた。そんな時調査を求めたユリナは視察団が蓄えている物資の供出とユグドラル大陸からの救援要請を申し出た。

グスタフは藁にすぎる思いで協力を求め、数月後ヴァルムと交易している西側はともかく東側は食糧が付きかけ、グルニアが援助と引き換えに自国に有利な条件を出し始めていた時だった。

ユリナとの約束通り、ユグドラルは援助物資をもって来たのである。これによって大陸は困窮を免れユグドラルも自大陸の存在を証明した。

このときからアカネイアとグランベル王国は国交を結び交易を開始した。

ハロルド クラス：勇者

アカネイア自警団の団長。エルフィとは友達以上恋人未満。

エルフィ クラス：剣士

アカネイア自警団の副団長。ハロルドとは以下略。

## 第4話 蛮族の襲撃

アカネイア大陸北部、そこはいまだ未開の地が広がっており野生化した多数の竜と竜の使役の方法を会得した蛮族が巢食っていた。

しかし飛竜以外の竜の扱いは非常に難しく、無数の戦士が食われてしまった。それにこの千年の間に竜は数を減らし、蛮族たちは竜を見限り距離を置くことにした。

蛮族にはマーモトード砂漠に巢食う砂の部族と氷竜神殿に広がる氷の部族そしてフレイムバレルの火の部族がいた。だがフレイムバレルの噴火で火の部族がほとんどが溶岩にのまれ壊滅し、残ったのは砂と氷の部族である。

その砂の部族では王の代替わりが起きていた。

「おらあつー！」

「げふっ」

若き戦士が王の頭に斧を突き立てる。

「今日から俺が砂の王だ。文句あるやつは出てこい。受けてやる」

部族の誰もが黙り、武器を取る様子も見せない。

彼らにとつて次の王とは王の子供ではなく一番強い者。もしくは王を倒した者だ。  
うおおおお！

歓声をあげ新たな王を称える。外の世界とは違ってひざまずくのではなくこうすること  
ことで忠誠を示すのだ。

「よおし、じゃあメシの調達に行くぜ。俺たちの縄張りのメシは灰にまみれちまった。  
南の町で狩りをしよう」

蛮族たちの狙いが灰の影響が少しでも少ない南の町、カダインに向けられる。

アカネイアとグランベルの交易開始から2年。

アカネイア大陸各国の市場にはユグドラル大陸の名産品が並ぶようになった。使節  
団が滞在しているノルダ屋敷もグランベル大使館として認められ、さらなる職員を確保  
するため増築されていった。

パレス王宮、王族専用の訓練場。

「本日の訓練終了」

例によってジェイクスがクロスの訓練終了を告げる。

「僕はまだやれる。ジェイクス、お願いします」

未だ神剣を振れずすがに焦ってきたクロスはジェイクスに訓練の続きを頼む。

「これ以上は無理です。臆を切って剣が触れなくなつたのでは元も子もありませんから。それにクロス様の剣技はもう十分ではないかと王は考えられています。ひよつとすればマルスのように何らかの試練を乗り越えれば振れるようになるかもしれないね。」

「試練、それは2年以内に来るものなのか？」

クロスの疑問にジェイクスは肩をすくめる。

「そればかりは何とも、では私も午後は自由時間になっておりますのでどうかお暇を」

「僕の時はあれこれ言っておいて自分に彼女ができた途端これだ」

ジェイクスは咳ばらいをし、

「そ、それは関係ありません。それにクロス様の（愛妾としての）相手が町娘や子爵以下の令嬢で相手も合意の上でなら何も申しません。グランベルと国交を結んだとはいえグルニアを軽視するわけにはいきません。ましてかの国は火山灰の時にアカネイアとの関係を覆すような条件を出してきて二心を持っていることがわかったのです。グルニアとの関係を強化し無理な野心を自制してもらわねば」

「それはグランベルも同じだよ。関係を強化して、アカネイアを見限らないようにしな

いと」

ジェイクスはおもむろに懐にしまっていた時計を取り出して腕にはめ、——腕時計、これもグランベルからの輸入品だ——

「正午ですな。では約束がありますので、失礼」

ジェイクスは去り、クロスが残される。

「逃げた」

独り身だった時とはえらい変わりようだ。

(僕もユリナと会った後はこんな感じに見えたんだろうか)

訓練が終わり、事務の仕事もない。以前ならユリナを誘いに行くところだが、成人の儀まであと2年、それまでにファルシオンを振れなければ王位継承は不透明になる。もし傍系の親類の中からファルシオンを振るう王が出てくればクロスは平民に落とされることは無いだろうが、新王からは冷遇されるだろう。とてもユリナに釣り合うとは思えない。そのユリナも国交実現以来大使として本当に忙しそうだ。

ジェイクスは心配していたが本当に無理があるなら腕に激痛が走るだろう。

「よし」

クロスは夕方まで素振りを続けその日は本当に腕に痛みが走り、食事まで侍女の手を借りる始末となった。

(ユリナが訪ねたりしていなかったらうな)

侍女に助けてもらう度クロスはそんな心配をしていた。

数日後、王宮にカダインから使者が訪れた。

「お、お助け下さい陛下。町が、町が」

「落ち着くがよい。陛下、謁見のさなかですが、水を飲ませます。しばしお待ちを」

取り乱す使者を叱りつけ宰相は衛兵に水を運ばせ、使者に飲ませる。水を飲みほした使者はこう言った。

「北の蛮族が我が町を襲い大勢が殺されました。見目のいい女は犯され奴隷扱いです。どうか町を救ってください」

王宮中が騒然となる。グスタフは即座に軍の派兵を決め、その指揮官を募った。その中には。

「父上、私に行かせてください」

王子クロスが名乗りを上げた。

「クロス、現れるかもわからん海賊への警戒とはわけが違うのだぞ」

今度ばかりはグスタフも渋い顔をする。

「ここで引いては民は私をお飾りとしか見てくれなくなりませす。それに父上はこぼして  
いたそうですね。技量が十分な私が神剣ファルシオンを振れないのはまだ試練が訪れ  
ていないからだ」と

グスタフがジェイクスをにらみつける。ジェイクスは顔の青くして伏せた。

「相手はマルス以前の英雄アンリが踏み越えた試練の道に住んでいる蛮族。身体的な強  
さは大陸で随一でしょう。これ以上の試練はありません。これを逃せば私はファルシ  
オンを振るえないまま、どうか出陣の命令を」

クロスがグスタフの前に出、ひざまずく。

「指揮を執るからには敵を見た途端逃げ出すなど許さんぞ。蛮族を倒すまで王宮に戻れ  
んと思うがいい」

グスタフは折れ、クロスを指揮官に任命する。

「はっ、謹んで拜命します」

「もし私が戻れなければこちらの手紙を父上に、こっちは大使館のユリナ公女に」

出兵前、兵士たちは家族・友人・恋人に戦死したときに届けてもらう手紙を役人に預  
けていた。クロスも例外ではない。そして、



「私が戦死したときはペラティ外れの村に住むリンネという少女に渡してほしい。それとこの袋も」

手続きをしているジェイクスを見つけてクロスは彼に声をかける。

「例の恋人への手紙か？」

「これはクロス様。あなたもユリナ様に託されるつもりでしょう。今回ばかりは何も言いませんが」

言ってるんじゃないかと声に出さず思ったままクロスは彼女について聞く。

「ペラティ外れ……最近任務に立ち寄って知り合ったのか。通りで今頃になって付き合うわけだ」

「この戦が終わったらパレスに上京させてやるつもりです。折を見て婚礼を」

「では共に生きて戻らなくてはな。お互い無駄な手紙を書いてくたびれもうけをしたと笑いあうために」

クロスとジェイクスはどちらからともなく固い握手を交わした。

カダイン

元は魔道士の修行場として寺院による自治が敷かれていたが、アカネイア連合王国の

設立により正式にアカネイアの版図となり、市民に自治権が移譲され、市長をはじめとする議会が運営されている。

2年前はフレイムバレル噴火の火山灰の被害が最も大きい町だったが、ヴァルム大陸からの輸入により、災害を乗り切った。その町へ北のマーモトードの蛮族が侵入、魔道軍の抵抗をなくし町は徹底的な略奪をうけた。

「うぐ、うぐ、かぁー、やはり酒はいい」

蛮族の長ポールは市長邸を乗っ取り、親友のジャスミンとともに酒をあおっていた。

市長夫妻は惨殺され、市長の娘と女の使用人は下着姿でこき使われ、時に凌辱され、今は酌をさせられていた。

「あらかた奪いつくしたし、そろそろ撤収を考えた方がいいんじゃないか」

ジャスミンはポールに対し王となった後も態度を変えることなく忠告する。

「またあの砂漠に戻れっか？ この町の上役の王様の住んでる都は遠い。もつとオアシスに居住させろ」

ポールの返事は撤収という言葉に期待を寄せ一時目に生氣を取り戻した娘たちを絶望に陥れるもので彼女たちはまた虚ろな目で酒を注ぎ自らもおおっていた。

そこへ戦士が入り込み、

「王、軍隊だ、軍隊がこの町の近くに来た」

ポールとジャスマンは共に立ち上がり、

「撤収時期が来たようだな。俺が奴らを足止めする。ポールは物品を抱えて撤収の準備を始めろ」

「ジャスマン、ですますをつけるとは言わねえが俺に命令するな。今の砂の王は俺だ。ブツは手下に集めさせる。これだけ集めたんだ。多少の横領は許すさ。俺も軍隊の相手をする。箔をつければ「氷」の奴らも俺に従うだろう」

ポールとジャスマンは邸宅から出ていくが、娘たちは最早無駄な希望にすぎるのをやめ、彼らが飲み残した酒にむらがり飲み干していった。最早市長の娘と使用人に立場の差も矜持の有無もなかった。

カダインへ接近したアカネイア軍は町の惨状に目を覆った。竜に見切りをつけたたびカダインやオレルアンに侵入しようとする蛮族には百年以上悩まされてきたが、ここまでの蛮行を許したのは今が初めてだ。欲を出してグルニアが自らの立場を悪くしなければアカネイアに借りを作るべく彼らが征伐しただろう。

クロスは守護神ナーガに祈りをささげ兵に号令を出す。

「蛮族たちを打ち払え、逃げ遅れた住民がいたらすぐに保護しろ。かかれえ！」

数の上ではアカネイア軍が圧倒的だったが、「アンリの道」の一門マーモトード砂漠に住まう蛮族は精強で一人討つのに2・3人の兵が犠牲になるのもままあった。そこでクロスは蛮族一人に対し複数の兵士が一斉に攻撃する方法をとり、建物を奪還したらその2・3階から兵に弓矢や魔法を射かけさせた。

次第に数を減らす手下に業を煮やしたポールは敵の指揮官を殺し、士気の低下を試みた。

「さつきから命令してる奴は…小僧だがあいつが指揮官に違いない。おいジャスミン！」

クロスの横を突如大男が突進してきた。あまりの出来事に受け身をとれず、クロスは転倒する。

「死ねええ！」

大男ジャスミンは斧をクロスの頭めがけて振り下ろそうとする。クロスは死を覚悟

し目をつむった。

「クロス！」

だが斧はクロスに届かなかった。クロスをかばったジェイクスのどて腹に刺さったのである。

「ぐっ……はあ！」

ジェイクスは最後の力を振り絞り剣をジャスミンに振るう。

ジャスミンの首は胴から落ちた。

「ジェイクス！ 大丈夫か」

あおむけに倒れたジェイクスにクロスは駆け寄る。

「先ほどの呼び捨て、ご無礼いたしました。」

「そんなことはいい。待ってる今司祭を。誰か杖を使えるものをここへ」

必死に怒鳴るクロスにジェイクスは力なく

「今は戦の最中です。私などにかまけている場合は」

ジェイクスはそこで思い出したように

「ああ、これだけは。今のアカネイアならユリナ様とのこともどうにかなるでしょう。

グルニアはまあ適当に持ち上げておけば」

「そんなこと、お前らしくないぞ。恋人は？ リンネさんが待っているんだろう？」

「彼女なら大丈夫。強い娘だ。私がいなくともパレスで立派に、うっ……」  
「ジェイクス。ジェイクスウー！」

クロスの絶叫が響き渡る中、ジャスミンを失ったポールも呆けていた。

「ジャスミン。こんなはずじゃあ。」

力がすべてを支配する部族だった。父の顔は知らず、母もポールの父親が誰なのか知らないようだった。おそらく複数の男に回されて子を産まされたのだろう。ポールが力をつけた時は母を暴力で支配し、自らも部族の女や襲った村の女を犯して回った。いつも奪う側だった。だが今初めて奪われた。王になっても変わらず接してくれた親友を。

「野郎！」

激昂のあまり死にかけてる騎士と指揮官に襲い掛かろうとする。

だが、複数の兵が指揮官に駆け寄って断念せざるを得なくなる。

ポールは手下に宝を集めさせていることも忘れ、北の砂漠へ逃げて行った。

パレスに帰還したクロスは父王に蛮族の敗走を報告し、ジェイクスの家族に彼の戦士を告げた。ジェイクスの両親に罵倒されてもクロスは不敬罪に問うつもりはなかったが、老いた両親はただ泣き伏せるばかりだった。

ペラティの村のリンネにはジェイクスの手紙と上京資金の入った袋が届けられたが彼女はパレスに行かず後年村の男と結婚したと言う。

その一月後、新たに試験の機会を得たクロスは父の前でファルシオンを振るうことに成功したが、その顔は晴れぬもので自分を責めているのは明白だった。

ワーレン某所

再び例の店でヨーゼフとアルバが落ち合っていた。

「いいニュースと悪いニュース、どちらから聞きたいです」

そういう言い方をするには悪いニュースとして竜の隠れ里が見つげ出せず命乞い  
いいニュースとして適当な財貨の場所でもいうつもりじゃないだろうな。そう思いな  
がらヨーゼフは

「いいニュースから頼む」

いいニュースとやらから聞くことにした。

「竜の隠れ里が見つかりました」

想像とは裏腹の報告にヨーゼフは驚嘆した。

「では悪いニュースは？」

アルバは意地悪く笑いながら、

「これ以上アカネイアを探し回る口実がないことです。隠れ里以外にも竜の遺跡が見つかることを期待していたのですが」

アルバの返答にヨーゼフはせせら笑い、

「隠れ里まで案内した後は好きにだけ探している。アカネイアとは同盟国なんだからな」

「そうなんです、竜の血を飲んだ人間がどんな力を得るのかの方が興味ありますね。閣下が竜の血を飲むところをぜひ見てみたいんですよ」

「いいともいいとも。あの王子から聞いた竜の王女。あの娘の血を飲めばかつてのヘイムと同等の力がわしの手に」

50代初老を迎えた伯爵がついにその野心を口にする。

その伯爵を横目にアルバはこうも考えていた。

(ユリナ様かクロス殿に飲ませてみるのも面白いかもしれない)



ポール クラス：蛮族

砂の部族の王 部族で一番強く好き放題していた中、ジャスマンと喧嘩になつて引き分けて以来、なぜかジャスマンを気に入り、王になつた後も対等な物言いを許している。

ジャスマン クラス：蛮族

ポールの参謀的で彼の唯一の友人。蛮族では珍しく引き際を心得ている。

## 第5話 思わぬ助け

ファルシオンを振るう試験を達成し、王位継承が現実となったクロスは今日も訓練に励み、素振りだけで足らず訓練相手を打ちのめしていった。

「はあー！」

「ま、待って、降参です」

木剣がぶつかかる寸前に相手は投降しクロスは剣を止める。

その直後訓練相手の兵は逃げるように訓練場を出て行った。

「次、お願いします」

クロスは訓練監督に次の相手を呼ぶように命じる。

「待って。今のは相手も大怪我するところでした。クロス様も息が上がっています」

パレス王宮を訪れ、国賓として認められているグランベル大使ユリナがクロスを探して訓練場を訪ねて来たところクロスの危ない訓練を見て思わずクロスを制止する。

「ユリナ、どうしたんだい？ 僕は今訓練中だ」

「訓練？ あなたはいじめを訓練というのですか。ジェイクス様を失って辛いのはわかりますが臣下に八つ当たりしている今のクロス様を見たらジェイクス様は悲しまれま

すわ」

「君がジェイクスの何を知っているというんだ！」

ユリナの反論にクロスはますます激昂する。

「クロス様も疲れている様子です。訓練は終わりにして一休みしてください。町に行きたいのなら私もお供いたしますから」

「街を遊びたいならユリナ一人で行って来てくれ。護衛だつて大使館やパレスに一声かければすぐに出してくれるだろう」

2年前とは逆にクロスはユリナの誘いを拒絶した。この場を遠巻きに見ている兵士たちは二人はすぐに破局するだろうと確信していた。

「ユ、ユリナ様、はあはあ、ここにおられましたか」

言い争っている二人の前にアルバが息をついてやってきた。

「アルバ先生どうされましたの？ 待つて、今お水を、水筒は」

クロスの説得をあきらめかけていたのか。ユリナはアルバに向き直り、彼に水筒を差し出そうとする。

「わ、私のことはいいんです。そ、それよりヨーゼフ様が」

「ヨーゼフがどうしましたの？ ……やっぱり水を飲んでからの方がいいですね」

喘ぎながら話そうとするアルバにユリナは水筒を押し付け飲み終わるまで待った。

「ヨーゼフ様が竜の里を見つけたと言って、一軍を率いてマケドニアへ」

アルバの言った竜という言葉にユリナだけでなくクロスも驚いた。

「竜って、本当にいたのか。でもなんで軍隊を？」

「ヨーゼフ様は竜を皆殺しにするつもりなんです。あの方は竜をユグドラル大陸を滅ぼしかけた偽神だと信じていましたから」

戸惑うクロスにアルバは説明する。

「そんな、ロプトウス以外の神は人々を救うために降臨して下さったのに」

動揺しているのはユリナも同じだ。だがクロスはそんな神話のことより気がかりなことがあった。

「もしヨーゼフが返り討ちにあつたら竜は人間すべてに裏切られたと思って人と竜の戦いのやり直しになってしまう。すぐに出撃を」

「ならん！」

一同はえつという間もなく後ろを振り返る。そこにいたのは

「アカネイア軍が動けば竜は人への疑念を確信しそれこそ千年前の戦いを繰り返す。今ならグラランベルの軍が勝手にやったことだ。我々は座視し竜が残った時に弁解すればよい。余が責任を取ろう」

アカネイア王グスタフだった。

「ひ、ひええ、アカネイアの王様」

アルバは驚き尻もちをつく。

「父上、傍観しているうちに竜が人々に攻撃を仕掛けてきたらどうするつもりです。我々が行ってヨーゼフを止めるか竜を助けることの方が戦を防ぐ手立てになります」

クロスの訴えにグスタフは首を振る。耳を貸す気もないようだ。

「わかりました。陛下はアカネイアを守らなければなりません。おっしゃることはごもつともです。それではわたくしは用事がありますので失礼させていただきます」

ユリナはヨーゼフを追うべくすぐに踵を返そうとする。

「待ってユリナ、僕も…僕だけでもいく」

クロスはユリナの手を取り同行を迫る。

「これはグランベルの問題です。あなたは無関係です。時間がないの離して!」

「ヨーゼフは君に忠誠心なんて持ってない。行けば殺される。僕にはもう君しかいないんだ」

手を振りほどこうとするユリナをクロスは強く抱き寄せる。

ユリナをないがしろに使節団を思うがままに動かしていたヨーゼフに忠義がないことくらいユリナにだってわかっていた。

「どうしても行くのか? 息子よ」

「はいー」

父の問いかけにクロスは大きくうなずいた。グスタフは腰に差した剣を差し出し、「ならばこれを持っていけ。万が一竜に襲われたときに役に立つはずだ。今のお前なら使える」

「神剣ファルシオン！ 確かにこれは竜を斬れるという話ですが、こんなものがあればアカネイアは竜に言い訳することが——」

「責任はワシがとると言っているだろう。それともやはり行きたくないと申すか？」

クロスは何も言えなくなりグスタフからファルシオンを受け取る。

「ユリナ殿、そなたとは色々あったが、今はそなたもそなたの国も我が国・大陸の重要な相手だ。戻ったら宴を開きグルニア王、ヴァルム諸国にそなたを紹介したい。至らぬ息子がよろしく頼む」

「はいグスタフ様。ご子息と一緒に必ず戻ってきます。宴の件どうか忘れないで」

クロスとユリナはグスタフに深く頭を下げ急いで馬を駆りレフカンディ西の港まで急いだ。

その後ほどなく王も兵士も解散し、アルバが王宮からとつくにいなくなっていることなど誰も気付いていなかった。

「グオオオオ」

「ぐわああ」

竜の攻撃に多くの兵士が消し炭となる。

「魔道士だ！ 竜の弱点をつける魔道士を出せ」

後方でヨーゼフが竜への対処を指示する。

グランベル軍は里を見つけるなり問答無用で攻撃を始め、竜の姿をとれずにいた竜人を虐殺した。女娘はヨーゼフの命令で生かして捕らえるように言われている。辱める目的ではない。神竜の王女の血からは一番強い力が得られると思いを確保するためだ。

だが、攻撃に気付いた竜人は竜石を取り反撃を始めた。やむなくヨーゼフは男女の区別をつけず竜それぞれの弱点をついて魔法攻撃をするよう指示した。

「人間どもめ。また我らを裏切ったか」

「やはり千年前にメデイウス様について皆殺しにしておくべきだったか」

「ガトー様が生きていて下さればあんな奴ら」

竜人のそんな恨み言が飛び交う中、ある少女は兄代わりだった少年を思い浮かべていた。

「お兄ちゃん。あの人たちはお兄ちゃんの仲間じゃないよね」

神竜族の王女チキ。千年前にアカネイア旧王家を復権させようとする一派に害を及ぼされることを恐れてマルスとシーダによってこの里に移住してきた少女である。

激戦が行われている最中、クロスとユリナが到着した。

二人はほどなく指揮を執っているヨーゼフと対峙する。

「ヨーゼフ兵を下げなさい！ 竜の方々には私から謝罪いたします。たとえ、この身が裂かれようと」

ユリナの叱責にヨーゼフは動じず笑顔を作り。

「これはユリナ様。ご安心を、偽神どもは一匹残らず私が抹殺いたしますので」

ユリナはヨーゼフの愛想笑いに恐怖を覚えながら、

「偽神？ 確かに彼らは創造主みたいな神様とは違うかもしれない。でも私たちの祖先様を暗黒神と呼ばれていた存在から救ってくださった恩人なのよ。彼らがいなければ私もあなたも生まれていなかったかもしれないし、死んだほうがましな圧政に苦しんでいたかもしれない。もうロプトウスはいないの。これ以上彼らの恨みを買って何の得が」

「だまれ小娘！ ロプトウスも他の十二柱も同じだ。我々は昔も今も奴らにもてあそばれているのだ。わしはあの男にそれを教えられ、この隠れ家突き止めた。今こそ奴ら偽神を皆殺しにし我らが故郷を開放するのだ」



グランベル兵がユリナに剣をむける。

突然クロスはユリナの手を取り後退した。

「逃がすな、追え」

ヨーゼフの命令を受け兵士たちがクロスたちを追う。その兵士たちの横の木が突然倒れてきた。数人の兵士が巻き込まれるが後続の兵士はかまわず木を踏み越えていく。しかしその兵たちは木を降りた途端、足払い用の穴に引つ掛かり転倒してしまう。その隙を射てクロスが剣で切りかかってくる

『うばえー！　そしてわれにちからを！　リザイア』

ユリナも魔法で攻撃してきた。

「ぐあー！」「うぐー！」

何人かの兵が絶命するが、それでも数が多すぎる。

「なめるな」

「ぐ……」

敵兵に斬りかかられ、クロスはひざまずいた。

「クロス様、待つて。『かのをいやせ　リライブ』」

ユリナがクロスを杖で回復するものその間に敵兵に取り囲まれる。

「罨とは一国の王子らしくないせこい真似だな、だがその娘には今までお飾りとして

我々に華やかさのおこぼれをくれた礼もある。想い人とともに死なせてやろう」

ヨージェフが勝ち誇る中、せめて奴だけでも仕留めようとクロスがヨージェフの首に狙いを定めた時。

「グルルツ」

金色の竜が戦場に現れた。

「あれは……まさか！ 竜の王族」

ヨージェフのつぶやきに気付かず全兵士があらゆる魔法・武器での攻撃を試みる。だがどんな武器・属性魔法も竜に聞かなかつた。

弓は効いていたかもしれないが、かすり傷未満だったので兵士には金竜は無敵の存在にしか見えなかつた。

「あの竜の生き血を飲めばわしは王に。最強の王になれるのだ！」

ヨージェフは切り傷の一つでもつけようと突撃した。

「グアアア」

竜の息吹にヨージェフも彼の周りにいた兵士も霧散する。断末魔も上がらなかつた。

竜はクロスとユリナにも近づいてくる。

（ファルシオンを抜くべきか？）

クロスは迷っていた。この剣を使えば、竜はアカネイアの関与を疑わなくなる。だけ

どこのままでは自分もユリナも死んでしまう。ジェイクスを失った時の両親の悲しみやとうとうパレスに来なかったジェイクスの恋人リンネの嘆きを思えば心中に何の価値も感じなかった。

「斬ってみればいいんじゃないか」

そんな思考を断ち切ったのはある男の声だった。

「アルバ……先生？」

振り返りクロスは思わずその男の名をつぶやく。

「斬って血を流させてみるといい。その血を飲めば神竜の力が得られる。さすがに神器は持ち合わせていないけど、ユリナ様を連れて逃げるくらいできるよ」

クロスは突然現れたアルバに戸惑い、何を言っているのか理解できなかった。

「アルバ先生、あなたが黒幕だったんですね」

クロスとは逆にユリナは冷静にアルバに聞いた。だす。

「黒幕とはひどい言いがかりですね。ユリナ様。せめて共犯者と言ってほしい。なぜならヨーゼフも王位を狙って竜を見つけたために私を利用した。宰相にとつても私やヨーゼフは替えの利く駒としか思っていない」

アルバは忠誠を装っても無駄だと思っていたのかユリナに対してもタメ口になる。

「宰相がヨーゼフとあなたを派遣していたのね」

「おおつといけない。時間をかけると私はともかく君たちが竜に焼き殺されてしまう」  
金竜を前に余裕を見せるアルバにクロスたちは疑問を感じる。

「私は？ あの竜の攻撃に耐えられるのか？」

クロスが問うとアルバはうなずき懐から瓶を取り出す。

「エリクサー。一度致命傷を負っても全快できるリーベリアの魔法薬さ」

竜がしびれを切らし一歩近づいてきた。

「さあ危なくなってきた。竜を斬り生き血を飲むか。二人で心中するか。さあ早く決めろ！」

「ユリナ、逃げろ！」

アルバのたわごとを聞かずクロスは叫び、半ば無意識でファルシオンを抜いた。

『お兄ちゃんの剣？』

竜は動きを止めこちらをいや、剣を見ている。

「「……………」」

そしてあつけにとられるクロスたちやアルバにそっぽを向いて真逆の方向へ去っていった。

「神竜に何か習性があるのか？ まだまだ研究不足だな」

クロスはつぶやくアルバに剣をむける。

「動くな。あなたを捕まえ、竜たちの前に引きずり込む。生かしてもらってもグランベルへ強制送還だ」

「君は話を聞いていなかったのかね。このエリクサーがあれば刺されても射貫かれても1回だけ全快さ。無駄な脅しをしてないで生き残れた喜びを二人で分かち合うといい。私は竜の研究を続けに新しい拠点を探そう」

『ひかりよ、われにちからを… オーラ』

ユリナの魔法がアルバを撃つ。うめいているすきにクロスがファルシオンで刺す。アルバは気絶もせず話通りエリクサーの力で全快した。アルバは捨て台詞も発さずにワープの魔方阵を地に浮かべた。その時弓矢がアルバの胸を貫いた。

「ぐ……なに……？」

アルバは驚愕の表情のまま命を絶った。

「弓？ いったいどこから」

クロスは矢が放たれた方角を見るがそこには鎧兜を着た兵士が一人。

「あなたは？ いったいどこから」

クロスが訪ねるものの弓兵は踵を返し去っていった。

生き残った竜人は里を離れ、別の里に移らんと移動している。グランベル兵を消滅させたチキも遅れてやって来ていた。

「私たちはこれから別の里に移るが、チキはどうする？ 彼らは君を狙っていたようだが」

「うん。もうお別れした方がいいよね」

仲間の問いに涙を浮かべチキは決別を決める。

「でも、どこへ？ 一人だけ別の里に隠れてもかえって危険だぞ」

そんなチキを見かねてか純粹にかえって危険だと思つたのか仲間の一人が反対する。

「では我々の国へ来ていただけませんか？」

そこへどこからか声をかけられる。竜人たちは石をもつて振り返ると

「私はヴァルム大陸ノーヴァ教国の僧兵チエルシー。神竜様をお迎えに上がりました。決して危害は加えません。どうか失われたミラ様に代わって我々の心の拠り所となつてください」

弓をしまい、手をあげ、攻撃の意思がないことを訴える弓兵の女だった。

「ところでユリナ、いつからアルバが怪しいと思つてたんだい？」

パレスへの帰り際の船の中、クロスがようやく思い出した疑問をユリナに尋ねる。

「レフカンデイについた時くらいです。ヨーゼフの動きに気付いて慌てて駆け付けた割

にヨーゼフは私たちが追い付けないところにいた。個人に比べて軍の動きは鈍重ですからノルダを出てすぐに追いつけないとおかしいんです」

「そ、そうか」

ユリナの推察にクロスは感嘆する。

「そうかつてアルバは氣付かれていますこと前提で話を進めてましたよ。王位継承権も得たんですから剣ばかり振ってないで勉強にも力を入れてください。私がない間も陛下をいじめてはだめですよ」

「はい。……っていないってもしかしてグランベルに帰るのか？　もう君なしではいられない。どうかアカネイアに残ってくれ」

クロスは出立前の父にしたより深く頭を下げる。あと一押しで土下座までしてしまいかねない。

「やめてください、皆様見ています。一時だけです」

「一時？」

頭をあげクロスは復唱する。

「今回のヨーゼフの童虐殺を陛下に報告するため、そして宰相の断罪のために。私はグランベルへ戻ります。私が戻るまでの間に勉強もできる殿方になってくださいね。クロス」

ユリナはウインクしていたずらな笑顔で初めてクロスを敬称なしで呼んだ。

チエルシー クラス？ スナイパー

ノーヴァ教団騎士修道会の僧兵。神童を探すため商船の護衛に扮してアカネイア大陸に潜りアルバを尾行して竜族の隠れ里を見つけ出した。



## 第6話 瞳に聖痕に宿す子

グランベルへの帰りの船で眠った後ユリナは虚空にいた。

「これは夢？」

夢なのは確かだが感触はある。頬をつねっても痛いだらう。

突然何者かが目の前に現れる。

「我が血を一滴秘めしものよ、あなたに話したいことがあります」

緑色の髪をした不思議なドレスをまとった女性だ。見覚えはなかったがユリナは直感的に悟りひざまずいた。

「ナーガ……ナーガ神ですね」

「そう呼ばれていますね。人がつけたものですが、構いませんどうぞ好きなように」

ナーガが自分に用があるとしたら一つしかない。ユリナは頭を地にこすり

「ヨーゼフを止められなかったこと、責は私にあります。どうか裁きを与えるなら私に、ユグドラルの人々もアカネイアの人々もクロスも誰も悪くはありません」

ナーガは首を振り、

「裁きを与える資格も力も私にはありません。同族の怒りを鎮める力も。私はあなたに

頼みたいことがあつてきたのです」

「頼みたいこと？」

「ええ。聞いていただければあなたの親族に特例の措置を施しましょう。それに今のあなたには悪くない話です」

ユリナは顔をあげ首をかしげる。

### グランベル王国

かつて二千年前まではユグドラル大陸で12人中7人の聖戦士の末裔を抱える宗主的な大国だったが、一度帝政を取り国を乗っ取ったロプト教団を打倒し、王政に戻して以降はアグストリア・イザーク・そして南北を統一したトラキアがグランベルと対等の国力を持ち均衡状態となった。どこに肩入れするかで戦況が変わるシレジアの存在も無視できない。加えて聖戦士の血の力が弱体化する「神の怒り」以来、戦士の末裔たる王の前に出すわけにもいかなくなった。

現在グランベルはイザークとトラキアとの関係が悪化し、戦争に備えてアグストリアと同盟を結び、シレジアに協力を要請するなど戦勝のためにあらゆる根回しを行つてい

る最中だった。リーベリア・アカネイアとの交易もその一環である。グランベルはその貿易相手を1国（実質4国）失おうとしていた。

バーハラ王宮でユリナは国王セルロンに謁見していた。

「おもてを上げよ、余にとってクルーヤとそなたは甥と姪のようなものだ」

ユリナは顔をあげずに伏せたままでいた。

グランベル王セルロン、髪は青いがアカネイアと血縁があるわけではない。グスタフより一回り若いためか彼より温和な印象がある。ユリナも幼いころは両親の注意も聞かずセルロンをおじさまと呼びなついたものだ。しかし今はバサークの魔法をかけられてもそう呼ぶ気はない。彼が宰相に竜虐殺を命じた真の黒幕である可能性を消さないうちは。

「ユリナ！」

王の許しを得てこれ以上顔を伏せるのは無礼だ。バーハラ公爵に地位につくユリナの兄クルーヤはユリナに注意する。

「もしや、ユリナ公女は疲れが取れていないのでは？ 異大陸に長期間いたんだ。無理

もない。謁見はまた日を改めた方がいい。陛下、申し訳ありません。ユリナ殿の疲労を見抜けず謁見を手配したこのフィツシャーの手落ちでございます。どうかユリナ殿を責めぬようお願いいたします」

頭を垂れユリナの擁護を装って彼女を王から遠ざけようとしているのがグランベルの宰相フィツシャー侯爵である。王宮から追い出して折りを見て暗殺する気に違いない。

「いいえ、陛下に報告する気力ぐらいあります。少し考えをまとめていただけです」  
いつまでもセルロンに反抗的な態度をとるわけにもいかずユリナは顔をあげる。

「そなたが出した報告書には目を通した。人の姿を取っていた竜というものがいたことにも驚いたが、フィツシャーの補佐として尽力してくれたヨーゼフがあのような蛮行を。まったく度し難い」

ユリナは謁見の前にセルロンにヨーゼフが犯した竜への虐殺を記した報告書を提出した。だがフィツシャーに握り潰されることを懸念してヨーゼフの後ろにいた黒幕のことは書いていない。

「陛下、実は報告書にはまだ書いていないことがございます」

フィツシャーは周りに聞こえぬよう歯噛みする。ユリナを止める言葉を探しているようだ。

「ほう、そなたにしては珍しい。言ってみなさい。ハメル伯爵、書記官として記録を頼む」

「かしこまりました陛下」

書記官が議事録とペンを取り出す。

グランベルでは事件のことを記録する際は場所が謁見の間であれ国王の言葉だろうと記録することが義務付けられている。

ユリナは一拍置いて、

「陛下。ヨーゼフの竜虐殺はある方の命令だったのです」

一同がどよめいた。

「そ、そんなことが、いったい誰に命じられたと言うのかね？」

フィツシャーが白々しくユリナに問いかける。

「あなたですよ……宰相フィツシャー侯爵閣下」

ここが謁見の間でなければユリナは人差し指をフィツシャーに突き付けていただろう。そのくらい強い語気で彼女は黒幕の名を暴いた。

「一切身に覚えがないな。何の根拠があつて」

「使節団に入っていた学者をご存知ですか？ 彼はヨーゼフと組んで竜が隠れ住んでい

る里を見つけ虐殺の手引きをしていたのです」

「ふん、知らんな。私には他にもやるのが色々あるんだ。使節団の名簿の確認もヨゼフに任せていたよ」

フィツシャーはあくまでしらを切りとおす気だ。

「彼からあなたが二人にすべてを命じた黒幕だと聞きだしたのですよ」

「ほお、その学者は？ 今どこにいるのかね？ そこまで言うくらいならここにひつたててくるべきじゃないか」

ユリナは無意識に目を落とし、

「亡くなりました。拘束しようとしたところ、どこの国かわからぬ兵士に矢で射抜かれて」

ユリナの言葉にフィツシャーは嘲笑する。

「ははは！ 馬鹿馬鹿しい。死んだのでは尋問することもできんではないか。お前はそのアルバとやりに騙されていたのだよ。やはり異郷に飛ばされて疲れているようだな、それともお前が竜を狩ってアカネイアを怒らせその失態をなすりつけるためにヨーゼフを殺し、奴が犯人だとでっちあげたのではないか？」

「書記官殿、今の言葉、記録いたしましたか？」

フィツシャーの暴言に応じずユリナは書記官に問いかける。

「は、はい。今の公女の言葉まで。一字一句漏らさずに」

「……？」

フィツシャーにはなぜユリナが書記官の記録を確認したのかわからなかった。

ユリナは書記官に議事録を確認させる。

「私が謁見の間に推参してから今までアルバという名を口にしたことは？」

書記官は最初から今に至るまでの文言を確認する。

「……ありません。公女は学者としか」

「な？」

フィツシャーは口をあんどぐり開ける。

ユリナは笑みを浮かべ、

「なぜ学者の名前がアルバだと知っていたのでしょうか？ 使節団に学者は何十人もいたのに」

「め、名簿だ！ 宰相として名簿を確認していたのだよ。それで怪しい男のことを思い出して」

「書記官確認を。さつき彼は名簿の確認はヨーゼフに任せたと言っていました」

書記官はさつきより早く問題の言葉を見つける。

「は、はい。ここに宰相が確かにそう言っています」

議事録を周囲の高官も確認する。

「死んだヨーゼフにもアルバにも何も聞けない。ですがフィッシャー殿からは色々お話が聞けそうですね」

「ぐぐ、竜を殺して何がいけないんだ。ただの狩りじゃないか」

ユリナは謁見中にもかかわらず立ち上がる。

「狩りじゃない！ 考え、痛み、行動する。人間と変わらない生きているものにあなたは虐殺を命じたのです」

「奴らは二千年前、神を称しロプトウスがユグドラルを荒らし、他の竜が人間を助けるというマッチポンプを演じたんだ。我々の先祖はそれに苦しんだ。いや今も聖戦士の血とやらで国を分け戦争をする羽目になっている。因果応報だろう。奴らを皆殺しにするくらいは」

「確かに今起きている戦争は悲しく、愚かなことかもしれませんが。しかし竜がヨーゼフの軍を返り討ちにした後アカネイアは竜と戦争をすることになっていたかもしれない。あなたは他国で戦争の火種を作りかけたんですよ。竜を侮蔑する資格はない」

「もうよいー！」

セルロンがユリナとフィッシャーの口論を止めた。

「アカネイアは我が国の軍の行動を許さんだろう。国交断絶になる見込みが高い。フィッシャー、そなたの軽率な命令で我が国は同盟国を1国失ったのだぞ。尋問次第で



は極刑は免れんぞ。引つたてい！」

衛兵はフィツシャーを囲む。

「陛下、お待ちください。私はグランベルのためを思つて、陛下ー！」

連行されるフィツシャーの叫びがこだまする中、ユリナは立ち上がっていたことに気づき、慌ててひざまずく。

「申し訳ありません。お見苦しいところを」

「よい。フィツシャーの心を見抜けなかつたのは余の不徳だ。そなたには苦勞を掛けたな」

「陛下、一つだけよろしいでしょうか？」

「うむ、それでそなたに報いれるなら」

ユリナは深呼吸する。次は自分が連行されるかもしれないと覺悟を決めながら、

「陛下は宰相とヨーゼフのこと、何もご存じなかつたのですか」

フィツシャーは王の命令でヨーゼフたちを動かしていたのではないか？ そう言っているも同然の問いにまた謁見の間にいるものがどよめいた。

「ユリナ！ よせ。誰か妹を連れていけ！」

クルーヤの命令を受けて衛兵がユリナに駆け寄る。

「よこ」

だがセルロンの一喝を受けて衛兵の動きが止まった。

「陛下?」

「ユリナよ、余は宰相とヨーゼフのことを何も知らぬ、知らなかった。臣下の暴走を止められぬ無能な王だ。お前に愛想を尽かされてもおかしくない。だがどうか信じてくれ。王家の始祖を救った神いや童の虐殺やアカネイアに戦火を振りまくなど知っていれば決して許さなかった。バルドの名にかけて誓おう」

セルロンはユリナに頭を下げ、その拍子に王冠が床に落ちた。だが拾おうとする者は誰もいない。

「私などに恐れ多い。頭をお上げください。おじさま」

ユリナはセルロンをおじさまと呼ぶことで彼を信じることに決めた。

「失礼しました陛下、アカネイアは勝手な軍事行動を起こした我が国を許さないでしょう。残った大使館の職員も送還されるでしょうね。ヨーゼフを抑えられなかった私にも責任があります」

「ユリナ、いったい何を?」

突然の自虐にセルロンは驚く。

「私をグランベルから追放してください。こんな愚臣、陛下の目を汚す資格はありません」

「馬鹿なことを言うな。グランベルを出てどうしようというんだ」

「アカネイアに移住します。かの地の方々に償いをしなくては」

「余が謝意を出す。賠償金も払おう。ナーガの血を引くお前を失うのはこの国の損失――」

「陛下、お耳をよろしいでしょうか」

ユリナはふいに立ち上がり、

「う、うむ？」

ユリナはセルロンの耳元に口を近づけ何事か告げた。途端、セルロンは驚きながら、

「好きにせよ」

それっきり何も言わず、謁見は終了となった。

後日、グスタフはマケドニア王として領内でのグランベル軍の行動に抗議、他の連合加盟国同様グランベルとは国交断絶となり、大使館は解体、職員は即時帰国となった。ユリナはその責任を取り、大使を解任、グランベルからの更なる軍事活動を防ぐための人質としてアカネイアの王子に嫁いだ。グランベル特にバーハラの住民はユリナを「悲劇の公女」として彼女の境遇を悲しんだ。

ユリナの移住後、不思議なことにユリナの兄クルーヤの額に聖痕が現れた。ナーガの聖書も使える。これによってグランベルでナーガの後継者が途絶えるということは無くなった。この現象はナーガとユリナの間で結ばれた「ユリナがアカネシアに移住すればクルーヤの中に眠るナーガの血を引き出す」という取引によるものでそれゆえセルロはユリナの移住を認めたのだ。

ユリナがアカネシアに戻った後グスタフは約束通り宴を開いたがそこに他国の要人の姿はなく各国の交流の宴ではなくクロスとユリナの婚約パーティーとなった。

竜の隠れ里跡に竜の姿はなく、何の弁解も謝罪もできず火山灰の災害で疲弊している状況でいつ竜から報復があるかわからない状態ではファルシオンのみで大陸を守るか定かでなく王族がナーガの血を取り込むのも手だとグスタフは考えたのだ。

2年後の成人の儀を終えた翌日。グスタフは病に倒れ、自らの役目は終わったと言うように息を引き取りクロスに位を譲る。

## 2年後

国王夫妻が公務を終え王宮に戻り、乳母に礼を言つて我が子を抱き上げる。

「ただいまカイル。公務が長引ちゃってごめんさい」

王妃となつたユリナに抱き上げられ赤子がはしやぎ声をあげる。

「僕が抱くと泣きだすのにげんきんな奴だ」

王に即位したクロスがそう言つて笑いかける。

「あなた、まだ女の子じゃなかったことをすねているの」

クロスは目をそらし、

「いや、女の子だったら君に似て可愛くなるだろうなつて」

「あなたに似てもかわいくなりますよ。髪も青いしセリスそつくり、そうだわ、今からでもセリスに改名——」

「それはダメだ」

ユリナの提案をクロスは即答で拒否する。

むくれるユリナを置いてふと左手を赤子の右目付近に移す。赤子は父の左手を見ている。

「どうしました？」

「いや、ちゃんと見えてるかなつて」

ユリナもクロスの意図に気付き、

「これは紛れもない聖痕、でも聖痕が目には宿るなんて我が家でも例がありません」

赤子カイルの右目には聖痕があつたのだ。

ク  
ロ  
ス  
編  
  
完

## カイル編

## 第7話 屍と巨竜

マーモトード砂漠の奥地 テーベの塔に黒いローブを着た神官と黒い甲冑を身にまとった騎士の一団が迫って来ていた。

「……はあ、はあ、教皇様、この塔が？」

砂漠の行進で乾いたのどを震わせながら老司祭が教皇と呼ばれている男に尋ねる。

「うむ、この地下だ。この塔の地下に我らが崇拜する神、ラーズ神がおられる」

司祭よりはるかに若い教皇が司祭の問いを肯定する。

ラーズ教団いやラーズ教団を称する残党たちが教皇と呼ぶ長クラウディウス。彼は魔女クライネから水を受け取りながら塔を眺めていた。

百年近く前、ラスベリア大陸と言う地ではヴェリア王国率いるベルウィック同盟とラーズ帝国が覇権を争っていた。だが、戦争の糸を引いていたラーズ教皇ウルバヌスは追放され、同盟と帝国が和平を結んだ。

ウルバヌスが失脚しても彼を慕い従った一派はラスベリア諸国に復讐するべく至高神ラーズを降臨させようと目論み、多くの教団員の先祖ゾーア人が住んでいたリーベ

リア大陸に移り住み、ゾーア人の崇めていた暗黒神ガーゼルがラーズの正体だと思い込み、シエロ山地下神殿を探索し調べ上げた結果、ガーゼルの正体がアカネイアから来た竜だと知った。女を洗脳し魔女にするすべもリーベリアで会得した。そしてリーベリアの北、このアカネイア大陸に辿り着いたのである。それまでの間に教皇の位は2回継承された。現在一派にとつての教皇がクラウディウスである。

だが神官たちは気付かなかった。地下神殿を探索して以来クラウディウスの精神はある邪念に侵されつつあることを。

(ユグド人も、裏切り者を出したゾーア人も、人間すべてを滅ぼす)

未だ人間への恨みを募らせる古代ゾーアの部族長ガルバザンの思念に。

「クロスのアカネイア王即位から18年後。アカネイア王都パレス。

「へえ、この前よりにぎやかだな」

青い髪の少年は華やかな街に感嘆する。

「異大陸から来た傭兵団のおかげで治安が安定しましたからね。ならず者ばかりか1月前はオレルアンに侵入しようとした蛮族を追い払ったそうです」



ショートカットを切りそろえた赤い髪の少女が返事を返す。

「北の蛮族つて父上が友達を失つてまでようやく追い返した屈強な戦士だろ。あれを傭兵団だけで？」

「団長が凄腕なんですつて、アカネイアにない奥義で蛮族を一太刀で10人以上蹴散らすつて噂です。あと多くの団員が獣に変身する幻術を会得しているとか。それはデマでしょうけど……それとカイル様」

そこまで言つて少女は声を低くして、

「ジェイクス様のごことは陛下の前では話題にしないでください。未だに気に病んでいらつしやるんですから」

「わかつてる。ここだけの話だよ」

少年はカイル。アカネイア連合王国の王子。その右目にはナーガの聖痕が宿つている。

そして少年と話しているのが天馬騎士見習いカーシャ。マケドニアからパレスに上り仕官して以来、同い年のカイルの副官を任されている。

「でも傭兵団に会つてみたいな。その団長ならファルシオンも振り回せたりして」

「まさか……まあ噂です噂。優秀な参謀が采配を振るつたそうですから本当はその参謀さんのおかげじゃあ——」

「私が会わせてあげましょうか。その団長さんに」

割り込んできた声の主を探して、二人は振り返る。

「いい男はデート中に高価なプレゼントを渡すものよ坊や」

すごい美人な行商人だった。

「デ、デートじゃありません。私たちは公務で街の見回りをしていたんです。それにこのお方は——」

「あら、坊やその右目」

カーシヤの説明に耳を貸さず行商人の女はカイルの右目をのぞき込む

「生まれつき？ 見えているの？ まああまり悲観しないことね。人間は平等に生まれられないんだから」

カイルは一方的に女に慰められた。

「そ、そんなことより傭兵団とお知り合いなんですか？」

カイルは気にも留めず傭兵団について女に詰め寄る。

「ええ。その傭兵団とは特に団長さんとはひいきにしているのよ。式を挙げる日もそう遠くないわ」

「傭兵団と知り合いって、それにカイル様の聖痕を知らないってことはもしかして異大陸の方ですか？」

カーシヤの問いに女はうなずく。

「テリウス大陸から来た行商人ララベルよ。ところで様付けされているということは、じゃあ坊やお金持ちか貴族様ね。ならなおさら太っ腹なところを見せてあげなくちゃ。お買い得の商品があるのだけど買ってくれたら傭兵団に紹介してあげなくもないわ」

「結構です公務がありますので！ 治安が良くなつたと言つても夜は女性は危ないですからそれまでには店を閉めてください」

薦められたカイルではなくカーシヤが断り、カイルを引つ張るようにこの場を去つていった。

「もう尻に敷かれているなんて最近の男は軟弱ね。本当にアイクさんに会わせてみようかしら」

残されたララベルはそうひとりごちた。

数年前、アカネイア大陸に新たな異大陸テリウス大陸から移住を希望する人々を乗せた船がやつてきた。ヴァルム大陸やユグドラル大陸とは異なり彼らの背後に国はない。祖国から離れアカネイアで暮らしたいと言つてきた。

だが西のグルニアは彼らを拒否し、東の諸地域は火山灰の影響による飢えを経験した上ユグドラル大陸と国交を断絶した。生産力を回復したとはいえもしまた火山が噴火したらと考えると招かれざる者を受け入れることはできなかった。

しかし、船を護衛していた傭兵団もテリウス大陸に戻らず移住希望者ともにアカネイアに足を踏み入れた。傭兵団は治安の悪い地域にはびこるならず者を圧倒し、警備を頼む代わりに受け入れる村まで現れ傭兵団のついでにと一時的な居住を許した移住者の多くは常人離れた力で村の仕事を引き受け村の発展に貢献した。

こうして傭兵団とテリウスからの居住者はアカネイア大陸でその存在を確かなものにしていった。

「そろそろ離してくれよ。どうしてそんなに怒っているんだ？」

ララベルが見えなくなったあたりでカイルは不平を唱えた。

「傭兵団につられて変なものを買わされそうになっているから助けたまです。カイル様のことは陛下とお妃様からお願ひされていますから」

ララベルが美人だったからとは言えないカーシャだったがカイルはそんな彼女に気が付かず、

「そんなに高いものを買うお金なんてもらっていないよ。母上がそういうところに厳しいのは知っているだろう。もし買ったとしてもそれで凄腕の傭兵団と会えるなら安い

ものじゃないか。北の蛮族を片手で倒せるくらいの傭兵が仕官してくれたら父上も頼もしい味方ができたって喜ぶよ」

カーシヤは能天気な主に頭を抱え、

「あの商人がそんな口約束を本当に守ってくれると思っっているんですか。傭兵団とは関わりのない赤の他人かもしれないよ。ひよつとしたらカイル様の聖痕も知らないフリをすれば異大陸人だと思わせられるかもって考えたうえでの言動かもしれません。カイル様は騙されやすいんですから」

カーシヤの小言にカイルはただ一言「カーシヤが考えすぎなんだよ」とだけ言ってそれきり二人は黙って王宮へ戻ろうとした。その時

「きやあああー！」

「ぐあああー！」

すぐ側で悲鳴とうめき声をした。二人が声のした方向を見てみると。

虚ろな目をして剣を持った男が人を襲っていた。襲われた方の男はもう死んでいる。「何をしているんだ。やめろ！」

カイルの怒声にも男は反応せず。女の方へ向かっていく。

「くっ……はっ！」

「やあー！」

あまりの光景にカイルとカーシヤは反射的に男に斬りかかりあっさり息の根を止めた。初めての實戦で峰打ちの余裕もなかった。勝ったのは訓練の成果だろう。

「殺してしまったか。治安が良くなったと思つた矢先に」

「カイル様、あれ！」

うつむいて憤つているカイルだったが男の死体を指さすカーシヤの声に気付くと目を疑う現象が起きていた。

男の死体は黒い霧となつて立ち昇り霧散していたのだ。

「これは？ ……！」

「きやあー！」

カーシヤは思わず悲鳴を上げる。

気が付けば町中の人間が襲われていた。

襲つていたのは老若男女問わず無数にいたが、それぞれ武器を持ち目は先ほどの男のように虚ろだった。

「くっ……いくぞ、カーシヤ」

「待つて、敵の数が多すぎます。私が救助に回りますから、カイル様は王宮へ戻つて応援を呼んでください」

「カーシヤ一人置いていけるわけないだろ」

言い合っている間にも謎の敵は人々を襲つていく。

そんな時、市民の中から敵を倒していくものたちが現れた。

「お前ら何やつてんだ。戦えないなら逃げろ！」

戦いに慣れているあたり、アカネイア自警団の人間だろう。

その中の一人がカイルたちを罵倒し、敵を倒しに踵を返す。

「……………」

数の差はあれど自警団は善戦しているようだ。悔しいが、今は彼らに任せて王宮に兵士を呼びに行くのが最善だろう。カイルとカーシャは王宮へ急いで戻った。

敵は市民を殺しながら、自警団と交戦している。凄惨な光景を目撃しながらカイルたちは駆けていくが、敵を見ると皮膚が腐敗していたり、半ば骨しか残っていないようなものいることに気が付いた。謎の敵というより何らかの怪現象で動く屍だ。

すでに王宮も事態に気付いていたらしく、王宮の方角から兵士たちも市街に駆け込み屍と戦っていた。いや王宮の敷地内でも屍が現れ、城で働く官吏や兵士に襲い掛かる事態が起こっていたのだ。

カイルたちが王や妃の無事を確かめようと城に入ろうとしたその時、

キーン！

「ん？ な、何だありゃ」

屍と戦っていた兵士が自分たちを覆う巨大な影に気付き、上空を見上げた。

青空の中、そこには巨大な竜がいた。身体は細長く3対の翼と眼球を持ち、頭部には巨大な角を生やしている。

カイルたちも思わず立ち止まっていると、屍が彼らを襲った。

「きゃっ！」

「しまった！ 逃げろカーシャ！」

カーシャはすくみ、カイルは剣を抜こうとするが屍の持つ剣はすでにカイルの頭部に迫っていた。

カイルはカーシャを突き飛ばし、自身が身代わりになる覚悟を決め、目を閉じた。だが屍の刃はカイルに届かなかった。

「はっ！」

屍は城内から現れた男に蹴散らされた。

「カイル、カーシャ、大丈夫か？」

アカネイア王クロスだ。

「父上こそ無事で。屍と竜が街に」

「わかつている。お前たちは秘密の脱出口から逃げろ。カイル、覚えているな。あの通路にある非常用の通路に」



混乱するカイルたちにクロスは脱出口を指さす。そこへ女性が駆け込んできた。

「カイル待つて！ これも持つていきなさい」

「ユリナ無事だったか！ それは!？」

王妃ユリナは5つのオーブがはめ込まれた紋章を持つて来ていた。

「昔、ナーガと話した夢のこと。あなたに話したことがあるでしょう。その時に「然るべき時にアカネイアの紋章を使え」つてナーガ神がおつしやられたの。巨竜がこのまま空中を漂っているだけとは思えません。カイルたちだけでも逃げて！」

屍の複数人がカイルたちやクロス夫婦に迫ろうとしていた。

「父上！」

「はあ！」

クロスは屍の一体を切り捨てカイルに向き直り。

「行けカイル！ ファルシオンのある場所は覚えているな？」 キーン！

「ぐう」

「カーシャ、カイルを頼みます。『ひかりよ、われにちからを オーラ』」

子らを逃がすためにクロスとユリナは屍に挑んでいく。

「妃様、くっ！ カイル様はやくこっちへ」

カーシャはカイルの手を掴み、クロスがさした方へ引つ張る。

「父上たちを見殺しにする気か？ 僕たちも屍を——」

パン！

カーシヤは逃げる足を止めカイルの頬を叩く。

「カイルこそ陛下たちの意思を踏みにじる気？ 陛下もお妃様も屍なんかには負けないわ、でも私たちが立ち向かっても邪魔なだけなの。脱出口なんて私は知らないわ。いいから城から出る方法を教えなさい！」

カーシヤにここまで言われてカイルも駄々をこねてはいられない。何も言えずクロスがさした部屋に駆け込み隠し通路を開いてここから出ると促し城の地下をつたった通路をひたすら走る。

隠し通路には屍はおらずカイルたちは疲労も耐え無我夢中で出口を目指した。

出口を出た瞬間、空中から何かが落ちてきて、カイルたちは衝撃で跳ね飛ばされた。

「があああああ！」

「きやあああ！ うぐ……」

巨竜が空から城に突進してきたのだ。城はもはや瓦礫の山。カイルは痛みを忘れ、愕然と瓦礫を見る。

「そんな……父上——！ 母上——！」

アカネイア王国はこの日滅亡した。

カイル：ロード

アカネイア連合王国の王子だった。異大陸の傭兵団の活躍で治安が向上したため平和ボケしているところがある。

カーシャ：ペガサスナイト

アカネイア王国軍の天馬騎士見習いだった。王妃ユリナの助言を受けた国王クロスの指名でカイルの副官に任命された。

クラウディウス：ラーズ司教↓デアボリスト（シエロ地下遺跡探索後以降）

ラーズ教団残党を率いる自称「教皇」。教団では戒律で異性との交わりが禁じられているが自身は魔女の教育と称してクライネを侍らせている破戒僧でもある。ガルバザンの破壊衝動に取りつかれ教団にテーベの塔地下に眠る巨竜をラーズだと説き解放させる。

クライネ：魔女

クラウディウス直属の魔女兼愛人。リーベリア大陸に住む村娘だったが教団に拉致・洗脳され魔女にされた。

## 第8話 自警団ルッツと傭兵アイク

グルニア王国。

かの国はアカネイア連合王国で唯一アカネイア王が直接統治していない国である。

千年前の英雄戦争で王位継承者ユベロが王位につかずアリティアに留学し他国同様一度グルニアもマルスが統治していた。だが留学を終えたユベロにマルスはすぐにも王位についてほしいと要請したことでグルニアはアカネイア連合王国に入りながらアカネイア王が統治しない国となった。ただし形としてユベロにアカネイアの公爵位を与え藩国ということになったが。

マルスは自らが完全に大陸を支配することでハーディンのように歪んだ暴君となることを恐れ自分以外の王を求めていたのだ。そして子にグルニアが善政を敷いている限り、干渉ましてや強要するようなことをしてはならないと戒めた。代々の王がそれぞれ守った。だがこの数百年アカネイア王はグルニア王に対して兄弟というより保護者めいた振る舞いだったのは否めない。そして20年前アカネイアのクロス王子は王女ユミスとの婚約を破棄し、異大陸の公女と結婚した。

それがグルニア現国王ユベンの矜持を傷つけグルニアの拡大を求める動機となった

のかもしれない。

グルニア王国王宮。

グルニア王ユベンは自分に傳く男に恐怖していた。

男はそんな王を見て笑みを浮かべる。愛想笑いではない。

(ラーズ皇帝と謁見していたウルバヌス様はこんな気分だったのか)「ハハッ！」

思わず笑い声が漏れる。物心ついていたころはすでに寝たきりだった二代前の教皇を思うとますます愉快になった。そんな異界の教皇を名乗る男にユベン王はひるんだ。

「ひっ、な、なにがおかしいのだ？」

男・クラウディウスは取り直し、けれど慇懃無礼に笑みを浮かべたまま。

「これは失礼いたしましたグルニア国王陛下」

ユベンも玉座に座りなおし、クラウディウスに問う。

「そ、それでアカネイアを滅ぼしたあの巨竜はそなたたちの仕業なのか？」

クラウディウスはうなずく。

「左様、あの竜こそこの世界を統べる我らが神なのです」

「か、神？ あの竜が？」

「無理に信じろとは申しません。ですがあの神と神が操る屍は我々が乞い願うままに動く。様子を見に行つた貴国の兵が襲われず無事に戻つてきたのがその証拠」

言う通りにすればグルニアは襲われない。暗にそう言っているも同然のクラウディウス物の物言いにユベンは恐怖より憤りの方を覚え始めた。

「そ、それで何が望みだ？ 聞いてやろう」

「この大陸での布教活動をお認めいただきたい。その代り、神の力をもつてあなたをこの大陸の王にして見せよう」

ユベンは男が異大陸の教団を名乗ることからやはりと思ひながらも、

「いいだろう。だがこのアカネイア大陸ではほとんどの民が守護神ナーガを奉じている。私も含めてな。強引な勧誘や国教を名乗ることは控えてもらおう」

許可と同時に注意を促したがその途端に巨竜が降つて来やしないかと恐れながらもユベンは生まれながらに崇めた神を捨てることはできなかった。

「いいでしょう。私個人は大陸をまたいで改宗など無理だとあきらめていますが弟子たちは布教に熱心です。彼らの要求を伝えなければ罷免させられてしまいます。私は陛下のような王ではありませんからな」

竜を操る今のお前に逆らえる者などいるのか？ 王はそう思ったが口には出せなかった。

クラウディウスは謁見の間の前の通路で立ち止まり考えにふけっていた。  
(あの竜、まだ完全に制御できていないようだな)

王にはああいっただが実は巨竜にパレスを滅ぼさせる気はなかった。屍で城下町を滅ぼしアカネイア王を引きずり出しグルニアを疑わせ戦争を誘発し、また屍を使って各都市を疲弊させ戦力を均衡にし、隙を見て共に滅ぼす。それがクラウディウスの思い描いた構想だった。

しかしアカネイア本土に入った途端、巨竜は突然クラウディウスの思い通りに動かなくなり、勝手にパレス王宮に突進したのだ。あの都市に何かがあったのか？ そう疑問に思ったが、

《抑える必要はない。竜を利用して全てを滅ぼすのだ》

「わかっている。だが段取りというものがあるのだ」

頭の中に邪念がこぼれ、クラウディウスは思わず怒鳴り返した。

「教皇様？」

いつの間にかそこにいたクライネが不審に思いクラウディウスに駆け寄る。

「クライネか、なんでもない。今後のことを考えていただけだ」

クラウディウスはクライネに手を振り、彼女を止める。

「私が転移でパレスの様子を見てまいりましょうか？」

「うむ、いややめておけ。お前には役目があるからな。危険を冒すまでもない」

魔女はかなりの距離を転移という術で一瞬で移動することができる。偵察や監視にはうってつけだったがクラウディウスはクライネの提案を断った。

「ひとまず竜と屍は温存し様子を見よう。覇権を持った国が滅びたことで我々が何もせずとも混乱が起きるはずだ」

「はい。それでは何かご用命があれば」

クライネはそう言い主人のもう用はないという意図を察して転移でこの場を離れた。

「カーシャ…カーシャ！ しっかりしろ」

崩落した城と両親の死のショックも冷め、カーシャの方を見てみると彼女は崩落の衝撃で足を負傷し気を失っていた。

「く……、お前まで死なせるもんか」

服の裾を破りカーシャの傷ついた足を覆ってカイルはカーシャを抱きかかえ屍がう



ろついているかもしれないことも忘れ医師を求め街をさまよつた。だがすでにひとけもない。屍もいない。

「誰か、誰かいませんか？」

カイルは大声で助けを求めた。そこへ、

「お前、まだいたのか？」

いたのはさきほど屍が人を襲う状況の中口論していたカイルたちを怒鳴つた自警団の人間だつた。

「薬を持っていませんか？　お願いします。カーシャが大怪我を負つて」

「なんだつて？　わかつた。傭兵団の参謀に診てもらおう」

そこへ、

「まだ逃げ遅れてる市民がいたのか？　ん、怪我人か」

分厚い筋肉質の男がやつてきた。彼の後ろには性別がわかりにくいローブの少年(?) もいる。彼の額には赤い痣があつた。

「セネリオ治してやつてくれ」

「わかりました。彼女をおろしてください。できるかぎりそつと」

少年に言われてカイルはカーシャを地面におろす。

『かものものにおおいなるじひを　リカバー』

少年が詠唱を唱えると杖が発光し、カーシャの傷がふさがる。

「…………… へっへっは？」

途端、カーシャは目を覚ます。

「カーシャ、良かった」

カイルはカーシャを抱擁した。

「ちよつカイル様！ ……外ですよ」

カーシャは慌ててカイルを引き離そうとするが、

「あまり動かないでください！ 魔法なしだと二度と歩けなくなるような重症だったんですからリカバーをかけた後でもしばらく動かない方がいい」

少年がカーシャに強く注意する。

「はっ、はい」

カーシャが少年の忠告にうなずくのを聞いてからカイルは彼らに礼を述べる。

「ありがとうございます。あなたたちがいなければカーシャはどうなっていたことか」

「ふん、女一人守れないでその剣は飾りか？ これからは危険なことに首つっこまわずにするこつた」

自警団の男がカイルに乱暴に吐き捨てた。

カイルは何も言い返せずうなだれる。

「そう言ってやるな。相手が骨で空にはバカでかい竜だ。冷静に対処しろという方が無理がある」

筋肉質の傭兵は自警団にそう言ってカイルを擁護し、

「むしろ非があるのは俺だ。死人相手でもすぐに順応して反撃できたのに今まで街まで助けにこれなかった」

傭兵は頭を下げた。

「団長に非はありません。あれだけの巨竜相手では団長や僕、ラグズたちでもどうにもできなかったでしょう。それに兵が常駐している街よりノルダや村々の方が被害が大きくなる。そう僕が助言しましたから。責めるなら僕にしてください。間違っていたとは思いませんが」

傭兵の謝罪を少年は理屈で否定し、一応自らが悪いと軽く頭を下げた。

「ラグズ？」

ラグズという言葉にカイルは一瞬頭をひねったが人の名前ではなかった気がする。確か異大陸からの移住者が集団でそう名乗ってたっけ？

「あつ、いえ、誰も悪くありません。むしろ村の住民まで助けていただいております。申し遅れました僕はカイル。この国の王子です」

「えっ……王子？ お前が？」

自警団の男は信じられないような目でカイルを見る。

「俺の親が前の王子、今の王様と知り合いだったって聞いてよ。親父たちほどじゃないけど結構強かったって話だ。けど子供のお前は事件の最中に喧嘩するわ、女の子守れないわ、よわっちい王子様とはな」

「ちよつと君！」

カイルを貶めるばかりか父親のことまで蒸し返す男にカーシャは強く言おうとした。

「カーシャ、いい………本当のことだ」

だがカイルはカーシャを制止し男の言われるままにしていることにした。

「罵り合いはそこまでにしてもらおうか。そんな場合じゃないし、その王子は名乗って俺たちは名乗らないのは礼に反する。俺はアイク。アイク傭兵団の団長だ」

「僕はセネリオ。傭兵団の参謀で団長の副官です」

男を止め傭兵とその参謀が名乗る。すると自警団の男も、

「ちっ、俺はルッツ。自警団の団員だ」

「私はカーシャ。カイル王子の副官です」

互いに自己紹介するとアイクが話を進め始めた。

「それでカイル王子、あんたの親父さん、国王は？ 保護されたとは聞かないがまさか

……？」

「はい、母や城で働いている人たちと一緒に」  
「あつ、……」

途端、ルッツがばつの悪そうな顔になった。

「悪い。俺てつきり王様は避難したと思って」

「いいよ。ルッツの両親は大丈夫だったのか？」

「ああ、自警団を引退してペラテイで暮らしている。だからパレスにはいなかった」  
カイルとルッツが会話を交わしていると。

「団長、街にはもう誰もいない」

狼たちがやって来て人型になりリーダー格の方がそう声を発した。

「キヤー！」

カーシャは思わず悲鳴を上げる。

「悪い。驚かせたな。だがこいつら「ラグズ」はそういう奴らだ。危険な人じゃない」  
「ひと？ 獣に変身するのに人ですか？」

アイクの説明にカイルが疑問を持った瞬間。ラグズたちからカイルが睨まれた。

「ひっ！」

「よせ！ こいつは何も知らずに言っただけなんだ」

アイクがなだめてラグズたちは渋々矛を収める。

「すまない。と言いたいがこいつらも人の中のラグズという種族に誇りを持っている。二度と彼らを獣というな。今度は俺もかばわん」

それでもカイルは反芻する。

「人の中のラグズという種族？」

それをアイクは責めず強く肯定する。

「そうだ。耳が生えていようと翼を持っていようと爪が鋭かろうとラグズは人だ。あんなたちと変わらない。あんなたちだって大陸の端まで行けば肌や目の色、顔つきが違ってくるだろう。あんなも俺もラグズたちもみんなおんなじなんだ」

「みんな同じ？」

カイルはアイクの話聞きながら昔を思い出していた。

カイルが幼いころ母ユリナはカイルと一緒にアカネイアの絵本を呼んでいた。

「ぼくもマルスのようになる。竜をやっつけるかっこいいいゆうに」

そんなカイルの頭をユリナは撫で、

「カイル、偉いご先祖様を尊敬するのは立派なことです。でもね」

ユリナはカイルの頭に置いた手を止める。決して目をそらさせぬように頭をやんわ

りと押さえ込んだ。

「マルスは竜をやつつけたから偉いではありません。争いを止め国を救ったから偉いのです」

「そうなの？」

「そうです。竜も私たちと変わらない。考え、痛み、行動する。私たちと同じように」  
そう言ってからユリナは再びカイルの頭を撫でた。

カイルはそんな昔を思い出した後ラグズに向き直り、

「すみませんでした。あなたたちラグズを侮辱するようなことを言つて」

そう言つて頭を下げた。

「……いいよ。俺たちも正体を隠しながらこの地で暮らしてた。初めて見るお前たちが驚くのも無理はない」

ラグズたちもカイルを許し、引き下がりにリーダー格の男が歩み寄ってきた。よく見れば人型になつても獣耳と尾が残っている。

「俺はオルン。アイク傭兵団狼の民部隊の隊長だ」

そう言つてオルンはカイルと握手を交わした。

「私もさつきは悲鳴を上げてごめんなさい。主共々深くお詫びします」

それからカーシャもまたオルン達に謝罪する。アイクはそこまで見届けた後話を切り出した。

「王子たちはこれからどうする気だ？ 屍や巨竜が他の町に現れないとも限らん、この安全を確認したら俺たちは旅立ちたいんだが」

「それなんですがおレルアンまでは一本道です。そこまでも一緒にいつて行つてくれませんか？ 僕たちも他の町の安全を確認したい。それに……」

カイルはそこで言いよどむ。

「それに？」

「グルニア王国。そこも確認したいのですね。それにもしその国が無事でおかつ他の町を攻める動きがあればグルニアかその国の関係者が怪しい」

疑問に思ったアイクにセネリオが助言する。

「ユベン王は祖父の親友です。疑いたくはない。それに彼の協力が得られればこれ以上強力な味方はいないと思います」

そう言うカイルの声は震えていた。

逆に敵だったらこれ以上やっかいな者はいないと口から出かかった。

「じゃあ俺もいつて行つてやるよ。王子がアイクと離れた後でもな」



「ルッツ！ ……でも君はご両親のところには」

そう言つてカイルはルッツを止めようとするが、

「いやいや、親父もおふくろも引退したとはいえ自警団の元団長と副長だぜ。今頃ペラティを守ろうと立ち上がっているさ。パレスの生き残りはもうあちこちの村に疎開したし俺もできることをやらなくちゃ。骨共の親玉退治なんて親父たちも羨ましがる大仕事さ」

そう言つてルッツは譲らなかつた。そんな彼らにセネリオは、

「いいんじゃないですか。カイル王子カーシャさんルッツ3人寄せ集まれば僕たちが守る必要もなくなるでしょう。ただし相手は無数の屍です。屍が突然現れて犠牲になつても僕たちが守れなかつたからつて恨まないでくださいよ」

そう憎まれ口をたたきながらもカイルたちの同行を認めた。そこへカイルが言った、「そうだ。僕はもうアカネイアの比護は受けられない。その王子つていうのはやめてくれませんか」

「そうか。身分をしのぶ必要もあるかもしれない、いいだろう、カイル。ならお前も口調も崩してくれ。敬語だと堅苦しくて苦手だ」

アイクがそういうとルッツもセネリオも応じた。

「おう、よろしくなカイル」

「僕は普段この話し方ですから気にしないでください」

そんな中カーシヤは、

「じゃあ、私はカイル様で」

カイルはジト目で突っ込む。

「カーシヤ、城では僕をカイルと呼んだ上にひっぱたいたかなかったか？」

「あ、あの時は申し訳ありませんでした。以後気をつけますから」

「いや……もういいや」

そうして彼らはパレスを旅立つ用意を始め、カーシヤの天馬が無事か厩舎にも寄ったが竜に潰されたかその前に屍に殺されたかどのみちすでに息絶えてカーシヤも徒歩で旅立ちが決まった。

目的地のオレルアンにはすでに竜でも屍でもないある勢力が迫って来ていた。

ルッツ クラス：傭兵

ハロルドとエルフィの息子。アカネイア自警団の団員だった。

オロン クラス：獣牙族・狼

アイク傭兵団の部隊長の一人。

アイク クラス：勇者

アイク傭兵団の団長。ユンヌの加護がなくなったため神将ではなくなったが剛力無双の力は増す一方。アカネイアにない奥義「天空」を使う。

ユベン クラス：ジエネラル

グルニア王国国王。ヴァルムとの交易を武器にアカネイアに強く出ようとしラーズ教団と手を組むがどちらにもグルニアの繁栄と安全のためでもある。

アイクは神将ではなく勇者に戻ったためこの欄に入れておきました。セネリオは賢者のままなので省きます。

## 第9話 氷の王

レフカンディ港町。

「団長お帰りなさい。あら？ 坊やたちも団長と一緒にだったのね」

町には行商人ララベルと彼女を守っているように立つ大男が待っていた。

「ララベル、無事だったか」

「まあ、彼女は殺しても死にそうにないと思っていましたけどね」

アイクとセネリオが再会するなりそう口にした。

「ララベルさん、ご無事でなりようです。本当に傭兵団と知り合いだったんですね」

カーシャはララベルたちの様子を見るなり彼女にそう言った。

「これで信用してもらえたようね。まあ買物どころじゃないようだけど」

ララベルは残念そうに言うがそこへセネリオが割り込んでくる。

「ララベルさん、もう王子に売り込みをしていたんですか」

「ええ、お金持ちとカップルを見つけたらすぐに売りつける。それが商売の鉄則よ。

……あんなことが起こらなければ絶対にくっつか買わせていたのに」

「……まあ街があんな状態では嗜好品を買う余裕もないでしょう。……ですが安心して

ください。彼らも今はうちの団の一員みたいなものです。彼らに支給する分の傷薬も買わせていただきますよ。適正な価格でね」

「今度はシルバーカードは貸さないわよセネリオ君」

火花を散らす二人にあっけにとられていたカイルたちに獣耳がある大男が声をかけてきた。オルンと違い猫科の耳に似ている。

「この二人はいつもこんな風だ。慣れてくれ」

「はい。今日からお世話になるカイルです。よろしくお願いします」

「カーシャです」「ルッツだ」

大男にカイルたちは自己紹介する。

「オルンから聞いた。ラグズを理解してくれたそうだな。獅子の民部隊長のウーゼルだ。途中までも団に入ったからにはあてにさせてもらうぜ新人共」

ウーゼルは鷹揚にカイルたちを歓迎してくれた。

それから夜も更けたころ。

「セネリオ、ちよつといいか?」

「カイルですか。あまり夜更かししないでくださいよ。明日は戦闘になるかもしれませ

ん」

夜も更け、皆が就寝準備をしている中、カイルは書類をまとめていたセネリオに声をかけた。

「戦闘？」

カイルの相槌にセネリオはうなずく。

「蛮族が混乱に乗じてオレルアンに侵入したそうです。西のカダインもいつ知らせが入ってもおかしくないでしょう」

「……！　じゃあ今オレルアンやカダインの人々は？」

「見るも無残な目に遭っているのは間違いないでしょうね」

「じゃあ早く助けないと」

カイルの訴えにセネリオは無情に首を振る。

「軍も同行していた時と違い、一傭兵団では荷が重すぎます。蛮族も総出で侵攻してきているでしょうしね。旅を邪魔する火の粉を払うにとどめておくのが賢明でしょう。僕らの目的は屍や巨竜を操っている首魁を捕まえることなんですから」

「そんな……」

うなだれるカイルにセネリオはでもと言って、

「団長のことです。見捨ててはおけないでしょうね。僕もこの人数で奴らを追い払う策

を考慮しておかなくては」

その言葉にカイルは顔をあげてほころばせるがセネリオは話題を変える。

「それでああなたの用件は何です？　遠慮するだけ寝る時間が削られます。さっさと聞かせてください」

そこでカイルはセネリオの額を見て、

「その額は、ひよつとしてセネリオにも聖痕が？」

「聖痕？　そんな御大層なものじゃありません。先祖の誰かがラグズと子をなしたためにできた呪いのようなものですよ」

「ラグズと？　あ、いや……」

カイルは昼間のオルンとのやり取りを思い出し謝ろうとする。

「いいですよ。差別意識がどうか言うつもりはありません。獣姦に嫌悪感を持つのは人として当たり前のことでしょう」

「いや、彼らは人だ。獣じゃない。やっぱりごめん。謝らせてもらおうよ」

そう言つてカイルはセネリオに頭を下げる。

「……まあ僕のごことはここまでにして、カイルのは聖痕と呼ばれているのですか。興味はありませんが隠している気にさせるのも今後に悪い影響がありますし、話したいなら聞きますよ」

「ああ、僕の母の家系にも額にセネリオみたいな痣が出るらしいんだ。母はこの大陸に来てからも家訓でサークレットで聖痕を隠していたんだけど、僕の目に聖痕が出ているとわかってからは人前でも聖痕のある額をあらわにするようになった」

「なるほど、子供が堂々と聖痕を見せられるように自分からというわけですか。見えている右目を隠して生活させるわけにはいきませんからね」

「僕の聖痕は、先祖様が竜の血を受け入れて顕れたものらしいんだ。だからセネリオのものとは違うのかもしれない」

それからセネリオはしばらく考え込んでいたがかぶりを振り、「気休めですか。受け取ってはおきますよ。用が済んだらそろそろ寝てください。寝不足で戦死するのは構いませんが食費分は働いてもらわなければ」

「はいはい。おやすみセネリオ」

すでにセネリオの憎まれ口に慣れたカイルは手を振り床へ戻っていった。

その後ほどなくセネリオも書類を片付け就寝する。自らの額をさすりながら。

日が明けてオレルアンの光景に傭兵団は閉口した。



町は平穩無事でむしろ屍に備えて弓や斧を持った兵士が巡回していた。

「……」

「ま、まあまあセネリオさんも神様ではないですし。偵察もせずに油断しながら町に入るよりいいですよ」

予想外の平穩に絶句するセネリオをカーシャは懸命に励ました。

「ま、屍が出るかもしれないのは変わらないしな。とにかく町に入ろうぜ」

肩をすくめながらそういうルツツをアイクが制した。

「いや、蛮族が入って来ているのは本当のようだ。あの斧兵、俺たちと戦った蛮族の集団にいたやつだ」

アイクの視線を追って兵を見てみると確かに斧を持つている兵士のほとんどはオレルアンの服を着ているが慣れていないらしく向きが逆だったり、上の服や履物の裾をまくって手足をあらわにしているものも多い。

「とにかく町に入るぞ。武器はしまつていいがいざというときは逃げられるように心がけておけ」

アイクのそんな命令を受け傭兵団の中からアイク、セネリオ、カイル、ルツツ、カーシャが町に入りオロンとウーゼルが他の団員の監督をするために待機することになった。

町に入つて散策していると弓兵がアイクたちに声をかけた。

「あなたは……アカネイアのカイル王子ですね？」

「え、ええ、そうです。あなたは？」

突然話しかけた弓兵にカイルは身分を伏せる事にこだわるあまり自分を知っている者相手に身分を隠すのもどうかと判断しすぐに打ち明けた。

「私はオレルアンの兵士だったもの。パレスが滅びた報を受け今は氷の部族とともに町を守っています」

「氷の部族？」

氷の部族とはオレルアンの北にある氷竜神殿のある氷山に点在する集落を拠点にしてきた北の蛮族の一角だ。度々オレルアンへの侵入を試みオレルアン軍やアイク傭兵団に撃退された。

「あなたはもしや草原の民？ まさか蛮族と手を組んで町を占拠——」

カイルの疑問に弓兵は首を振り、

「いいえ、それなら町には火の手が上がっているでしょう。先も言いましたが我々は町

を守っているのです。王子、一度オレルアン宮殿にお越しく下さい。我らが主と「氷の王」にお会い願いたい」

「……？」

一同は首をひねった後考える時間をもらいセネリオとカーシャが町を見回った後彼らの長に会ってみることにした。アイクに加え市街で待機しているオルンやウーゼルも護衛につけたうえで。

オレルアン宮殿。アカネイア連合元首がこの国を訪れた時は王宮として、パレスや他の国にいる間は総督府として町を運営している場所である。

「カイル王子、ご無事でなりより」

「おっ、この間の傭兵さんも一緒か」

宮殿ではターバンを巻いた中年の男と若い女剣士がカイルたちを出迎えた。

「あんたは、蛮族たちの中にいた——」

アイクの問いに女剣士がうなずく。

「アイネだ。氷の部族つてところから来た。あの戦いのことは気にしちやいない。むし

ろそのおかげで前の王を倒せたからね」

アイネの言葉にまだ首をひねるアイクを横目に男はカイルに向き直る。

「草原の民をまとめ宮殿では顧問として働いていたザガットです。ああ、ご安心ください。アイネは味方です。彼女が部族を取りまとめ町を警護を請け負ってくれてます」

「そんな……アカネイアの許可も取らず、これは反乱ですよ」

そう詰め寄るカイルをザガットは手で制す。

「王子、いやカイル様。もうアカネイアは滅びました。オレルアン総督も引きこもってしまつた。もう我々だけで屍や巨竜に対処するしかない。そう決意しているところへアイネが我々と先の取引を持ち掛けてきたのです」

「でも……くっ」

アカネイアは滅び総督にオレルアンを守る力はない。そう言われカイルは何も言い返すことができなかつた。そこへアイネが灰色の髪をたなびかせ話に入ってくる。

「私は元々力づくで住民を殺し町を奪うやり方に反対だつた。だけど今までは前の王に逆らえる奴がいなくてね。そこへアカネイアが派遣した傭兵が「氷」の軍を追い払い、前の王に深い傷をつけてくれたんだ。そして私が王に決闘を申し込み倒した。それから私が氷の王だ。逆らう奴も倒した」

「まるでラグズのような王の決め方ですね」

アイネの説明にセネリオがアイクにひっそり囁いた。

「それから屍が暴れまわる騒ぎが草原で起こっていることを聞いて用心棒をする代わりに町に住まわせてくれないか頼んだのさ」

「兵士も民も多数の犠牲が出た中で蛮族とはいえ屈強な戦士を迎えられるのは私たちにとつてこの上ない吉報でした。以来氷の部族と草原の民で力を合わせて町を守っているのです」

カイルは歯噛みし、カーシャとルツツも口をぽかんと開けている。だがアイク傭兵団の団員たちは受け入れたようだ。

「まあこんな時に民族の違いで争っている暇はないだろうな」

アイクが首肯している横でセネリオはふと考え、アイネに尋ねる。

「オレルアンの治安が保たれているのはわかりました。ただお隣の「砂の部族」はあまりいい噂を聞かないのですが。昔からカダインの町を狙い襲われた村では虐殺や略奪が横行しているとか」

「ああ、ポールは砂の部族内でも無法者で有名だからね。件のカダインに入ったって話も聞く。相当ひどいことになってるだろうよ」

話をしているセネリオたちの間にカイルは割り込んだ。

「そんな、すぐに助けに行かないと！」

だがセネリオの表情は硬い。

「昨日一傭兵団では荷が重いと云ったはずですが」

そこへアイクが。

「セネリオ、確かに傭兵団だけでは数に違いが多すぎる。だが氷の部族に協力してもらえばどうだ。アイネ、あんたら「氷」とやつら「砂」の間で戦いが起こっていたって聞いたことがある。ケリをつけるには絶好の機会だと思おうが？」

「ふむなるほど、だが私たちは極寒の地を離れて安住の地を手に入れたばかりだ。「砂」とやり合う利点はない」

そこでアイネはふとザガットとカイルを見て続けた。

「だが、アカネイアが滅びアカネイアからの貴族が役に立たない以上オレルアン人はいずれ国を作る必要があるだろうね。しかし屍がはびこっている中草原の民が「草の部族」として私たちと戦うわけにもいくまい」

「む……」

アイネの言葉にザガットはうなづいた。

「どうだいアカネイアの王子様。「氷」も「草」もともに共存する新国家を認めてくれ。カダインもその領地に入れていいっていうなら私たちの国の領土を荒らす「砂」どもを追

い払ってやるよ」

その言葉にカイルはうなり聞き返した。

「カダインは砂漠だ。オアシスとはいえそこを併合してあなたたちに得はあるのか？」

「カダインをはじめ西の町はヴァルム大陸と交易しているだろう。今この大陸では資源や食料を採る余裕がない。それらを交易で補う必要がある。あんたらがお国を復興させて必要になった分も口利きしてやるよ」

「……むむ」

蛮族は追い払うべき外敵。そう教え込まれてきたカイルはうなるがザガットと同じく彼女の言葉は理に適っている。なによりオレルアンの民が安心して暮らしていくためには草原の民と氷の部族が守ってくれる環境が必要だ。もうアカネイアによる統治にこだわっている理由はない。そしてカダインを救うための戦力を増やすためにも。だがそこへザガットが待ったをかけてきた。

「待てアイネ。新しい国を作ってカダインを併合して交易をおこなうのはいいが王はどうやって決める？ まさかお前が王になって私たちを支配する気じゃないだろうな？」

そこでアイネは肩をすくめて聞き返す。

「お前たち草原の民はどうやって王を決めるんだ？」

「……むむ」

ザガットは答えられない。草原の民はオレルアン王国建国以来奴隷にされ、ハーディンに開放され重用されてからも臣下としての身分を保証される代わりに自分たちが治める国や王というものがなかった。ザガットのような交渉事が得意で自然とまとめ役を務めるものが出てくるのみだ。

「ふむ、解らないか。ならば力で決めるといい。私たちは強いものが王になる。お前たちが私たちのやり方に不満を持った時はお前たちの誰かが氷の王を倒し、国の王になるといい」

「……部族のものと話し合う時間が欲しい」

そう言つてザガットは引き下がった。そしてアイネはカイルに話を戻す。

「で？ どうだい。新国家承認とカダイイン割譲は？ あんまりぐずぐずしているとカダイインは「砂」の町になっちまうぞ」

「わかりました。亡国中の身ですがアカネイア王子としてオレルアンとカダイインを治める新国家を承認します。ですからどうかカダイインを救うためにあなたたち氷の部族のお力をお貸しください」

ウーゼル クラス：獣牙族・獅子



アイク傭兵団 獅子の民部隊の部隊長。

ザガット クラス：ホースメン

オレルアンの先住民族「草原の民」のまとめ役

アイネ クラス：ソードマスター

前の王を倒した現在の「氷の部族」の王。豪胆な性格だが蛮族の中では穏健派。

## 第10話 建国

カダインは砂の部族が侵入し、蛮族が略奪の限りを尽くし男はすぐに殺され女は犯されさらわれるか事後に殺されるか20年前の侵略より凄惨な光景が町中で広がっていた。

カダイン市長官邸。

20年前同様酒をかつくらう砂の王ポールの前に一人の男が面会をしていた。

「王、ここはもう俺たちの町です。だから俺たちのしもべになった住民を殺す必要はもうないんじや——」

ブオン！

言い終わらないうちに男の頬を斧がかすめる。

「ふざけたこと言うんじやねえ！俺に意見していいのはジャスミンだけだ。だがあいつは死んじまった。だから俺はもう誰の話も聞かねえ」

そう言つて酒を飲むポール。部屋の外廊下には腐敗し始めた死体が捨て置かれていた。20年前とは違い一度犯した後は美しい女でもすぐに殺した。それ以来ポールは官邸にこもつて酒浸りだ。

「ぐう……」

男はもうポールに対して声を出すのも恐ろしくなつてその場を離れた。

アイク傭兵団と氷の部族はオレルアンでの交渉成立後ただちにカダインへ向かつた。オレルアンを留守にし別の蛮族と戦うわけにいかない草原の民はオレルアンにとどまつた。

カダインに到着した傭兵団は町の光景に目を覆つた。特に略奪の場面に初めて遭遇するカイルたちは。自らも略奪を行ったこともある氷の部族は冷淡に眺めていたが。

セネリオはカイルたちが落ち着くのを待つてカーシャに声をかけた。

「カーシャ、馬には乗れますか？」

「は、はい。でも天馬はパレスで死んじやつて、オレルアンも見て回つたんですが天馬はマケドニアでしか飼育されてなくて——」

「知っています。とにかく馬に乗れますか？ 天馬でなくとも」

カーシャはこくこくうなずいた。

「ではオレルアンで買った馬に乗ってください。ただし戦闘はしないように。カイルとルッツは二人で行動し共に戦ってください。決してお互いから離れないように。狼部

隊と獅子部隊は新人たちを狙ってきた敵を優先的に倒してください。氷の部族の皆さんは僕の指示を聞く気がありませんよね？ では各自の判断で戦ってください。敵は斧兵ばかりですしむしろ剣を使うアイネさんは有利でしょう」

「ああ、屍が現れ始めてから剣は斧を持つ奴に当たりやすくなったんだっけ？」

セネリオの説明にアイネは応じる。

三すくみ。特定の武器や属性魔法は特定の武器・魔法に当たりやすく当たりにくかったりするユグドラル・テリウス大陸の現象だ。しかし巨竜や屍が現れてからアカネイアでもこの2大陸同様三すくみの現象が起こっていた。

セネリオが指示を出し終わるとラグズは順次化身を始める。さすがに氷の部族もひるむがアイネの一喝で取り直した。カイルたちもあわてて準備をはじめてアイクは剣を掲げ、

「アイク傭兵団、突撃！」

「なんだあいつらは？ げっ！ 獣の大群がこっちに向かってきやがる」

蛮族たちは突然現れた狼や獅子に腰が引き逃げ出すものまでいた。

「はあ！」

「せいー！」

キーン！ ガツ！

カイルとルッツは二人連れで蛮族と交戦するが蛮族にとっては戦場に紛れたただの子供だ。

「邪魔なガキどもだ。踏み潰しちまえ」

蛮族たちはカイルたちに群がってくる。そこへ、

「ガアア！」

ガリ！

「ギャツ！」

獅子は蛮族の一人を抑え、牙を立てた。

「く、食わないでくれ」

「ニンゲンを食う趣味はない」

そして獅子が言葉を発した瞬間、蛮族は失禁し気を失った。

「ぬうんっ！」

ドオオン！

「ぐあああー！」

カーシャを狙って10人以上の蛮族が押し寄せてきたがアイクの一振りでも衝撃波が生じ斬られた相手だけでなく周囲にいた5・6人が吹っ飛んでいく。

(あの噂本当だったんだ)

アイクに守られながらカーシャはそんなことを考える。

「アイクさん、これが傷薬です。決して無茶はしないで」

「ああ、カーシャも運搬だけに専念しろ。決して戦おうとするな」

「はい。アイクさんもご無事で」

戦いに参加せず本陣と戦闘要員の物資運搬に専念するようにカーシャに厳命されていたのはカーシャが無力だと言ってるわけでもないし、経験が浅いからと言って戦いから外すほどセネリオは甘くない。

天馬と地上の馬では視点が違ってくるため、天馬騎士を普通の馬に乗せる時は戦わず運搬をさせた方がよかった。

「はっ！」

「ぐっ……こんなガキに」

カイルの一本刀で蛮族が倒れる。

そこへ獅子の目をかいくぐった別の蛮族が迫ってきた。

「おらあ！」

カキン！

対応しきれずカイルは剣を取り落とす。

「せえ！」

「ぐあ……」

そこへルッツが蛮族を切り捨てる。

「ありがとうルッツ、助かった」

「戦場でいちいち礼を言うな」

そう言つてカイルとルッツは戦いに意識を戻し獅子と狼が彼らを囲むほとんどの敵を倒していく。

そんな彼らを酔つた男が発見した。

「あの剣さばき……ジャスミンを殺した奴の……奴のガキつてところか」

町中の騒ぎを聞きつけて手下の喧嘩だと思つて手打ちにしてやろうと官邸から出てきたポールはカイルの戦いぶりを見て一気に酔いがさめた。

「ぶつ殺してやる！」

敵の中にはポールがいつかねじ伏せてやろうと決めていた氷の部族がセネリオの指し外で遊撃していたが彼らのことは逆上したポールの頭の隅に入っていなかった。

「キャッー！」

運搬をしていたカーシヤの前に現れたのはスキンヘッドの一人の蛮族だった。

「……」

「くっ！」

戦うなど命令されたがそうも言つてられない。カーシヤは槍を構えた。

だが男はカーシヤに斧をむけずうつつむいたままだ。

「殺してくれ、もうこんなことには耐えられない」



「え？」

カーシヤは思わず槍を落としそうになった。カーシヤもカイル同様蛮族は略奪のことしか頭はないひとでなしたと言いつい聞かされてきた。

「俺たちは痛い日光を遮られる屋根と水を求めて町に来ただけだ。なのにこんなむごい真似を。もう死ぬことでしか償えない」

男の言葉と周りに他の蛮族がないことからカーシヤは戦意を亡くし男に尋ねた。

「あなた自身は略奪は？ 町の人から奪ったり、殺したりは？」

男は黙って首を振った。

「あなたには愛する人がいるの？」

「え……」

男は突然の言葉に思わず顔を見上げる。

「蛮族にしては優しそうな人だから……どう？」

「カミさんとかはいない。でもおふくろのことは好きだよ。親父が誰なのかもわからない俺を苦労して育ててくれた」

「そう、いいお母さまね。ねえ私たちと一緒に戦わない？ 戦争で泣くのはお母さまの

様な女や子供ばかり、私たちはこんな戦いを終わらせるために戦っているの」

「戦いを？」

カーシャはうなずいて男の答えを待った。

「……ああ、ひよつとしたらここで勝つても俺はこの町で処刑されてしまうかもしれないが、許してもらえたら俺はあんたたちのもとの働き続けるよ」

「あなた名前は？」

「ザンザ…ザンザだ」

そう言うつてからザンザは斧を担ぎ上げ蛮族を倒しに行く。平時で喧嘩を売り買っていた時はともかくこの非常時に裏切られた他の蛮族は大いに慌てふためいた。

「グオオ！」

ザンツ！

「邪魔だ！」

獅子の頭を勝ち割りカイルへ迫ってきたのはポールだ。

「？ ……！」

別の蛮族を倒したばかりのカイルがポールの接近に気付いたのはポールが獅子を振り切りカイルに斧を構えた時だ。

「カイル！」

ルッツはカイルをかばおうと前に出ようとした。20年前にジェイクスがクロスをかばった時のように。

だが――

シユツ！

「ぐ……」

カイルが蹴り上げた砂がポールの目に入る。思わずポールは目をつむり標的を見失った。

「やあー！」

ザシユ！

「ぐえ……」

カイルの一閃がポールの胸元を切り付ける。だが、  
「今だ。死ねおらー！」

激痛もいとわずポールはカイルに斧を振り上げる。

『ふきあれよ！ ふぶきのこくとく！ トルネード』

「がつ……」

ポールは突然吹き荒れた竜巻に切り刻まれ息絶えた。

「世話の焼ける新米ですね。一撃入れたからって仕留めたと早合点しないでください」

後輩を叱ったのはトルネードの詠唱を唱えたセネリオだった。

戦いが終わりアイク傭兵団と氷の部族が合流した。

彼らに捕らえられた捕虜の中にはカーシャに説得されたザンザもいる。戦闘後ザンザ自らの意思でカーシャに両手に縄をかけさせ捕虜の待遇を望んだのだ。

「あんたたちは町の人間に引き渡す……と言いたいが」

捕虜に声をかけたアイクはそこで言葉を切る。

町は砂の部族に荒らされ捕虜を収容する場所も裁く人間もいなかった。オレルアンに連行したいが傭兵団としてはそろそろ他の町を見て回りたいかった。

「アイネ、彼らの連行を頼めるか？俺たちは南の町へ屍が現れてないか見回りたい」  
「待ってくれ、その前にこいつらとはやる必要がある」

アイクの頼みをアイネはすげなく置いておいた。

「この中で一番強い奴は誰だ？」

アイネの問いに捕虜たちは顔を見合わせる。誰も名乗り出る者はいなかった。そんな中、

「俺だ！俺はポールの次に強かった。そのポールは死んだ。俺がの中で最強だ」  
捕らわれの身にも関わらず最強を名乗るザンザ。そう言うことでアイネの気を引き  
自分に最も大きな裁きを下させようとしていた。そんなザンザにアイネは剣をむける。  
「やめてアイネさん！ザンザはいい人よ。自分の仲間がやったことを自分が犯したか  
のように悔いていた」

カーシヤはアイネに激しく言いつのるがアイネは意に介さず。

シユツ！

シユル

「えっ！」

アイネは瞬時にザンザの後ろに回り彼の後ろ手を縛っていた縄を切った。

「どうして？」

思わず尋ねるザンザにアイネは氷の部族の仲間に顎をむける。

ザン！

氷の戦士はザンザの前の地に斧を放って投げた。

「お前の獲物は斧だったな。取れ。氷の王の私と砂の王のお前。どちらが双方の部族を  
治めるのにふさわしいか決着をつけよう」

「……」

ザンザはしばらく斧を見つめる。拒否して殺されてもかまわない。そう考えていた。だがアイネはそんな非暴力も認めてくれなかった。

「戦うのが怖いかな？ だったらお前が「砂」で最強というのは大ボラだ。本当に強い奴を探そう。お前か？ それともお前か？」

アイネはそう言つて他の捕虜に剣を突き付け始める。

「ひい」「俺は違う」「お、俺じゃねえよ。武器を持った相手を殺つたこともない」

他の捕虜はザンザの様な覚悟を持ち合わせておらず、中には自己弁護というには逆効果なことを口走るものさえいた。

「わ、わかつた。あんたと勝負するよ。だが手加減はするな。一思いに決めてくれ」

見ていられずザンザは斧を取りアイネに向かつて構えた。

「わざとやられたとみなせば他の奴も殺すからな」

アイネはザンザにわざと負けることも許してくれなかった。

「はあ！」

ザンザはアイネに向かつて斧を振り下ろす。

シュ！

アイネは瞬時にザンザの後ろに回る。

「そこだ！」

ザンザはそれを予想して真横に斧を振るう。斧はちょうどザンザの後ろで止まった。「！」

だがアイネはそこにいなかった。

そして横からザンザの首元に刃が突かれる。

「勝負あつたな」

アイネは息切れも見せずザンザに完勝した。

「ふう、あんたには弱すぎると思っただろうが俺は本気で戦った。あんたは速すぎるし強すぎる。元から勝負にならなかったよ」

アイネは剣を肩に置き、

「あれで本気か？ ……まあいい。今は剣と斧では剣の方が有利らしいな。それで勝ったからには「砂」は「氷」に従うということでもいいな」

「ああつ……」

「ザンザとやらの異存はないようだ。で？ 他の「砂」は？」

「氷万歳」「アイネ様バンザイ」

ザンザだけでなくアイネに目をむけられた捕虜たちも服従に同意する。

「これで「氷」も「砂」もそしてオレルアンにいる「草」も一つの部族だ。王子、約束を覚えているな？」

急に話をむけられたカイルは慌てて返事を返す。

「あ、はい。新国家の承認とカダインの割譲ですね。覚えています」

そして表情を引き締めてアイネに告げる。

「ですがカダインの害を加えないこと。これは譲れない条件です。オレルアンを裏切ることも許さない。あなた方の決まりで王を決める際の決闘があるなら百歩譲って刃傷沙汰もやむをえませんが相手を死なせないことように気をはらうこと。もし破ればあなたたちと戦うことも辞さない」

そんなカイルの宣告にアイネは手を振りながら、

「わかっている。言っただろう。私は略奪には反対だったって。苦勞して住みよい場所を手に入れたのに「草」とぶつかる気もないし交易のためにカダインの港を直す必要がある。飯の種を壊してどうすんのさ」

「だったら言うことは無い。オレルアンとカダインをお願いします」

カイルとアイネは握手を交わす。

それからアイネは一同から離れ皆に宣言する。

「これからはここは「フェリア王国」だ！ 私は現行統一王として屍から民を守ることを誓う」



旧マケドニア王国ドルーア地方。

かつてメデイウスが城を築いていた場所にはドルーア駐屯部隊のための砦が建設されていた。

その宴会などに使われる広間はグルニア王宮から玉座が運ばれ即席の謁見の間となっていた。

グルニア重臣からは王宮としての増築が終わるまで待つてはと言われたがユベンは屍の恐怖が蔓延している中で贅をむさぼるわけにはいかないと断った。

今この場にはグルニアを中核とした新国家の上級騎士、貴族そして元グルニア王族が集められていた。そこでマケドニア総督がグルニア王ユベンにひざまずいていた。

「立て、わが友よ」

ユベンは玉座から立ち上がり総督に手を貸す。

「私などにもつたいない。新しきわが主君よ」

そう言いながらも自ら王と認めた主の手を拒むわけにもいかず手を引かれ立ち上がる総督。

「王を失った我らが地を受け入れてくださったこの御恩、命にかけてお返しいたします」  
「借りがあるのはこちらの方さ侯爵。無血でマケドニアを開城してくれたおかげで我ら

は新しい国を作ることができた」

「そう言い総督の肩をたたき笑いかけるユベン。そこへ一人の壮年騎士が王に報告する。」

「父上、アリティア地方の総督も我が国に参加することです」

金髪の騎士は元グルニア王子、そして新国家の皇子ユルゲン。

ユルゲンの報告にユベンは気分を良くし、高笑いをあげそうになるがこらえる。

（私……いや余は大陸の新たな指導者なのだ。竜が逃げ出すほどの威光を見せねば）

「ご苦労。ユルゲン、そなたも列席に加わるがよい」

ユルゲンと元総督はユベンに一礼して式典に招待された客の中に加わる。その中には皇女ユミスそして異界教皇クラウディウスも参席していた。

ユベンは後の戴冠のための司祭を横に控えさせて軍馬の紋章を彩った旗をたなびかせた玉座の前に立ち、

「今この時よりグルニア・マケドニア・アリティアの地は一つの国となった！ この軍馬の前にはあの巨竜もひれ伏す。竜も屍も制しアカネシアに代わり我々「ペレジア帝国」が大陸に新たな秩序を作る。ペレジアばんざーい！」

「ペレジア帝国万歳！」「ユベン一世皇帝陛下ばんざーい！」

怒号ともいえる歓声の中、ユルゲン・ユミスは怖れを抱いて式を見守り、クラウディ

ウスはただ慙懃な笑みを浮かべていた。

ザンザ クラス？ 蛮族

砂の部族の戦士。心優しく部族の行いに罪悪感を感じていた。

ユルゲン クラス？ パラデイン

元グルニア王子。正義感が強いが父への忠誠心も強く怪しげな教団への不信を訴えるも自ら行動をおこしてまで追放できずにいる。

ユミス クラス？ 司祭

元グルニア王女。心優しく父の苦渋も理解し教団を訝りながら表立って邪険に出来ずにいる。20年前までクロスの婚約者だった。

## 第11話 ペレジア帝国

式典が終わって厳しい表情で通路を歩いているユルゲンを黒髪の壮年騎士が呼び止めた。

「ユルゲン皇子。ペレジア帝国建国おめでとうございます」

彼の名はジェルド。グルニアの將軍の一人でユルゲンの腹心の一人。そして皇女ユミスの夫でもありユルゲンにとっては義弟にもあたる。

「そうかしこまるな。ユミスと結婚する前からお前のことは弟のように思っていた。それに——」

そう言つてユルゲンはあたりをうかがいジェルドを隅に引き寄せた。

「あんまりめでたい気分ではない。この式も奴らのお膳立てによるものだと思うとな」

ユルゲンの言葉にジェルドも声を潜めて返す。

「あの異界から来たとかいう教団の連中のことですか？」

ユルゲンは首を縦に振る。

「パレスを巨竜や屍が滅ぼした直後に奴らは父上のもとに現れた。奴らが竜を操つてい  
ると思うと私は糸が切れかけたシャンデリアの下にいる気分だ。それもこの城を吹き

飛ばす爆薬のついたシャンデリアのな」

「……」

ジェルドは息をのむ。ユルゲンは続けた。

「新帝国の熱気に浮かされるな。いざというときのためにいつでも戦える心構えをしておけ」

「それは……アカネイアの生き残りですか？ それとも奴らと？」

「両方とだ。今のアカネイアを蹂躪したくはないがアカネイアの巨大さに頭を垂れ続けていた父上がようやく掴んだ栄光の邪魔をするものを許す気にもなれん。奴らについては言わずもがな。ユミスのためでもある。頼む」

真剣に自分の目を見つめるユルゲンにジェルドは言葉を返さずになぜユルゲンはジェイドの肩をたたく。あたかも今の会話で新帝国建国を祝っていたかのようなそぶりを装って。

カダインを解放しフエリア建国を見届けたカイルたちはアリティアに向かうアイク傭兵団や砂の部族の捕虜をオレルアンに連行する——死んだほうがましだったと思え

るくらいの労役につけるらしい——アイネたち氷の部族と別れグルニアへ旅立った。カイルたちは少数だ。グルニアがクロだったとしても決して闘おうとしてはならないとセネリオに強く言い含められ連絡用にヤクシの石をもらった。この石を持っている者同士なら相手を念じるだけで長距離でも会話が可能になるらしい。

「外にはこんなものがあるのか。とても信じられないな」

ヤクシの石を疑っているのはザンザ。アイネから他の捕虜とは別にカイルたちのもとで馬車馬のように働くことを命じられ彼らと同行している。カーシヤの好意で拘束されてはいないが。

「パレスにもねえよ。魔法つてやつか？ 俺も嘘としか思えんな」

ザンザに同意してヤクシの石に疑念のこもった視線を向けるルッツ。

「そうだな。ちよつと試してみるか」

二人だけでなく自らも半信半疑だったカイルはヤクシの石を握り傭兵団の中で石を持つているだろうセネリオの名を念じる。

（セネリオ。聞こえるか？）

返事はすぐに返ってきた。

（カイルどうしました？ いえ言わなくても結構。石が信じられないから試してみたの  
でしよう）

速攻で見透かされる。セネリオ達はアカネイア語に十分長けているが思念同士の対話のためか口頭より流暢に聞こえる。

(はは、さすがにお見通しで)

(ヤクシの石の効力はこれでわかりましたね。では僕たちも暇ではないので試しはこれきりにしてください。今アリティアは新国家とやうに統合されて大変なことになってますから)

「新国家!」

セネリオの思いがけない報告にカイルは声をあげて驚く。周りの仲間も怪訝な目でカイルを見ていたがカイルにとってはそれくらい大きな衝撃だった。

アリティアは英雄王マルスそしてマルスより百年前の個の英雄アソリの故郷である。王朝交代後歴代アカネイア王は代々即位後はアリティアに赴いて祖先の墓に報告と国家への滅私奉公の誓いを立てる習わしがあるくらい現アカネイア王家にとって精神的な母国だった。

(何でもペレジア帝国だとか。まだ戦闘にはなっていないかもしれませんがそちらでもグルニアがペレジアの領土になっても驚かないでください)

戦闘になっていないことに安堵しつつカイルはセネリオに尋ねる。

(グルニアがペレジアに? じゃあグルニアは巨竜とは無関係で侵略を受けているって

ことか?)

若干間があつた。おそらく向こうではセネリオが心の中で首を振る仕草をしていたのだろう。

(わかっているのはどこかの国がアリティアを吸収してペレジア帝国を名乗つたというだけです。マケドニアかそれともグルニアか。マケドニア総督とグルニア王。巷の風聞では疑わしいのはグルニア王の方でしょう。むしろ疑いは強くなつたとみるべきかと。くれぐれも気を付けてください)

(ああ、セネリオたちも気を付けて。アイクによろしく)

カイルが念話を切つて石をしまうと仲間たちが声をかけてきた。

「カイル様、アイクさんたちと通じました?」

カーシヤが尋ねてくる。

「うん、セネリオと話ができたよ」

「で、新国家つてなんだよ? 端から見ると危ない奴だつたぞお前」

カイルを心配しながらもルツツはそんなことを言ってくる。

「ああ、あまりのことでない。そのことなただけどみんな聞いてくれ」

そう言つてカイルはペレジア帝国のことを皆に話し現地に着いても動揺しないように言い聞かせた。



グルニアの市街に到着したカイルたちは情報収集を始めることにした。酒場にはザンザが、カイルたち未成年は散会して市街の店を回ってみる。

街に入る前にカイルは聖痕を隠すため右目に眼帯をつけているが治安が悪化し怪我人が多く出ているのご時世怪訝に思うものはいなかった。

そんなカイルに一人の女商人が話しかけてきた。

「はあいー、あなた旅人でしょう？　今は傷薬や武器なしでは外出できないわ。お金なんて命には代えられないわ。惜しまずにここで買って行きなさい」

整っている容姿だがララベルと違って美人というよりかわいいと言った方が似合う赤毛の行商人だった。

「うっ……ごめん。僕一人で決めるわけにはいかないんだ。仲間たちと相談して必要だと思つたらここに来るから待つててくれないか」

「あら、気品があるし旅の貴族かと思つただけど。いえ貴族だからこそしがらみがあるのかもしれないわね。わかつたわ。決めたらこの市場に来なさい」

商人はすんなり納得し他の客へ売り込みをかけようとすがそこへ、

「あつカイル様！　ここにいたんですね。……つてまた美人に押し売りされかけてるんで

すか？」

あきれた様子でカイルに声をかけたカーシヤがやってきた。

「い、いやこの人武器や薬を扱っているみたいなんだ。僕たちの旅には必要だろう。それに仲間と相談して決めるってちゃんと説いたんだ」

「武器と薬ですか。確かに危険地帯を少数で動く私たちには必要ですけど」

そう言葉を交わすカイルとカーシヤを商人はしばらく見て

「もしかしてその少年。君、右目に模様みたいなのが入ってない？」

「えっ？」

商人の問いかけにカイルたちはぎくりとして振り返る。商人はそんな二人を見て答えも聞かずに話題を変える。

「そう、あなたたちがカイルとカーシヤね。ララベルから聞いているわ」

「ララベルさんと知り合いなんですか？」

カイルは驚いて商人に近づき言った。

「ええ、行商人は商売のためなら商人同士でも取引をするものなのよ。彼女は私の好敵手にして上客でもあるわ」

「ほんの1月の間でアカネイアとグルニアを行き来していたんですか？　しかも屍がたむろする中で、行商人ってたくましいんですね」

何でもないことのように言う商人にカーシヤは気圧された。

「それほどでもないわよ。私が旅をしてこられたのもここにある武器と薬のおかげね。恋を自覚する前に死別なんてことにならないようにここでちゃんと準備をしてきなさい」

ちやつかりと商品売り込む商人にカイルとカーシヤも苦笑し、カーシヤはふと尋ねた。

「わかりました。他にも連れがいますので彼らの分も見てもらいます。商人さんのお名前は？」

「アンナよ。この街だけでなくいろいろな町で商売しているわ。辺境にも出歩きしているから物資が足りなくなったらアンナさーんって叫べば現れるわ。……運が良ければ」  
らしくもなく小声で付け足すアンナにカイルは首をひねりつつもふと思いつき尋ねる。

「……？ そうだ。大陸中を回っているならかなりの情報を持っていますよね？ グルニアの情勢を教えてくださいませんか？ できればアリティアとマケドニアについてもなんでも知っている限り教えてください」

「それなりに取るわよって言ったら？」

「うっ……装備のこともあるのでお安くして頂けると」

カイルは引きながらも値切りを試みてみる。

「冗談よ。お客様に道中で死なれても困るわ。サービスしてあげる」

アンナは笑い飛ばすとふいと表情を引き締め、丸めた紙をカイルに握らせる。

「でもあなた、アカネイアの王子様って話よね。ならここではやめておいた方がいいわ。他の連れの装備も見てみるって言ってたでしょ。それうちの店でやるから日が傾く頃に来なさい。情報はその時に、下手に町の人から聞き出そうなんて思わないで」

真剣な表情でそう言うアンナにカイルもカーシャもそろってうなずいた。

仲間たちと合流したカイルたちは夕方になってからアンナに持たされた紙に記された店にやってきた。

「いらつしやいませー！ 強い武器も酷い怪我に効く薬も何でもそろってるわよー」

一同をアンナは出迎え早速商品を見せてくる。

「おっ！ この剣。鋼でできてる。今じゃ店で手に入ることなんてないぞ」

「この斧もだ」

ルツツとザンザはアンナが出した武器に目を輝かせている。

「これくらい私のつてを使えば楽勝よ。マケドニアに進出する頃には銀も仕入れて見せるわ」

「マケドニアに？　まるで今のマケドニアの方がグルニアより栄えてるような言い方ですね」

アンナの意気込みにカーシャが疑問をはさんだ。

カーシャはマケドニアを大切な故郷だと思つてゐることは確かだが未だに山岳が多いマケドニアは交易で栄えてゐるグルニアより遅れてゐると知つていてコンプレックスを持つてゐるのも事実だった。

そんなカーシャの心を知らずかアンナはあつけらかんと答える。

「今の帝都の南にあるからね。王様……じゃなくて皇帝もよくマケドニアの街を訪れてゐるらしいわ」

「帝都？　皇帝？」

アンナの口から出た聞きなれない単語をカイルは反芻する。

「ええ、知らなかつたようね。グルニアの王様はマケドニアとアリティアを併合してマケドニアの北の砦に移住したの。昔暗黒竜の居城があつた場所ね。ドルーアだったわけ？　いえ今では帝都ペレジアつて呼ばれてゐるわ。もつとも砦以外は小さな町があるだけだから都の機能はマケドニア市が担つてゐるわ。だから今の大陸で一番栄えて

いるのはマケドニアなの」

「……」

セネリオが言った通りグルニアはアリティアを併合していた。いやマケドニアも併合され新しい都扱いになっている。だがマケドニアが栄えていると言われてもカーシャの顔色はさえなかつた。

「併合って、マケドニアがグルニアに侵略されたってこと？ お父さんとお母さんは？」

「ライトは？」

ライトとはカーシャの弟の名前だ。カーシャはマケドニアの繁栄より家族の安否を心配した。

「侵略ではないわ。アカネイアの王様が死んじやってマケドニアに赴任していた総督はあっさりとグルニアとの併合に合意したの。圧政も起きていない。むしろ軍隊は住民を守ろうと頑張っているみたい」

「……」

カイルは複雑な思いだった。まだ生き残りがいるアカネイアをないがしろにグルニア王ユベンが新しい国を建てたことに憤りはある。だが彼は混迷しているアリティアとマケドニアを救い、今も守ろうとしているとも見える。フェリア王国を認めたとようにペレジア帝国も認めアカネイア王国を復興させた後は手を取り合っていくべきではな

いのか。そう決めようとしている時にアンナがある話を始めた。

「問題は皇帝に取り入っている教団の方ね。ナーガとは別の神様を祭ってこの街でも改宗を勧められているわ。都市部だと無茶なこととはしないけど。皇帝や軍の目が届きにくい村では——」

「焼き討ちだ——！」

店の外で大声が響き渡った。気が付けば夜も更けている。

カイルたちは慌てて店の外に飛び出した。

「焼き討ちってどこで起きているんですか？」

「この街の近くの村だ。陛下がこの街にいた時は安全だったんだが遷都した途端、グルニアの各地で」

カイルたちは村の場所を教えてくださいすぐに駆けつける。

村では凄惨な光景が広がっている。

村人への蛮行をラーズ司教カリグラが命じていた。

「ラーズの教えを受け入れぬ異教徒どもを根絶やしにせよ。異大陸であろうと偉大なる

ラーズ神の威光が届かぬなどあつてはならぬ」

建物は燃やされ、抵抗した村人は殺され武器を捨てた者たちは捕らえられカリグラの沙汰を待つ身となった。部下の神官はカリグラに彼らの処遇を尋ねる。

「生き残った村人はこれだけです。いかがいたしましょう。ここまで来て全員殺すだけでは教団に利がありません」

「働き手になる男とそこそこの女は奴隸としてこの地の王の目をくぐつて作つた流刑地に送れ。一番美しい女はラーズ神への供物として火あぶりにせよ」

カリグラは一切の情を見せずにそう命じ、部下たちも疑いなくその命令を実行しようとしていた。

ジェルド クラス：パラディン

ユルゲンの腹心の騎士。ユミス皇女の夫でもある。

アンナ クラス：商人

市街から辺境の遺跡までどこにでも現れる行商人。兵士や屍なら問題なく瞬殺できるくらい戦闘能力が高い。この作品では無数の姉妹はおらず金づるになりそうなカイルたちの行きそうな場所を狙つて現れている。



カリグラ クラス：ラーズ司教

信仰心の強いラーズ残党の司教。クラウディウスを不埒者と見下し自ら巨竜を操り  
ラスベリア大陸への帰還を目論んでいる。

## 第12話 ラーズ

カイルたちが村に到着したときには村は火の手が上がり、村には甲冑を着た黒騎士と黒いローブを着た司祭たちがたむろしていて村人らしき者は一人しかいなかった。

その者は村で最も美しく、今は異界の神ラーズへの生贄として木の杭に縄で縛りつけられ火あぶりにされようとしていた。

「……い、その人を離せ！ お前たち、いったい何のつもりでこんな真似をしている？」

カイルが叫んだ途端、この場を仕切る司教カリグラを暗黒騎士が囲んで守る。

「この大陸の原住民どもか。神聖なる儀式の邪魔をするな」

カリグラの狂気めいたたわごとルッツが憤る。

「儀式だと？ ラーマン教の教えに火あぶりを正当化する教義なんてねえぞ」

「ふん、この異郷の原始宗教など知ったことか。人類は皆至高神ラーズに祈りをささげればよい」

「ラーズ？」

カリグラが口にした神の名前にカイルはたじろぐ。アカネイア大陸では全く聞き覚えがない。母ユリナから聞いたユグドラル大陸の神々にもそんな名前の神はいなかつ

た。

「原住民どもにありがたい説法を説いても無駄か。布教を担う聖職者の辛いところだ。ものどもかかれ！」

カリグラが命じた瞬間騎士たちは抜剣し、カイルたちに襲い掛かる。

キーン！

「く……はあ！」

カイル、ルツツ、ザンザは騎士たちと戦いを始める。斧を持つザンザは剣を持つ暗黒騎士相手に三すくみで不利だったがマーモトード砂漠で鍛えぬいた力量でそれを補い騎士を圧倒し、一人、また一人と倒していった。

そんな戦いのさなか、神官たちは早く生贄の儀式を完遂しようと松明の火をつけ女に近づけていく。火のついた松明をゆっくりと近づけるラーズの流儀は女の恐怖をあおるばかりだった。

「ひい！ お願い。助けてください。何でもします」

そんな女の命乞いに神官は耳を貸すどころか眉一つ動かさずに火を近づける。そうして焼かれた生贄は魂が浄化され、死後にラーズに帰依し神に仕えることができる信じられているからだ。

そこへ助けが現れる。

ヒイーン！

「はぁぁー！」

キン！ ザシユ！

馬にまたがったカーシヤが槍で松明を持った神官を串刺しにしたのだ。

「大丈夫？ もう安心です」

カーシヤは女を抱きかかえる。女はカーシヤの胸で泣き喚いた。

「貴様！ 異教徒の魂を救うための儀式を『うばえ！』そしてわれにちからをあたえよ

！ ジャヌーラ』

神官の暗黒魔法がカーシヤを襲うが

「やっー！」

ブウン。

天馬騎士として修業を積んでいたカーシヤは手のひらをかざすだけで弱弱しい邪法をかき消した。魔法に耐性を持つ天馬に乗っていないなかつたため黒い痣が残ったが1時間もしないうちに完治するだろう。

「はっー！」

ザン！

続けて槍が二人目の神官を貫く。

天馬を手に入れるまでソシアルナイトとして戦ってみてもいいかもしれないとカーシヤは頭の片隅で考えながら次の標的に狙いを定めた。

「おのれ、ラーズのしもべの面汚しめ。教皇様からもらったこの蟲を使うしかないか」  
次々に倒される騎士や神官の不出来に業を煮やしたカリグラは胸元から瓶を取り出す。

瓶の中には何十匹の蟲が入っていた。

「……？」

戦いが一段落し首魁の様子を窺ったカイルはカリグラの様子に眉をひそめる。降参するわけではないようだ。

カ。パ。ツ！

カリグラは瓶を開き地に放った。

メキメキ。

すると地の底から屍が現れた。殺された村人や先ほど仕留めた暗黒騎士の屍まで動き出している。

「ゆけっ！ 汚らわしき亡者ども。異教で染まった魂を異教徒を喰らうことで清めるのだ」

「なっ？」

カリグラの命令を受けて、いや彼の言葉など意に介さず屍は生者たちを襲った。  
ガッ！

「ギャアアア！」

屍はカイルたちだけでなく神官たちまで襲った。

「ぐう！ カリグラめ、乱心したか。『じゅうりんせよ！ くるききりよ！ トウマハー  
ン』」

そして神官たちも屍と応戦を始める。

キーン！ ザシユ！

そんな中カイルは屍を切り伏せながらカリグラに迫った。すでに彼を警護していた騎士たちも屍と応戦を始め、カリグラは村の奥地へ逃げていた。

「待て！ 邪悪な凶信者。あの屍はアカネイアを襲ったのと同じ現象。お前たちがアカネイアを襲ったんだな」

問い詰めるカイルにカリグラは笑って応じた。

「おうとも、あの竜の力を試すためにな」

「試す？ そんなことのためにパレスの人々を！」

カイルは憎悪のこもった表情でカリグラを睨むがカリグラは笑みを崩さない。

「ラーズ神の威光でこの世をあまねく照らすため。そして原住民を真の神の御手で楽園

に導くため。むしろあれは神の慈悲によるものだ」

「真の神？ あんな竜がか？」

カイルの言葉をカリグラは手を振って否定する。

「違う違う。あの竜はただの道具よ。異教徒を潰すためのな。この大陸を救済しはずれラズベリア大陸を救う。異教徒の国ヴェリアも、ウルバヌス様を不当に追放した帝国もあの竜で滅ぼし創り直すのだ」

カリグラの言葉の後の方は意味が解らなかった。違う大陸のことを言っているらしい。

「お前たちの事情なんか知らない。そんなことのためにパレスとグルニアを……」

カイルはカリグラに剣をむける。生かして捕らえる自信はなかった。

「ふ……もう遅い」

カリグラが地に向けられた瞬間。地から屍がわいてきた。

「はっ！」

カイルはそれを予期し、真横に跳躍し、

ザッ！

跳躍方向にいる屍を切り捨てた。その隙にカリグラは背を向ける。

「見抜きおったか。だがわしが逃げられればそれで充分。ではな小僧。次はあの竜でお

前の魂を清めてやろう。……!?!」

だが逃亡しようとするカリグラの顔を屍が躍り出た。

「バカな！ わしの命令すら聞かんのか」

「はああ！」

ザシュ！

そしてカイルはとどまっているカリグラの背に剣を突き立てた。

「……ぐぐ、クラウディウスめ、とんだ欠陥品を……」

教皇への恨み言を口にしながらカリグラは果てた。

カリグラが召喚した屍を薙ぎ払い村の広場に戻ってみると屍との戦いは終わっており、生き残った村人は閉じ込められていた倉庫から助け出され、屍の猛威から生き残った神官たちは若干いたが戦いが終わって一息ついた隙を見計らっては歯に仕込んだ毒で自決しようだ。

彼らの所持品だったものを調べてみたが魔法を行使していたにもかかわらず魔道書はなかった。代わりに用途不明のオーブを持っている。アンナやセネリオに聞いてみ



る必要があるだろう。

そしてこの村は存続できないだろう。身分を伏せたうえで村人を保護したことと村の被害状況を報告し、彼らを受け入れてもらえないか市長と相談した。市長はグルニア総督と連名で帝都に使いを送り教団の蛮行を皇帝に報告し奴らを牢獄に入れさせると息巻き、村人の受け入れを約束した。

(セネリオ、以上が今回の事件の顛末だ)

(そうですね。報告ありがとうございます。アリティアでも似た事件が起こっていませんか。奴らの狂信ぶりは相当なものでしたよ。ペレジア軍は一切関与していないようです。どうも皇帝は教団を監督しきれていないようですね。女神の加護がなく国ぐるみでないだけ正の使徒よりましですが)

(? ……そうか、アリティアでも……)

事件後、カイルは事件の報告と今後の相談をするべくヤクシの石を使ってセネリオと念話していた。アイクたちはテリウス大陸でラーズ教団より厄介な敵と戦ったことがあるらしい。

(アリティアを併合した国ですが……やはりグルニアでした。グルニアにいるカイルたちはもう知っていますよね?)

(ああ)

(あなたたちはやはりドルーアいえ帝都ペレジアとやらに行くんでしょう。奴らが屍を召喚した以上教団は巨竜を使役している可能性が高い。アリティアにはもう教団の影は見えませんかし僕たちもマケドニア半島へ向かうつもりです)

(ありがたい。君たちが来てくれれば心強いよ)

(アカネイア大陸で暮らすつもりで引退後の生活のめどを立てるのも団の仕事です。それに団長は目の前で起きている理不尽を放っておけない人です。あなた方とは利害が一致している。それに現在の覇権国家が相手では亡国の王子とそのお仲間では荷が重いでしょうし。お付き合いしますよ)

(わかった。アイクによりしく伝えてくれ。それで半島のどこで落ち合う?)

(帝都北西の山間の村……と言いたいですが、山をうろついている間に屍に襲われる危険もあります。カイルたちはマケドニアの街で待機しててください。もう情報も集めましたので勝手な真似をしないように)

(ああわかってるよ)

カイルたちではまだ屍の大軍に囲まれたときに逃げられる保証はない。それは事実

だっただろうがセネリオのことだ。マケドニアにいるカーシヤの家族の安否を確認させてくれる時間を設けてくれたんだろう。

カイルはその意味を含めたうえでセネリオに礼を言うところまで気になったことを切り出す。

(ところでセネリオ、魔法って魔導書以外の方法で行使できるのか?)

(…教団の司祭が持ってたオーブの事ですね)

(ああ)

(僕も驚いています。書物や杖ではなくオーブを使って魔法を使うなんて)

セネリオの声には驚きが含まれていた。テリウス大陸にもない技術らしい。

(ラズベリア大陸か……かなり高度な文明を持つ場所らしいな)

(ええ、くれぐれも気を付けてください。僕たちの知らない芸当を繰り出してくるかもしれないません)

(ああ)

それからカイルとセネリオは再会を約束し念話を切った。

マケドニア某所。

その地下でクラウディウスは巨竜と相対していた。

頭の中には邪念がささやき続けている。

《飲め……その竜の血を飲め。さすれば1800年前の我のように神のごとき力が手に入るぞ》

「……」

クラウディウスはもうガルバザンの言葉に抗おうとすることもやめ黙って聞き流している。

クラウディウスの手元には短刀が握られている。

ドラゴンキラーの刃と同じ材質の刃をつけた特製の短刀だ。

その短刀を目にしても巨竜は黙ってクラウディウスを見ていた。切りかかってこいというように。

(幻想上のラーズとは違う神のような力)

短刀を振りかぶって巨竜にあてようとした瞬間その思念を遮るものが現れる。

「教皇様」

「クライネか。なんだ？」

クライネが転移の術を使ってクラウディウスの後ろに現れたのだ。

「カリグラ司教が亡くなりました。生贄の儀式を整える前に」

クラウディウスはつまらなそうに鼻を鳴らす。

「それがどうした？」

「いえ、それだけです。お邪魔でしたか？」

クラウディウスはカリグラに興味を持っていなかったが邪念が自分を侵食している最中にクライネが声をかけてくれたことには感謝していた。

「邪魔ではない。退屈していたところだ」

そう言ってクラウディウスは短刀をしまい、クライネと地下を出て行った。

(まだ早い。この竜を動かすまでは)

## 第13話 皇帝ユベン

カイルたちは帝都ペレジアの南にあるマケドニア市街に到着し、2週間の間アイクたちを待つ間にカーシャの家族との再会、アンナが仕入れていた天馬の購入などの用事を済ませ、新聞を購入したり、ザンザが酒場に通ったりして極力怪しまれないように情報を収集した。

そしてマケドニアに入って1週間になろうとしたころ。

「待たせたな」「山と森に囲まれた国か。ベオクにしてはいいところに都を建てたもんだ」

アイク傭兵団の部隊、狼部隊と獅子部隊の隊長であるオルンとウーゼルが待ち合わせの店に入ってきた。

「オルン、ウーゼル久しぶり。来てくれてうれしいよ」

「ベオク？ テリウス大陸では人間のことをそう呼ぶんですか？」

再開を喜ぶカイルとベオクという言葉に疑問を持ったカーシャがそれぞれ言葉を発

した。

それから間もなくアイクとセネリオもやってくる。他の団員は森の環境が気に入って市外待機を買って出たらしい。

「すまない。遅くなつたか？ 近道したつもりだがラグズたちはともかくセネリオとララベルに無茶な移動はさせられないからな」

「いや早すぎるくらいだ。ララベルさんも一緒だったのか。あの人はどうしてる？」

「今の大陸で一番栄えているこの街で早速商売をしていますよ」

アイクたちの行動力に驚きを通り越して呆れながらララベルのことを尋ねるカイルの問いにセネリオが答えた。

「アンナさんもいつの間にかマケドニアについてるし、二人ともたくましいわね」

そして商売人の行動の速さにあっけにと取られているのはカーシャ。

「では団長に代わって帝都を偵察してきた僕から説明しましょう。帝都ペレジアは帝都とは名ばかりで砦を改修した皇宮と少し離れた地点に小さな町があるくらいです。遷都による経済効果で発展しているこのマケドニア市が今のアカネイア大陸の最大都市でしょう。まあ帝国内ではこの大陸の名前もペレジア大陸に改称しているようですが」

「……」

カイルとカーシャの表情は引きつっていた。

カイルにとってはペレジア帝国の発展に伴いアカネイア王国の滅びを痛感され、カイヤにとつては火事場泥棒のようなことをやってのける国にマケドニアが都扱いされていることへの複雑な思いが巡り、そんな二人に気付いていないフリをしてセネリオは続けた。

「皇宮には多くの兵が入り込んでいるようです。ただ砦だったところから増築はせずマケドニア市や各町村への警備に力を入れているため宮殿に入れる兵士には限りがあるようです。多くの兵が外に出ている日もある。潜入するならその日を狙うべきでしょう。特にユルゲン皇子が巡回に出ている日に」

「ユルゲン皇子か……」

「知り合いかカイル？」

ユルゲンの名前が出て考え込むカイルにルッツが声をかけた。

「皇子っていうからわかると思うけどユベン王いや今は皇帝か。彼のご子息だ。アカネイア貴族として僕の父に拝謁しに来た時に会っただけだが騎士としての力量は父と互角いやそれ以上だって聞いたことがある」

「じゃあ俺の親父と互角ぐらいか。恐ろしいような闘ってみたいような」

ルッツの軽口をセネリオが制した。

「やめておくべきです。僕たちの目的は皇帝と巨竜のつながりを確かめること。ユルゲ



ンを倒せたとしても帝国を全面的に敵に回すべきではない。そして僕の考えでは皇帝は教団に乗せられたか脅迫されているだけです。世継ぎを殺害して帝国と和解する道を閉ざすのは下策の中の下策です」

セネリオの言葉にルッツは文句を言っているようだがカイルは顔を落とすのみだった。

もう覚悟は決めている。ペレジア帝国を新たな国と認め必要とあれば彼らと手を組む。だがそのためにカイルはユベン皇帝に言っておかなくてはならないことがあった。

「了解した。僕もユルゲン皇子やユミス皇女と事を荒立てたくはない。ただ帝国と教団が繋がっているか探るためにも皇帝と言葉を交わす方法を考えてくれないか？ 頼む」

そう言つて頭を下げるカイルをアイクが制した。

「頭をあげてくれカイル。皇帝との話は俺たちの方から頼みたいくらいなんだ。セネリオの考えに反して黒幕が皇帝の方で教団を潰しても巨竜も屍も問題なく動き回っていたでは困る。皇帝がクロカシロかはつきりさせておかねばならない」

アイクがカイルの頭をあげてからセネリオは本題に入る。

「いいでしょう。まず……」

「む？ お前、ここはペレジア皇宮だ。一般人は入れないぞ」

「申し訳ありません。ただグルニアで気になる話を聞いてしまつて。皇帝陛下に報告したいと思います。どうか謁見のお許しをいただけませんか？」

見張りが皇宮のあたりをうろついている妙な男2人を見つけた。

片方は髪は青く、右目を眼帯で隠している。

もう片方はフードで顔を隠しているが体格で男だとわかる。フードの男は黙つたままだつた。

「そうか。我々が陛下に伝えよう。言つてみる」

「そ、それが相棒がアカネイア兵の生き残りに聞かれたらまずいから皇帝に直接申した方がいいって」

「相棒？」

「俺だよ」

今まで沈黙してフードの男が名乗り出る。

「何だ。我々がアカネイア兵に情報を売るつていうのか？ 貴様こそフードで顔を隠して怪しいな。お前がアカネイアの残党じゃないのか？」

兵士の一人が激高しフード男に詰め寄る。

「情報を売るなんて大層なことじゃない。でもどんな情報も人が持っている限り流出す

る可能性はあるんだ。皇帝に伝えると言ったが今日の間には皇帝に情報が届くのか？

報告できなかったらそのまま上がって情報を持ったまま酒場に繰り出すんじゃないのか？　そして酒場で美人に酌をされたら仕事の話を漏らしてしまうことだってあるんじゃないか？　あんたマケドニアの高級酒場に入りに出たりして常連とそっくりなんだが」「た、確かに何度か行つたことはあるが機密を漏らしたことは無い。ましてや陛下に仇成すような情報なんて口が裂けても」

「ああ、あんたは忠義に満ちた軍人だ。酒と色気に惑わされて口が緩くなる奴じゃないだろう。だが酒に眠り薬を入れて起きてきたら見知らぬボロ家で、怪しい男たちからあらゆる拷問を受けたら絶対に喋らないと言い切れるのか？」

拷問の光景を想像したのか兵士の顔が引きつる。

「し、しかし伝えたいことがあるからって誰でも陛下の御前に招くわけには」「待て」

今まで沈黙していたもう一人の兵士が前に出る。

「その青髪の君、その眼帯は何だ？」

話をむけられた青髪が慌てて答える。

「う、生まれつき目に病気があって、見た目も酷いんです。人様の目を汚すわけには」

「我々は傷や跡で差別したりはしない。兵士たるもの名誉の負傷はつきものだからな」

それでもどうしても外せないのか？」

「はい、外せません」

「ふむ」

兵士は考え込んで言った。

「上に伝えてくる。少し待ってくれ」

そう言つて兵士は宮殿の中に入る。

そして青髪とフードと兵士の片方が残されもう片方の兵士を待った。

半刻ほど待つて兵士が戻つてきた。

「陛下がお会いになるそうだ。粗相のないようにな」

「え……」

待たされた方の兵士は信じられないものを見る目で青髪とフードを見た。

青髪とフードは城内からやってきた別の兵士に案内され謁見の間へ通される。

その道中一人の淑女とすれ違った。

「これは皇女殿下、ご機嫌麗しゆう」

ペレジア皇女ユミス。壮年に入つてもその美貌とクセのある金髪は若いころから変

わらなかつた。

「お役目お疲れ様です。そちらの方々は宮殿に参られたお客様かしら？」

「ええ、皇帝陛下にお伝えしたいことがあるとの事で。」

青髪とフードは声を発さず頭を下げる。

「まあ、ここに来てから初めてのお客様ではないかしら。謁見が終わったら私のもとに来ませんか？ ご家族へのお土産を包んで差し上げましょう。あまり多くを差し上げるわけにはいきませんが」

ユミスの申し出に青髪は首を何度も振って辞退する。

「い、いいえ僕なんかにもつたいないです。どうか他に困っている方のために使ってください」

「そうですか。残念です」

本当に残念そうな様子で表情を曇らせるユミス。彼女は思わずこう漏らした。

「私には今の夫とは違う婚約者がいたのですけど、もしその婚約者と結婚していたらあなたぐらいの子供がいたかもしれないと思ってつい、ごめんなさい困らせてしまつて」

「い、いえ僕の方こそごめんなさい」

たがいに謝る青髪とユミスに微妙に話しかけづらそうにしていた兵士は意を決して、

「皇女、そろそろよろしいですか？ お父君が来客を待っています」

「ああ、そうでした。父に叱られたらユミスに付き合わされたと言つてください」

「はっ、その時はお言葉に甘えて」

「それではお客様方もどうかゆっくりしていつてくださいなね」

そう言つてユミスは兵士と客人に一礼して去つていった。

「さ、さて行くぞ君たち」

「は、はい」

兵士に促され青髪たちは兵士に続いた。歩きながら青髪はあることを思い出し出ていた。

（父上が母上と婚約する前の相手はグルニアの王女つて聞いたことがあるな。じゃああの人が）

一方、ユミスも先ほどあつた客人の片割れが目にかけていた眼帯のことを考えていた。

（あの青髪、あの方と全く同じ色でしたわね。それにあの方には目に聖痕という文様が浮かんでいる。ご子息がいましたし、まさか——）

「おもてをあげよ」

「はっ！」

老年に入つてなお覇気があふれた貫録で皇帝ユベンは男たちに命じた。

若いころは金髪だった髪は20年前から白く染まっていた。それが老いによるものか騎士の国の王としての矜持を持ちながらアカネイアに頭を垂れた重臣によるものは定かではない。

そんな老帝に青髪は頭をあげ眼帯をかけた顔を見せた。フードも頭をあげたが顔が見えないぐらいの位置は保っていた。

「それで余に話したいこととは何かかな？」

青髪は意を決して話す。

「その前にひとつよろしいですか？」

「うむ？」

「アカネイア王国そしてアカネイア連合王国という国家群を無視して周辺国を併合しレジア帝国なる国家を建国したことについてどうお考えですか？」

重臣は取り乱したがユベンは顔色一つ変えず返事を返した。

「アカネイアは不幸な災害があり滅びてしまった過去の大国だ。かの国が滅びて各地は混乱にあえいでいる。北部は蛮族に乗っ取られてしまった。だからこそクロス王以外に王の立場を持つ余が各地を取りまとめなければならんと決意したのだ。アカネイアで生き残った者から逆賊の汚名をかぶせられてもな」

「……」

ユベンの覇気に青髪はひるむ。汚名をかぶっても大陸中の国をまとめる。声色からその覚悟は本物に聞こえた。

「失礼しました。ではパレスを襲った巨竜と屍のことはご存知ですか？」

「ああ、知っている。我が国もあれらがいつ現れてもいいように対策を練っているところだ。ユルゲンも皇宮にいる時より見回りに出ている時が多いくらいにな」

竜と屍を知っていることはあつさり認めるユベン。だがあくまで自分たちはそれに對抗しているという主張は崩さなかった。

教団に踊らされている立場からすれば対抗策を探しているのは本当だろうか。

「では陛下が布教活動を許している教団のことは？」

「うむ、この大陸で布教は難しいと忠告したのだが無理なことはしないとまで言って粘ってきたのでな。異教だからと言って無碍に追い返すわけにもいくまい」

「その教団が陛下の留守を狙ってグルニア近郊の村を襲い虐殺を行ったことは？」

「む、村を？ どういうことだ」

ユベンが初めて表情を憤怒に変える。

「奴らは村人のほとんどを殺し生き残った者は監禁し、一人の女性を生贄と称して火あぶりにしようとしたのです」



「し、知らんぞ。それでそいつらはどうなったのだ？」

「死にました。捕らえたものも我々の隙をつけて自決を。市長と総督が陛下に直訴すると言っていたのですが報告がまだ来ていませんか？」

「き、来ていない。グルニアからは誰も」

蒼白の顔色でユベンは答える。使者は口封じに教団に暗殺されていたのだ。

「教団の司祭は屍を使役していました。瓶に入っていた蟲を地に放り捨てるような前ふりの後で」

「……」

「我々はそいつらがアカネイアを襲った黒幕だと睨んでいます。陛下、あなたは彼らとは本当に無関係なのですか？」

青髪が問い詰めた途端、重臣がどよめいた。

「無礼者！」「陛下を何だと心得ている」「衛兵、早くこやつを投獄しないか」「静まれい！」

ユベンの一喝で重臣は黙り込んだ。

「そなた、余からも一つ良いかな？」

「何でしょう？」

「そなたの眼帯、本当に病気のせいかな？」

「とおつしやられますと?」

「余は十数年前瞳に文様が刻まれている子に会ったことがあるのだよ。異大陸から受け継いだ聖痕とクロス王はおつしやられていた」

「……」

「外してみてくれんか? 悪いことを言っているのは承知している。だがそなたにとつても疑われたままでいるのは居心地が悪いだろう? さあ!」

グッ。

青髪、カイルは眼帯を外した。

ユベンは驚きもせず笑みを浮かべる。

「やはりカイル王子だったか」

ユベンは立ち上がり右手を胸に当て一礼する。

「失礼いたしましたカイル王子。国が滅びてもあきらめずにここまで来るとは。先の教団の件、実に有益な情報でした。そちらはわたくし共で対処いたしましょう。王子はここで賓客として過ごされるがよろしい」

カイルは身分を隠さずに返す。

「アカネイアの民への人質としてですか?」

ユベンは否定せずにならず。

「今ペレジア帝国を滅ぼされるわけにはいかんです」

「教団はどうするつもりです？」

「然るべき罰を与えよう」

「然るべき罰とは？」

「村を襲ったものの背後に命令を下したものがいないか調べ判明次第処刑。教団には活動を自粛してもらおう」

「教団自体が虐殺を仕組んでいた場合は？」

「そ…それは」

教団を潰す。それがこの問いに返すべき答えなのだろうが教団が巨竜を操っていることを知っているユベンは咄嗟にその答えを返せなかった。

「やはりあなたの方の意に沿うわけにはいかないようですね。ですがユベン王が虐殺を命じたわけではないことを知ったのは幸いです。私はこれにて失礼させていただきます」

「捕らえよ！」

衛兵が一齐にカイルにかかる。

だがフードの男が四足の体制になりカイルを乗せた。

「グオオン！」

男は獅子の姿になりカイルを乗せて駆けて行った。すれ違いざまに兵士を突き飛ばしていった。

「……あ、あれが噂の半獣」

ユベンは呆然とつぶやいていた。

## 第14話 潜入と脱出

ユルゲンは巡回予定時刻の半分を過ぎたころ馬首を帝都の方へ向けた。

「皇子？　いかがなされました？」

側近がユルゲンらしくもない行為を怪訝に思い尋ねる。

「ああ、この1月の間我が国の領内で屍や巨竜が現れないのでな。連日諸君を疲労させるまで引きずり回すのも士気の低下を招くだけかもしれないと思つてな」

部下を氣遣う主の言葉に側近は感嘆の意を覚えながら、

「お心遣い痛み入ります。ですが我らはほまれある元グルニア騎士にして現帝国騎士。主や臣民のために身を粉にしてこそ、士気は常にみなぎっております」

ユルゲンも側近の言葉を頼もしく思いながらも、

「いや、異様な気配がするところもない。今日ぐらいは休もう」

「し、しかし」

そこでユルゲンは声を潜め、

「私自身が連日の出動で疲れていると言つたら？」

兵士は慌てて。

「あ……これは気が回らず申し訳ありません。そうですな。部下も疲労を隠して我々についてきているのかもしれませんが。今日は帝都に戻りましょう」

ユルゲンは笑いながらよいよいと言って全部隊への帰還の通達を側近に任せる。

部下たちは巡回に慣れ定時には帰還を許し、狼藉を働かなければマケドニア市での遊興も許していることから任務による疲労はむしろ初期より軽減している。ユルゲンも山々や森林を通る巡回くらいで疲労するほどやわではなかった。

本当は帝都にいる父に教団への厚遇の廃止や布教活動に監視をつけることを提案しようと考えていたのである。

それとこれは部隊を動かすには不適當なのだが嫌な予感がしたのである。

「いたか?」「ここにはいない」「死にぞこないの王子と半獣だ。探せ」

兵士たちがそんなことを言いながら回廊を走り回る。開けられた扉の後ろに潜むカイルと人の形態に戻ったウーゼルに気付かぬまま。

カイルは小声で兵士が言ったある言葉を反芻する。

「半獣?」

「ベオクが俺たちにつけた蔑称だ。俺たちや同胞のことはそろそろ知られていると思っ

ていたがこの大陸でもそう呼ばれているとはな。俺たちはそんなことを言う奴をニンゲンと呼び返しているが」

「人間のことをニンゲン？ それ悪口の返しになるのか？」

テリウスでベオクという名称を知らなかったりラグズを差別しているベオクは自分たちのことを人間だと名乗っている。カイルのもっともな疑問にウーゼルは肩をすくめながら苦笑する。

「ラグズはベオクの貴族に奴隷として生殺与奪を握られていた。陰口だろうと蔑みだかわかる言葉を口にするわけにはいかなかったのさ」

影のある笑いをしながらうそぶくウーゼルにカイルは何も言えなかった。ウーゼルは扉を傾けて回廊に躍り出た。

「行くぞ、今は俺たち以外の匂いはしない」

「匂いでわかるのか」

「何か言ったか？」

「いや何でもない」

本物の狼張りの嗅覚に思わずつぶやいた言葉をカイルは全力で否定した。

『しばしのあいだ　ねむりなさい　スリープ』

「ぐう……」

セネリオがかけたスリープの詠唱で兵士が眠る。

「この先に兵はいない」

「よし、行くぞ」

嗅覚で他の敵兵の有無を確認したオルンの合図でアイクたちはララベルが商い中に兵士から聞き出した教団員と首魁がこもる北の部屋へ向かう。

カイルたちが騒ぎを起こしている間は軍としては少数しか出入りできない宮殿の守りが手薄になる。さすがに門は常に門番が守っているが周りの塀を登り切つてしまえば——人間にはそれが困難なのだが——屋外の回廊などいくらでも侵入口はある。

ユベンが髪の色や眼帯の位置で謁見者の正体を見破るのは想定外の範囲だった。見破られなかった場合はカイルと共に宮殿に潜り込んだウーゼルに内部を探つて教団の連中の居場所を見つけてもらう作戦もあった。

カイルとウーゼルに危険が伴う作戦だったがカイルはこれで皇帝と話すことができずならとうなずいてくれた。天馬を手に入れたカーシャに二人の脱出を補助してもらい、潜入任務の経験がある傭兵団中核で教団の根城へ向かい奴らを捕らえる。それが今回の潜入計画である。



北の区画には二つの部屋があった。右側が神官たちが儀式や礼拝をする部屋。左側が首魁と腹心らしき女が使っている部屋である。

「オルン。どうです?」

セネリオは彼らの在室を嗅覚で調べるようにオルンに促す。

「左には誰もいない。右には5人ぐらいいる」

オルンの答えに一同は突入する部屋を決める。アイクはセネリオにうなずきセネリオは扉の前に立った。

コンコン。

「誰だ」

扉の奥から声がした。

「ケリーという者です。ラーズ教に興味があつて来ました。お願いします。ぜひ教義をお聞かせ願えませんか?」

セネリオが心にもないことをすらすら言うと言つて扉の奥からは返事はすぐに返つてこなかつたが話し声は聞こえる。

滅多に現れない改宗者に神官たちは戸惑いと思いがけない喜びがあるようだ。

「すぐに開ける。待っていなさい」

「ありがとうございます」

セネリオは足音を立てずに数歩引いてあらかじめ扉の横で待っていたオルンが構える。

「ようこそ、あなたに救いをもたらすラースの下へ、ぐっ！」

「オラア！」

オルンは組んだ腕を相手の頭頂部に力いっぱい叩きつけた。  
ドサッ！

「な、何だ？」「お前たちは？」

部屋で待っていた残り4人の神官はどよめいた。

「シヤア！」

「グッ」

オルンは神官の一人の腹を殴りつける。神官は気を失った。

『うばえ！　そしてわれにちからをあたえよ！　ジャヌーラ』

ブン！

神官の放った暗黒魔法をセネリオは難なく受け流す。

『おおいなるかぜよ！　エルウインド』

ザシユン！

セネリオのエルウインドは神官を切り刻みその命を絶たせた。

(加減ができませんでしたね。まあ捕虜は2人ぐらいでいいでしょう。もう二人気絶させましたし)

「はあ!」

「がつ!」「ぐああ!」

アイクが一人を斬りつけ、もう一人は衝撃波で吹き飛んだ。斬りつけたものはもう息がない。

「よし、死んでしまった奴以外の3人を縛って脱出するぞ」

アイクの指示でオルンは両腕で2人の捕虜を抱きかかえ、アイクは右腕で剣を持ったまま左腕で捕虜を抱える。セネリオに男を抱える腕力はなかったし彼には起き上がっているだろう兵士を再び眠らせる役目があった。

「カイル様、ウーゼルさん、こつちです」

外回廊に出たカイルとウーゼルを天馬に乗ったカーシャが迎える。

「カーシャ!」

「本来に来ていたとは、正直あてにしていなかったが」

カーシャを見てウーゼルはそんなことをつぶやく。その時。

シユン！

ヒイン。

弓矢が天馬の腹部を貫いた。

「キヤー！」

カーシヤはたまらず落馬し床に落ちる。

「カーシヤー！」

カイルとウーゼルはカーシヤに駆け寄る。

「ううっ」

「見たところ怪我はひどくないな。俺たちを迎えるために着陸していたのが幸いしたか」

ウーゼルはそう診断するがカイルの焦燥は増すばかりだ。

「やっぱりここに来たか。ここで待ってる間に他の奴らに捕まっちゃうかと思つたぜ」

そこへボウガンを構えた赤髪の男がやってきた。

「お前は？」

「おつと動くな。アカネイアの王子は生かして捕らえよつて命令だからな」

ジャキ！

男の射線はカイルではなくカーシヤに向けられておりカイルはうかつに動けない。

カイル自身を狙うよりこの方が効果的だと判断してのことである。

そこへウーゼルは自分の首をひっかく仕草をしてカイルに目線を送ってきた。カイルはその意図に気付き男に語りかける。

「わかった。投降する。だが彼女と連れは見逃してやってくれ。出なければ僕はこの剣で自害する」

「そんな……カイル様駄目です！」

「うーん……まあ王子以外は別にどうも言われてねえからな。いいだろう。じゃあ王子様俺のところまで来てくれ」

そう言つて男はカイルを招き入れようとする。ボウガンをカーシャに向けたままで。

「そのボウガンをしまつて、いや上に向けてくれ。でないと僕は行かない」

カイルを捕まえた後でカーシャとウーゼルを殺すつもりの方の男の意図に気付いたカイルの言葉に男は舌打ちしながらもボウガンを上に向けてる。

「ホラ、これでいいだろう。他の兵士が手柄を横取りしに来ないうちに早く来い」

「ああ、今行く」

男の言葉に返事を返したのはいつの間にか肉薄していたウーゼルだった。

「え？」

ブン　ガン！

ウーゼルが男の前頭部を殴りつけボーガンを取り落とさせる。

「がはっ！」

男はたまらず悶絶し頭を抱えた。

「余計な時間を使ったな、天馬は置いて早く逃げるぞ」

「はい、カーシャ大丈夫か？ 歩けないなら僕につかまって」

「だ、大丈夫です。一人で歩けます」

カーシャは傷ついた天馬を捨てていくことを悪く思いながらも早く脱出しなければならぬ状況で天馬を連れていく余裕はなく心の中で謝りカイルたちに続こうとした時だった。

「君たちを行かせるわけにはいかない」

黒髪の騎士がカイルたちの前に立ちふさがっていた。

「新手か！」

ウーゼルの叫びに呼応するように赤髪の男が頭をさすりながら起き上がり騎士の名を呼ぶ。

「ジェルド様、こいつらです。帝国を滅ぼすために事実無根の話で陛下をたぶらかそうとしたアカネイアの間者は」

「黙れ！」

ジェルドという騎士は男に一喝し彼を黙らせる。

「ジャン、戦いのさなかとはいえ人質を取るなどそれでもグルニア軍人か。恥を知れ」  
「はっ！ 申し訳ありません」

ジェルドに詫び後ろに下がるジャンを横目にジェルドはカイルたちに向き直る。

「部下の非礼は詫びよう。だが帝国を脅かす君たちを逃がすわけにはいかない。カイル王子、君が投降すればその女性と半獣は見逃そう」

詫びながらも頭は下げず剣を構えてカイルに投降を促すジェルドの態度に怒ったのはカイル、ではなくウーゼルだった。

「はん、なんだって？ 慣れちゃあいるが面と向かって言われると腹が立つな」

ウーゼルの様子に半獣が蔑称だとは知らないジェルドは戸惑う。

「!? も、もしや君たちに失礼な言葉だったのか？ それはすまない」

「ふん、どうせあんたは俺たちを逃がすつもりはないんだ。仲良しごっこなんておかしいだろ。だったら憎しみをぶつけあって殺し合うとしようぜ！」

その言葉通りジェルドの首を食いちぎるためウーゼルが化身しかけるが。

「待って！ ウーゼルさん」

「ん？」

怒りに任せようとするウーゼルを止めたのはカーシャだった。

「私に彼と話をさせてお願い」

「……何のつもりだ？」

カーシヤはジェルドに向き直る。

「ジェルドさんでしたね？ あなたは先ほどジャンさんを叱りつける時グルニア軍人という言葉を使いました。グルニアがペレジア帝国として発展的解消しているにも関わらず」

カーシヤの言葉にジェルドはハツとしながら返す。

「そ、そうだったか。つい思わず」

「それだけジェルドさんはグルニアという国に誇りを持っている人だとわかります。そのグルニアが……皇帝いえユベン王がいなくなった後のあなたの祖国が今どうなっているか知っていますか？」

カーシヤの話を聞いてもジェルドは戸惑うばかりだ。

「陛下は遷都される際に総督を任命してグルニア市が王都でなくなっても衰退することがないように手を打たれたはずだが」

カーシヤはゆっくり首を振る。

「町ではラーズという神様を崇めている教団が強引な布教を行い、村々では村人が改宗の見込みがないとされ虐殺や火あぶりが敢行されているのです」



「！……そ、そんな馬鹿な。陛下は強引な布教をせぬよう嚴重に注意されていたのに、しかも虐殺など」

「しかも彼らは屍を召喚した。パレスに現れた巨竜も彼らの仕業の可能性が高い。あなたはグルニアが竜や屍に滅ぼされてもいいとおっしゃるんですか？」

「そんなはずがあるものか！」

カーシャの詰問にジェルドは怒鳴り声をあげるがカーシャは動じない。

「ジェルドさん、教団が王の目を盗んでこっそり村で狼藉を働いてるだけのままとは思えません。グルニアの……大陸中のすべての人々のためにもどうかお力を貸してください。」

危険な敵陣にもかかわらずカーシャは深々と頭を下げる。しかしジェルドはまだ迷いがあつた。

「教団は止める。いや根絶するべきだ。しかし祖国を、ユミスを裏切るわけには……」

その時、門の前を大隊が包囲する。

大隊を指揮していたのは皇子ユルゲンだ。

「これはいったい何の騒ぎだ？」

宮殿に戻ったユルゲンは騒然とした宮殿の様子に思わず戸惑う。

そんなユルゲンを近くでカイルたちを搜索していた兵士が見つける。

「これはユルゲン様、いいところにお戻りいただきました」

「何があつた？」

「は、はい。アカネイアの王子が宮殿に来たのです。詳しく報告している暇はありませんが陛下は王子を捕らえよと命令を出されました」

「カイル王子が？」

形式上アカネイア王家に仕えていたユベン同様ユルゲンにとつてもクロスたちアカネイア王家は主君として仰ぐべき方々だった。

特にクロスとは年が近く妹の夫になる男として数少ない交流を深め互いに認め合う親友だった。

妹との婚約は破棄されたがクロスはその件に関してグルニア王家に何度も謝罪し、ユミスがクロスを恨んでいないこともあり彼のことを悪くは思っていないかった。父には言えないことだが。

そのクロスの息子を父が捕らえようとしている。

「……」

「皇子？」

沈黙するユルゲンを兵士が呼びかける。

「……カイル王子は一人で乗り込んできたのか？」

「いえ、獅子の半獣が王子と一緒に、他にも手勢がいるかもしれませんが。半獣は常人離れた力を持ち城の塀を越えることができるのではと噂されていますから」

「この大陸に来た半獣は獅子と狼、そして兎だったな。獅子と狼は恐るべき脚力を持つ。

……」

ユルゲンは一瞬戸惑ったがそんなことにとらわれている状況ではないと結論し命令を下した。

「全軍に告げる。馬に騎乗したまま宮殿に潜んでいるカイル王子を探せ。徒歩では半獣に追いつけん。責はすべて私が負う。全軍出撃！」

ユルゲンの号令を受け、彼とともに戻ってきた部隊が馬に騎乗したまま宮殿に押し入る。

ヴァルム・テリウス以外の大陸では騎乗したまま城に入るのは戦争のさなかであろうと禁忌であると戒められ、どんな大戦でもそれが破られることは無かったがペレジア帝国軍が機動力に長けた獣牙族のラグズを敵にした今この大陸で初めて城内での騎馬戦が行われようとしていた。

ジャン クラス？スナイパー

「覚醒」のギャンレルの先祖。ジェルド直属の兵。王家に忠誠心はなく、皇女の婿のジェルドに取り入って貴族の地位を狙っている。

## 第15話 グラデイウス

巡回を切り上げ帰還したユルゲンの率いる騎馬部隊が宮殿に突入してくる。アカネイア大陸史上初屋内に騎乗したままの状態で。

「ユルゲン皇子、戻ってきてしまったか」

呆然とつぶやくカイルにジェルドは剣をむけた。

「ジェルドさん！」

「やはり私は帝国いやグルニアを裏切れない。君たち投降してくれ。カイル王子はアカネイア人へのカードになる。それに陛下は誇り高い騎士王だ。抵抗しない者に手をあげることは無い」

カーシャの言葉に耳を貸さずジェルドは一同に投降を促す。

「そこまでだ！ カイルたちに手を出すようなら俺が相手になろう。」

「アイク！」

「新手か！」

ジェルドと対峙している中現れたのはアイクだった。右手に剣を持ちながら左腕でラーズ神官を抱えている。後ろからセネリオと両腕に神官を抱えたオルンも続いてき

た。

「ウーゼル。あなたがついていながらまだ脱出できていなかったんですか」

「い、いや俺だったらいつらなんて簡単に蹴散らしてやったよ。でも嬢ちゃんがその騎士を説得しようとしてな」

セネリオに責められたウーゼルはそう言っただけでカーシャとジェルドの方を見る。

「どれだけ敵が増えようとも王子を逃がすわけには行かない」

「お待ちください」

ジェルドを止めたのは一人の女性だった。

「あなたは？」

「ユミス皇女？」

「ユミス？」

ジェルドとカイルは突然現れたユミスに驚く。

「ユミス、砦に侵入している者がいる時になぜ君がこんなところにいる？」

ユミスはジェルドに語る。

「最初からここでカイル様たちを待つていました。秘密の通路に案内するために……  
ジャンが先に待ち伏せしていたので出てこれませんでしたけど」

「……」

ユミスはジャンから隠れて今まで機会をうかがっていたらしい。当のジャンは気まぐすそうに目を背ける。

「あなた、彼女の言う通りです。あの人たちを放っておけばグルニアや大陸の大勢の人々が殺されます。生き延びることができても異界の神を崇めることを強要されナーガ様の肖像を踏まされ生き残った人々は神罰に怯えながら生きること強いられるでしょう」

「教団のことはユルゲン様も危惧されていた。奴らは必ず大陸から追い出してみせる。だが奴らを倒すためとはいえ祖国を仇成すものを逃がすわけにはいかない」

「あなた……あなたにとつて祖国とは何ですか？ お父様お一人のことですか？ いいえ、国に住むすべての民こそが国なのです。かつてお父様は私と兄に教えてくださいました。「国は王のためにあるのではない。そこに生きる民のためにある」中興の祖ユベロに後見人だった騎士が教えてくださった言葉です」

「……」

「お父様の目はグルニアよりはるかに大きいアカネイアへの妬みで曇っています。そんなお父様の言いつけに背いてもそれがグルニアの民のためになることなら私はあなたが祖国を、グルニアを裏切ったなどと思いません」

「ユミス、すまない。私は祖国のために教団と戦おう。君には苦勞を掛けるが」

夫の言葉にユミスが首を振る横でセネリオは天馬から離れた。

「皇女たちが話してる間に天馬の治療は追えました。皇女、隠し通路は皇宮のどの方向に出ますか？」

「西です。宮殿の西の外壁中央に出ます」

セネリオはユミスからカーシャに向きを変える。

「ではカーシャ、僕たちが隠し通路を通っている間に君は天馬で宮殿の西の外壁中央で待機しててください。くれぐれも見張りや巡回に見つからないように」

「わ、わかりました」

そこで今まで輪に入れなかった人物が声をあげる。

「ジェルド様、ユミス様、俺もつれて行ってくれませんか？」

ジェルドは驚いてその人物ジャンを見た。

「ジャン、ついてきてくれるのか？」

「はい、ユミス様のお言葉を聞いて目が覚めました。王子たちもすまなかつたな」

そう言ってジャンはカイルたち特にカーシャに向かって頭を下げた。

「い、いえわかつてくれれば」

カーシャはあつけなく謝るジャンに戸惑いながら彼を許した。

「ではそろそろ行きましょう」



「はい」

セネリオの指示でユミスは壁のくぼみを押す。

すると壁がせり上がり通路が顔をのぞかせた。

「さあ、カイル様もお連れの皆様もこちらが非常時に脱出するための通路です。急いで」

「皇女、ありがとうございます」

「カイル様、皆さん、どうか気を付けて」

カイルたちは通路へ入り、カーシヤは天馬に乗って宮殿の西を目指した。

カイルたちは通路へ通って出口へ向かった。

だが――

「今日は勘がよく当たる日だな。ユミス、ジェルド、お前たちが父上を裏切るとは」

「お兄様」「ユルゲン様」

隠し通路の出口で一同を待ち構えていたのはペレジア皇子ユルゲンだった。

萎縮のあまり震えも隠せないカイルにユルゲンは語り掛ける。

「カイル王子お久しぶりでございます。あなたが子供のころにお会いして以来、立派に成長なされましたな」

「ユルゲン皇子……」

ユルゲンは槍を構えカイルに向ける。

「ご無礼お許し願いたい。しかし今の私はアカネイア王の臣下ではなくアカネイアに代わり大陸を統べるペレジア帝国の皇子、不穏分子たるあなたを帰すわけにはいかないのだ」

「ユルゲン殿、僕たちは帝国を潰したいわけじゃない。大陸を滅ぼしかねない巨竜を操る教団を倒したいだけなんだ。頼む、そこをどいてくれ」

ユルゲンは槍を下さず首を振る。

「教団の方は私が父上を説得し、この帝国から追放しよう。王子、あなたは人質として利用できる。他の者も捕らえはするが拷問などは決してしない。我が名にかけて約束する。どうか投降してくれ」

「父君を説得できたとしてもあの巨竜はどうするつもりです？ ユルゲン殿がどうにかできる存在じゃありません」

そこでユルゲンは槍の穂先を回して見せた。

「これはアカネイアに伝わっていた三種の神器の一つ「グラディウス」。一か所に集めるのは危険だと考えた英雄王マルスの判断で各地の神殿に奉納された。誰にも在り処を教えずにな、おかげで見つけ出すのに苦労した。三種の神器はファルシオンが失われた

ときに備えて、その代りの武器としてナーガがしもべに作らせたものと聞く。あの竜の弱点を掴みこの槍で攻撃すればかの竜を討つこともできるかもしれない」

「そんな……楽観的過ぎます」

「だがやるしかない！」

そこでアイクは大きなため息をつく。

「どうやらこいつはジェルドより頭が固いらしい。ジェルド、教団の捕虜を頼む」

アイクはジェルドに捕虜を放り投げ今まで使っていたのとは別の剣を抜きカイルとユルゲンの間に割り込む。

「ぐえ」

「う、うむ」

投げられた拍子にうめく捕虜をジェルドは受け止めた。

「こいつは俺が食い止める。カイルたちは先に行け。俺もすぐに後を追う」

「わかった。みんな行こう！」

「え……でも」「皇女さん、早く」

大陸一だと噂されるユルゲンの力を知るユミスはアイクを心配し逃げるのを渋るがそんな彼女をウーゼルは引っ張る。

「ま、待て……くっ」

今の力量を身に着けてから自分を前にして降参するものはいても、目の前で堂々と逃げようとするものが現れたことなどないユルゲンは慌てて呼び止めようとするが、相手がそんな自分の隙を突こうとしていることに瞬時に気づきアイクに向き直る。

「片手間で倒せる相手ではないな。彼らが君を頼るのも無理はないか」

「かかってこないのか？ 時間が惜しい。俺から行くぞ」

言い終わる間もなくアイクはユルゲンに斬りかかる。

「ふっ」

ユルゲンはアイクの太刀をかわす。

「はあー！」

キン！

ユルゲンの突きをアイクは剣で受け止めた。

「グラディウスを受け止めたけど？ その剣はいったい？」

「ナーガ様とやらとは別の神が加護を与えていた剣だ。今は加護を失って使っていくうちに傷つく強いだだけの剣だがな」

アイクはその剣「ラグネル」でグラディウスをはじきユルゲンを斬りつける。

カキン！

だが鎧をかすめただけでユルゲン本人には傷をつけられなかった。

「ほお、この十年程は私の鎧を傷つけるものなどクロス王ぐらいだったぞ」  
「そうか、お互いまだまだ未熟だな」

ユルゲンの賛辞をアイクは互いに未熟の一言で流し、攻撃の手を緩めない。

キン！ キイン！ カキイン！

そのとき隠し通路から足音がする。

ダダダダ！

兵士たちが開いてる隠し通路に気付き下りて来たらしい。さすがに階段を馬で降りることはできないのか徒歩の状態だ。

「ユルゲン様？ ユルゲン様に加勢しろ！」

ユルゲンと侵入者の戦いを見るなり、兵士たちはユルゲンに加勢しようとする。だが「ここは私だけでいい。お前たちは外へ逃げたカイル王子を捕まえろ。ユミスもいるが構わんあいつも捕らえろ」

「はっ!!」

ユルゲンの命令を受け、兵士たちは一目散にカイルたちが逃げた方へ向かった。

アイクとユルゲンは獲物を退き仕切り直しの構えをとった。

「どうやらぐずぐずしていられないらしい。あんたとはもう少しやり合ってみたかったが次で決めさせてもらおうぞ」

「ふっ。褒められているのかけなされているのかわからない言い方だな。油断していると倒れるのは君の方だぞ」

アイクとユルゲンは同時に仕掛ける。

ザン！ キイン！

ユルゲンの穂先はアイクのわき腹を傷つけ、アイクの剣はユルゲンの鎧にぶつかる。また鎧に傷をつけただけとユルゲンは一瞬思っていた。

ギイン！ ザシユ！

「ぐわあ！」

しかし剣は鎧に深く食い込みユルゲンを斬った。

「はあ！」

ギイン！ ザシユ！

そして反撃する間もなく2撃目が繰り出される。

「ぐおお」

アイクの奥義「天空」がユルゲンを斬り伏せた。アイクはユルゲンが息をしているのを確認すると

「ふう、まだ生きているようだな。正直殺してしまったと思ったが。」

アイクは傷ついたわき腹に傷薬をかけ残りが入っている瓶をユルゲンの側に置いた。

「あなたに死なれると帝国の協力が得られなくなる。それにまた手合わせもしてみた。次は天空なしでやり合いたいもんだ」

そう言い残して気絶しているユルゲンを置いてアイクはカイルたちの下へと向かった。

一方、謁見の間ではユルゲンとともに帰還した騎士がユベンにユルゲンの帰還と騎乗しての王子搜索を報告していた。

「騎乗したまま、城を搜索だど？」

「は、はい。徒歩では半獣に追いつけないとの皇子の判断です。お止め出来なかったのは私の責任です。なんなりと処罰を」

首を垂れる兵士をユベンは止める。

「いや、ユルゲンの判断はもつともだ。今はなんとしても王子を捕らえるべきだ。余の考えが固すぎるのだろうか」

「い、いえ、決してそのようなことは」

「陛下、よろしいですか？」

またひれ伏そうとする兵士をユベンはなだめる。そこにクラウディウスが現れる。

「クラウディウス。いつの間に？ いやちようどよい。聞いたぞ」

ユベンの言葉にクラウディウスは首をひねる。

「何を？」

白々しい異界の教皇にユベンは顔を赤くして怒鳴る。

「グルニア市の近郊の村で虐殺を起こしたそうだな。無理な布教はするなと言ったはずだ。いやこれはもはや我が国への敵対行為だ」

「申し訳ありません。弟子がやり過ぎてしまったようで。どうかお許しを」

クラウディウスは深く頭を下げるがユベンの怒りは収まらない。

「貴様、わしの国をどうするつもりだ？」

クラウディウスはユベンの問いに応じず逆に問う。

「ところでアカネイアの王子が来たそうですか？」

「？ うむ、そうだが。それが今の話とどう関係がある？」

「今この帝都とやらにはこの大陸の王が二人揃っている。まとめて始末するのによい頃合いだということですよ」

「？ ……貴様！」

突如本性を現したクラウディウスにユベンは驚愕する。

『さまよえるあしきたましいよ!! ザッハーク』



ガアアアン！

「ぐふっ」

クラウディウスの唱えた強大な暗黒魔法がユベンに直撃した。

「よくも陛下を！」

いきなり主に攻撃したクラウディウスに兵士は剣で切りかかる。

だが兵士はクラウディウスの前で動きを止める。

「か、体が……動かない？」

「プレリユードも聖剣もないこの大陸で私を斬れるものなどいない」

『ザツハーク』

動けない兵士をザツハークが直撃し、兵士は存在しなかったかのように霧散した。

クラウディウスは右手を高々と上げ呼びかける。

「出でよ、巨いなる竜……ギムレーよ」

カイルたちは外に出てカーシャと合流し南のマケドニア市を目指していた。

「あの方、お兄様相手に大丈夫でしょうか？」

化身したウーゼルに乗ったユミスはアイクの安否を尋ねる。

王宮生活で体力のなかったユミスは走り疲れてしまい、無理して走ろうとするが体を根をあげてしまい倒れる寸前だった。

そこでウーゼルは化身し自分に乗るようユミスに言ったのだ。化身を見た直後は遠慮して自分で走ろうとするが体は動いてくれず、追手が迫っているかもしれないことと自分の偏見で皆の足を止めていることへの負い目から渋々ウーゼルに乗った。それからほどなく獅子の乗り心地にも慣れ口を開く余裕もできた。

「団長なら大丈夫です。ユルゲン皇子がアカネイア一の騎士なら団長はテリウス一の戦士です」

セネリオの返事を聞いてもユミスの不安は収まらない。

「……でもそれだけではありません。お兄様が今使っている槍はグラディウス。性能ならファルシオンの上をいく大陸で並ぶ武器は二つしかない神器なんですよ」

「団長が使っている剣もラグネル。テリウス大陸で最も強大な剣の一振りです」

「……」

テリウス大陸のことを知らないユミスはアイクがテリウスで最も強いと言われても、ラグネルが最も強い武器の一つと言われてもピンと来ない。ただこの少年が自分たちの主のことを強く信じていることだけがわかってもう何も言えなかった。

グラグラグラ！

そこで強く大地が揺れる。

幸い転倒したものはいなかったが、

「お、おい！ あれを見ろ」

ウーゼルが顎で地震の元になった方を指した。

「あ、あれは？」

帝都から少し離れたけれどその巨大さでカイルたちはもちろん皇宮でも、帝都と呼ばれている町でも、マケドニア市からもその姿はよく見えた。

とてつもなく巨大で3対の翼と眼球を持った黒い竜。

それが地を割り、マケドニアの上空に現れたのである。

## 第16話 破壊の竜 ギムレー

「ああつ」

巨竜を初めてみるユミスはその場で昏倒してしまふ。

ウーゼルに乗っていた状態だった上、ウーゼルも受け止められる態勢をとっていたため転落することは無かったが。

「巨竜……まさかこんなところで」

「カイル、あの巨竜を倒せるかもしれない武器を出してください」

カイルはうなずき、敵に奪われないように今まで戦いに出さずに腰にさしたままにしていたファルシオンを抜いた。

「ファイアーエムブレムは潜入するとき没収されないように君に預けていたけど」

「こんな時に備えて」

セネリオは背負い袋を置き、中身を取り出しカイルに渡した。ファルシオン同様戦いの場に出さず有事の際はアンナや傭兵団の倉庫に預けていたファイアーエムブレムを。

2 国宝の片割れのファルシオン。この剣は父クロスが即位後王宮に置かずパレスの神殿に頼んで保管してもらい、自身の時のように成人の儀までの試験にも用いられると

いうこともなく神殿の宝物庫に安置されていた。

ファルシオンを振ることができないことによる焦りで経験を積むべく危険な任務に志願しジエイクスを失った自戒による行動だったが、そのおかげで王宮崩壊にも巻き込まれずファルシオンは出立前に神殿を訪れたカイルの手に渡った。

類まれな強度を持つ材質でできているらしく、この千年間戦いに用いられたこともあつたにも関わらず柄は何度も補修しているものの刃には傷一つついていない。

「父上は僕の歳まで振ることができなかつたと言っていたけど」

ブンッ！　ブンッ！

問題なく振れる。日頃の訓練と今までの実戦の経験によるものだろうか？

「よし！　大丈夫だ。カーシャ、僕を乗せて天馬で巨竜に近づいてほしい。危険だけど君しか頼める人間がない」

カイルは天馬に乗って近くを滑空していたカーシャに駆け寄って頼み込み頭を下げる。

「そ、そんなことしなくても引き受けますよ。マケドニアには私の家族もいますし。でもカイル様、死なないでくださいね」

「ああ！　必ずあの竜を倒そう」

そうしてカーシャはカイルと一緒に天馬に乗り、巨竜のいる空に向かった。

「あの竜め、なにをぐずぐずしている」

皇宮の屋上でクラウディウスは苛々しながら巨竜を眺めていた。

「早くあの小僧を滅ぼささないか。アカネイアとグルニアの王族さえいなくなれば愚民をまとめられるものはいなくなる。この大陸を破壊しつくせば頭の中でこだまするあの声も聞こえなくなるかもしれない。そしてあの竜を連れてラズベリア大陸へ帰還し、かの地を私が支配する新世界に創りかえるのだ」

そこまで吐き捨てたところで巨竜に近づくものに気付く。

「天馬?」

天馬は女と男を乗せている。男の方はアカネイアで死にぞこなった王子だ。あの王子を誘っているのか? パレスを勝手に滅ぼしたことといい、あの竜はアカネイアの王もしくは妃の血になにか思うところがあるらしい。

(クライネ……来い)

クラウディウスが念じた瞬間、クライネが彼の横に現れる。

魔女に洗脳する際にこうした念話も可能な状態にする術もかけるのだ。

「教皇様、お呼びですか?」

「私とあの竜の頭上に転移しろ」

「危険です」

魔女は洗脳により死を恐れない。クライネが案じたのは自身の命ではなく主クラウディオウスの危険だった。

「アカネイア王の先祖は宝玉を飾った剣で暗黒竜とやらを倒したことがあるらしい。万が一のこともあるかもしれん。ここで確実にあの小僧の息の根を止めてやらねば」

「かしこまりました」

一度忠告を無視されたクライネは2度目の命令に従った。簡素な忠告だけが魔女に許された主に意見できる唯一の機会だった。

「わわわっ!」

「カイル様、しっかりと捕まってください」

巨竜の羽ばたきで揺れる天馬に乗ってカーシャは必至で手綱を握り、カイルはそんな彼女にしがみついた。揺れのあまりしばしば妙なところに触れてしまうこともあったがカーシャにはそんなことを気にかける余裕もなかった。

問題はどうか攻撃するかである。

「天馬に乗ったまま斬れる相手でもなさそうだ」

「じゃあどうするんですか!？」

揺れが激しすぎて叫び声でも上げて気迫を出したいカーシヤは叫ぶ代わりにカイルに怒鳴る。

「……僕が巨竜に飛び移って奴の急所を探し、斬る！ それしかない」

「ええ？」

突然の珍案にカーシヤは驚く。

「頼む！ 飛び移れそんな場所まで行ってくれ」

「……確かにそれしかないか、天馬で着陸できるなんて思ってたませんよね。だから落ちても恨まないでくださいね」

カーシヤは半ばどうにでもなれという気持ちを抱きながら巨竜の胴体に狙いを絞る。

「……ここだと落ちる。」

「……くっもう一回！」

「……駄目だ！」

「……グラッ！ くそっ！」

「……今だ！」

「行けー！ カイルー！」



限界までの緊張と重圧と恐怖と揺れで口調も繕わずカーシヤは怒鳴る。

「あああああ——！」

カーシヤの怒鳴るのと同時にカイルは天馬から飛び降りた。

ガン！ グラグラ！

「うわ——！」

飛び降りた瞬間揺れでカイルは巨竜の背中を転がり巨竜から落ちそうになる。

「カイル！」

ガシ！

間一髪で取っ手状になっている鱗を両手でつかみカイルは九死に一生を得た。

ほっ、カーシヤは思わず息をつく。

グラグラ！

「キャツ！ しまった」

ほんのひと時の間に巨竜が羽ばたいてカーシヤを吹き飛ばしそうになるが、何とかこらえた。

「カーシヤ、もういい！ そこから離れろ！」

鱗をつかみながらカイルはそう叫んだ。

カーシヤもさすがに内心やつとここから解放されると思いカイルに返事も返さずこ

こから離脱する。

カイルは鱗から片手を離しても態勢が取れることを確認してもう片方の手も鱗から離し棒立ちになる。

「剣も盾も落としてないな」

地上にいる時から竜に飛び移る羽目になると予想しておいたので鎖で鞆と刃を括り付けたファルシオンとファイアーエムブレムを嚴重に縄で腰に巻き付けてから天馬に乗った。二つとも無事だ。

そこに屍たちが現れた。

「あいつはー!」

その奥、巨竜の首元にはローブで顔を覆った若い男と空いた胸元とスリットから太ももを出した露出の高い服を着た女がいた。

「小僧、貴様さえ殺せばこの大陸は私の意のままにできる。かかれ」

男の命令を受けて屍がカイルに襲い掛かる。

ガン!

カイルは屍の頭蓋骨を殴りつけながらファルシオンに巻いた鎖をほどく。完全に腐

敗していない屍を殴りつけたせいで脳漿が手や顔にかかる。

ブオン！ ガン！ ブオン！

ガチャ！ スチャ！

屍が繰り出す刃をよけ、屍を殴り、ようやく鎖が解け神剣を抜く。

「よし、反撃開始だ」

ザン！ シュウウウ。

拳の時と違い剣で斬り付けると屍はあっさり霧散する。

ザン！ ザシユ！ ザシヤ！

シユン！「!?」

『なんじ、しのふちよりきたれり！ デス』

突然カイルの前に転移した女が死神の姿をした幻影を繰り出し、カイルを攻撃する。

「うわ！」

カイルはかろうじて鎌をよける。

「この！」

ザン！

「くっ」

斬りつけられた女はかすかにうめくもののひるむことなくカイルに次の詠唱を繰り

出そうとした。

「よい！ お前はここで見ていろ」

だがローブの男が女を制止し、さらなる攻撃を禁じる。

「貴様ごとき私に私の女を犠牲にしてたまるか！ 『さまよえるあしきたましいよ!!  
ザッハーーク』」

男は怨霊の幻影を繰り出し、カイルに襲わせる。

ジユウウ。

「ぐわああー！」

攻撃をまともに喰らったカイルはその場に膝をつく。

「クク……『さまよえる』」

ガタ！ 「はあああー！」

ザシユ！

立ち上がれてもザッハーークの呪縛で動けまいと高を括るクラウディウスを前にカイルは素早く立ち上がりクラウディウスに斬撃を浴びせる。

「ば、馬鹿な……なぜ私を斬れる？」

斬られた衝撃で倒れたクラウディウスは驚きの目でファルシオンを見る。

「まさか……その剣はユトナの聖剣と同質のものだということのか？」

「ユトナ？」

グララ！

新たな単語にカイルは首をかしげるがその隙を狙ったかのように巨竜が揺れ動く。

「うわわ！ ……くっ、とどめも捕まえる暇もないか」

よるめきながらもカイルは足を踏ん張り巨竜の首の上へ向かう。

「教皇様！」

女は男を抱きかかえる。

「地上へ転移します」

そう告げて女は男とともに掻き消えた。もう屍もない。

「はあはあ……これで最後だ。父上、母上、これで終わりです。はあああ！」

ザ！

ファルシオンは巨竜の首に刺さった。だがまるで手ごたえがない。

「!? そんな……ファルシオンが通用しないのか？」

絶望に打ちひしがれるカイルの頭の中でふと声が響いた。

「かかったな。我の元となった竜の血を引く者め」

カイルは驚く。

まだあの男の手のものがいたのか？

そう思ってたあたりを見回す。だが誰もいない。

「まさか……竜、お前なのか？」

その言葉に答えるようにまた頭の中で声が響く。

「へそうだ。私はギムレー、破壊と絶望の……竜だ」

「ギムレー？」

「我を倒す機会だと思ってるまんまと剣と盾を持ってきてくれたな。この大陸を破壊したくてたまらなかつたのをこらえて待っていた甲斐があつたぞ」

「待っていた？ どういうことだ」

「我を封じ込められる代物を破壊するためさ。こうやってな！」

そんな声がした直後、竜は巨体を傾ける。

「うわあああ！」

カイルは抵抗しようもなく竜から投げ出され宙を舞う。ファルシオンとファイアーエムブレムとともに。

グオオオオオオオ！

高笑いをあげるように吼える巨竜はそんなカイルを見ようともしやらずに眼下の半島へ降り立っていった。

「ううっ」

クライネによって地上の皇宮近くの町広場へ転移したクラウディウスは瀕死の重傷を負っていた。もう薬も治癒魔法も効かない。

クライネはそんな主を感情のない瞳で見つめている。

「おのれ……あと少しで……これまでか」

「うわあああ！」「あの竜がこっちへ来るぞ」

そんな中町の住民は突然四方へ逃げて行った。

あの巨竜が町へ降りてくるのだ。

ドズン！

そして逃げ遅れたものを家ごと潰しながら巨竜はクラウディウスの前に首を差し出した。

「? ……何のつもりだ。竜め」

途端頭の中を例の声がする。

〈飲め、お前が助かるにはその竜の血を飲むしかない〉

「?」

頭の声に呼応するように巨竜はクラウディウスに首を近づけたまま動かない。





高笑いをあげる。それを怪訝に思うものはいない。この町の人間は逃げたか、圧死したか、生き埋めになっているか。それ以外には感情のないクライネが呆然と主を見つめているだけだ。

クラウディウスはあたりを見回し、潰れていない建物を探した。

「くくく、ついて来いクライネ。そこでいい。お前にもその竜の血を与えてやろう。お前自身が飲むわけではないがな」

これから相手をしろという意味だろう。クライネは嫌がりも喜びもせず肅々とクラウディウスの後へついてくる。

竜はこれから色欲に耽溺しようとする人間を見つめ羽根を揺らした。

そして精神下でクラウディウスに憑依していた魂と会話する。

〈これであの男も我が眷属か。ご苦労だったな。ガルバザン〉

〈お前とは利害が一致しているからな。憎き人間どもを滅ぼす我が悲願をかなえるにはお前は絶好の協力者だ。ギムレー〉

〈剣も盾も砕けた。そろそろこの大陸を破壊しよう〉

〈せつかく眷属にした男を殺す気か？〉

へいや、この大陸にひびが入る程度にしておくさ。虫けらのような人間を潰す以外の楽しみのために人間の視点を持つあの男は必要なのだな。それに男とまぐわっている女

の方ももしものための借り腹としての役目もある」

「そうか。好きに楽しんで来い」

そして巨竜ギムレーは空高く飛び立つ。ギムレーは大陸を俯瞰するほどの高さでとどまった。

ゴオオオオオ!

そして大陸の各地にブレスを吐き散らかした。

この日大勢の命が奪われ、大陸はその形を変えていった。

その翌日、巨竜は教団とともにアカネイア大陸から忽然と姿を消す。

## 第17話 ペレジアの新たな王

「我が血の一滴を受け継ぐものよ」

「……ん？」

カイルは自分に向けられた声に気付く。

ここは暗闇だった。

「ここは？ ……そうだ僕は巨竜から落とされて……じゃあここは冥界？」

巨竜のことを思い出すと悔しくてたまらない。

巨竜を倒せず僕は死んでしまったのか。

だがそんな後悔を声は否定する。

「いいえ、かろうじて助かりました。天馬に乗った少女に助けられて、すぐに現世に戻れるでしょう」

「え？」

カイルは初めて自分に向けられる声に気付く。だがあたり一面暗闇で誰の姿も見えない。

そしてなぜか声は自分の表面からした。

「誰だ？ どこから話している？」

声は質問に答えない。

「ですが我が牙と封印の盾は砕けてしまいました」

「牙？ 封印の盾？」

初めて聞く言葉にカイルは首をひねる。

「ですが修復することは可能です。牙は破片を集めておいて、先に封印の盾を修復し、かの者……あなたたちが巨竜と呼ぶ者に破壊されたガルダへ行きなさい。そこで破壊によつて高く積み上げられた地層の頂上まで登りなさい。そこから差し込まれている虹が目印です」

「ガルダ……タリスの横にある港町ですか？」

「ええ、それとオーブを回収する際はくれぐれも例のオーブに触れないように」

言い終わると声は聞こえてこなくなった。

「あなたは？ 待ってください！」

代わりに別の声が聞こえてくる。

「カイル様、しっかりして！」

「……………」

カーシヤの声に起き上がるとそこはどこかの室内だった。うなされていたらしくカーシヤが心配していた。

「カイルが起きたのか？」

ルッツがカーシヤの声に気づいたらしく別の部屋からルッツ、ザンザ、アイク、セネリオ、オルン、ウーゼルがカイルが寝ていた部屋に入ってくる。

「……は？」

「カイル様！」

呆然としているカイルにカーシヤは抱き付く。

「うわ！ ちょっとカーシヤ。やめ——」

みんながいるため急いでカーシヤを押しつけようとするがそうしたくない。自分もカーシヤに抱き付いたこともあつたし、カーシヤにそんな態度を取りたくもなかった。

「二人とも後にしていただけませんか」

そんな二人にセネリオは冷や水を浴びせる。

「あ、ごめん」「わわ、これはその」

カーシヤは慌ててカイルを離れた。

カイルは咳払いして尋ねる。

「ここはどこだ？ あれからどのくらいたった？」

「マケドニアの宿だ。帝都とやらが破壊されたからな」

「巨竜から落とされて3日は気絶していましたね。カーシャが受け止めて一命はとりとめました」

場所をアイクが、時間にはセネリオが答えた。

「そうだったのか。ありがとうカーシャ」

「いえ、私は無我夢中で」

カイルはカーシャに礼を言つてすぐに聞く。

「それで帝都が破壊されたって？」

思いがけない言葉に反応するカイルにルッツが説明した。

「ああ。巨竜はカイルを落とした後帝都市街に降りて……都市を破壊していきやがった」

「……」

絶句するカイルにルッツは続ける。

「逃げた人も大勢いたようだが突然の出来事で犠牲になった人も、名ばかりの帝都だったがグルニアから移住した皇宮の兵士の家族も大勢いたそうだからな」

「う……」

カイルは悔しきのあまり毛布を握りしめる。

「この調子じゃこの先は言わない方がいいかしら？」

「いつかは知ることよ。伏せるべきじゃないわ」

さらなる事実を言いよどむアンナをララベルがたしなめる。

「何があつたんですか？ 教えてください」

そんな二人にカイルは尋ねる。

二人は顔を見合わせてアンナが進み出てきた。

「巨竜は帝都を踏み潰した後、空高く飛び上がって……ここからは他の商人や情報屋から聞いた話だけど大陸中をプレスで攻撃したらしいの」

「そ、そんな……」

蒼白になるカイル。他の皆はもう知っているらしく顔を伏せるだけだった。

「それから気付いたら巨竜は影も形も見えなくなつたんだって」

「いったいどこへ？ カイルはそう思ったが口には出さなかつた。

「まあ大陸中と言つても被害はあちこち地形が変わつたぐらいなんだけどね。あの巨竜ならもつと大きな事が出来そうだけど。竜にしてみれば挨拶みたいなもんでしょ」

「挨拶って……」

その言葉にカーシヤはアンナを睨む。

「あ、ごめんなさい」

アンナは慌てて謝るがカイルはふと尋ねる。

「カーシヤ？ まさか君のご家族が？」

「あ……いい、いいえ、両親も弟も無事です。ただあの町には皇宮で働いていた親戚がいたらしくて、巨竜の姿を見て腰を抜かしたこともあって夜な夜なうなされるらしいんです」

「そうか……それはお気の毒だな。でもご家族が無事で何よりだ」

「あ、はい。それでカイル様、こんな時に言うことではないとわかっているんですけど――」

カーシヤは言い淀むがカイルは彼女が何を言いたいのか察しがついて促す。

「こんな時だからこそ言いたいことは遠慮せず行つてくれ」

「あ、はい。家族は巨竜の恐怖におびえ続けています。せめて巨竜を見たマケドニアと違う場所で暮らせればと、……カイル様、家族をパレスに移住させていただけませんか？ お願いします！」

そう言つてカーシヤはカイルに頭を下げる。

「ああ、構わないよ」

何を頼まれるか想定しあらかじめ答えを決めていたカイルは快くうなずいた。



「あ、ありがとうございます。カイル様」

「そうだ！ アイク、君たちは捕虜を捕まえていたな。彼らはどうなった？」

カーシャとの話を終えてすぐカイルはアイクに話をむけた。

「ああ、自決もさせず一通り尋問は終わった」

説明が苦手なアイクに代わってセネリオが引き継ぐ。

「彼らは異大陸ラズベリアに存在する宗教組織です。ラーズという神を至高神として崇めているんだとか」

「ああ、グルニアの村を襲った奴が何度も言ってたな」

カリグラ司教と遭遇したカイルは彼の狂信によって殺された村人を思い出し重々しく言う。

「彼らはクラウディウスという教皇の命令でマーモトード砂漠の北西にあるテーベの塔の地下へたどり着き、そこに封印されていた巨竜が彼らにとつての神ラーズだと言われて解放させられました」

「北西にある塔って、あんなところにそんな化け物が……」

マーモトードに住んでいたザンザはテーベの塔を知っていたらしく顔を青くしてつぶやく。

「彼らはその後巨竜にパレスを滅ぼさせそのことでグルニア王に取り入った、あるいは

脅迫した」

「……」

カーシャはパレスでの出来事を思い出し顔を伏せる。

「そして新帝国建国をそそのかしてマケドニア・アリエティアを併合させた後はそれらを含めた領土全体から中心に当たるドルーアに遷都させそこを自分たちの拠点にした。そして奴隷を酷使してある場所の地表から穴をあけ広い地下空間を作り魔女と呼ばれる女性の転移の術を使って巨竜を移動させた。奴隷は力尽きて全員死んだそうです」

異教徒は徹底的に人とみなさない教団のやり口に場にいるものはみな閉口した。

「聞き出せたのはこれでおしまいです。これ以上は彼らも知らないのです。さてせっかく尋問したわけですし教皇とやらの妄言を信じるわけじゃありませんがああ巨竜もこれからはラーズと仮称しましょうか」

皇宮潜入以前ならともかく竜が現れ大陸を荒らし姿を消した今となっては何の益にならない情報に途方に暮れた一同にセネリオはわずかでも前進していると訴えるためにせめて巨竜の名前を付けることを提案した。

だがそんな提案をカイルは否定する。

「いや、あの竜の名前は……ギムレー……ギムレーだ」

「え……」

「あの竜の頭を刺した時に奴の声が頭に響いたんだ。……いろいろ言つてたけどその時奴は自分のことをギムレーと名乗っていた」

「ギムレー……名前にしては妙な羅列ですが、アカネイア語を学んだ時にそんな単語を目にしたことはありませんね。ラズベリア語でしょうか？」

セネリオの推測にカイルは首を振る。捕虜たちもリーベリア大陸でラーズ教団に改宗させられた後あちこちの大陸を連れまわされたためラズベリア語を知っていないだろう。

そこでカイルは夢の話を思い出した。

「そうだ。今後のことだけ——」

その時扉が開き、カイルの言葉を遮る。

「カイル王子！ 気がついたか。一命をとりとめたところすまないが動けるならすぐに医療施設に来てくれないか。会って頂きたい方がいる」

現れたのはカイルの様子を見に来たジェルドとユミスだった。

巨竜ギムレーは3日前大陸中を攻撃した。それは飛び立つ前にいたマケドニア半島も例外ではない。多くの山や森が焼かれ、アリティア島、アカネイア本土を隔てる海は

干上がった。半島の大部分は将来砂漠となるだろう。

それだけではない。巨童のプレスは皇宮をも攻撃し、その場にいた兵士、使用人などの関係者も巻き添えにした。隠し通路で決闘後ほどなく意識を取り戻すと思われるいたユルゲンも死んだ。

だが皇帝ユベンはクラウディウスの攻撃を受けた後異変に気付いた兵士によって医者のない帝都ではなくマケドニア市に搬送された。だが体に巢食った毒は強く持つて数日の命だった。

ジェルドたちから話を聞いてすぐカイルはジェルドたちとともにユベンのいる医療施設に駆け込んだ。

「……ジェルド、ユミス……カイル王子」

施設の一室で毛布をかけられ横たえたまま小さな声でユベンはカイルの名を呼んだ。

「陛下」

カイルの呼称にユベンはかすかに首を横に振ろうとした。

「私には皇帝どころか王ももつたいのうございます。ユベんで結構」

「ユベン殿」

「王子……申し訳ございませんでした。クロス陛下や先王陛下にグルニア統治を委ねられる名誉をいただきながら私は欲深かった。……グルニアの民のためとかこつけてア

カネイア王と対等になろうとした。そしてあのような者たちにたぶらかされ……我が民も大陸も……」

ユベンの懺悔のすべてをカイルは否定できない。だが

「我が王家にも責任はあると思います。当家がグルニアを軽視していたところもあつたかもしれませぬ。僕は母を尊敬しています。ですがグルニアを重視するなら父はユミス王女と結婚するべきだったかと」

「それは違います！」

ユミスは激しく否定する。

「私はあなたのお父様、クロス様との婚約が決まった時から彼の妻にふさわしいように勉強、修練に励んでおりました。私との婚約を破棄し、ユリナ様と結婚すると言われたときは確かに悔しかった。でもそんな私にクロス様は何度も謝り、他にグルニアとの関係を深める方法を探すとおっしゃっていたんです。」

「……」

政略的なこととはいえ元婚約者のために励んでいたと言われてジェルドは不服そうな顔を見せるがそんな夫に気付きつつユミスは続ける。

「それだけではありません。即位したクロス様に拝謁するために父と兄とパレスを訪れた時にユリナ様は私にお声をかけてくださり、婚約のことを謝ってくださいった上に私と

友達になろうとおっしゃっていただいたんです。ですから私は胸を張って言えます。あなたのご両親はグルニア王家を軽視してませんし、あの二人は一緒になるべくして一緒になった最高の夫婦だったと」

「……ユミス様、ありがとうございます。父も母もあなたを大切な友人だと思っ  
ています。間違いありません」

カイルとユミスの話を聞きながらユベンは目をつむる。

「これでお分かりいただけただけでしょう。すべて私の欲が招いたこと。あなた様のご両親に責はありませぬ。ユミス、すまなかつた」

「お父様！」

「ジェルド、愚かな王ですまぬ、わしを許すことはできんだろうがせめてユミスとユルゲンを許してやってくれ。あやつらはわしを諫めようとしてくれたのだ」

「陛下！…もったいなきお言葉」

二人に看取られてその後ほどなくユベンは眠りについた。余命わずかな時に体力を使い切ったのだ。おそらくもう目覚めることは無いだろう。

カイルたちは施設の待合のための部屋へ来た。巨竜の攻撃で死傷者が出て負傷者と

その関係者で待合室はごった返している。そこへ

「あら、お父様、お母様、とそちらのお方は？」

カイルより若干若い女性が従者を連れてやってきた。髪はユミスと同じ色だ。

「ユミル様声が大きすぎます。今は怪我人ばかりなんですよ。我々は特別扱いされてるんです」

ユミルという女性の従者をしていたのはジャンだった。あれからジャンはジェルドの側仕えをはずれ現在はユミル皇女の世話係になっている。ペレジア軍が壊滅し、屍なごからユミルを守れるくらいの実力を持つのはジャンだけだった。

「ジャンの言う通りですよユミル。私たちは王族であるからこそ苦難のさなかにある民をいたわらなければ」

「申し訳ございませんお母様」

母の叱責にユミルは頭を下げカイルを見た。

「それでお母様、そちらのお方は？ お母様かお父様の選任の騎士にしては若すぎる気がしますけど」

カイルを従騎士扱いする娘にユミスは慌てて弁明した。

「ユ、ユミル失礼ですよ。このお方はアカネイア王国のカイル王子殿下であらせられます」

カイルは気分を害さずにユミルに進み出て手を差し出した。

「アカネイア王国の王子カイルです。ユミル皇女」

今まではペレジア帝国の発展にいじけて亡国の王子だったと自分を卑下していたがペレジア帝国も壊滅し今は大陸中が混乱にある状況だ。ならばこれからカイルはアカネイア王国の王族の生き残りとして復興を取り仕切っていかなくてはならない。

故にカイルはユミルに対して自らアカネイアの王子だと名乗った。

「アカネイアの？ えつと……」

今の大陸の状況に負い目を持ったユベンや覇権奪取に疑問を持っていたユミスやユルゲンと違ってユミルはアカネイアを過去の遺物だと思っていたのだろう。どう接するべきか両親の顔を眺めた。

母は厳しく娘を見つめ、父は不干渉を決め込み黙り込んだ。

「ペレジア皇女ユミスと騎士ジェルドの娘、ユミルと申します。よろしくお願いします。カイル王子」

三つ数えるほど悩みユミルはそう言ってカイルと握手を交わした。

場が緩んだとみてジェルドはユミスに声をかける。

「それでユミル、おじいさまへのお見舞いか？」

「ええ、今まで治療中でさつきは先約があるから後にしてほしいとお付きの方から言わ



れたんですもの。お母様たちでしたのね。では私は今からおじいさまにご挨拶に行きますわ」

「ユミル、おじいさまは今しがたお眠りになられたばかりなの。また目を改めてからになさい」

意気込む娘をユミスは静止する。

「そんな…」

やはりユミルはむくれるが娘と婿に後事を託し、アカネイアの王子への謝罪を終え安らぎを得たユベンの眠りを邪魔させるわけにはいかない。

両親に説得されユミルは踵を返す。

「そうですか。では私は習い事に戻りますわ。それではカイル王子ごきげんよう。行きますわよジャン」

「あ！ 待つてくださいいよユミル様」

ジャンは慌ててユミルを追いかける。

「申し訳ございませんカイル様。躰のなつてない娘で」

「いえ、これからのペレジアにはあれくらい気丈なお方が必要でしょう」

頭を下げるユミスをカイルがなだめる。

「ユミル皇女かそのご亭主がこれからの世継ぎに？」

そこでユミスは首を横に振り、ジェルドが話をする。

「いや実はユルゲン様にもお子がいる。ユベル皇子だ。勉学の為ユミルとマケドニア市の別荘で暮らしていたため無事だった。世継ぎにはユベル様がふさわしかろう。ただ

——」  
そこでジェイクは表情を暗くし、ユミスが代わる。

「ユベル様は遅くに生まれたお方で、まだ小さくて政治を任せることができませんわ。私も政治の知識がありませんし、ユベル様がご成人されるまでは夫に王になっていたかどうかと思いますの」

「王族でない私が王にな……せめて摂政ぐらいでいいのではないだろうか？」

自身が王になることにジェルドは消極的なようだ。そんな夫をユミスは叱咤した。

「いいえ！ 今のこの国には民を導く王が必要です。私も今のユベル様もお飾りにしかありません。ですがあなたはお兄様の側近として名高い騎士、強い王としてあなた以上にふさわしい逸材はおりませんわ」

王に推されながら妻の尻に敷かれるジェルドの姿にカイルは苦笑しながらふと気付く。

「やはり王政に戻されるんですね？」

そう言われた途端妻に言われるままだったジェルドはその話題に飛びついた。

「うむ、帝国を名乗るには大陸全土を統治するぐらいの力を持っていなければならぬ。だが今の我々ではペレジアとなったグルニア・マケドニアの復興がやつとだろう。あのブレスでアリティアも焼け野原になったと聞く。生き残りがいれば受け入れるつもりだが」

アリティアの話聞いてカイルの顔が沈む。一度も訪れたことがないとはいえアリティアが王家にとって第2の故郷だとカイルは父から何度も聞かされた。

「その時はぜひよろしくお願いします」

「ああ、私からもアカネイアの復興を心から願っているぞ」

そう言ってカイルとジェルドはどちらからともなく握手した。

「……」

「ユミル様、機嫌を直してくださいよ」

街中を歩くユミルの足取りは早い。機嫌がいいのではなく機嫌が悪い時の癖だった。

（お母様つたらあの王子にペコペコしちゃって、これじゃあおじいさまの頃に逆戻りじゃない。おじいさまにも会っちゃダメなんて言うし）

ユベンは孫煩悩でユルゲンの子がなかなかできなかつたこともありユミルをたいそ

う可愛がった。その時にアカネイアは大きすぎる。対等になるべきだと言って聞かせたのである。

ユミルはそんな祖父に影響されアカネイアに対抗心を持つようになった。だから母がカイルの味方をするのが許せなかったのだ。

ジャンの言葉にも耳を貸さずむしろ歩く幅は広がる一方だ。

ジャンはユミルに耳障りのいい言葉を聞かせることにした。

「まあ、気持ちにはわかりますよ。せつかくペレジアの天下になったっていうのにまたアカネイアの子分に逆戻りなんて」

「ジャンもそう思いますわよね？」

ユミルはここで足取りを止めジャンに向き直る。

「もちろんです。ジェルド様とユミス様はわかっちゃいない。どうです習い事なんてブッチして愚痴でも？」

賛同を得たことにユミルは喜ぶが同時に聞きなれない言葉に首をかしげる。

「ブッチ？ なんですかの？ それ」

「サボるって意味です。ユミル様は日々上達してもう教養において並ぶ者はいません。あのカイル王子なんかよりもね」

「そうですね。あんな高慢な無作法者に比べて我が皇家の高貴なこと。その通りです

わ。確かに我が家の偉大さについてあなたとでも確認し合う必要があるかもしれないわんわん

「ですよ。では美味しいお店を知っていますのでそこで」

「ええ、しっかりとエスコートして頂きます」

そうしてユミルを誘うことに成功したジャンは彼女の前を歩きながら笑みを浮かべる。

（所詮世間知らずの皇女様、チョロイもんだ。次の王様がジェルドだから俺は王女の婿。その次の王はユルゲンのせがれだろうがとにかく俺は正真正銘の貴族だ。ようやく機会が訪れて来たぞ）

この時から千年後のペレジア王国の破滅は決まっていたのかもしれない。

ユミル クラス：シスター

ジェルドとユミスの娘。祖父ユベンの影響でアカネイアに対抗意識を持っている。

## 第18話 ワーレン 法律顧問と魔道軍司令

封印の盾とは形状からしてファイアーエムブレムのことだろう。牙とはなぜそう呼ぶのかはわからないがファイアーエムブレムと共にあり、自分の手から離れたものはファルシオンしかない。

そう考えたカイルは翌日仲間やアイク傭兵団とともに自分が落ちてきた辺りに出向き、ファルシオンとファイアーエムブレムを搜索したがその地点はギムレーに攻撃されたらしく、大きなクレーターが地をえぐっていた。

狼や獅子の脚力でクレーターの中を調べ二つの国宝を発見したがそれらは見るも無残に粉々に砕け散っていた。

だが偶然なのかそれとも人知を超えた力によるものか紋章にはめられたオーブは無事に球体の形を保っていた。

それから夢の声に従ってオーブと破片を集めたのち（もちろんあのオーブは直接触れずあらかじめ用意した厚手の布にくるんで）アイク傭兵団とザンザはフェリア王国にカイルたちは傭兵団の一部の団員を借りてフェリアでもペレジアでもない現在のアカネイアに戻ることにした。

荒廃したアカネイアは賊が支配する無法の地とかしていてもおかしくない。そう覚悟してカイルたちはパレスの人々の避難先であるワーレンに足を踏み入れたのだが……

「平和ですね」

ギムレーの攻撃を受けてその言葉は不謹慎だろうが、暴動や略奪がはびこる光景を覚悟していたカーシャは表情は暗いものの平穩に生活している人々を見て思わずつぶやいた。

「さすがに活気はないけどな」

そううそぶくルツツの言葉にも安堵が含まれていた。

「ひとまず領主館に行ってみよう」

ワーレンを統治する領主を尋ねるべくカイルはそう提案した。

「おお、カイル王子！ よくぞ戻ってきてくださいました」

カイルたちが執務室に足を踏み入れたと同時にワーレン領主は立ち上がり、手を広げ

てカイルたちを歓迎した。

「子爵、お久しぶりです」

カイルは領主に近づき握手を交わす。

「パレスの悲劇に続いて先日は大陸規模の災害が起りましたが、町の様子はどうか？」

開口一番カイルはそう尋ねると領主はさすがに渋い顔をしたが、

「災害の方には参りました。ペラティも攻撃されて壊滅してしまいましたからな」

「ペ、ペラティが？」

ペラティの壊滅と聞いてルッツが領主に近づく。

「お、親父とおふくろは？ 俺の両親は大丈夫なのかよ？」

そうまくしたてるルッツに領主は慌てながら、

「い、生き残った者が何人かいたようだが、君の両親かどうかは」

「カイル、悪い。俺はペラティに行つてくる。ワーレンも探すかもしれないから今日は俺抜きでやっててくれ」

そう言うや否やルッツはすぐさま踵を返し執務室を出て行つた。ほどなく領主館を出るだろう。

「すみません、私の連れが」



「いえいえ、あの災害の後ですからな。彼の気持ちは痛いほどわかります」

ルツツの非礼を詫び頭を下げるカイルを領主は手で制す。

「話を戻しますが、パレスの悲劇に続いてあんな災害が起こっても町の平穏が保たれているとは、子爵の手腕には感嘆を覚えます。国を再建するときにはぜひ王宮で働いていただきたいくらいです」

「いいえ、お恥ずかしい限りですがわたくしの力ではありません。レフカンデイの西部テミスを治めるテミス伯爵の遺児マリアンヌ殿が法律顧問として私を補佐してくれているからです」

「テミス伯爵の？　ご令嬢が生きていたのですか？」

テミスはアカネイアとマケドニアを隔てる海のすぐ東に存在する地だ。その海はギムレーのブレスを受けて干上がってしまった。まさか生き残りがいたとは。驚くカイルに領主は更なる言葉を告げる。

「そして町で暴動が起きかけた時はイシュタルス候の長子エルス殿が臨時に創設された魔道軍を率いて鎮圧してくれています。彼らがいなければこの町だけでなくアカネイア全体が無政府状態となっていたでしょう」

「彼らは今どこに？」

「領主館に滞在していますので希望があればすぐにも会えますが」

カイルはすぐにうなづく。

「ぜひ会わせてください！」

「カイル王子お初にお目にかかります。テミス伯爵の長女マリアンヌと申しますわ」

「初めましてエルスです。王子のお噂はかねがね、魔道をたしなむ家系のものとして私の両親は王妃様と懇意にさせていただけいました。私も妃様にはずいぶんかわいがつてもらいました」

領主に呼ばれて執務室に入ってきた金髪をロール状に結んだ貴族令嬢と一房前髪がはねた赤毛の賢者の二人が名乗り出る。

「王子カイルです。私が不在の間。子爵とお二方にはずいぶん骨を折って頂いて感謝の言葉もありません。それにこんな時に国を空けたこと、本当に申し訳なく思っています」

深く頭を下げるカイルをエルスは諭す。

「頭をあげてください王子、あの巨竜の正体を調べようと王子が動かなければあの竜は間違いない王子が留まるだろうこの町を攻撃したでしょう。マケドニアの人たちには

悪い言い方ですが王子がマケドニアで敵の目を引いたからワーレンは無傷でいられたのです」

だがそこに水を差すものもいた。

「フツ、民が困窮している時に王族が勝手に逃げておいて頭を下げるだけで済めば法律はいりませんわ。法律では国事を放棄した王子は本来国外追放を宣告されて当然ですわよ」

「マ、マリアンヌ君」

無礼を働くマリアンヌを領主は注意しようとする。

「いいんです。マリアンヌ殿の言うことはもつともです。申し訳なかった」

カイルは再び頭を下げる。だがマリアンヌは許してはくれなかった。

「頭を下げるだけで済む話ではないと言ったでしょう。まあ唯一残っている王族を追放して新王朝だの革命だのが起きてはそれこそ国が乱れますから百歩譲って復興が終わるまで一日中領主館で政務作業に減刑してあげますわ」

「マリアンヌ様、カイル王子に対してあまりに無礼でしょう！」

「カーシャいいから、マリアンヌ殿ごめんそれはできない」

とうとう頭に来たカーシャを抑えてカイルは改めてマリアンヌと対峙する。

「あら？ やっぱり追放をお望み？」

マリアン又は不敵な笑みを浮かべるがカイルは動じない風を装った。

「あの巨竜……ギムレーがいったん姿を消したからってまたこの大陸に現れないとは限らない。ギムレーに対抗できるのはファルシオンをさせる僕だけだ。法律には書かれていないだろうけどギムレーみたいな邪悪な竜を倒すことは英雄王マルスの子孫である現アカネイア王家の義務だ」

きっぱり告げるカイルをマリアン又とエルスはまじまじと見つめた。

「もういいだろうマリイ。王子の覚悟は本物だ。これ以上はこの方のお邪魔にしかならない」

「そうですね。王子がいなくても町の施政に影響ありませんし、いじめるのはこのくらいにしておきましょう」

「え？」

肩を抜く二人にカイルとカーシャは困惑する。そんな二人にエルスの方から説明した。

「申し訳ありません。王子の意思がどれだけのものか確かめるために試させてもらいました」

「町に留まるよう言われて首を縦に振るようなら王子の決意もそれまで、それを確かめるためにわたくしが王子を責めて、エルス様が見守る。そういう段取りでした」

の

「誠に申し訳ございません。私も王子のお考えが知りたかったので二人を止められませんでした」

二人が訳を話した後領主はカイルに深々と頭を下げた。

その後、改めてあいさつを済ませ執務室にいるものは全員ソファに腰を下ろした。

「それで王子、今後はどうされるおつもりですか？」

領主の問いにカイルは重々しく返す。

「子爵、実はギムレーとの戦いでファイアーエムブレムとファルシオンを破損してしまつて——」

カイルはそう言つて袋の中からファイアーエムブレムとファルシオンの破片を取り出した。

「ファルシオンはギムレー打倒に必要不可欠です。それにファイアーエムブレムも前王朝から伝わる大陸の至宝です。幸いエムブレムにはめられたオーブは奇跡的に無事でした。ただこれでは国宝としては台無しです。どうか剣とエムブレムを修理できる方を紹介して頂ければと」

ファルシオンはともかくエムブレムの方も修理させるのは夢の声に命じられたからなのだが領主たちに正気を疑われるのを恐れて建前を口にする。

「わかりました。ワーレンは栄えた町。優れた鍛冶屋も多く出店しています。一週間もあれば直させて見せましょう。ただ……」

領主は言いづらそうにはにかみながら、

「ファルシオンとファイアーエムブレムを直に見たものは滅多にありません。ましてパレスで多くの官吏が亡くなられた今では、おそらく剣の柄やエムブレムの模様などは元通りにはいかないでしょう」

「……それは構いません。ただエムブレムはオーブをはめ込む穴を再現して頂けませんか？ オーブも含めて国宝となるのです」

柄が変わったぐらいでファルシオンの効力は変わらないだろう。ただエムブレムの方は模様が変わっても問題ないのだろうか？ カイルは不安を覚えたができないことは仕方がない。ここでごねて領主を怒らせて協力を得られなくなる方が危険だった。

「それぐらいなら後ほど使用人がオーブの直径を測りますのでお貸しいただければ」

「はい、わかりました——」

そこでカイルはちらとカーシャに目配せした。

「あ！ 私エムブレムから離れたオーブを見てみたいです」

「そうかい？ ではそのあとで採寸を」

「いえ臣下のわがままで時間を取らせるわけにはいきません。オーブの採寸にこの者を

立ち会わせてやってください。それで十分です。それでいいなカーシャ？」

「ちえ、いやはい、ありがとうございます。ございますカイル様」

カイルとカーシャ、領主はそんなやり取りをする。

もちろん嘘だ。万が一領主や使用人がオーブを盗み出すことを恐れて監視するためだ。

ただしニヤニヤ眺めているマリアンヌや不敵に微笑んでいるエルス、ひよつとしたら領主も気付いているらしかった。

そして貸すのは無論あのオーブ以外だ。

「しばらく領主館にお世話になるつもりですから修理が終わったら知らせてください。剣とエムブレムを持って行かねばならないところがありますので」

そう領主に頼み込むカイルをマリアンヌはつついた。

「ふむ、剣とエムブレムを持ってね……願掛けかもしれないけど国宝を個人的な事情で紛失したらそれこそ追放、いえ公開処刑ものですわね」

「マリイ！」

そんなマリアンヌをエルスはたしなめた。カーシャは食って掛かるだけ相手の思うつぼだと思つて耐えた。

一週間後。領主館。

カイルとカーシャ、ルッツは領主や鍛冶屋の主人とともに客間にいた。ルッツの両親は本土に現れた暴徒を鎮圧するために本土に出ているので助かり今はワーレンで暮らしている。

今日はマリアンヌもエルスも館にいない。

「エムブレムは模様は変わりましたが修理いたしました。オーブもこの通りはまります。ですが……」

そこまで言つて鍛冶屋は土下座した。

「申し訳ございません！ 劍の柄は作つたのですが肝心の刃は槌をふるっても加工できず槌の方が破損する有様でわたくしどもではどうしようもできません」

手打ちを恐れているのだろう。鍛冶屋は土下座しながら歯を食いしばった。

この町にはマリアンヌがいる。修理に失敗したぐらいで処刑など彼女が許さないだろうが相手は王侯貴族だ。手打ちは免れないだろう。

そう思つて鍛冶屋は頭を床につけ沙汰を待った。

「頭を上げてください。この劍の刃は竜を斬れるぐらい強力な上、千年以上も劣化しな



い不可思議な材質できています。普通の工具では加工できないと言われたらわかる気がします。エムブレムは修理して頂きましたし、お代も約束した分用意してあります」

「あ、ありがとうございます」

鍛冶屋はカイルの思わぬ寛大な処置に感謝し謝礼を受け取り部屋から出て行った。

一方カイルの方はこうなるだろうと予想はしていた。さつき言ったようにファルシオンの材質に関しては父や歴史教師から教わっていたし、ファルシオンが砕けたのは落下の衝撃だけでなくおそらくギムレーのブレスによるものだろう。

夢の声も牙は破片を集めておけとしか言っただけでなかった。夢のとおりファルシオンはこのままに、ファイアーエムブレムの修理を終えた今、エムブレムを持ってガルダに行く予定だ。

「子爵、ありがとうございます。ファイアーエムブレムは子爵が紹介した鍛冶屋の手によつて復活した。そう王宮に記録させていただきます」

「いえいえ、剣の方は残念でしたがあれがお役に立てて何より……ですが神剣がなくて大丈夫ですか？」

不安そうに領主は尋ねる。カイルは努めて気丈を装う。

「ご安心ください。ファルシオンは始祖が神から賜ったもの、神の手によつて元の姿を

取り戻すでしょう」

その神かもしれない声の主にそれが出来るかガルダまで聞きに行くのだが、そんなこと領主に言えるわけなかった。

マリアンヌ クラス：ヴァルキュリア

「覚醒」のマリアベルの先祖。テミス伯爵令嬢。弟が爵位を継ぐためイシュタルス侯爵の長子エルスと婚約していたが、先に結婚した友達が職を持たない夫人で、夫に何一つ逆らえず暴力を振るわれることもあると泣きつかれたことがあるため、自分も夫に對する力をつけるため法律学を学び法務官の職につこうとしたがギムレーの攻撃で自分以外の家族が死に絶えたため、マリアンヌが夫を迎え爵位を継ぐことになりエルスとの婚約を破棄し、現在はワーレン町の法律顧問についている。余談だが先ほど言った友達夫婦はマリアンヌの調停により離婚が認められた。

エルス クラス：賢者

「覚醒」のリヒトの先祖。イシュタルス侯爵の長男。マリアンヌと婚約していたが上述の理由で破棄となったが今でもマリアンヌを愛称のマリイと呼ぶ。現在はワーレン臨時魔道軍の司令官についている。侯爵家の財政もブレスの被害で困窮しているが面

目維持のための出費がかさんで借金もし始めている

## 第19話 聖痕の覚醒

カイルとカーシャは天馬に乗ってガルダまでやってきた。念のためルツツも同行した方がいいのだがさすがに天馬に三人も乗れなかつたし、賊も無人の荒野より街の近くか街中で暴れる時代だ。今はとにかく早く夢の声にギムレーを倒す方法とフアルシオンを戻す方法を教えてもらわなくてはならない。

ガルダに着いてまず目に留まったのがタリス島があつたはずの場所だ。島は跡形もなくなつていた。あそこは英雄王マルスの出立の地でマルスの妻シーダの故郷。何より父と母が出会つた場所だ。ガルダもまた町は壊滅し残骸だけが残つていた。黙禱とギムレー打倒の誓いの捧げカイルとカーシャは夢の声が言つた高い地層を見る。

そこは見たところ山だった。頂上から地上に虹が差し込んでいる。だが壊滅前のガルダにそんな山はなく、ギムレーのブレスがもたらした破壊によつて砕けた地層が山のように盛り上がったのは明らかだった。

「さしづめ「虹の降る山」ですね。天馬では頂上まで飛べなさそうです」  
「なら登ろう。カーシャはここで待つてる？」

「そんな訳ありません。お供させていただきます」

従者として主だけ登らせるわけにいかなかったし、盗賊が出る可能性も皆無ではない。二人一緒にいた方がお互い危険は少ない。カーシヤは考えるまでもなく同行を買って出た。

天馬と天馬の食料をふもとに置いて地層を登り日も沈みかけたころようやく地層の頂上に辿り着く。

頂上にはもちろん何もなかった。

「カイル様、本当に神様がここに来いって言ったんですか？」

「ああ、そのはずだけど……」

頂上から眼下を見ると景色が一望できる。影も形もないタリス島があった海も。

寝ぼけて見た夢に踊らされこんなむなし景色を見に来たのだろうか？ そう思うとカイルはいたたまれなくなる。

その時

「オーブをはめ込んだ封印の盾を持つ今なら「覚醒の儀」を行うことができます」

「!？」

頭の中で声がした。

〈今から言う言葉を復唱しなさい〉

「え? ……」

〈我、資格を示す者〉

「わ、我、資格を示す者」

従うつもりはなかったが突然のことにカイルは思わず復唱する。

〈その火に焼かれ〉

「そ、その火に焼かれ」

〈汝の子となるを望む者なり〉

「汝の子となるを望む者なり」

〈我が声に耳を傾け、我が祈りに応えたまえ〉

「我が声に耳を傾け、我が祈りに応えたまえ……!」

声と同じ言葉を復唱した途端、カイルの体を蒼い炎が包む。

「ぐあああ!」

「カイル様!」

ターシャは慌てて駆けよるものの、水と言えば水筒くらいしか持ってない。ならば衣服で火を消すしか!

そう思つて鎧を外し衣服を脱ぎカイルに被せようとしたところで、

「はあはあ！」

炎は突然消えた。カイルの体にも服にも燃えた跡も焦げたところもない。

そこへ、

「覚醒の儀を行いし者よ。我が炎に洗われた心に残った願いは邪悪なる者を滅する力を欲す。我が炎にも焼き尽くされぬ強きその想い、確かに私に届きました」

長い緑色の髪をおろした不思議なドレスを着た女性が現れた。幽霊のよううすばんやりと透けている。

「そ、そんな……本当に……あなたが神様？」

驚きおののくカーシャに神？はゆっくり首を振る。

「私は神ではありません。暁の女神アスタテューヌなら万物を創造した神と呼ぶに相応しいお方でしょうが、あのお方でさえ万能ではありませんでした。それを証明するようにあのお方はご自身が住まわっていた大陸以外のすべての地を沈めたと思ひ込み、他の大陸の繁栄を知りませんでした。その上半身に分かれた状態とはいえ人の子に敗れ今は目覚めの時を待っている」

「でも守護神ナーガ様なんですよね？」

神の言っている言葉が理解できなかったカイルは創造神とやらは置いておいて彼女がナーガかどうか問うた。

「そう呼ばれています」

「ギムレーを倒す方法を教えてください」

ナーガであることを肯定した神にカイルは頭を下げる。

「かの者……ギムレーと呼びましょうか。ギムレーを滅する力は授けました」  
「何も変わっていないように見えますけど？」

ナーガはカイルの右目を指さす。

「あなたのその聖痕に加護を与えました。それで我が牙……ファルシオンの力を引き出すことができるはず。聖痕を持たぬ前の持ち主にも使えなかった力を」  
「でもファルシオンは粉々に砕けて」

「人の子の助けを借りたあの子なら修復できるはずです。西の大陸へ行きなさい。ギムレーも異界の教団もそこに潜んでいます」

西の大陸、それはカイルも名前だけは知っている場所だった。

「ヴァルム大陸に？」

「今はそう呼ばれていますね」

「……バレンシア大陸」

カイルは西の大陸のもう一つの大陸の名をうそぶく。

ヴァルム大陸は千年前はバレンシア大陸という名前だった。アカネイアやグルニア



と交易している国の中には名付け親であるヴァルム帝国に反目して今でもバレンシア大陸の名を使っている国も多い。だからカイルもバレンシアという名前も知っていた。

「ただ、忠告しておかなければならないことがあります」  
「？」

忠告というナーガの言葉にカイルは思わず首をひねった。

「真の力を引き出したファルシオンをもってしてもギムレーを滅ぼすことはできません」

「え？　じゃあどうすれば」

カイルの疑問にもナーガは首を振るうのみだった。

「私にもわかりません。私やファルシオンができるのはギムレーを千年間封じ込めておくだけ、千年過ぎれば蘇ってしまいます」

「そんな……」

カイルはうなだれるがナーガは厳しく告げる。

「かと言つてそのままにしておけばギムレーはすべてを滅ぼすでしょう。この大陸も、西の大陸も、他のすべての大陸も、それが破壊衝動に囚われたギムレーやかの者と組んだ怨念の望みですから」

「怨念？」

「そちらは事が済めば私がなんとかしておきましょう。娘ミラドナが封じ込めきれなかったものの後始末も私の役目ですから」

役目……。

ナーガの言っていることの最後の方はまた意味が解らなかったが役目という言葉はカイルを奮い立たせる。

「竜を倒す役目、マルスと同じ役目を僕は持っている。……そうだ。そうだった」

カイルは立ち上がりナーガに誓う。

「やります。僕がギムレーを封印する」

「お願いします」

それだけ言ってナーガは消えていった。

「ゆ、夢じゃありませんよね?」

呆気に取られてみていたカーシャはそう言う。あんな非現実的な光景、夢のはずだと思い込む。

「いや、夢じゃない。僕はギムレーを倒す力とナーガからの願いを託された」

だがカイルは間違いなく現実だと確信し断言した。

「僕はヴァルム大陸へ行くよ。そこですべての決着をつける」

カーシャはそんなカイルを見てなぜか頬が熱くなった。

「はい、アカネイア王国、いえ大陸のみんなのためにギムレーをぶつとばしてやりましよう」

恥ずかしまぎれにカーシャもそう誓った。

「カーシャ……!」

そこでカイルはカーシャを見るがすぐに視線をそらした。

「あ、あのさカーシャ」

「何です今さら?」

カイルは気恥ずかしそうに自分の服を指さす。

「ふ、ふ……」

「ふ?」

そしてカイルに做って自分の着ている服があるはずのところを見ると。カーシャはさつき脱いだ服を驚きのあまり手から落としてしまっており、今彼女は下着姿だった。

「きゃあああああああああ!」

その日はもう夜も暮れ頂上で泊りとなったが就寝の際カーシャは自分が見えるところにカイルを寝かせてはくれなかった。もつともそれでも夜を一緒にしたのはそれだけカーシャの中でカイルへの想いが強くなったのだろう。

## 第20話 フェリア首脳会談

アカネイア大陸で中心に近いフェリア王宮（旧オレルアン宮殿）。

王宮の会議室の円卓には王宮の主である氷の王にしてフェリア王国統一王アイネ、砂の王ザンザ、草原の民代表ザガットに加えアカネイア王国王子カイル、ペレジア王国執政ジエルドといった大陸諸国の首脳と一軍に匹敵するアイク傭兵団の団長アイク、参謀セネリオそして外交上の規約について助言を行うためのオブザーバーとしてアカネイア臨時政府（ワーレン）の法律顧問マリアンヌが集まっていた。

アイクは窮屈な貴族だったころを思い出すと言って参加を渋っていたが「会議の決定を知らなかったと言って勝手なことをされては困る」とマリアンヌに言われ、セネリオからも有事の際の策を練るのに都合がいいと言われセネリオも参加することを条件に会議に参席した。

その席でカイルは、

「……までがガルダ跡で起こったことだ」

「……」

カイルは会議が始まってすぐにガルダ跡の地層頂上で起きたことを皆に打ち明けた。

「確かに巨竜……そのギムレーが海の向こうヴァルム方面で目撃したという漁師の話は聞いている……だが他のことはにわかには信じられんな」

アイネは開口一番に疑いの目を向けてくる。

「神と会話し聖痕の力を引き出すか……」

ジェルドもアイネに同意のようだ。ザガットの顔も渋い。

「カーシャも一緒だったんだってな。カーシャも同じことを言うなら信じてもいい」

その中でザンザはカイルに好意的なようだ。賛同する理由がカーシャでなければカイルも素直にザンザに感謝しただろう。

「ギムレーから落ちた時同様夢でも見ていたんじゃないやありませんの。まぐわっていれば二人とも同じ夢を見ることもあるかもしれませんわ」

マリアンヌはカイルを疑うばかりかこともあるように同衾の疑惑までかけてくる。

「な！ い、いや夢じゃないし、カーシャとま、まぐわってなんかいない」

「では翌日になって二人とも寝不足で帰ってきたのはどういふことですか？」

「そ、それは……あまりのことに寝付けなかつただけだ」

あの日の夜はカイルもカーシャもかなりの時間眠れなかつた。

カイルはナーガのことが頭に強く焼き付いていたためというのには事実だったが、下着姿のカーシャを思い出し興奮したためにすぐに眠ることが出来なかつたのも事実だ。

カーシャもナーガ以上に、欲情したカイルが夜這いを仕掛けてくるのではないかと  
思つて警戒し、カイルより長く一人の夜を過ごした。

だが決して体を重ねてなどいない。

「いや、これから大きな戦いになることだし英気を養うことは大切だ。王子たちを責めて  
いるわけじゃない」

ジェルドはそう言うがカイルたちの貞操を信じてはくれない。何よりナーガのこ  
を夢だと思つたままである。そんな中思わぬところから助け船が入った。

「信じてもいいと思います」

「俺もだ」

セネリオとアイクだ。

「今の話信じられるというのかね？」

ザガットは案の定セネリオたちに水をむける。

「はい、カイルとカーシャの関係はともかく、ナーガあるいは精霊みたいなのが現れてカ  
イルと話したことは」

セネリオの後にアイクが続く。

「ナーガつて奴は創造神としてアスタテューヌの名を出したそうだな。あれは俺たちの  
大陸で信仰されている世界を創造した女神だ」

「正確にはほとんどの人が信仰しているのは女神アスタルテと呼ばれている女神アスタテューヌの半身です。その人たちはアスタテューヌと言う名さえ知らない」

そう説明するアイクとセネリオにマリアンヌは問いかけた。

「その女神アスタテューヌのことをカイル王子かカーシャさんに話したことは？」

「ないな。ギムレーやペレジアのことで手一杯で俺たちの昔話を話してる場合じゃないか」

「僕とは僕の額の痣について話しただけです。なんでも母君も額に痣……聖痕があったから興味を持ったとか、それ以外は何も」

マリアンヌは更に問いかける。

「他の団員の皆様は？」

「ほとんどのテリウス人同様アスタテューヌの名前も知らないはず。今の団員は一人だったころの女神の名前を知ったあの戦いの後に新天地を求めて加入したラグズです」

「アイネ様、お二人は確かにフェリアに来ていましたの？」

マリアンヌは質問をアイネに変えて聞いてくる。

「ああ、王宮に留まっただけではないがフェリア市街の近くで訓練していたり、野盗を倒しに出ていたようだ。報告も上がっている」

アイネの言葉にマリアンヌは顎に手を当て、

「それならばお二人の言葉は立派な証言になりますわね。この大陸でこのお二人しか知らないこととギムレーの居場所をカイル様とカーシャさんはあの地層の頂上で知ってしまった。お二人がフェリアで過ごしている頃に、それにアカネイアからでは大陸の西の目撃情報など入ってきませんわ。何より私たちは神の存在を否定する術を持たない。カイル様を信じててもよいかと」

打って変わって擁護派に回るマリアンヌに各国の王はうなる。

「まだ信じられぬ思いだが……。ギムレーを追うためにヴァルム大陸を調べてみた方がいいというのは賛成だ。それにアカネイア大陸でファルシオンを直す方法は見つからない。ヴァルムの技術に期待してみるのも一手だ」

最初にジェルドが賛意を示した。

「俺は最初からカーシャを信じると言っている」

「王子にギムレーを倒す力が宿っているか…過信するのは危険だがあの竜を倒す方法は見つからず、それにすぎるしかない」

次にザンザ、ザガットが賛成する。だが

「しかし、最後のギムレーを倒しても千年後に蘇るといいうのは信じたくないな」

アイネの言葉に一同は口を閉ざし、しばらくして



「それだけは僕も間違いであつてほしいと思つています」

カイルはそう言った。だが続けて、

「ならばなおさらギムレーは今倒さなければいけません！　ギムレーを倒した後僕らの子孫に奴は千年後に蘇るかもしれないと言ひ聞かせ、彼らが怠惰に墮落しないよう戒めましょう」

「そして千年後、ギムレーは復活せず無用な心配をさせた我々は恨まれる。それが最高の結果だな」

カイルの言葉にアイネはそう付け足し笑つた。

「よし、ギムレーの情報とファルシオンを修復する術を求めてヴァルム大陸へ向かう！

皆異存はないな？」

アイネの動議に全員がうなづき賛同した。

「それで皆様方、まさか今すぐヴァルムへ行くとおつしやりませんか？　異国の軍

が許可も取らずぞろぞろとヴァルムの地に足を踏み入れれば侵略だと思われまますわよ」

そこへ早速マリアンヌは各国の首脳をたしなめた。

「まずは使者を派遣して許可を取れと？」

ジェルドはそう尋ね返す。

「ええ、時間はかかると思いますがヴァルムに点在する諸国全ての国に入国と調査の許

可を取ってから調査団を送り込む以外に手はないかと」

「でもその間にギムレーが現れヴァルムを滅ぼすかアカネイア大陸に戻ってくるかもしれないぞ」

マリアンヌの返答に対してザガットは懸念を抱く。

「ギムレーとラーズ教団の行動は読めません。可能性の範囲です。ですが無断で軍が大陸に侵入すれば確実にヴァルムすべての国と戦争になりますわよ」

断言するマリアンヌに首脳たちは沈黙する。そこへ――

「俺たちはヴァルムの国に入学してはいけないのか？」

アイクが進み出てきた。

「いえ、今話しているのは国同士の関係においてですから個人で国を行き来するならば由ですわね。追放されない限りは……あなたまさか？」

「あんたたちが使者を送り込んで交渉している間に俺たち傭兵団でヴァルム大陸へ渡り、そこを見てくる」

「馬鹿をおっしやい！ あなたたちがアカネイアの手の人間でヴァルムを調べていたと知られたらどうしますの？ あなたたちはアカネイアの密偵として追われ、アカネイア諸国は賠償を迫られるか戦争を起す口実にされますわ！」

「俺たちはヴァルムが新天地になりうるか見て回るだけだ。そこで教団が非道を働けば

止めに入る。アカネイアのためじゃない」

「屁理屈ですわ！ あなたたちは一傭兵団で処理していい勢力じゃない。ギムレーに立ち向かうための主力ですよ」

「ヴァルム軍に捕まったり教団に倒されるようではどのみちギムレーは倒せん」

「それもそうだな」

二人の口論を制したのはアイネだった。

「法律顧問殿の言うことが正しいのだろうが時間をかけていられないのも確かだ。またあのプレスがこの大陸を襲えば今度こそ大陸は滅ぶぞ」

アイネの言葉にさすがのマリアンヌも表情を落とす。

「こうしよう。我々は顧問殿の提言通りヴァルム各国に使者を出し入国及び調査を乞う。傭兵団は勝手にどこにでも行け。ヴァルムへ行こうがやめてフェリアで訓練に明け暮れてもいい。ただし傭兵団がヴァルム軍に捕まっても我々は一切関知しない。助けに行くのも禁ずる」

「ああ、それでかまわない」

「傭兵団はアカネイアのどの国とも関係ないと？ そんな言い訳はヴァルムに通用しませんわよ」

「ではヴァルム諸国すべてではなく一国の許可を取るのならどうだろう？」

彼らのやり取りに入り込んで発言したのはカイルだった。

「ほう？」

「その国へ送り込む使者を護衛するための部隊に傭兵団を組み込むのは問題ないはずだ」

「まあ……護衛なら文句を言われるはずはありませんわよね」

「その国の許可をもらえれば少数の軍なら調査隊として派遣できるはずだ。後は順次他の国からも許可を取っていけばいい」

「うまく許可をもらえればいいのですが、取れなかった場合は？」

「その時は交渉を続ける。その間も調査隊は許可を得られた国を調査していけばいい」

「その方が送り込んだアイクたちを放任させておくよりましか」

「それで？ どの国から許可を取るつもりだ？」

アイネが結論付けるとザガットがそう聞いてきた。

「この大陸から近い国は二つだ。北西のドルマ王国、真西のイストリア王国このどちらかから入るしかないだろう。南西にはノーヴァ教国があるがそこは島国で大陸から離れている。調査のために声はかけておくが他国への通行という点では他の二国を優先した方がいいだろう」

ヴァアルムと交易してきたグルニアの重鎮だったジェルドが答える。

「ではこの三国に使者を送ろう。傭兵団を入れるならドルマ、イストリアのどちらかか、アイクお前はどちらに行きたい？」

「イストリアがいいと思います。大陸の中心なら北と南どこから許可が取れても行くことができませんから」

アイネに聞かれたアイクにセネリオがそう助言する。

「ああ、俺もそう思っていた。イストリアに行かせてくれ」

その助言にアイクはすぐにうなずきアイネに頼んだ。

「そうか。ジェルド、グルニアの後継国家のペレジアがこの大陸でもっともイストリアに顔がきくだろう。お前に使者を送ってもらおう予定だがアイク傭兵団を加えてくれるか？」

「ユルゲン様に勝った蒼炎の勇者に加わってもらえるなら願ってもない話だ。断る理由はない」

「蒼炎の勇者？ なぜあの異名をお前たちが知っている？」

テリウスでそう呼ばれていたもののアカネイア大陸に渡ってからは封じていたはずの異名にアイクが反応する。

「ララベルさんの仕業ですね。事あるごとに蒼炎の勇者アイクの噂を立てて、ユルゲン皇子を倒した後にその噂が急速に広まったんでしょ」

「……」

セネリオの推察に得心がいったのかアイクが不機嫌そうに黙り込む。そんなアイクに椅子から立ち上がったカイルが声をかけた。

「アイク、先にヴァルムへ行つてくれ。イストリアの許可が取れ次第僕もそこに行くつもりだ」

「お前は一国の王子だが簡単に行けるものなのか？」

「言つただろう。ファルシオンを受け継いだ僕にはギムレーを倒す役目がある。ギムレーがそこにいるなら遅かれ早かれ僕はヴァルム大陸へ行かねばならない。それならできるだけ早く向かつて向こうに慣れておいた方がいい」

「わかった。待っているぞ」

そう言つてからアイクとカイルは固く握手した。

## 第21話 同じ

フエリアでの会談から1週間もたたず使者のイストリア往訪の準備は整い、アイク傭兵団も護衛部隊に加わりかの国へ赴くこととなった。カイルたちはアイクたちを見送りカシミア港を後にし、ワーレンに足りてない物資を注文しにグルニア市へ立ち寄る。

「ちっ、まだこんなに残ってるじゃねえか！ なにをちんたらしてやがる！」

「ご、ごめんなさい！」

ガス！ ガス！

積み荷を運んでいる下男に雇い主が暴力を振るっているところにカイルたちは遭遇した。

「おい！ あんた何してるんだ？」

薄い鎧と最低限の毛皮しか着ておらずでいくつも生傷を作っている下男を容赦なく殴り続ける雇い主の姿にたまらなくなったルッツが怒鳴り込む。

「なんだ？ 仕事の途中だ。邪魔すんじゃない！」

「うっ！」

雇い主は構わずルッツを突き飛ばす。

「いー」

「そこまでにしてくださいご主人。労働者や使用人への暴力は禁止されています。それはペレジアでも同様のはずです」

ルツツに遅れてカーシヤとともに駆けつけてきたカイルはそう雇い主に注意する。

「ペレジアでも？ あんた他国の人間か？」

「はい。アカネイアから来ました」

カイルがそう言うのと雇い主はにんまりと笑う。

「アカネイア？ あそこからの難民か。立派そうな甲冑を着てるのにそいつはかわいそうなことだな」

ワーレンの統治体制を知らない人々はアカネイア王国は滅びて無政府状態になっていると思っている。この雇い主もそうらしい。

雇い主は眉をひそめるカイルたちに続けて言う。

「それで衣食住を求めてペレジアに流れて来たってか。だったら教えてやるよ。この国じゃあ半獣を買ってこき使うことが許されている。金持ちは見目のいい半獣を愛玩して養っているそうだが俺のような商売人にそんな余裕はねえ。働きの悪い奴はこうやって教育してやるのさ」

言われてみれば下男には兎のように長い耳があり自分たちの様な人間ではなかった。



そして周りを見ると町の人々は雇い主を注意するどころか眉をひそめる様子もなく歩き続けている。むしろ突然雇い主を注意してきたカイルたちの方を白い目で見ている。「なあに高い金出して買ったんだ。殺しやしねえよ、この前殴り続けて元手を取る前に殺しちまって俺も懲りたんだ。まっ、おかげでこいつらは前より従順になったんだがな」

「あ……あなたは！」

カーシヤは口を手で覆い衝撃を受けている。

「いいえ、ジェルド殿がこのようなこと許すはありますがありません。彼の知らないところでこのような悪習がはびこっているなんて、すぐにペレジア王宮に抗議させてもらいます」

亡国から流れてきた難民にしては雄々しいカイルの態度に雇い主はさすがにおかしいと思いはじめた。

「難民が王宮に言っても聞き入れられるわけないだろ。いや……それより次の王様と知り合いなのか？ あんた一体？」

「申し遅れました。僕はカイル。アカネイア王国の王子です」

カイルの自己紹介に雇い主だけでなく周りの野次馬も仰天した。

「馬鹿な……アカネイアは滅びたって皇帝が……」

「このことは後日王宮に、さあ早く彼に謝罪して不当な暴力はしないと誓ってください」  
「フ……フフ……」

だが雇い主は低く笑い声をあげた。

「何がアカネイアの王子だ。アカネイアは屍に襲われ巨竜に潰されボロボロだ。あんたはただの無頼なんだよ。ああ気分が悪い。まだ半獣を買う金はあるしこいつはもう殺しちまおう。おい、ちよつとむごい死に方するが恨むならその王子様を恨むんだな」  
「ひっ、た、助けて」

兎耳の下男は人々に助けを求めるがみな止める様子はない。

雇い主は下男の腕をわしづかみにしカイルに勝ち誇る。

「元王子ならわかるだろうがあんただって馬が走れなくなったら処分するだろう？ それと同じさ、獣の耳が生えたこいつらは人間じゃねえ。半獣だ。俺たち人間の役に立つことしか価値がない家畜だ」

「てめえ！」

「違う！ 彼らは人だ。彼らは僕たちで違うのは耳の形だけだ。僕たちと同じように考え、痛み、行動する。彼らは僕たちと同じ人間なんだ」

それはかつて始めてラグズを見たカイルにアイクが言ったのと同じ、そして幼いころユリナが彼に言い聞かせたことと同じ言葉だった。

「こいつらが人だあ？ あんた王宮より医療施設に向かった方がいいんじゃないか」  
これだけ言ってもまだ凄む雇い主だったが、

「レイ！」

ガツ！

バタ！

突然現れた女に蹴り飛ばされて雇い主は樽に衝突し気を失った。

その女も下男同様薄い鎧と最低限の毛皮しか着ておらず兔耳が生えている。

「レイ！ もう大丈夫だ。あんたは速くこの街から逃げろ」

「ベルモット！ あ、ありがとう、でも」

何か言おうとするレイに気付かずベルモットはカイルを睨み続ける。

「ニンゲンどもが！ 同胞の仇だ。一人でも多く仇を取ってからずらかってやる」

そう言つてベルモットは兎に化身した。

「！」

「ガアアア！」

ズドン！

「カイル！」「カイル様！」

カイルは吹き飛びルツツとカーシャが駆け寄る。

「まだ生きているか。ならこいつらごとく」と

「ここでレイがカイルたちとベルモットの間に割って入ってきた。

「待ってくれベルモット！ こいつらはあの商人から俺を助けてくれたんだ」

「え？」

「お前たちそこで何をしている！ 半獣！」

そこへ騒ぎを聞きつけた衛兵たちが駆けつけてきた。

「半獣だ！ 半獣が暴れているぞ！」

野次馬は逃げながら衛兵に半獣をどうにかしろと訴える。

「なんだと！ くっ一斉にかかるぞ」

衛兵はベルモットに槍をむけた。

ベルモットは兵に目を向け今にもとびかかりそうだった。

「やめろ！ 彼女は仲間を助けようとしただけだ。僕たちとも和解している」

「カイル王子？」

衛兵の隊長らしき男がカイルを見て驚く。

「ベルモットさん、化身を解いてください。後は僕たちから説明します」

「あつ？ ああ」

そこでベルモットは化身を説き人型に戻った。

「王子、よくぞご無事で。それで……これは一体?」

「はい。実は兎耳の彼らが今気絶しているあの商人から虐待をされていたのです」

「な、なんですと?」

隊長は驚くがカイルは厳しく聞く。

「この街では公然と彼らを奴隷として酷使しているようですがあなたはご存じなかったのですか?」

カイルの詰問に隊長は慌てる。

「い、いえ少なくとも私は存じませんでした。」

「んなわけねえだろう。ここまで大っぴらに奴隷扱いされて衛兵の一人が気付かないなんてことあるもんか」

「本当に私は知らなかったのです。ただ……」

ルツツの厳しい追及に隊長はバツが悪そうに話す。

「半……獣耳の移住者が人ならざる者だと気づいてからこの国で彼らを差別する風習は生まれました。それも……アカネイアで悲劇が起こり民が不安に駆られている最中に」

「……」

カイルたちやベルモットの厳しい視線にさらされながらも隊長は続ける。

「彼らがラグズだという種族だということも……彼らへの迫害をやめるように解放令が

ジェルド執政から公布されたのもつい最近のことです。彼らを差別する兵もまだまだ多い」

「ラグズ？」

そう隊長が話すと兵たちは後ろ暗そうに目をそらした。それを横目にベルモットは隊長の言葉に疑問を持つ。

「何はともあれこの街で酷使されているラグズや愛玩動物と称して監禁されているラグズもいるようです。執政からの解放令が出たのならすぐに搜索を、僕たちはジェルド殿に言つて他の町でもこんなことが起きていないか確認を要求するつもりです」

「は、はい。すぐに手配を、お前たち！ その商人を詰め所に連行して搜索の準備だ」  
「はっ！」

兵を率いて隊長が去つて行つたあとレイを医療施設に連れていきカイルたちはようやくベルモットと落ち着くことができた。

「これでレイさんもこの街から逃げる必要はなくなったと思う」

「いや悪かつたな。あんたたちもレイを殴つた奴の仲間だと思つたんだよ」

女はカイルに先の仕打ちを謝る。

「あんたもあの商人みたいなやつにこき使われてきたのか？」

「いや、貴族に愛玩用とか言われて部屋に閉じ込められてた。で解放令が出て新しい王様に見つからないように部屋を移す途中で貴族も使用人もぶん殴って逃げてきた。」

ベルモットはルッツの問いにも気分を悪くせずあつけらかんと言った。

「でもこれでベルモットさんも追われずに済みますね。他のラグズの皆さんも早く解放されるといいんですけど」

「あっ！ それだそれ」

「？」

カーシャが何気なく言った言葉に女は反応した。

「ラグズって異大陸から来た連中のことだろう？ 私たちは生まれながらずっとこの大

陸に住んでたんだ。一緒にされては困る」

「ええっ？」

「私たちの名は「タグエル」。私はタグエルのベルモットだ」

「タグエル……失礼しました。どの文献にもタグエルのことが書いてあるものがなくて」

カイルの謝罪にもベルモットは手を振って許す。

「それは無理もない。タグエルは1600年も前から人から姿を隠していたからね」

「1600……アカネイア聖王国が建国された時代ですね」

ベルモットの語る数字を聞いてカーシヤは学んだ歴史の記憶を手繰り寄せる。

「そうなのか？ 私たちの先祖はそれ以前も隠れ里に住んでたまに人と出くわすぐらいだったんだがある盗賊が現れてから完全に人に見つからないところに移り住んだ」

「盗賊？」

人前に出てこないタグエルを捕まえて売ろうとする盗賊は出てくるだろう。だが住処を変え1600年も人に見つかるまいと息をひそめるくらいにタグエルを追い詰める盗賊と言われてもカイルは想像ができなかった。

「ああ、そいつは一生かかっても使いきれない大金と強い武器で軍隊を作り多くの国を滅ぼした。その際妖狐やガルーツて種族は虐殺され絶滅した。……まあひよつとしたら妖狐は白夜つて国の人たちと一緒に逃げたのかもしれないけど」

「……？」

ベルモットから多くの言葉を聞かされるがどれも初めて聞く言葉ばかりだった。それに国をいくつも滅ぼすほどの盗賊がアカネイア大陸にいたなんてにわかには信じられない。アカネイア聖王国に征伐されたのだろうか？

「今までタグエルを誰一人見つけられなかったんだが、異大陸からタグエルみたいな耳と変身能力を持った奴らが移住してきて喜びのあまり彼らと接触を図ったらそいつら



はすでに人間たちに正体がばれててそれから奴隷扱いさ」

「そうだったんですか。つらかったでしょう」

「ああ、だけど私たちを人間と同じだって言ってくれる奴が現れるなんてね。ありがとうよ」

「いえ、友達と……母の受け売りです」

「……さてこれで里に帰れると言いたいが……あんたどこかの国の王子様だってね？」

「はい。アカネイア王国の王子カイルです」

「あの竜をどうするつもりだ？」

「竜……ギムレーのいる大陸にある国の許可が取れ次第その大陸に向かうつもりです」

そこでベルモットはいくつか数えるほどの間を置いてこう言ってきた。

「よし！ 私もお前たちについていこう」

「ええ？ でもすごく危険ですよ」

ベルモットの提案をカーシャは反対する。

「だからこそだ。自由になれた以上タグエルを脅かす輩を倒してやらないとね。あんたたちタグエルの強さを知らないだろう」

カイルたちは顔を見合わせるが答えは同じようだ。

放っておけばペレジアの軍に参加しかねない。その軍ではまだラグズやタグエルに

差別意識を持つているものも多いだろう。

軍隊の中で差別されている兵は捨て駒として見捨てられたり悪い時は味方から殺されることもありうる。ならば自分たちの近くに置いておいた方が安心だ。

それに獣の特性を持つタグエルの強さはアイク傭兵団でラグズと共闘したときの経験と先ほどの戦いで察しがついている。

「わかりました。よろしくお願いしますベルモットさん」

「さんも敬語もいらない。よろしくな」

「じゃあベルモット、王宮に向かう前に服を買いに行きましょう」

カーシャの勧めにベルモットは首をかしげる。

「服だつて？ いやだ」

「ええ？ だつてそんな恰好のままじゃ…お金ならカイル様が出すから。ね、カイル様」

「ああ。もちろんだ」

断られるとは思ってもよらずカイルにたかってまでカーシャは粘る。

「人間が何を着ようと勝手だが、私にまで押し付けるな。本来タグエルは服なんて動きづらいの着ないんだぞ。この鎧だつて乳房を隠して人間が劣情しないように身に付けているものだ」

「ええー！」

とうとう驚きをこらえられなくなったカーシヤの驚愕の声が街中にこだました。

ベルモット クラス：タグエル

「覚醒」のベルベットの先祖。

## 第22話 ヴァルム大陸

カイルたちはベルモットを新たな仲間に加えた後、ペレジア執政ジェルドと会談しペレジア王国全域で隷属・監禁されているラグズ・タグエル、加えてまだ他にもいるかもしれない獣の特性を持つ種族を探索し解放することを要求しジェルドは承服した。

ジェルドもラグズ——兎がいることは知っていたがタグエルの名前は知らなかった——を奴隷として所有している者がいたことは勘づいていたが、そうした者はジェルドたちに見つからぬよう王都を離れ他の地方都市でラグズを囲っており証拠を押さえることが出来ずヴァルム国家との交渉、渡航準備に取りかからざるを得ず動けずいたが今回のカイルたちの証言、要求により全土への強制捜査を執行することができた。

もしかしたらアカネイア・フェリアでもこのようなことが裏ではびこっているかもしれない。そう思ったカイルは帰国途中にフェリアでアイネに、帰国後はワーレンで領主・マリアンヌに捜査を依頼した。ヴァルム関連の政務も執り行いながら、

ろくに眠る時間が取れないほどの激務にかけりながら一月がたったころに念願のイストリア王国への渡航・調査の許可が下りた。

「死者を操る蟲だと？」

「はい」

老人の問いに男は慇懃にうなずく。

「そんなものを作つてどうする？」

「元老院の意のままに動く兵士を作るためです」

「意のままに動く兵士だと？」

「そうです。決して裏切らず逃げ出すこともない」

意のままに動く兵士と聞いても老人は喜ばずむしろ恐れを抱いた。

「そ、そんなおぞましいことまでして兵士を作つてどうしようというのだ？」

男は手を広げて言った。

「我が国を護るために東の国々を滅ぼすためですよ。特に我が国の近くに版図を広げている——とその国と競い合うように領土を拡大している白夜は厄介です。放っておけば我が国に攻めてくるでしょう」

「考えすぎだ。東の国々は我が国の方に関心をむける気配もないし、我が国の方がはるかに大きい」

「今はね。ですが例えば遠い未来——と白夜のどちらかが相手を滅ぼし領土を広げた

り、あるいは——と白夜が滅びて——がそれらを呑み込んだりすればどうでしょう？」

「……」

ありえなくもない未来の光景に老人は閉口した。

「そうなれば勢力は互角に近づく。まともに戦って必ず勝てるとは限りません。そのための秘術がこれです」

そう言つて男は懐から小瓶を出した。

「多くの犠牲が出てもこの「屍蟲」があれば犠牲になつた者はまた立ち上がる。敵は殺しても蘇る兵士に恐れおののくでしょう。まあ欠点は一度動かした屍が倒されても二度も動かせないことですが、改良できるよう努力しましょう」

「……」

「まあご心配なく、屍蟲に加えてようやく探し求めていたものが手に入ったんです。アトリエに置いてきたままなんです、なんと竜の中でも一番強い神竜の血なんですよ。我が国が建国される前にこの地で竜の王が没したという伝説があるんですがまさか本当とは、これを使えば完全な生物を作ることができる」

「……」

「執政官にお伝えください。テーベは世界のすべてを支配することができます」

(あ、悪魔だ)

そんなものを使って国を守ることができても世界には屍がはびこり滅亡してしま  
うだろう。それに男の言う完全な生物というものには不穏な感じしかなかった。

老人は元老院に訴えて自分の目の前で笑い続ける白い髪の若者の研究を止めなくて  
はと決意した。

「う……」

妙な夢を見てクラウドデウスは目を覚ます。

ギムレーの血を飲んでから声は聞こえなくなったがしばしばこんな夢を見る。

「これがお前を作った者の記憶か……」

夢を見る原因がギムレーならば、夢の男が神竜とやらの血を使ってギムレーを作った  
のだ。

クラウドデウスは自分の右のひらを見た。そこにはギムレーの姿を模したような赤  
い文様の痣がついている。

「アカネイアの王子の目にもこんな文様があつたな……まさかあの王子も竜の血を飲ん  
だのか？ ……ギムレーもしくは神竜の……ギムレーがアカネイアの王子を滅ぼそう  
とするわけか」

神竜と言えはこの大陸のある地域で崇められている存在がいる。早くラズベリア大陸へ行きたいというのになぜかその神竜を滅ぼしたくてたまらない。

「クライネ……早く来い」

クラウディウスはある場所へ向かうことにした。

ヴァルム大陸。

千年前までこの地はバレンシア大陸という名でほとんどの版図がソフィア王国とリゲル帝国が合併して誕生したバレンシア王国の領土であった。

だが初代王アルムの嫡男は臣下から聞かされる父王の武勇に憧憬を抱くあまり父の崩御と同時に国号を父の名をもじったヴァルム帝国、大陸の名もヴァルム大陸と変えて呼称するように下命。——国や大陸の名をそのまま父の名であるアルムとしなかったのは霸王である父の名をみだりに口にすることに畏敬を覚えたからだ——更には父に倒されたミラ・ドーマ神を敬うそぶりを見せずバレンシア教を軽視する態度を見せた。

次第に各諸侯・神官たちの不満は募り独立を表明する国が次々と現れヴァルム大陸は多くの国が点在する地となった。



その中の一国イストリア王国はまだ大陸も国もバレンシアの名で呼ばれていた時代から「砂漠の傭兵王」ジェシーが建国した国である。

「カイル王子、よく来てくれた」

王宮の円卓の間でイストリア王がカイルたちを出迎えた。今は高齢で有事から退いているが若いころは武勇に優れた勇将だった。

「お初にお目に書かれて光栄ですイストリア王」

入国に同行した兵士二人を後方に控えさせカイルは円卓の前に歩み寄り、胸元に手を当てて頭を下げる。カーシャとルツツ、ベルモットは一国の王との会見なので市街で待機してもらっている。

「はっはっ、同じ王族の身だ。そうかたくならなくてよい」

かしまった挨拶をするカイルに王は豪胆に笑いかけ椅子に腰かけることを勧めた。カイルも勧めに応じ椅子に座る。

「このたびは入国と貴国での調査をお許しいただき感謝します」

そう言って再び頭を下げるカイルを王は制する。

「なんの、東から来た竜には民も不安を抱いていた。そなたを歓迎することを言った舌

の根の乾かぬ内に言うのもなんだが……かの竜はアカネイア大陸の国のせいで我が大陸に來たという声が多い」

「いえ、竜が東から來た以上当然の考えだと思います」

遠慮しながらも告げる王にカイルも同意する。

ちなみにヴァルム大陸ではアカネイア大陸と交易を始めるまでは竜が生息していなかったのでギムレーのことを巨竜とは呼ばずに竜と呼ぶ。他に竜と言えば竜騎士の導入のためにマケドニアから輸入した飛竜と20年前ヴァルム大陸にやってきた新たな信仰対象だけだ。

「だから竜を征伐するために非難を恐れず我が大陸に足を運んだそなたらを私は買っている」

「もったいないお言葉、恐縮です」

カイルをほめた後王はふと尋ねて來た。

「ところで貴殿はアイクという傭兵を知っているかね？」

「え、ええ彼とは竜を調べて旅をしている時に行動を共にしたことがありません。助けられました」

カイルは驚きながらもうなずく。

「このイストリアを建国した我が始祖は傭兵でな、そのためか蒼炎の勇者とまで呼ばれ

ている傭兵に興味がわいてこの宮殿まで招いたのだ」

「そうだったんですか！」

仰天するカイルに王は気分良くうなずく。

「我が国」とまで言われる剣士と手合わせさせてみたのだが我が国の剣士は全く歯が立たなかった。はっはっは」

歯が立たなかったという王は全く気分を損ねる様子はない。むしろ晴れやかな感じさえ見せた。

「我が国々が派遣した傭兵が失礼いたしました」

「よいよい……それでアイク殿も調査の許可を取ってからは我が領内で調査をしているが、竜も教団とやらも影も形も表していないらしい」

「そうですか」

カイルもそれは予想していた。ギムレーが現れればこうして王と会見している暇はないだろうし、教団が事件を起こしていればイストリア王都に待機している連絡員から報せがあるはずだ。

「教団なる者たちがこの大陸にいるなら船を使ってこの大陸へ来たのは間違いない。だがそやつらが侵入してきたことはどの国も一切気付いていない」

「……」

「だがそうだな。千年前に存在したという魔法の転移術やワープの魔法があれば大陸近くの島に辿り着いてしまえば気付かれずに来ることは可能だが……おそらく迷信の類だろう」

「そ、そうですね」

王はそう一笑に付すがカイルは魔法や転移術が実在することを知っている。ギムレーの頭の上に乗っていた暗黒魔道士と一緒にいた女。捕虜からも誘拐した女を洗脳して魔法にしたと吐かせている。

「だからそう簡単に見つかる相手ではあるまい。時間がかかっても気に病まぬことだ」  
「お気遣いありがとうございます」

カイルは感謝の意を込めて再度王に頭を下げ、王は笑いながらカイルの肩を叩いた。

「カイルの奴遅いな」

「国王と会見しているんだもの。早く終わる方が問題よ」

イストリア市街地でカーシャとベルモットはカイルを待っていた。ルッツは女2人男1人という状況に耐えられず聞き込みだと言って別の街区へ行った。

そんな彼女たちにガラの悪い男が近寄ってきた。

「ほう？ 真昼間からお盛んだな。俺の相手をしてくれよ」

男の目は薄い鎧と最低限の毛皮という露出の高いベルモットに向いている。どうやら娼婦だと思われているらしい。

「私たちそういう商売の人じゃないの。そうよねベルモット」

「そういう商売？」

「そ・う・よ・ね？」

首をかしげるベルモットにカーシヤは否定するように強調する。ベルモットはごくごくうなずいた。

「おいおい、そんな格好しておいてカタギだと？ じゃあ露出狂か？ だったらここで全部脱いでくれよ。金ならたんまり持つてるぜ。気の弱そうな男から肩をぶつけられたいお詫びにもらったものだけだな。ぎやはは！」

男はカツアゲだと隠す気もなく笑う。カーシヤとベルモットは目を細めた。男は紙幣を取り出しひらひらさせる。

「ほら、こいつが欲しかったらまずその鎧を脱いで」

「行きましょう。ベルモット」

カーシヤはベルモットの手を掴み歩き去ろうとするが

「あつ！ ちょっと待って」

「きゃっ！」

男はカーシヤの腕を振り払いベルモットの腕を掴み引つ張り込む。

「おい、離せ！」

「仕方ねえ、こうなったら力づくで宿に連れてって、嫌がってもこんな格好してる女なら娼婦じゃないなって言い分通らねえだろ」

「……」

ベルモットは獣石を握り化身の準備をする。街中で化身しないように言われているが力づくで金品を奪い自分を娼婦やストリップパー呼ばわりする男に容赦するつもりはなかった。

「そこのお前！ 何をしている？」

「え……」

「？」

だが化身する直前に青髪の男が現れチンピラに注意を始めた。

「デートには見えないが？ どう見ても拉致の現場だ」

「何だお前？ そのスカーフ、貴族か？ 黙っていても選り取り見取りの貴族様は引込んでろ」

「貴族だからこそ困っている民は見過ごせん。ノブレスオブリージュだ。覚えておけ」

「ノブ……レ……?」

聞きなれない言葉に困惑しているチンピラにスカーフの男は拳を構える。

「貴族のたしなみで護身術ぐらい会得している。決闘を望むなら弓を持つてくるが?」

「ぐ……ぐぐ……覚えてろ」

「あ……」

チンピラはベルモットを突き飛ばし逃げ出した。スカーフの男は突き飛ばされたベルモットを支える。

「大丈夫か?」

「ああ、ありがとう。自分で何とかできたけど」

「ベルモットつたら、ありがとうございます。うちの連れを助けてください」

カーシヤは頭を下げるとスカーフの男は青髪をかき上げ言う。

「なに、先ほども言ったが貴族にはノブレスオブリージュがある。礼などいらぬ」

「ノブレス……?」

「貴族の義務、税を取って働かなくても豊かに暮らしている貴族は民に対し施しを与える義務があるという意味よ」

首をかしげるベルモットにカーシヤは説明する。

「ほう、知ってたか。そういえば君は鎧を着ているしどこかの貴族の側仕えなのか?」

「はい。アカネイア王国のカイル王子のお付きをしています。カーシャと申します」

カーシャの自己紹介にスカーフの男は驚く。

「アカネイアの……使者が来ていたとは聞いていたがもうこの大陸に？」

「え？」

「いや、こつちの話だ。紹介がまだだったな。私はアルバレア王国ロザンヌ地方のヴィオール領の公爵だ。近々お会いすることになると思うが王子によろしくお伝えしてくれ」

「あ、あの！」

カーシャは呼び止めようとするがヴィオール公爵は振り向きもせず立ち去って行った。

ヴァアルム皇宮

修練場にて一人の少年が兵士に調練を施していた。

「ぬううううん！」

ザン！

「ぐはっ！」



一方的な殺生を訓練と呼ぶならだが。

「軟弱な。我が精兵から脱落するわけだ」

「お疲れ様です。陛下」

紙きれのように兵だったものを斬り捨て無様だと吐き捨てる赤髪の少年に兵士は汗拭きを差し出す。少年は礼も言わず剣を収め汗拭きを受取り汗をぬぐった。

「脱落した兵士はこやつで最後か？」

「はっ！ 今本土にいる兵士は皆初代皇帝の伝説を再現するために集まった精兵にございます」

少年の問いに兵士は脂汗を流しながら大声で答える。声を張り上げることで身体の震えを止めるために

「うむ、歴代皇帝の悲願を叶える日も近いということか」

「ははっ！ 仰る通り」

この赤髪の少年こそ現ヴァルム皇帝ファルス。ヴァルム大陸再統一の悲願を叶えるために隣国へ攻め込み戦死した父帝の後を継ぎ若くして皇帝の座に座る少年皇帝である。

彼は帝国から独立した4国を奪回するため、すぐに戦いを起こさずに国力、特に軍事力を蓄えることにした。

そして彼の目になかなかつた兵の粛清を終え4国をまとめて敵に回しても戦えるだけの軍がようやく完成したらしい。

気分をよくするファルスに兵士は恐る恐る報告する。

「そ、その……陛下」

「ん？ どうした。言ってみよ」

「陛下に謁見したいという者がおりまして」

「ほう」

力を振るい上機嫌のファルスはすんなり来客に会うことにしたらしい。兵士はこっそり息をついた。

ヴィオール クラス？ボウナイト

「覚醒」のヴィオールの先祖。貴族としての誇りを持ちノブレスオブリージュを実践している。アルバレア王子ユーリとは身分を超えた親友。ヴィオールはファミリネーム。

ファルス クラス：オーバーロード（魔法戦士）

「外伝」のアルムとセリカの子孫。武勇に優れているが子孫のヴァルハルトほど特化していない代わりに魔法を使うことができる。

## 第23話 神竜の巫女とソンシン

ガチャ！

「ふあ？」

扉が開く音で少女は目を覚ます。

「子供？ ……こんな時間まで寝てたのか」

扉を開け入ってきたのは男だった。長い青髪を流した細身だが筋肉質な強そうな男。

「ふあああ！」

「悪い起こしちゃったか。でももう昼だぞ」

男はあくびを出している少女の額に手を当てる。

「病気で寝てたわけでもなさそうだな……そろそろ起きないと生活の規則が崩れちゃうぞ。さあ起きるんだ」

「何をしておる！」

赤い服を着た老人が慌てて部屋に来る。

「チキ！ ……起こしてしまったのか」

「俺がファルシオンを使えるようにする儀式が終わるまでの間この神殿を探検してたん

だ。まさかまだ寝てる子供がいると思わなくて」

「……この子のことはわしに任せておけ。それよりメデイウスが解放軍にとどめを刺そうとしておるぞ」

老人の報告に男はうろたえる。

「なんだって！ アルテミスは無事か？」

「今は大丈夫じゃ。じゃがもう時間がない。もうそなたがファルシオンを使えるようにしてあるが徒歩でアリティアに戻つても間に合わぬだろう。わしがワープで送つてやろう」

老人は男に剣を差し出し助力を申し出た。

「頼む……じゃあチビスケまたな」

『かのをわがのぞむちに　メガスワープ』

男は少女に手を振り、老人の詠唱で転送されていく。

老人は振り向き少女に近づく。

「……」

少女はぼおつと老人を見返す。

『ながきときをねむるがいい　メガススリーブ』

少女はたちまち睡魔に襲われ眠りにつく。

眠る直前老人はつぶやいた。

「すまぬ」

「…………ふあ」

神殿の一室で少女チキは目を覚ます。

コンコン。

「失礼します」

そう言つてから世話係のシスターが入つてくる。

「巫女様、お目覚めのじか…………あら？ お目覚めだったのですね」

いつもは起こされないう限り眠り続ける巫女の自発的な目覚めに赤毛のシスターは軽く驚く。口には出さなかつたが顔には珍しいと書いてある。

「うん…………ふあ〜」

眠気が取れていないのか無意識にあくびが出る。

「ではお顔をお洗いください。食事の準備はできていますので」

「うん。すぐやるー」

チキは洗い場に向かう。最初はシスターが顔を洗うなどのことまで補助しようとしたがチキの方から自分でやると言つたのだ。シスターも譲ろうとはしなかつたが「自分が同じようなことをされそうになつたらどう感じる？」とチキに言われて引き下がるこ

とにしたのだ。チキはふいに立ち止まりシスターに尋ねる。

「キツト、今日出発するんだよね？」

「ええ、食事が終わって巫女様の準備がお済みになったらすぐに、アルバレア王宮には3日後に到着する予定です。……おやめになりますか？」

チキは首を横に振って否定した。

「じゃあ早く済ませないと、じゃあまたね」

「食事だけはゆっくり摂ってもらいますからね」

シスターの忠告を背にチキは部屋を出て洗い場に向かう。

すれ違う別のシスターや修道士のあいさつを受けそれに答えながら通路を歩いている途中、チキはさつきまで見ていた夢を思い出す。

（そうだ。バヌトウのおじいちゃまに連れ出される前にガトー様以外の人と会ったことがあったつけ……髪の色がマルスのお兄ちゃんに似ていたから親戚の人かな？　アリティアに来た時も会ったことないけど）

結局チキは洗い場に到着するまでにそれらしい人物の心当たりを思い出すことが出来なかった。

イストリア到着から2週間後。

ラーズ教団もギムレーも姿を見せず彼らの仕業らしい事件も起きず、調査や野盗退治などをこなしていくうちに時間だけが流れて行った。

そんな中、イストリアの西に位置するアルバレア王国から使者が来た。

アルバレアの王子と南のソンスン王国国王がカイルに会いたがっているとのことだ。それも……

アルバレア王宮（旧ソファイア王宮）

「キラキラして派手な部屋だな」

「あの…カイル様、本当に私たちがついてきていいんでしょうか？」

「相手方が連れてきてほしいと言ってるんだ。……ベルモットを」

会见までの時間、カイルたちは客室で待機していた。なおベルモットは前回のごろつきの件で人前で肌を見せるとあのような輩が迫ると学び、戦闘以外は外套を羽織っている。

「大丈夫かよ？ 自国での行動を許可する代わりにタグエルを殺して見せろとか言われ  
ないだろうな？」

「そう言われたらさすがに断る」



ルツツの疑念にカイルは毅然と答える。

「だけどアルブレアの公爵にベルモットたちを助けてもらった以上礼を言わないといけない。公爵がラグズのことを知っていてベルモットをラグズだと思つて助けてくれたのならないけど……」

「カイル王子とお連れの皆様。お待ちせしました。我が主とソンシン王の準備が整つてございます」

そう話してる間に侍従がカイルたちを呼びにやつてきた。

「あつ、はい！ 伺います」

「ではご案内します。こちらに」

そうしてカイルたちは侍従に案内され円卓の間に入る。

中には長めの金髪をサイドに結んだ男と長い黒髪で見たことのない形の白い鎧を着ている男とその後ろに青髪のスカーフを首元に巻いた男と変わった服装に外套で顔を隠した男が椅子に腰掛けてカイルたちを待っていた。

更にもその奥には赤い装束を着た長い緑色の髪少女が座っていた。その後ろにはシスターが立ったまま待機している。

「え？ お兄ちゃん！」

少女はカイルを見るなり立ち上がりカイルの元に近寄ってきた。

「カイルお前。妹がいたのか？」

「そんなはずないわよ。いたら私が知らないはずないじゃない」

ルツツとカーシャがそんなことを言い合っているが少女は意に介さない。

「あ……あの？」

少女はカイルの顔をしばらく見つめると一歩下がる。

「あ、ごめんなさい。昔の知り合いと間違えたみたいです」

「い、いえお気になさらず」

謝る少女にシスターが近づいてくる。

「主が失礼いたしました。さあ巫女様、お席に」

「う、うん」

少女はシスターに背を押されて席に戻っていく。

その少女の耳はよく見ると普通の人間より長く尖っていた。

（あの耳……まさか、でもこの大陸にもいたのか？）

少女の正体について考え込むカイルに金髪の男が話しかけてきた。

「お初にお目にかかります。カイル王子、アルバレア王国の王子ユーリです。病床の父

に代わりご挨拶させていただきます」

アルバレア王子ユーリが胸に手を当てながら頭を下げカイルに挨拶する。

「ソンシン王国の国王ということになってるリヨウヤだ。王というより村長に近い。あまり堅苦しくしないでいいぞ」

白い鎧を着たソンシン王リヨウヤが腕を組んだまま名乗る。

「アカネイア王国の王子カイルです。このたびはお招きいただきありがとうございます。どうぞいます」

カイルもまた胸に手を当て頭を下げ挨拶する。アカネイアという言葉に少女は反応を示すが今度は何もしてこなかった。

「いえいえお越しいただいて感謝します。……巫女様、どうぞ」

ユーリに促され、チキが立ち上がる。

「初めまして、「神竜の巫女」チキです。今日えつと……カイル王子をここにお招きするようにユーリ王子にお願いしたのは私です。遠いところまで来てくださりありがとうございます」

シスターの耳打ちを受けながらチキが挨拶する。

「えっ巫女……殿がこの会談を？」

「ノーヴァ教国で巫女様のお世話をしています。シスターキットと申します」

チキに続いてシスターも自己紹介を終える。

「初めましてカイル王子、陛下から公爵としてヴィオール領を任せられています」  
青髪のスカーフの男が頭を下げ挨拶する。

「あなたが……カーシャとベルモットを助けてくれてありがとうございます」  
「いえいえ、貴族として当然のことをしたままでです」

カイルの礼をヴィオールは手を振って謙遜する。

「それと……」

ユーリがもう一人を紹介するべきか言いよんどんでいると、

「僕のことよりベルモットという兎のタグエルを連れてきてくれたかい？」

「あ……ええと？」

向こうの外套の男に言われカイルはまだベルモットを彼らの前に出していないか迷う。

「……いいよ。いざとなりや逃げればいいさ」

ベルモットは自ら進み出て外套を外す。

「タグエルのベルモットだ」

ベルモットが姿を見せるとユーリたちが若干驚く。

「え？ ……えっ？」

チキは知らされていなかったらしくベルモットの耳とタグエルという言葉に戸惑う。  
「……そうか、生き残っていたのか」

外套の男はそうつぶやくとすぐに外套を外した。

「あつ！……」

ベルモット以外のカイルたちは思わず驚きの声をあげた。ベルモットは相手の正体に察しがついていたようだ。

男の耳は狐の形をしていた。髪と耳は薄茶色をしている。

「僕は「妖狐」のコイ。今はこの大陸の南西に住んでいる」

コイが言い終えるとヴィオールが進み出てくる。

「ユーリ王子がリョウヤ様と会見する時に私も王子のお付きとして同伴していたのですが、その時に勝手ながらカイル王子の来訪をご報告させていただきました。カーシャ殿たちと会った時のことも……申し訳ありません」

「いえ、異国から少数とはいえ軍が入り込んで来れば不審がるのは当然です」

「その際、ベルモット殿の事も話しましてね、あの時は兎耳を装飾品だと思っていたのですが、リョウヤ様はそのことをかなり気にされてましてね」

「その後王子とベルモットをソンシンに招待しようとしたんだが、巫女殿がユーリ王子にカイル王子と話があるから会合を開いてほしいと頼んできたそうだな。俺たちも参

加させてもらうことにした」

ヴィオールの説明にリヨウヤが補足を入れる。

「そうだったんですか」

チキが主催した会談になぜソンスン王と妖狐が居合わせたかについては得心がいった。

カーシャとルツツの紹介も済ませる。そこでチキがおそろおそろの切り出した。

「カイル王子、あの……私は人ではありません。アカネイアから来た竜です」

「ええ？」

「何だと！」

カーシャたちだけでなくリヨウヤたちからも驚きの声上がる。ユーリとキツトは肩をすくめて見守る。

カイルも薄々そんな予感はしていたが彼もどう見ても10代半ばにしか見えない少女が竜を名乗ることに驚きを隠せない。

「もう二千年は生きてます。起きていたのは千年位だけ……」

「……」

千年でも途方もない時間だ。一同は絶句する。

「カイル王子、ファルシオンが壊れちゃったんでしょう？」

「え……なぜそれを？」

話していいのになぜ知っている？ カイルがそう思っただけで聞き返すと。

「おかあ……ナーガが夢に現れてこう言ったの。ファルシオンが砕けてしまったから私の牙でファルシオンを修復できる工具を作れって」

ナーガが夢に。カイルが生死の境をさまよっている時と全く同じだった。

「牙？ そんなもの巫女殿からどうやって……まさか」

思い当たるフシがあることに気付いたカイルにチキはうなずく。

「竜に変身した私の牙を切り出して工具にするの。ファルシオンの刃を加工できるぐらいの硬度を持つ物質は私の牙ぐらいだから」

「牙を……そんなことして巫女殿は大丈夫なんですか？」

心配するカイルにチキは手を振る。

「大丈夫、刃を加工するくらいちよつとの量で済むから」

「……」

変身したチキは相当大きくなるらしい。カイルたちは絶句する。ギムレーには負けるだろうが。

「ユーリ王子には工具が出来た後刃を加工できる鍛冶屋さんを探してほしいんだけど、できますか？」

「ええ、それぐらいお安い御用です」

ワーレン同様、アルバレア王国にも腕に覚えのある鍛冶屋があるらしい。すでに候補を定めたのかユーリは快諾する。

「それでカイル、封印の盾は？ マルスが持っていたはずだけど」

「それは……ファイアーエムブレムのことでしょうか？」

「ええ」

当然のことのようにチキは肯定する。

「客室の荷物袋の中にあります」

客室の方を向いてカイルは言った。

「そう、なくさないようにね。盾もそうだけど盾にはめてあるオーブが1つでもなくなったら封印の力がなくなっちゃう」

「封印？」

「うん。竜の祭壇っていうマケドニアの遺跡の地下に眠る地竜を封印しておくには封印の盾にはまるオーブ5つの力を維持しておかなくてはいけないの。盾というより台座と言った方がいいのかもしれない」

「台座……」

「それにギムレーっていう竜はナーガでも完全に滅ぼすことはできないから、ファルシ



オン同様ギムレーを封印するには盾がきつと必要になる。今度は絶対に壊されなくて」  
チキの念押しにカイルは強くうなずく。チキは話し終えたらしくしばらく場は静まり返った。

「……巫女の話は終わったようだな。俺たちの番とさせてもらおう。まず君たちはタグエルと行動を共にしているがどういう関係だ」

「……仲間です。竜と教団を倒すために彼女に協力してもらっています」

鋭い眼をむけるリヨウヤにカイルは毅然とした態度で答える。

「この人の言っていることは本当かベルモット?」

カイルとリヨウヤを横にコイはベルモットに聞く。

「本当だ。私が縄もつけられずにこいつらに服従させられるタマに見えるか?」

コイは肩をすくめて否定して見せた。なおもリヨウヤはカイルの目を見続ける。

「本当だと誓えるか?」

「はい!」

カイルはきっぱり答え、カーシャとルッツもうなずきを返す。

「そうか。ベルモットの他にもタグエルはいるのか?」

「ああ。人間に見つかって隷属させられていたけどカイルに助けてもらった」

リヨウヤの問いにベルモットが答える。

「そうか、礼を言うカイル王子。妖狐と共存する俺たちにとってもタグエルの生き残りがいたのは喜ばしいことだ」

「いえ、僕は母や友人に言われた竜も獣に近い種族も人間と変わらないということをやタグズやタグエルを知らない人たちに教えただけです」

チキは感心しリョウヤはラグズという名称に一瞬怪訝に思ったが、別の種族のことかもしれないと思いい口に出さなかった。

「これからはコイたち妖狐とも接していくことになるかもしれない。なら話しておいた方がいいかもしれないな」

「……？」

「俺たちと妖狐の先祖は1600年前まで東の大陸で暮らしていた。白夜王国という国を建ててな」

「ええー！」

予想外の事実にかーシヤたちは驚く。チキも驚きカーシヤたちと一緒に声をあげた。カイルも声をあげないようこらえていたが衝撃は隠しきれない。

1600年前に点在していた都市国家は不毛な争いを繰り返し、そこにアドラー1世が現れ神から賜った三種の神器とファイアーエムブレムをもってそれらの威光を用いて彼らを仲裁し王とあがめられアカネイア聖王国を建国したと言われているからだ。ま

さか大陸を渡ってまでアカネイアを拒む国があったとは。

「なぜ……わざわざ海を渡ってこの大陸に？」

カイルの疑問にリヨウヤはうなずき語り始める。

はるか昔、現在アカネイアと呼ばれている大陸の北東の地域では白夜王国と暗夜王国。そして二国の周辺にいくつか小国が存在した。

暗夜王国はその国の言葉や名称が理解できなかった頃の白夜が自分たちの国と対比して付けた俗称で正式な国名はもう歴史に残っていない。

二国は覇権をめぐり闘い、和解し束の間の平和を享受したが、いつしか神祖竜の血と神器が弱体化し衰退していった。

そんな時に現れたのがアドラという盗賊だった。彼は莫大な富といざこから手に入れたかつての神器に劣らぬ三種の武器、そして黒いオーブを持って軍隊のごとき盗賊団を率い、多くの国を滅ぼしていった。

アドラは残虐で滅ぼした国では虐殺、略奪の限りを尽くし暗夜も滅び、風・炎・氷の部族は文化を失い過酷な環境にもかかわらず最北部へ逃げて行った。

他の国やアドラたちと風習や文化の違う白夜は民族浄化の憂き目にあう危険が大きい

い。もし生き残っても動物並みの扱いを受けるだろう。そこで彼らは意を決して砂漠を渡り、海を越え西の大陸へ流れ着いた。

だがその地では大地母神ミラを崇拜するソフィア王国、戦神ドーマを奉じるリゲル帝国に二分され、神祖竜と仏を信仰する白夜の民は異端で迫害を受ける可能性が高くこれ以上海を渡る余力もない。彼らは西の大陸の山々とうっそうとした森林に囲まれた土地に隠れ里を築きひっそりと暮らしてきた。

だがルドルフ皇帝がミラを、アルムがドーマを封印して宗教面の迫害の心配が薄れ、解放戦争に白夜人の末裔が参戦し、バレンシア王国と無関係ではいられなくなった。

また過酷な山々で暮らす生活にも限界があり白夜人は森を切り開き小さな村を作り徐々に外と交流を持つようになった。

だがアルムが崩御した後世継ぎが突如国名を変えバレンシア教を軽視したことで多くの離反者が出てくるようになり、数世代後には国は割れ、隠れ里と近くにある村ラムはこの国からも切り離された地となった。

どこにも属さないラムは山賊などに狙われた。そんな村を襲う山賊を白夜人が撃退し、村を守る代わりに自分たちを受け入れてほしいと持ち掛けた。その後白夜人とラムの村民は国を建てることになった。それが今のソンシン王国である。

「……」

リヨウヤからこれまでの話を聞いたカイルたちは開いた口がふさがらなかつた。  
「すげえ壮大な話だったな」

ルッツは軽く言うものの表情は引きつっている。

だがカイルはソシンシン建国までの歴史以上に信じられないことがあつた。

「アカネイアの始祖が……盗賊？ そんな……馬鹿な」

信じられない思いでつぶやくカイルにアドラのことを祖先からの記録でしか知らな  
いリヨウヤもかける言葉がない。だが――

「うん。本当の事だよ」

断言したのはチキの方だった。

「ガトー様……私と同じ竜から封印の盾に関することは聞いた。ラーマン神殿から盾を  
盗み、オーブだけは抜き取って売り払い、王様になつた後ファイアーエムブレムと名付  
けて紋章にしたって」

「……」

「売り払つたって……その盗賊は黒いオーブを持っていたと聞くぞ。あれはいつたい  
？」

カイルたちが閉口する中リョウヤは尋ねる。

「闇のオーブだね。それだけは手元に置いておいたんだって。相手の精神を支配して動けなくすることが出来るから、そして持ち主の悪い感情を増幅して悪人にしてしまうという。おじさ……ハーディンでもとんでもない暴君になるくらいだから盗賊になつたアドラつて人は相当オーブに侵されたんだと思う」

「黒い……闇の……あれが？」

カイルはファイアーエムブレムにはめられたオーブを思い出す。

その中の黒いオーブには決して直に触れてはいけないと父からも夢に出てきたナーガからも言いつけられてきた。

回収したりエムブレムにはめたりする際どうしても触れなければならないときは布などを介して直接触れないようにしろとも。

「確かにアドラには誰にも攻撃が出来なかったと聞く。まるで動けなくなったように」

「ガトー様が闇のオーブをアドラが持つてることに気付いて、彼を倒してオーブを取り戻したのは建国から何十年も後、もうお世継ぎも成人して彼なしでも国を維持できたからこれ以上は干渉しなかったんだって」

「……」

「竜の牙で工具を作るのだの、一番最初の王様は盗賊だのとんでもねえ話ばかり出て来た

な」

ルツツの言葉にこの場にいる皆は口には出さないものの同意した。そこへ

ガチャ

「お、王子、た、大変です！」

「何事だ。会議中だぞ」

突然駆け込んだ兵士をヴィオールは叱りつける。

「し、城を死体が、骨が、」

ユーリたちは混乱している兵士の世迷いごとだと思ったようだがカイルたちには心当たりがあつた。

「屍はどこから！」

「わ、わからない。突然城中に」

「僕たちは屍を倒してきます。ユーリ様たちはここに」

兵士から状況を聞き出したカイルはユーリにそう指示するが、

「待て王子！ 俺も行こう。祖先に比べて弱くなつたらしいが俺は神祖竜の末裔である前に武人だ。ここで隠れてなどいられない」

「僕も行くよ。妖狐の力を人間に見せつけてやる」

リヨウヤとコイも戦う気だ。

「わかりました。ユーリ様とヴィオール公爵は巫女殿を守ってください」

「いいでしょう」「お任せを」

チキをユーリたちに任せ、カイルたちとリョウヤたちは城の中に入り込んだ屍と黒幕を倒しに向かっていった。

リョウヤ クラス：劍聖

「if」のリョウマの子孫。ソンシン王国国王。最近ラムを白夜の里と統合しソンシン王国の王となった。隠れ里の長の息子として育つたため王というより武人だという意識の方が強い。

コイ クラス：九尾の狐

「if」のニシキの子孫。ソンシンに住む妖狐の長。

ユーリ クラス：ゴールドナイト

アルバレア王国の王子。数年前まで猛将で名をはせたが今では武術から離れているため武を重視するヴァルム帝国では昼行燈と言われている。皇帝ファルスはそう呼ばないらしいが。

キット クラス：聖女



人 「覚醒」のセルジユの先祖。チエルシーの娘。ノーヴァ教国のシスターでチキの付き

## 第24話 マスターブルフ

「はあああ！」

ザン！ザン！ザン！

カーシヤの振るう剣が屍たちを薙ぎ払う。

「すげえな。前より段違いだぜ」

ガン！

同じく剣を振るうルッツはカーシヤの戦いぶりを見てうそづく。

「ああ、ペレジアでギムレーと遭遇して以来、猛特訓したらしいからな」

ザン！

カイルも屍を切り捨てながら同意した。

「グオオオ！」

ベルモットも兎に化身してうなり声をあげながら屍を吹き飛ばす。

カイルたちは屍を薙ぎ払いながらある場所へ向かっていた。

ファルシオンは修復不可能だと判断されてもファイアーエムブレムもとい封印の盾の破片もオーブも回収できないまま、盾を抹消したと判断するほど教団も能天気ではあ

るまい。

つまりカイルたちが目指している場所はその二つを保管してある客間——ではなく屍を召喚している黒幕の居場所だった。

「ガアアア！」

ゴオオオン！

客間に侵入しようとした屍は部屋から出てきた敵に吹き飛ばされる。

「この大陸に来てようやく姿を現したか。退屈だったぜ」

そう狼の形態のままひとりごちたのはオルンだった。

アイク傭兵団を離れ一時的にカイルたちと同行してもらっていた彼には会見に立ち会わせず、ファルシオンの破片とファイアーエムブレムを置いてある客間で荷物番をしてもらっていた。

ガチャガチャガチャ。

屍の歩く足音が遠くに聞こえる。

「フン」

オルンは動かない。逆方向の廊下から死臭が漂っている。殺された兵士のものの可

能性もあるがおとりにおびき寄せられたオルンの留守を狙って客間に侵入しようとする生ける屍の可能性もある。

「戦いの雰囲気にもまれて持ち場を離れんようにせんとな」

ブオン！

ガチャガチャガチャ。

「神竜を殺せ」

この城の混乱を起こしていた男テイベリウスはオーブに念を込め屍を召喚していく。彼は正気の状態ではない。クラウデイウスの魔術によって神竜を殺すという暗示をかけられている。

この城に送り込まれたラーズ司祭は彼一人だ。もしカリグラのようにクラウデイウスへの反感や野心を持つているものが独断でこの城にいる神竜の血を飲んだ場合、クラウデイウスにとって厄介な敵になってしまう。修復したかもしれない盾を奪うことは難しくなるが洗脳した司祭と思考のない屍に任せた方が安全だった。

テイベリウスが持っているのはリーベリア大陸のシエロ地下遺跡に封印されていたゾンビの杖とスケルトンの杖をラズベリア大陸の錬金術で合成した「コープスのオー

ブ」。このオーブでヴァルム大陸内の別の場所で作った屍をこの城に召喚しているのだ。

ガチャガチャガチャ。

屍は誰もいないと思っっている通路を歩く。

ガシヤアアン。

そして屍の一体が突然粉碎し、倒れ消滅していった。

ガシヤ？

残りの屍が屍を倒したものの方へ振り向くと、そこには大きな狐がいた。

「クオオオオン！」

ガシヤガシヤ！

反応する間もなく残りの屍も破壊されていく。

「これが木の葉隠れの術を応用した新たな遁術さ」

妖狐の使う幻術「木の葉隠れの術」は昔は木々が生い茂る山や森でしか使えなかったが1600年の逃亡・隠遁生活で改良し続け、あらゆる場所で使えるようにした遁術に昇華した。欠点は一度攻撃すれば打撃音や足音を隠すことができないのでその後は姿

を隠してもあまり意味がないことだが。

コイは人間形態に戻って次の場へ向かう。

「さっ、次次」

「はあー！」

鋭い一閃が屍を切り裂き骨まで断ち切る。

リヨウヤは刃を鞘に納めた。

アカネイア大陸でもヴァルム大陸でもほとんどいやすべての国、軍で戦場で刃を鞘に納めたまま歩き回るのは自殺行為だということとは初期の訓練で叩き込まれる。だがかつての白夜、そして今のソンシンには鞘に納めた状態から瞬時に刃を抜くと同時に相手を切る居合という流儀がある。

無論戦場では鞘から抜いたまま移動するに越したことは無いのだが。

「うあああー！」 「きやあああー！」

リヨウヤは刃を鞘から抜かず悲鳴が聞こえた方へ向かう。

そこでは宮殿の使用人が屍に襲われていた。まだ死傷者は出ていない。

「はああー！」

シユン！

瞬時に鞘から刃を抜き屍を切る。

「大丈夫か？」

「あ、ああ。ありがとう」

リヨウヤの格好は異国の鎧兜なので、使用人は彼をソンスンの王だと思わず彼が連れてきた兵士だと思つてタメ口で礼を言うがリヨウヤは咎めない。

「しばらくの間、俺がここで屍を食い止める。お前たちはここから動くんじやないぞ」  
「あ、ああ」

リヨウヤは今度は刃を鞘に納めず使用人のいる部屋の前に仁王立ちする。

リヨウヤがここに来るまで戦鬪が終わる度鞘に納めていたのは襲われている者や居合わせた者たちを混乱させないためだ。彼らの前に刃を抜いた男が現ればそれが屍でなくとも襲撃者だと思われ狂乱状態になりこちらに襲い掛かる者や絶望しせめて楽に死にたいと自ら命を絶つ者もあらわれるだろう。

リヨウヤにとつて前者は非戦闘員の手にかかるようなら自分はそれだけの力しかなかったと割り切ることができる。だが自分のせいで戦いとは無縁のはずの人間が命を落とす後者だけは起こしたくなかった。

テイベリウスはふいにつぶやいた。

「そろそろか。兵をおびき寄せられて手薄になった神竜のいる部屋を襲うのだ」

ドン！

ガチャガチャ。

フォン！ グサ！

ヴィオールの放った弓矢が屍の頭に刺さる。

ガチャガチャ。

その後ろから3体の屍が躍り出てきた。

フォン・フォン・フォン！

グチャ！ ガチャ！ ドサ！

ヴィオールは一度に三本の矢を放ち屍を仕留めた。

「フツ！弓ぐらい一本ずつしか放てないとは思わないことだ」

ガシヤアアアン！

そこへガラスを割ってバルコニーから屍が出現した。別部屋のバルコニーからこの部屋のバルコニーに飛び移ったらしい。この部屋は3階だが見た目通り屍には転落死



への恐怖はない。

「はっ！」

ブオン！ ビチャ！

だが侵入した屍はキットの裏手で頭を粉碎さ倒れた。彼女の手に脳漿がかかる。

「キット！」

「ご安心を。私がいる限り不埒者を巫女様に近づけません。ただ汚物が部屋中に飛び散ることはご容赦を」

頭蓋骨をかち割ったキットの手を心配して駆けつけたチキにキットは安心させる。

「シスターだというから魔法で攻撃すると思ったのだがまさか手拳とはな」

若干引きながらヴィオールはキットに声をかける。

「詠唱が間に合わないこともありますから。巫女様の担当を拜命してから訓練を怠らず軽い武器なら扱えます」

残ったユーリとチキは隣り合いに棒立ちしていた。

「ふむ。前はヴィオール公、後ろはキット君で十分らしい。私は巫女様と一緒に大人しく守られていよう」

「あれ？ ユーリって剣と槍の達人じゃなかったっけ。あなたのことはお手紙出す前に一通りノーヴァの司教様から聞かせてもらったんだけど？」

実際、ユーリの履物の帯には剣が納められていた。

「ははっ、アルム王の末裔ということ余計な箔をつけられただけですよ」

「なぜだ？ 屍の減りが多すぎる」

召喚者は契約線で召喚した屍が動けるのか破壊されたのか確認できる。屍の減少を知ってティベリウスはうろたえた。

ティベリウスの予定では場内を遊撃する暇があるのはイストリアから来たカイルたち一行だけで、彼らを東西に分断して往訪に随行した部隊が駆けつける前に数で押す作戦だった。

だがこの会談に急遽リョウヤとコイが加わったことで実際には西側をカイル一行全員。東側をリョウヤ・コイが受け持ち用意した屍では彼らを倒すのに数が足りなかった。コイに至っては遁術で存在すらつかめていない。アカネイア・ソンシンの部隊も展開しかなりの屍を掃討しているようだ。

「見つけたぞ！」

そこでルッツがようやくティベリウスのいる宮殿の敷地内に建てられた塔の屋上へたどり着く。

「ここなら宮殿の様子も丸わかりつてわけか」

双眼鏡を手に宮殿を眺めていた黒幕の前にしてルッツはこぼす。

「おのれ、こうなつたら貴様を殺し、すべての屍を神竜の下へ向かわせるか」

『おちてつぶれる バウクラツシュ』

そう唱えた瞬間、カイルの体が宙に持ち上がる。

「うわあ」

ズウウン！

そのまま床に落ちた。

「ぐう」

鎧のおかげで一命はとりとめたが杖で回復しない限り動けそうにない。

『おちてつぶ』

ヒイイイン！

「？」

その時、天馬に乗ったカーシャが塔屋上に現れた。

「下に落とす魔法みたいだけど天馬に聞かかしら？」

「そうだな、バウクラツシュは空を飛ぶ者には効かぬ……」

ブオン！ ジャッキ！

「！」

いつの間にか召喚された弓を構えた屍がカーシヤの天馬を狙っていた。

ヒュヒュヒュ！

フオン。

だがカーシヤは天馬を巧みに操り放たれた弓矢をすべてかわした。

「なっ？」

ズン！

「ぐふ……！　なぜ？　わしは……こんな……と」

最後に暗示が解けたティベリウスは自分がなぜこんなところにいるのかわからず気を失った。

ティベリウスが気絶すると弓を射ていた屍も消滅する。召喚者なしでは召喚物を留めておけないコープスのオーブの欠点だ。

「先走って一人で行くから。待つてて召喚者がいなくなつたから屍は現れないと思うけど、口封じで殺される前にこの司祭を送っていくから」

ティベリウスをペガサスに乗せ、カーシヤは塔から離脱と手綱に手をかける。

「カーシヤ、お前いつの間にかここまで天馬を乗りこなせるようになったんだよ？」

「あはは、苦難を共にしてから通じ合うものが出来たみたい」

苦難とはカイルをギムレーの背まで送った時、さんざんギムレーの羽ばたきが生み出す暴風によって吹き飛ばされ天馬を駆使して耐え抜いた時の事だろう。あれによってカーシヤは天馬と自然に阿吽の呼吸が取れるようになったらしい。

「前方の屍5体をヴィオール公爵が、後方の屍3体をシスターが倒している最中のようです」

「では中央にいるのが神竜とお飾りの剣を持って震えている王子だけか」

「はい」

事前にクライネの転移で恐び込んだ王宮の謁見の間が見える部屋でクライネは双眼鏡を片手にクラウディウスに部屋の様子を報告していた。

「そろそろか、念のためザツハークを持って行きたいところだがないものは仕方がない」  
ザツハークの魔道書はギムレーの背でカイルと戦った時に彼に斬り捨てられた上、クライネがクラウディウスの避難を優先して転移したためそこに置いてきてしまった。ギムレーはその後上空を飛び回って暴れていたためもうプレスで跡形も残っていないだろう。

「そのかわり新たに手に入ったのが「ゲータティア」か。威力は申し分ないが相手の動きを

封じれない分ザツハークには見劣りするな」

「……」

新たな魔導書にケチをつけるクラウディウスをクライネはいつも通り無感情で眺める。

「始めろ」

ブオン！

「!？」

突如チキとユーリの隣にクラウディウスとクライネが現れた。

「まずは神竜から」

神竜石で変身される前にカタをつける。そう思いチキに狙いを定め

『やみよ ぬりつぶせ!! ゲーティア』

「キヤアア！」

すさまじく凝縮された闇がチキを覆う。

パキン！

シユン！

「ぐうつ」

その時ユーリの抜いた刃がクラウディアスの頬をかすった。

「この！ 昼行燈が！」

『やみよ ぬりつぶせ!! ゲーティア』

すさまじく凝縮された闇がユーリを覆う。

「ぐああああ！」

「ユーリ様！」

「ああああ！ ……はっ！」

ガン！

「フン」

ヴィオールがユーリを気に掛けるもユーリは気迫と精神力で闇を耐えクラウディアスを斬りつけた。

だがクラウディアスは傷ついた様子もない。

「巫女殿、ご無事か！」

「う、うん」

チキは服のあちこちが破れ、皮膚には黒い斑点がついているものの攻撃を受けていたのが一瞬のため命にかかわるものではなかったようだ。

「硬いな。ならば……」

「はっ」

ヒュン！

「！……」

ユーリの真意を悟ったヴィオールはクライネのすぐ横に矢を射た。

「き、貴様！ 私の襲撃を予期して今まで戦わずにいたのか」

「あんな術があるとは思わなかったから出遅れたが」

ユーリは憤怒の形相でにらみつけるクラウディウスの視線を受けながら剣をむける。

「やはり知らなかったようだね。ヴァルムの先王を仕留めた私の経歴を。まあヴァルムの協力が得られなかった以上、あの王もわざわざ血を分けた謀反者に父を殺されたなんて言いふらしたりはしないだろうが」

「フン！ 皇帝を称するあの小僧を王と呼ぶあたり、噂通りの仲らしいがな」

皮肉を言うクラウディウスにユーリは剣を近づける。

「さて、どうするかね？ 戦いに出さない以上あのお嬢さんはよほど大切な御人らしい。私ごときを殺すために彼女を犠牲にするかね？」

今のクラウディウスならクライネを犠牲にすることに目をつむればこの場にいるものを殺すことはできる。しかしクライネは死なせるなどギムレーから厳命されている。



神竜を仕留めそこなう事態になってもだ。

「ぐぐ……クライネ」

命じられたクライネはクラウディウスに駆け寄り転移する。

「最低限の目的は果たしたからな」

クラウディウスは転移直前に一言そう漏らした。

「？」

「あー！」

「巫女様！」

やはり大きな傷が会ったのか？ そう思って駆けつけるキットだがチキが見つけた傷は自分につけられたものではなく、神竜石についた大きな傷だった。

「ではもう何度も神竜には変身できないと？」

「うん。粉々になったわけじゃないから一度変身して工具は作れると思うけど……」

屍の掃討と召喚者の捕縛を確認し、カイルは謁見の間でチキ・ユーリたちと合流した。

そこで着替えと回復を済ませたチキからひびの入った竜石を見せられ工具は作れても

それ以後神竜としての戦力はあてにできないと言われたところだ。

「申し訳ない」

「私も付き人としてこの醜態。巫女様に合わせる顔ありません」

ユーリとキットはチキとカイルに深く頭を下げる。

「しようがないよ。ワープなんてどこの大陸でも廃れた魔法だと言われてたし」

「そうです。それに二人とヴィオール公爵がいなければ巫女殿がどうなっていたことか」

チキとカイルは二人をそう言つて慰める。

「巫女様に危害を加えられてそうおっしやられてもな……責めていただいた方がありがたいです」

チキが襲われる場に居合わせたヴィオールも二人同様いたたまれないようだ。

「まあ教団が私を狙っている以上早く工具を作らないといけないし反省はここまでにしてキット、カイルに礼のものを渡してあげて」

「あつ、はい。カイル様、どうぞ」

チキに言われてキットはカイルに透明な球儀を渡した。中に赤い球体が入っている。

「これは？」

カイルが尋ねるとキットが説明を始める。

「これはマスタープルフと言われる。経験を積み過ぎて伸び悩んでいる兵士に新たな天啓を与え成長できるようにする宝具です。ミラ様と邪神ドーマが消滅するまで各地にあつた「ミラのしもべ」なる石像も同じような力を与えることができると言われていましたが、チキ様の力でこのマスタープルフという形に変えることが出来ました。カイル様も戦闘と訓練だけでは限界を感じていたのでは？」

「それは……はい」

一瞬目が泳いだが正直に話すことにする。

「では、どうぞ」

キットからマスタープルフを受け取った。

「ありがとうございます。後で使わせていただきます」

「ではカイル殿、剣ができるまでの間この宮殿に逗留して頂きたい。……荒れた状態です恐縮ですが」

「いえ、ありがとうございます。逗留している間私たちも再建のお手伝いをしましょう」  
ユーリの提案をカイルはありがたく受け取ることにする。

「いえいえ、ソンシン王も明日には帰国しますので……ヴァルムが動き始めるかもしれませんから」

「ええ？」

後日。

「陛下。アルバレアに潜り込ませている密偵からの報告でソンシン王の帰国を確認しました。」

「うむ、そうか」

ヴァルム皇宮執務室で勢力ごとに色分けされたヴァルム大陸の地図を眺めている皇帝ファルスに兵はリヨウヤの帰国を報告していた。

「陛下、ひとつよろしいですか？」

「うむ、申せ」

「あの者たちに協力してアルバレアきゆうで…いや城に集まっているアルバレアの王族を始末してしまえば大陸統一は容易になるのでは？ 罪はそれこそ教団に被せてしま

えば…」

「む？」

ファルスの眉間にしわが寄る。兵士は青ざめ頭を下げるが謝るよりファルスが答える方が早かった。

「うつけめ、教団がやったといつてもアルバレア王が死んで都合がよいのは我だ。疑うものは疑う。それに父上を討ったユーリをあのローブ共が仕留められるとは思えん。宣戦布告をし、我や私の精兵があやつらを討ち取ってこそ大陸再統一……アルム皇帝のなした偉業を再現できるのだ」

「はは、申し訳ありません」

頭を擦り付けんばかりに兵はひれ伏す。

先日ファルスにクラウディウスと名乗る男が謁見を求めてきた。軍備が整い虫の居所が良かったファルスは謁見に応じることにした。

クラウディウスという男に全く心当たりがなかったが暗殺を恐れて断つては聖帝アルムの子孫たるヴァルム皇帝の沽券にかかわる。それがファルスの考えだった。

クラウディウスはファルスにアルバレア宮殿にアカネイア王子、神竜の巫女が集まるという情報を教え、自分たちは神竜の巫女を狙っているから宮殿を襲撃するのを協力してほしい。そのかわりアルバレア王族を抹殺することに自分たちも協力しようと持ち掛けたのだが、ファルスは断りクラウディウスを追い出した。

それは自分たちの手で各国を制圧してこそアルムに近づくことができるといふ考えが一番大きいのだがソニンシン王がアルバレアに向かっていけるといふ情報を得ていたのも理由の一つだ

「よい、ところで各国にこの書状を送る手配をしてくれぬか」

兵士は立ち上がり書状を受け取る。

「で、ではいよいよ」

「うむ、これは最後通牒だが、まあイストリアと特にアルバレアは飲まんだろう。……ただソンシンに届くのは時間がかかりそうだな。まあゆるりといくがよい」

「ははっ！ 承らせていただきます」

それは第一次ヴァルム大戦の始まりを告げる布告だった。

テイベリウス クラス：ラーズ司祭

クラウディウスに対して野心も反意も持たずラーズへの信仰のために教団に属している司祭。神竜抹殺のための捨て駒に利用された。

## 第25話 最後通牒

アルバレア宮殿での戦いから一週間後。

チキの牙から工具を作りファルシオンの修復が終わるまでの間、カイルたちの部隊もチキとキットもアルバレア宮殿に留まっているが修復はなかなかほかどっていないそうだ。何しろ硬すぎて普通の鍛冶で用いる槌を受け付けられないファルシオンの修復にはチキの牙が用いられ、その牙もファルシオン同様加工が不可能で槌などに変えることが出来ず牙を熱した剣の破片に叩きつける方法をとるしかなかった。ナーガはどうやって牙を剣の形にしたんだろう？

なお 捕縛したティベリウスは厳しく尋問——拷問も含む——したが彼からはラズ神への信仰心から教皇についてきただけで、彼に呼び出されてからこの宮殿でカーシャに捕らえられるまで一切の記憶がないとの事だった。

そんな中ヴァルム帝国——アルバレア家は帝国と認めずヴァルムとしか呼んでいない——からある書状が届きカイルたちが招集された。

「ヴァルムからの書状ですか」

「ええ、この要求を飲めば戦争はしないという最後通牒ですね。ヴァルム大陸すべてが

帝国の固有の領土であり勝手に王を称する者はこれを認め皇帝に臣従しろと、まあバレンシア王国の始祖アルムを勝手に初代皇帝に祭り上げるヴァルムの歴史観を我が家が受け入れられるはずがないのですが」

「アルバレア王家はアルム一世と王妃アンテーゼの第2王子を高祖に持つ家系です。第2王子殿下は大陸と王国の名をヴァルムに改称する兄君にご不満を持ち、諸侯としてソフィアの旧王宮周囲を統治しながら反抗の時を窺いアルバレア王国の礎を築いたのです。その末であるアルバレア王家が自称皇帝に尾を振るなど考えられません」

ユーリの説明をヴィオールが補足する。

「なるほど、だから建国以来第1王子が建国したヴァルムとは険悪だったんですね」

カイルの言葉にヴィオールとユーリはうなづく。だが話には続きがあるらしい。

「それもあります。和解が不可能だと言われるくらい悪化したのは数年前からですね」

「え?」

ヴィオールの話に首をかしげるカイルにユーリはわけを話す。

「数年前にヴァルムの侵略を受け、戦の末期に私がヴァルムの先王を討ち取ったのです」  
「よ」

「ええ?」

仰天するカイルにユーリは誇らしく胸を張るが、



「その後休戦となり戦後処理の為に父とファルス王子で会談を行ったのですが、その時に向こうの歴史認識の誤りを指摘して差し上げようとしたら王子と口論になってしまったようで、それ以来向こうからは睨まれっぱなしです。父も後悔していましたよ」  
父がしたこととはいえヴァアルムと外交関係が悪化したのはさすがにまずいと思つていたのか一転してうなだれる。

「まあ、ファルス殿から見れば父の仇ですからね。父君との会談の件がなくても同じようなことになった気がしますし、国を守るため最善を尽くされたかと」

カイルの助け舟にユーリは首を振る。

「いいえ、ファルスは私が父を殺したことに關しては恨んでいないと思いますよ。父は弱いから死んだ。あの小童ならそう考えそうです」

「……ファルス殿はそこまで力に固執する方なのですか？」

これ以上は慰めようがないと判断しカイルは話題を変えた。

「はい。彼は建国者同様聖王アルムを崇敬していますから、彼にとっては大陸再統一も支配欲を満たすためではなくアルムと同じ偉業を成すことでのかの王を超えるためのものでしょう」

「聖王か……」「聖王ね……」

古の王アルムの二つ名である聖王という単語が出た途端カイルとカーシャがおもわ

ずつぶやく。

「何か？」

「いいえ何でも！」

怪訝に思ったユーリの問いかけを二人は何でもないと手を振る。

カイルは聖王と呼ばれた人物の話を何度も聞かされた。ただしアルムの事ではなくユグドラル大陸の英雄セリスの事だが。もちろん話したのは彼の母ユリナだ。

またカイルだけではなくカーシャも一度ユリナからセリスの話を聞いたことがある。

訓練が終わった後同期の見習い兵とともに訓練場の近くを通りがかったユリナからお茶会に誘われた時にカーシャを始め兵士たちはセリスの話を聞かされた。

何度も聞かされたカイルと違って、カーシャたちがユグドラルやセリスの話を聞いたのはこの一回だけなのだ。

「ゴホン！ 失礼しました。通牒の内容は諸国すべての王への要望にみえるのですがファルス殿は同じ内容の書状をアルバレア以外の国にも？」

カイルは咳ばらいをし、ユーリに話の続きを促す。

「送っているとみていいでしょう。ヴァルム軍はヴァルム以外に存在する4国を相手にできるほどの軍を整備したという情報が届いています」

「マジかよ……」

呆然とつぶやくルッツに頷いた後ユーリはカイルに聞く。

「ところでカイル殿、このバレンシア大陸にある国の分布図は把握していますか？」

「あつ、はい！ 大陸の中西部のここアルバレア王国、中東部のイストリア王国、南西のソンシン王国、北東のドルマ王国そして北西のヴァルムてい……ヴァルムですよね」

「それと大陸から離れた南東のノーヴァ教国ですね」

カイルが挙げた国に加えノーヴァの人間であるキットが付け足す。カイルとキットの答えはあつておりユーリはうなずく。

「ええ、ただ大陸から離れているうえに自衛用の騎士修道会しか持たないノーヴァは外していいでしょう。先ほども言ったようにファルスの目的は略奪ではなくアルムを超える名誉です。司祭たちを虐殺しても名誉にはならない」

「それに我がノーヴァは第1王子様と決別し王宮を離れたアンテーゼ様の終の棲家でもあります。ファルス様にアンテーゼ様への敬愛があるならばそこを害するようなことはしない……と思いたいですね」

ノーヴァは侵略対象から外すだろうというユーリの推測にキットは同意する。

「カイル殿、ヴァルムは4国と戦えるだけの力を持っています。ではヴァルムはこのまま他の4国と一気に戦おうかと思えますか？」

「思いません」

カイルは即答する。ユーリもうなずく。

「ええ、兵を鍛えてから戦に臨む。歴代ヴァルムにも同じようなことを考える王はいたはず、ですが大陸はバラバラです。そもそも複数の国と戦うほど難しい戦争もありません。国にはそれぞれ資源や地形、国力に応じた戦術、戦略があり、それらと同時に戦うということは複数の戦略に対応しなければならぬということ……それも戦況が刻一刻と変化する中でです」

「……」

「ならばファルスの代になって以前の王にはできないことができるようになった。……例えばドルマと取引し同盟を結ぶことに成功したとか」

「……でしようね」

「南西のソンシンの規模は小国……というより国とは名ばかりの村ですが、しかしソンシン独自の兵種と妖狐はヴァルムにとつても厄介なはず。ビヤクヤという国だったころより弱体化しているらしいとはいえリヨウヤ殿も凄腕の剣士です。……ただヴァルムから遠い上、山や森に囲まれて行き来が困難です。通牒と布告が送付されるのもかなり後になるでしょう。ソンシンとヴァルムが戦うのはずっと後です」

カイルは黙ってユーリの説明を聞く。

「つまり本当にドルマがヴァルムに抱きこまれていたら2国対2国の構図がしばらく続

くということですが。いやファルスはソンシンが参戦する前にアルバレアとイストリアを降伏させるつもりでしょう。そうなれば村一つのソンシンは戦う手間も取らずに併合できます。リョウヤ殿も無意味な犠牲を生むより降伏を選ぶでしょう」

「ドルマ王はヴァルムに投降するような方なのですか？」

「先にドルマ王国について説明しましょう。ドルマはドーマ教の総本山だった地にパレンシア教ミラ派という身分を得たミラ教徒が入り込み、対立の末に最高司祭の仲介でミラ派の身分が確立されミラ神殿が建設されました。その神殿を中心に作られた国がドルマ王国です。……国名に関してはドーマ派に配慮したんでしょね」

「！……………」

「ユーリ様！ ミラ派を侵略者のように言わないでください。我々の先達は生贄の儀を行っていたドーマ教に支配されていた人々を助けるために北東の地へ赴いたのです」

ユーリの説明にキツトがかみつきチキが彼女をなだめた。そんな彼らを横にカイルは何かを察した。

「これは失礼。……ゴホン！ そのような経緯からドルマの王も民同様熱心な信者です。ファルスは神々を軽視していますが否定してはいけません。信心深い民の生活を守り皇帝の臣下という形でなら王の地位も保証する。こう言われたら滅ぼされるのを防ぐためにヴァルムと手を結ぶのも無理はないと思います……カイル殿？」

ユーリが推察を話しても上の空でしばらく押し黙るカイルにユーリは訝しがりながらカイルの反応をうかがった。

「……………あつ！ 申し訳ありません。つい考えにふけて」

カイルは我に返り慌てて謝罪する。

「いえ、よいのです。貴殿にとつてもこの大陸の状況は切実な問題でしょうから。ところでカイル殿、アカネイア諸国の動きはどうなっています？ 戦争の気配を察してどちらかに与しようとしているとか」

「申し訳ありません。私はイストリアの調査許可を得てすぐに大陸を渡ってきたので、アカネイアは戦争に参加するどころではないでしょうけど、フェリアとペレジアがどう動くかまでは」

ユーリの問いにカイルは肩をすくめる。ユーリは3つ数えるほどの間をあけてカイルに切り出す。

「そうですか。…………カイル王子、一つお願いがあります」

「何でしょう？」

「私はヴァルム帝国とアルブレア王国との戦争を中止させるために皇帝と会談を行おうと思っています。そこで、あなたにはアカネイア王国の国王代理として仲介に立っていただきたい」

ユーリはカイルに仲介を頼んだ。ヴァルムに対して認めていなかった帝国という国号と皇帝という称号を用い、いざとなればファルスを皇帝だと認める覚悟を示してまで、

だからと言ってアルムを聖王として崇めるアルバレア家が皇帝を自称するファルスに臣下の礼を取ることはできないだろうし、できたとしても長年衝突してきたファルスがこれを素直に信じるとは思えないが。

「……私でお役に立てるでしょうか？」

ユーリはゆっくりうなづく。

「先ほども言ったように現在ヴァルム側と反ヴァルム側はソンシンが参戦するまでヴァルム優勢の2対2です。ですがアカネイア大陸の国が加わればこの状況は大きく覆ります。もちろん大陸を隔てている以上そう簡単にはいかないでしょうが可能性がないわけではない。アカネイアの王子が戦争をやめてくれとファルスに訴えれば彼も無視はできません」

「……」

「戦争が起これば調査どころではなくなる。ですが戦争を止めればヴァルムやドルマを調査できるようになる可能性も生まれる。……どうでしょう？ あなたの大陸を救うためにもなると思うのですが」

「……………」

カイルはしばらく考える。もし仲介に失敗すればヴァルム大陸の戦争にアカネイア諸国を巻き込む恐れもある。だが今まで教団がイストリアやアルバレアで見つからず、ユーリが襲撃直後に報告した通り教団が皇帝に接触したなら教団はヴァルム帝国とドルマ王国のどちらかに潜んでいる可能性が極めて高い。

今のままではこの2国を調べることができないが、だからと言って戦争が終わるまで待つては彼らを取り逃がすだろう。

それだけならまだしも各国の疲弊に乗じてアカネイア大陸のようにヴァルム大陸をも滅ぼそうとする危険も大きい。

カイルは考えに考え抜いて告げた。

「ユーリ王子のお話……………謹んでお受けいたします」



## 第26話 皇帝との会談

ヴアルム帝国からアルバレア王国とイストリア王国に臣従を求め、最後通牒が届いて1週間後、2国から返事が届いた。

イストリアからの返事は皇帝ファルスの予想通り「イストリアの独立は初代王アルム一世が承認したもの。千年経って撤回される道理はない」とのことだったが、アルバレアからの内容は想定外のものだった。

「我が国の建国の経緯から貴殿に対して主従の誓いを交わすことはできない。だが貴国との関係は戦争など起こさずとも解決できるものだと思う。ついでには和平のために皇帝と会談の場を設けたい。ただし代理ではなく、対外政策の決定権を持つ皇帝自らおいでいただきたい。なおこの会談には双方の仲裁役としてアカネイア王国のカイル王子殿下をお招きしている」

最後通牒とは外交において最後に取れる交渉であり、これを断れば戦争を起こすという決意表明だ。その通牒を出した後に会談を行うなど前代未聞だ。通牒の了承でもない限り。

しかしファルスはこの会談に応じることにした。

事前にドルマ王国を取り込んでかの国にイストリアを攻めさせ、ヴァルムはアルバレアを攻める。ソンシンが参加する前に。その作戦の最中に異大陸から異国が参戦してこられては困る。

斥候の情報からアカネイア大陸から少数の軍が渡ってイストリアやアルバレアに駐在しているのは耳にしている。ただし費用がかかり過ぎるためアカネイア大陸には斥候を放っていない。実は自分が知らない伏兵がひそかにヴァルム大陸に渡っているかもしれないと言われると否定できない。

アカネイアの王子に探りを入れ場合によつては次の戦にソンシンが加わることを覚悟で開戦を延ばすことも視野に入れよう。そんな意図でファルスは会談に応じる手紙を送り、相手からの返答を待った。

その間ヴァルムが動かない以上ドルマも戦争を始めるわけにはいかず最後通牒送付から数週間、アルバレアとイストリアは戦争に備えて準備を進めていた。

ファルスは親衛隊を主とした一団を率いてアルバレア王子ユーリとの会談場所である国境近くのヴァルム平野へ歩を進めていた。親衛隊だけでなくファルスも馬に騎乗している。

馬車に乗らないのは武勇が衰えていないことを示すことと、彼が退屈な馬車の中を好まず馬に乗っている方がましだという理由だった。

ファルスはふと会談場所の方を見た。

「むっ？」

そこでファルスは場所近くの空を舞う騎影に気付いた。

「陛下、いかがなされ…あれは？」

側近の兵士もファルスの見る方向を見て騎影に気付く。

「もしやアルバレアの天馬…：いかがいたします？」

「撃ち落とすわけにもいかんだろう。我はユーリとの会談に応じたのだぞ。布告もなしに攻撃を仕掛ける卑怯者の汚名を被せる気か」

「ははっ！ 申し訳ありません」

ヒヒン！

兵士は馬上にもかかわらず頭を深く下げそのせいで馬がいなくなる。

「誰か双眼鏡を貸せ」

「はっ！ 陛下が双眼鏡をご所望だ。早く持つてこい」

ファルスの命令に応じた側近は辺り一面に響く声で輸送隊にまで聞こえるように命じる。間も開けず皇帝を待たせまいと輸送隊員より早く双眼鏡を持っていた兵士が目

的のものをファルスに渡す。

「どうぞー」「うむ」

双眼鏡をのぞき込んだファルスが目にしたのは天馬騎士だった。

赤い髪を短く切りそろえた自分より1つか2つ年上だろう少女。容姿は整っているが戦場に出てくるだけあって飾り気はなく、社交界で着飾った令嬢や宴の際に宮殿にやってくる踊り子の方が華やかなくらいだがなぜかあの女騎士の顔から目が離せない。

「陛下……いかがでしょう?」

「……………」

「陛下……」

「ど、どうした?」

側近が少し声をあげてファルスに呼びかけるとファルスは慌ててうなずいた。

「い、いえその……あの天馬騎士、陛下に害意のあるものでしょうか?」

「い、いや……武器は持っているかもしれないが構えてはおらん。我が来ぬか偵察させているのであろう」

兵士に尋ねられファルスは女の腰あたりに視点を変えて答える。

「はっ。ではこのまま行軍を」

「うむ。……絶対にあの天馬騎士を撃ち落としてはならぬぞ」

「はあ……」

ファルスはこのときなぜかあの騎士を落とすなど再度釘を刺した。いつもなら兵士を謝らせてまで言付けたことは覚えて当然とばかりに二度は言わないのに。疑問を感じながらも側近はファルスに手を差し出す。

「な、なんだ。褒美でも欲しいのか？」

多少の金を渡せばもう側近に邪魔されないだろうか。そう思いながらファルスは誰かに金品を出すように命じようとするがファルスの内心を知らない側近は否定する。

「い、いえ、これ以上陛下のお手を煩わせるわけにはいきません。双眼鏡をお持ちしましょう」

「あ……ああ。すまぬな」

ファルスは側近に双眼鏡を渡す。名残惜しそうに。

(ほお、珍しいものだ。あの天馬騎士、よほど陛下の目になつたと見える)

そんなファルスと側近の様子をすぐ後ろで見ていた金髪の騎士がそんな風に思う。

ヴァルム皇帝直属の親衛隊員ジーン。代々騎士を輩出した家系に生まれ初代王アルムを皇帝とする歴史に疑問を覚えながらも実力を磨き軍に入り、ファルスに稽古をつけた経験もあるほどの実力を見込まれ先帝のころから親衛隊に所属していたヴァルム軍の若き將軍である。

「……また進み始めたわね」

ヴァルム皇帝の一団らしき軍影の再行進を確認したカーシャは眼下の天幕の前に着陸する。アルバレアの王族がいることを示すために天幕内と周囲にきらびやかな飾り物がつけられている天幕だ。

「あつ！ やつと戻ってきた。カーシャ！」

下りてきたカーシャの元にカイルが駆け寄る。カーシャはカイルの方に向かい手を後ろに組んで報告する。

「カイル様！ ヴァルム皇帝らしき一団を確認しました。一度停止しましたがまた行軍を始めた模様です」

「模様です……じゃない！ 何度呼んだと思っっているんだ！ 撃ち落とされるんじゃないかと心配したんだぞ！」

「……ご心配おかけして申し訳ありません」

怒るカイルにやや不服そうに謝るカーシャ。前回の活躍で自信をつけ天馬の扱いに關しては右に出る者はいないとユーリからも太鼓判を押されますます張り切っているようだ。弓ぐらいかわせばいいと思っっている様子が見て取れる。調子に乗って危ない

ことにならなければいいが。そんなカイルの心配をよそにユーリが歩み寄ってくる。

「カイル殿、ファルスが来る前にそろそろ打ち合わせを始めませんか」

「あつ！ そうですね。では天幕へまいりましょう」

「……むう、大丈夫なのに」

カイルとユーリが天幕に入るとカーシャも一言ぼやいてからルツツたちの元へ戻った。彼らはお付きとしてカイルに同行しているがイストリア王と会見したときと同様皇帝との面会に伴うにはふさわしくないとされほとんど待機を命じられている。

さっきの見回りも一団の中で唯一天馬を扱える自分なら皇帝たちの様子を確かめられるとカイルの反対を押し切ってユーリにぎり押ししたことだ。

「ファルス皇帝陛下がいらっしやいました」

半刻ほどたつてファルスの到着を知らせに兵がカイルとユーリのいる天幕に声をかける。

「ああ、お迎えに行こう。カイル殿はここに」

「その必要はない」

そこへ少年の声がした。周りから止める声がかかる。

周りに構わず黒い鎧を着た赤い髪の少年が天幕の入り口をまくり入ってきた。

「これはこれは。御自ら来られなくともわたくしがお迎えに行こうと思っていましたのに」

「よい。うぬがこんな派手な天幕以外のどこにいようというのだ。案内などいらん」

立ち上がり声をかけるユーリに憎まれ口をたたいた後少年は少し天幕の周りを見回した。

「ご心配せずとも暗殺など企んでおりませんよ。そんなことをすれば戦争を止められる者がいなくなってしまう」

「ふ、ふん。うぬの派手な趣味に呆れていたただけだ」

また憎まれ口をたたいた後少年はなぜか残念なような安堵したような様子で息をついた。

「……あのユーリ様。失礼ですがもしやこのお方が？」

卓で二人を見守っていたカイルがユーリに尋ねる。

「ええ。この方がヴァアルム帝国皇帝ファルス様です」

カイルに対してユーリはファルスを紹介した。

「この方が……」

初めてみるヴァアルム皇帝ファルスの若さにカイルは驚いた。



自分がこれまで会った王というのはユベンのような高齡の王もいればアイネやジェルドのように3・40代の王もいる。最少少だつたりヨウヤも20代半ばでおまけに彼は王というより村のまとめ役と言つた方が近い。

だがこの少年はユーリやリヨウヤより一回り若くおそらくカイルに近い、いやいくらか年が下ぐらいだろう。

ユーリが小童と呼んでいるのを聞いていてもユーリやリヨウヤに近い年だと思つていた。

「ファルス様紹介しましょう。この方が…」

「いえユーリ様。ここは私が」

戸惑いから歸つてきたカイルは自分も立ち上がつてユーリを制しファルスに向かつて胸に手を当てながら

「アカネイア王国の王子カイルです。本日は国王代理としても参りました。本日はお二人の仲を取り持つお手伝いが出来れば幸いです」

カイルの自己紹介をファルスは腕を組み勝手に椅子に座つて流した。

「代理か……我には代理を立てることも許さず自ら来いと言つておきながら」

そう言つてファルスはユーリをにらみつける。ユーリはただ笑みを浮かべるだけだつた。彼に代わりカイルは自ら説明することにする。

「ファルス殿。実は我が国の国王は……」

「死んだのであろう。」

「え？ ……」

「竜に押しつぶされて……無念な最期であつたらうな」

ファルスはクロスの死を知っていて本当に無念そうな表情で彼を偲んだ。

「知っていたのですか？」

「ヴァルムがアカネイア大陸に対して物の売買のみにうつつを抜かしてると思うでない。情報も入れておる。さっきの文句はそのの派手趣味に対してだ。まあ代理など遣しても開戦の中止など我が認めるはずがないと思つての事だろうがな」

派手趣味もといユーリは肩をすくめる。

「あの……僕の両親のことを残念に思つていただいてるんですか？」

カイルは一人称を直すことも忘れファルスに問う。

「うむ。7つの国に分かれていたアカネイア大陸を統一するというアルム以上の困難をなし遂げた英雄王マルスと彼の版図を維持したうぬの父君までの祖先に我は敬意を抱いておる」

「……ありがとうございます」

尊大でしかないと思つていたファルスの思わぬ一面にカイルは感動し、彼に感謝の述

べ頭を垂れた。

だがここでファルスは尊大な性格を取り戻す。

「だがうぬに対しては別だ。みすみす国を分けられおつて。あの竜に都を滅ぼされたのは仕方がない。だがうぬがクロス殿たちに並ぶ傑物なら生き残った民をまとめて国を立て直して見せねばならないか？」

「な……？」

顔を蒼白にするカイルへファルスの罵倒は続く。

「それが国を立て直すどころか蛮族や家臣に広大な地域を切り取られる始末。うぬは英雄王どころか父の足元にも及ばん。国王代理などおこがましい。そんな体たらくで仲裁役など務まるのか？」

「ぐう……」

ファルスの暴言をカイルは拳を握って耐える。そこへ――

「しかしクロス様の足下に及ばないその王子の呼びかけでアカネイア大陸の国々に動かれて困るのはあなたでは？ ファルス殿。でなければ最後通牒の後の会談など降伏を表明するものでもない限りあなたが受け入れるわけがない」

「む……」

「ユーリ様？」

ユーリの言葉に痛いところを突かれファルスは押し黙り、カイルは思わぬ助けに驚いた。

「それにファルス殿の言い方ではあなたの祖先も英雄王やクロス様に及ばない凡百ということになってしまいますね。千年どころか百年足らずで国を割ったのはどこの皇帝でしたか？」

「ヴァルムだ。聖帝アルムが築いた帝国を割ったうつけどもはヴァルムの皇帝で忌々しいことに私の祖先だ」

ユーリの問いかけにファルスは激情で顔をゆがめながら自身の祖先を罵倒した。

「ファルス殿……」

本当にファルスは父がユーリに殺されたことなど恨んでいないのかもしれない。むしろ憎んでいるのは国を割った祖先やユーリに敗れた父。

先ほどの憤りも忘れカイルはそんなファルスを見ていた。

「……ああそうだな。うつけな祖先どもはそのアカネイア王子と同じ。いや臣従どころか敵対している有様では王子以下の愚物だろう」

「で、ではこれを機会にユーリ様やイストリア王と友誼を結び、いずれは同盟を……」

ファルスのこぼした愚痴を聞いて彼を和平に誘える気がしてカイルはファルスに同盟を勧める。しかしファルスは首を振った。

「ならん。大陸再統一は我がアルムに並ぶ唯一の手段だ。我はうぬと並びたいのではない。アルムやうぬの祖先マルスを超えたいのだ」

「……………くっ」

和平への期待を裏切られたカイルの表情が曇る。

「我を祖先どもやうぬと同じ愚物と笑うか？ フハハ！ 好きにするがいい。だが我はいずれヴアルム大陸を統一しこの大陸やうぬの大陸……いやそれ以外の大陸にも聖帝アルムに並ぶ霸王として名を残してやろうぞ」

「始祖に並ぶことと歴史に名を残すことがそんなに大切なことなのですか？」

フアルスの目的はカイルからしたらあまりに無価値なことだ。カイルは思わず声を荒げる。

「うぬにはわかるまい。領土を蛮族や臣下だった者に譲り、残された領地で満足しているうぬには」

「……………フアルス皇帝、あなたは！」

怒声をあげる寸前のカイルにフアルスは気分を害するどころか愉快そうに笑みを浮かべる。

「なあカイル殿？ うぬの目的は我が国とドルマにあの黒ローブどもがいないか調べることだろう。確かに戦争中はもちろん調べることできぬし、戦争が終わった後では

あやつらに逃げられるだろう。ではこれならどうだろう？ 此度の戦の開戦をしばらく延ばしてやる。その間うぬらに我ら2国を調べる許可を与えよう。連中を見つけた時の処遇は任せる。それが済めばこの大陸に干渉する利点はなくなるはずだ。後は速やかに帰国するがいい」

「……」

ファルスの言う通り、これなら北部2国を調べられヴァルム大陸で戦争が起きてもアカネイア諸国は巻き込まれずに済む。

それでも虚栄心から他国を侵略しようとする皇帝にカイルは何か言おうと言葉を探すがそんなカイルの肩にユーリは手を置いた。

「カイル殿もう結構です。ファルスがこれ以上引き下がらない男だということは私がよく知っています。それでもこの会談にあなたが加わってくださったおかげで開戦は遅れ我々はいざというときの備えをする時間をとることができた。期待以上の成果です。お疲れ様でしたカイル王子」

「ユーリ様……申し訳ありません」

開戦は止められたが近いうちに戦争は起こるだろう。いたたまれない気持ちでカイルは天幕を出ようと踵を返したときだった。

「おいカイル、ユーリ！ 人参が切れたぞ。残り的人参はどこにある？」

「駄目だつてば。戻りなさいベルモット！」

「あつ、カイル！ 戻るならベルモット引つ張るの手伝つてくれよ」

人参を求めてユーリたちのいる天幕に飛び込もうとしていたベルモットとそれを止めようとしているカーシャとルッツだ。

「ベルモット？ カーシャとルッツも」

「おやおや」

「む……？」

ベルモットたちの登場にカイルたち3人は3者3様の反応を見せた。

「も、申し訳ありません。私の臣下です。教育を施す暇がなくてすぐに下がらせますのでどうかお許しを」

招かれざる訪問者に驚くユーリとファルスにカイルは謝罪するが

「臣下だと？ その兎耳をつけた者のことだよな？」

「は、はい。臣下のご無礼平にご容赦ください」

カイルの謝罪に構わずファルスは問いを続ける。

「で、では……その赤髪の女は？ そやつはユーリの家臣か？」

「いいえ、カイル殿が連れてきたお付きの従騎士です。……ファルス、あなたまさか」

ユーリは説明しながらファルスの反応から何かを察したようだ。カイルは気付かず

三人を紹介した方がいと判断する。

「え、えつと3人とも私の側付きの家臣です……」

チヲ。

カイルの目線を受けて3人は自己紹介を始める。

「アカネイアから来た…来ました。ルツツです」

「タグエルのベルモットだ」

「カイル王子のお付きをしております天馬騎士見習いのカーシャと申します」

ファルスは前の二人の言葉を聞き流しカーシャの自己紹介を胸に刻んだ。

「カーシャ……カーシャ殿か」

「……」

小声でカーシャの言葉を反芻するファルスをユーリは半目で見つめる。

「な、何だユーリ！」

「いえいえ、ファルス殿もそういうお年頃かと」

ユーリはニヤニヤしながら手を振って見せる。

「ぐっ……ふん！　そうか。カーシャ殿はアカネイア王子の付き人か」

「は、はい。……あの？」

なぜか苛立ちを見せながら自分を睨むファルスにカイルはたじろいだ。



「……何でもない。兎娘の無礼は許す。我はユーリと今後の話を済ませる故家臣とともに退出するがよい」

「は……はい」

戦を止めることができない無念を思い出しうつむくカイルにファルスは――

「開戦を延ばすという約束は守る。安心せよ。うぬらとは良い関係を築きたくなつたからな」

「あ……ありがとうございます。ファルス殿」

戦争を止めることはできなかったがひとまずの平穏を守ることができたらしい。複雑な思いでユーリとファルスを残しカイルは天幕を出ていく。

だがその盟約も翌日に破棄されたことになる。

パカラパカラ。

ユーリとカイルとの会談を終えたファルスの一団が皇宮へ戻る道中。

シユ！

「陛下！」

キイン！

一団の背後から突然流れてきた弓矢を親衛隊の一人ジーンが剣ではじく。

「陛下。ご無事ですか？」

「う、うむ。見てのとおり怪我ひとつない。うぬのおかげだ。大儀であるぞ」

そう言いながらもファルスはすでに剣を抜いていた。ジーンが防がなくても自力で対処できたらしい。

「あの丘から放たれたぞ！ 誰か追え！ 追え！」

「パカッ！パカッ！パカッ！」

ファルスの側近は下手人を捕らえるべく兵に命令を下し弓を拾う。

「……これは！ アルバレアめ。和平を望んでいると言っておきながら陛下のお命を」

側近は弓矢がアルバレア王国製の物だと気付き怒りの声をあげる。

「アルバレア……ユーリが？」

側近の報告にファルスは眉をひそめしばらく沈黙した後。

「……ほう。戦争が避けられぬならば帝国の力を削ぐべく私の命を狙うか。……フハハハハ！ 皆、これがアルバレアの返事らしい。皇宮へ急ぐぞ。到着次第戦の準備をする。敵はアルバレアとアカネイアだ！」

「オオオオオオオオ！」

ファルスの号令に一団が歓声をあげる中ジーンは一人思索していた。

(劣勢のアルバレアがこんな無謀な真似を？ おかしい。それになぜ陛下も疑わない。ユーリ王子のことは陛下がよく知っているはずなのに)

ファルスへの襲撃にやや遅れてソフィアの森で。

シュ！

「ユーリ様！」

キーン！

ユーリに放たれた矢をカイルがはじく。

ユーリは剣を抜いており助けがなくとも対処できたようだ。

「あの木の裏だ」「追え！」

兵士が件の木へ殺到するも。

「くそっ！ 逃がしたか」

そこにはもう誰もいなかった。

足音も聞こえないためどうやって姿を消したのか誰にもわからなかった。

「ベルモット！」

フルフル。

カイルはベルモットに聞こうとするも彼女も相手の気配を掴めずにいるらしい。

「この矢は……これはヴァルム製の！」

兵士が矢を拾いそれがヴァルム帝国で製造され使われる矢だと気づく。

「ユーリ様、これは？」

カイルは真犯人に気付きユーリも気付いてるか確かめようとする。

「おそらく教団の仕業でしょうね。ですが……」

ユーリは兵たちの方を見る。

「ヴァルムの偽帝め！ 開戦を遅らせると言いながらこんな卑怯な手を」「戦争上等！

逆にヴァルムを侵略してやるよ！」

ユーリはカイルの方に顔を戻し首を振る。

「教団を知らない兵たちは信じないでしょうね。父上にまで話が行けば私でも止められない」

「そんな……」

どうにかつかの間の平穏だけは守れたと思ったカイルは突然の出来事とアルバレアの兵士たちの気迫に打ちひしがれた。

ヴァルム大陸北部某所。

ブオン！

「どうだった？ クライネ」

「すべて教皇様の仰せのままに」

転移して戻ってきたクライネをクラウディウスが立ち上がって迎える。

ユーリとファルスに放たれた弓矢はクライネが放ったものだった。場所は兵士の目撃通りの場所。だがクライネには転移で逃げるくらいわけがない。

魔女であるクライネは弓を扱えない。数日練習して標的の近くに矢を放つくらいのことができるようになっただけだ。だが狙いを定められたとしてもユーリとファルスを仕留められたとは思えない。仕留めることが出来ればなお都合。

「まさかギムレーを害することができる剣がこの大陸にもあったとはな。すぐにでもギムレーにヴァルムを襲わせたいところだが念を入れて、各国と戦わせ疲弊してもらおう」

その半週後ヴァルム帝国からアルバレア王国へ宣戦布告の書状が届く。書状は2通あり1通はアルバレアへの宣戦布告。もう1通はアカネイア王国への宣戦布告だった。

ジーン クラス：ゴールドナイト

「外伝」のジークとティータの子孫。ヴァルム帝国親衛隊に所属する將軍。凄まじい強さの武將でファルスより強いのではという噂もある。

## 第27話 オープ

アルバレア王宮回廊

「あつ、カイルー！」

戦争に向けての準備をして宮中を駆け回っていたカイルたちの下へチキと彼女に付き従いながら小さな袋を持ったキットが駆け寄ってきた。

「チキ！ 久しぶり」

「こんにちは！ カーシャも大変そうだね」

ともにアルバレア王宮に逗留している間にすっかり打ち解けたカーシャとチキが挨拶を交わす。

「巫女殿……お久しぶりです」

「むっ」

もうすぐ戦が始まるというのにアルバレアに留まるチキにカイルは戸惑いながら挨拶するもチキはむっとした顔になる。

「あつ、いや……チキ。もうそろそろノーヴァに戻った方がいい。材料もそろっているみたいだしファルシオンのことはもう気にしなくていい」

チキが不機嫌になるのを見てカイルはタメ口で話す。以前からチキにそう接してほしいと頼まれていたのだ。

チキと対等な物言いと彼女と話したらチキを新たな生き神と崇めているバレンシア教徒のキツトが許さないだろうと思つて彼女に聞いたら、「巫女様は気さくに話すのがお好きなようですのでできればそうしてさしあげてください」と言われ許可をもらった。

チキも機嫌を直し話を始める。

「それがね……ファルシオンの刃がもう出来上がっているのは知つてるでしょう？」  
「うん」

神剣ファルシオンの刃は完成しワーレンで作り直させた柄との接合も終わっている。しかしチキが言うにはある部分の不調でまだギムレーなどの竜に効力を発揮できないとの事だ。

「カイル、ファルシオンに埋め込まれている竜玉つて知つてる？」

「えっ？ ……もしかしてあの柄にはめ込まれていた赤い宝玉の事かな？」

ファルシオンの象徴ともいえる宝玉なのでカイルも覚えていた。だがワーレンの鍛冶屋に作り直させる際そんなに大切な部分だと思えなかったため柄に関しては何も言わなかったのだ。



「うん」

「……もしかしてその竜玉がないからファルシオンではもうギムレーを倒せないとか？」

最悪の事態を予想しカイルは恐る恐る尋ねるがチキは首を振る。

「ううん。新しい柄にも竜玉はちゃんとはめ込まれた。だけど……」

「だけど？」

「新しい柄が竜玉の力を引き出すために作られたものじゃないからだろうね。あまり竜を斬るための力を出せなくて」

「そんな……」

竜玉はあるにせよ効力を発揮できないのでは同じことだ。だが鍛冶屋に罪はない。竜玉のことはカイルも今知ったばかりなのだ。

「で、ではアルバレアの鍛冶師に竜玉の力を引き出せるような柄を作ってもらい……」

また何週間の時間をかけることを覚悟したカイルの提案をチキは拒否する。

「柄なんて作り直してたら間に合わない。竜玉を作り直した方が早い。それに竜玉のことは竜でなければ……もしかしてチキはそのためはまだアルバレアに？」

「竜でなければ……もしかしてチキはそのためはまだアルバレアに？」

チキはすぐに首を縦に振る。

「私は早く避難した方がいいと言ってるのですが」

今まで沈黙を守っていたキットはため息交じりにそう言った。

「キット、私が新しい神様だか知らないけどギムレーを放っておけばどのみち私たちみんな死んじゃうよ」

「巫女様……」

それでも何か言いたげにしているキットにチキは続ける

「教皇つて人が何を考えているのかはともかく、ギムレーは絶対にこのバレンシア大陸を滅ぼす。それにギムレーの翼なら私たちにとつて遠くの大陸にもすぐに行ける。ギムレーの破壊本能はすべての大陸……世界を滅ぼすまで止まらないってナーガが言ってた」

「そうですか……余計な口を出してしまいました。お許しを」

説得をあきらめたキットはチキに謝り頭を下げる。

「い、いいよ。わかってくれれば。あつ！ そうだ。これの方は改良が済んだからカイルに渡してあげて」

「ああ、これのことですか。わかりました……カイル様どうぞ」

頭をあげたキットは持っていた袋をカイルに渡す。中身は大きめの玉が5つ入っている。

「あれか。……チキ、あの黒いオーブも混ざってたけど大丈夫だった？」

「ええ、改良が済むまでは誰かがあれに触れないようにしつかりと見ておきましたから」  
尋ねられたチキではなくキットが答える。

この宮殿に逗留する際ギムレーを封印するために改良する必要があると言われてチキにあるものを貸した。封印の盾に埋め込まれていた5つのオーブを。

改良自体はもう終わっていたもののその時はヴァルム皇帝と会見しにヴァルム平野まで言っていたのでカイルに返す暇がなかったという。チキたちが今さっきまで宮殿を練り歩いていたのもそろそろオーブを返しておかなければと思いカイルを探していたのだそう。

「改良したこのオーブをはめれば盾は更なる力が引き出せる。地竜たちに加えてギムレーを封印する力も……それだけじゃないよ。これらのオーブが盾から外れてばらになっても封印の力を維持できるようになった。さすがにギムレーを封印する際は盾にはめておかないといけないけど……そのかわりオーブ一つが持つ特殊な力はどう使えない。闇のオーブの強すぎる力も」

「……いや、盾からオーブを外しても封印を維持できるならありがたいよ。アドラ……がオーブを外して地竜が復活し大陸が滅びかけた悲劇がこれで防げるのなら……それに闇のオーブの力がなくなって正直安心した。誰かがうかつに触れてしまったらと考え

ると」

幼いころからアドラをアカネイア王国の真の建国者だと敬ってきたカイルにとって彼が盗賊だったとはいまだに信じたくない部分もあり、つい彼の名に1世をつけてしまいうそうになりながら話す。

そのアドラを含め複数の人間をゆがめてきた闇のオーブを自分の不注意のせいで自分や誰かが触ってしまったらと思うと封印の盾から目を離したくないことが多くなり、これでようやくこのオーブから解放されたというのが今の気持ちだった。

「あ……うん。ただ盾は持っていた方がいい。ギムレーが復活したときに聖痕とファルシオンの力を引き出すために5つのオーブを束ねるものが必要になるから」

「……そうか！ ナーガの加護とやらは長くは続かないのか」

チキの言葉からそれに気付きつぶやくカイルにチキはうなずく。

「うん。ユグドラルって大陸では聖痕がもたらす強すぎる力をそのままにしていたせいで多くの争いや力による支配が続いてきたから、これからはギムレーが現れた時みたい

に人だけではどうしようもなくなった時のごく短い間だけにしておくってナーガが」

「ユグドラル……そうか母上から聞いた「神の怒り」はそのためにナーガ様が引き起こしたものだっただけか」

「怒りって……むしろ人への思いやりだと思っただけ」

思わず神の怒りなんて単語を口にしたカイルにチキは苦笑する。

「ああごめん幼いころに聞いた言葉だからつい、いやナーガ様も愚かな人間のためによく尽くしてくれるな」

「守護神や神竜って呼ばれているからね」

ナーガの娘だというチキは胸を張って言う。

「あとはファルシオンの竜玉だけか。あとひと踏ん張り！　じゃあまたねカイル、カーシャ」

右手をあげて元氣よく駆けるチキとついていくキットをカイルとカーシャは手を振って見送った。

ヴァルム帝国からアルバレアにアルバレア王国とアカネイア王国にあてた宣戦布告の書状が届いてまもなくドルマ王国もイストリア王国へ宣戦布告したという。ヴァルム皇帝の統治によつて大陸に秩序をもたらすために。

おそらく奪い取ったイストリアの領土を統治してもいいという盟約が交わされているのだろう。皇帝ファルスはドルマの国力が帝国に迫るようなことを恐れる人物ではない。

そこでカイルたちアカネイア派遣軍はアルバレア軍とともに、アイク傭兵団はペレジアとの契約を破棄してイストリア軍と契約しそれぞれヴァルム・ドルマと戦うことにし

た。

アルバレアもイストリアも王や王子以外のほとんどはラーズ教団とギムレーを知らない。東西両方にアカネイアから来た人間を配置する必要があった。

それにおそらく教団が潜んでいる国は……。

3日後の正午が第一次ヴァルム大戦の開戦日時となる。

## 第28話 第一次ヴァアルム大戦 開戦

開戦日 ドルマ王宮玉座の間。

「そなたの提言通りの布陣を整ったそうだ」

「感謝いたします。ザイン陛下」

高齡のドルマ王ザインの言伝に紫髪の醜い容姿の男が感謝の言葉を述べる。男はひざまずいているように見えるが膝が汚れるのを気にして膝を少し上げるといふ器用な真似をしている。

そんな男の姿勢にザインは顔をわずかにしかめる。もういつそ立っていると云ってやりたいがそれ以上に彼を不快にさせたのは――

「皇帝陛下もザイン様に感謝しておりますわ。戦勝の暁にはぜひ皇宮までお越しくださいな。精一杯おもてなしいたします」

男の女言葉じみた話し方だった。彼は精神が女性というわけではなく同性愛者でもない。

ヴァアルムの名門貴族に生まれ女教師から丁寧な言葉を学ぶうちにいつの間にか女言葉に寄った話し方を覚えてしまった、肉体的にも精神的にもれっきとした男である。祖

国には妻と子もいる。せめて容姿が整っていれば普通に付き合える者もいるのかも知れないが、あいにく彼の容姿はかなり醜い。

ヴァルム帝国の伯爵にして皇帝付きだった軍師チャルロス。

見た目とは裏腹の策士でその頭脳でファルスの側近に推薦されるまでのし上がったが、ファルスは彼を視界に入れたがらず、かと言って有能な臣下を個人的な感情で降格させるわけにはいかずドルマに派遣された。

彼一人を派遣したのではドルマ王を怒らせ同盟が成らない恐れもあったため、当初はもう一人使者を派遣していたがドルマがヴァルムに齒向かえないと知ると使者を呼び戻しチャルロスとその部下だけ残してしまった。

無論チャルロスを残したのは彼ならばドルマとほぼ同数のイストリアに勝てる見込みがあると思つての判断なのだが、ファルスはこの判断を下すときザインに心の中で詫びた。ザインを戦後に皇宮に招いているのは本当の事である。

「それではまずは湿地帯の前方に軍を展開して、敵軍と衝突したらすぐに後退してくださいな。そうすれば敵軍は沼地に足を取られわたくしたちに抵抗できなくなりますわ。オーホッホッホ!!」

「……………苦勞だった。下がって休むがよい」

チャルロスの高笑いに耳を塞ぎたい衝動を必死にこらえてザインは彼をねぎらう。



相手がヴァルムでなければこんな男はすぐに追い返すのだが精強な軍の質を更にあげた今のヴァルムに逆らう気は起こせなかった。

ヴァルム帝国軍　ヴァルム平野戦線

総兵力　30万

アルバレア・アカネイア王国連合軍　ソフィアの森北部　西部第一防衛ライン

総兵力　28万

ドルマ王国軍、ヴァルム帝国チャルロス師団　湿地帯南部方面戦線

総兵力　39万

イストリア王国軍、アイク傭兵団　ミラ神殿北部　東部第一防衛ライン

総兵力　37万5050

ヴァルム帝国海軍　西ヴァルム海経由戦線

総兵力　15万

アルバレア王国海軍　西ヴァルム海防衛ライン

総兵力　10万

ヴァルム帝国海軍 東ヴァルム海無人島 アカネイア監視艦隊

総兵力 1000

ヴァルム帝国軍 本国待機

総兵力 28万5000

反ヴァルム連合 支援勢力

フェリア王国軍・ペレジア王国軍、アカネイア王国臨時魔道軍 アカネイア大陸

総兵力 100万

ソンシン軍 ラムの村

総兵力 100

中立勢力

ノーヴァ騎士修道会 ノーヴァ島

総兵力 500

不明勢力

ラーズ教団・ギムレー ???

総人数 ???+1体

ヴァルム帝国軍の指揮官はファルス。

アルバレア王国軍の指揮官はユーリ。

彼らはそれぞれの陣地の奥の天幕から大軍の前に姿を現し正午を待つ。  
ヴァアルム平原にてファルスがつぶやく。

「刻限だ。始めるとしよう」

ソフィアの森北にてユーリが側近に命ずる。

「戦闘準備。アルバレア全軍の指揮を私が行う」

太陽と時計の針が一日で最も高い位置に上がる。

正午とともにファルスが全軍に命令を下す。

「アルバレアへの攻撃を開始！ 全師団、進軍・制圧を開始せよ！」

正午とともにユーリが全軍に命令を下す。

「ヴァアルムからの防衛を始める！ 全部隊、迎撃・遊撃・封鎖を開始せよ！」

ギイン！ ガキイン！ ガン！

「はあ！」「ぐわ！」「ぎゃあ！」

ヴァアルム平原とドルマ湿地帯で戦闘が始まる。

ヴァアルム平原。

ヒュン！ ヒュン！ ヒュン！

「ぐあ」「うぐう」「ぎゃ」

ヴィオールが放った3本の矢が敵兵3人の眉間に刺さる。が一人は避けた。

「この！」

ブオン！

「ぐお！」

「公爵、ご無事ですか！」

ヴィオールについていた騎士が剣で敵兵を斬り捨てる。

「ああ、偽帝の兵とはいえ曲がりなりにも騎士か。よく訓練されている」

「はあっ！」

キーン！ キーン！

ルッツが数撃与えて敵兵を倒す。

「くそっ！ 屍や山賊なんかと違いすぎだろ」

「う、兎？ く、来るなー！」

ズガン！

「なめるな！」

グサ！

敵の槍がベルモットに刺さる。幸いかすっただけだ。

「ぐっ、この」

ガン!

「ぐえー!」

ベルモットは人間形態に戻ることなく次の敵を探す。

「味方が倒されてもひるまず向かってくる。これが軍隊か」

「やああああ!」

ブンブンブン!

「え? …ギャア」

グシヤア!

頭上の掛け声に見上げた敵兵は突然刺さった槍に当惑し、痛みを感じる間もなく絶命する。

「天馬? くそ、弓兵はいないか!」

グサ!

「ぐあ」

「くそ、兵卒が命令ばかりしてるから…だあ」

ヒュン

兵が放った矢をカーシヤはひらりとかわす。

「やあー！」

「ぐあ」

「シャー！」

一通り敵を掃討するとカーシヤは天馬を空高く飛ばし戦場を見回す。

「この一帯を指揮してるのは……あいつね」

「ブオオ！」

「右翼が開いているぞ。お前たちはそこへ向かえ！ 天馬騎士が調子づいてるようだ。

弓隊は一斉に奴を仕留めろ」

「誰を仕留めるですって？」

指揮を執っていたバロンは突然割ってきた声に部下の一人だと思つて振り向く。弓矢が飛んできて兜と鎧で身を守っている自分には無縁だと思つていた。

「ズガン！」

「ぐえ」

そんなバロンの鎧の継ぎ目にカーシヤは槍を入れる。

「この……小娘が！」

「ヒヨイ！」

「ヒュン！」

カーシャはバロンに一月入れて反撃をよけた後、敵部隊から離れる。

「く……追え追え！」

ゴオオ！

そこにアルバレアの魔道兵が放ったアローがバロンを貫く。

「うぐ……むね……ん……」

魔道兵の近くには敵兵はおらず彼は思わずつぶやく。

「重騎士に挑む天馬騎士か。バレンシア大陸にはめつたにいないぞ」

無理もない。天馬騎士は武装した重騎士に有効な攻撃を与えにくい。継ぎ目を狙ったとしても手足を突くぐらいで命を奪うのは難しいだろう。

しかもまわりには弓兵も何人かいた。重騎士に軽傷を与えるためだけにこんなリスクを負うものはいない……はずだった。

ともあれ指揮官が戦死したことでこのあたりの指揮系統は混乱し戦況は幾分かアルバレアの有利となった。

ドルマ湿地帯。

「よし、後退だ。」

ヴァルムの軍師に命じられた通りドルマ兵が後退を始める。自分たちが沼に踏み込まないように。

ガン！

「え？」「なんだこれ？ 進めねえ！」

後退しようとした兵士たちの多くが動きを止められた。まるで見えない壁があるように。

「放てええええ！」

ヒュン！ ブオン！ ゴオオ！

セネリオの指示でドルマ兵に矢と魔法が放たれる。

「がああああ」

「く、こうなつた破れかぶれだ…突撃！」

逃げ場を失つた敵兵はイストリア軍に突撃を仕掛けるが元々一当てしたら逃げるつもりで少数しか最前線に配備されておらず、勝ち目などあるはずがなかった。その上

「ラ、ライオン？」

「グワアア！」

ズガン！



「ギャア」

彼らの前に予想だにしていな生物：獅子と狼が現れた。ラグズたちの勢いと力に敵兵はなすすべなく倒れる。

「はっ！」

ブオン！ ザン！

「ぐあ」

ラグズにも勝る勢いでアイクは敵兵を瞬く間に薙ぎ払っていく。

「光の結界を時間差で発動できるようになれば便利だと思って改造したのですが、むしろ反則ですね」

チャルロスの沼地を利用した策はあつさりセネリオに見抜かれ、開戦前に仕掛けた「光の結界」で逆に退路を断たれる手によって破られる。

沼を迂回して奥にいる部隊も壊滅させ湿地帯の戦闘はイストリア軍とアイク傭兵団の大勝に終わった。

「次は歩兵部隊を左翼に、右翼には魔道部隊を送った方がいいな。ユーリ王子に伝えてくれ」

カイルはアルバレアの陣地に設置された専用の天幕で部隊に指示を送っていた。

今までは自ら先頭に参加していたがこれは戦争だ。指揮官は後方や陣地で指揮に専念するべきだ。

カイルもユーリ同様天幕で自軍の兵に指示を出し時にはアルバレア軍に助力を求めた。

指揮は思っていたよりはるかに過酷な仕事だった。しかしわずか5000の兵しか連れて来ていないアカネイア軍への指示など平地にいる27万5000の兵に指示を出しているユーリに比べたらさういぶん軽いものだろう。もちろんあちらは副官を何人もはさんでいるだろうが

カーシャたちは自らの身を危険にさらして戦っている。なのに自分はここで自分だけがつらいかのような顔で命令ばかりしている。

カイルは自分への憤りをごまかすかのように指示に没頭していた。

ヴァルム平野奥地の陣地の天幕内。

「報告します。平野に展開していた一軍は敵の猛攻に耐えきれず撤退。後続の手配をし

ているところです」

兵士は怖れながらもファルスに劣勢に陥っている報告をする。兵の不安をよそにファルスは眉一つ動かさず尋ねる。

「そうか。敵軍より若干多い数を送り込んだのだが、こちらに多く損害を与えた者の話は聞いているか？」

「そ、そうですね。アルバレアも精兵揃いですが……報告の中に気になることが」

「話せ」

「巨大な兎が戦場に現れて我が軍を襲っているとか」

兵の報告にファルスは一週間前に会ったカイルの家臣を思い出す。

（あの兎娘か！ アカネイアにいますという半獣……実在していたとはな）

「そうか。そやつはアルバレアによって我が軍を襲うように訓練されているのだろう。

他には？」

ヴァルム大陸にはタグエルやラグズを知るものはほとんどいない。兵士には敵に調教された猛獣だと言っておいた方が早かった。

「並外れた動きをする天馬騎士ですね。無数の弓矢を躲したり、重騎士に攻撃を仕掛けてきたり、とにかく動きが読めずこちらの指揮官の一人を討たれたとのことです……うっ」

ファルスはわずかに目を見開く。兵士は兵のふがいなさに怒りを覚えているのだと

思いひるむ。

「その天馬騎士の特徴は？」

「はっ……えっと」

想定していない質問に兵は報告書を取り出し答える。

「……赤い髪で……髪型までは記録されてません。一般の天馬騎士と武装は変わりませ  
んね」

「ほう」（あの王子の情婦ならば戦闘には出してこないはず。その手の関係はなしか）

「以上です。申し訳ありませんこれ以上は情報が……」

「よいご苦労だった。ジーンを呼んでくれ。それが済めば休んでよい」

「ははっ！」

一通りの戦況とカーシャらしき天馬騎士の話聞き終えたファルスは兵士にジーンを呼ぶように命じる。

「お呼びでしょうか陛下」

天幕の側で控え兵士から話を聞いたジーンが天幕の中に入ってくる。

「この後の戦だがな、戦線を下げようと思う」

戦況が不利に傾いている以上、開けた平野より地の利を生かせる場所まで撤退する。追い詰められているように見えるが今は最善の判断だ。ジーンは賛成する。

「陛下のご判断、私は賛成いたします。それでどのあたりまで下げましょうか？」

ジーンの問いにファルスはしばらく考えていった。

「滝だ。帝都と他の街を隔てるヴァルムの滝まで後退する」

「思い切りましたね。万が一のことがあれば、帝都まで攻め込まれますが？」

「次の戦には我も出る。我が戦死すれば降伏すればよい。ヴァルムを併合できればユーリもそれ以上の狼藉は働くまい。ただし負けるつもりはない。だから我とともにうぬも出る」

「はっ、ありがたき幸せ！ それでこの奥の街の住人には避難命令を出しましょうか？」  
ファルスから下された出陣命令をジーンは平伏して承服し、懸念だった街の処遇を尋ねる。

「必要ない。さつき言った通りユーリが略奪などを好まぬのはうぬも知っておろう。それでも略奪にあうならそやつは奪われる天命だっただけの事。我が我が兵に略奪を禁止していないことも知っておろう？ まあ進軍に遅れが出ない程度だがな」

「……」

冷酷なファルスの宣告にジーンは黙る。この主は力の示した者には寛大だが無力な者には冷淡だった。例外だと思っただのは一目惚れしたらしいアカネイアの天馬騎士だが、彼女も今回の戦で大立ち回りをしたらしい。

外見だけではなく無意識のうちに天馬騎士の強さを感じ取ったのだろうか。

「さて側近を呼びつけるか後退と戦の準備だ」

「お供いたします」

そう言つてファルスは立ち上がり天幕の外に出てゾーンも続く。

ヴァルムの滝を戦場に選んだのも、自身とゾーンの出陣を決めたのも何か別の狙いがあるらしい。覇道からはそれた狙いが。

チャルロス クラス：賢者

「覚醒」のエクセライの先祖。ヴァルム帝国軍師。現在はドルマ王国に派遣されている。策謀に優れているが一度策を思いついたらその策に執着する欠点がある。妻と息子がおり女言葉は息子にも移っている。

## 第29話 敗戦

ヴァルム平野で勝利したアルバレア・アカネイアは軍を進めある街に辿り着く。街の住人は略奪を恐れる者は逃げていき、残ったのはアルバレア軍を歓待することで帝国が負けた際自分を取り立ててもらおうとする商人や街から離れるくらいならともに滅んだほうがましだという頑固者ぐらいだった。

おそらく帝国軍の部隊が避難勧告を出したためだと思われるが、皇帝が命令したもので残っているものなどいるはずがないので一部の仕官の独断だろう。

ユーリは先頭に立ち兵士たちに命じる。

「今から私とカイル王子が選ぶ者だけ街に入ることを許す。それ以外の者は陣を作つて待機、無断で入った者は略奪を企てているとみなし厳罰を下す」

そう言つてユーリとカイルの選んだ一部の者が街に入り、有力者と軍の通過の許可を取るための交渉や物資の注文に当たる。

「しかし、あのカーシャが戦で一番活躍か。俺なんか剣が鎧に通じなくて苦戦してたんだぞ」

「手綱をちよつと揺らすだけで思い通りに動いてくれる天馬のおかげだつてば、だから

カイル様には天馬へのご褒美にいっぱい人參を買ってあげるようにおねだりしたわ」

「カーシャの動きもなかなかだったぞ。突然敵の前に槍が現れるから槍が翼を生やして動いているのかと思つた」

カイルがユーリとともに街に残っている町長と交渉している間、物資の注文など雑用を済ませたカーシャ、ルッツ、ベルモットはそんな話をしていた。

カーシャはアルバレア軍の先勝の立役者としてユーリからアルバレアへの仕官を勧められるくらいの称賛を受けた。冗談だとは思うがカイルはそんなことでカーシャを失いたくはないと思い、カーシャに帰国した後に莫大な報酬の約束とこの街で物資のほかに欲しいものをカイル宛につけて買って買つてもよいと許可した。もつともカーシャは申し出を固辞して天馬への食事の増加しか頼まなかつたのだが。

ドルマ王宮。

客間だつた部屋に居座るチャルロスが兵士から報告を受けていた。

「大いなる門が陥ちたですつて?」

「は、はい……敵は大した損害もなく」

「そんな? あの門にはドルマやヴァアルムの精鋭を配置していたのですよ! あの門は



構造上大勢が一気になだれ込むような真似はできない作りになっています。寡戦に持ち込めば質の高い我が軍が負けるはずありませんわ！」

自軍の質に絶対の自信を持っているチャルロスは大きいなる門でイストリア軍を壊滅できると踏んでいた。

「……恐れながら寡戦に持ち込んだのが逆に仇となったようです。アカネイアの傭兵団の強さは驚異的です。獣に変身するとかその獣よりはるかに強い大男がいるとか……更にチャルロス様の策をも読んだとしか思えない動きから相当優れた軍師もいるようです」

「は……はは、寝ぼけるのは早朝だけになさい！ 私より賢い軍師なんているはずないでしょう！ 私はこの大陸でもっとも強い皇帝に認められた帝国一の軍師ですよ！ それどころか獣に変身する人間なんて……伝令も寝ぼけてるのかしら？ 敵は催眠術の使い手に違いありませんわ。そうです。皆を眠らせているうちに門を通ったのです」

チャルロスは兵士の報告をただの妄言だと言い放ちこれ以上聞く耳持たなかった。

「……それで今後はいかがいたしましょう？ 傭兵団の真偽はどうあれ敵軍が大きいなる門を抜け王宮へ迫っているのは事実です」

「フッフ心配は無用ですわ。敵軍とドルマ軍の兵数はほぼ同じです。ならばシューターや長弓で守りを固めた王宮に立てこもれば敵は宮殿を攻めれば攻めるほど消耗します。

ご存知かしら？ 城攻めには守っている相手の3倍の兵力が必要だと言われていることを。住民から食料も供出させましたし1か月は持つでしょう。そこへ海岸からヴァルムの援軍が来れば形勢は逆転。オホホ」

「……」

追い詰められているのに自軍と敵軍が同数というだけでも勝った気になっているチャルロスに兵は言葉を失う。獣に変身する兵がいるという話は自分も信じてはいないが優れた軍師もいるというのは見落とせない。

「さて、では援軍を頼む書状を書きましょう。私が無能だと思われないように内容もじっくり考えて……」

逃げた方がいいと思っている時にこの城から出る口実が見つかった。本国へ逃れるために自分が伝令に志願しよう。

そう心に決めたからには書面を見ながら時候の挨拶を考えている上官に心の中でさっさと書けと言いつけた。

ヴァルムの滝の西。

一度軍の進軍を停止させたユーリは前に街に到着したとき先行させた斥候からヴァルムの滝の様子を聞いていた。ファルスが次に戦場に選びそうなのは戦況が悪くなれば橋を落として敵軍の動きを止めることができるそこだと判断したのだ。

「ユーリ様！ ヴァルム軍はヴァルムの滝北の砦に駐留しているとのこと。それも皇帝自らが指揮を執って」

「ほう。他には？」

「は、はい……それと滝の西にはジーン將軍の部隊が待機しています」

「ジーンだとー」

皇帝自らが指揮を執っていると告げた時以上にこわばった顔で兵士が報告した内容にユーリは慄いた。

ヴァルム軍親衛隊に所属するジーン將軍。代々騎士を出した家系に倣って軍に入り力量を上げ、先帝のころにすでに親衛隊に推薦されるほどの實力を持ち、ファルスの剣術指南まで務めたほど。

皇帝でありながら勇猛で知られるファルスでも未だ届かないと言われる猛将だった。

「……」苦勞、そなたは後詰として待機しているがいい」

「ははっ」

斥候として偵察させていた兵を後方に下がらせるとユーリは隣にいたカイルの方を

向く。

「ユーリ様……顔色が優れないのですが……ジーンとはそれほどの強敵なのですか？」

「はい。ヴァルム一の騎士と言えば間違いなく彼でしょう。帝国一という意味でも大陸一という意味でも」

青ざめた顔を直せないままユーリは告げる。

「……ファルスがジーンを温存している間にファルスを討ち取つてこの戦を終わらせたかったのですがそううまくはいかないようです……カイル王子お願いがあるのですが」「何でしょう?」

緊迫した表情で言うユーリにカイルは応じた。

「滝での戦いには私も出撃します。無論できる限り指揮も執りますが、カイル殿には後方で全体の指揮を委ねたい。戦争前にすべての兵にはカイル殿をアルバレアの王子だと思つて従うように言い聞かせています」

いきなり25万以上の兵に指揮を執る!

50000以下の兵の指揮でもやつとだったカイルにとつて無茶ぶりではしかなかった。

「そんな……無理です! 50000人の指揮で精一杯だったんですよ。ユーリ様の方が適任です。それに相手は想像を絶する名将。もしユーリ様が討たればアルバレア王国は——」

「彼に勝てる可能性がわずかでもあるのは私しかない。今私が出なければジーンは軍を屠り戦勝の可能性はなくなるでしょう。ギムレーが現ればあなたが出なくてはならなくなる。それと同じです」

「……では指揮はどうするんです？ 僕には何十万どころか何万の兵の指揮なんて」

不安がるカイルの肩にユーリは手を乗せ笑う。

「できますよ。先の戦で私がしたことは軍師が出す策の裁可と戦況の確認ぐらいでした。私の天幕と戦場を行き来する副官の方が負担が大きいくらいです。決して楽ではありませんがカイル殿にとっては前よりちよつと忙しくなるだけです」

「……」

カイルは考え込む。これ以上は大きな役目から逃れたいというわがままではないかと。

「国のことはご心配なく。父上は病気で床についているだけでいずれ元気を取り戻します。子の一人また設けてもらいましょう。それにアルバレアは聖王アルムの血を引く名門、断絶しないように縁戚も確保しています。そのヴィオール公もその一人です」  
そう言つてユーリはヴィオールの方を見た。ヴィオールは苦笑し一礼する。

「……強制はできませんがカイル殿が断るなら我々はジーンに勝ち目がありません。軍を退くしかありません。そうなればファルスは本国に待機している軍を加えて攻め

込んでくるでしょう。勝ち目はより薄くなる、降伏も検討しなければなりませんね。……どういたしますか？」

「……………やります。身勝手なことを言っただけで申し訳ありませんでした」

カイルは了承しながらユーリに深く頭を下げ陳謝した。

「なに！ ジーンも一人の人間。顔に傷をつければ降参してくるでしょう。それに我々にはカイル殿が連れてきてくれた勝利の女神がいる！」

そうしてユーリは女神いやカーシャを仰いだ。

「え？ わたし？」

カーシャは驚いて身をすくめる。

「数で優っていたヴァルム軍相手に少ない犠牲で先勝できたのは君のおかげだ。あの奮闘ぶりにまた期待しているよ」

そう言っただけでユーリはカーシャの肩を叩こうとしてやめた。カイルとカーシャの仲がいいことには気づいている。ここでカイルからいらぬ嫉妬を買って関係にひびを入れるべきではない。

「あはは……がんばります」

恐縮しきつたカーシャはそれだけ言っただけで黙ってしまった。

戦闘が始まってヴァルムの部隊が西の橋を渡ってくる。

「はあ！」

ガギン！

「ぐ……このガキ！」

ギン！

ルッツがヴァルム兵と鏝迫り合いをする。その横から

「グアア」

ズガン！

「ぐあ」

すでに兎の形態に化身していたベルモットが割って入る。

「サンキュ！ ベルモット」

「礼はいらん。来るぞ」

ベルモットは次の敵に備え、ルッツも剣を構えた。

「はっ！」

「ぐっ」

ギイン！

2頭の馬上で槍と槍が交差する。

「いきなり貴殿が来るとはなユーリ王子」

「噂に名高いジーン殿がお越しになつてゐるんだ。対応を怠つてはアルバレアの名の名を汚すというもの」

西の部隊を率いてきたジーンをユーリが自ら迎え撃つ。

「フツ、私ごとにもつたいない。早々に陣に戻るがいい」

ガキイン！

「あれがジーン……強すぎる」

周りの敵を倒し空から戦場を俯瞰していたカーシャはユーリを相手に健闘いや優勢に戦うジーンに震え上がる。

「このままだとユーリ様が危ない。でも——」



一対一でジーンに勝てないのなら大勢で囲んで倒すしかない。でも今自軍が陣取っている場所は狭すぎて少数対少数で戦わざるを得ない。もう少し広い場所に出る必要がある。しかし……。

行先には大きな崖があり一つだけ階段が作られているだけで大勢が登ることが出来なかつ、多くの兵が立ち往生している。しかも崖の先には敵部隊がいた。多くはないが階段を上ってきた何人かにとってはひとたまりもないだろう。だがあの部隊を前もつて倒しておき、多くの兵が崖の上でジーンを待ち伏せできるようにすれば……。

ブオオ！

決心したカーシヤは天馬とともに崖の頂上目指して浮上する。

「！カーシヤ！何やってる？戻ってこい！」

勝手に北上するカーシヤに向かってルッツは叫ぶ。

「そこだあ」

ザン！

「ぐあ……ヤロウ！」

そこへ敵兵がルッツを剣で斬りつけた。

ルッツもベルモットもカーシヤどころではなくなった。

「天馬騎士め。やはり来たな……方位660……撃てえ！」

ヒュヒュヒュ!

シューターたちの放つ無数の矢がカーシヤに襲い掛かる。

「はあ!」

ブオオ!

カーシヤは巧みに天馬を操って矢をよける。

グサ!

「ぐああ」

カーシヤは瞬間にシューターの懐に入り弓兵を倒していく。

ブン!ブン!ブン!

「ぐえ」「ああ」「ぎゃ」

「この」

シュ!

ヒイン!

弓兵の放った矢が天馬に刺さる。

「この、喰らえ!」

ザン！

「ぐあー！」

その弓兵もカーシャの一薙ぎに倒れる。

「弓兵たちが……うう」

「お前たち女一人に何を怖気づいている！　あの女をねじ伏せた者は奴を好きにしていぞー！」

敵から見たら凄惨ともいえるカーシャの戦いぶりに恐れをなした部下たちを指揮官は彼らの欲望をあおる言い方で鼓舞する。

「……ぐう、かかれえー！」

オオオオオオ！

恐怖を獣欲で塗り潰した兵士たちが襲い掛かる。

しかし弓兵もいなくなった今彼らはカーシャの敵ではなくなった。

ギーン！

「ふう、ここまで凌ぐとはな。さすがに陛下とアルムの血を分けるだけはある」

「はあ、はあ」

息をつきながらユーリはジーンと対峙する。

「グオオオ」

ズガン！

「ぐあ」

その横からベルモットがジーンに突撃する。ジーンは吹き飛び落馬するがベルモットが再度突撃を試みる前に素早く立ち上がってみせる。

「フツ、半獣か。いいだろう。二人がかりで来るがいい」

「貴様！ ヴアルム一の騎士だろうがそんな蔑称を使う奴を見逃すわけにはいかないね。ユーリ、私も参加するよ」

「助太刀はありがたいが危なくなったら逃げたまえ。相手は獅子より恐ろしい騎士だ」

「ハハハ！ 獣の例え話が本物の獣に通用すると思ってるのかい。さあ奴が馬に乗る前に倒すよ！」

威勢よく言い放つベルモットと槍を構え直すユーリを前にジーンは剣を抜く。

「…馬から落としたくらいで優位に立った気にならないことだ」

「ふう、長引いちやったわね。今薬をかけるから」

あたりの敵を倒したカーシヤは矢を撃たれた天馬に騎乗したまま傷薬を塗る。  
パカラ!

「フツ! お人好しなことだ。馬など死んでも買いかえればいいものを」

カーシヤが天馬の傷口から声の方へ視線を向けるとそこには、

「あなたは……」

「うぬか……やはりここまできると思っていたぞ。天馬なら崖など楽に越えられるからな」

カーシヤの前に赤い髪の少年……ヴァルム皇帝ファルスが親衛隊とともに来ていた。全員馬に騎乗している。

「ヴァルムの皇帝? 砦にいたんじゃあ?」

「うむ、視察すると言って出て来たんだがずいぶん止められたぞ。崖から下には行かないと約束してどうにか出て来たんだ。ジーンさままだな……ま、連れてくる気はなかった連中も一緒だがな」

「っ……」

自分についてきた臣下を指してファルスは笑う。

「型破りな皇帝ね……皇帝?」

その時カーシヤはユーリの言葉の一部を思い出す。

(ファルスを討ち取ってこの戦を終わらせたかったです)

そうだ。今皇帝を捕まえるか討ち取ればジーンを倒せなくても戦争は終わる。だがファルスの周りには親衛隊もいる。今までの連中と違って楽に倒せる相手ではないだろう。皇帝を討つてもその後自分も殺されるかもしれない。それとも……。

(……生け捕りにされた際の覚悟はしておくか)

女が生きたまま捕まったらどうなるかは容易に想像がつく。だからカーシヤも戦いに赴く際は常に自決用の短刀を隠し持っていた。このことはカイルも知らない。知っていたら絶対にカーシヤを戦場に出さず騎士を辞めさせようとするからだ。

カーシヤはかすかに震えながら短刀のある懐を手で覆う。

(……よし、覚悟はできた)

そんなカーシヤの様子を見てファルスは鼻を鳴らし馬から降りた。

「……？」

ファルスの様子をカーシヤは訝る。ファルスは剣を抜き告げた。

「その女、戦を止めるために我を討ち取るつもりだろうか？ ジーンを倒すよりは楽だと……癪だが我の方がジーンより弱い。そうだろうか？」

「!？」

カーシヤの思惑をあつさり見抜いたファルスに彼女は動揺する。

「なに！ 無礼な」「陛下、このような娘我らが」

兵士たちは立腹しカーシヤに斬りかかろうとする。

「引つ込め、これは我と女の決闘だ。それにこのような娘に討たれるようではうぬらの主君を名乗る資格はないだろう。これは我が大陸を統べるに足る器かを試す試練である」

「…はっ！」

「……」

兵を叱責するファルスと不服そうな様子を見せながらも大人しく引き下がる兵を見てカーシヤは一瞬呆然と見ていた——がすぐに取り直し槍をむける。

「来い。早くせねばユーリが死んでしまうぞ」

「はあああ！」

ファルスの挑発を受けカーシヤが槍を振るう。

ザン！

「うぐっ」

ジーンの斬撃を受けユーリが倒れる。もうすでに彼の馬を首を落とされ息絶えてい

た。

「ユーリ！」

満身創痍だがまだ動けるベルモットが駆け寄る。

「ベル…モット殿…早く逃げ…」

「そこまでだ。降伏されよ」

そこにジーンが剣を突き付け迫ってくる。

「く……」

自分を半獣と呼んだこの男への怒りは未だある。だが実力に大きな差がある。ゴルドナイトが馬から落とされて槍から剣に持ち替えても力量が落ちた気を感じさせない。

「どうした？ これ以上は手心を加えられないのだが、ユーリ王子を生かしたまま捕らえた方が外交上大きなカードになるのだが殺すなどは言われていない」

そう言ってジーンは一步詰め寄る。

「手荒いが我慢しろ」

ベルモットはそれだけ断って前足——人間形態での手——も使わず乱暴にユーリを背に乗せる。

「ガアアアア」



ベルモットは雄たけびを上げて崖を登るための階段のある方へ向かう。

「……しまった。馬に乗ってから投降を促すべきだったか」

兎のタグエルは獣牙族のラグズより遅い。だが人間よりは早い。彼女に追いつくにはあらかじめ馬に乗っておくべきだった。

もう馬に乗っても遅いだろうし、自ら兎になっっているベルモットなら階段を登れるだろうが馬に乗ったまま階段を登るといふ芸当はジーンにはまだ無理だった。

「……此度の戦の趨勢は決まった。無理に追うまでもないだろう。……この勝敗が覆るとしたら陛下が何者かに討たれたらか」

ジーンはあっさり追跡をあきらめた。ベルモットを逃すきっかけとなったミスとい、彼らしくもない失敗だったがそれはこの戦に疑問を持つジーンの心の迷いが原因だった。

ギーン！

ガン！

グオン！

「ふっ！ はっ！」

「えいつ！ がああー！」

ゴン！グアン！ギン！

しばらく剣と槍が交差する。

そこへ

ブオン！

「ぬがあー！」

天馬がファルスを蹴とばす。

「しめた！ はああ」

ギン！

——がファルスは剣を振るい槍から身を護る。

「まだだ。ぬうん！」

ガス！

ギン！

ザン！

「うぐつ」

ファルスの剣がカーシヤを浅く刻む。

「このワルガキい！」

ブオン!

斬られたことで逆に激情に駆られたカーシャは槍を突く。

ドゴ!

「ぐぬ!」

ファルスは槍を受けながらも鎧に助けられたようでひるまず剣を突く。

ギン!

「はっ」

グアン!

そこでカーシャの槍がファルスの剣をはじき、衝撃でファルスは手から剣を取り落とす。

「しまっ——」

「今だ……だああ!」

カーシャは勝利を確信しファルスに槍を突き立てようとする。

「くっ」

ファルスはうめいた後何事かつぶやいている。辞世の一言だろうか? いや違う。

『きせきのかぜよ! さけ! しっぷうのぐとく! エクスカリバー!』

ファルスが早口でエクスカリバーを唱えた途端、疾風がカーシャと天馬を襲う。

「きやあああー！」

ヒイイン！

無数の風に刻まれカーシャと天馬は地に落ち倒れる。

「加減が出来なかつたな……生きておるな」

「うう……」

ファルスはカーシャに近寄り呼吸をしているのを確認すると胸元に手を入れる。

「……」

今まで戦いを見ていた兵士はファルスが捕虜を犯すのかと思つたが、

ゴソツ、

「こいつか」

ファルスはカーシャが隠し持っていた短刀を取り出し馬の下へ行き気絶したカーシャを乗せ騎乗した。

「陛下？」

ファルスの行動を訝しんだ兵は彼に尋ねる。

「捕虜を皇宮まで連れていく。異があるのか？」

「い、いえ」

兵士は首を横に振り否定する。

「ではまず砦に戻るぞ。あ、そうだ。雑務がある故我が捕虜から目を離すことがあるだろうが……」

「??」

「女に不埒を働けば即座に首を切り落とす」

「め、滅相ありません」

邪な考えはないと訴える兵にファルスはうなずくと

「うむ、このことは砦にいる皆にも伝えておけ」

「ははっ!」

そう言つてファルスは砦に戻ろうと馬首を傾ける。

そこへ――

「おまえは! カーシヤをどうする気だ?」

「うぬは…アカネイアの兵だったな」

現れたルツツの姿をファルスは覚えており返事を返した。

「野郎! カーシヤを返せえ!」

ギイン!

「がはっ」

そこへファルスの臣下がルツツを跳ね飛ばす。

「陛下！ この無礼な小僧は我々にお任せを」

「うむ。生かすも殺すも好きにせよ」

ファルスは兵に後を任せ馬を走らせその場を後にする。

「くそ、逃げるな皇帝！」

「ルッツ！」

そこへユーリを乗せたベルモットが階段を駆け上がってやってくる。

「う、兎？」

初めてみる大兎の姿に兵はうろたえる。

「ベルモット！ ちょうどいい。加勢しろ。カーシャを取り戻す」

「カーシャを？ …いや今は無理だ。陣まで退避する。崖を降りる。お前も乗れ」

「けどカーシャが——」

「乗れ！ でないと皆死んでカーシャを助ける者もいなくなる！」

「くっ！」

ベルモットの剣幕に押されルッツはすぐに彼女に乗る。

「ユーリを支えろ。二人とも落ちるなよ」

ルッツはベルモットに言われ気絶しているユーリを支えながら自らも必死で捕まる。

「ガアアア！」

階段なしに人間では降りることのできない崖の斜面を大兎のベルモットが駆け下りる。ファルスの兵は階段を降りて追うことも忘れ見入っていた。

そんな戦場を遠くから赤毛の若者が見ていた。

「久しぶりに故郷に帰ったら大変なことになってたし、巨竜が逃げてきた西の大陸でも厄介なことが起き始めてるな」

戦場の近くにある巨大な大樹の頂上から双眼鏡もなしに若者は戦場の様子を細かく正確に見通していた。

「俺が味方するべきはあっちの軍だな。ぴったりの仕事もありそうだし」

そう言つて若者は姿をくらます。

滝での一戦はヴァルム軍の撤退とアルバレア軍の敗走つまり痛み分けて終わった。が実質的にはアルバレア軍の敗戦だった。

## 第30話 チェイニー

ヴァアルムの滝での戦いの後、アルバレア軍は退却し、西の陣地まで後退した。ヴァアルム軍も崖の存在から深追いするのは危険だと判断し退却した。崖を登るときはもちろん下る時も移動できる人数が限られて、降りることができた兵から攻撃されたら少ない損害を受ける。ファルス皇帝が皇宮に帰還したのも大きい。

両軍ともに退却したため額面ではこの戦は引き分けとなったが損害はアルバレア軍の方が大きい。実質的なアルバレアの敗戦だった。

重傷を負ったユーリは陣地の付近にある村の医療施設に運ばれた。無論ここはヴァアルム領、陣からアルバレア王家の主治医たちも同行し村の医者に頼らず施設の一室を借り彼らが主に治療する。

ヴァアルムの滝の戦いから数日。

「申し訳ない」

毛布の上で上体だけ起こしてユーリは謝る。頭を下げようとしてうめき主治医やお



付きの兵から止められる。

「いえ、僕の指揮がうまくいっていなかったからです。僕がカーシャに勝手な真似をしないように指示していたら」

ルツツとベルモットを連れてユーリの見舞いに来たカイルはユーリの謝罪に対し自分の至らなさをせいだと返す。

「それを言うなら悪いのは俺だ。俺がカーシャを止められたら」

「カーシャは天馬に乗っていたんだぞ。どうやって止める？　悪いのはお前たちの誰でもなく一人だけで崖の上まで向かったカーシャだ」

続いてルツツとベルモットがそう言うもカイルもユーリにも自責の念が残る。

「ルツツ殿のせいでもカーシャ殿のせいでもないよ。カーシャ殿の活躍にうかれて自軍の士気を上げるためだけに彼女を褒めちぎり過剰な自信を与えてしまった。カーシャ殿の一件はすべて私のせいだ」

さつき一礼しようとした際に体に走った激痛がまだ残っているのか今度は頭を下げなかつたが、ユーリが後悔しているのは痛いほど伝わった。そんなユーリにカイルたちの誰も言葉をかけられない。

実際平原の戦いの後のユーリのカーシャへの賛美は過剰すぎてカイルもあまり彼女にいい影響を与えないのではと危惧していた。

コンコン！

皆が言葉を失っている中扉を軽く叩く音がした

「療養中失礼します。入ってよろしいでしょうか」

「ああつ、構わないよ」

ユーリは即答で応じる。彼は内心でこの憂鬱な雰囲気を変えてくれるかもしれない兵士に口に出さず感謝した。

「失礼します」

入ってきたのはアルバレア兵。彼はユーリが横たわる寝床とカイルたちの前まで歩み寄るとひざまづく。

「どうした？」

「はっ！ アルバレア王宮から神竜の巫女様とシスターキットがお越しです。ただ

……」

「？」

言いよどむ兵士にユーリは首をかしげる。

「カイル王子…またお付きの方々を外まで来ていただけませんか？ 確認して頂きたい

ことが」

「え……？」

思わぬ呼び出しを受けたカイルはユーリの方を見る。ユーリは兵に尋ねる。

「カイル王子に失礼を働く気ではないだろうね？」

「滅相ありません。」

兵士は強く否定する。

「そうか。此度の戦いで指揮を執ったのはカイル王子だ。だがカイル殿に指揮を委ねたのは他ならぬ私だ。もし責めるのならカイル殿ではなく私を責めろ」

「とんでもございません。指揮だけで勝てるほどジーンは甘い男ではありません。それに小官らもカーシャ殿なら何とかしてくれると甘えていた部分があります。カイル様やユーリ様に責任を押し付けるなどとてもできません」

「ならばいい」

そこまで言うとうーりはカイルの方を見る。

「行つてあげてください。カイル王子を中傷させる真似は禁じました。それでも貴公を悪く言うものがいれば私に言ってください。灸をすえます」

「い、いえそこまでしていただくなくても、……それに責められても仕方がないと思つています。僕がうまく指揮をとれていれば損害を抑えるくらいはできたかもしれないのに」

「な……なあ。そろそろ行かねえか？ チキもシスターさんも待つているぜ」

また自責を始めるカイルを見ていられずルッツは外へ出ようと促す。

「ああすまない。ではユーリ様、私たちはこれで」

「ええ、巫女様も退屈し始めるころでしょう。行つて来て差し上げてください」

ユーリに見送られ兵士に案内されカイルたちは外へ出る。

ヒイン！

そんな彼らを出迎えたのは天馬だった。

「うわっ！」

カイルは思わずひるむ。

「どうどう、そろそろおとなしくしてくれ、ほらご主人様のお友達だぞ」

暴れる天馬を赤毛の若者がなだめる。

「カイル！ 大丈夫だった？ ヴァルムにやられちゃったって聞いたけど」

そこへチキがカイルにすがりつく。その後ろからキットがついてきた。

周りにはチキたちを護衛して来たアルバレア兵たちもいる。

「ああ、僕は大丈夫だ。他の皆は……」

カイルが横を向くとルッツたちが応じる。

「おう、かすり傷を負ったが杖を当てられた途端この通り元気さー！」

「体がなまつてたからな。崖を下るくらいいい運動になったくらいだ」

腕まくりをするルッツとそっけなく話すベルモットはそれぞれ壮健だと言う。

「ただ……その……カーシヤは」

だがカーシヤのことをごまかすわけにもいかずカイルはたどたどしく話そうとする。

だがチキは――

「あ……うん。知ってる。この子から聞いたから」

「え……？」

チキに做つてカイルも天馬を見る。

「あ……もしかして、これ……カーシヤの天馬？」

言われてみると天馬に装着されている鞍などはアカネイアの天馬騎士団の者だ。そしてパレスの惨事を生き残っているわずかなアカネイア天馬騎士の中でもヴァルム大陸に來ているのはカーシヤただ一人だ。

アルバレア兵がカイルたちに確認させたいこととはこの天馬の事だったのだ。

「……そうか生きていたのか。すまない。助けるどころか生死を確認する暇もなかった」

ベルモットは申し訳なさそうに謝りまだ荒れる天馬を撫でる。すると天馬は幾分か

大人しくなった。天馬は男には心を許さないと言う。男になだめられるより女のベルモットが撫でた方が効果的のようだ。

「いやー気にしなくていいぜ。こいつの機嫌が悪いのは俺のせいだから」

天馬を撫でるベルモットに赤毛の若者が声をかけてきた。

「…………お前は？」

「俺か。その天馬を助けてここまで連れてきた恩人さ」

赤毛の若者はそう言つて頭の後ろに手を組んだ。

「…………」

ベルモットは若者を胡散臭そうに見る。

「もう！ ちゃんと自己紹介しないと駄目でしょう。ベルモット気にしないで、彼はこういう人だから…………みんな紹介するね。この人はチェイニー。私の友達だよ」

「え…………チキの？」

「うん！ 私とキットがアルバレアの兵士さんと一緒にここに来る途中で会つたの」

チキの紹介にカイルは驚く。チキの友達ということはノーヴァ教国の関係者だろうか。それにしては軟派すぎる。

「…………ん？ お前さん」

チェイニーに対してカイルが訝しく思っているとチェイニーはカイルに近づいてき

た。

「……マルスにそっくりだが……その聖痕はナーガの……」

チエイニーはカイルの右目を見てぶつぶつ言っている。

「チエイニー殿？ ……あの……この眼は僕の体質で大したものでは」

「ああ、いきなりで悪いな……お前さんアカネイアって国の王子かい？」

カイルの言い訳も聞かずチエイニーはカイルに尋ねる。

「あつ！ これは申し遅れました。私はアカネイア王国の王子カイルと申します。カ-

シャの天馬ケリーを助けていただきありがとうございます！」

カイルの礼にチエイニーは手を振っていいと言いつづける。

「アカネイアの王子ってことはマルスの子孫か。じゃあ親戚に別の大陸……ユグドラルつてどこから来たって人はいないか？」

「!？」

カイルは驚く。

カイルの母ユリナがユグドラル大陸から来たことはアカネイア王家を少し調べればわかることだろうが、それにしてもチエイニーという若者はカイルがアカネイアの王子だと言うことは知らなかったようだが。

「私の母、王妃ユリナがユグドラル大陸グランベル王国のバーハラ公爵家の出だったと

聞いております」

「そうかそうか。なら聖痕が出ていても不思議はないな。……あの家系では額に出るはずなんだがアカネイアに來た影響か? ……それともファルシオンの——」

チェイニーは聞きたいことを聞くと納得しました別の疑問がわいたらしくぶつぶつ言った後黙り込んでしまった。

そんなチェイニーに皆が困惑し、たまらずカイルは気になつていたことを聞くことにする。

「チェイニー殿。ところで先ほどあなたはマルスと言いましたがまさかあなたは……」

普通ならば自分の知つてるマルスとは別人だと思ふだろう。しかしチェイニーはチキの友人でしかも自分のことをマルスに似ていると言つた。

ならば彼の言つてるマルスはアカネイア連合王国の祖・英雄王マルスのことでチェイニーの正体は——

「ああチキと同じ神竜族さ! お前さんの祖先のマルスとは知り合ひさ。一緒に2度もメデイウスと戦つたことがある」

「そうだったんですか!」

カイルは2重の意味で驚く。チキから神竜族はもうほとんど生き残つていないと聞いていた。その上もう一人の神竜もマルスと一緒に戦つたことがあるなんて!



「ああでも神竜になつて戦えとか言うなよ。俺は神竜石を捨てた。神竜どころか他の竜にもなる気はない。今のチキの代わりを期待しているところ悪いが」

「チエイニー様！」

「あつ、悪い悪い」

チキがもう何度も神竜になれないと知りながらついそんなことを言つてしまったチエイニーにキツトは一喝した。

「いいよ。本当の事だから」

チキはそう言つてキツトをなだめる。チエイニーはぼつが悪そうにしてから表情を戻しカイルに視線を戻す。

「…で、俺は戦力としては役に立たないわけだ。すまない」

「いえ、暗黒竜やギムレーのような竜を倒すのはマルスの家系の役目。元よりチキや他の神竜にすがらうとは思つていません」

自分の未熟さを置いてカイルは宣言する。せめてギムレーをこの手で倒さなくては自分は祖国や先祖に向ける顔がないだろう。

「真面目だねえ。性格もマルスそっくりだ」

「そ、それでしようか？」

マルスとそっくりというチエイニーの言葉にカイルは照れながらそうかと尋ねる。

マルスが不真面目だったとは思わないが、醜態を見せてばかりの自分がマルスに似ているとは思えない。

「おうともさ、お前さん……ええと——」

「カイルだよ」

チキに教えられチェイニーは続ける。

「そうそうカイル。俺にもタメ口で話せよ。マルスみたいな顔で敬語使われても変な感じがする」

「そ、そうかな？」

「ああっ！」

「わかったそうさせてもらおうよ。チェイニー」

カイルはうなずき。話を続ける。

「でも天馬をここまで連れてきてくれたって聞いたけど大変だっただろう。男は天馬に乗ることができないから」

「ああ、それはだな……」

そこでなぜかチェイニーは顔を泳がせる。

「うーん……」

チキとキットも気まずそうな顔をしている。チキたちに同行した兵士たちも話を聞

いて目を揉む仕草をした。

「??」

彼らの様子にカイルは疑問符を浮かべる。

「そ、それよりその天馬のご主人様だ！　そいつ助けなきやならないんじゃないか」  
なぜかごまかすようにチエイニーは天馬の主人カーシヤのことに話題を変える。

「うん！　幸いにもヴァルム軍は追撃してこなかった。アルバレア軍と僕たちアカネイア軍はユーリ様の傷が治り次第ヴァルム皇宮へ攻め込むことになるだろう。ただそれまでカーシヤが無事だといいいんだけど……」

カイルが気丈にふるまえたのはそこまでだった。捕虜になっても名の知れた貴族なら取引のために自害せぬよう、傷一つ付けぬよう丁重に扱われるが、下級貴族ましてや平民の捕虜はひどい扱いを受ける。

カーシヤは平民で出身はマケドニア、正確にはアカネイア人ではない。だからヴァルムから見れば平民以下だと思われてもおかしくない。その上カーシヤは粗野だがどちらかと言えば美人の部類に入る。屈辱的な目に遭っている可能性の方が大きい。

「……ぐっ」

自分の至らなさをせいでカーシヤをそんな目に合わせている。叶うなら誰かに自分をぶん殴ってほしいくらいだ。

「カーシャ様ならご無事ですよ」

「え？」

陰鬱な気分沈んでいるカイルにキットがそう言った。

「カーシャ様は軟禁されているものの特別な待遇を受けています。捕虜というより客人ですね」

「え？ え？」

キットが何を言っているのかわからない。

今まで見守ってたルツツも天馬を撫でていたベルモットも目を丸くする。

「あの…シスター、慰めてくださるのはいれしいのですが、さすがに希望的観測が過ぎるのではと…」

気休めに無事だと言ってくれるだけならまだわかる。だが好待遇を受けているというのは虚言が過ぎると言うものだろう。

「いいえ根拠はありません。我々ノーヴァ教国は大陸中に信徒を持つバレンシア教の総本山です。大陸中に影響を持ち教国の要請通りに動いてくださる協力者も各国にいます。

…：ファルス様は過去の遺物を崇める宗教だと軽んじておられますが」

キットの説明の意味をカイルは察する。

「各国に協力者が…まさか！」

「はい！ ヴァールム帝国にも国の内情を教えてください。間者に近い信徒がいます。それも皇宮内部で高い地位にしている方が……彼女からの情報です」

## 第31話 捕らわれのカーシャ

「ありがとうございます司教様」

「いえいえ、カーシャ様にミラ様とドーマ様のご加護があらんことを」

札を言うカーシャにバレンシア教の司教を務める金髪の女性ティーナは神の加護を祈って退出する。

ここは教会でも聖堂でもない。ヴァルム皇宮の客室だ。

ノーヴァ教国から派遣されヴァルム帝国の大聖堂の長を務めるティーナは教誨師として捕虜となっているカーシャの教誨にあたっていた。

無論これは異例の措置だ。カーシャ以外の囚人は客室など与えられないし、教誨に司教を招く真似などしない。

「本日の教誨が終わりました」

扉の前に立ったティーナ司教がそう告げると扉が開く。

「お疲れ様です司教様。どうぞお気を付けて」

扉を開けた金髪の女兵士は司教が退出し終わるまで扉の取っ手を離さない。ティーナが廊下を歩いていくのを見届けると女兵士はそのまま客室に入った。

女兵士はカーシヤのような天馬騎士と違い男が装着するものと変わらない鎧を装着している。

「失礼しますカーシヤ様！」

「いいえ……お役目お疲れ様ですフェイスさん」

カーシヤが皇宮に連れていかれてから女兵士フェイスがカーシヤの監視を務めていた。彼女はカーシヤを捕虜ではなく客人として丁重に接している。

皇帝に捕らわれてから皇宮に到着するまでカーシヤは迷っていた。女が生きたまま捕まったら何をされるか容易に想像がつく。

ジーンあの強さを見れば戦況はあまりよくないのかもしれないが、カイルたちとアルバレア軍はいずれ皇宮まで攻めこむだろう。聡明なユーリ王子と何よりここまで来られたカイルたち仲間を信じている。だがそれまでに自分が処刑されずにいるか精神を保てるか保証がなかった。

自分を助けようとするカイルたちには申し訳ないが拷問や凌辱を受けるくらいならここで自決した方がはるかにましだと思う。だがたとえ自決しようとしても自決用の短刀は皇帝に奪われてしまった。残った自殺の方法は舌を噛み切ることだ。だが鋭利

な刃物と違い歯で舌を噛み切るのはかなりの労力がかかりその痛みは想像を絶するものに違いない。しかもすぐに治療されれば死ねない。

そうやって逡巡している間にカーシャが兵士に連れていかれたのがこの客間だった。牢屋にしては豪華すぎる、そもそも宮殿内の牢とは地下にあるものではないのか？

感触はあるが夢を見ているに違いない。そう思おうとしている間にも捕虜らしからぬ優遇は続く。カーシャに付けられた監視は女性で手荒な真似はしない。監視と言ってもほとんど客間の前を警備していてカーシャの生活を直接見張る真似はしない。

さらに定期的に聖堂から司教が訪れてきて教誨としてカーシャを励ましてくれた。カーシャが信仰しているラーマン教ではなくバレンシア教の聖職者だが司教の属しているミラ派の教義はラーマン教のものと内容は変わらずすんなり受け入れられた。——現在のバレンシア教は神竜チキを崇めているため神竜の王だったナーガを奉じるラーマン教と変わらないのだろうか？——

何よりほとんど部屋の中にいるだけの生活で接する唯一の話し相手を宗教が違うからと言って拒絶することが出来なかった。

ここまで厚遇が続くとあの皇帝がカーシャにどんな感情を抱いているのか想像がつか



くのはカーシャが恋愛小説を読み過ぎているせいではないだろう。

現に監視兵フェイスはティーナ司教を見送った後、いつもなら扉の前の警備に戻るのに今日は部屋に入りあることを告げようとしている。

「カーシャ様、今日の昼食ですが……皇帝陛下と一緒にどうかとの事ですが」とうとう痺れを切らしたか。

いつも食事はメイドが客間まで運んで来るのにいよいよ皇帝から誘いを受けたらしい。

「……」

受けるべきか考えるカーシャにフェイスはこう続けた。

「強制はしないとのことですので……断ることもできますが」

「行きます。案内してください」

カーシャは誘いを受けることにした。反抗し続けるとそれだけ早くあの皇帝が自分を無理やりモノにしようとしかねないあの悪ガキに聞きたいこともあった。

「かしこまりました。ただ……」

「何です？」

言いあぐねたフェイスはカーシャに聞き返され言うことにする。

「その……ダイニングホールへ向かわれる前にお召し物を変えた方がよろしいのでは

と

カーシャはファルスへの反抗心から客間に備えられたドレスを着ずフェイスから彼女の服を借りていた。フェイスはヴァルム軍の士官で私服もみすぼらしいわけではなかったが皇帝と食事をとる貴人の服にはふさわしくないだろう。

「……駄目ですか？」

「陛下は気にされないと思いますが他の家臣の目もあります。……敵対している国の人間である私が言っているのかわかりませんが、あなた様の主であるアカネイアの王子殿下の品性が疑われてしまいます」

「……………わかりました」

カイルのことを出されカーシャはフェイスの忠告に渋々従った。

「グイグイ！」

「やっと来たか。もう来ないのかと思って始めているぞ」

カーシャたちがダイニングホールにつく頃には皇帝ファルスは席につき葡萄をつまんでいた。

「陛下、カーシャ様、わたくしはこれで」

カーシャを案内したフェイスは二人に一礼しホールから出ていく。その後ホールの扉を守っていた衛兵が二人がかりで扉を閉める。

フェアルスは食事を止めカーシャのドレスを見る。

「ほう、遅いと思っていたら着替えておったのか。なかなかよく似合っておる」

「それはどうも……果物お好きなんですね」

ドレスを褒めたフェアルスに礼を返しながらも彼の前に並ぶ果物にカーシャはあつげにとられる。フェアルスの印象から肉類を好むと思っていた。

「うむ、幼いころからこれはやめられぬ。……肉を取ればもつとがっしりした体形になるかもしれぬとは思うのだがな……あるいは逆に野菜を取ればそうなるのか？」

フェアルスはほんの少し考え始めるがそれでも果物はやめられないと結論付けてカーシャに席につくよう勧める。カーシャもその指示には大人しく従うことにする。

「……最初から私を捕まえるつもりだったんですか？」

開口一番カーシャはあの戦いの目的を尋ねる。

あの場所に皇帝が側近だけを連れて現れるのはどう考えてもおかしい。戦況を打開するために崖の敵を掃討したカーシャを捕まえる算段だったのではないか。

「うむ。……もつとも厄介な敵であるうぬを倒すのが優先だ。その時に生きておればむやみに殺さず捕らえて捕虜とする。おかしくあるまい」

ファルスはあっさり肯定した。シューターを置いたりカーシャを敵兵として撃ち落とす指揮官としての判断を最優先としていたようだ。

だが自分から戦争を仕掛けるような王に対して、捕らえることと殺すことのどちらが正しいのか議論するつもりはない。捕虜の扱いの話に乗らずカーシャは滝での戦いに話を変える。

ヴァルム大陸には古から魔導書なしでも詠唱だけで魔法が使える術があると学んでいる。書物なしで魔法が使えたことには驚かない。だが

「驚きましたよ。剣の他に魔法が使えるなんて……」

「……聖帝アルムの妃の話を知っておるか？」

苦虫を噛み潰したような表情でファルスはつぶやくように聞く。

「……はい。ユーリ王子にヴァルムとアルブレアの建国時の話を聞いて、その後書庫で聖王アルムと王妃アンテーゼの話も調べました」

聖帝と呼ぶファルスに対抗するようにアルムを聖王と呼ぶカーシャの嫌味を気に留めずファルスは話を続ける。

「アンテーゼ妃も剣と魔法どちらも使えたらしい。……絵画通りの御姿なら髪の色も赤いのだろうな」

ここでカーシャはファルスが機嫌を損ねた理由を悟る。

「皇帝……もしかしてあなたは自分がアンテーゼに似ていることに引け目を感じているのですか？」

「……」

ファルスは押し黙る。無言で肯定しているようだ。

「人々を助けるために立ち上がり、アルムと争ってまで戦争を避けようとしたという話があるそうですね。…立派なお方じゃありませんか。私は個人的にアルムよりもアンテーゼを尊敬します」

「ほう。騎士のうぬならば強い英雄に憧れているものだと思っていたがな……うぬがそう言うのならアンテーゼを祖先に持つことを多少は誇りに思えるぞ。……だがヴェアルムの皇家はアルムのように大陸を統一する霸王たれと言われ己と子を鍛えるのだ。我もアルムに憧れアルムに続かんと努力を続けてきた。その我がアンテーゼの方に似ているなどとても割り切れるものではない」

カーシヤには理解できない。功績を持つ立派な祖先が2人もいるのに片方に憧れるあまりもう片方に拒否感を持つなんて。

カーシヤは天馬騎士だった経歴を持つ祖母がいた事以外は普通の平民だ。——その平民のカーシヤがカイルの側付きになった時多くの反対意見があつたものの平民なら次期国王であるカイルを操るような野心も抱けず、恋仲になつたとしても愛妾で終わり

外戚になることは無いと反対した者も意見を引つ込めたという——

だがカーシャは厳しくも優しい両親と生意気だが心強く将来どこへ働きに出ても兵に志願しても立派にやっていけるだろう弟がいる。——その弟は以前マケドニアに帰ったときカイルを自分の恋人だと思つて突つかかり、カイルは許してくれたものの微妙な雰囲気のまま別れてしまったので、従軍した場合王宮勤めになつた時にカイルとうまくやっていけるか不安ではあるのだが——

そんな家族は皆カーシャの誇りであり誰一人恥ずかしくて出せない者などいない。

そこでカーシャはふと周りを見て気付く。食卓に着いているのは自分と皇帝だけで他には直立不動で待機している兵士と使用人しかいない。自分を客人とみているのかそれとも食卓での決まりでもあるのか皇帝やアルムに対して不敬なことを言つても声をあげたりもしない。

皇帝は父親を亡くしているようだが、

「……あの、あなたのお母様やご兄弟はいらっしゃられないのですか？」

「我の実母は妾だ。顔も知らぬ。前の皇帝と正妃の間には子がいなくてな、我は妾腹ながら皇子として育つた。そして皇帝が死ぬと他に皇子がいなかったため我が皇帝となつた」

アンテーゼに似ている話の時とは違つて林檎を切りながら何でもないことのようにフアルスは話す。

「無論反対する者はいた。妾を母に持ちアンテーゼの方に似ている皇子など新皇帝に不  
相応だとな。反対する縁戚の中には自分こそが皇帝だとのたまうものもいた。皆我が  
処刑した。正妃はその後自ら命を絶つたがな」

「……」

「腹の中では我が帝位についていることを不満に思っているものはまだまだいるだろ  
う。だが大陸を統一し聖帝アルムの伝説を再現すればそやつらも我が皇帝だと認めざ  
るを得なくなる。我がこの地の統一を目指す理由は納得したか？」

思っていたよりも壮絶なファルスの半生に呆然としながらもカーシャはファルスの  
言葉の最後にはうなずけない。

「……あなたも過酷な思いをしてきたのはわかりました。…ですが関係のない民を巻き  
込み多くの人を犠牲にしてまで戦争をする理由にはなりません」

「ふむ……だがこの戦争が起きなくてもヴァルム以外の国が小競り合いを起こしそのた  
びに民は犠牲になっておるぞ。まさかこの大陸のすべての戦争がヴァルムと隣国だけ  
のものだとは思っておらぬな？」

「……そ、それは」

カーシャは戸惑う。アカネイア大陸はアカネイア連合王国という巨大すぎる国に統  
治され内乱や蛮族の侵入未遂が起こっても国と国の戦いとは無縁だった。カーシャに

は国と国が隣り合うだけで戦争が起きる可能性があることをまだ理解できていない。

「確かにこの戦争は私の身勝手によるものだ。だが他のすべての戦争も併合も為政者や貴族の身勝手によるものだ。それはうぬの大陸でも違いあるまい」

「うう……」

カーシャは反論できない。フェリスもペレジアもアイネやユベンが建国や他の街との併合を宣言し成立したものだ。戦争とまではいかなくてもそこに民の意思はない。

「国が複数存在する限り戦争は起きる。そのたびに民は犠牲になる。だが国を一つに統一すれば国同士の戦はなくなる。あとは盗賊を抹殺し治安を保てばいい。今多くの民を巻き込んで未来に生きるより多くの民を救うため、これはそのための戦いでもある……と言えはどうだ？」

「大勢を救うためだからと言ってそれより少ない人を死なせていい訳がありません！」

動揺しながらもカーシャは必死に反論するが――

「ならばうぬらが今まで殺した敵は何だ？ 主張が違えば殺してよいのか？ 敵対するものは殺してよいのか？ うぬらの国を救うために多かれ少なかれの敵を討つ。我のしていることと大した違いはあるとは思えん」

「うう……」

カーシャはついにうなだれる。自分でも薄々気づいていた矛盾を次々と突かれた。



この皇帝を論破する言葉がない。それどころか自分が殺めてきた命に対する罪悪感がわいてくる。これ以上この場にいたら泣き出してしまいそうだ。

「……今の主張に対する反論が見つからぬ……だが納得はできない。そうだな？」

「……」

カーシヤは黙つてうなづく。

「そうか。だがもう少し時間がたてば言い分も見つかるかもしれない。あるいはうぬが我に賛同する日も……」

「それまでカイル様やユーリ王子との戦いをやめてくれるんですか？」

カーシヤの言葉にファルスは首を横に振る。

「それは無理だろう。例え我がそのつもりになつてもアルバレアの兵が納得しまい、互いに命を狙われたと思ひ合つていればな。何らかの形で決着をつける必要がある」

そこでカーシヤはハツとする。

「ユーリ様を狙つたのはやはり教団。……いやそれより皇帝、あなたも狙われて……しかも——」

「うむ、我も狙われた。兵はアルバレアの仕業だと思つているが。十中八九黒ローブ共だろう」

ファルスはあつさり教団が仕組んだことだと認める。

「そんな……わかつていたならなぜ弁解しないんです？ ユーリ様だって教団のことは気付いています。アカネイア諸国が加わるかもしれない状況で戦争するのはあなたにとって不利なのでは？」

「あの王子の反応とそれまでの調査でアカネイアからは調査団以外の兵はいないと推測した。東の海には増援が来ないか見張りのための船も派遣している。……それに何事もなければうぬは故郷に帰ってしまう。この大陸に留まらせるには戦争を起こすしかなかったのだ」

「……………はい？」

カーシャは思わず聞き返す。ファルスは顔を赤らめ、そっぽを向くのをこらえて正面を向いたままでいる。

「……………そこまでしてもうぬが欲しいと言うことだ。私の妻となれ！ そうすれば捕虜ではなくよりよい待遇を与えてやれる」

「……………はは、冗談ですよね？ 私はヴァルムと交戦しているアカネイアの人間で平民です。皇帝の妻って皇后様でしょう？ なるわけがない！」

捕虜のはずの自分を厚遇してきたのはファルスが自分に好意を持っていたためだともう確信している。しかしまさか妃になれと言ってくるとは思わなかった。カーシャは引きつった笑いで流そうとする。

「平民だったか……そうか。では妾にせざるを得ないな。だがそれでもうぬが想像できるくらいのことは何でも叶えてやれるぞ」

「私がお金や物で妾になんかなると思うの！」

金で関係を結ぶなど、まるで娼婦のようだ。カーシヤは腹を立て声を荒げる。

「それだけではないぞ。我とうぬの間に子が産まれ、いずれ迎える正妃との間に子が産まれねば、うぬの子が次の皇帝だ。妾の子では我の時同様困難だろうがその子を我が鍛えてやる。事の次第ではうぬやその子がこの帝国を牛耳ることができるのかもしれないのだぞ」

「だから、そんなもののために私があんたなんかのものになると思っているの！」

権力を手に入れられる可能性が加わったところでさつきと意味は変わらない。

ファルスはうなずかないカーシヤにふと尋ねた。

「……もしや、心に決めた男がいるのか？」

「……………え!？」

カーシヤは戸惑う。ファルスに心に決めた男と言われて思い浮かぶのはカイルの顔だ。

最初は同じ年だからということと国王夫妻から押し付けられた能天気で頼りない王子でもう一人の弟のようなものだった。

だがカイルはパレスの悲劇の後様々な苦難を乗り越え成長し、ナーガとの対面の時はどんなに苦勞してギムレーを倒しても千年後には水の泡になるかもしれないと言われてもそれでもやり遂げるとナーガに宣言した。

その時からカーシャの中でカイルの存在は大きくなっていった。それがなければ自分の下着姿を見て欲情しているかもしれない男と寝場所を共にすることなどできず一晩中寝ずの番をしていただろう。

「……それもあの王子か？」

「……」

カーシャは答えない。が否定しないのがファルスの推測が正しい証拠だった。

「そうか。だがそれこそよく考えてみるがいい。アカネイアは一度壊滅したが復興を遂げた国だ。あやつはその国の王子だぞ。うぬは平民だと言ったな。あやつと添い遂げられてもうぬの扱いは妾だ」

「それは……」

ファルスの言うことは正しい。想いに従ってカイルと結ばれても平民のカーシャは愛妾以上にはなれないだろう。

「妾の身でも我ならばこの大陸を統一してうぬにもっといい思いをさせてやれるかもしれない。どうだ？——」

ゴンゴン！

ファルスが追い打ちの言葉をかけている最中に扉を叩く音がした。

「ん？」

「陛下！ お食事中失礼します。ご拝聴して頂きたいことが」

扉の向こうから伝令の兵士らしき男の声がする。

「よいぞ。入るがいい」

「はっ！ 失礼いたします」

ギイイ！

扉を守っている衛兵が二人がかりで扉を開ける。

「陛下！ 失礼いたしました……あっ！」

兵士は皇帝と対面して食卓に着いているカーシャの姿に戸惑う。

「申し訳ありません。会食の邪魔を……」

「よい。許可したのは我だ。……カーシャ。返事は今度聞こう。そうだな。この戦の決着がついた後ならどうだ？ それならうぬの考えも変わるかもしれない」

「……それは！」

カーシャの想い人であるカイルが死んだらカイルと添い遂げることができない。そう言うことかと聞こうとした。

「ここからは軍の機密がある故退席願おう。食事は部屋まで運ばせる。気が向いたら戻るがよい」

カーシャが聞くより早くファルスはカーシャの退席を命じる。抵抗してもほどなくフェイスがやって来てカーシャを客室まで連れていくだろう。

カーシャは黙ってホールを後にししばらくの間扉の前でフェイスを待っていた。

ドルマ城塞都市周囲。

グオオオオン！

「ぎぎやあああー！」

ドルマの一部隊が王宮の外壁を出て敵軍に突撃し彼らはラグズたちに襲われる。

今ドルマ軍とチャルロスの師団はドルマの城塞都市にこもりヴァルム帝国から援軍が来るまでイストリア軍と籠城戦をしている。

両軍の数はほぼ同数。ドルマ軍は数を減らしたもののその差は城攻めを左右する3倍には至っていない。ならばイストリア軍がこの王宮に攻め込もうとすればするほど彼らはシューターや長弓・長距離魔法にさらされ消耗していくはず。だがそれに気づいたのかイストリア軍は動かず逆に彼らを弱腰と侮った部隊が突撃を試み返り討ちに遭

う始末だった。

そうして今戦況は完全な膠着状態に陥っていた。

「なあ、本当にヴァアルムは援軍を送ってくれるのか?」

「軍師のチャルロスを見捨てるような真似はしないと思うが……」

城壁の上でイストリア軍を眺める見張りの兵はそんな話をしている。

チャルロスの思惑とは逆に消耗しているのはドルマ軍の方だ。もしヴァアルムが援軍を送ってこなければ物資が尽きてドルマが不利になってしまう。ドルマが滅びた後で疲弊したイストリアと戦い、大陸を統一する。ファルス皇帝が考えそうなことだった。

それにシユーターをかくぐって都市に入る方法が本当にないとは限らない。

その時彼らの下へ鳩が飛んでくる。兵士は鳩を注視した。

「何だ?……! 足に紙を張り付けているぞ」

「なんて書いてある?」

「……! 早く陛下に報告しないと。俺は王宮へ行ってくる。見張りは任せろぞ!」

そう言って眼下のイストリア軍から逃れるように見張りの一人が城壁の内部へ駆けていく。

「あつ! ……くそ! イストリアの相手を押し付けられたか」

残されたもう一人は怒りに任せてそう吐き捨てた。

フェイリス クラス：パラディン

「覚醒」のフェルスの先祖。ヴァルム帝国軍士官。伝説の女騎士マチルダに憧れて実家の反対を押し切り軍に志願した。アルムを尊敬するファルスからは冷遇され戦の際は帝都の待機を命じられているがその才能はジーンを凌ぐかもしれないと言われている。

ティーナ クラス：聖女

バレンシア教の司教。現在はヴァルム帝都の大聖堂に派遣されている。



## 第32話 参戦 脱出

チャキ！

「投降しろ！」

ドルマ王宮の奥の広間でイストリア兵と傭兵団を従えたアイクはチャルロスに剣を突き付ける。

「そ、そんな。城壁にいたシューターと長弓兵は何をしていたの？ 侵入できたとしてもこうも早く王宮を制圧されるなんて」

チャルロスの疑問にセネリオが答える。

「ドルマはもうヴァルムと組む気はないそうですよ。自軍があつさりイストリア軍に追い詰められたうえアルバレア軍がヴァルムの滝まで攻め上つたという知らせを受けて、イストリアに降伏しともに戦う決意をしたそうです」

「な、何ですって？ ……あの国王、裏切りやがつたな！」

敬語どころかいつもの女言葉も捨ててチャルロスはドルマ王を罵倒する。

「王宮に残っているあんたの部下も恐れをなして戦わずして降伏した。あんたはどうするんだ？」

アイクは剣をむけるのをやめずチャルロスに詰め寄る。

「まっ、待つて。お願い……許して…… 私は 皇帝の言うとおりにしてきただけなの。私も嫌だったけれど仕方なく、ねえ……だから、たっ……助けて…… 何でも言う事を聞きますわ。ほら……このとおり！」

そう言つてチャルロスは手を組んで土下座の姿勢を取ろうとし、アイクも剣を握る手を緩める。

「と…… 油断させて…… ばかめ…… 死ね!!!」

チャルロスはそう言つて短刀を手にアイクの額めがけて飛びかかる。

ヒョイ。

「え?」

ザン!

アイクは短刀を難なくかわしチャルロスの頭を両断する。

「ぐええ」

大量の血しぶきがアイクと広間を汚し、チャルロスだった屍が転がり落ちる。

「団長お疲れ様でした。」

「ああ済まない」

労いをかけながらセネリオが差し出した手拭きをアイクは受け取る。

「しかし女言葉を使う男か……エリンシアを襲った部隊にいちいち金切り声をあげて命令していたベグニオンの貴族を思い出すな」

一段落終えた後アイクは「くすくす」という笑い方をするベグニオン帝国の元老院議員を思い出す。

「キサがリイレと喧嘩してるときに使っていたのを聞いたことがありますよ」

「そうなのか？」

「ええ、ライヤリイレのような身近な者以外には普通に話すのであの戦いが終わるまで気付いた者はほとんどいません」

セネリオとそんな話をしていたアイクにイストリアの将軍は声をかける。

「傭兵団長殿、苦勞を掛けた。…それでは手筈通り我々はドルマ王都の平定とヴァルムへの攻撃の準備を始めよう」

「そうか。……念のため言っておくがドルマ国民への略奪を始めたら俺たちは即座にあんなたちの敵になる。覚えておいてくれ」

「もちろんだ。ヴァルムと戦うにはドルマの協力は欠かせない。それに略奪など我が王も望んではいけない」

将軍はそう約束した後兵を率いて広間から出ていく。

将軍が立ち去った後アイクとセネリオはこの国に来た目的について話を始める。

「では、捜査と行こうか。なるべく住民を不安がらせないように……本当なのかこのドルマに教団が潜んでいるのは」

「確実ではありませんがね……ですが僕とカイルはそう考えています。カイルの話によればこの国はミラ派とドーマ派の住民が混在しているそうじゃないですか」

「ああ……同じ宗教だが別々の神様を祭っているんだったか」

アイクの言葉にセネリオはうなずく。

「元々は違う宗教だったせいだとか……そしてこの2派は和解したように見えてまだ対立は続いている。同じ国に住んでいても交流はないでしょう」

「まあ昔は戦争まで起こしたそうだからな」

「つまりお互いの宗教の儀式や行事を知らない可能性は高い。……この2派ではない別の宗教の関係者が潜んでいても気付かないくらいに」

セネリオの説明によろやくアイクは合点がいく。

「木の葉を隠すならなんとやらか!」

「ええ、彼らは異教を嫌いますがこの大陸では皇帝の協力が得られなかったせいかな潜むことに専念している。異教徒の町で生活するのは彼らのとって苦渋のはずですが、順応してしまえば絶好の隠れ蓑です」

「そうか……」

アイクは団員たちに向き直る。

「ここからが本番だ。俺たちの新しい住処になるかもしれない大陸を焼き払ったラーズ教団を捜し出し、カイル王子の前に引きずり出す。行くぞっ！」

オオオオオオオ！

ユーリの傷が癒えたのを確認し、アルバレア軍と彼らに随行するアカネイア軍はリゲル軍が退却した滝を北上し、迎え撃ったヴァルム軍を撃退し帝都の南に到着する。

杖による回復を経た後も戦いに出るのは厳禁とされたユーリに指揮を託しカイルは自ら戦場に立つ。

この戦争を終わらせるため、ヴァルム大陸の疲弊を狙ってこの地を滅ぼそうとするラーズ教団の陰謀を阻止するため、そしてファルス皇帝に捕らわれたカーシャを助けるために。

アルバレア陣地の天幕。

「はい。これが新しいファルシオンだよ」

「これが……」

チキから返却された新たなファルシオンは今までとは全く違った形をしていた。柄

の方はワーレンにて元の型を知らない鍛冶師に作らせたのだから仕方ないが……。

「それでチキ……肝心の竜玉が抜き取られてるみたいなんだけど……」

今のファルシオンには竜玉と呼ばれる宝玉がはめ込まれていない。竜玉があつたらしき箇所には大きな空洞がむなしく空いている。

カイルの言葉を予期していたチキは人差し指を立てそれを揺らしながら説明する。

「ちつちつちつ、竜玉ならちゃんとおあるよ。ただ聖痕を通して盾の力を借りることのできるファルシオンは前のファルシオンより殺傷力が高くなつちやつたうえに命のオーブの力で傷を癒すことができるの。そんな剣の力をいつも使えるようになってつちやつたらどうなると思う？」

チキの言ってる言葉の意味をカイルは理解する。

「……僕の子孫の中にこの剣の力を利用して力で民を押さえついたり他の国を攻め込もうとする者が現れるかもしれない。……ユグドラル大陸で起こったことのように」

カイルの推察にチキはうなずく。

「だから普段はその力を封じ込めておかなければいけない。「覚醒の儀」でギムレーを倒すと誓った者だけがギムレーが存在する期間の間だけ真の力を使えるようにするの。不満？」

「いや……チキの言う通りだ。では竜玉は……」

カイルはファルシオンの柄にある空洞を見ながら話す。

「見えないだけでちゃんと存在する。本来の力を使うときだけ見えるようになってる。これなら竜玉だけを奪うこともできにくい。儀式を済ませたカイルならこの戦いから「神剣ファルシオン」の力を使えるよ」

「そうか……いろいろありがとうチキ。必ずギムレーを倒すよ。…その前に」

カイルは天幕の中からヴァルム皇宮の方を見る。

「カーシヤを助けなきやね……チエイニーがうまくやつてるといいけど」

チエイニーはカーシヤを助けるため皇宮に潜入していた。

「もし皇帝を追い詰めてもカーシヤを人質に取られたら、それに気を取られた隙に僕を殺し、形勢を逆転されかねない。だからチエイニーに頼らざるを得なかったけど……本当に大丈夫だろうか？」

「大丈夫。チエイニーだつて竜になれなくても神竜の一人だもん。それに「あの力」は戦いにも使えるし、絶対にカーシヤを連れて帰つて来てくれるよ」

「あの力」か……」

「あの力」は潜入に最適な能力だ。初めて見た時はその場にいたもの全員が仰天した。一度見たはずのチキたちの護衛兵もまた目を揉み幻覚を疑っていた。

あれならカーシヤの天馬を苦も無く陣地まで連れてこられたことと、チキたちが言い

づらそうにしていたこともわかる。

「そうだな。チェイニーを信じよう。チェイニーの頑張りを無駄にしないために僕たちは……」

カイルはファルシオンを携え、封印の盾を持つ。ファルシオンの真の力を引き出すには封印の盾が必要不可欠だ。

「ヴァルム皇宮を制圧する！」

そう宣言したカイルをチキは応援する。

「頑張つてねカイル！」

「ああ、だからチキも僕たちを信じてここで待っていてくれ」

「……うん」

チキは幾分か声を落としてうなずいた。チキは戦いに出られない。

大きな傷のついたチキの神竜石は牙の一部を取り出すために一度変身する際に使った直後放射線状にひびが入った。もう何度もどころかあと1回変身すれば竜石は粉々に砕け散ってしまうだろう。

チキのような神竜は他の竜石も使えるらしいが竜にはそれぞれ弱点がある。その上神竜になれたとしてもファルスとは絶対戦わないようにキットは厳しく言っていた。



ヴァルム帝都南の砦近く。

ワアアアアアアア!

「死ねええええ!」

ギーン!

敵兵が振りかぶった剣をカイルは盾で防ぐ。今までの戦いで出してこなかった封印の盾を。

「はあああああ!」

ギユイイイーン!

カイルが念じるとファルシオンに光が走り、空洞からは蒼い竜玉が出現する。

「な、何だ?」

「はあ!」

ズガアン!

剣の様子を訝る兵士をカイルは容赦なく斬り伏せる。

「はあはあ……これが神剣の力……なるほど普段は封印しておいた方がいいのもわかるな」

そこへ、

「うらあああー！」

ギーン！

「ぐっ」

別の兵が斬りつけてくる。

「へっ！ 大層な装飾だが光らせても戦いの役にはたたねえぜ……死ねえ！」

先ほどのように剣を振りたくても剣で防いではかなわない。咄嗟のこととはいえ盾で防ぐべきだった。

ズガン！

「ぐえ」

そこへ不可視の何かが兵に直撃した。

「王子、大丈夫かい？」

兵に突撃した不可視だった何者かが姿を現す。

それは最初狐の姿をしていた。その狐はすぐに人間の形態を取る。

「あなたは！」

「妖狐の長コイ。ソンシン軍とともにヴァルムの野望を止めに来たぜい」

ソンシンに住むタグエル的一种、妖狐のコイだった。

「ソンシンの……ヴァルムの布告状が届いたのか。…それにしては早すぎる」

「ああ、それは……」

「はあ！」

ザン！

「ぐあ……」

リヨウヤの一刀に敵兵は倒れ伏す。今度はリヨウヤは敵を倒した後も刀を鞘に納めない。

そんなリヨウヤを遠くで狙うものがいた。

「……………そこだ！」

ヒュ！

「ぐあ！」

リヨウヤを狙っていた弓兵は別の方から飛んできた矢に額を撃ち抜かれ死んだ。

「王！ 敵兵が王を狙っていました。ご無事ですか？」

「そうか。殺気を感じていたからもしやと思ったがな。助かったぞタクマ」

リヨウヤを助けた灰色の髪の弓将タクマは肩をすくめ視界外にいる気配を察し気を引き締める。

「大勢の気配がします。これからは礼は抜きにしましょう」

「ああ！ もう百年は戦争を起こす気をなくすようにヴァルムに一泡吹かせてやろう」

ヒュン！

「ぐあ」

天馬に乗った騎士？にヴァルム兵が討ち取られる。

「天馬騎士か……え？おと……ギヤア！」

ザク！

近くのヴァルム兵が天馬に乗っているのが男だと気付いた瞬間に別方向から現れた天馬に乗った武者に兵は討ち取られる。

「ソンスンの天馬は男女えり好みしないんだよ」

兵を討ち取った天馬武者の赤髪の女指揮官ナノハはそう啖呵を切った。

ヒュン！

グサ！

ヒイイイン！

そこへどこかから飛んできた矢が天馬に刺さる。

「あつ、ヤロウ！」

ヒュン！

ナノハは矢の飛んできた方向と気配を探つて薙刀を投げつける。

ザク！

「ギヤアア」

串刺しにされた弓兵は城壁から転がり落ちる。

『かのものにすくうふじようをはらいたまえ 冬祭』

ナノハの天馬に桃色の髪 of 巫女スモモが祓串を振り神通力で天馬を癒す。

「ナノハさん！ 油断しないでください。ヴァルムとの決戦の最中ですよ！」

「ごめんごめん。ソンスンの天馬が女しか乗せないスケベ馬ばかりだと思われてるのが癪だね」

他のいくさばでもソンスンの侍が、呪い師が戦場を荒らしまわる。

ヴァルムやアルブレアの予想よりはるかに早いソンスン王国の参戦。彼らはヴァルムからの宣戦布告を受け取らずにヴァルムを攻撃しに来たのだろうか？ いやリヨウ

ヤはそんな卑怯な真似を許さない。

ならばなぜソンシンがこんなに早くヴァルムの戦場に？

ソンシンは最後通牒とその返事は普通に受け渡ししていた。ソンシン（ラム村）にいる村長が。

その後アルバレアに滞在していたソンシン軍が宣戦布告状を持った使者を捕らえ書状を回収し、ソンシン王国とヴァルム帝国が交戦状態となったことを確認。国に戻るなどの真似をせずにすぐにヴァルムへ向かったのだ。

なおヴァルムの密偵が確認したソンシン王らしき男はやや豪華な服を着ていたため国王だと思われたラム村への伝令である。

リヨウヤ個人は卑怯なことはできない、したくない。だが同胞や同胞を受け入れてくれた村人をヴァルムという巨大な国から守るためこのくらいの腹芸をこなすぐらいの清濁を併せ飲むことはしなければならぬ。

ヴァルム兵は噂では聞いていたものの初めて敵に回すソンシン独自の戦法や兵種に引つ掻き回されていた。

深夜。

ドサ！コンコン！

「? ……!」

誰かが倒れる音と扉を叩く音でカーシヤは目を覚ます。

カーシヤは寝台から飛び降り、武器になりそうなものを探す。

フエイスなら扉を叩いた後必ず一声かける。ならば扉を叩いたのは別の人間。しかも誰かが倒れる音までした。普段この部屋を守っているのはフエイスだが彼女も常に飲まず食わず眠らずでいるわけではない。

だから倒れたのがフエイスとは限らない。別の兵士の可能性も高い。

だが誰かが倒れた以上この皇宮の関係者の可能性は低い。

アルバレア軍やカイルたちの誰かが助けに来たのか? そんな単純に樂觀視できない。帝国に涉々従っているドルマや敵対しているイストリアが何らかの企みでヴァルムを探っているのかもしれないし、捕虜になった自分を足手まといだと思ったユーリが暗殺者を差し向けたのかもしれない。

今になって思えば自分を過剰に称賛していたユーリは自分を士気を上げるための神輿として利用しようとしていたようにしか見えない。

考えている間に扉を叩く音は止み、声をかけられる。

「失礼します」

「え?」

カチャ!

声はカーシャのよく知っている声だった。兵から奪った鍵を差し込む音がする。キィー!

月明かりに浮かぶその顔もカーシャが知ってるある人物のものだ。

「ティーナ様!」

「お助けに参りましたカーシャ様。帝都にいる兵士はアルバレアという国との戦いに駆り出されました。ですから今が逃げる好機です」

「??」

兵を昏倒させ部屋に侵入してきたのはバレンシア教の司教という立場にいるはずのティーナだった。

タクマ クラス：弓聖

ナノハ クラス：聖天馬武者

スモモ クラス：戦巫女

ソニンシン王国の名門一族の当主たち。白夜の王族の血を引いている。



## 第33話 コマンド

深夜、ヴァアルム皇宮・皇帝の執務室。

皇帝ファルスは夜も眠らず思案していた。

ソンシンへ派遣したはずの使者を連れてソンシン軍がアルバレア軍と交戦している戦場に乱入してきたのだ。使者は乱入前に解放され戦闘中の間に皇宮に戻り皇帝にソンの布告受領を報告した。

アルバレアとソンシンそしてアカネイアの共闘で帝都南の砦は陥落し、彼らは帝都を窺う地点まで来ている。

だがソンシンに非はない。彼らはヴァアルムからの宣戦布告を受理したうえで戦に臨みに来たのだ。ヴァアルムとソンシンの国力に圧倒的な開きがある以上同じくヴァアルムと交戦している国と協力するのは当然のこと。

だが数の上では依然ヴァアルムの方が優勢だ。籠城してしまえば彼らは手を出せない。ヴァアルムの勝利は覆らない。

とはいかない。攻城戦が行われている間。民は帝都から出られないうえ、いつ敵国が攻め込んで来やしないかとおびえながら暮らす羽目になる。

間が悪いことにカーシャとの会食を打ち切つてまで聞いた報告によればイストリア軍はドルマ王宮を包囲しているようだ。

チャルロスは自信過剰だが有能な軍師だ。同程度の兵力のイストリアを落とすことはできると思つて派遣したのだが、アカネイアの傭兵団は戦力、智謀いずれかにおいて傭兵団はドルマ軍やチャルロスを凌ぐものを持つていたのか。完全にファルスの想定外の事態だった。ドルマの援軍は期待できない。

アルバレア王子ユーリを噂でしか知らない民にとつて、噂でどう言われていようが所詮王や貴族、民草など金品や食料を搾取するものとしか捉えていないに違いない。ましてや自分が治めるわけではない他国の民など明日飢え死にしようとも。

そんな恐怖が不満となり、妾腹のファルスを打倒しようとしている有力貴族が民をまとめて反乱を起こす可能性は十分高い。ユーリもそれを腹案に入れているのではないか。

籠城戦に持ち込めば敵軍だけなら必ず勝てる。しかし内から敵が出てくることを考えれば早急に敵の包囲を切り崩す必要があった。

「我が嫡子であれば構えていられたものを……だが悪くない。この一戦でヴァルムとアルバレアのどちらが滅ぶか決まる。……明日は総力戦となるな」

ファルスがそんな決意を固めていた頃。

「カーシヤ様、足元にお気をつけを」

同行者に続いてカーシヤが窓から身を投げ出す。

ドスン！

1階なのでカーシヤは問題なく着地できた。

着地の衝撃でスカートがめくれ上がっていないだろうか。それを気にしてカーシヤはスカートを直す。

今カーシヤは同行者に渡された天馬騎士の騎士服を着ている。夜とは言えさっきまで来ていたネグリジエでは目撃されたときに怪しいと思われるだろう。

カーシヤを連れだしたのはティーナという女性のバレンシア司教だと思われた。

同行しているのは女性、なのになぜカーシヤは素早くスカートを直したのだろうか。それは――

「司祭が真夜中に外を歩き回っているのは不自然です。そろそろ変身とやらを解いたらどうですか」

カーシヤの忠告にティーナは肩をすくめる。

「ノリが悪いねえ。もう少し捕らわれの間に知り合った友達として仲良くしたいと思っ

ていたのに」

「今度捕まったら皇帝は私を見張り以外の誰とも会わせようとしないうでしよう。早く變身を解いてカイル様たちのところへ帰りますよ。チェイニーさん！」

カーシャにそう言われたティーナは腕を頭の後ろに組み、男のような声色で返事した。

「…へいへい」

そして金髪の聖女？は瞬く間に赤毛の若者の姿になった。どういう現象が働いたのか服まで変わっている。

「まあ捕虜にあそこまで贅沢させるんだ。その皇帝って奴ならそこまでやるだろうな。……いやああんた化粧っ気もないのにモテるねえ。今度着飾ってカイルをデートに誘ってみろよ。カイルなら即答で応じるぜ」

ティーナに成りすましていた時と違いあまりに軽いチェイニーの振る舞いにカーシャは頭を抱えた。

「高潔な聖職者だと思っていた人がこんな軽い男だったなんて……念のため距離を取っておいて正解ね」

改まって振り返ってみればティーナだと思っていた人は教誨の度に一度は恋愛話を持ち掛けてきた。

誰々を好きかなどの他愛ないものばかりだが話の方向性によっては正体を明かしたときに握り拳で殴っていただろう。

ちなみにティーナ司教は実在している人物で、チェイニー扮する偽ティーナが教誨に赴いている間は聖堂ぐるみで内部にかくまわれ、カーシャ救出が行われている現在はノーヴァ教国に帰国している。

「さあ出口に案内してください！　まさか城門から出るとは言いませぬよ。私はそれ以外の通り道を知りません」

「おう、こっちの城壁に隙間が空いてる部分がある。戦争中で修復する余裕がないんだろう。急ぐぜ」

カーシャの言う通りにチェイニーは出入りできる隙間があるらしい方向の城壁を示し先を歩く。

そうしてカーシャとチェイニーは件の城壁に辿り着くとそこには――

「やはりここから出入りしていたんですか司教様いえ……神童チェイニー様」

フェイスが待っていた。確認している暇はなかったが先ほどまでカーシャの部屋を守りチェイニーに昏倒された兵士はフェイスではなかったらしい。

だが彼女は休息中の時間にも関わらず皇宮敷地内の人気のない庭園の隅にいた。それも甲冑を身にまとい、

カーシャは一步下がる。服は渡されたものの武器はまだ持っていない。

二人を鋭く睨むフェイスにチェイニーは片手を上げて声をかける。

「よお、あんたがキットの言つてた「間者のような信徒」かい？ あんたがキットに報告してくれた内容のおかげでその天馬騎士さんが不自由な思いをしていないって聞いてカイルたちも安心していたぜ。ありがとよ」

「ええ？ フェイスさんが間者？」

あまりの突然もたらされた事実カーシャは仰天する。

「ええ、我が家はバレンシア教の大地母神ミラを信仰しています。私も幼いころからシスターになるように言われ続けてきましたが、千年前の解放戦争で伝説の女騎士とその名をさせたマチルダ様に憧れ帝国軍への門をたたきました。それを認める代わりにノーヴァ教国が遣わしたシスターを通して帝国や皇帝の動向を教国に報告することを実家から言いつけられています。そして今回はティーナ司教に成りますチェイニー様の手助けも……」

「いや本当に感謝しています。あんたにや足向けて寝られないな。あはは」

チェイニーの軽口にもフェイスは表情を緩めずチェイニーも気を許しているような

言葉とは裏腹にそこから一步も動いていない。

「そうだったの。それなら心強いわ。フェイス！ 私たちと一緒に……」

ブオン！

カーシヤの声を遮りフェイスは槍をむける。

「ですがおそらくそれも最後です。私は実家とは違いミラ……そして邪神いえ戦神ドーマに疑念を持っています。聖王アルムに……人に敗れ戦を戒めるための予言も実行できない神に人はいつまですがっているのかと」

「予言？」

聞きなれない言葉にカーシヤは首をかしげる。

「人が再び驕り高ぶるとき、新たな戦乱の炎が地上を焼き尽くし全てが失われてしまうであろう」バレンシア大陸に伝わる人を戒めるための言い伝えさ。神が予言したのかどうかはともかく解放戦争後にそんな言葉がバレンシアの民の間でまことしやかに伝わっていたとされる。……今でも覚えている奴がいたとは驚きだが」

予言を知らないカーシヤにチエイニーは助け舟を出しフェイスも黙って肯定する。

「ええ。神が言ったのか、それとも神にすべてを委ねていた人々が自戒をこめて自らそのような口伝を残したのかはわかりませんが……ですが平和は長続きしなかった。アルムの世継ぎが勝手に国の名を変えそれに反発した諸侯が彼から離れ大陸をバラバラ

にすることです！」

「……」

悲痛な訴えにカーシャとチエイニーは絶句する。フェイスはそれでもなお続ける。

「前の過ちも忘れ人はすぐに驕り始めました。予言に沿えばその時点で人は焼き尽くされるべきでしょう。……ですが神は人を裁かない。千年間ずっと！　そして今このヴァルムに大陸の統一に手をかけたファルスという男が現れた……この大陸はいずれ神に焼き尽くされるのか、それともファルスによって統一されるのか……私は見てみたい」

「だからファルスを試しているってわけか。ノーヴァに情報を与えながらファルスに仕えることで」

口をはさんできたチエイニーにフェイスはうなずき、続けて言う。

「神を試そうとすることに對する神罰を恐れる気持ちはありません。まだ私は神を疑いながらも信仰を捨てきれない……です。でチエイニー様、カーシャ様を返していただけなのならわたくしと勝負して頂きたい。今のバレンシア教が崇める神竜であるあなたと！」

槍をむけ決闘を挑むフェイスにチエイニーは肩をすくめる。

「俺は神竜でもナーガやチキミみたいな王族じゃない。その上竜石を捨てて竜になれない



雑魚の中の雑魚だぜ。崇められてるなんて恐れ多い。神どころか踏み絵の価値すらない」

「結構です。人が神だと思ってきたものを討つ。棄教にはうってつけの試練です」  
そう言つてフェイスはチエイニーが戦いの準備を整えるのを待つ。不意打ちで討ち取つてもそれでは棄教する後押しにはならないと言ふことだろう。

フオン！

チエイニーは瞬間に金髪の聖女ティーナの姿になつた。

『ひかりよ、てらせ… オーラ』

あふれる光がフェイスを襲う。

ズガン！ ズガン！ ズガン！

だがフェイスはその光を難なく避けていく。

グサ！

「…ぐ…いきなりかよ」

ティーナの姿をしたチエイニーは刺されうめく。

「チエイニーさん！」

だが急所は外したようでチエイニーは立ち続ける。

フオン！

チエイニーは今度は青髪のいかつい男の姿になり懐から斧を取り出す。

「今の二つの大陸じゃ槍を持つてる奴は斧に当たりやすくなってるんだってな。行くぜ！」

ザン！

「ぐ……はあ」

斧がフェイスに当たるが彼女は動じずチエイニーに槍を振るう。

ヒョイ！

「そして槍は斧使いに当たりにくい……おわ」

ブン！ ヒョイ！

槍を躲されたことにも顔色一つ変えずフェイスは槍を振るい続ける。

「ならこつちも……おらあ！」

斧を持った拍子かそれともこの姿の原型となった男の掛け声なのか。

ギン！ ギン！ ザク！

「ぐ……ふっ！」

シュ！ ギン！ シュシュシュ！

ギン！ ザク！ ザク！

刃を交えるごとにフェイスの槍はチエイニーに当たっていく。

「ぐお……三すくみありで当ててくるかよ」

「……」

ブオン！ ギン！ ザク！

フオン！ ザン！

「ぐつ……」

フェイスの槍はチエイニーの横腹を裂く。

チエイニーは魔法を使ったり三すくみで有利な武器で当てやすい状況を作ろうとしていたが実力は完全にフェイスの方が勝っていたらしい。チエイニーは追い詰められていく。

（参ったな……ジーンや皇帝以外にこんな奴がいたなんて……わかっていればその二人と接触して変身できるようにしたんだが）

「チエイニーさん！」

「ここまでのようですね。そろそろとどめと行きましょう。……ご安心を、カーシャ様はお部屋までお届けするだけです……今度は私がカーシャ様を四六時中見張っているような状況にされると思いますが」

ブオン！

「やめて！」

フェイスがチェイニーめがけて槍で刺し貫こうとした時カーシャが割って入る。  
ズシャア！

「うぐ……」

「しまつ……カーシャ様！」

「カーシャ！」

フェイスは慌てて槍を止めるも間に合わず先端がカーシャの腹に刺さる。

ドサ！

カーシャは立ち続けようとしたが叶わず足を崩しあおむけに倒れる。

「おい！しつかりしろ……」

フォン！

途端チェイニーはティーナの姿になり杖をかざす。

『かものにおおになるじひを リカバー』

光がカーシャを包みカーシャの傷が癒えていく。その間フェイスはチェイニーの邪魔をすることは無かった。そしてカーシャは口を開く。

「……ねえフェイス……伝説の女騎士……マチルダとはどんな人なの？」

「え？」

「……」

ぎりぎり胸を外しリカバーをかけたものの一度急所をつかれたためカーシヤの話の方はおぼつかない。それでもカーシヤは澄んだ瞳でフェイスに問う。

「……美しく奥ゆかしいお方で……ですが見た目とは裏腹にすさまじい強さでリゲルの軍勢を打ち破ったそうです。……こんなことを皇帝の聞こえるところで言えば投獄は免れませんが強さだけならアルムを凌ぐと……私もそれを信じています」

「……マチルダは……誰かを助けに来た人を……痛めつけて殺してしまうような人かしら？ ……」

「そんなはずはありません！」

カーシヤの問いかけをフェイスは強く否定する。

「マチルダ様はソフィア宰相の圧政から人々を救うためクレイベ様と立ち上がり解放軍を設立した清廉なお方です。……そのような……神を捨てるためなどに……このような……」

フェイスはそこでうなだれ自問する。

「……………私はマチルダ様に憧れ騎士になった。……なのにいつの間にか皇帝と神を試すことにとらわれ彼の侵略に加担した。……私はマチルダ様とは真逆の……ソフィア宰相のような輩に身を落としたようだ」

「フェイス……………」

フェイイスはカーシヤから離れ告げる。

「……カーシヤ殿、最後に私の過ちを指摘してくれた礼に今だけは見逃してやろう。……行け！ 惚れた女とは言え皇帝は一度逃げたお前を許さないだろう。カイル王子の元に戻っても戦場には出ないことだ。」

そう言つてカーシヤは庭園の方へ向かう。

「お前さんはそれでいいのかい？」

「え？」

突然引き留めてきたチェイニーにフェイイスは思わず振り返る。すでに変身は解け彼の姿は赤毛の少年だ。

「フェイイスさんよ。あんたが憧れたマチルダって人はこんな戦争に巻き込まれる人々を助けるために立つような人だ。……一度道を踏み外したからと言つて最後まで過ちを犯したままでいる気かい？」

「……何が言いたい？」

フェイイスは訝し気にチェイニーを睨む。そこでチェイニーはカーシヤに目配せする。

「……そうよ。フェイイス、あなたも一緒に来て！ 私たちの目的はヴァルムを滅ぼすことではない。戦争を終わらせこの大陸から竜と教団を捜し出して倒したいだけなの。

……伝説の騎士マチルダならどちらに与すると思う？」

「……ファルス皇帝の方……ではないだろうな少なくとも……わかった。これ以上祖国が過ちを犯すのは見過ごせん。……ただしアルバレアがヴァアルムを蹂躪するならば私は再びヴァアルム側につく。いいな！」

強く言い放つフェイスにカーシャとチエルシーは強くうなづく。かくして三人は城壁の隙間を通つて皇宮から脱出する。

第一次ヴァアルム大戦 決戦前夜の事だった。

## 第34話 決戦

ファルスは籠城を捨て帝都の市民を北の街へ強制退去させ、市街地に軍を展開した。第一次ヴァルム大戦。その最後の決戦はこの帝都で行われる。

未だ帝都が封鎖されている頃ファルスは皇宮の前に軍を集め告げる。

「よいか！ 男が天馬に乗っていようが札から魔法を繰り出そうが構うな。うぬらの役目は敵を討つことだ。それ以外に思考は不要！ さもなくばこの帝都はアルバレアによつて荒地地と化そうぞ！」

オオオオ！

そこでファルスは兵が戦準備に戻るのを見届け側近に言う。

「うぬはカーシャという捕虜を覚えておるか？」

「はい。いずれ宮中に迎えられるお方ですな。それが如何なされました？」

戦とは関係ないと思われる問いを不平に思いながら側近は答える。

「あやつはフェイスという兵とともに逃亡した。我の連れ合いになる気はないそうだ」「それで？」

側近もカーシャの逃亡は知っている。だがさすがにこの戦に比べれば些細なことで、



今は重要な機密を持っているわけでもない捕虜の追跡にかかる暇はないため命令されても了承するつもりはない。

「戦場に現れるかもしれない。見つけ次第殺せ」

「ははっ！」

ファルスはカーシャを皇宮にとどめている間はいくら振られようと彼女を諦めるつもりはなかった。今までのカーシャは皇帝の興味を失えば捕虜として投獄され尋問や辱めを受けるかもしれない立場、そのうえでカイルの命を奪えば意地を張ってもいられないだろう。そうして関係を結んでなお愛情が芽生えなければ結局自分とカーシャはそれ以上の関係にはなれないと言うことだ。

だが逃げられてしまえば捕虜ですらないただの敵兵だ。

ファルスはカーシャを手に入れることを諦め敵兵として始末することに決めた。

「まさか籠城を捨てるとは……籠れば今の我が軍に負ける道理はないのに」

カイルは城門を開け、市街地に軍を置いたヴァルム軍の行動に驚いていた。

カイルはヴァルム軍が籠城すると踏んでその対策を考えていた。兵力的に今の戦力で籠城したヴァルム軍に太刀打ちすることはできない。

しかしカイルはヤクシの石でセネリオからドルマ落城とドルマ軍の参戦を聞いていた。そのためヴァルムが開城するまでは下手に攻め込まず包囲しイストリア・ドルマ軍がヴァルムまで来たら彼らと合流次第帝都を攻め落とす策を考えていた。

アイク傭兵団も加われれば勝てる見込みはさらに上がるのだがラーズ教団の搜索がそうそう早く済むことは無いだろう。

しかしヴァルム側が開城したことで籠城を前提とした策は水泡に帰した。

「包囲されたドルマが降伏しこちらに寝返る可能性も高いと睨んでの事でしょうが、カイル殿もどこかで聞いているかもしれません。がファルスは先帝と妾との間に生まれ、他に皇子がいなかったために仕方なく皇帝に即位させた不義の子です。帝室の縁戚との間で帝位をめぐる争いも何度かあった。その縁戚も全員が失脚したわけではない」

「敗色が濃くなったことにつけ込んだ反乱を危惧しているということですか？」

カイルの推測にユーリはうなずく。

「ええ、籠城は内側からの敵には不利に働く。ならば誘い出して短期決戦を挑み、我が軍を滅ぼしイストリアとの戦に備える。そうせざるを得ないのでしよう……個人的にファルスの境遇には同情していたのですが今回は有利に働きましたね」

「ですが手心は加えられませんね。カーシャを助けるためにも」

カイルの言葉にユーリはうなずくがしかしと忠告する。

「油断はしないでください。今回は市街地戦と言つてこれも敵軍に有利な戦闘です。敵軍はこの帝都の地理をよく熟知しています。それにあらかじめ家屋に身をひそめその2・3階から弓や魔法を射かけるといふ戦術も使えます……それに確実にジーンが出てくるでしょうしね」

ヴァルム一の黒騎士を思い出しカイルも身構える。

「勝てるでしょうか？」

「勝たなくてはなりません。幸い今回はリヨウヤ殿もいます。彼の實力は私以上です。それに滝とは違つてここなら多数対一にも持ち込める。その上でカイル殿にお願いなのですが——」

ユーリの頼みを聞いてカイルはうなづく。確かに敵が籠城を捨てたことで勝機は出たものの数の上ならヴァルムの優勢は覆つていない。イストリア軍もまだヴァルム領である大陸北西に上陸していない。この方法で敵軍に敗北を認めさせるのが確実だった。

「わかりました。僕も彼とはサシでケリをつけたかつたところですよ！」

ソンスインの呪い師が札から龍の幻影を繰り出す。

「ぎやああー！」

敵兵は傷も追っていないのに絶命した。そこへ

ヒュン！

「ぐあ」

呪い師の頭上から矢が射かけられ彼は戦死する。

住人が逃げて無人となったはずの民家2階から弓兵が矢を放ったのだ。

「はあー！」

ズガン！

「ギャア」

その弓兵も眼下から斧を投げかけられ民家のバルコニーから転落する。そこへ別の兵士が彼を斬り刻む。

「街中で戦いか。市民が逃げたとはいえ心が痛むな」

弓兵に斧を投げつけたルツツはそうひとりごちながら周囲を警戒していた。

「……」

ベルモットは人間形態のまま棒立ちしている。戦のため外套も脱ぎ捨てたから露出の高い彼女は戦闘中にかかわらず兵士の目を引くことも多い。それは敵にも言えることで、

「おっ！ 女だ、殺すなよ。後で山分けだ」

「かかれえ！」

できるだけ傷つけずに捕らえようと弓もいかけず敵兵が民家から強襲する。

ブオン！

そこで初めてベルモットは兎に化身した。

「なっ?」

ズガン！

一度の突進で民家から出てきた兵全員が吹き飛ぶ。

「軟弱なニンゲンめ！ 相変わらず単純な奴らだ。……まさか私が色仕掛けなんて使う日が来るとはな」

人間形態に戻りながらそのため息をつき、別の場所から現れた敵兵の視線を感じ取り彼らがおびき寄せられる時を待つ。敵に有利な場所ではできるだけ敵の優位をかき消すのが得策だった。

ヒュン!

キーン!

シュ!

「ぎゃあ!」

カイルに射かけられた矢は彼の盾に防がれ、カイルが従えている兵が弓矢で彼を狙った弓兵を返り討ちにしていく。

「カイル様、ご無事ですか?」

「ああっ! 構わず前進を続けてくれ。敵が市街地戦に慣れ数を投入する前に皇宮へ急がないと」

カイルはこの戦闘を終わらせる最短の方法を達成するためにヴァルム皇宮を目指していた。

「今だ!」

ゴオオオ!

「ぐわっ!」

カイルを守っている兵の一人が業火に焼かれる。

「敵襲! みんな構え!」

「遅い！ 死ぬ！」

違う方向から弓兵や魔道兵がカイルや兵士たちを狙う。魔法攻撃は盾では防げない。うえ弓もどこから飛んでくるかわからない状態だ。

至る所からカイルたちへ攻撃を射かけようとする。

『ひかりよ、てらせ オーラ』

ゴオオ！

そこへ新たに乱入した女司祭が敵兵に向かって光を。

「この槍お借ります！」

「えっ？ 君は！」

カイル付きの兵から槍を奪い取った少女が槍を投げつけ、

「はあああ」

ビュン！ キン！

途中で馬を調達した女騎士が槍を手に矢をはじきながら敵に向かっていき。

「ぎゃあ！」 「ぐわああ！」 「ぎええええ！」

それぞれ敵を打ち倒していく。

「君たちは一体？ ……それにその女騎士はまさか」

敵軍を攻撃した謎の一団に兵士が戸惑い、そのうちの一人が以前活躍したカイルの側

付きにしてユーリご鼻肩の天馬騎士だったと思い出し始めるころ。

「……………カーシャ！」

カイルは敵に捕らわれていたはずの仲間の姿に驚愕する。

「不詳カーシャ。ただいま戻ってまいりましたカイル王子殿下！」

「カーシャ脱出できたのか？　じゃあ二人のどちらかが…」

カイルはカーシャとともにやってきた他の二人の方を見る。

「初めましてカイル様。バレンシア教の司教ティーナ……とは仮（借り）の姿、その正体は！」

カイルを見て一礼してきた女司祭は体を上げた途端いつの間にか赤毛の少年に早変わり、

「謎の美少年チェイニー！　捕らわれのお姫様を王子様の下へ届けにここに参上！」

「じゃあそこの騎士殿は？」

「あの……突っ込みはなしですか？」

美少年を名乗るチェイニーに付き合わずカイルは初めて見る騎士を見る。

先ほど倒した敵の中で唯一一命をとりとめ気絶している兵士を拘束した後辺りを見回し敵兵の姿がないと確認しながら騎士はカイルに名乗る。

「初めまして、ヴァルム騎士のフェイスです。主君を諫めるため一時だけあなた方に味



方します」

「アカネイア王子カイルです。カーシャを助けていただいたようで感謝します」

「いいえ、それでは私は後方に向かわせてもらいましょう。アルバレア軍の要を潰すためにあの方が出てくるでしょうから」

「あの方……ジーンが後方を狙つてくると?」

「カイル殿がヴァルム軍を崩すためあのお方を倒そうとしているのと同じです。ヴァルムにとつてもアルバレアの指揮官を討つのが戦勝への最短の道のはず」

後方は陣を守るためリョウヤを始めソンスンの名将が戦っている。だがジーンには彼らでも足りない。それに敵が弓を主力の一つにしているためナノハを主戦場に出すことができないでいた。

「フェイス殿……お願いします」

そこでカーシャがカイルに声をかけた。

「あのカイル様、申し訳ありません。私もフェイスと一緒に後方へ行つていいですか?」  
「え? ……ああ! 脱出してきたばかりなんだ。無理に戦わなくてもいいが……気を付けるんだよ」

「ご心配いりません。私が女性一人守れない無力な騎士に見えますか?」

フェイスはそう言つてカーシャに手を伸ばした。

「さあカーシャ捕まれ。後方へ急ぐぞ！」

「は、はい」

「さあ、危険な戦場からおさらばしようぜ」

フェイスはカーシャを馬に乗せいつの間にかフェイスの後ろに捕まっていたチエニーの姿を確認し後方へ馬を走らせた。

「……よし行くぞ！ ヴァルムの偽帝ファルスを捕らえる！」

オオオオ！

らしくもなく後方へ戻ると言ったカーシャの様子に引掛かりを覚えるも、今まで捕まっていた場所に戻りたくないのが普通だろうと思いき直しカイルは兵に号令をかける。

「君の性格ならカイル殿についていくと言い出しそうだと思ったのだから」

「あはは……らしくないですよね」

フェイスの言う通り以前のカーシャなら捕らわれになっていただけなら前線から身を引くとは言わないだろう。しかし今のカーシャの頭にはファルスの言葉がこだましていた。

（うぬらが今まで殺した敵は何だ？ 主張が違えば殺してよいのか？ 敵対するものは殺し

てよいのか?)

「……」

先ほどはカイルの身に危険が迫っていたため反射的に動いてしまったが、今のカーシャには相手の命を奪ってまで戦う意義が見いだせないでいた。

この戦いがギムレーを倒しアカネイア大陸に平和を取り戻すため避けられないものだとなつてはいるのだが。

先ほど死なずに気絶した兵士もカーシャが攻撃した兵だった。

「まっ、命からがら逃げだしてきたばかりなんてこんなものだろう。それより早く後方まで行った方がいいんじゃないか」

蒼白になるカーシャの様子にチエイニーは彼女の内心を察しながらも触れずにフェイスに先を進むよう促す。

「ああつ！ ソンシンの将たちとともに私もジーンを迎え撃つ。急がなければ！」  
フェイスは二人の内心に気付かないまま馬の速度を速めた。

ドルマ王国郊外。

「ハイ！だ」

ドーマ派が手放した寺院をオルンが示す。

「苦労様です」

オルンの報告を聞き、セネリオが応じる。

「内部に何人かいるのか？」

「ええ。確実にここで間違いないでしょう」

アイクの問いにもセネリオは間違いないと主張する。

「根拠は？ ミラ派が手に入れたのかもしれないし、ドーマ派が取り戻したのかもしれないぞ」

「ここは町から少し離れミラ派ともドーマ派とも接触することがほとんどありません。双方とも相手に関わろうとしない状態とはいえ、どちらにも与しないラーズ教団にとっては接触は必要最低限の方がいい」

「それだけでは弱いな」

アイクの顔は渋い。それだけでは突入どころか探りを入れることもできない。

「そう思つてここをラグズ団員に見張らせてここから出てきた司祭らしき男を尾行させ僕が探りを入れてみたんです。傷を負ったのでヒールの魔法をかけてほしいと」

「ヒール？ そんな魔法聞いたことが……あつ！ それはラズベリア大陸の魔法か！」

「ええ、捕虜から聞き出したヴァルムやアカネイア大陸にはない魔法です。相手はオー

ブで魔法を使うところを見せたくないのか言い訳してすぐに去っていききましたけどね。ヒールという魔法名に疑問を覚えないう時点でほぼ確定です」

「そうか。では最後に探りを入れて突入といこう」

ドルマでもすべてを終わらせるべく戦いが行われようとしていた。

## 第35話 ヴァルム一の騎士

グオン！

カイルたちと合流したルッツとベルモットは皇宮の西側の壁を破壊を始める。ルッツは斧でベルモットは体当たりで。

皇宮の門の前には当然多くの兵が守りを固めているだろう。アルバレア軍とソンシンの軍の多くの兵を城下町に残している以上当然、門への正面突破は作戦から外れる。

ただし元々人が脱出できるくらいの傷がついている東側の壁も避けた方がいい。

そこはカーシヤたちが脱出に使った場所であり、カーシヤの脱走を知っている皇帝も脱出経路を検討し東壁の傷に気が付いているはずだ。

カーシヤからカイルに壁の傷を報告されそこから侵入してくると踏んで逆に兵を集めて待ち構えている可能性が大きい。

そこであえて無傷の東壁を主にベルモットの体当たりの威力で破壊して侵入するこ  
とにしたのだが……。

「来たな。アルバレアの手勢め」

「城下町の制圧が終わらぬうちに闇討ちとは……背後から陛下を暗殺しようとしただけ

はある」

かなりの数のヴァルム兵が待ち構えていた。東壁だけでなく西壁にも迎撃用の兵を割いていたらしい。

カイルが率いているのはルッツやベルモットを含めてもアカネイアの一軍なのだが彼らにはアルブレア兵と見分けがつかないらしい。ソンシンぐらい他国と文化が違っていれば一目瞭然なのだろうが、

「ベルモット化身を解かずこのまま頼む！ 今までの戦いを潜り抜けた諸君ならこの程度敵ではないはずだ。各員奮闘せよ！」

オオオオオオ！

カイルの号令でアカネイア軍はヴァルム兵と交戦を始める。

「もうすぐ主戦場だ。カーシャ、チエイニー殿いつでも剣を抜けるようにしておけ」  
「はい！」「おう」

フェイスの合図でカーシャとチエイニーは手を剣にかける。

戦闘が行われている市街中央に彼女たちが到着したところにはすでに。

「はっ！」

「ぐう」

ギイン！

く、  
ジーンとリヨウヤが鏢迫り合いを繰り広げていた。戦っているのは二人だけではない、

「はっ！」

ビュ！ドガ！

「ぐあ」

タクマの放つ矢がジーン配下の騎士の額を射抜く。

「えい！」

ビュ！ギイン！

「なめるな女」

スモモもジーンの部下に弓を射かけるがすんでのところ弾かれてしまう。

だがそこへ

ドガ！ドゴ！ギン！

「ぐえ」「ぐあ」「ぐぬ！……」

「ちっ……一人仕留められなかったか」

ヴィオールの放つ三本矢が他の二人の騎士を巻き込んで放たれる。ただし二人は倒



したが一人は兜に阻まれて傷を与えたものまだ戦えるようだ。

ソシン軍とヴィオール公率いるアルバレア軍がジーンの部隊と戦っている。

だがやはり先ほどまで弓矢が飛んでいたためかナノハ率いる天馬武者隊は後詰に配置されているようだ。

そんな主戦場に到着すると同時にフェイスは同行している二人に言う。

「二人とも馬から降りてくれ。ここからは各自の判断で動こう」

「はっ…はい」「え〜」

ギロ！

「いっちょやってやるか！」

残念そうな様子を隠さないチエイニーをフェイスは一睨みすると彼は居住まいを正した。

二人はフェイスの馬から降りるがその直後フェイスはカーシヤを見て言う。

「カーシヤ、お前は戦わなくていいとカイル殿からも言われている。お前を送って行ってからでもいいのだが」

「いえ！ みんなが戦っているのに私だけ休んでいられません。……せめてギムレーを倒すまでは」

（ギムレーを倒すまでは……ねえ）

カーシヤが最後につぶやいた言葉にチエイニーはその真意を察するが口には出さない。  
い。

「そうか。では頼むぞ二人とも……はあ！」

掛け声を上げるとフェイスはジーンの下へ馬を走らせた。ヴァルムの士官同士二人には因縁があるのだろう。

「……うう」

未だ戦闘に積極的になれないカーシヤにチエイニーは話しかける。

「カーシヤ、フェイスも言ったがお前は陣に戻っていいんだぜ。……人間同士の戦いはおそらくこれが最後だろう。教皇って奴はもう人間だと考えない方がよさそうだし」

「やります。でなきやカイル様に合わせる顔がありません」

「そうかい」

チエイニーは嘆息すると早速変身する。

今回は長髪の紫の装束を身にまとった剣士で行くようだ。

「いくぞー！」

「はいっ！」

「はあー！」

ザン！

「ぐああ」

アイクの一振りですべて7人の司祭が吹き飛ばす。二人は直接斬られて残りは斬撃の際に生じた衝撃波で。

「おらあ」

ズガン！

「ぎゃあああー！」

オルンやウーゼルを始めとしたラグズたちの突進で他の司祭たちも瞬く間に数を減らしていく。

魔法系は物理攻撃に弱い。その上不意を突かれた状態では反撃する間もなく、アイクやラグズといった強靱な戦士たちが相手では頭でっかちな暗黒司祭では歯が立たなかった。暗黒騎士たちにも傭兵団には手が出せず突入と同時に彼らは全滅した。

唯一同じ魔道士で同じ土俵に立てそうなのは賢者セネリオだけなのだが、

『きせきのかぜよ！ さけ！ しつぷうのごとく！ レクスカリバー』

ゴオオ！

「ガガガ……」

自らの器ではないとして返上しながらも大賢者の称号を得たことがありその後も更なる研鑽を積んだ彼と魔道を異教徒への武器として邪悪に装飾することに傾倒していた暗黒司祭たちでは相手にならない。

もうここが教団の本拠地で間違いない。

ヴァルム帝国と戦いながら制圧した町や村には彼らの本拠地らしき施設はないとカイルから報告を受けていた。

そのためアイクたちは武器を捨てるでもなく抵抗してくる教団員を生け捕りにしようとせず一切の容赦をしない。

「地上は制圧した。上もしくは地下に通じる通路を探せ」

「おうー！」

アイクの指示で団員たちは別の階に通じる出入り口を探す。

ギイ！

「ここだ！ この部屋に下への階段がある」

一人の団員が地下への階段を見つけ叫ぶ。

「行きましよう！ ……団長。教皇は以前と違いなぜか攻撃が通じにくくなっているみたいです。ご注意を」

「ああ」

セネリオの忠告を受けてアイクはの教会堂に何人か見張りに残し、残りの団員を率いてアイクたちは地下へと下る。

「やあああー！」

ギイン！

「ぐっ」

カーシャが敵の騎士から槍を払い落とし、攻撃を続ける。

ズガン！

「ぐあっ」

たまらず敵はうずくまる。

「これでとどめ……」

ヒュ。

だがカーシャはこれ以上敵に剣を突き出せない。

「うう……駄目、私には」

「……そこだ」

グサ！

「ぎやああ」

とどめを刺すのをためらうカーシャを見て好機と見た敵は槍を振るいカーシャに繰り出す。

槍はカーシャを一閃し、今度はカーシャが膝をつく。

「死ねええ女！」

「ぐ……」

敵兵がカーシャにとどめを刺そうとし、カーシャは目をつむる。

「ぎやああ」

だが絶命したのは敵の方だった。どこかから放たれた矢が敵の額を射抜いたのだ。

「大丈夫ですか？ 『かのもものふじょうをはらいたまえ 夏祭』」

矢を射た当人であるスモモはカーシャに駆け寄り夏祭の祓串を振るう。

「……ありがとうございます。えつと……」

復帰したばかりのカーシャは巫女の名前を知らず、彼女の知る司祭にも見えないため何と呼んでいいのか言い淀む。

「スモモです。あなたはまだ調子が良くないようです。ここは本陣に戻ってはどうぞしよう。」

「で……でも」

シュ！

そんな彼女たちを狙って矢が飛んでくる。

キーン！ ザシュ！「ぎゃあ」

カーシャたちに向けられた矢は別の矢に撃ち落とされ射手も続けて放たれた矢に撃墜される。

「敵も倒せない状態じゃ足手まといだから引つ込んでろと言ってるんだよ！」

彼女たちを助けた弓将タクマはカーシャをそう叱咤する。

「……………」

カーシャはタクマに何も言い返せず悔しさのあまり唇をかみしめる。そんな時、

「危ない！」

シュ！

カーシャはタクマに飛びかかる。

「いきなり何を……………」

先ほどの仕返しかと文句を言おうとしたタクマが先ほどまでいたところには矢が刺さっていた。

「……………すまない。僕とすることが」

「い、いえ……………お怪我はありませんか？」

「ああ大丈夫だ。君に助けられた」

礼を言ってもぼつの悪いままのタクマは。

「さつきは悪かったよ。まあ、戦えなくてもそれなりにできることはあるかな。……じゃあ、物陰に隠れて矢が飛んでこないか見てくれ。僕はともかくスモモが狙われたら危ない」

「タクマさんだったら私だって……あ、いえそうですね。お願いします」

馬鹿にされたと思つてタクマに文句を言おうとしたスモモは彼の意図に気付きカーシャに背中を任せる。

「は……はい。わかりました」

二人に気を使われているのはわかつているが、敵を殺せと言われるよりはマシなのでカーシャは了承する。

カーシャの内心は申し訳なさど悔しさでいっぱいだった。

「はあー！」

ギーン！

ジーンとフェイスの槍が交差するが衝撃のあまりフェイスは槍を落としそうになる。



「……ぐう。さすがジーン將軍、一筋縄ではいきませぬね」

「何、君も以前の訓練より腕を上げた。皇帝に背いてしまったのは残念だがこうして槍を交えられると考えると悪くない」

「そこだ！」

ジーンがフェイスを称賛している時を隙だとみてリヨウヤは刀を振るうが、

「ふっ！」

ギイン！

ジーンは警戒を緩めず槍を振るってリヨウヤの刀を薙ぎ払った。

「はあー！」

ヒュヒュヒュ！

ヴィオールもジーンに三本の矢を射かけるも。

カカカン。

ジーンが槍を円状に槍を振り回すだけですべて落とされてしまう。

「どうした。ソンスンの武者とはその程度なのか？」

ジーンは彼らの攻撃を流しそんな言葉をかけて余裕を見せる。

「……ぐつ、伝承で聞く暗夜王国の第一王子のような強さだな。隙がない」

リヨウヤは刀を構えながらそうこぼす。

「そろそろ勝負を急がせてもらうぞ。万が一こちらの皇帝陛下が討たれる前にユーリ王子を討ちこの戦を終わらせねば」

ジーンが槍を構え直し決着をつけようとする。

「皇帝の心配をしている場合かい？」

ギーン！

「……ぐう……新手か！」

そこへ長髪の剣士の姿をしたチエイニーが加わる。

（三すくみの相性は悪いはずんだけどパーツの姿じゃカミュもどきの騎士に勝てる気がしないんだよね）

内心でそう思いながらチエイニーは剣を構える。

1000年前に活躍した剣士ナバルの姿に加え能力まで模したチエイニーはアルバレア陣営の中では最強の男だった。

「はあ！」

変身の対象となった剣士と同じ掛け声でチエイニーはジーンに斬りかかる。

「ふっ」

ギーン！

カアン！

ザシユ!

「ぐぬ」

チエイニーの一闪がジーンを刻む。

「はっ」

グシユ!

「ぐあ……このっ」

ジーンの槍もチエイニーを一突きし再び鏢迫り合いに入る。

そこへリヨウヤとフェイスも加わる。

「はあー」「ふん！」

ギイン!ドヒユ!

ヴィオールはこの状況では味方に当てかねないとみてジーンの部下や街に潜伏している敵兵を撃つて回っているようで彼は加わらない。

「そこだ！」

ドシヤ!

「ぐああ」「ぐおお」「きゃっ」

しばらく優勢だったチエイニーとリヨウヤとフェイスはジーンの振るう槍に散らされフェイスは落馬し地に横たえる。チエイニーも傷が大きく剣士の変身が解ける。

リヨウヤも深手を負ったようで立ち上がるのも苦だ。

「まずはお前たちだ」

ジーンはフェイスは倒れたとみてリヨウヤとチエイニーに狙いを定める。ヴァルム騎士だったフェイスは捕らえて命だけは助ける気なのかもしれない。

「くそっ！もう破れかぶれか」「こうなれば黒騎士も奈落の共に」

チエイニーとリヨウヤは差し違える覚悟を固める。だがジーン相手にうまくいくか？

「はあああああ！」

ドヒュ！

ヒイイインン！

「何？」

突然馬が悲鳴を上げジーンを揺らす。

馬には槍が突き刺さっていた。気を失ったと思っていたフェイスがついた槍が！

「ぐ……フェイスを侮っていたか」

スタ！

ヒイイン！

ジーンは地に降り立ち、馬はどこかへと駆けていく。ジーンは槍をしまい剣を出す。

フェイスも立ち上がり剣を構える。

「はあー！」

「やっ」

ガアン！ ギイン！

ジーン・リヨウヤ・フェイスは刀剣を持って三度鏝迫り合いとなる。

（今のジーンなら竜になれば倒せるんだろうが……いや、どっちみち竜石がないと無理か。俺はもう竜に戻る気はない。まあ様子を見てみるか）

しばらく変身が出来なくなったチエイニーは自分は足手まといと判断し、下がることにした。弓矢を警戒する注意力は残っている。

「せいー！」「やああー！」

「ふんっ」

ギイン ガン！

「甘いー！」

「ぐあ」「ぐお」

ジーンが剣を一振りし、リヨウヤとフェイスを蹴散らす。が二人はすぐに立ち上がった。リヨウヤが最後までとっておいた切り札として白夜の時代から伝わる奥義の構えをとる

「流星！ ……はあああ」

ギインギインギイン！

リヨウヤが繰り出す剣技を3撃ジーンは凌ぐ。

ザシュ！

だが4撃目は大きく入る。

「ぐおお」

「今だ！ ……はあああ！」

リヨウヤが5撃目に向けて大きく刀を振り上げる。だがそれが仇となった。

ギイン！

リヨウヤが刀を振り上げる一瞬の間にジーンは刀の軌道を読み槍で刀を防ぐ

「しまっ…」

「はああ」

グアン！

「……………見事…」

最後の1撃を通したのはジーンでもリヨウヤでもなかった。

「はあ……………はあ……………」

リヨウヤがジーンに「流星」を繰り出している間に気迫を貯め、ジーンがそれらを防

いでいる間にジーンに肉薄し「月光」の一撃を放ったフェイスだった。

「……やつとジーン將軍に勝てた。……けど複数がかりでは勝ったとはいえないな」  
見たところまだ息があるようだ。

「……！　すぐに拘束するぞ。気が付いた途端立ち上がりかねん」  
リヨウヤは慌てて縄を取り出しジーンを縛り上げる。

他の敵の掃討も終わり、主戦場だった城下町の戦いは終わった。

## 第36話 赤い人魂

「貴様ら！ どうやってこの場所を？」

地下の祭壇でたたずんでいたラーズ教皇クラウドデウスはこの場所に駆け込んできたアイクたちを見て驚愕する。

「そんなことはどうでもいいでしょう」

「ああ、あんたの問いに答える義理はない。降伏するか、抵抗するか。聞いているのはこっちだ」

アイクはクラウドデウスにかつて神剣と呼ばれたラグネルをむける。

「もちろんこうだ『やみよ ぬりつぶせ!! ゲーティア』」

クラウドデウスが詠唱を唱えると凄まじく凝縮された闇がアイクを襲う。

「アイク下がって！ ……おおお」

セネリオはアイクを押しつけ自ら闇に飲まれる。

ギユオオオ！

だがセネリオの手に数個の斑点を残すだけで闇は消滅していった。

「馬鹿な！ 賢者とは言えゲーティアをはねのけるだ」と



驚くクラウディウスにアイクは説明する。

「セネリオはかつて大賢者の称号を持つていたことがある。その称号を返したとはいえ普通の賢者とは違うと言うことだろう。……で、そろそろ降伏する気になったか？」

「……なんだ？ 私の攻撃を防いただけで勝った気になっているのか？ 馬鹿め。ならその小僧以外を殺せば済むこと『ゲーティア』」

またクラウディウスは詠唱を唱えるがアイクは闇の出現場所を読み後ろに飛ぶ。闇はしばらく現れるが飲みこむものがなく存在するだけだ。

「はあ」

アイクは闇を避けクラウディウスに斬りかかる。

ギイン！

しかしクラウディウスが突きだした腕は鋼のように固く、傷一つつかなかった。

「ギムレーから何らかの恩恵を受けているわけですか。なら……『きせきのかぜよ！ さけ！ しつぷうのごとく！ レクスカリバー』」

ビュオオ！

「フン……」

勢いよく吹きすさぶかまいたちの暴風にもクラウディウスは平然と立っている。

「魔法も効かないのですか……まるで竜鱗族ですね。どちらにも対応できるところは黒

竜に近い」

「くそ！ かかれー！」

苦戦するアイクたちを見てラグズたちが獣の姿になり一斉にかかる。

ガン！ ギン！ ゴン！

「温いわ！」

ブオオオ！

「ぐわあ」

ラグズたちの攻撃を受けてもクラウディウスは傷一つつかず、逆にクラウディウスの振るった手から生じた闇に蹴散らされ、大傷を負う。中にはもう死んだ者もいる。

「くそ、おい！ 大丈夫か？」

「俺は無事だ。くそ！ むやみに奴に近づくな」

なんとかこらえたウーゼルは仲間の下がるよう指示する。

「くそ……出し惜しみしている場合じゃないな……はあ！」

ギイイイ、ギン！

アイクの一撃がクラウディウスに降りかかる。さすがに万が一のことを考えてかクラウディウスは手突き出し防御することを忘れない。

「ぐぬ……さつきよりは重いな」

ギイン！

「ふうん、今の私にかゆみを与えたのは褒めてやろう。褒美だ！」

ブオオ！

「ぐうう」

二撃目を受けてかすり傷を負いながらもクラウディウスは反撃し、アイクを闇が襲った。アイクは歯を食いしばり耐える。

「団長の「天空」でも傷つかないのかよ」

思わずオルンはぼやく。

「……皆さん下がって！」

セネリオの指示でアイクたちはクラウディウスから離れ距離を取る。ラグズ団員の中で幹部でもあるオルンとウーゼルは化身の源泉となる力を温存するためひとまず人の形態に戻った。

「クク。逃げるのなら構わんど。その間に私もここから離脱するだけだ」

クラウディウスはアイクたちが背を向けた後でクライネを呼び転移でここから逃げるつもりには違いない。そうなればアイクたちなどギムレーを使って大陸ごと焼き払える。

今そうしないのはアイクたちと相對している状態でクライネを呼び出せば彼女を殺

されてしまう危険があるからだろう。

アイクもセネリオもそのことに気付いているから逃げ出すつもりは毛頭なかった。だがセネリオはこわばった表情のままなる。

「打つ手がありませんね。オルンいい手はありますか？」

セネリオだけではクラウディウスを倒す方法を思いつかないのかオルンにも意見を仰ぐ。

「俺が思いつくわけねえだろう」

「今は僕にも思いつきませんね。ウーゼルは？」

「悪い。団長の力でも参謀の魔法でも通用しない相手をどうやって倒すかなんてさっぱりだ」

続けて聞かれたウーゼルも首を横に振った。

「団長は？」

アイクは黙って首を振る。全員いい手を思いつかずうなだれる。そんな空気に痺れを切らしたのか――

「なら破れかぶれで奴の喉元を食いちぎるまでよ！」

オルンが狼形態になりクラウディウスに飛びかかる。

「オルン！」

セネリオが叫ぶ。

「馬鹿め『ゲーティア』」

「ぐう」

クラウドデウスが闇を放つ中オルンは闇を耐え抜きながら、

「オオオオオオ……があああ」

ギイン！ グラ。

オルンがクラウドデウスの腕に牙を突き立てるも彼の腕には傷一つない。その代りクラウドデウスの視界が揺れる。

「？……眩暈か、これしきで」

オルンが攻撃の際にはなった「威風」でクラウドデウスは眩暈を起こす。その隙を逃すまいとセネリオが詠唱を始める。

『きせきのかぜよ！ さけ！ しつぷうのごとく！ レクスカリバー』

「懲りん奴だ」

ビュオオオ！

だがセネリオの起こした風は先ほどより大きい。室内だと言うのになぜかその風は陽光を受けたように輝きを帯びていた。

「な……ぐあああ」

「陽光」を帯びたレクスカリバーは今度こそクラウディウスを斬り刻む。

「グアアアアア！」

そこへ獅子に化身したウーゼルが襲い掛かる。

ボキユゴリイイイ！

「ぎやああああ！」

クラウディウスの腕にウーゼルが噛み付きようやく彼の腕を引きちぎる。

「この畜生風情がああ」

グオオオオ！

クラウディウスが反撃しようとするもウーゼルが吼えた途端彼の「咆哮」に身をすくめ思わず動きを止める。

「まさか……先ほどの順番は……」

身動きを止めた己自身を心の中で罵倒しながらクラウディウスはようやく気付く。

彼らが攻撃する前のセネリオが意見を募るやり取り。あれはあらかじめ決めたサインだ。

セネリオの「打つ手がない」という言葉でそれは始まる。

それからセネリオに声をかけられたものから攻撃を始め、彼が一度言葉を切り自分について話したとき、彼自身が攻撃を行う。その後も彼に声をかけられたものが続く。い

ずれも奥義を出しながら全力で！

つまりウーゼルまで攻撃を行った今、彼に続くのは……。

「はああああああー！」

右腕を失ったクラウディウスにアイクが迫る。

グサ！

「おおお」

剣がクラウディウスに刺さる。

「ああああああー！」

「ぎゃあああああー！」

クラウディウスのどてっ腹に刺さった剣はアイクの気迫を受けて青く輝き、彼の胴体を真つ二つにするくらい勢いで振り回される。

「そ……そんな……私は神の力を……得たはずでは……私は……自らが神となり……世界に……君臨」

致命傷を受けて長い断末魔を残しクラウディウスは息絶えた。それを見届けた途端にラグズたちは脱力し人の形態に戻る。

「はあはあ……手間取ったな……だがまだ終わってない。念のためギムレーを探してそれからヴァルムへ」

「アイク！ みんな！ 下がって！」

指示を出そうとしたアイクの言葉を遮ってセネリオが叫ぶ。

「……………」

だがアイクたちは言う通り今立っている地点から数歩下がったものの指示の意味が解らず首をかしげている。

「…………セネリオ。一体どうしたんだ？」

「……………アイクたちにはあれが見えていないんですか！」

今セネリオの視界には赤い人型のものが浮かび上がっている。それはクラウディウスの屍から立ち上った。

《情けない奴め。獣数匹と魔道士の小僧に殺されるとは……………まあいい。こいつは用済みなうえギムレーを抑えようとする点では邪魔者でもあった》

それだけ言うのと赤い人魂は上へあがっていく。それは天井を貫き、そのまま昇っていった。

「……………」

「おい参謀さんよ！ 勝利の余韻を邪魔しやがって。一体何だっていうんだ？」

そうとは知らないウーゼルはウーゼルはセネリオを怒鳴る。アイクはウーゼルを抑える。



「待てウーゼル。もう俺たちの邪魔をする奴はいない。それぐらいで目くじら立てるな。」

「……悪かったよ。悪いな参謀熱くなつてつい」

ウーゼルも言い過ぎたと思つてそこまで行つてばつが悪そうに死んだ仲間を抱えて踵を返し階段へ向かう。もうこの祭壇から出たいのだろう。オルンたち他のラグズもある者は同じように死骸を抱えてウーゼルに続く。

そんな中アイクはウーゼルに続かずセネリオの方を見て尋ねる。

「セネリオ……お前にはいつたい何が見えたんだ？」

「……アイク……あなたにも見えなかつたんですか？」

「……俺には何も見えなかつたな……ひよつとすれば魔道士のお前にしか見えないものかもしれない……それで何が見えた？」

「赤い人魂が……全体が赤くてよく見えませんでした。若い男のよう。服装も粗末な物でした。蛮族が着る物のような……」

「赤い人魂……なるほど確かにそう言う霊魂のようなものは魔道士の方がよく見えるのかもしれない」

セネリオの肩は震えている。彼の右肩の方にアイクは自身の手を置き落ち着かせる。

「なあにどうつてことない。霊魂なら俺たちには斬れないかもしれないが、奴が見えるお

前の魔法ならその人魂を倒せるかもしれん……だからまずはお前がしつかりしてくれ。出ないと団は方針一つ立てられん」

セネリオは落ち着きを取り戻し、気を引き締める。

「すみません……では団長、外へ出ましょう。もうイストリアもドルマもかなりの数の軍を送り込んだと思いますが、それでもヴァルム帝国はてこずる相手かもしれません。教団を片付けた以上僕たちも向かいましょう」

「ああ……行くぞ次の戦場へ！」

そうして寺院跡を出て翌日、アイク傭兵団もイストリア・ドルマ軍に続きヴァルムへ向かうべくドルマ港へ向かう。

ガルバザン クラス：ゴースト

1900年前のゾーア族の部族長。カリーユオンとユトナに敗れ肉体と暗黒竜の力を失い魂だけとなったがその怨念は1000年前にグエンカオスを、現在はクラウディウスに取り憑き彼らの憎しみや欲望につけ込んで操り、ギムレーとともに世界のすべてを破壊しようと目論む今作の黒幕。

## 第37話 二振りのファルシオン

市街地でフェイスたちがジーンと戦っている頃、ヴァルム皇宮西の庭園では。

「おらあ」

ズガン！

「ぐあ……こんなガキに……」

ルッツの最後の一撃を受けて兵士が倒れる。

「アルバレアの猛獣め！」

敵兵の槍が化身したベルモットを襲うも。

「……ふっ」

ヒョイ。

彼女は軽々と避ける。

ズガン！

「ぎぎああー！」

「くそっ！ 囲め、囲め」

仲間が倒されたのを受けて他の兵士が一番厄介そうなベルモットを囲むも、

ズガン！

「ぐえ」

「俺たちもいるんだよな。まあ隙ができて助かるからよそ見してくれて構わないが」

ベルモット扮する大兎に気を取られていたヴァルム兵をアカネイア兵が攻撃する。

「くそ……卑怯なアルバレアの兵どもが！」

未だ皇帝を暗殺しようとしたのがアルバレアの手のものだと思っ  
ている軍がアルバレア兵だと思っ  
ているヴァルム兵は敵をそう罵倒する。

「お前らに言われたくねえな……アルバレアの王子の隙を狙って殺そうとした偽帝の軍が！」

「偽帝……アルバレア王子を暗殺だの訳の分からぬことに続いてそんな不敬をぬかしやがって……やっちまええ！」

オオオオオオオ！

「行くぞお前ら……王子お付きの嬢ちゃん抜きでこいつらを蹴散らしてアカネイア再興の足掛かりにするぞ！」

オオオオオオオ！

両軍は激突する。

両陣営の首脳を暗殺しようとした犯人を知るルツツとベルモットは複雑そうな顔を

見せながらも今それを触れ回るわけにはいかない。二人もアカネイア兵として戦いに混じる。

カイルは軍将校の意見に従って後方で戦いを見守っていた。彼の周りには数人の兵士が護衛や命令を各部隊に伝えるための伝令として控えている。

両軍とも相手の方が暗殺を仕掛けてきたと思っている。不毛な戦いだ。この戦いも教団によって仕組まれたこと。この大陸も滅ぼすためなのかそれとも別の理由があつてヴァアルム大陸の各国を疲弊させたいのかわからないが。

(まずい。戦況が泥沼に入ってきた。まだヴァアルム軍は皇宮内と帝都北に多くの予備兵力を残しているだろう。彼らを投入されたらヴァアルム側に優位が戻ってしまう。そうなる前に皇帝を囲んで投降を促す予定だったのに)

そんなカイルの心のうちを見透かしたようにある人物が戦場にやってくる。

ヒイイン!

「あ……あいつは!」

「ヴァアルムの偽帝?」

馬に騎乗したヴァアルム皇帝ファルスが現れアカネイア兵がどよめく。

「陛下! まだ戦いは終わっておりません。皇宮内にお戻りを!」

ヴァアルム兵も懸命にファルスに呼びかける。

だがファルスはどちらの声にも耳を貸さずカイルを一瞥しながら愛馬を走らせアカネイア兵とヴァルム兵が交戦する戦線の手前で止まる。

命令されたわけでもないのに両軍はどちらからともなく戦闘を止めた。

「アカネイア王子カイルに告げる。投降せよ！ たった今北の砦に待機していた約28万の軍が帝都に到着した。アルバレアとソンスンと合流したとてうぬらに勝ち目はない。1度だけ生き延びる機会をやるうではないか。繰り返す投降せよ！」

「なっ?」「28万?」

兵士がうろたえる。無理もない。

今のアルバレア軍は滝での敗戦で15万まで減った。アカネイア軍5000と特異な技を持って戦いづらいつとはいえ1000のソンスン兵を合わせても太刀打ちできない。

対してヴァルム軍は平原から後退しながらも兵力20万以上を維持してきた。そのうえ北から28万以上の増援がやってきたと言うのだ。イストリア軍は間に合わなかったか。

アカネイア兵の戦意は見るからに落ちた。このままでは独断で投降しようとする者も出てくるだろう。

「皇帝……」

カイルは側近の制止も聞かず戦線の前まで走り、ファルスに告げる。

「ヴァルム皇帝ファルス殿……忠告感謝する……あなたの提案通り降伏する……ことはとてもできない」

「カイル王子……」

「カイル……」

「……」

アカネイア兵や彼らに混じってルツツとベルモットもカイルを見る。

カイルの返答を予想しながらもファルスは彼に問う。

「なぜだ？　我はうぬら……少なくとも王子を害する気はない。今後アカネイア各国への外交に貸しとして利用させてもらうだけだ。我らにかの大陸を侵略する気も余裕もない。向こうから恨まれ、戦いを挑まれても骨が折れるだけというものだ。正直この戦争の直後で疲弊した状態ではあの国々に勝てる見込みもないしな」

「………皇帝、私たちは私たちの大陸を破滅させかけた竜、ギムレーとギムレーを操るラーズ教団を追ってこの大陸までやってきた。そのための協力をイストリア王、アルバレア王子はしてください。そんな彼らの国が滅ぼされるかもしれないところを私は黙ってみてられない」

カイルの物言いにファルスは苦笑し首を振る。

「それはそれは、ご立派なことだ。異大陸に連れてこられた挙句戦に付き合わされる兵にとつては迷惑なことだろうがな」

それに関して返す言葉もない。そう思いながらカイルは兵に向かって言う。

「諸君……私個人の義憤に君たちを死地に巻き込んで済まないと思つている」

カイルは兵士たちに深々と頭を下げた。

「王子……そんな」

「顔を上げてください！」

カイルは頭を上げる。兵に言われたからではない。続けて言う言葉があつたからだ。

「だがどうかいましばらく私に力を貸してほしい。この戦争で我らが虜囚となればもうあの竜を捜し出すことはできない。それどころかこの戦争を仕組んだ教団はこの戦いが終わり次第竜を使ってこの大陸と我らの大陸を滅ぼしに来るかもしれない。……この戦いはすでにヴァルム大陸の国々だけのものではない。アカネイア大陸の興亡までかかっているんだ！」

そこまで言つてカイルはアカネイアの兵を見回す。

中には教団が戦争を仕組んだと明かされて訝しむ者もいる。だがこの戦争にアカネイア大陸の命運がかかっていることは誰もが理解できた。

そんな中アカネイアの王子の言葉に真つ先に答えたのは……。



「言われなくても俺はカイルに協力してやるぜ。それに俺は付き合い合わせたんじゃない。俺の方から志願してきたんだ。親父がうなるほどの大仕事を成し遂げにな！」

斧を背中に担いだルッツだった。

「私も自ら志願してきたクチだ。自由を取り戻したタグエルの平穩を脅かす竜、ギムレーを倒すまでは帰れと言われても応じるつもりはない」

「なっ？ 猛獣が人間に！」

人間の姿になり言葉を発したベルモットにヴァルム兵はひるむ。

(ルッツ……ベルモット)

言葉に出さずカイルは声をあげてくれた者に感謝する。

「俺も王子についていくぞ……もう二度とあの竜に故郷を滅ぼされてたまるか！」

ある兵士が二人に続く。

「やってやろう。28万がなんだ。100万人が来たって投降してやるもんか！」

「カイル王子殿下万歳！ アカネイア王国万歳！」

「聖王カイル万歳！」

カイルを称える声は続き、兵の中には彼を聖王と呼ぶ者までいる。隠れ里で共に暮らすわずかな手勢を率いて巨大なグランベル帝国に立ち向かったセリスと今のカイルを重ね合わせて。

20年前にアカネイア大陸に来たグランベル使節団の中には国交断絶してなおバーハラ公女だったユリナを慕ってユグドラル大陸に帰らず家族ともどもアカネイア大陸にとどまった者も少なからずいたと言うがこの兵士もユグドラル出身の一族の一人だったらしい。彼も聖王セリスの物語を知っている。

戦意を取り戻したアカネイア兵はファルスとヴァルム兵を見る。いつでも戦いを再開するという意思表示だ。

パチパチパチ！

誰かが拍手を鳴らした。アカネイア側からではない。ヴァルム側、それも――

「うぬらの大陸の命運か……確かにそれを出されたら我らに屈するわけにはいかな。見直したぞアカネイア王子……いやカイル。さすがは次期国王だ。カーシャが慕うだけはある」

ファルスはこの場でただ一人カイルに拍手を送る。

「……」

カーシャの名を出されてカイルの眉間にしわが寄る。

「最初に降伏の機会は1度だけと言った。もううぬらの気が変わって投降を申し出ても聞かぬぞ。うぬらはここで死ぬ、いずこにいるカーシャも含めてな。……だがカイルの王としての資質と勇氣に免じて代わりに別の機会をやるうではないか」

「機会？」

ブオン！

ファルスは剣を抜いた。

「その剣は！」

ファルスが抜いた剣を見てカイルは目をみはった。

「カイル！ 我と一騎打ちの勝負をせよ。この勝負に勝てば我は死んで我が軍は士気を失いこの戦に勝てるやもしれん」

「……」

カイルは驚いたままだ。

「もちろんうぬが負ければ我は援軍を呼びうぬらを血祭りにあげる。どちらの約も破りようがなかるう。……どうだ？」

背後に圧倒的多数の援軍を控えながら自らの生死をかけた一騎打ちを仕掛ける。それだけでも十分驚きだが、カイルが驚いたのはそれだけではない。

ファルスが持っている剣はファルシオンの前の形状によく似ていた。前の剣と同じく柄の上部には赤い宝玉「竜玉」が埋め込まれている。

「……………いいだろう。この決闘受けて立とう」

一瞬畏かと思ったがファルスの性格では考えにくい。それに本当に30万近くの兵

を新たに投入されればこの敵地で罨や伏兵を伏せることもできない自軍に勝機はないに等しい。

ヴァルム軍に唯一勝つ方法はこの一騎打ちでファルスに勝つことだ。それにカイルには自らファルスと戦う理由があった。

「そう言ってくれると思っていたぞ」

ファルスは満面の笑みを浮かべ馬から降りる。ファルスの馬は兵士の一人が手綱を持ち預かった。

「ルッツ！」

カイルはルッツを呼び盾を持たないファルスに合わせ封印の盾をルッツに預ける。

「カイル……勝てよ！」

「ああ」

ルッツの激励にカイルはうなずいて答えた。

二人は対峙し剣を構える。

決闘の前にカイルは思う。

（あの剣は……もしそうならチキに彼とは戦うなど言ったシスターの言葉の意味がわかるな）

ファルスもカイルの剣に考えを巡らせる。

(カイルの持つ剣……空洞がこの剣の宝石と同じ大きさか……刀身も私の剣に劣らぬ……いやこれ以上)

ジリ、ジリ、

両者とも間合いを詰める。

「はあああ！」

「ぬおおお！」

カイルとファルスは太刀を交える。

ギイイイン！

ガアアアン！

双方とも全力でぶつかるとどちらの刃も刃こぼれ一つしない。当然だ。どっちも竜王ナーガの牙で作られた剣……ファルシオンなのだから。

ガキイイイン！

鏢迫り合いの中カイルの意思に呼応してカイルのファルシオンの柄に蒼い宝石が現れ、剣が蒼く輝くがファルスは驚かずに話を始める。

「実はな……この決闘を申し入れたのは余裕から出た酔狂ではない」

「僕もだ。……自軍の勝利のためだけじゃない」

ギイイイン！

二人の声は同時に発した。

「カーシヤの心を射止めたうぬを我自ら叩き斬ってやりたかったからだ！」

「カーシヤを奪おうとしたお前をぶん殴ってやりたかったからだ！」

グワギイイイン！

ガゴオオオン！

ヴァルム東無人島。

この無人島ではヴァルム帝国の艦隊が2隻停泊していた。

艦からある兵士たちは島に上がり、ある兵士たちは船に残ってそれぞれ何人かは東の海を見張っていた。

東にあるアカネイア大陸からアカネイア本国やアカネイアと同盟関係にあるフェリア・ペレジアの軍がカイルたちの一団に援軍を送りはしないか監視するために。

ドオオオン！

だが彼らは東から来た船団のことを本国に報告することなく帰ってくることは無かった。

ガゴオオオオン！

ザシュ！

「くっ」

カイルの右腕を浅くファルスの剣が裂く。

「ちっ……もう少いで腕を落とせたものの」

そう言うファルスも腕の痺れをこらえながら剣を構え直す。

互いのファルシオンの性能は改良したうえ聖痕によって更なる力を引き出したカイルのファルシオンの方が上だ。だがファルスは物心ついたころからアルムに近づくべく修練を重ねた剣技によってその差を補って優位に立っていた。それでも剣が交差するたび自身の獲物以上に頑強な剣とぶつかる衝撃はファルスの腕にダメージを与えていた。

（傷一つ入らん……あの剣もヴァルム製か？）

「はあー！」

ファルスが腕の痺れをこらえてる隙を見てカイルは念を込める。

キュイイイン。

途端にカイルの腕は光に包まれ傷は跡形もなくなった。それでも封印の力を強化す

るため命のオーブの力のすべてを引き出せず他の傷は残ったままだが。

(ぐぬ……回復の力か。厄介な……剣だけに頼るのもそろそろ限界だな)

ファルスは歯噛みし、切り札としてとっておいた彼にとつて忌まわしい力を使うことに決めた。

「はあああ」

ファルスはカイルにかかる。

ギイイインン!

「くっ」

二人は鏝迫り合いを再開する。

ザシユ!

「ぐおー」

今度相手の右腕を切り、制したのはカイルだ。

ファルスも腕を切り落とされることは無かったが、破壊力を増したファルシオンの威力でファルスの右腕を守っていたリヤーブレイスが碎ける。

「!?!」

あらわになったファルスの右腕を見てカイルは目を剥く。

ファルスには十字の痣があった。



「その痣は？」

カイルの視線が自身の痣のある部分に向けられていることに気付きファルスは言葉を投げかける。

「この痣か？ これは我が一族に代々受け継がれてきた皇帝の証たる聖痕だ。かの聖帝アルムにもあつた。彼の祖先たるリゲルの皇帝たちにもな。……我が皇帝になつたのはこの聖痕があつたことが一番大きい。もし他の者に聖痕があればそやつが皇帝となつていただろう。たとえ傍系でもな」

彼は痣について語る。心なしか誇らしそうに。

「そうだったのか……僕もこの右目と同じ痣……聖痕を母から受け継いだ。母は代々のバーハラ公爵から……だからその聖痕を誇るあなたの気持ちはわかる……あなたの祖先、アルムの世継ぎが国名を変えたりせつかく統一したバレンシア教を軽んじたりしなければ、みなは聖痕を持つあなたたちを王と認めただろうに」

カイルの憐みの言葉にファルスは鼻を鳴らす。

「それほどアルムを敬い、彼の名を後世に残したかつたと言うことだ。2代目の皇帝の気持ちはわかるぞ。……国を分けた3代目以降の無能ぶりには頭を痛めるが」

言い終わらぬうちにファルスは剣を振りかぶる。

カアアアン！

ギイイイン!

ガアン!

「しまっ」

ファルスは剣を取り落とす。

「今だ! はああ」

その隙を逃さずカイルはファルスに斬りかかる。

ファルスは何事かつぶやく。

『てんよりまいおりててきをほろぼせ! ライナロック』

ブオオオ!

突如ファルスの前に炎が出現しカイルに襲い掛かる。

「ぐわああああ!」

シュウウウ。

魔法で繰り出された炎は一瞬で自然に鎮火し燃え広がることは無い。だがカイルは大やけどを負い。鎧からは黒い煙が立ち上った。

「ぐ……剣士が魔法を? こんな切り札を隠し持っていたなんて……」

カイルは火傷から発する激痛をこらえ立ち続ける。少しでも気を緩めれば倒れ伏してしまいそうだ。

「はあああ！」

自身の気を保っている間に決着をつけようとカイルは自分から斬りかかる。

ギイイイイン！

「ぐぬっ！」

「ぐはっ！」

それでも激痛に気を持って行かれ全力が出せずファルスに押し負ける。そんな中剣を取り落とさなかったのは剣を握りしめることで気を保ち続けていたからだろう。

その時カイルはふと気付いた。

剣が交えた時、ファルスもうめいていたことを。

はた目には新たな傷が入ったように見えないが……。

(まさか！)

ファルスの見えないダメージに気付いたカイルは再び彼に挑む。

「あああああ！」

「ぬうううん！」

グワアアアアン！

「がはっ！」

今度はファルスが押し負ける。

（やはりファルスはダメーじを受けている。僕に斬られた個所とは別の……魔法を使った反動で！）

統一戦争以降、バレンシア大陸では魔法が廃れた。

バレンシアでは魔導書は必要なく自然の力を己のうちに宿すことで詠唱だけで魔法が使えた。

その代り術者は魔法を行使した後魔法の力に見合う分の生命力を失う。むやみに行えば命を失うこともある。

そのため自己犠牲を尊ぶドーマ教が衰退し、彼らに対抗する必要のなくなったミラ教も魔法を使うことが少なくなつた。魔法を使うのは傷を負つた無辜の人々を治療しようとする献身的なシスターや修道士ぐらいである。

（このぶんだと2度目は使えんか……よい。もうこの剣一本で！）

「はあああああ！」

「おおおおお！」

この機を逃すまいと残された力を振り絞るカイルとファルシオンでこの戦いを締めようとするファルスがぶつかる。

ガアアアアア！

パキイイイイ！

そしてファルシオンが折れた。ファルスの持っていたファルシオンが！

「はあはあ」

「……き、貴様！ アルムから代々受け継ぎし聖劍ファルシオンを！」

息も絶え絶えのカイルに代々伝わった聖劍を折られたファルスは激怒する。もう戦や国の存亡のことまで忘却するぐらいに。

「あああああ！」

「許さぬ『てんよりまいおり』」

ファルスにとどめを刺そうと迫るカイルにファルスは自分の命も顧みず2度目のライナロックを唱えようとする。

「カイル殿——！」

「陛下——！」

その時二人を別々の声と呼ぶ。

「っ！……っ？」

『ててきを』……っ？」

二人も剣と詠唱を止め声の方を見る。

そこには市街地からアルバレア兵とヴァルム兵が駆けつけていた。

「二人とも戦いをやめてください。もう戦争どころではありません！」

アルバレア兵が二人に戦いを止めるように訴える。

「陛下！ 東からイストリアとドルマの軍が……それに——」

「それに？ どうした答えよ！」

言い淀むヴァルム兵にファルスは詰め寄る。

「東の大陸から何十隻もの船団が！ アカネイア各国の援軍だと思われまます！」

「馬鹿な！ そんな報告受けておらんぞ。監視のために派遣した海軍は何をしておる！」

皇帝に報告せずに逃げた、もしくは寝返つたのか？ そう思つて憤るファルスの詰問に新たな声が答える。

「その艦隊は沈められたそうです。彼らが待機していた島の大地から現れた竜によつて」

数名の兵士の後にアルバレア・アカネイア連合軍の総指揮官ユーリが現れる。

「ユーリ！ ……いや待て島の大地から竜だと？」

重い腰を上げてやってきた宿敵をファルスはにらみつけるが竜という単語に戸惑う。

呆然とする二人にユーリは宣告する。

「今のヴァルム軍は約45万。対して援軍を得た我が軍は約152万。もう勝負は決しました。その上両大陸に仇成す竜、ギムレーが姿を現した。ここはお互い矛を納め、二

つの大陸とそこに住まう民、それ以外の大陸……世界を守るため力を合わせてギムレーを倒そうではありませんか！」

第一次ヴァルム大戦の終結を。

## 第38話 休戦

「こちらが休戦協定の文書となります。納得いただけましたら署名を」

「うむ……」

文書を受け取ったファルスは書面を長い時間をかけて吟味し、読み終えたうえで自国に不利すぎる条項が隠されていないか確認して四半刻ほどで自らの名を末尾に書いた。

アルバレア軍の陣地の天幕でファルスとユーリは第一次ヴァルム大戦の休戦協定の調印を行っていた。仲裁役としてノーヴァ教国のシスターキットと神竜の巫女チキを交えて。そしてなぜかチェイニーまで混じっていた。

ファルスから文書を返されたユーリはファルスの署名を確認すると文書をキットに渡す。すでにユーリは署名を済ませていた。

「シスター殿、こちらがアルバレア・ヴァルム間の休戦協定となります。どうぞご確認を」

キットも文書に目を走らせて両者の署名を確認する。

「……確かに。それでは後ほどこの文書は教皇殿下にお送りします。これでアルバレアとヴァルムの戦争は停止ということになります。……本当は両国には一時的な戦争の



停止である休戦協定ではなく、恒久的な和平を保証する講和条約を結んでいただきたいのですが」

「申し訳ない。ある程度譲歩しないとファルス殿は協定を破棄してしまいかねないのだ」

「フン……戦争は終わったのだ。ひと時でも平和を望むならこれ以上の難癖はつけぬほうがよいぞ」

第一次ヴァルム大戦はヴァルム帝国とアルバレア王国を始め、イストリア王国・ドルマ王国・ソンスン王国・アカネイア王国——以下アルバレア連合——の休戦という形で終わった。

戦力差から見ればヴァルムの敗北は必至で降伏に持ち込むことも可能だったのだが、アルバレア連合側のヴァルムにまさっている戦力のほとんどはアカネイア大陸の国々から来た援軍によるもので、アカネイア軍が撤収した後再びヴァルムが戦争を仕掛ける事態になっては困る。

かと言ってヴァルムが減じるまで戦争を続けるほどユーリたちは残忍な気質を持ち合わせていない。またそれ以上に東の島にいるギムレーがいつ動き出すかわからないと言うのが最大の理由だった。

ただし降伏した時と同様。ヴァルム帝国にはアルバレア王国へ莫大な賠償金を支払

うことになった。ドルマ王国と戦ったイストリア王国にもドルマを通じて支払われる。ソンシン王国は犠牲が少なく、自国を脅かされたわけでもないので後回しで構わないとの事だった。

「まあまあキツト。これから仲良くしていけばいいんだよ。私もファルスとユーリが仲直りできるように仲裁頑張るから」

複雑な雰囲気気の3人にチキは割って入る。

「仲直りつて……無礼だぞ小娘！ ヴァルムとアルバレアの問題を子供の喧嘩のよう  
に」

神竜の巫女相手にファルスはいきり立つ。

「無礼なのはあなたですファルス様！ このお方は神竜族の王女チキ様。竜族の格に  
おいてはミラ様やドーマ様より上位にあたるお方なのですよ」

激昂するファルスにキツトが声を荒げる。

「ファルス様は王権神授——我々の世界の王権神授説とは異なります——をご存じない  
のですか。ミラ様がソフィア王族の始祖に、ドーマ様がリゲル皇族の始祖に神の代理と  
してそれぞれの地の統治を認めたから彼らに王や皇帝を名乗ることが認められたので  
す。皇帝だからこそ両柱亡き後の神であられるチキ様を敬うのが当然でしょう」

「そのミラとドーマはアルムに封印され、両柱ともそれを受け入れアルムにすべてを託

したと言うではないか。我はそんな神々にもその小娘にも膝をつくつもりはない！」  
そう居直るファルスにキツトは呆れからため息をつくがようやく戦争が終わったというのに自ら争いの火種を起こしてまで信仰を強要するわけにいかず何も言わなかった。

「ゴホン……しかし本当なのか？ ミラとドーマが竜だったとは、先ほども言ったように両柱を崇めるつもりはないが我が一族の前身、リゲル皇族を任じた神が竜だったと言われて面白くはないぞ」

これ以上の意見を引つ込めたキツトに続きファルスも矛を納めチキに話をむける。

——が答えたのはチエイニーだった。

「ああ。まだ生まれていなかったチキは何も知らないが俺はあの二人とは知り合いでね。あいつらは神竜の王ナーガと人間への干渉について意見をたがえ、大陸を出ていき西の……この大陸に居つきそれぞれやり方で人間に干渉し理想通りの国を作らせた」

数千年前、神竜王ナーガは人間には干渉せずに見守っていく。その方針を掲げ竜族全てに守らせた。すでに竜族に待ち受ける未来を予期しての判断かもしれない。

だがナーガの判断に異を唱える者もいた。それが若き竜の兄妹ドーマとミラ。

ドーマは力と欲望をもって人間同士を争わせ競わせて強くするように仕向けることを、ミラは優しさから人々が働かずともほんの少し食料を収穫するだけで暮らしていくようにし自由に過ごせるように助けることを主張した。

この頃から両者の意見は真つ向から相反していたがまずは人間への干渉を禁じるナーガを説得してから話し合うとして竜の兄妹は互いに妥協した。

ガトーやチェイニーなどはそんな彼らの主張を取り入れてもこの二人が対立し、竜族と人間がいくつも割れることになるのではと危惧していたが。

ドーマとミラは反対派に回った若者たちを束ねナーガと長老たちに陳情した。だが彼らの陳情は聞き入れられず遂には争いに発展した。

そしてさほど長くない戦いを経て彼らは倒され、指導者だったドーマとミラは戦犯として大陸から追放された。手向けとしてなぜか彼ら自身を封印できる剣をナーガから贈られて。

竜族に退化の現象が起こる以前の事である。

そして彼ら兄妹は故郷から西の大陸に辿り着いた。そこにはまだ文明を築いていない人間たちもいた。ドーマたちはナーガに干渉されることなく自分たちの理想通りに人間たちを導くことにした。

後はバレンシアの神話や歴史で記されているとおりである。

「そして極端すぎる互いの理想が人間に圧政や墮落をもたらすものだど気付いたドーマは自分たちから人間たちを自立させる必要があると思ひ、自分が管轄している国の皇帝に自分の血を飲ませファルシオンを使えるようにさせた。皇帝が自分たちを邪魔だと判断したら封じ込めることができるように……ファルス。あんたの右腕にある聖痕がその証さ」

チエイニーの説明を聞き、ファルスは袖をまくり右腕を見る。

「この聖痕にそんな力が……ではカイルの右目の聖痕もあやつのファルシオンを使えるようにするものなのか？」

「そ、それは……」

それは違うと言いかけたもののナーガの聖書を使うためのものとは変質した今の聖痕の力を知らないチエイニーは言いよどむ。

「違うよ。カイルの聖痕はファルシオンの真の力を引き出すためのもの。あの剣の竜玉には竜族の血を持つものしか使えないという封印はもう解かれて、新たに意志による継承の封印がかけられたから。アリテイ……じゃなくてアカネイア王家の人間なら、現在の持ち主が相応しいと判断すれば次の継承者が使えるようになる。……その一方ファ

ルスが持っていたファルシオンにはまだ竜族の血がなければ使えないという枷がついたままだったんだ」

チエイニーに代わり夢の中でナーガから聖痕のことを聞かされたチキが答える。

「竜玉……あの宝玉か」

ファルスはファルシオンについていたあの赤い宝玉を思い出す。

だがあのファルシオンは砕けてしまった。それに封印を解いてヴァルム皇族以外の者が使えるようにするようなことをファルスは望まないだろう。

「……まあよい。ミラとドーマが何者だろうとあやつらがこの大陸を統べることはもう無い。千年前からこの大陸はアルムの物だ」

「それに関しては異を唱えますよ。そのようなことをアルムが望むはずはありません。訂正してください。せめてこの大陸は我々人間のものだ」と

締めようとしたファルスにユーリが口を挟む。

「ああもう喧嘩しないでっつてばー！」

チキは再び彼ら二人をなだめようとした。

ギムレー征伐に向けて今夜はファルスの賠償の一環として英気を養うべくヴァルム皇宮で宴が開かれる。それまでには二人を収めようと。

## 第38話外伝 決戦前夜1 テリウス（十タグエル）

ヴアルム皇宮では明日以降から始まる。ギムレー征伐に向けて英気を養うための宴が開かれていた。

ヴアルム・アカネイア大陸の様々な国の王族・要人・兵士・物資を供給する商人など一部の住人も入り乱れ各々座卓の前に座り、またはあちらこちら移動しながら談笑していた。

「……」

「アイク……いつにもましてすごい食欲ですね」

酒や他の食事に目もむけず肉をむさぼるアイクにセネリオは声をかける。

「ああっ！　なんとしてもギムレーを倒さないとな。……もつともギムレーにはファルシオン以外通用しないらしいがな。特にとどめに関してには」

「？　……ではなぜアイクが張り切るんです？　アイクはおそらく出てくるだろう屍に専念してギムレーの方はカイルに任せればいいのでは」

言葉とは裏腹に肉を食って力を蓄えるアイクにセネリオは聞く。

「ファルシオン以外の武器でもどうにかなるかもしれない。アスタルテも「お前たちに私は倒せない」とか言っていて、実際一度倒しても蘇ってきたがユンヌの力を借りた俺が渾身込めた一撃を叩きこんで倒した。今度もそうなるかもしれない」

「まあ、女神でもなんとかなったんだから巨竜には通用しないと言う根拠はありませんね」

アスタルテを倒したことを例に出されてセネリオも納得する。

「だろう！ ただアスタルテとは違ってギムレーは俺たちが今いる二大陸以外の大陸の存在を知っている。つまりこの戦いにはテリウス大陸の命運もかかっているということだ」

「ええ！ あの大陸のためと言われても正直ピンときませんが。アイクの大切な家族を守るためなら僕も全力を尽くします」

妻子のいない今のアイクにとって家族とは――

「グレイル傭兵団か。より強い奴と戦えるかもしれないという好奇心に抗えず知り合った奴らと新たな傭兵団を組織してここまで来てしまったが……ポーレが次の団長で大丈夫だろうか？」

「ミストがなんとかしてくるでしょう。妻には弱いような男ですし。ティアマトも副



団長として居続けてくれています」

「そうか。ティアマトがいるなら安心だな」

未だボーレやミストが団を取りまとめられるのか不安を覚えながらもティアマトの名を出されてアイクは安心する。

「ところでセネリオには俺やグレイル傭兵団以外に守りたい奴はいないのか？」

「……」

言葉を返さないセネリオに悪いことを言ってしまったかとアイクは悔いる。

「悪い。あの戦いで傭兵団以外にも知り合いができたろうし、もしかしたらと思つてな」

セネリオは首を振つて否定する。

「いえ、僕にはこの傭兵団があります。ラグズ連合でスクリミル王やライと話すうちにラグズも悪い人たちではないと思いましたがね」

「そうだな。あいつらを送り出してやるためにも絶対に負けられん！」

「はい！」

アイクには話さずじまいだったがアイクの家族であるグレイル傭兵団以外にもテリウス大陸で気になることはあった。

(デイン王太后アムリタ……あの様子からすると……まさかな)

自分に話しかけ気になる反応を見せたアムリタの様子からセネリオはある予感を

持っていた。だがそれは頭の隅に置いておく。もし彼女が―だったら自分の―はあの男ということになる。とても受け入れられるものではない。

（それと印付きの隠れ里か）

女神との戦いの更に前の第二次クリミアーディン戦争のさなかソーンバルケからどうにもなくなったら、グラーヌ砂漠にある里に來ないかと誘われたことがある。

この戦いの後はウーゼルやオルンたちラグズと別れ今の傭兵団は解散になるだろう。アイクもそろそろひとつどころに腰を落ち着けたいと思いはじめている。ララベルをアイクの連れ合いとして認めてもいいかもしれない。

そうでなくてもここ数年歳を取らなくなってきた自分が側にいればアイクの重荷になる。そろそろソーンバルケの言う時が來たのかもしれない。アイクの子供を一目見たら帰郷も考えるか。

「やあ、アイク、セネリオ。やってるな」

そう思っていた時アイクたちの下へカイルがやってきた。

「……ではここからはカイルに譲りますか。アイク。また後か明日に」

カイルの姿を認めてセネリオは立ち去っていく。

「あつ、セネリオ！ ……お邪魔だったかな」

「いや。お前とセネリオは以前話したことがあるんだろう。それで十分ということだ。

……とところでお前の持つてるあの盾、ファイアーエムブレムというそうだな」

カイルの懸念を拭いきりアイクはファイアーエムブレムに話題をそらす。

「ああ、うん。本当は封印の盾というそうだが、アカネイアの国宝であるファイアーエムブレムという名称もすぐに捨てる気にはなれないな。でも珍しいな。剣ならともかく盾に興味を示すなんて」

「うむ。ファイアーエムブレムという名前の物なら俺も知っててな」

「えっ？ そうなのか」

思わぬ話にかイルは驚く。

「ああ、盾ではなかったが。名称は「エルランのメダリオン」と言うんだが周囲に蒼炎のような光を放つためファイアーエムブレムとも呼ばれていた」

「思わぬ偶然もあったね」

「うむ。……実はそれだけではない。そのメダリオンにはユンヌという女神が封印されていた。封印のなんたらというのもその盾と同じだ」

「そうだったのか、女神って……アスタルテとは違う方の暁の女神の半身かな？」

アイクは首を縦に振る。以前首脳会議でセネリオの話していたアスタルテとメダリオンに封印されていたユンヌが一つだったところがナーガの言っていた暁の女神アスタテューヌなのだろう。

「……信じるのか？　もしかその盾にも？」

女神が封印されていたという話をあつさり信じるカイルにアイクはその盾にも本当に何かが封印されているもしくははいたと察した。カイルもうなずいて肯定する。

「この盾自体に封印されてるわけではないけど地竜って人類を目の敵にしている竜を地中に封印するための力を放っているらしい。……チキがオーブを改良してくれたおかげでギムレーを封印する力も備わった」

「そうか、それでその盾の修復にこだわっていたわけか」

納得するアイクにカイルはあることを聞く。

「ところでアイク、よければ君の住んでいたテリウス大陸にある国について聞かせてくれないか」

「そうか。お前も戦いが終われば国王となる身か、いいだろう。傭兵の視点だから役に立つかわからないが」

「もちろんだ。君の視点から見た各国のことが知りたい」

「では——」

それからアイクはテリウス大陸に点在する各国について話した。

「……驚いたな。フェリアみたいに力で王を決めるラグズの国と、女性が王になる国か……」

アイクの国々の話はカイルにとって驚きの連続だった。

とりわけ代々女性が皇帝になることが通例だったベグニオン帝国と王家の血を引いていない平民の女性を女王にしたデイン王国の話は。

「ああ。クリミアは当初先王の弟が次期王になる予定だったんだが、王の弟は戦死していたと思われて王の娘さん、エリンシアが女王となった。先王の弟が生きていたとわかってても変わらなくな」

「ああ王族が女性しか生き残らなかったのならわかる。……アカネイア大陸ではそれでも王女の婿が王になるのがほとんどだがわずかに女性が王になったこともある。グラのシーマ女王とか。……すぐにグラの統治権をマルスに譲ってしまったが」

「そうか。驚いているのはベグニオンの事か。ベグニオンの皇帝は神使とも呼ばれて女神の声を聴ける女が帝位に就いていたからな」

「ああ。それに……」

「デインか……あつちもいろいろ事情があるからな。先王の息子だと思っていた奴は先王とは赤の他人だったと自ら告げて王族は断絶した。そこへ神使並みの能力を持つ「暁の巫女」に女王になってほしいって意見が殺到したんだ。貴族の中には不満な奴らもいるだろうが上手くやれていればいいが」

心配するアイクにカイルはあることを聞く。

「その女王たちに婿殿は？」

「皇帝以外には二人ともいるな……それがどうした？」

「その婿殿を王にしないのか？」

「いや。二人とも王にならなかつたな」

「なぜだ？　女王を立てた国では女王が子を身ごもつた時などは王配が女王の執務を代行することになり、結局女王と同等の能力が王配に求められる。それなら王女の婿を王にした方が都合がいいのでは？」

理に適っているカイルの意見にアイクはうなる。カイルも平民だったアイクに言うことではなかつたかなと思ひこの話を打ち切る別の話題を探っていた。

だがその前にアイクは彼なりの考えを口にした。

「うーむ、そうだな……ティンの女王になったミカヤを心配した後で言うのもなんだが王族の血を引いていないというのは貴族連中にとつては大きな問題なんだと思うぞ。特にサザとミカヤ……ティン女王夫妻は二人とも先王の血を引いていない。先王の血を引いていない王は貴族から軽視されるということもあるんじゃないか」

言われてみればそうだ。千年前アカネイアの前王朝の王女ニーナと結婚したハーディンも、二千年前ユグドラル大陸のグランベル王国の王女ディアドラと結婚したアルヴィスもそれぞれ皇帝になったが先王の血を引かないばかりに重臣に軽視された結果、

暴君となったり傀儡にされたりしたのではないか。その時のアカネイアとグランベルでは残酷な圧政が敷かれたと言う。

「……そうだな。そんなことも起こっていた。先王の血を引いている者が王になることがそれだけ重要なかもしれないな」

「そうかもしれない。俺には正解はわからないが……ただ一つ言えるのはお前の子供が女だったとしても落胆はしてやるな。男でも女でも誕生を喜んでやるのは王以前に人として当たり前なことだと思う」

「ああつー！ そうだな」

アイクの注意にカイルは大きくうなずいた。

ある座卓ではラグズとタグエルの代表が一堂に会してそれぞれについて話していた。ベルモットは暑苦しいとの事で外套を脱ぎいつもの姿だったが、この宴に集まっている者は彼らが獣に変身することとその強さを知っているのでベルモットが肌をさらしているもちよつかいを出そうと言う者はいない。

「へえそれじゃああんたたち「獣牙族」以外にもラグズってのはいるのかい」

ベルモットはよく通る声でそう言う。

「ああつ！ セリノスって森には鷹・鴉・鷺の「鳥翼族」が、ゴルドアって国には「竜鱗族」が、獸牙族にも俺たち獅子やオルンのような狼の他に猫や虎がいる」

獅子の民、ウーゼルがそう答える。

「へえ、でも人間……えつとその、ベオクつてのと仲直りしたのにどうして別の大陸に旅立ったんだい？」

コイが新たな疑問を投げかける。コイの疑問にもウーゼルが答える。

「仲直りしたとはいってもラグズもベオクも心の底まで変わるもんじゃない。奴隷扱いされてきたラグズには嫌な思いもあるしな。いつそベオクがいなくてもいいかもしれない地を求めて船を出したのさ。あるいはベオクがいてもわだかまりがないからラグズを受け入れてくれるところもあるかもしれないかも思ってたな。結局あの大陸じゃそうもいかなかったが」

「まったくあんたらの大陸もこっちの大陸の人間も耳と尾があるくらいで差別しやがって本当に器の小さい奴らだよ」

観賞用として監禁されていたベルモットは酒をあおりウーゼルに同調する。

「俺たちはそんな理由でアカネイア……じゃなかったここから東の大陸に来たんだが……オルンよ、お前さんの国ハタリはラグズもベオクもおやな……じゃない混血の子ともうまくやれていたじゃないか。新大陸に興味があるって気持ちはわかるが、後悔してるん



じやないのか？」

ウーゼルはオルンに水をむける。

「ウーゼルたちには話したはずだがな。忘れたか？ ハタリだつて争いがなかったわけじやない。大洪水以前は他の地と変わらずラグズとベオクが争つていたんだ。当然遺恨は残る。ラグズの親の力を奪つて生まれる混血への忌避感もな。そこに女王は砂漠の西に国を移そうと言うんだ。西のベオクや混血とのいさかいが起こるかもしれないから誰もが賛成してゐるわけじやない。この旅についてきた狼はみんな女王に反抗して袂を分かとうという奴らばかりだ。一度ベオクと揉めたからつてテリウスに帰つて女王に頭を下げる気はない」

オルンの主張を聞いてふとコイは疑問を出す。

「そうか。さつきまでタグエルとラグズは実は同じ種族だったんじやないかと思ってたけど。人間そっくりの子供が生まれて親の力が奪われるつて現象がラグズに起こるんならタグエルとは違うのかもしれないな。ラグズは力があふれていれば獣石がなくても化身でできるみたいだし」

「えっ？ タグエルは違うのか？ 獣石のことは置いといても俺もラグズとタグエルは同じ種族だと思つていたんだが」

ウーゼルは前のめりになつてコイに聞く。

「うん。大昔、妖狐やガルは人間との間に子供が生まれたことがあるんだけど、その子は親と全く同じ狐やガルとして生まれて来たんだって。兎の方はどうだよ?」

「私たちには人間と交わったって話はないね」

尋ねられたベルモットは首を振る。

「そうか。ではラグズとタグエルは異なる種族になったのかもしれないな。大本は同じかもしれないが長い年月の間に異なる進化を遂げたんだらう」

オルンがそう結論を出したところでベルモットはさっきのウーゼルの話を思い出し真意を尋ねた。

「ところでウーゼル。さっき東の大陸を見限ったような言い方をしたけどもしかしてまた別の場所へ旅立つ気かい?」

「おうよ。連合軍について来て東の大陸から移ってきた同胞と相談して決めた。あの大陸で共存は無理みたいだし、この大陸もお前ら狐が隠れ住むのでいっぱいいっぱいだしな。また長い船旅が続くぐらいですくみ上げるほど俺たちはヤワじゃない。……そこでだベルモット、コイお前たちも俺たちと一緒に来ないか?」

そこで思い切つてウーゼルは新たな旅にタグエルたちを誘つてみた。

「私たちが?」「ラグズたちと一緒に?」

酔いも忘れて二人は聞き返す。

「ああ。鳥翼族と竜麟族に比べてお前たちタグエルは生活様式など俺たちに違いはない。せいぜいベオクとの子供が同じ種族に生まれるか、ベオクに近い姿で生まれるかって違いだけだ。どうだ。俺たちとともにベオク……人間から隠れずとも暮らせる地を目指さないか？」

ウーゼルの誘いに二人は考え込む。十数えるほどの時間をかけて

「断るよ」

ベルモットの方から返事を出した。

「つれないな。ほんの少しの旅が嫌かい？」

ウーゼルは意地悪な笑みで聞いてくる。

「タグエルをヤワな人間と一緒にするな。……違うよ。人間の中には私を閉じ込めたり、仲間に暴力を振った奴みたくに嫌な奴らが多い。……でもカイルみたいに私たちを人と同じだと言って変わらせずに接してくれる奴らもいるんだ。私はあいつらみたいな人間が増えるかもしれないことに希望をかけてみたい」

「そうか。……コイ。おまえはどうだ？」

ベルモットに断られたウーゼルは今度はコイに聞いてみる。タグエル同士ベルモットと同じ答えが返ってくるだろうなと思ってダメもとだったのが。

「うーん……考えてみる」

「え？」

「ほう！」

ベルモットとオルンは意外そうな反応を見せる。

「お前さんは乗り気か。そのわけは？」

予想外の好感触にウーゼルは尋ねてくる。

「いやあソンシンというかラムの村人は今は結構好意的なんだけど。千年前までは妖狐なんてラムにいなかったわけでしょう。みんながみんなそうでもなくて、村を守ってくれる侍が連れて来たから仕方なくつてところもあるみたいで。時々居心地悪くなるんだよね」

あつけらかんという風に語るコイに

「そうか。気が向いたらともに来るといい。新たな同胞を俺たちは歓迎するぞ」

そう言つてオルンはコイの肩に手を置く。まんざらでもなさそうにコイは照れ笑いした。

宴はまだまだ続く。

## 決戦前夜2　フエリア・商人たち・ペレジア

「酒を楽しんでいるところすまないがいいか？」

「ん？」「なんだい？」

酒をかつ喰らっていたフエリアの2王アイネとザンザはソシン王リヨウヤに声をかけられた。

「ああ。あんたたちが東の大陸の北部に住んでいた部族の長だっていうのは本当か？」

「ああっ！　氷の部族の王アイネとは私の事だよ」

「砂の部族の長のザンザだ」

リヨウヤに聞かれてアイネとザンザは名乗りを上げる。

「そうか。ザンザと言ったな。不躰ですまないがあんたの属する砂の部族の名は元々は「風」ではないか？」

いきなりのリヨウヤの問いにザンザは首をひねる。

「悪い。マーモトードの砂漠で生きていくのに精いっぱい記録を残す風習がなかった。大昔のことなどわからん」

「そうか。では「炎の部族」に心当たりはないか？」

「炎……火の部族の事か？」

「炎ついたらあいつらしかいないだろう」

アイネとザンザは二人とも火の部族で間違いないと結論付ける。

「そいつらは来ていないのか？　今も東大陸の北部に住んでいるのか？」

食い下がるリヨウヤに二人はバツを悪くする。

「21年も前に滅んじまったよ。フレイムバレルって火山の噴火に飲みこまれてね」

「なんだとー！」

アイネの宣告にリヨウヤは愕然とする。

「おいおい。なんであんたが落ち込むんだ？　私たちはとくに国を作っている文明人とやらから見て野蛮な蛮族。それもヴァルム大陸に住んでるあんたが気に掛ける連中じゃないだろう」

思わず労わるアイネにリヨウヤは首を横に振る。

「いや、俺たちソンシンいや白夜王国の末裔は炎の部族に返しきれない恩義があるのだ。それに力を借りたということでは風や氷の部族にも借りがある」

「私たちはあんたらに何もしたことは無いぞ？　……そもそもヴァルム大陸なんぞ行つたのは今回が初めてだ」

それぞれの部族の末裔らしいザンザとアイネは自分たちは何もしたことは無いと戸

惑う。

「そうだな。あんたたちの世代は何も知らないかもしれないが。白夜はかつて暗夜王国と戦争していた時代に炎の部族に協力をしてもらっていた。そして次第に風、氷も白夜に味方してくれたんだ。……暗夜を背後から操る透魔王国の神祖竜にして偽王ハイドラを倒すまで」

「はあ？」

「そんな戦いに俺たちの先祖が？」

突然告げられた歴史に蛮族の二人は仰天する。

「ああ！ もっとも長い年月の間に白夜は衰退して故郷を手放し、暗夜に至っては盗賊に滅ぼされその盗賊に3つの部族は最北部へ追いやられたという。文明も持たないまま千年以上も過ごしてきたんだ。記録が残っていないのも無理はない」

「……とても信じられないね」

「だなあ。俺たちはつい最近までどこの国からも蛮族として排斥すべきだと追いやられていたんだぞ」

アイネとザンザは顔を見合わせて当惑する。

ザンザが追想する歴史を繰り返してきた二人にはとても信じられない。一国の王がそんなことをするとは思えないが自分たちを担いでから何か騙し取ろうとでもいうの

だろうか。

「……まあ信じてもらえるとは思っていないが白夜の末裔はあんたたちに感謝しているんだ。フェリアはバレンシア大陸との交易で東大陸の復興を担おうとしているらしいな。俺たちにも協力させてくれ。ユーリも今回の件でできたアカネイアへの借りを早く返したいだろう。奴にも協力させる。食料、薬、木石材何でも言ってくれ」

「まあそれは助かるけど」

ギムレーにはアカネイアこと東大陸を散々荒らされた。物資の提供や売買は助かる。

「ああ。ぜひあてにしてほしい。ところで…」

胸を張って頼ってほしいとまで言ったところでリヨウヤは話を変える。

「あんたたちは自分たちの部族が神祖竜の血を引いていたことも知らないのか？」

「いや……」

「まったく知らねえな」

アイネとザンザはそろってこのことにも首を横に振る。

「そうか。各部族は竜脈の力を解き放つ力こそ古の大戦の時点で失われていたがそれぞれの自然を操る力は残っていたと言う。心当たりもないか？」

「うーん」

「氷の部族……氷……竜……まさか」



ザンザは考え込むがアイネは一つ思い当たることがあった。

「竜だ！ 私たちの先祖は竜を従えるすべを自然に身に着けていたといつてたな」

「おう！ そうだ。「砂」は飛竜、「火」は火竜、「氷」は氷竜を家畜代わりをしていた」

ザンザもようやく得心が行く。

「やはりそうか。あんたらの先祖が竜を従えられたのは神祖竜の力がごくわずかでも残っていたからに違いない」

「なるほどね。あんたの話と私たちのごくわずかな伝承にようやくつながりが見えてきた感じだよ」

「そうだな。南の国々から忌み嫌われてきた俺たちの部族にそんな誇らしい活躍をした時代があつたなんてな。ようやく自分の生まれに自信が持てた気がするぜ」

三人は古代の歴史を共有してようやく意気投合した。アイネがグラスをリヨウヤに押し付ける。

「さあ飲みな。今日は数千年ぶりの再会を祝つて飲もうじゃないか」

「ああ！ ありがたくいただこう」

三人は酒がこぼれるほど盛大な乾杯を交わす。

「巫女様ー！ 神竜チキ様はいずこにー！」

「えっ……」

珍しくキツトがチキの側を離れている間にアンナがチキの下へ駆け寄る。

「チキは私ですけど……」

「あっこれはこれは。わたくしアンナというしがない商人でございますー」

アンナの迫力に戸惑うチキにアンナは名乗り出る。

「商人さん？ ええと私、自分ではお金は使えなくて、キツトが許さないと……ですから

売り込みなら他の人のところへ行つた方が」

「そんなことはいいのー！」

「ええ？」

何か押し売りされると思つて断ろうとするチキにアンナからそれはいいと言われる。

「私あなたの神々しさに当てられてバレンシア教に改宗しようかと迷つてるんですー」

「あ、はあ……それは商人さんがそうしたいと思うならそうすればいいんじゃないで

しょうか」

自分を神だと思つているわけでもなし、ましてや崇められたいとも思つてない。むしろ今ここで自分に向かつてお祈りするような真似だけはやめてほしい。恥ずかしい。

そんなわけでチキにとってはアンナがラーマン教に帰依し続けようがバレンシア教

に改宗しようがどうでもいいことだった。

「そんなわけでチキ様！　ぜひあなたのお名前をこの色紙にできるだけ大きく！　……  
できればなるべく多く！　旅先でバレンシア教を勧める際に一緒に配る予定ですから」  
「ええ？　そんなに書いたら手が疲れるよ」

背囊から何十枚も色紙を取り出すアンナにチキは嘆く。

「もう、やめなさいアンナ。チキちゃん困ってるでしょう」

やっと誰か助けが来てくれた。そう思ってチキが新たに現れた声の方を見ると。

「さあチキちゃん。女の子の手をペンで汚そうとする酷いお姉さんからは離れて私と前  
の方に行きましょう。そこで皆さんに神竜の巫女としてありがたいお話を聞かせてあ  
げましょう」

「えっ!?!」

新たに現れた女性はたちまちチキの手を引つ張ってチキを会場を見渡せるステージ  
へ連れて行くこうとする。

「こらーララベル！　チキちゃん様を横取りするんじゃない。……ありがたいお話  
か。その手もあつたわね」

その方が手つ取り早くかつ大きく儲けられたかもしれないとアンナは悔やむ。

（キッター、カイルー。どっちでもいいから助けに来てー！　マルスのお兄ちゃん！）

ただでさえ注目を集めているので声には出せなかったがチキはこの二人、あるいは死んだと思っていたマルスが奇跡を起こして助けに来てくれないかと心の中で助けを求めた。

結局戻ってきたキットにララベルはチキから引き離されてチキはありがたいお話をさせられるということは無かった。

(……? 何だろう。今誰かが僕の助けを呼んだような)

カイルはふと立ち止まり辺りを窺う。

「やあカイル殿。カーシャ君でも探しているのかな?」

そんなカイルにグラスを掲げてペレジアで未だ王位に就かず執政として国を仕切っているジェルドが声をかける。

「ジェルド殿、この度は我が軍が危ないところに駆けつけていただきありがとうございます。ごさいます。」

さつきまでの気がかりを忘れてカイルはジェルドに頭を下げる。ジェルドの指摘通りカーシャのことははずれでもないので答えずに置いておく。

「なんの。むしろもう少し早く来られなかったかと申し訳ないくらいだよ」

「いえ……正直に言うとかアカネイア大陸から救援が来るとは思いませんでした。フェリアとペレジアには何の利益もない戦いでしたから。アカネイアにしても僕を切り捨てて新しい国を建てればいいという観点では救援が来なくても不思議ではありませんでした」

カイルの言葉にジェルドは首を振る。

「いやいや利益はあるよ。今の情勢の中フェリアにもペレジアにもイストリアという貿易相手を失うわけにはいかない。アカネイアにしてもそうだ。王の血というものは君が考えているよりずっと大きい。唯一王族の血を引く君を放っておくわけにはいかないとワーレンの人々は考えたんだ。いい臣下に恵まれている。大切にしなさい」

「はい」

ジェルドの提言にカイルは力強くうなづく。

「ところでペレジアはいかがですか？ ……その、アリテイアからはその後のことは」

カイルはペレジアに加えてアリテイアに生き残りはいなかったかと聞く。

「うむ。少なからず生き残った者と仕事で他の地方に行つて難を逃れた者のことは聞いている。だがかなり少ないな。……それにアリテイア島は荒れていて住める状態じゃない。特に東のグラ島は森林がなくなつて砂漠状態だ」

「そうですね」

覚悟していたとはいえ第二の故郷の悲報にカイルは顔を伏せる。ジェルドはカイルの肩を叩いて励ます。

「気持ちにはわかる。マケドニアもかなり悲惨だったからな。無事だったグルニアに帰りたい気持ちがないと言えば嘘になるが一度統治者を名乗った以上マケドニアにもアリエイアにも責任を果たさんと。……アリエイアからの生き残りは我が国が責任を持つて衣食住と職を提供しよう」

「どうかよろしくお願いします」

誠実な姿勢を見せるジェルドにカイルは頭を下げる。

「ユミス王女とユミル王女はお元気ですか？ ユベル王子も」

「ああ、ユミスは王妃になる身として国民を励ましたり、公務に出たりよくやってくれている。ユベル王子も立派になられて、私が王位に就くまでには養子にとつてあの子を正当な王位継承者にするつもりだ。……ただユミルの方はな」

娘のことになってジェルドは顔を曇らせる。

「ユミル様は？ どこかお悪くされたんですか？」

思わぬ悲報にカイルは慌てて聞く。ジェルドは誤解をさせたと気づいて首を振った。

「ああいや、ユミルは元気だ。病気などしておらん。……ただな」

ジェルドは声を落とす。

「ただ？」

「この数か月習い事をサボって遊びまわっているようだ」

「ええ!？」

カイルは仰天する。前に会った時は最初は自分を亡国の王子だと見下していたところもあつたがすぐに態度を直した礼儀正しい姫君だと思っていた。ゆくゆくはユミスのような淑女になるとばかり。

「どうもジャンが悪い遊びを教えているようだ。頼りになるからと奴をつけていたが少々後悔している……そのせいで予定していた嫁ぎ先にユミルとの見合いを拒否されてしまった。他を探しているがどうしたものやら」

そこまで行つてジェルドは娘の将来を思つて途方に暮れうなだれる。

「……」

あの男か。国を正そうとしたユミスに心打たれて改心したと言っていたが性根は自分たちと敵対したときに感じた印象そのままだったらしい。

「その……良い縁をお祈りしております。」

自国のイシユタルス家のエルスを紹介しようかと言おうとしたが、ジェルドの言うところによるとユミルの荒れようは相当なものらしい。あの好青年を不良少女と結婚させていいものか戸惑う。イシユタルス家は財政的に圧迫している向きがあるとは

いえアカネイアの名門。関係をこじれさせればアカネイアの復興……いや新国家の建国に支障をきたす危険が大きい。自分が想像しているよりユミルがそこまで荒れていないことを願って、それが事実だったら話を持ち掛けよう。そう決めてカイルはジェルドと別れた。

宴はまだまだ続く。



## 決戦前夜3 ペレジア2・商人たち2・ワーレン

ヴァルム皇宮で宴が行われている中ヴァルム兵と各国の下級兵はヴァルム帝都市街を見回っていた。

100万以上の戦力差では考えにくいだが、ヴァルム帝国が形勢逆転を狙って油断している各国軍に攻撃を仕掛ける可能性は皆無ではないし、ギムレーと屍が襲ってくるかもしれないため少なくない兵が帝都中を見張っていた。

ペレジア王国の士官ジャンもその一人である。

「くそ、ジェルドの奴め！ 娘の非行が俺のせいだと言って宴に出さずに外の見張りなんかやらせやがって。……まあその通りなんだが」

ジャンの甘言に乗せられてユミルは習い事にほとんど出てこず彼女の怠惰ぶりは各国の貴族に知れ渡り、先日は婚約を結ぶための見合いを拒絶された。実質王の娘であるにもかかわらず。

これでユミルは予定より下級の家に嫁がなくてはならなくなるだろう。だがペレジア王家であるジェルドとユミスは妥協しようとしてもなかなか踏み切れない。婚約はまだまだ先。

その間にペレジア軍の重鎮となった自分がユミルとの関係を明らかにすれば娘の非行に憔悴しきつた今のジェルドはかなりの確率で折れる。

（もうすぐだ。もうすぐで俺は貴族になれる。一代限りの騎士ではない。王の娘婿そして十数年後は王の義従兄）

だから我慢しなくてはならない。宴に出される馳走も、退屈を紛らわすための娯館も。

戦争が終わっても帝都民のほとんどは他国の軍隊が駐留する帝都に戻らず北の街にとどまったままだが、兵士を相手にする店の主人は都に戻り商売に励んでいた。兵士の狼藉を防ぐため国が開かせている娯館もある。

ジャンも以前ならそういう店に好んで入り浸っていたのだが、最近ユミルの相手をしなくてはならない。そのユミルもヴァルムには連れてこられていないのだが……。

性欲を持って余すからと言ってここで任務を放棄して娯館に駆け込んだことがジェルドに知られれば、確実にユミルとの仲を認められない。

それにこの国の武力は気になる。

（戦争に負けて賠償金を払い内乱も警戒しなくてはならないヴァルムはすぐには戦争を起こせないだろう。……だがこれで大人しくするタマかねえ。……）

皇帝ファルスの敗因はカイルとの決闘で自身の剣の腕に見切りをつけヴァルム大陸

では弱点になる生命力をすり減らす魔法を使ったことと、妾腹で未だ健在な縁戚からの反乱を厭い北からの援軍の到着を待たず連合軍との戦いを急いだこと。

(魔法を使えないからこそ肉体を極限以上に鍛え、嫡子に生まれ縁戚からの反乱を気にしなくていい奴がヴァアルムの皇帝だったら……)

今回のような戦争で勝ったのは帝国かもしれない。

そして今以上に大陸と大陸が交流する時代が続けば渡航の経費を気にせず別の大陸を支配できるようになるかもしれない。

遅かれ早かれヴァアルム帝国が大陸を支配してなお欲を出せば隣の大陸を征服しようとするかもしれない。例えばアカネイア大陸とか。

(大陸を統一せんとする国に対抗するにはこちらも大陸を統一できるだけの力を持つしかない。しかしジェルドには大陸の統一はできない……しようもない。アカネイアの小僧にもそんな度胸はない……だが俺にはある。一国では飽き足らず他国を支配したいという野心も……それがアカネイア大陸を守るって口実にもなる)

そこでジェルドはかぶりを振る。

(バカか！ 貴族になるだけでも途方もない苦勞を重ねたのに王になるなんてどう転んでも無理だ。ヴァアルムの大陸統一も実現するとしても今のファルスじゃ無理だ)

ここはジェルドの信用を取り戻すため真面目に任務に励もう。その際にヴァアルムの

軍施設を見回るのは不自然ではないだろう。

ジャンは顔を引き締めて街の見回りを続ける。そんなジャンははた目には規律正しい騎士だった。

再び皇宮宴会場

会場の一角に商人たちが集まっていた。

「問題だわ」

「問題って何が？」

突然問題だとのたまうアンナにヴァルム帝国お抱えの商人が尋ねる。

「この場に武器を売買する商人がアンナしかいないのが問題だと彼女は言ってるのよ」

答えたのは道具の売買を専門とするララベル。

「そうよ。私は武器・道具・杖、節操ないけどなんでも取り扱っているわ。けれどララベルみたいには道具ばかりを専門にする商人を否定しているわけじゃないわ」

「じゃあ何が問題なんだ？」

再度聞いてくるヴァルム商人をアンナは指さす。

「あんたたちは何屋？ 何を取り扱っているの？」

商人たちは顔を見合わせる。そのうちの一人ドルマ商人が口を開いた。

「俺もいろいろ取り扱っているよ。カダインからバレンシア大陸にない魔法が使えようになる魔道書を仕入れている。杖で回復魔法を使えば生命力を失わないためそれも利益になるな」

イストリア商人も続く。

「俺はグルニアから仕入れているぜ。グルニア軍が新しく作った強い武器を仕入れている。……バレンシアには傷を癒してくれていつまで使っても壊れない指輪があるから傷薬とかは売れず、仕入れもやめたんだが」

「それよー」

アンナはイストリア商人に指を突きつける。

「あんたたちはみんな貿易商。武器屋でも道具屋でもない。それはなぜか？ ……ヴァアル……いやバレンシアって呼んでる人もいるのか、ええいどっちでもいいわ！ ヴァアル大陸では武器も道具も壊れないから、新たにそれらを買ひ揃える客もおらず、武器屋も道具屋もみんな店をたたんじやったせいなのよ」

アンナの話聞いてアルバレア商人が説明を始めた。彼は信心深いバレンシア教徒ミラ派でもある。

「この大陸では千年前まで大地母神ミラ様が大地に活力を与え、その力で人々は過度に

農耕に励まなくても多くの食料を得ることができた。特にミラ様が治めるソフィア王国では人々は貴族でなくても働かずに過ごすこともできたぐらいだ。ドーマが受け持っていたリゲル帝国も例に漏れない。ソフィアほど肥沃ではないが暮らしに困るほどじゃない。もつともドーマの意向で遊んでばかりはいられなかったらしいがね。けどどちらの国も過度に金を儲ける必要はない。だから戦に必要な武器も道具も半永久的に使えるものを理想としてとにかく壊れないように作ったのさ」

「……で物資を作った後は店をたたんでソフィアの商人は無職になって、リゲルの商人は別の仕事に就いたと？」

アンナの念押しに商人たちはうなずく。

「その結果新しい武器は作られず、ミラ様とやらいなくなつて物資を売りたくてもすでに壊れない物が氾濫して売れないだろうから平和になつたアカネイア大陸との貿易を行う商人ばかりになつたと？」

ララベルの出した結論にも彼らはうなずく。そんな商人たちにアンナは溜息を吐く。

「そんなんだからたつた5000人のアカネイア軍に圧倒されるのよ。彼らの武器は使えば傷つき、何度も戦闘を重ねれば当然壊れる。だから新しい物を買う。そして相手を少ない手数で倒せる強い武器が作られ、売れるようになる。……そうして武器も道具も進歩していくんだわ」

そこでララベルが説明を継いだ。

「今のヴァルムよりアカネイアの方が武器も道具も優れているのは大戦の結果を見れば一目瞭然ね。……帝国が善戦できたのはジーンという騎士さまさまよ。……あなたたち、もしアカネイアの国々がヴァルム大陸を侵略しようとしたらどうするつもり？」

「……」

商人たちは顔を見合わせ何も答えることが出来なかつた。

「まあ、今回の戦いでアカネイア製の強い武器も注目されるでしょうし、耐久性を重視したって限界がある。この大戦で一気に摩耗したはずよ」

耐久性重視の物資の時代は終わったとアンナは告げる。

「今度は性能を伸ばすためと言っただけは壊れる武器を作ることね。もちろんすぐ壊れる物じゃなく兵士たちが「あの時買った物がこんなに強いなら今ぐらいで壊れても仕方ないな」って思えるぐらいの強度でね」

ララベルが最後にそう忠告する。

「そうだな。強い武器を作るためなら皇帝も許してくれそうだな」

「すでに魔法は生命力を減らさない魔道書と杖が主流になってきているしな」

物資を売ろうとする努力が国を守ることにつながる。二人の商魂に感化されたヴァルム商人たちはこれからの戦の物資を売るための商売の在り方について話を交わした

した。

ララベルはふとアンナに尋ねる。

「いいの？ 彼らに商売のやり方を教授なんかしちゃって。あなたと私でヴァルムの流通を牛耳る好機だったでしょうに」

アンナは手を振って笑う。

「流通を牛耳るって、そんなことしたって妬まれて敵を作るだけでしょように、それにさっきまでのあいっつらみたいなのは腑抜けばかりで好敵手があんただけってのもつまらないわ。戦にも商売にも張り合いつてもものがないと」

「あなたそこらの兵士なら片手でひねられるほど強くなかったかしら？ 下手すればユルゲン王子やジーンにも勝てるくらい」

アンナの強さを噂で聞いているララベルは頬に手を当てる仕草で呆れる。

「そうね。妬んだ輩を用心しなくちゃいけないのはあなたの方だったわね」

「うふふ大丈夫よ。私にはとても強い用心棒がいるもの。……用心棒と言えばあの子もこの旅に同行すればこの宴のご馳走にありつけたでしょうに……それはそれで皇帝に恨まれそうね」

「??」

ララベルの言う用心棒とはアイクの事だと名前を出されなくても腐れ縁になってき



たアンナにはわかる。しかし宴に連れてきたら皇帝の逆恨みを買いそうな元用心棒については皆目見当がつかなかった。

会場を回るカイルはある二人の姿を見つけた。

「マリアンヌ殿！ エルス殿！ 君たちも来てくれたのか。」

「あら！ カイル王子」

「これは。よくぞご無事で」

ワーレンから来たマリアンヌとエルスのもとへカイルは歩み寄る。

「ワーレンの住民をまとめてくれていることといい君たちには頭が上がらない。本当にありがとう！」

カイルは二人に礼を述べる。

「フフ、礼には及びませんわ。ギムレーを倒したらカイル様にはすぐに即位して頂いて過労死寸前まで政務に励んでもらいますから。もちろん本当に過労死しないように抑えますから楽には死なせませんわよ」

「……あはは、相変わらさずきついね」

前以上のマリアンヌの毒舌にカイルは引きつった笑みを浮かべる。

「マリイ、そのくらいにしておきなよ。カイル様へのその言葉は法律によると不敬罪に当たるんじゃないかい」

見かねてエルスがマリアンヌをたしなめる。

「あらいけない。申し訳ありませんわね。カイル様っていじめがいがあって。この美酒に免じてどうかお許しを」

マリアンヌはカイルにグラスを差し出す。

「いやいや！ 今のアカネイアでは20歳まで酒は飲んではいけないから！」

「あら。カイル様に未成年飲酒の罪を負わせることで弱みを握って先ほどの不敬を黙認してもらおうと思いましたが」

「そんなことしなくてもあれぐらいで君を投獄してワーレンの法務から離れてもらっては困る。君の毒舌にも慣れたしね」

そこでカイルはふと二人にある相談をする。

「ねえマリアンヌ、エルスにも。ちよつと相談があるんだが」

「あら？」「何でしょう？」

雑談にしては真剣すぎるカイルの表情に二人は少し戸惑う。

「……………したいって考えてるんだ」

「あら、いいことではありませんの。めざましい働きを見せた臣下にはそれに見合った

褒美を与えねば人は離れていきますわよ」

「カイル様らしいですね」

カイルの提案に二人は色よい返事をする。だがすぐにマリアンヌは表情を険しくする。

「けれどあの子には褒美が大きすぎますわ、あの子の今回の活躍は素晴らしいですがかなり引き立てても子爵ぐらいでしょうね」

「うーんそれだと厳しいかな？」

「ええ。それ以上押し上げて何を望んでいるのかは聞きませんがアカネイアでは異例中の異例でしょうね。そうでなければドルーア戦争当時の王女アルテミスがアンリと引き離される「アルテミスの定め」なんてなかったでしょうね」

カイルの思惑がわかってマリアンヌは首を振る。

「そうか。ではそれはいったん置いておいて次の相談なんだけど……」

カイルは次の相談を声を潜めて打ち明ける。

「……………つて考えてるんだ」

「はあ？ あなた正気ですの！」

「まさか！ ……」

あまりの内容にマリアンヌは立ち上がって叫び、エルスはグラスを落とすし、ワインを

こぼす。会場内の注目がカイルたちを集まる。

「おっと……」

「あつ！ ごめん。僕のせいだ。僕たちは待つてるからエルスは着替えてくるといい」

カイルは自分が突拍子もないことを言ったせいだと謝り、エルスに客室へ行くよう勧める。しかしエルスは首を激しく横に振った。

「いえいえ、カイル様のせいではありません。それに今は着替えよりカイル様の話になりません」

着替えを後延ばしにするエルスにマリアンヌは何か言いたげな顔をしたが置いておく。

誰かが気を利かせたのかステージに楽隊が現れて演奏を奏で、衆目の興味がカイルたちから楽隊に移ったところでマリアンヌは切り出す。

「……これは、カイル様は相当お疲れのようですね。さっきの話は取り消します。明日からのギムレー戦を延ばすわけにはいきませんが、それが終わったらしばらくカイル様はお休みなさいな。明日にでも王が必要という状態でもありませんし」

珍しくカイルを気遣うそぶりを見せるマリアンヌにカイルは慌てて言う。

「いやいや至って真剣に考えたうえでのことだよ」

「それは1600年続いたアカネイア王国の歴史に幕を引くと言う意味ですよ」

エルスも真剣にカイルに念を押し

「ああ。いけないことかもしれないが今だからこそそうしなければいけない気がする」

「まさかそれもカイル様の望みのためとは言わないでしょうね？」

マリアンヌはきつく尋ねる。

「それは違う！ ある歴史の真実を知った時から考えていたことだ」

マリアンヌの推察をカイルは強く否定する。

「その真実は今僕たちに話していただくことは？」

「ごめん。それはできない。それをむやみに言いふらせば本当に僕は正気を疑われてし

まう」

エルスの要求にカイルは首を横に振って拒絶する。

「……まあどのみちギムレーを倒さなければどちらもかありませんわ。だから明日から

は頑張りなさいな」

「それはもちろん！ 全身全霊を持って戦うよ」

カイルは胸を叩く。そんなカイルにマリアンヌはぼそりと付け加えた。

「まあでも……それが実現すればカイル様の望みもかなうかもしれないせんわ」

「え？ ……それはどういう」

意味深なマリアンヌの言葉にカイルは詰め寄ろうとするがエルスが止めた。

「まあまあ王子、マリイ飲みすぎだよ。そろそろ酒はやめて水でも飲むといい」

「ええ……あんな話を聞かされて酔いも冷めましたしエルス様のお言葉に甘えますわ」

そこでカイルは自分を押しとどめるエルスに最初から感じていた違和感の正体に気付いた。

「そう言えばエルス。君の服、前に会った時の物とは違うね。普通の服飾店で見かけるものに似ている」

エルスはギクリと少し下がってカイルから距離を取る。

カイルは王族ながら服や食事にこだわりのある方ではないが王宮で暮らしていた以上それなりに贅の尽くした物に囲まれていた。だがパレスが崩壊し旅に出るからは服や食事を選び好みしている場合でなくむしろ豪商や他の国の貴族よりもすぼらしかった。だからエルスが今着ている服が以前着ていた貴族御用達のデザイナーによる特注品ではなく、平民が来ている物を加工した服だと気付いた。

「えつと……それは……まあ今は過度に贅沢している場合ではないと思ひまして」

エルスはしどももどろに言い訳する。

「そうだったのか！ そうだな。王侯貴族だからって贅沢しなければいけないと言うわけじゃない。平和になってもその心がけを忘れないようにしないと」

「ははは……」

カイルはエルスの言い分を疑わず彼の肩を叩き立派な心構えだと称える。

「……」

そんな二人を見ながらマリアンヌは水の入ったグラスを傾ける。

それからカイルが戻った後マリアンヌはエルスに聞いてくる。

「……それで新しいお屋敷の用途は立ちましたの？」

「……うん。前よりはかなり小さいけどね」

ギムレーがアカネイア大陸をプレスで攻撃してイシユタルス家も大きな損害を受けた。

だが名門として見栄を張らねばならず友人や臣下には気前の良さを見せた。魔道軍の功績により与えられる報酬もすぐに消えるほどの出費を重ねて

そうして資金に困り豪商から借金をし、先日とうとうイシユタルス家が所有していた屋敷も借金のかたに手放した。それでもいくらか借金は残っている。

服を加工するにも金はかかり代わりの服を用意する余裕もなかった。先程カイルの着替えの勧めを断ったのもそのせいだ。

「まあ同じ名門貴族としてあなたの事情は分かりますわ。ですから債務の整理の相談には乗ります。いつでも声をかけなさい」

「うん。その時はよろしくお願いするよ」

イシユタルス家の問題に関してはギムレーを倒しても解決しそうにない。宴の中この席だけは暗い雰囲気に含まれほどなく二人は宿に引き上げることにした。

宴はまだまだ続く。



## 決戦前夜4 魔道士たち・アンリ

アイクと別れたセネリオはテリウス大陸の魔道士として二人の女性に呼ばれた。

二人とも魔道士でそれぞれアカネイアとイストリアの魔道士だ。

「バレンシア大陸の魔法は魔道書を介する必要がない。でもその代わりに一時的には言え生命力を奪われる。反動で死ぬことも多い。だからバレンシアでは魔法は献身的なシスターが使う回復以外廃れ、ヴァルムとの戦いに備えてアカネイア大陸から魔導書と杖を輸入するようになった。というのが今のバレンシアの魔法事情ね。バレンシアでしか使えない魔法もあるし、アカネイア兵相手だと魔法が使えないと油断させることもできるからってファルス様は生命力をなげうって魔法を使うけど」

緑色の髪をたなびかせバレンシア魔法について語っているのはイストリアから来た魔道士、ガール。

「……使える回数に制限があっても魔道書や杖を使う方が安全というわけですね。宮廷魔道士がユリナ王妃から聞いた話ではユグドラル大陸でも魔道書と杖を使うとのこと」

赤髪と一緒に頭を揺り動かし相槌を打っているのはアカネイアから来た眼鏡をかけた魔道士、サリエル。

残ったセネリオが彼女たちの言葉を継ぐ。

「テリウス大陸でも魔道書と杖が使われています。……つまり魔法の媒介はこれらもとても合理的……ではなかったんですよね」

そう言ってセネリオは肩をすくめる。

「ラーズ教団は書も杖も使っていませんでした。オーブでしたか」

サリエルは新たな媒介に感嘆している。

「そうね。オーブなら書物みたいに燃え尽きたり破かれる危険もないし、杖は硬さなら同じようなものだけど持ち歩くのに不便ね。でもオーブはどちらの短所も軽減できている」

魔道書や杖よりオーブの方が媒介として携帯できて耐久性にも優れている。ガールも同意見のようだ。

「そしてこのオーブは錬金術という技術で作られている。ラズベリア大陸……ユグドラルほどではないにせよアカネイアより高度な文明を持っているのは間違いないようですね」

サリエルは畏敬の念をこめてラズベリアの名を口にする。

「行きたいという顔ですね。ですがラーズ教団の出身地でもありません。そこには「本物のラーズ教団」がいる。先々代の教皇と袂を分かったとはいえ無害な連中だと思うのは

禁物です」

ラズベリアへの好奇心に支配されつつあるサリエルをセネリオが諫める。

「わかつていますよセネリオさん。捕虜から聞いただけでは大陸の大きさも正確な場所もわかりませんしね。方角さえ彼らの嘘や勘違いでそれらしい大地も見つけ出せず遭難して行方不明なんて御免です。私にはまだまだ解き明かしたいことが星の数ほどありますので」

サリエルは首を振ってすでに諦めたところぼす。

「へえあんた学者だったの。まあでも頭脳労働の魔道士ってそういうの多いわよね。司祭とかは盲目的だし」

ガールは身を乗り出す。

「学者などと恐れ多い。中等教育から先は独学です。ただほとんどの人が気に留めないことに興味がわいてくるたちなだけです。……例えば太陽や月は浮いたままなのに、なぜこのグラスなど手から離れた途端に落下してしまうのかとか……鳥などに関してはこの翼が関係あるのだと確信していますか」

「……はあ……」

ガールとセネリオは呆然とする。そんなこと太陽などが浮くようにできているからとしか考えたことがなかった。

「それで次の興味が錬金術ですか」

若干早く戸惑いから立ち直ったセネリオは尋ねた。

「ええ、何かと何かを組み合わせて新しい何かを作る。そういったものは薬学や色の組み合わせなどありますが魔道具まで作れるとは、興味を持つなどという方が無理です」  
「ふむ……しかしそれだけですか？ オーブは媒介としては書などより効率的で僕たちもそれを作るすがあれば便利になると思いますが、海を渡る危険を冒してまで習得したいとは思いません」

「だよねえ。サリエルの熱意はそれとは別にあるっぽいつていうか」

得体のしれない異界から伝わった技術に執着するサリエルの様子にガールとセネリオは怪訝に思う。

「……ふむ、そうですね。あなたたちならいいでしょう。……これはアカネイア大陸の学者の中でもごく一部で議論されていることなのですが……あの大陸では昔錬金術が行われていたそうなんです」

「「ええっ？」」

サリエルが唱えた仮説にガールとセネリオは仰天する。

「それは……そのアカネイアの錬金術がラズベリアに伝わってオーブや秘薬を作る技術になったと」

セネリオの推測にサリエルは首を振る。

「いいえ。錬金術が実在しても我々の知ったラズベリアの錬金術よりはかなり原始的です。錬金術が行われていたのはテーベという古代に存在していた国で、大陸内でもあまり版図を広げる前に滅びたらしくかの国が存在した痕跡はあまりに少ない。向こうでも同じ技術が作られてそれが発展した可能性の方が大きいですね。」

「アカネイアでも錬金術があつたつて事でしょ。なら頑張つて復活させたら?」  
ガールの言葉にサリエルは首を横に振る。

「いえおそらく不可能でしょう。テーベがあつたとされる場所は砂漠に埋もれていて残っているのは北西の塔だけです。その塔もガーネフという魔道士に荒らされました。ただ気になることがあります:セネリオさん。教団はテーベの地下遺跡からギムレーを解き放つたのですよね?」

「ええ、捕虜はそう言っていましたね。確証はありませんが」  
サリエルの問いにセネリオはうなずく。

「そのテーベでは錬金術で生物を創ろうとしていたとしたら? 実際には生物としてあまりに粹外な存在を知っています」

「……ギムレーですか?」

セネリオの回答にサリエルはうなずく。

「あの竜は飛竜・火竜・氷竜・魔竜そして伝承に聞く地竜、どの竜にも当てはまりません。暗黒竜でもあそこまで巨大ではないでしょう。…そもそもあの竜が自然に生まれ出たものなら両親となる竜のつがいもいるはずですよ。その2体の竜は死んでいるのでしょうか？　だとしたら死骸はどこにあるのでしょうか？　あれば知らない人などいなくらいの名所になるはずですが。それにギムレーが存在する以上そんな竜は他にもいるはずですよ。暗黒竜さえ地竜が変態したものに過ぎないのですから」

「いやあの……暗黒竜って私全然知らないんだけど」

話が進むにつれ思わずバレンシアではほとんど知られていない知識を前提に話すサリエルにガールは引いていた。

一方セネリオも地竜だのさつぱりだが話の一部にはうなずける部分もあった。

「確かに自然に進化し生まれた竜にしてはあの竜に同種が全くいないと言うのは気になりますね……サリエルさん。あなたはギムレーがテーベの錬金術で造られたものかもしれないと？」

セネリオの推察を聞いてから、熱が冷めたのか言い出した本人であるサリエルもこの仮説に自信がないようで気まずそうな表情をしている。

「まあ……そういう考えもできなくはないと思います……突拍子なさすぎですよ。」「

そこまで言ってサリエルはうつむいた。

「うーん私は竜なんて飛竜さえ見たことないけど」

「仮説としてありではないですか。確かにギムレーの親竜の姿がどこにもいないのは引っかけますし。現在ギムレーの正体につながるような話は他にありません」

自分の話を否定しない二人の姿にサリエルは顔を上げる。

「馬鹿にしないんですか？ ……実は私はよく周りから当たり前のことに変に思うおかしな奴とか荒唐無稽で突拍子もないことを言い出すとかあまり人からよく思われていませんので」

「いやまあ呆気にとられはしたけどサリエルみたいな奴が私たちが知らなかった法則を解明したり、新しい物を作ったりするんじゃない」

「少なくとも何も考えていないくせに意味なく他人をバカにするような人間よりははるかに好感が持てるのではないかと」

「ガールさん……セネリオさん……」

自分の考えを受け入れる二人の言葉を聞いてサリエルは顔を伏せる。隠しているのは涙目だろうか照れ笑いだろうか？

「！ ……あの！」

「ん?」

突然少女に呼ばれたアイクは振り向く。

「……………ん?」

だが視界には少女らしき人物はいない——と思つたら

「あの!」

「……………おつと(っ)か」

少し視線を下げると緑髪の少女がいた。周りにいる人物の中には密かに少女に祈りを捧げる者がいるため彼女が巷で聞く神竜の巫女なのだろう。

「俺に用か? それとも食いもんでも取つてほしいのか?」

「あつ、いえ」

アイクを見てチキは考えこむ。

（うーん……………この人もものすごく強そうだけどあの人はこんなにムキムキしてなかったし髪も長かったし、よく見たら同じなのは髪が青いだけかな）

「ごめんなさい。ちよつと人違いしちやつて、もう生きてるはずなのに」

「そうか。俺が誰かと間違われるなんて滅多にないんだが……………ああ気を悪くしたわけじゃないぞ。体格だけなら親父と間違える奴も出てくるんだろうが、俺は髪の色だけは母親譲りでな。誰かと間違えられたことなんてなかったから珍しいことに驚いただけ



だ」

アイクは手を振って気にしてないと伝える。

「それならよかったです。……失礼しました。私はチキつて言います」

「アイクだ。イストリアに雇われて傭兵をしている」

二人が自己紹介しているとそこへ

「珍しい組み合わせだね。アイクとチキか」

会場を回っていたカイルがやってきた。

「ようカイル！ また会ったな」

「あつ！ カイルちようにどいいところに」

二人は新たに加わったカイルを迎える。

「んっ何だいチキ？ ちようにどいいって……」

「カイルのご先祖様にものごく強い人って知らない？ たぶんおにい……マルスより前

のご先祖様で……あとマルスよりアイクの方に似てると思うんだけど」

「え？ いきなりだね。どうしてまた……もしかしてその人とチキはあったことがある

のかな？」

「うん！」

カイルの推測にチキはうなづく。だがチキを人間だと思っているアイクはチキとカ

イルの先祖が知り合いだといっても訳が分からない。

「おいカイル、お前は何を言っているんだ。お前の親父さんや爺さんのような近い先祖ならわかるが話を聞く限り結構遠い祖先のことを言っているように聞こえる。この子と知り合いのはずないだろう」

「ああ彼女は——」

カイルはアイクにチキが数千年生きる竜で自身の遠い先祖たちに会ったことがあるらしいことを話す。

カイルの予想に反してアイクはあっさり納得した。

「ほお、この大陸にもいるもんだな」

「えっ？」

アイクの反応にカイルとチキが首を傾げる。

「俺の住んでたテリウス大陸にも何百年も何千年も生きる奴がいる。800年くらい生きてる奴なら二人知っている。一人は死んじまったがもう一人は職を引退して故郷に帰ったが今も元気だ」

「やっぱリラグズなのか？」

カイルの問いにアイクはうなずく。

「ああ！片方は竜鱗族。竜に変身できるところはチキと同じだ。ベースは人間の形態

なんだが」

死んだほうが竜鱗族の方だとまでは口にしなかった。

「テリウスでも人間より長く生きる種族はいるものだな。……それでチキ、その人とはいつ、どこで会ったんだい？」

カイルは話を戻し先祖の中から対象を絞ろうとチキに会った場所を聞く。

「うーん……いつだったかはマルスと会った時より前としかわからないな……場所は不本意ながら覚えてるよ。氷竜神殿・バヌトウっていうおじいさま代わりだった人に連れ出されるまで私はそこから出られなかったから」

「！……」

回答に混じる穏やかでない過去にカイルとアイクは目をみはる。だが今のチキはノーヴァのシスターを同行させる条件が付いているのはいえ比較的自由に外出できる。今となっては安易に触れていい話とは思えずカイルはチキが探している目的の人物について考える。

「氷竜神殿で会ったのか。……だとしたらもしかして「アンリ」かな？ 一人で竜や蛮族が巢食う過酷な砂漠、火山、氷山を踏破したっていうアリティア王国の建国者だよ。言われてみれば一人であの過酷な道を制覇しそうところはアイクに似ているかもしれないな」

氷竜神殿はアカネイア最北部にある最果ての地にある遺跡だ。そこへたどり着くにはマーモトード砂漠、フレイムバレルを通りそして極寒の氷山を登らねばならない。

凄腕の戦士でも生きて帰れるかわからない。アリティア王家でそんな道を行ったのはアンリとマルスの二人だけだった。

ただしマルスは歴戦の勇士を引き連れ彼らの助けを借りて進んだため、一人で登ったのはアンリただ一人だ。実力はアイクより上をいくだろう。

「ほう！　話に聞いただけでも強そうだな」

「へえ。アンリってマルスのお兄さん？　それともお父さんかな？」

目を輝かせるアイクとは裏腹にチキは何でもない風を装って尋ねる。

「いいやマルスよりずっと前の……いや僕とマルスに比べたらかなり近いかな。百年位前だ」

アイクは肩をすくめ手合わせできなくて残念だどつぶやいたが。

「え？　…そんな…」

チキにはかなりの衝撃だったらしい。目には涙を浮かべている。

チキの反応はアイクにとってもカイルにとっても予想外だった。てつきりマルス以外の王族に興味があるのだとばかり。

「おいおい。あんたの方からカイルのご先祖様っていうくらいだからとつくに死んでる

くらいわかつてることだろう」

アイクは駆け寄ってチキをなだめる。

「……ぐす、そうだね。頭ではもうあの人はいないんだろうなって思っても感情を抑えることはできないみたい。マルスと近い親戚かと思ってたし……そうかあれから百年経ってお兄ちゃんと会ってたのか」

チキは涙を拭いてカイルたちに向き直り言う。

「……カイル、アイク。あなたたちは長生きしてね。私の背が伸びるくらいまでは」

「あはは！ 頑張るよ」

「ああ！ そうやすやすと逝くつもりはない」

冗談半分のように装ったチキの心からの頼みをカイルとアイクは彼らなりに受け止めた。

宴はもう少し続く。

ガール クラス：魔道士

「外伝」のボーイとメイの子孫。未熟だがそれゆえに固定観念にとらわれず一般常識から外れた考えでも受け入れられる器を持つ。

サリエル クラス：賢者

「覚醒」のミリエルの先祖。アカネイア王国の魔道士兼学者見習い。人々が気に留めないことまで疑問を持ち探求しようとする。テーベ同様の錬金術を違う形で発展させたラズベリア大陸に興味を持つが、手掛かりがラズ教団の捕虜しかいないのでかなわないだろうと諦めている。

## 決戦前夜5 ノーヴァ・竜族

「……どうだろうキット殿、もう巫女様もしっかりしているし、ノーヴァを離れアルバレアにあるヴィオール領の教会で仕えないか？ 君ならゆくゆくはアルバレア王都の聖堂司教に就けるように手を回してもいい」

ヴィオールはキットを捕まえて彼女を故郷の宗教施設に勧誘していた。

司祭には不得手のはずの体技や暗器を使い、自らの手を汚して主あるいは仲間を守るキットの姿にヴィオールは感銘を受けたのだ。

「お断りさせていただきませう。ああ見えて巫女様は手のかかるところもありますので……それに巫女様のような童の化身は年を重ねるのが遅いのです。私がシスターになる前から今の姿のままです……ですので私の子が後を継げるまでは巫女様の側にいたいと思います」

一礼して誘いを断るキットだがチキは不満げに口を挟む。

「むう、キットつてば。キットがいなくても身の回りのことくらいできるよ。昔は私の方がキットをお世話してあげたくらいなんだから。そろそろ私のことは気にせず公爵さんのところへ行つたらいいじゃない」

幼少時の話を持ち出すチキにキットは慌てて答える。

「そ、そういうわけにはいきません！ 私が巫女様のお手を煩わせたのは言葉通り右も左もわからない子供だった時の話です。それにその頃から巫女様は私が起こしに来るまで起きてこないじゃないですか」

「ほう！ キット殿にもそんな幼少の頃が…」

「そうそうキットのお母さん、チエルシーが私をノーヴァに連れて来てからすぐにキットと引き合わせてくれて、それから一緒に遊んだり姉妹のように育ったのに、キットがシスターの修行を始めてから巫女様だのチキ様だの堅苦しい呼び方ばかりするようになって、チキお姉ちゃんも悲しいです」

チキは過去を振り返りため息をつく。

「む、昔は礼節をわきまえていませんでしたから、その呼称は忘れてくださいー！」

喧嘩を始める彼女たちの片割れにヴィオールは最後にもう一度だけ尋ねる。

「それで…：巫女様は君がヴィオール領に行くのに賛成のようだが、君はそれでも巫女様のもとから離れたくないのか？」

ヴィオールの確認にキットは強く首を縦に振る。

「はいっ！ 私に二人以上の子供が出来てその子が成長したときに子の方に声をかけてください」



「もう……大丈夫なのに……もしかしてキツト、そんなにお姉ちゃんから離れたくない？」

すねた直後に一転チキは意地悪気な笑みを浮かべてキツトをからかう。

「なっ？」

「そっかそっか。キツトがお姉ちゃん離れできるまで一緒にいようねー」

「ち、違います。あなたのそういう子供っぽいところが直るまで目を離せないんです。

……こら！ 腕を伸ばしても頭を撫でさせたりしませんよ」

そうやって喧嘩をしているチキとキツトの様子はまぎれもなく旧来の友人そのままだった。——キツトが友人の妹とじやれているように見えている者の方が多いが——  
ヴィオールはそれを見届けると他国の貴族に呼ばれ席を立つていく。

彼と入れ替わりに。

「あら、相変わらず仲がいいですね」

「あなたは！」

キツトが新たに現れた女司祭に気付き喧嘩を止める。

「！……」

チキもティーナを見るがジト目である。

「初めまして神竜の巫女様、シスターキツト。ヴァルム帝都聖堂に出仕していた司教

ティーナと申します」

「これは……カーシャ殿を助けた時は無理を言っただけで申し訳ありません。結局ティーナ様には以前と変わらぬ待遇でノーヴァに戻って頂く形になってしまっただけで、私が教皇様に直訴できる立場だったらティーナ様の位階を一つでも上げるようお願いしましたのに」

カーシャの救出が始まってからティーナはノーヴァ教国の大聖堂に帰国することになった。

神竜であるチェイニーに協力したという功績を持ちながらヴァルム帝国に配慮して大司教への叙階を受けない形で。

「いえいえ……あの美しいチェイニー様に姿をお貸しできただけでも光栄の極みというものですよ」

キットの謝罪にティーナは手を振って返す。

「……？」

一部余計な修飾語がついているが？

「初めまして……じゃないでしょ。チェイニー！」

チキの言葉にキットはハツとする。そこでティーナに変身していたチェイニーは姿と声を戻す。

「ははは……しばらく見ない間に勘が鋭くなったなチキ。女の勘ってやつかい？」

ザワザワ！

会場内は突然姿を変えた人物に注目が集まる。

「はい、どーもー。今宵の余興はお楽しみいただけましたでしょうか？」

観衆に向かってチエイニーはこれは手品だと言って一通りの人物に変身し拍手を受ける。どうやらみんな芸の一種ということで納得したらしく、何回か変身を見たら飽きて観衆はだんだんチエイニーから視線を外し歓談に戻っていく。

もちろんチエイニーの変身能力を見たことのある者も十数人はいるが、彼らもチエイニーの正体を告げ口する気はないようだ。彼が神竜というのはでたらめでまだ何か種があると思っている者も多い。

キツトは呆れてチエイニーに聞いたです。

「……では本物のティーナ様は？」

「ノーヴァだろう？ 皇帝を騙してすぐにヴァルムに来る肝を持つてる奴なんてそうそういないぜ」

頭を抱えるキツトにチエイニーは悪びれず手を頭の後ろに組んでしてやったりの笑みを浮かべる。

「とりあえずありがとうチエイニー。カーシャを助けてくれて。カーシャも私にとって大切なお友達だから」

チエイニーにチキが礼を言う。

「なあに。あの子がさらわれるのを見てから彼女を助けるのに適任なのは俺だと思っただけからな。……変身する対象も美人の司祭だし文句もない。……リーベリアって大陸に行ったナルサスなんて人質を助けるためにオツサンに変身してたんだぞ。あれには同情する」

「……？」

初めて聞く名前にキットとチキは首をかしげる。

キットはもちろんチキも生まれてすぐ眠っていたため異大陸へ旅立ったナルサスの事を知らない。

「それよりお前が西の大陸に移住するなんてな。メデイウスを倒した後お前がパレスに住むって聞いても俺もガトーもあそこにはそう長くはいられないって予想がついていた。案の定すぐに隠れ里に引っ越す羽目になったってどこまでは知っていたんだが……ついこの前別の里に住んでいた仲間聞いて驚いたぜ。ユグドラルの兵が里を襲ってそいつらを撃退してもチキだけ別の里に行かず西大陸の人間について行っちゃまったってな」

「うん……あの人たちの狙いは私みたいだから、私がみんなとついていくことでこれ以上みんなを危険な目に遭わせたくないし」

「チキ様を連れだしたのは私の母です。神を信仰する人にとってバレンシアにはミラ様に代わる神が必要でした。また母はあの状況ではチキ様をノーヴァに連れていくことがチキ様にとつても他の竜の方々にとつても最善だと判断していたようです。……ですがバレンシアの事情でチキ様を故郷から引き離れたのは変わりません。不詳の母に代わって改めてお詫びいたします」

そこまで言つてキツトはチキとチエイニーに深く頭を下げる。

「それはいいよ。私もみんなとはいられないつて思つても一人だけでどうすればいいのかわからなかつたし、チエルシーのおかげで住むところにも食べる物にも困らずに済むし」

「チキがいつつて言つてるのに俺が文句を言うことでもねえな……それにこの西大陸はナーガにとつても縁のある場所だし」

チエイニーの言葉にチキとキツトは疑問を覚える。

「数千年前にドーマとミラがここに移り住んだんでしよう？　そういう意味なら竜族とも縁のある場所だけど」

「それだけじゃない。……それよりはるか昔ナーガはこの大陸で育つたんだ」

「ええ!?!」

チエイニーが明かす事実にはチキは仰天する。

「この大陸でナーガたち竜族の祖先が生まれたのか……それとも事情があつてナーガだけこの大陸で育つたのか……それ以上のことをナーガは何一つ誰にも言わなかった。……ナーガがこの大陸で育つた。わかつているのはそれだけだ」

「……」

チキもキツトも何一つ言えない。

確かに疑問だらけだ。

ナーガがこの大陸で過ごしていた時代に人間はいたのだろうか？

いたと知っていたらなぜドーマとミラを他の大陸へ追放したのだろうか？

人間に干渉しようと主張した彼らがこの大陸に流れ着いたら西大陸の人間を彼らの思い通りに作り変えようとするとかわかつていただろうに。

だがそれらの疑問をチェイニーに聞いても無駄だ。彼も知らないに違いない。

「ただこの大陸にあるナーガが育つた場所に奴の力が満ちているのは確かだ。……その地ならチキの神竜としての力を一部取り戻せるかもしれねえな」

「えっ！ 本当？」

思いがけない朗報にチキは身を乗り出す。

「おおっと、今は無理だ。今のその地には港つてもものが作られている。港を破壊してでも力を取り戻したいなら話は別だが」

「なんだ……」

期待を裏切られてチキは沈む。

世界を救うためとはいえ町や港一つ破壊していいはずがない。そんなことをしなくても今のファルシオンにはギムレーを封印する力があるし、神竜の力でもギムレーを完全に滅ぼす力はない。当のナーガがギムレーを滅ぼす方法がわからないと言っているのだ。

「まっ、できたとしても取り戻せるのはほんの一部だけだ。神竜に変身できるようになって望めない。せいぜい竜そのものに変身する力もなくなった時にその場所に行けば他の竜に変身するぐらいはできるようになるだろうってとこだ……まあ「真竜石」が使えるぐらいには回復するだろう」

「真竜石？」

千年前の戦いでそんな竜石を手に入れたことは無い。チキは首を傾げた。

「ああ。普通より強い竜の力を封じ込めた石だ。神竜には遠く及ばないがな」  
「へえそんなものがあるんだ。……今はどこに？」

チキの問いにチエイニーは肩をすくめる。

「知らないな。普通の石ころや宝石だと思っただけで拾っている人間がいるだろうが……今よりさらに竜のことが忘れられたころにどこかの店で売り出されるようになるさ」

「そうか」

チキはあっさり引き下がる。真竜石があつても他の竜より多少強くなつたくらいでギムレーを倒れるとは思わない。それより砕け散る寸前のこの神竜石でたった1回でも神竜になつてギムレーに深い傷を負わせられるようになれば。だが神竜の力を使い切つたその時自分はどうなつてしまうのか。

その時はさつきチエイニーが言ったように竜自体に変身する能力を失つてしまうかもしれない。

だからチエイニーが言った神竜の力を回復できるナーガの故郷の話はチキにとってかなり大切な話だった。

「ありがとうチエイニー。ナーガの故郷のこと、よく覚えておく」

「おう。もしかしたら千年もしたら港がなくなつて誰もいなくなつてるかもしれないしな。その時は墓参りのつもりで行つてみるといい。……テーベをナーガの墓とは思いたくない」

チエイニーはテーベで行われていた錬金術やそれで生み出されたものことは知らない。だがオーブを手中に入れたままにするためチキを操っていたガーネフが使つていた塔は忌々しく思うし砂漠の地下に満ちるまがましい邪気はチエイニーでさえ吐き気を覚える。



テーベの邪気を思い出して食欲をなくしたチエイニーはチキたちと別れて外の空気を吸いに会場から出て行った。

宴はもう少し続く。

## 決戦前夜6 ソンシン

「うーん。私にはワインは口に合わないな。焼酎の方がいい」

ヴァルム産のワインを隅に置いてソンシンから持つてこさせた焼酎で口直ししながらナノハはそんなことを言う。

「そうか？ 結構いけるよ。正直僕はこっちのほうが好きだな」

ナノハに対しタクマはワインを飲む手を止めない。

タクマもナノハ同様他国の酒が口に合わなかったときのために焼酎を持参していたが、今ではすっかりワイン党になったようだ。

「何だと非国民め。ソンシン人は米で作られた焼酎か清酒を飲むべきだ」

タクマがワインにはまった様子が気に入らないらしくナノハは管を巻いてくる。

「ソンシン人がヴァルム料理を食べるのはいいのかい？ 輸送隊をこき使つて持つてこさせたソンシン食に全く手を付けていないように思えるけど。僕から見ればナノハの方が非国民だよ」

酒の時とは逆にタクマは宴で用意されたヴァルム料理をいくつかつまんで自分には合わない見切り、ソンシンから持つてこさせたソンシン食ばかり食べている。とは言

え料理は酒と違い日持ちしないので行軍中に半ば消費し、宴がたけなわになったころには底をつき現在タクマはワインばかり飲んでゐる。

「い、いやいやヴァルム料理は肉とか熱量や活力を与えてくれるものが多い。明日の戦で敵をなぎ倒すためにもしつかり力をつけな」とな

ナノハも酒とは逆にヴァルム料理を気に入ったようでもソンシン食はほとんど摂らず、宴に出された食事の方を平らげている。ヴァルム料理の方はまだまだあるのでそれを摂りながら飲むので酒も進む。

「もうー。二人とも酔ってらっしやるんですか。外国の料理やお酒で喧嘩しないでくださいよ」

二人の間で茶を飲んでいたスモモが二人をたしなめる。

彼女はヴァルムの紅茶よりソンシンの緑茶を好むように同じく国から持参した茶を飲んでゐる。未成年なので酒は飲めないし、真面目な彼女は飲もうとしない。食事はヴァルム料理の料理にも興味を持ったがソンシン食も捨てがたいといった感じだ。

白夜の末裔たちが今住んでゐるラムの村も元々はヴァルム大陸の他の地と同じ料理と飲み物が供されていたが、アルバレアがヴァルムから独立した際にラムの村は取り残されヴァルムやイストリアの統治が及ばない地となり、食物も行き届かなくなつた時があった。そんな時白夜の里から自衛力と同時に持ち込まれたのが彼らの飲食物と風習

だった。

風習に関しては元々のラムの村民には受け入れられない者もいるが、これまで食したことのない白夜の飲食物は貧しく食事に關しては食べられればいいという考えだった彼らに思いがけない刺激を与えた。

それ以来白夜の飲食物はソンシン食として大陸でも異色の献立となる。

ドン！

「あ……ごめんなさい。大丈夫ですか」

タクマたちに意識をむけていたスモモに赤髪の女性がぶつかってきた。幸いスモモは茶碗をしつかり持つていて落とすこともこぼすこともなかった。

「大丈夫です。……私こそよく見てなくてごめんなさい」

ぶつかられて被害を受けたはずのスモモは怒るところか相手に頭を下げる。波風を立てることのないように自分に非がなくても謝るといふソンシンの慣習だった。

「そ、そんな……悪いのは完全に私です。大勢の中を私がキョロキョロして歩き回っていたから」

相手は恐縮してスモモに頭を上げるよう願う自分も頭を下げる。このままではらちがあかないとスモモは頭を上げた。

「……わかりました。私は気にしてませんからあなたも頭を上げてください。……でも

気を付けないといけませんよ。ここには各国の有力諸侯や王族がいらつしやるんですから」

スモモから注意を受けて相手はまた頭を下げて謝る。

「はい仰る通りです。本当にすみませんでした」

相手が謝罪を終えるのを待つてスモモは名乗る。

「申し遅れました。私はソンシン王国で国王様についてきました。スモモと申します」

スモモは名家の当主ということを明かすと相手がまた謝りだしかねないと思いそこは伏せて名乗る。

「これは私ごときに……私はアカネイア王国の天馬騎士見習いティアです」

「それで一体どなたを探していたのです？　こんなに大勢がいらつしやる会場を歩き回るより奉公人の方を探してもらった方がいいですよ」

ティアはスモモの言った奉公人という言葉に疑問を覚えるが言葉の流れからして使用人の事だろうと思ひ聞き返さずにわけを話す。

「そうしたいのですが探している方の名前がわからないんです」

「名前もわからない人を探している……どこかの家の重鎮や当主という肩書もわからないんですか？」

ティアはうなずいて肯定する。

「ええ。名前も身分も存じてません。わかっているのはものすごく強くて人望のある天馬騎士ということだけです」

「強くて人望のある天馬……ええと」

天馬騎士という名称に慣れないスモモはつつかえるがティアは気付かずに続ける。

「ええ！ 天馬の天敵である弓を難なくかわし、鈍重な重騎士を翻弄し指揮官を混乱させて撃破させるための隙を作った。そんな彼女の槍には翼が生えているそうです。……ああ一度見てみたい」

「槍に翼……あの、それは誇張では」

スモモがそれは間違いだと言おうとするもティアは陶醉して気付かずにまだ続ける。

「それだけではありません。その方は強さだけでなく人望も備えてると言いましたよね。そのお方の人となりは聖女のように慈愛に満ちて敵対した国から1国につき1人はアカネイア側に加勢させたとか。その中には国王もいるんです」

「国王！ ……それはすごいですね」

国王を味方につけたと聞いてスモモも誇張された噂を訂正することを忘れ素直に感心する。

もつともカーシャがフェリアとペレジアの現首脳についているザンザやジェルドを説き伏せたのは事実だが当時彼らは王ではなく幹部の一人にすぎず、ザンザはフェリア

統一王アイネから西フェリアの統治を任されている実質は総督で、ジェルドは将来は国王に即位する予定だが今はまだ執政として王の代行をしている。

「はい！ そんなすごい天馬騎士が我が国から現れるなんて、この機会にぜひお会いしたいです」

「我が国……アカネイアの……あの、その天馬武者とはもしや、」

「スモモさん。ぶつかって本当にすみませんでした！ 宴が終わらないうちにそのお方にお会いしないと。それでは失礼します」

天馬騎士を天馬武者と間違えたままのスモモの制止も聞かずティアは立ち去って群衆に紛れこんでいく。

彼女と引き換えにソンシン王リヨウヤが帰ってきていたのに気付いた。リヨウヤはタクマとナノハを叱責している。

「食事や飲み物を選び好みするなどソンシン人にあるまじき行いだ。恥ずかしくないのか！」

「うん。そうだね。ごめんリヨウヤ」

「ナノハ無礼だぞ！ 今のリヨウヤ様は国王なんだから」

ソンシンが隠れ里だったところと変わらない口調でリヨウヤに謝るナノハをタクマは注意する。

「それは構わん。今は無礼講だ。……それに正直、王と呼ばれるのも扱われるのも苦手だ。以前通り接してくれ」

リヨウヤはそう言つてタクマたちに対等の物言いを要求する。

「わかつたよりヨウヤ。……で、例の部族たちはどうだった？」

リヨウヤの要望通りタメ口に直したタクマは謝罪をやめ例の件をリヨウヤに聞いた。

「ああ。なかなか信じてくれなかつたが彼らにも思い当たることがあるらしく、半信半疑といったところにはこぎつけた。ひとまずこれからはソンシンとフェリアとして国交を結べそうなのは大きいな」

「そうか……で、東大陸の他の国の方はどうだ？」

そう聞いてくるナノハにリヨウヤは首を横に振る。

「カイル王子とジェルド執政にも聞いたが自国でソンシンのような風習を持つていたり遺品を受け継いでいる者は心当たりがないそうだ。……サイゾウあたりはアドラの手を逃れて生き延びたと思うのだから」

「でもサイゾウ家が代々サイゾウを名乗る家訓があるからって白夜滅亡後もそのまま家訓を守っているとは限らないんじゃない？ 「三国記」戦争の直後に生まれたサイゾウの息子は家督を継ぐまでは別の名前を名乗っていたっていうし」

サイゾウについて考えうなるリヨウヤにタクマは助け舟を出す。



三国記とは白夜、暗夜、透魔の三国間で行われた戦争の事である。

「我が家の始祖から仕えてくださったという天馬武者も白夜滅亡の際に行方をくらましたようですが死んでしまったとは考えにくいですね。白夜建国以来髓一の実力を持ち続け文武両道の完璧さを代々受け継いできたという家系ですし……」

（平原や滝で活躍した天馬武者……ティアさんが探している方って間違いなくカーシャさんの事ですよ。会えるといいですけど）

緑茶をすすりながらスモモは天馬武者だと彼女が思っているカーシャとティアのことを思い浮かべる。

「風の部族にも今の砂の部族とは違う場所で生き残った奴がいるかもしれない。三国記の時代でハイドラと戦った後に生まれた風の族長の娘は部族を継いだとか部族を離れて透魔に移り住んだとかそのどれでもないとか、晩年の記録がはつきりしない」

ナノハも二人に続いてそう言った。リヨウヤは透魔という言葉聞いて思い返す。

「透魔か……その国も滅亡したかどうかは定かではないな。元々異空間に存在していた国だ。襲撃から逃れて異空間に逃げていたかもしれない」

「三国記時代の私たちのご先祖様は兄弟で透魔王族の二人もその中に入っていたそうです。私たちの他に透魔王さんがいればみんな揃うんですけどね……白夜の里の歴史上珍しいことにこうして各家の当主が同じ年代に生まれたのに」

緑茶を飲み干したスモモはふと漏らす。

「生き残りがいるかもしれないって言えば暗夜もだ。暗夜の騎士って黒い甲冑を着こんでいたらしいんだらう。グルニアの黒騎士がそれっぽいけど」

ナノハの考えにリョウヤも同調する。

「グルニアの始祖はアカネイアの高官でなく、むしろ当時のアカネイア王にやつかまれ辺境に左遷されて左遷先の島でグルニアを建国したという。考えられなくもないな。アドラの目的は略奪で虐殺は奴にとつて略奪のついでの愉悦だそうだ。逃げることでできた者もいるだろう」

暗夜、透魔、風の部族の末裔そして東大陸に残ったままの白夜の末裔、それぞれまだ存続している可能性を考えタクマは語る。

「その考察を確かめるためにもフェリアだけでなく残る二国との交流は重要だね。リョウヤとスモモの言う通りソンシンとは違う料理や酒だからって嫌ってはいはそれも叶わないかもしれない」

古の戦友のそくせきを探すためと言われたらナノハも異を唱えることができない。ナノハは意地を張るのをやめてもう一口ワインに手を伸ばし、タクマも彼女に負けじとヴァールム料理に手を伸ばし異国の味に慣れる努力を試みることにした。

ヴァルム料理を本格的に堪能し始めるソンスンの仲間たちと別れたりヨウヤは一人の少女と鉢合わせる。

「あつ！ リョウヤ！」

「巫女殿か。修道女とは一緒じゃないのか？」

またまたキットと別行動をしているチキである。

「うん。私と一緒にだとキットもお酒飲みにくいでしょう。ノーヴァではあまり飲めないからこんな時ぐらい飲ませてあげないと」

「確かに君と一緒にだと飲みにくいだろうな。……しかし異教では神職に就いている者でも少しなら酒を飲んでもいいと聞いたのだが……あの修道女はそれ以上に酒に目がないのか？」

チキは少しだけ首を傾げこつそりうなずく素振りをする。

「これはお母さん譲りだそうだね。結構お酒に目がないの」

「そうか。気真面目そうな彼女が……いや真面目だから酒を摂りたい時もあるのか」

チキとリョウヤはそろって苦笑する。

実際今回のチキの外遊は危険が多くキットにとって心休まる日が少ないものだったに違いない。チキも負い目を感じてキットにせめてもの楽しみに興じる時間をやりた

いのだろう。

チキはさっきのリヨウヤの言葉を思い出して尋ねる。

「でも異教では……つてソンシンの聖職者は宗教上お酒は飲めないの」

リヨウヤは重々しくうなづく。

「うむ。僧侶という仏に仕える神職の者は酒や肉を飲んではいけない戒律があつてな」

「えー、お肉も駄目なの？ 厳しすぎない？」

チキの指摘にリヨウヤも渋い顔をする。

「確かにそうだな。……俺も緩和してもいいと思うのだが僧侶には殺生を禁じる戒律もあつてな。それが肉を食べてはいけないことに繋がっている」

「うーん？ 漁師さんが獲った動物のお肉を食べるのも駄目なの？」

「駄目なんだ」

リヨウヤはぼつが悪そうに即答する。筋が通らないとは思っているようだ。

「僧侶さんの戒律つて矛盾が多いし厳しすぎるよ。仏様だつてそんなに我慢を重ねながら自分を崇めてほしいなんて考えてないんじゃない？」

他ならぬ今のバレンシア教徒に崇められているチキがそう言う。

「そうだな。だが宗教家というものは頑固なものでなここはおかしいからやめようといつてもすぐには変えてくれん……まあ俺たちがあれこれ言わなくてもそのうち緩和

されるかもしれんが」

宗教に関しては王が聖職者に言っても聞き入れないことが多い。それは他国も同じだ。いやむしろ他国では神は王や皇帝より尊い存在だ。他国の方が世俗の指導者である王の介入はご法度とされることが多い。

リヨウヤも僧侶の戒律の緩和には賛成のようだがまだ彼だけではどうにもならない部分が多いのだろう。僧侶のことは置いておいてリヨウヤはチキに今聞いてみたいことを聞くことにした。

「ところで小耳にはさんだんだがバレンシア教の神、ミラとドーマが君と同じ竜だというのは本当か？」

「う、うん……さすがに王様の間ではこの話結構広まってるかな」

チキは戸惑いながらも否定しない。

「いや……イストリアとドルマの王は知らないと思う。ユーリとファルスの休戦協定に潜り込ませた忍がいなければ俺も知らなかっただろうな」

「忍？……ソンシンの間者のこと？」

リヨウヤは首を縦に振りそれ以上は言わない。チキには無用の存在だ。

「俺たちは仏のほかに神祖竜という竜も奉じている。……だから俺たちはノーヴァとも君とも交流を持ちたいと思っているんだ」

「えっ?」

まさかの友好の申し出にチキは虚を突かれる。

「駄目か?」

「ううん。でも大丈夫かな。仏様の事といい、ソンシンの宗教観ってバレンシア教とだいぶ違うけど」

チキの不安をリヨウヤは笑って受け流す。

「心配いらぬ。俺も仲間たちもこの大陸の他の国や東……いやアカネイア大陸と友好を深めていこうと話していたところだ。ノーヴァとも風習の違いくらい乗り越えられなくてどうする」

そう宣言するリヨウヤにチキは、

「それならノーヴァのほうはともかく私個人としては喜んで……と言いたいけど」

人差し指を一本立てて断りを入れる。

「私の名前は君じゃなくてチキ。チキって呼んで」

リヨウヤはそんなチキに笑みを浮かべて右手を差し出す。

「もちろんだチキ。あとで俺の仲間たちとも会ってくれ。それと……」

チキの握力に合わせて少し力を緩めた握手を交わしながらリヨウヤは続ける。

「あと何世代かすれば俺たちの子孫も神祖竜を忘れてチキを崇拜する日も来ると思う。」

その時はよろしくしてやってくれ」

「ええー……」

途端にチキはげんなりした顔になった。

宴はもうしばらく続く。

テイア クラス：ペガサスナイト

「if」のツバキ・マトイの子孫で「覚醒」のテイアモの先祖。アカネイア王国元天馬騎士団見習い。訓練で好成績を収め天才肌と言われ先輩、同僚から妬まれるが彼女自身は自分を凡人だと思って努力を続けている。アカネイアからの援軍としてヴァルム大陸に来たがそこでカーシャの活躍を聞きカーシャこそ真の天才だと悟り彼女に憧れる。先祖が白夜王国の生き残りだとは知らない。

## 決戦前夜7 アルバレア・ヴァルム・自警団

「將軍閣下、お加減はいかがですか？」

市街戦での傷を杖で治したばかりだというのに宴に出て来て酒をたしなむジーンにフェイスは声をかけた。

「これぐらいの傷で医務室にこもっていたら武人など務まらない。まして明日は大陸、いや世界の存亡をかけた戦いが行われるのだ。休養よりむしろ英気が必要だ。……それより私の事より君の方だ。アカネイア軍に味方したことで陛下から何か処罰を申し渡されたのではないだろうか？」

ジーンの心配にフェイスは首を横に振る。

「いいえ。戦の後罰を受けるつもりで陛下の前に出頭しましたがあの方からは「牢で休むなど許さん。明日はジーンを倒した力量をギムレーにぶつけるがよい」と言われ不問にされました。……とは言え私が殺めた兵の遺族は皇帝が起こした戦争のせいだからと割り切れないでしょうし、ギムレーを倒した後は除隊も考えた方がいいかもしれませんね」

フェイスの懸念を聞きジーンは彼女に同情しながらも一度だけ挑発して見せる。



「伝説の女騎士マチルダを超えるのではなかったか?」

フェイスは力なく笑ってみせる。

「だからこそです。今回のことぐらいで陛下がヴァルム大陸再統一を諦める方ではないでしょう。ヴァルム軍にいればまた侵略に加担することになりかねない。マチルダ様の後を追いたいからこそ私は軍を退くのです」

「自らも今回の戦いに反感を持っていたジーンはマチルダの返事に納得するが追従はできな

「そうか。大陸再統一に共感できないのなら除隊するのもいいだろう。だが私は陛下に背くつもりはない。……私の祖先ジークはリゲルの外から流れ着き、彼を拾い召し抱えた時の皇帝ルドルフ1世の意思とはいえ大陸の平和のためだと大恩ある皇帝に背いた。……ジークはそれを悔やんだのかアルム1世のもとを離れ数年アカネイア大陸に渡ったがその後バレンシアに戻りアルム1世に生涯尽くしたという。それから歴代続けてずっとな……だから私の代で皇帝に背くわけにはいかんのだ」

「そうですか。……ジーン様はそれでいいと思います。陛下にはお側からあの方を諫める者が必要だと思えますから。……どうかこの不忠者の分までファルス皇帝陛下をよろしく願います」

詫びと後事を託す意味でフェイスはジーンに頭を下げる。ジーンは彼女の肩に手を

置き了承する。

それからフェイスは頭を上げ挑発的に彼を見つめる。

「ただし勘違いしないでください。ジーン將軍。あなたやマチルダ様を超えることを諦めたつもりはありません。私は明日の戦いであなた以上の手柄を立ててみせる」

「それは頼もしいな……だが私も負けんぞ！ アルム一世がもたらした大陸の平和を守るためギムレーは必ず倒す」

二人はそう意気込む。

一方でフェイスはこうも考えていた。

（私よりむしろ心配なのはカーシャの方だな。屍が相手とはいえ彼女は戦えるだろうか？ ……この戦いが終わったら完全に退役するのもありなのだが）

「ファルス皇帝、このたびは休戦協定の成立おめでとうございます」

宴会が開かれてから休戦の印としてヴァルムとの友好を示すためなるべくファルスの近くにいたユーリはアルバレア・ヴァルムの有力貴族への挨拶を済ませてファルスに声をかける。

一方ファルスは酒は飲まず好物の果物を食していた。未成年だから酒は飲まない

いう真面目な理由ではなく単に酒の苦みにまだ慣れていないのだ。

ユーリの言葉を受けファルスは鼻を鳴らす。

「ふん、うぬにしては軽い嫌味だな。実質的にはうぬの勝ちのようなものだ。素直に勝ち誇るなり我を見下すなりしておればよいものを」

ユーリは苦笑して首を横に振る。

「いえいえ此度の戦の結果はアカネイア大陸から駆け付けた各国の援軍によるものです。ギムレーを倒し彼らが退却した後には休戦状態を維持できるかは我々次第でしょう」

「ひとまずは安心せよ。賠償金を払って大きな損失を出したばかりでは戦などできぬわ」

ふてくされたように言うファルスにユーリは目を細めて追及する。

「それが信じられるとでも？」

「……………」

ファルスは虚空を見てしばらく押し黙った。

「対話によつて各国の意思を統一する。そういう形ならヴァアルムが主導権をとつてもいいと私は思っているのですがね。それも一つの意味での大陸の統一ですよ」

「うぬは我を倒してアルムの正当な後継者を名乗りたくはないのか？ うぬにとつて私の祖先アルムの世継ぎは国と大陸の名を勝手に変えた不埒者であろう」

ファルスの問いにユーリは肩をすくめる。

「まさか！ 歴史の認識についてはそれこそあなたとよく話し合いたいところですが、そのためにヴァルムを滅ぼして侵略者の汚名をかぶる気はありませんよ。私にとつて国を分かつたれようとバレンシアの民はアルムとアンテーゼが慈しんだ民。彼らの生活を脅かしたくはない」

「ノブレスオブリージュか。ヴィオールというぬといいアルバレアは貴族の面目にこだわる」

ファルスも呆れて肩をすくめる。

「民だけではありません。ファルス、あなたたちヴァルム家も私たちアルバレア家にとつて同じアルムを始祖と仰ぐ兄弟のようなもの。私はあなたを弟だと思っているのです」

「は？ ……………ユーリ…酔っているのか？」

ファルスはたちまち怪訝な表情になる。

「至つて真面目です。失恋した弟の愚痴を聞いてやりたいと思つてるくらいには」「やはり酔っているようだな……………いい気味だろう。当分ヴァルムには世継ぎはできそうにない」

失恋という単語を聞いて不機嫌になったファルスは無造作に母のヘタをむしり取り

口に放り込む。

「いやいや残念に思っていますよ。奥方を迎えればあなたも少しは落ち着きを見せると思いましたからね……ああ言っておきますが、カーシャ殿が捕まったのは私にとつて想定外の出来事です。あの件でカイル殿から信用を失うところでしたし、あの時は私も生死の境をさまようような重傷を負いました。あなたの縁談のために命を張ろうとは思いません」

誰に対して言ってるのかユーリはそんな言い訳を始める。

「……まあこんな話を続けていきたいくらいにあなたとは交流を続けていきたいんですよ。歴史に関してても剣でねじ伏せた者が正しいというのではなく、相手がぐうの音も出なくなるまで言い負かして決着をつけたい。そちらの方が面白いでしょう?」

「……まあうぬが言い返せなくなるところを見たい気持ちはなくもないな」

弁論での決着にファルスはまんざらでもなさそうな顔を見せる。

「国が滅びれば王家も滅びる。どちらかを滅ぼしてしまえば相手を言い負かすこともできなくなりますよ。ヴァルムがアルバレアを滅ぼせばあなたは私に言い返せないから武で黙らせたと民草の間に伝わってしまう。そんなのは不本意でしょう?」

そんなユーリの挑発をファルスは鼻で笑った。

「その時はうぬを殺さず生け捕りにすればよい。我自ら捕虜となつたうぬをあざ笑った

後で民の前に引きずり出してヴァルム帝国の正当性について存分に言い負かしてやろうではないか！」

国同士が休戦してもこの二人の戦いはまだまだ続きそうだった。

カーシヤを探して会場を回っていたカイルは会場外を探してみようと考えている時に料理をむさぼっているルッツを見つけた。

「ルッツ！ こんなところにいたのか」

ルッツは手を止めてカイルの方を見る。

「おうカイル！ せっかくのメシも食わずに歩き回りやがって挨拶回りって奴か。王子様も大変だな」

「まあさつきまではね、今はカーシヤを探している。どこにいるか知らないか？」

ルッツには外面を取り繕う必要もないだろうと白状し、カーシヤの居場所を聞いてみる。

「カーシヤか……敵から解放されたのはいいけど戦えなくてふさぎ込んでいるみたいだ。宴にも出ず庭園でぼうつとしていたのを見たぜ」

カーシヤの様子はカイルも聞いている。やはりと思ったが案の定宴には最初から出

ていなかったらしい。

「そうか……とところでルッツ。この機会だ。アカネイア自警団について聞いて聞いてもいいか？」

カーシャに会う前に心の準備も兼ねてルッツに自警団のことを聞いてみる。次期国王の教育にも関係あることになるかもしれない。

「いいけどほとんどお前も知ってることだぞ。……自警団の前身はアカネイア自由騎士団。千年前にメニデイ侯爵で大陸一の弓騎士として知られていたジヨルジュが立ち上げた。設立当時は暗黒・英雄戦争で活躍した騎士たちが中心だったんだが平民の加入者も多く一世代もたないうちに平民の方が多くなって騎士団とは名ばかりってことでアカネイア自警団に改称した。それから規律などは千年の間色々変わっていったんだがアカネイアの人々を盗賊から守るって点だけは変わらず続けていった。俺の両親が前の団長とその補佐つてのは覚えてるよな」

カイルはうなずく。最初に言われた通りカイルも知っていることばかりだ。

アカネイア自警団は自由騎士団の名を冠していた時代からアカネイア王国全土（連合王国ではなくあくまでアカネイア王国内）を活動範囲とする巨大な自警団だ。

アカネイアの貴族はもちろん国王もその活動を知っており先王グスタフは自警団に勲章を与え彼らをねぎらったことがある。また王位に就く前のクロスとユリナも彼ら

に助けられたことがあるためカイルにもそのことを話したことがあった。

「パレスがギムレーと屍に襲われて自警団も離散しちまってワーレンでの今の自警団の役割は魔道軍に奪われちまったが、この戦いが終わって国に帰ったら再び自警団を結集するつもりだ。その時の援助は頼むぜ」

カイルは強くうなづく。元よりそのつもりだ。

「……それでその自警団は貴族は参加してはいけないという規則はあるかな？」

「いや……最初は貴族ばかりだったぐらいだし、貴族は平民を助けるべきってヴィオールさんみたいな人が自警団に手を貸したり資金援助することも多い。自警団に加わる人はいないけど禁止されてはいないな」

ルッツの説明にカイルは顎に手を乗せ考える。

「……では王はさすがに無理でも王子や王女が民を助ける一環で自警団に加わるというのはありかな？」

「はあ？」

ルッツが仰天する。周囲の視線がカイルとルッツに集まったがマリアン又たちと話したことは違い隠す気はないのでカイルは気にしない。

「無理だろ……いや国が一度滅びちまって今は猫でも王様の手でも借りたかって時だしな。もう王族も雲の上の存在じゃないって考えたらありなのか？」



首をひねりながらルツツはうなる。

「……すまないルツツ、今すぐに答えを出したいわけでもないんだ。ただ将来そういうこともできないかなって考えてるんだ。それにもし今回みたいに軍が壊滅したり何らかの事情で大きく軍縮した場合自警団の役割は極めて大きくなる。援助だけして後は任せるだけのようなことはしたくないんだ」

「そうか……十数年後にはカイルの息子が娘が部下になるかもしれないのか。まあそこんところはお前に任せる。だけど絶対前より忙しくなるだろうから特別待遇はできねえからな。そこだけは覚悟させろよ」

「もちろんだ。その時は厳しく鍛えてくれ。……じゃあ僕は庭園の方に行くか。ルツツは宴を楽しんでくれ」

そういつてカイルはルツツと別れ会場を後にした。

宴もあとわずかで終わる。

## 決戦前夜 8 アイクとララベル

「はあー！」

ブオン！

宴に出された肉を食いつくして満腹になったアイクは修練場で素振りをしていた。ヴァルム皇宮前にも帝都市街同様ヴァルム兵だけでなく各国の軍が見回っている。謀殺は困難だ。

「食後の運動？ 精が出るわね」

「ララベル。商談は終わったのか？」

アイクは素振りを止めるが声の方を向かずに話しかけた。振り向かずとも声と足取りで歩み寄ってくる者はわかった。

「ええ……」

そこでララベルは周りを見回す。

「セネリオなら連れて来ていないし来る様子もないな。二大陸の魔道士たちと盛り上がっているようだ」

「そう、珍しいわね。それとも……」

ララベルは少し考えてから雑談から始めることにする。

「アカネイア大陸から軍に紛れてかなりのラグズがヴァアルムに来ちやっただけで今度はここで暮らすつもり？ それとも別の大陸に行くの？」

「ラグズたちは差別が始まりだしたアカネイアを見限つて別の地を目指すらしい」

「あら！ じゃああなたたちが戦っている間に私は旅の準備をしないとね。ここに残れとか今更テリウスに戻れとか言わないわよね？」

アイクは相変わらずの無表情のまま問いかける。

「俺は行かないと言つてもあんたもあいつらと旅立つのか？」

「え？」

ララベルは驚く。アイクは新天地を求めてテリウス大陸から出たラグズたちの用心棒で彼らの中でも少なくない傭兵団員たちの団長という名の引率ではなかったのか。

「アカネイアやヴァアルムとテリウス……各大陸の位置を掴んでいる今ならテリウスに引き返すこともできる。でもこれ以上目的地も決めてない航海を続けると位置と方角も不確かとなり帰りたくなつても帰れないことになる可能性が出てくる。それにあいつらのもつとも理想とするところはベオクのいな地だ。そこが本当に見つかつたらベオクは俺とあんた。そしてセネリオの3人だけになる。」

アイクはセネリオがベオクからは印付きと呼ばれている混血だと知っているがベオ

クに近いのであえてベオクに入れる。

「そうだったわね。……あの子数年前からラグズと行動を共にしてきたといってもわだかまりはそう簡単に消えないわよね。ラグズから結婚相手を探せなんて酷か。……でも私にはアイクさんがいるし」

自分はアイクと結ばれると決まっているようだ。相変わずなので置いておく。それに否定すると後で後悔するかもしれない。

「……だからもう俺たちは連れていけないそうだ。団員たちもそろそろアイク傭兵団から独立するってさ」

「じゃあテリウスに帰るの?」

アイクは首を横に振る。

「いいや。テリウスにはゼルギウスや凶王以上に強そうなやつが出て来そうにないしな。だがここならジーンと奴に影響されて強くなるうとする奴らがいる」

「あら。もうヴァルムと再戦する気まんまん?」

アイクは今度は首を縦の方に振る。

「アルバレアって国の王子が言うにはヴァルムの皇帝はこれぐらいで覇道を畳むタマじゃないそうだ。各国の隙が見せたら侵攻してくるに違いない……との事でアルバレアやイストリアから仕官、それが叶わなければ傭兵として雇用したいって話が出てきて

いる。……それらの国にはばれないようにヴァルムからもな

「あらあら！ 引く手あまたね。さすがアイクさんだわ！」

「まあどこを受けるかも傭兵団を作り直すかも決めていないが傭兵は続けていくつもりだ。……でも俺もそろそろ旅を止めて定住する場所を決めておかないと思っっている。セネリオももうしばらくは俺とともにいる気でいる。でだ……」

アイクはようやくララベルの方を見た。

「ララベル。あんたはどうする？ 俺がヴァルム大陸に残ると決めたらあんたはテリウスに帰るのか？ テリウスに未練がないわけでもないだろう」

アイクの問いにララベルは少しだけ考える。

「……あそこに心残りが無いと言えば嘘になるわ。あの子以外男ばかりになった行商隊でイレース上手くやってるかしら？ ……看板娘の私が抜けて売り上げが減った今あの子の食費を捻出できているのかしら？」

「そつちの心配なのか……」

男多数の中で女一人の状態に対し普通は女の貞操を心配するものだがララベルはかつての行商仲間絶対の信頼を置いているらしい。

「それは大丈夫よイレースの強さを知ってるでしょう。あの子の力なら食事中で魔道書を持っていなくてもフォークとナイフが武器になるし、それにイレースを娘のように

思ってるムストンの怖さはみんな知ってるし」

「ああ、古傷だらけだからやはりと思ったが元は戦士だったのか」

ムストンの体に残った傷を思い出しアイクは納得する。

「あの子が行商隊についてきたばかりの頃はジョージが彼女を口説こうとしたけど、お財布がすつからかんになるまでおごらされてすぐに諦めたわね」

「あいつもおごったことがあるのか」

イレースの食事の量を知るアイクはジョージに同情する。

「そんなわけで仲間のことは信じているわ。……ただイレースはまだ心配なところがあるのよ……あの子を食べさせていけるだけの甲斐性のある男を捕まえられるかとか、いてもあの子の食事を量を見て逃げ出さないかとか」

「また食べ物がらみなのか……まあそれ以外ならもう一流の賢者だし心配もないか……で、心配の種もあるからやっぱリテリウスに戻るのか?」

話を戻してララベルがどうするのかをアイクは聞く。

ララベルは頭を振りかぶって強く言った。

「いいえ! イレースも私がついていなくてもやっていけるでしょう。行商隊を離れる時とか恋愛<sup>ゴ</sup>こととかはかえって邪魔をしかねない。私は私の勇者様を追いかけるわ!」

「そうか。……じゃあ」

アイクは剣を鞘にしまい右手を差し出す。

「え……………」

「あなたの勇者様とやはら目の前にいるぞ。追いかけた後はどうするんだ？」

「えつと……………」

「それとも俺の思い上がりだったか。ではその勇者様を探しに行くでしょう。そいつはどこにいる？」

ララベルが戸惑っているとアイクは意地悪気にそんなことを言い出す。だが右手は差し出したまま顔はほんのり赤くなっている。

「いえいえ！ あなたよアイクさん。私の勇者様と言ったらアイクさんしかいないわ。」

「じゃあ俺をどうするのか言ってくれ。いつもはララベルの方から隙を見て俺の手を握ってくるだろうが」

そこまで言われてもララベルはアイクの手を取らずに聞く。

「……………私でいいの？ 女王様は結婚しちやっただけティアマトさんやレテさんならまだ独身だろうし、ジーンと戦っても物足りなくなつてテリウスに帰った時その2人と付き合えるかもしれないわよ。それに私ってあなたより年上だしいつまで見た目で引きつけられるか」

「大陸を離れてまで俺を追いかけてきたのはあんただけだ。そのぐらいしつこくなければ

ば風来坊を続ける俺に相手の方が愛想をつかしている。……だから俺が所帯を持つとしたら……俺にとつてこの軍の中で一番綺麗なララベルだけだ。」

軍の中でララベルが一番綺麗。それはラグズ連合とベグニオン帝国との戦いのさなかで再会したとき商品を無料にすることを餌にララベルがアイクに言わせようとした言葉だ。

「それって……」

「これを言ったら「アイクは道具売りララベルに夢中」と大陸中に触れ回るんだったか。

……まあこの際構わん」

「覚えていたの……」

ララベルはいつもと違って恐る恐るとして十数えるほどの時間ををかけて両手でアイクの右手を握る。

「……もう気の迷いだったとか、酔ったはずみで言っただけなんて言い訳は聞かないわよ。その時はマリアンヌさんに言いつけてアカネイアを巻き込んで感謝料を取り立てやるんだから」

「そんなつもりはないし、酒は飲んでいない」

空いた左手で頭をかきながらアイクは言う。

「そう。ねえアイクさん。あなたは明日あのギムレーという巨大な竜と戦うのよね？」



ララベルの確認にアイクは答える。

「そうだ！ 連れ合いを持つからと言つて逃げるわけにはいかん。むしろお前と暮らすためにもあの巨竜は倒しておかねばならん」

「わかっているわ。……ただあの巨竜が相手だとアイクさんでも万が一つてことはあるわよね？」

「それはそうだ。俺も不死身ではないしな」

「だから……その……万が一のことになる前にどうかしら？」

ララベルは言いづらそうに言葉を選びアイクを誘う。

「どうつて？ ……何をだ？」

要領を得ないララベルの誘いにアイクは戸惑う。ララベルの言いたいことを察してそこまでは踏み込めないのか。

「……さすがアイクさん。ここまで来ても鈍さは変わらないわね。こんなことを女から切り出すのもなんだと思うけど……」

ララベルはアイクの手を離すと同時に両腕で彼の腕にしがみつく。

「アイク！ 今から宮殿の客室を借りるわ。今夜はずっと付き合ってもらおうよ」

「お、おい？ まさかそういう意味だったのか。もう少し段階を踏むものじゃないのか？」

ララベルに引つ張られるままのアイクの抗弁をララベルは聞かない。

「明日アイクが死んじやうかもしれないのにせっかく告白までこぎつけても経験もないままだったじゃ悲恋もいいところよ。セネリオ君もまだまだテリウスに帰る気はないでしょうし、デートだの段階だの言ってたら邪魔が入って何にもできなくなっちゃやわ……むしろ子供が出来た後の方がセネリオ君の気がそっちに引けてデートができるようになるかもしれない」

ララベルがぶつぶつ言ってる間にアイクはララベルに引つ張られすでに皇宮の内部まで戻っていく。アイクも期待してないわけなく、彼の抵抗は口ばかりでララベルを引きはがそうとせずいつの間にか自らすすんでララベルとともに客室に向かい、この晩彼は初めての経験を果たす。

この頃には宴は終わっていたがその頃皇宮の別の場所では……。

## 決戦前夜9　カイルとカーシャ

アイクとララベルが話をしている頃と同時刻の皇宮庭園東側。

そこはカーシャが救出に来たチェイニーと彼女を部屋まで連れ戻そうとしカーシャの説得を受けて彼女についたフェイスと一緒に外へ脱出した場所だ。

外に通じる壁は人が入られる隙間が空いたまま放置されている。

「……」

宴の最初の乾杯が始まって一杯の果実水を飲んでからカーシャはすぐに抜け出し、時間を忘れてずっとここにいます。

（私、もう戦えないのかな？　明日からは屍と竜との戦いだけど屍が生き返った人間かもしれないと思うととどめなんてさせるのかな？）

あの屍は意志のない遺体を教団やギムレーが操っているだけ。それはこれまでの戦いで明らかになっている。

だが理屈通りにいかないのが無意識と言うものだ。今カーシャは無意識によつて敵の命を奪う攻撃ができないでいる。

ザツ。

背後の足音にカーシャは振り返る。

だが気配を隠そうともしなかったので敵だとは思わず槍を構えることはしない。

「カーシャ、ここにいたのか。チェイニーからここにいるんじゃないかと言われなかったら見つけ出せないところだったよ」

「カイル様……」

カイルを真つ直ぐ見ようとせずカーシャはうつむく。

「まだ水一杯しか飲んでないだろう。ここは寒いし、客室……は駄目か。宿か食堂へ行つてそこで食事をとろう。もちろん僕のおごりだ」

カーシャに軟禁されたことのある宮殿の客室を勧めることはできずカイルはそんな提案をする。

だがカーシャは首を横に振る。

「食欲ないんです……それにカイル様が宴を抜けちゃつていいんですか？」

「主だった方々への挨拶は済ませたからね。皇帝も僕の顔なんて見たくもないだろうし。そろそろ自由にさせてもらうさ」

カイルはそう言つて笑いかける。が不意に表情を硬くする。

「捕まっている間あの皇帝に何かされたのか？」

カイルはティーナに扮したチェイニーからの報告を受けたキットから、カーシャは

ヴァルム軍から無体なことはされてないと聞いていたのだが前とは違うカーシヤの様子でまさかとは思う。

「いいえ！ 何もされてません。何かされそうになったら皇帝を絞め殺すかそれが出来なければせめて一生残らない歯形をつけてやるところです」

カーシヤは勢いよく首を横に振りながらそう豪語しカイルの不安を打ち消す。

ならばカイルはおそらくそうではないかという心当たりを言う。

「では……戦えなくなったのが理由か？」

「……………はい」

カーシヤはそう言ってまたうつむく。

「心当たりはあるのか？」

「えっと……敵に捕まって……それで戦いが怖くなったんでしようね。……多分」

ぼつりぼつりとカーシヤは嘘をついた。

今更敵の命を奪うことに罪悪感がわいてきたと言えばカイルはその理由を聞いてくる。あの皇帝の言葉をカイルに聞かせるわけにはいかなかった。

「そうか」

カイルは疑わずにカーシヤの言い分を鵜呑みにした。嘘だと気づいているが本当の理由を聞くつもりはないのかもしれない。

「わかった。カーシャは明日からはギムレーを倒すまでドルマ港で待機していてくれ。それも重要な役目だ」

「え？ でも……」

ギムレーは無人島で息をひそめている。だが敵である各国軍が迫ってきたら浮遊して逃れようとするだろう。ギムレーが飛べる空域にはシューターの矢も届かない。ギムレーが飛び立つ前にギムレーにつかまって背中に飛び乗ることは不可能ではないが、天馬騎士や竜騎士の助けを借りて空中から兵士たちを降下させたほうがうまくいく確率は上がる。どちらにしろ捨て身の方法だが。

「アカネイア大陸からの援軍にもヴァルム大陸にも天馬騎士や竜騎士がいる。無論肝心の飛行手段の天馬も飛竜も、天馬騎士だからってカーシャが無理を押し出して出る必要はない」

「……」

カーシャは氣遣われているのがわかって自分のふがいなさに齒噛みする。カイルはそんなカーシャの左の肩を叩き慰める。

「いいんだ。君は今までよく頑張った。誰にも文句は言わせない。カーシャは後方で僕たちの帰りを待っていてくれ」

「うう……ごめんなさいカイル様……うう」

カーシャはこらえきれず涙を流す。カイルはカーシャが泣き止むまで肩に手を置き続けた。

カーシャ以外にも空を移動できる天馬騎士や竜騎士はいる。それは本当だし実はカーシャとは関係なく別の問題があった。

それはギムレーがラーズ教団に操られているわけではなく人類に仇成す自我を自ら持つていること。

前はギムレーは教団に操られていると思われ意志というものがない可能性にかけてギムレーの背中に飛び乗ってそこからギムレーの急所を狙う方法をとった。あの時はそれしか手がなかったというのが最大の理由だが。

だがギムレーが自らの意思で人類や世界を滅ぼそうとしているなら話は別だ。カイルを油断させるためにあえて効き目のないファルシオンを自分に刺させ、安心しきっているカイルを振り落としファルシオンと封印の盾を破壊することが目的だった以前と違い、今のギムレーは自分の背中に外敵がいると知った途端に身をよじり敵を眼下の大地や海に落とそうとするだろう。それに対してセネリオをはじめとする各国の軍師が頭をひねっているが未だ解決策は出ない。

不安を顔に出さずカイルは黙ってカーシャを慰めながら自分も心の準備を整えた。

まだカーシャの涙は乾いていないがしゃくり声が止まったのを見てカイルは切り出

す。

「ええと……カーシャ、そんなに自分を責めなくていい。実はこれからの話次第ではカーシャに騎士を辞めてもらうかもしれない」

「……はい」

カーシャは実際は騎士見習い。戦えない者は騎士に叙任することができない。そういう意味だとカーシャは思った。

そう思ううなだれるカーシャを見てカイルは彼女の思い違いをすぐにでも否定したいと思っても続きの言葉がなかなか出てこない。

十数えるくらい時間が過ぎてようやくカイルは意を決する。

「カーシャ……僕の父と母によって僕らが引き合わせられてから今まで君にはいろいろ助けられた。君にとつて今まで僕は世話の焼ける弟のようなもの……いや今でもそう思っているかもしれないな」

「それは……」

弟のようなものと卑下するカイルの言葉をカーシャは否定したいと思っている。

ファルスに迫られたこともあつて今はもうカーシャはカイルへの好意を自覚している。

だが相思相愛だとしても二人を阻むものは多くそして大きい。だから言葉が出てこ



ない。

「でも君を失いあまつさえ敵の手の中に落ちたと聞いた時、僕は自分が許せなくなった。どうして縄につないでも君を繋ぎ止めておかなかつたのだろうと……ああすまない、縄というのは言葉の綾だ。そんなことをするつもりはない」

思わず言つた比喩を手を振つて否定する。一度捕らわれの身となつたカーシヤに使つていい表現ではなかつた。

「わかつてます。それで？」

言葉の先が読めてもカーシヤは聞く。それなら戦えようが戦えまいが騎士を辞めてほしいという言葉の意味も分かる。

これからかけられる言葉に対してカーシヤはもうすでに返事を決めている。

「だから君を取り戻した今僕は君に言いたい。カーシヤ！ 僕には君が必要だ。僕と生涯を共に歩もう。結婚してくれ！」

「ごめんなさい！ お断りします」

カイルの求婚をカーシヤは即答で断つた。

「……僕じゃやっぱ頼りないかな？」

カイルは肩を落としながら聞く。カーシヤは慌ててフオローを入れようとする。

「ああいやそうじゃなくて……その、カイル様は今はずっかり頼りがいのある人になつ

たと思いますよ。旅を始める前と比べればはるかに！」

「それまでの僕はどれだけ頼りなく思われてたのさ」

振られたカイルは強がって苦笑して見せる。

「あ、すみません……でも本当にたくましくなりました。特にガルダ跡でナーガ様にギムレー打倒を誓った時は……あの時私はカイル様に好意を持ったんです」

「本当に？ ……でもそれならどうして？」

好意を持たれていたと言われカイルは喜ぶがならばどうして求婚を断るのか聞いた。

「……簡単でどうしようもないことです。私は平民で騎士にもなれずに一線を退こうとしている。いえなれても王妃なんてとても無理でしょうねカイル王子」

「身分の差か……」

カイルも重々しくつぶやく。カイルも解決しなければならぬ問題として考えていた。

「……でも一つだけ方法はあるんです。身分関係なくカイル様と一緒に暮らせる方法が……」

カーシャは感情を殺しながら言う。

「……」

今のアカネイアの体制でカイルとカーシャが結ばれる唯一の方法、それはカーシャを

カイルの愛妾にすること。

国のため、外交のため、時には周辺諸国……それらの安寧のため王侯貴族は自らは望んでいなくても国や領地に有益な貴族の女性を妻に迎えなければならぬ。現にアカネシアとグルニアの関係を保つためにクロスはグルニア王女ユミスと結婚するべきだったという声は今も多い。

その代わりに王侯貴族の多くは妾を抱えている。それを不貞だと軽蔑することはできない。

そのうえ今のアカネシアはパレスが壊滅し、王に近い多くの有力な貴族が亡くなつてしまった。正妃との間に子供が出来なければ王家の直系の断絶を防ぐために妾の子に王位継承を認める可能性もある。世継ぎを確保する意味でも妾は悪い手ではない。

しかしそこまで考えたうえでカーシヤは暗い表情で続ける。

「でも私は嫌です！ 夫が別の女性とも愛し合うなんてましてやその女性が本当の奥さんなんて私には耐えられません。本当に好きだからこそ好きな人は独占したいものです。……貴族様や王子様にはわからないかもしれませんが」

カイルはかぶりを振る。

「いやわかるよ。カーシヤが皇帝の妻になったらと思うと僕も耐えきれそうにない。だから決めた。僕にはカーシヤだけだ。カーシヤを妃として迎えたい。他に妾をとる気

もない」

カイルの気持ちにカーシャは幾分か表情をほころばせる。だが

「カイル様、そこまで私のことを……お気持ちは嬉しいです。でも大丈夫なんでしょうか？」

カーシャの言う通り、カイルとカーシャの結婚は誰からも認められないだろう。

平民の女性を妃にしたい。それ以外の妻は取りたくない。一国の王子としては身勝手にもほどがある。クロスとユリナの婚約も反対する者がいた。とはいえ相手が公爵の妹だったクロスの時とはわけが違う。

「このままでは無理だろうな。……だからカーシャが次期国王の妃として諸侯から認めてもらえるように色々考えてみて、まず思いついたのが爵位を与えることなんだけど……」

「……無理ですよね」

カーシャは嘆息する。マリアンヌによれば獅子奮迅の活躍をしたヴァルムでの功績を評価しても一代限りで男爵位を叙勲するのがやっとということだった。

男爵位を得れば軍内で小隊の指揮官を任せられ退役しても過度な贅沢をしなければ年金で生涯働かずに生活できるが、代々爵位を継承している貴族ましてや王族との結婚は至難だ。

「うん……だから僕はアカネイア王国を一度解体しようと思っている」  
「そうか。国を解体するって手が……ってはいっ!？」

カイルの提案に一瞬感心しそうになって言葉の意味に気付いたカーシャは耳を疑う。平民を王妃にするのが困難だからと言って国を解体するなどあまりに大それて無茶な行為だ。この王子様は自分たちに立ちほだかるあまりの難題に混乱してしまったのだろうか？

「心配そうな目で見ないでくれ。これはカーシャと結婚するためだけのものじゃない。以前から考えていたことだ」

カイルはそう前置きして続ける。

「大陸の北部と南西部はどちらもフェリア、ペレジアとして独立し、僕たちに残されたのはアカネイア本国のみ、もうアカネイア連合王国は存在しない」

「それは……そうですね……」

フェリアもペレジアも他国との同盟には乗り気でもかつてのグルニアのように属国としてアカネイアに従うつもりはない。アカネイア連合王国が解体しているのはカーシャにもわかる。

「1600年前にアカネイア聖王国が成立してこの国は大陸全土を統べながらも2度も暗黒竜に滅ぼされその後暴君によって他国を蹂躪する国家となり、暴君は廃されたもの

の当時の王妃は姿を消しマルスが後を引き継いだ」

「……」

アカネイアの歩みは輝かしいものばかりではない。カイルが言いたいのとはそれだけではないのだろう。リヨウヤやチキからアカネイア聖王国成立の歴史の真実を聞かされたカーシャにはわかる。

「でもそんなアカネイアの歴史は初めから歪んでいたものなんだ。アドラという盗賊が当時存在していた国を滅ぼし、部族を最北部へ追いやって、自分の欲を満たすために国を作り王を名乗り神を騙ってそれを正当化した。アカネイアはそんな悪徳のために作られた国だったんだ……だから今回の3度目の滅亡でアカネイアの歴史は幕を下ろすべき時が来たのかもしれない」

「ではまさかー」

カーシャはカイルに近づき耳をそばだてる。

「ギムレーを倒し、故郷に帰ったら僕はその地に新しい国を建てて！ 故郷を復興し、人々が平和に笑って過ごせる生活を取り戻すために国を作る。もちろん僕だけでは無理だ。他国の助力も必要だろう。何よりルッツ、エルス、マリアンヌと言ったアカネイアの人々の協力も……カーシャ。君にも僕を助けてほしい。どうか頼む！」

カイルはカーシャに深く頭を下げて頼む。

「それは当然の話です。……でもそれと私と結婚することとどう関係が？」

新しい国作りへの協力を了承しながらもカーシヤは自分との結婚のことに話を戻す。「うん……新しい国を作るとなったら建国に貢献した者を新たな貴族に迎えた方がいい。カーシヤ！ 君のヴァルムでの活躍がなければ僕は敗戦の将の汚名をかぶり新しい国を建てようなんて考えを浮かべることすら許されなかつただろう。新たな国の重鎮には君が相応しい」

「え……そんな……私なんか」

新たな国の重鎮。そんな肩書にカーシヤは戸惑う。

だがそれを辞退すればもう二度と貴族に名を連ねることが出来ず王妃になることはかなわなくなる。

「もちろん昔からのアカネイアの貴族をなおざりもするわけじゃない。今も爵位に就いているエルスやマリアンヌの協力は不可欠だしね。彼らもこの話には協力的だ。だから頼む！」

カイルだけでなくここにいないエルスとマリアンヌの後押しにカーシヤは意を決する。

「……………わかりました。今の貴族たちに後輩として認めてもらえるように頑張ります！」

カーシャは自ら貴族になる決意をする。それが王妃としてカイルと結ばれるただ一つの道だ。

「……ところで僕たちこれで婚約したってことでいいよね？」

「……まあ私とカイル様の間ではそう思ってもいいですよね……えつと？」

カーシャの返事を聞いてカイルは彼女と距離を詰める。

カーシャは思わず体をかばう。

「じゃあその証拠に……口づけぐらいは……」

カーシャは戸惑いながらも拒否できない。カーシャは体をかばう態勢を解いて。

「え、えつと……わかりました。で、でも口づけ、口づけまでです！ それ以上は公に認められてから……いいですね！」

カイルはうなずきしばらく時間をおいて、

「カーシャ。愛している……」

「カイル様……んっ！」

カーシャと唇を合わせる。

宴は終わり明日いよいよギムレーとの決戦が始まる。



## 第39話 復活

ドルマ港やイストリア港からギムレーの住み着く無人島——以後ギムレーの島と仮称——の間の海には天馬・飛竜・グリフォンに乗った屍が浮遊していた。屍が乗っている動物も蘇った屍だ。各国軍の船の進行を防ぐのが狙いなのか港に上陸しようとする動きはない。

各国軍はすでに多数の船に分かれて乗り込み島へと進もうとしていたが屍たちに阻まれて身動きが取れなかった。

各船にはシューターを組み立てる部品があるが作戦の都合上まだ多くのシューターは組み立てずにそのままにされていた。

「全軍、屍たちの襲撃に備えろ！ 1船でも沈められたらギムレーは倒せないと思え！」アカネイア軍の指揮官カイルをはじめ各船の指揮官は全軍に船を守るように命じる。船を沈められればその船に乗っている兵士は海上に投げ出される。避難用の小舟は当然あつたが全員助かるとは思えないし、物資、ギムレー征伐の作戦に必要なシューターの部品も失い、地上への帰還を余儀なくされ戦力は激減する。

そんな中、屍の襲撃を待たず自ら屍に戦闘を仕掛ける者もいた。

アカネイア船周囲。

「はあー!」

ザン!

「……」

天馬騎士ティアの最後の一撃で断末魔も上げず屍天馬もろとも屍は落下し海に落ちる。

自分から屍に突撃しているのは敵と同様浮遊することのできる動物に載っている天馬騎士と竜騎士だ。

アカネイアでは経験を積んだ天馬騎士は天馬を操った経験を活かしより強い飛竜に乗り換える騎士もいるが、飛竜は天馬とは逆に鱗で剣や槍をはじくが魔法には弱く、魔道士と戦う時に備えて天馬に乗ったままの騎士も多い。

対してヴァルム大陸は大陸がバレンシアという名だった頃は飛竜が生息しておらず代わりにミラのしもべによって天馬を額から優れた感覚器として角をはやさせた「ファルコン」として能力を引き出すすべて天馬騎士の能力を十二分に発揮できた。

アカネイア側はそのミラのしもべに代わるマスタープルフをヴァルム大陸から輸入するようになってからそれを使って天馬の力を底上げして戦う騎士が激増した。

またヴァルム側もアカネイア大陸から飛竜を買い取って竜騎士を育成した。だが飛

竜の弱点を懸念して天馬騎士が飛竜に乗り換える例はほとんどなく、ほとんどの竜騎士が最初から飛竜に乗るべく訓練を受けたものである。

船上の兵たちも天馬・竜騎士に頼りきりにしている者ばかりではない。

「包囲420……放て！」

ドシュ！ ザシュ！

少なからず組み立てて船上に配備したシューターから放たれる矢が屍天馬や屍飛竜たちを貫く。

イストリア船。

『ふきあれよ！ ふぶきのこどく！ ブリザード』

ビュオオオオオオ！

セネリオの唱える遠距離魔法ブリザードが屍天馬の羽を凍てつかせ飛ぶ力を失った屍天馬は主人もろとも海へ落ちていく。

アルバレア船。

『ミラよー！ ふじようなるたましいをじようかしょうけいれたまえ デイル』

船室内から状況を見たキットはチキから離れずいくばくかの生命力と引き換えに浄化魔法デイルを唱える。

途端に2万體以上の屍は光につつまれ最初からいなかっただかのように痕跡を残さず消滅した。

「消えた……そうか！ こいつらは幻覚だ。ギムレーが見せた……いや実はギムレーもどこかの魔道士が見せた幻覚で……」

デイルを知らないペレジアの竜騎士は屍たちを幻覚だと決めつけ警戒を解く。

「おい！ 左だ！」

そんな竜騎士を同期の竜騎士が注意する。

「え……ぎゃあー！」

戦友の注意もむなしく油断した竜騎士は屍の槍に貫かれ絶命し、飛竜の上から海へ落ちていく。

「馬鹿野郎！ こいつらが幻なら戦争なんて起きてねえよ……この骸骨どもがあああああ！」

同期の竜騎士は戦友の恐怖を紛らわすための現実逃避から油断した親友の心の弱さを嘆きそれにつけ込んで友を殺した屍に挑みかかる。

そんな頃、デイルを唱えたキットのいる船室内では。

「キット！　大丈夫？」

チキは荒く息を吐くキットに駆け寄る。

「大丈夫です。バレンシア魔法を乱用して自滅する真似はしませんよ。生命力を補う天使の指輪もちゃんとはめています」

そう言つてキットはチキに指輪をはめた指を見せる。

「本当に無理しないで。約束だよ。公爵さんもキットを引き抜くこと諦めてないんだから」

「あの方は関係ないでしょう！　チキ様を守るために私が死ぬわけにはいかないからです」

イストリア船。

『ひとときのみじつたいをもつててきをほろぼせ！　イリユージョン』

ガールはある魔法を発動させるための詠唱を唱えた。その代りに

「はあ……はあ……」

何らかの魔法を唱えた反動でガールは生命力を消耗しつつのめる。

ヒユウウン！

そこへ屍たちが弱ったガールを仕留めるべく襲い掛かる。

ザシュ！

だが屍たちの繰り出す槍がガールに届く前にガールの前から魔法陣とともに現れた天馬騎士が屍を倒した。

船上だけでなく空中からも次々と魔法陣が浮かびそこから天馬騎士が現れる。500体はくだらない。

「ふう……できるだけ多くの屍を倒してきて。……行け！」

魔道の指輪の力でいくらか持ち直したガールは召喚した天馬騎士たちに命令する。

ビュオオ！

さきほど屍を倒した隊長格らしき天馬騎士はうなずいた後ガールの命令に従って他の天馬騎士とともに屍を倒しに向かう。

この天馬騎士たちは人間ではない。この戦いの間、あるいは敵に倒されるまでの間だけ魔道の力で実体を与えられる幻の兵士だ。

そんなことを可能にするのもバレンシア特有の白魔法イリュージョンだ。

そうして健闘している騎士たちや魔道士たちだったが一番屍を討っているのは、

アルバレア船周囲。

「……そこだ！」

ヒュン！

ドシユ！ ボチャン！

金鷄に乗り鳶から弓を射るソンシンの金鷄武者である。

天馬・飛竜に乗る者しかいない空の戦場では空中を飛び弓を扱える彼らの独壇場だった。

ヴアルム船。

「屍が来たぞ！」

船を強襲しようとする屍を見つけた指揮官の号令に全兵士が獲物を構える。

「はあああ！」

パカラパカラパカラ！

真つ先に飛び出したの黒騎士は船から転落するのを恐れず船体中央から舳先まで猛速度で馬を走らせる。

「はっ！」

ザン！ ザン！ ザン！

そして舳先の端で瞬時に馬を止めると同時に浮遊している屍に向けて槍を振り回し  
チャキ！

槍を止めた時には3体もの屍が海に落ちていた。

「皆すすめ！ こんな屍ども、怖るるに足らん！」

オオオオオ！

黒騎士ジーンの激励を受けたヴァルム兵たちは我先にと船の端々に陣取り屍たちを  
威圧する。

シユ！

「ぎゃあああああ！」

そんなヴァルム兵に向かって屍は槍を投げてきた。銀で作られた恐るべき威力で兵  
は胴を貫かれあおむけに倒れる。

「くそ……弓さえあれば」

倒れた戦友の仇を討ちたくても剣や槍では屍が浮遊している場所まで届かず兵たち



は屍を恨めしい目で睨むのみだった。

パカラパカラ！

そこに

「やああああああー！」

ヒュン！ ザシユ！

勇ましい掛け声と同時に何者かが屍に槍を投げつけ、屍は落ちて行った。

「フェイス殿ー！」

槍を投げ屍を打ち落としたのはフェイスだった。

「何をぼうつとしていゝ！ 獲物など敵から奪うなり味方から借りるなりして補充すればいい！ 斧でも槍でも投げれば届きそうな位置にいる屍にはどんどん投げつけてやれ！」

「はっ、はい！」

フェイスに叱咤された兵たちは予備にさしていた槍や斧を投げつけて屍を倒している。

各国軍が屍と交戦している頃アカネイア船内ではカーシャが船内で待機している後

詰の中にいた。

カーシヤはカイルからドルマ港町で待機するよう命じられていたが無理を言つて船内まで同行した。

カーシヤも昨晩まではカイルの言葉に甘えるつもりだったが、カイルと婚約の契りを交わしてから自分にできる限りのことで奮闘することにした。

王子であるカイルの正妻になるということは王妃に名乗りを上げるということだ。エルスやマリアンヌのような味方もいるとはいえ諸侯たちに自分を認めさせるにはカイルを支える振る舞いをする必要がある、それはドルマ港町でカイルを待っているだけをさすことではないだろう。

カイルや仲間たちが命を張っている間自分だけ隠れることへの負い目もあった。

とはいえカーシヤは戦闘に出ず船内で待機を命じられていた。そしてカーシヤもそれに異論はない。

もしカーシヤが戦闘に出たいと言つても敵を倒すことができるか疑わしい今のカーシヤに出陣の許可は出ない。彼女が倒せないでもたついている間に屍がカーシヤを攻撃するか、それをかばおうとして別の兵が屍の手にかかる恐れがある。

そのため戦力に数えられていないカーシヤは武器・薬の補給などや負傷兵の手当てなどの雑用をすすんで行なつたがそれでいいのかとカーシヤは思う。

(みんなが命を張っている間に……私はこんなことをしていいの? ……こんなことで王妃様になりたいと言っても受け入れられるの?)

カーシヤのそんな迷いと焦りが頂点に達する頃、戦場でも動きがあった。

「ぐあ……」

奮戦していた金鷄武者が屍の槍に貫かれたのだ。そして屍は絶命した主人を振り落として逃げようとする金鷄も突き殺し道連れにする。

武者は金鷄とともに海へと落ちていく。かに思われた。

だが死んだはずの金鷄は主の死骸を背に受け止め浮遊する。見れば主の武者も起き上がり弓を構えた。

自軍の天馬武者に対して、

ヒュ!

ヒイイン!

「お、おい! 暴れるな。頼む、耐えてくれ……うああああ!」

主人の懇願むなしく天馬は主人を捨てどこかへ飛び去って行く。あの傷を放ってお

いたら逃げた天馬もほどなく主人の後を追うだろう。

屍たちは他の兵に目もくれず敵に撃破され数を減らしながらも金鷄武者だけを仕留めていき、その金鷄武者は生ける屍としてかつての自分や友軍を攻撃していく。

戦死した友軍の兵が屍として次々と敵に加わる。そんな光景をアルバレア船の近くに停泊していたアカネイア船の兵たちが見ていた。

「馬鹿な……今死んだ味方が敵になるのかよ」「じゃあ俺たちが死ねば死ぬほど敵も増えていくのか?」「そんな……こんなことを起こす化け物、ギムレーに俺たちは勝てるのかよ」

兵たちが動揺し、絶望するものまで現れる中、サリエルは彼らが見逃していたある出来事に心の片隅を預けていた。

(ソンシンの天馬弓兵を討った屍たちは皆懐から何か落としてますね。確認できたのですが彼らの下の海面にもしづきが上がりましたし)

サリエルの目は正しい。

この場にいる者は知る由もないが屍たちの懐にあった物は屍蟲を入れた瓶でありあらかじめ傷を入れたそれを通して金鷄と武者の死体に屍蟲が入り込み彼らを生ける屍に変えたのだ。

ヒュ！

ヒイイイン！

「うわああああー！」

蘇生した金鷄武者にソシン軍とその近くの友軍が翻弄されている頃かの軍とは別の海上で戦っていたペレジア船の上で戦っている竜騎士が射落とされる。

弓を放ったのはソシン軍を襲っているのは別の金鷄武者の屍だった。

「あの風変りの鎧はヴァルム南東の異国の兵？」 「屍とはいえ味方まで操るなんて」

「そんな……ひよっとしたらナーガ様じゃなくギムレー……ギムレー様こそ神なのでは？」

最後の言葉を言ったペレジア兵は、

「馬鹿者！ 何を言っておる。それより船に近づこうとする屍に意識をむけろ。返り討ちにするぞー！」

兵は上官から叱責を受けたがその上官も薄々そんな気がしてきた。

そうして空中では金鷄武者の屍が猛威を振るっていき次第に敵の屍たちが各国軍の

天馬・竜騎士を撃破するようになり、空中を制し始めた屍は本格的に船の破壊するべく船上に攻撃をしていく。

アカネイア船内。

「後詰を出せ！ 敵が船に攻撃しているぞ」

船内に入ってくるや隊長はそう叫び援軍を催促する。

（さつきまで余裕があったのに。形勢が逆転した？）

そう怒鳴る隊長が開けたままにしていた扉のあった場所からは空中で屍が自軍の兵を射落とそうとしているところが見えた。赤髪为天馬騎士だ。

カーシヤは思わず駆けだす。

「あっ！ 君は待機だ。カイル殿下からそう言われていただろう！」

そんな隊長の命令は最初の方しか聞こえていなかった。

カーシヤは愛馬ケリーのいる船内厩舎へ向かいケリーを開放する。

「ケリーごめん！ もう一度……仲間が安全に暮らせるようになるまで私と戦場に出てもらおうよ」

ヒイン！

ケリーは当然だとあるいは待ちくたびれたぞというように鳴いて応えて見せた。

ヒユウン！

グサ！

ヒイン！

「どう！」

矢が刺さりいもなく自分の天馬をティアは巧みな手綱さばきで抑えて見せる。

「やあー！」

ザン！

ティアはすぐに反撃に移り屍を槍で倒す。

敵の屍となった金鷄武者と相対してからティアは敵の矢を懸命にかわしながら屍を倒していったが、そろそろそれも限界となったらしい。

（あの方がいてくだされば空飛ぶ弓兵ぐらいで……それともただの尾ひれのついた噂だったのかしら……！）

そこへ自分か天馬に狙いを定める金鷄武者が……。

躲しきれない。

屍が弓弦から離しかけた指を見てそう悟りティアはあきらめて恐怖のあまり目をつぶる。

グサ!

ボチャン!

だが自身には何も起きず敵の方から何者かが敵を槍で突く音と敵が海に落ちる音がした。

カーシヤは目をみはる。

「大丈夫ですか?」

そこには先ほどまでいなかった自分とは別の赤髪为天馬騎士が!

その天馬騎士に金鷄武者が弓をむけている。

「危ない!」

咄嗟にティアは叫ぶ。

「はっ!」

シユン!

天馬騎士は屍の方を見る前にわずかな手綱にかけた指の引き一つで天馬を操り矢を躲させる。

「おかせし!」

ザン!

矢を躲しそのまま止まることなく天馬騎士は屍に向かって槍を繰り出し屍を倒す。



彼女の槍はティアより早く鋭く、天馬の操縦に關してははるかに上、いや彼女以上の技量を見たことがない。

天馬騎士はティアの方を振り向き。

「あなたたちが命がけで戦っている中、今まで出てこられなくてごめんなさい。でも今から私も戦います。……敵対するものの命を奪うことの正当性は置いて、理不尽に命を奪われようとしている仲間や市井の人々を守るために」

それだけ言つて天馬騎士は目に見える敵を倒すべく、天馬とともに駆けていく。一番厄介な金鷄武者を重点的にヴァルムの滝以来の勇猛さで容赦なく倒していく。どれほどの武者に囲まれようと彼女に弓矢はかすりもしなかつた。

「……弓を恐れず……早すぎて翼が生えているような槍さばき……あの方が……」

ティアの憧れる天馬騎士……カーシャが復活した時だつた。

同じ頃、サリエルから金鷄武者を襲おうとする屍を重点的に攻撃するよう提言があつた。

それ以外の屍は自軍の死体を蘇生させる術を使うことはできないと。

指揮官はとりあおうとせずサリエルを恐怖のあまり錯乱したとみて後退を命じたが

そこにカイルが駆けつけ、それ以外の手が今のところない。戦況を打開できるならわずかな可能性にかけよう。と言われサリエルの言う通り金鷄武者を狙おうとする屍を重点的に倒すことにし、その屍を掃討するとこれ以降死んだ金鷄武者が蘇生することもなくキツトが定期的にデイルの魔法をかけて屍の数を大きく減らし、戦の主導権を取り戻していった。

兵数的には大きな犠牲を払いながらもぎりぎり1船も沈められずに、ギムレーの島までの海上戦に辛くも勝利した。

## 第40話 神竜

ギムレーの島に上陸し、夜が明けてから各国軍は天馬騎士、竜騎士を偵察隊として島の見回りに当たらせギムレーの居場所を特定させていた。

その中にはカーシャと彼女をおつて志願したティアもいる。

彼女たちを含む偵察隊は屍やギムレーに襲われることなくそれぞれの国の本軍のもとへ戻ってきた。

彼らはそれぞれの国軍の総司令官に報告しに行く。アカネイア軍も同様だ。

「偵察隊戻りました。カイル殿下！ ギムレーは島の中央にそびえる山の火口にいます。溶岩の中でも平気で浸かっています」

まるで湯浴みのように溶岩に浸かるギムレーの姿を見間違いいではないかと思ひ直しながらも、カーシャはカイルに自ら目撃したことをあますところなく報告する。

「ご苦労だった。各国の司令官と打ち合わせて出陣は日が十分昇ってからということになった。それまで君たちは休むといい」

カイルは偵察を終えたアカネイアの天馬騎士団をそう労うがその中の一人を呼び止める。

「カーシャ、大丈夫だったかい？」

「ええ。ギムレーを発見した時は即座に屍が現れるかもしれないと警戒したぐらいですが、この通りすんなり帰ってこられました」

心配するカイルにカーシャは傷一つない自分を指して大丈夫だと言い聞かせる。

「ああ、無事に帰って来てくれて何よりだ。それもなんだけど……」

カイルは続きを話すのをためらう。が三つほど数える時間をおいて続ける。

「もう戦いに出て大丈夫なのか？ 海上では無我夢中で飛び出したとはいえまだ無理をしているんじゃないのか？」

そんなカイルに対しカーシャは胸を張りながら、

「もう平気です。たとえ他者の命を奪う結果になっても私が戦う理由をやつと思ひ出しましたから」

「どういうことだ？ ……まさかそれが君が戦えなかった理由！」

カイルはカーシャが戦えなくなつた理由は戦っていたヴァルム軍に捕らえられた恐怖によるものだけではなさそうだと察してはいたが、それでも一番の理由は負けた際に戦っていた敵から受ける報復への恐怖が一番の理由だと思っていた。

「後で話します。ギムレーを倒した後に……それからカイル様が私の話を聞いて今後の国の外交と軍事の政策に活かすか考えてください」

神妙に話すカーシヤにカイルはそれ以上の追及をやめた。

「……わかった。その時を待っているよ。ただ……」

「はい？」

聞き返すカーシヤにカイルは厳しく告げる。

「これで軍からの評価が上がったと思うのは大間違いだ。上官や指揮官の僕への断りなく飛び出すなんて、せめて上官や僕のどちらかの許可をとってからにしてくれないか。また勝手な行動をとったら今度こそカーシヤには外れてもらおうよ！」

「申し訳ありません。……以後気を付けます」

カイルからの叱責にカーシヤは力なく謝る。

そこへカイルたちの横から思わぬ人物が話しかけてくる。

「今から評価や手柄の話とはずいぶん余裕だな。竜が空中に逃げられた場合の対処について軍師どもはまだ頭を抱えているというのに、アカネイア王子殿にはあの竜、ギムレーを倒す算段はもううっているらしい」

カイルたちは声の方へ振り向く。そこには馬上からカイルたちに声を浴びせてきたヴァアルム皇帝ファルスが側近数騎を従えて来ていた。

カイルへの会見を取り次ぐべきカイルの側近はすぐに詫びる。

「殿下、申し訳ありません。私が殿下に取り次ぐまで待つように言ったのですが、ファル

ス皇帝が勝手に……」

「いい。……ファルス殿、私に何か御用でしょうか？」

カイルは謝る側近を許し、カーシャをかばうように前に立ち彼女の姿を隠す。

カイルの様子を気にせずファルスは相手の問いに応じた。

「先ほどまでユーリと打ち合わせていたのだがな、これ以上続けるとヴァルムの歴史についてまたこじれそうだからこれから共闘する他国との連携を密にするためアカネイアの王子殿に挨拶しに行くと言つて抜け出してきたのだ。……そう警戒してくれるなら今は友軍だ。猜疑心が過ぎると戦いに障りが出るぞ」

ファルスはカーシャの方を見る。カーシャをかばうカイルとは対照的にカーシャはカイルに隠れるそぶりは見せず真正面からファルスをねめつけていた。

「我はもうカーシャ殿に未練はない。戯れに口説いた娘に執着し続けて我がアカネイアと再び事を交えると思うか？ ギムレーを片付けたらうぬらにはさっさと出て行つてもらいたいぐらいだというのに……だがこれ以上我が大陸に居座るようなら別だ。うぬらを侵略者とみなし戦うぞ。それならアルバレアもイストリアも我につかざるをえまい」

「まさか！ 我が国も荒廃して他国を侵す気も力もありません。一刻も早く復興に着手したいですしギムレーを倒したら喜んで引き上げさせてもらいます」

ファルスの皮肉にカイルはそう返す。歴史問題も解決していないのに不遜にもあの大陸を我が大陸と呼ぶことは捨て置く。こんなファルスの相手はユーリの方が慣れている。

「そうかそうか。アカネイアの復興……いや新国家の建国か、うまくいくように我も祈っているぞ。荒廃したアカネイアの民が野盗と化してフェリアやペレジアを荒らしたら我が大陸とそれらの国との交易にも支障が出るのではな」

「新しい国を建てること。知っていたのですか？」

後半の嫌味は聞き流しファルスが新国家の建国を知っていたことに食いつく。

「私の宮殿で堂々と話しておいて何をいまさら、我が国の間者が聞き飽きた演奏に夢中になって情報の収集を怠るたわけだと思うか。そんな無能なら我がそうそうに切り捨てておるわ」

「……それはそうでしたね」

カイルはうかつだったと少々後悔したがファルスは邪魔するつもりはないらしい。これからの目論見にアカネイアからの干渉を恐れる彼がカイルの邪魔をしても利点はない。

「うむそうだ。それから……カーシャ殿」

カイルに言いたいことは言い終えたファルスはふとカーシャに話をむける。

カイルはカーシャの方を見て心の中でこいつは自分が何とかするからカーシャは下がってくれと目くばせしたがカーシャはカイルの目線での訴えに気付いているのかいないのか返事を返す。

「何でしよう?」

「うぬがまた戦に復帰するとはな……我との話忘れたのではあるまいな?」

ファルスは意地悪な笑みで聞いてくる。

「いいえしつかり覚えてます。でも海上での惨状を見て思い出しました。無辜の民、市井の人々、そして人々を守るために戦う仲間、刃が振り下ろされるのを騎士を名乗る者が見過ごしていいはずがない。私はそんな彼らを守るために騎士になったんだって思いました!」

吐き出すようにそう言つてカーシャはなお険しい表情でファルスを睨み続ける。

ファルスはいつしか笑みを消し根負けしたように吐き捨てる。

「そうか。せめてギムレーを倒すまで折れてくれるなよ。今はうぬでもあてにしているのな。それと……」

ファルスは馬首を翻し表情が見えないようにしてから言った。

「うぬとカイルの事。我もうまくいくよう願っているな。……カイル! その時は婚礼ぐらいには我も呼べよ!」



それだけ言ってファルスは馬を走らせそそくさとその場を後にする。ファルスの連れてきた側近たちは急いで主君の後を追った。

ファルスからの思わぬ激励にカイルとカーシャは顔を見合わせしばらく呆然としていた。

解散の指示が出ても戻らずカーシャと話がしたいと彼女がカイルと話を終えるのを今か今かと待っていたティアは一連の出来事を目撃し、呆氣に取られていた。

（カイル王子や異国の偉そうな人と話をしているなんて……カーシャ様って本当に一体何者なの？）

その後各国軍は偵察隊の休息と朝霧に邪魔されるのを防ぐため日が昇りきるまで待つてから進軍を開始する。

輸送隊を含む小隊に大量のシューターの部品を運ばせながらの行軍だったため、その速度はかなり緩い。ギムレーに気付かれ逃げられたら一卷の終わりなのだがやみくもにギムレーに乗っかっても彼の頭部を攻撃する前に振り払われて溶岩に落とされるのがいい落ちだ。ファルシオンを一撃頭部に刺したら終わりなんてそんな楽観視は誰もできなかった。

チキは軍が出立する前自分も行きたいとごねたがキットや周囲から当然猛反対され  
渋々折れた。その後チキはキットや護衛隊とともにアルバレア軍の船に残っている。  
……はずだった。

船内で昼食をとったきり本を読みたいからとキットを追い出して部屋にこもり夕食  
にも現れてこないチキにキットはしびれを切らし、チキを呼びに行った。

コンコン！

「巫女様！ 夕食の時間です。食堂に来てください」

……………

だが呼びかけても船室からは返事どころか何の反応もない。

「巫女様。開けますよ」

グツ！

扉を開けようとしたが鍵がかかっている。だがこんな時のためにキットは合い鍵を  
渡されている。

ガチャ！

扉を開けるとチキは本を読むと言っていたのに夕暮れになっても船室には明かりが  
ともっておらず真つ暗だ。

となれば本に飽きて退屈になったチキがとる行動はただ一つ。

そう思つてベッドに視線を向けると案の定毛布は膨らんでいた。

「やつぱり……夕食の時間です！ さあもう十分寝たでしょう？ これ以上寝ると夜眠れなくなつてしまいますよ」

声を大きくして呼びかけるが毛布は身じろぎ一つしない。

「巫女様！ 早く起きて！ 私も空腹なんですから食堂に行きますよ！」

キツトはいつものチキらしくないわがままな態度に苛立ち毛布に歩み寄りはぎとろうとする。嫌な予感を覚えたというのものもあるかもしれない。

「チキ様。いい加減になさい！ お留守番になつて不機嫌なのはわかりますが……ほら早く食堂に……!?!」

怒りながら毛布をまくり上げたキツトが目にしたのは。

夕暮れ。

各国軍は途中襲い掛かる屍を倒しながら四方から島の中央にそびえたつ山を登つていった。そしてあらかじめ打ち合わせていた中腹に差し掛かった軍は逐次停止し、天幕を張るなどの真似はせず、篝火をたき輸送隊などが今まで引きずつていた馬車から部品の山を取り出し見張りとは指揮を除く総勢がシューターの組み立てを急いだ。

その途中アカネイア軍の陣地で、

「な、何だお前は？」

一刻も早くシューターを組み立てるべく物資を取り出そうと馬車に入った兵士が驚きの声をあげる。

「わ、わあ！ 私は怪しい者じゃありません」

馬車に潜んでいた少女に兵士は槍をむける。

「この上ないほど怪しいわ！ 両手を頭の後ろに置け！」

兵の剣幕に驚いて少女は両手を上げるがまだ頭の後ろに置くまではしていない。

「どうした？ ……あつ！」

兵士の怒声を聞いて別の兵士が馬車に入ってくる。

「いいところに来た。この女馬車に潜り込んでいたんだ。縄を取って来てくれ。すぐに連行するぞ。尋問はカイル様に任せるとして……」

別の兵は少女を見て慌てて同僚を止める。

「ま、待て！ このお方はカイル様のお知り合いだ。一緒に話しているのを見たことがある」

「何!?!」

止められた兵士は慌てて槍を上に向ける。

「も、申し訳ありません。戦で神経をとがらせて……」

謝る兵にチキは両手を振ってなだめる。

「い、いえいえ。私こそ忙しいところを邪魔しちやつて……あの……縄で縛られたくはないですけど兵士さんの言う通りカイル……王子のところには行きたいです。連れて行ってもらえますか？」

「も、もちろん……さあこちらへ」

兵に案内され潜り込んでいた少女はカイルのもとへ案内される。

現在カイルは陣地の片隅で指揮をしている。天幕は張らず馬車から持つてこられた椅子を置いただけだ。

シューターの組み立てを手伝うべく、カーシャもルツツもベルモットもない。タグエルのベルモットは人間の使う機器を全く知らないが物資を運ぶなどやることはあった。

仲間と別れ指揮に専念するカイルを兵2人に連れられた客人が尋ねてくる。

「チキ！ 船の中で待っているように言ったのに」

チキを見てカイルは仰天する。

「部屋にこもるふりをして抜け出してきちゃった」

「駄目だよ。今日はもう遅いが明日何人か人手を貸すから君は船に——」

カイルの前に右手を突き出しチキは彼の言葉を遮る。

その表情は真剣そのものだった。

「戻らない。まだ神竜石はある。神竜の力は暗黒竜をも退けるからギムレーにも通用するかもしれない。……それにそろそろ——」

「カイル殿下！」

チキが言い終わる前に別の兵がカイルのもとへとやってきた。

「屍です！ 夜闇に紛れて屍が……」

「なっ？ ……くっ、シューターを破壊する気か！ ……戦えるものは戦いに出せ。」

シューターを防衛する！ 輸送隊などの人員は急いでシューターの組み立てを終えるんだ！」

空へ逃げられる前のギムレーを弱らせるわずかな可能性をかけた唯一の策を妨害すべく屍たちがアカネイア軍の陣だけでなく各軍を襲っていた。

(……………)

戦いとそれを起こす邪気の胎動を感じ彼女は目覚める。

自身の血を使って造られた者を止めるべく、バーハラの公女とアカネイアの王子そして我が娘に呼びかけてこの時が来るよう仕向けたがそれだけでは無理のようだ。

かつて人間が竜にとって代わることを認めず南東の大陸の司祭を操りかの地を支配し暴虐の限りを尽くしたロプトウスの思念を払うべく、11の従者とともに南東の大陸へ赴き、自分たちの血を与えることでかの地の人間を助けたが、その後その大陸では帝国の縁者とその未裔の迫害が行われ、王となった戦士の未裔は竜の血を与える力を支配のために利用した。

そのことを反省し、同胞にはそれまで以上に人間への関与を禁じた。

だが現在、死後とはいえ自身の血を奪われ「造られしもの」を生み出されかの者が招くだろう滅びに責任を覚え、精神のみでだが二千年ぶりに人の前に姿を現した。

バーハラの公女は同胞たる人間が犯した過ちを己の罪のように詫びた。

アカネイアの王子は苦難を遂げても千年後には無に帰すかもしれないのを厭わず「造られしもの」から逃げずに立ち向かっている。

娘はそんな王子に己に残された力をかけて協力している。

フオルセティは人間への関与を禁じる命令に納得できずにいたが今なら彼の気持ちもわかる。

(.....)

かなりの時間をかけて彼女は結論を出す。この精神だけで構築された空間に時間があればの例えだが。

もう一度人の子を信じてみよう。

彼らに語り掛けるだけでなく自身も「造られしもの」を封じるために力を振るう。

神竜王ナーガはそう決意した。



## 第41話 乱心

ガン！

ボオ！

陣内の篝火が屍に蹴り倒され火災が起きる。どこの軍も天幕が張っていないため燃え広がることは無かったが放っておくわけにもいかない。

消火と屍への対処そして松明の建て替えて多くの軍がシューターの組み立てを中断せざるを得なかった。

そんな中、

イストリア陣地。

『やみをてらすひかりを！ トーチ』

セネリオの詠唱と同時に彼のかざす杖からまばゆい光が放たれる。

「おおっ！」 「光が」 「テリウス大陸にはそんな魔法が……」

「皆さん！ 呆けていないで作業を進めてください。この光は時間がたつごとに薄れて

いきます。それにこの光につられて屍どもがやってきますよ！」

トーチの魔法光に感嘆としている作業員とイストリア兵をセネリオは叱咤する。

作業員たちは気を取り直し組み立て作業に戻り、兵たちは屍を迎撃するべく構える。

(問題はそれだけでなく、この状況でこの杖を掲げている間僕は動くわけにいかないこともなんですよね)

今最優先すべきは未完成のシューターの組み立て及びそれと完成しているシューターの防衛だ。

組み立てさせるためにも灯りの持ち手となった自分が彼らから離れるわけにはいかない。自分セネリオは遠距離魔法を使うしか攻撃の方法がなかった。

セネリオたち軍師が屍たちはこの時を狙ってくると予想したため、手持ち用の松明も用意されていたがシューターの部品の輸送にかなりの手間がかかった。そのためあまりに過剰な松明を用意する余裕はどここの軍にもなかった。

時間がたてば松明を切らず軍も出てくるだろう。

(例の物を各軍に配布して正解でしたね。問題はいつあれを発動させるか)

アカネイア陣地。

ドシユ!

「ぐあー!」

ビュオオオ!

アカネイア兵を仕留めた屍の黒天馬騎士はすぐに滑空し、剣と槍が届かない空中まで浮遊する。

弓兵は近くにいない。だが――

「やあああー!」

ザシユ!

屍騎士の横から天馬に乗ったティアが突貫し、屍騎士を叩き落とす。

騎士と天馬どちらの屍も地面にたたきつけられた途端に黒い霧となって立ち昇り消滅した。

ギイイイ!

「!」

だがその直後弓弦を引きティアの乗っている天馬を狙う屍を見つける。

「なんの!」

ティアは急いで手綱を引き矢を避けさせようとする。

(急所を当てられなければいいけど)

そう思い懸命に手綱を引くが直撃は避けられそうにない。

そこへ、

「おおおお！」

ズシャー！

空中から飛んできた槍が屍弓兵を砕く。

「カーシャさん！」

「油断しないで！ 海上とは違ってソンシン兵を操るまでもなく敵は弓兵も導入できるんだから」

屍を倒したカーシャがティアを叱咤する。

「はい！ 申し訳ありません！」

ティアは上官にするように勢いのある声でカーシャに謝る。

(私とティアさんって面識がないだけで同期のはずなだけだな、どっちも騎士の叙任を受けてないし)

海上での戦いが終わってからティアはカーシャが寝てない時はずっとべったりだ。

同格だからタメ口でいいと言ってるのに敬語をやめない。様付けは何とかやめてくれ  
たが……。

貴族を目指すならそんなことにも慣れなければならぬとわかってはいるのだがどうも落ち着かない。

頭の片隅で少しだけそんなことを思っていると――

シュ!

ギイン!

カーシヤは下から自分の方に飛んできた矢を槍ではじく。

「またか……」

矢の飛んできた方向からは5体の屍が弓を構えて次の矢を射ようとした。

「行くわよ!」

「はい!」

カーシヤとティアはその前に屍たちを薙ぎ払うべく下へ跳ぶ。

ギイン! ザシュ! ザン!

カーシヤとティアはすれ違いざまに弓をはじき落とし、それぞれ2体ずつ屍を倒していく。

だが1体残っている。2人が討ち損じた屍は矢をティアの方に向けている。

「く……」

ティアは回避を、カーシヤは屍を倒そうとするが間に合うか?

ザシユ!

そこへ別の方から繰り出された槍が屍を突き倒した。

槍を繰り出したのは重騎士だった。兜をかぶって顔はわからない。

「ありがとうございます」

「ええ! あなたのおかげで助かりました」

ティアとカーシヤは重騎士に礼を述べる。

「いや。……仲間として当然のことだ」

重騎士はそう返した。カーシヤはどこかで聞いたような声だなど思っている間もな

く――

「危ない!」

「え……うわ!」

カーシヤの叫びと同時に重騎士はすぐに真横へ跳ぶ。

ズシヤアアア!

ティアのいた空中を通過しその真下の地面に巨大な矢が飛んできた。

重騎士は矢の直撃はかろうじて避けたが土がえぐれた衝撃で吹き飛んだ。

しかし幸い鎧が体を守って傷つかずには済んだ。

「いてて……危なかった……今度はこっちが助けられたな。カーシヤありがとう」

「いえ。ご無事で何よりです。……これはシューターの矢、クインクレイン？ ……  
ティアさんを屍と間違えたのかしら？」

シューターの多くはまだ未完成だが予定数の半分近くはすでに完成している。敵に  
黒天馬やグリフォンに乗る屍がいるならシューターで撃ち落とそうとするだろう。

飛んできた矢を見てそのシューターの誤射だとカーシャはつぶやく。

だがティアはカーシャの推測を否定する。

「いいえ！ この様子ではどこの軍も自分の陣地を守るのが精一杯のはず、我が軍の陣  
の屍を討とうとする余裕はないでしょう」

「つまり？」

カーシャの問いかけにティアは告げる。

「どこかの軍が乱心している……」

ペレジア陣地。

「おい……何を」

ザン！

「ぎゃああああー！」

ペレジア兵が味方のはずの同国の兵の刃に倒れる。

そんな光景がペレジアの陣でそこかしこに見られた。

「神竜ギムレー様に従え！ 俺たちが生き延びるにはそれしかない」

「いや教団の連中が言うにはそんな名前じゃなかったような……まあ様付けしてひざまづいていればギムレー様は俺たちを助けてくれるだろう」

暴動を起こした兵は口々にギムレーへの恭順を表明する。

大陸を砂場のように破壊し、殺した敵兵を蘇らせ自分の手駒に変える。そんな神のようなことを行うギムレーの御業にペレジア兵は慄き、教団から改宗を勧められた時は拒絶した巨竜を改めて自分たちの神「神竜」として敬うことを決めた。

中にはシューターの破壊はおろか完成したそれを乗っ取って別の国の陣を攻撃している者もいる。

夜闇なので命中率はかなり低かったが当たるときは当たる。特にストーンヘッジは外れても周囲に巨石の残骸をまき散らすので一番厄介だ。

そんな暴動の知らせは司令官ジェルドの耳に入った。

「何をしているー！」

知らせを聞いたジェルドは現場に駆け付け兵を一喝する。



反乱兵は悪びれずにジェルドに言う。

「この期に及んでギムレー様を拒絶する奴に罰を与えているんですよ。ジェルド様、ここはひとつあなた様からも神竜ギムレーへの帰依と敵軍の討滅の命令を」

「なっ、何を馬鹿なことを？ 血迷っていないで屍を倒しに行かんか！ 今なら手柄次第で減刑の機会を与えてもいい」

暴動の正当化の要求をジェルドは当然拒絶する。

「そうだったな。あんたは憎きアカネイアの天馬騎士の色気に騙されて寝返った裏切り者だったな。ユミス王女という妻がいながら……このロリコンがあああ！」

別の反乱兵がジェルドに槍を突きかける。

「フツ……はあああ」

ザシュ！

だがジェルドは反乱兵の槍を軽く避けると反撃の剣で兵を切る。

「かかれええええ！」

他の反乱兵たちが一斉にジェルドに斬りかかる。

「くそ、ジェルド様を守れ」

正気を保った兵はジェルドとともに反乱兵を鎮圧しようとする。

ガン！ ザシュ！ ザシュ！

ジェルドは次々と反乱兵を切り捨てていくが、

ズガ!

「ぐ……」

「へっ」

ある兵の剣を受けわき腹に大きな傷を受ける。

「死ねええええ!」

ジェルドがひるんだすきを見て兵はとどめを刺そうと剣を振りかぶる。

ドシユ!

「ぐあっ」

だがその前に兵は弓を受け絶命する。

「お前は?」

兵を仕留めジェルドを守ったのはボウガンを持ったジャンだった。

ボウガンなら近接でも戦え剣のような武器と渡り合える。

「ジェルド様大丈夫ですか? 今俺の部下たちが散開して暴動を鎮圧しているところで  
す」

「ああ、すまない助かった」

「いえ……まずはこの薬をどうぞ」

ジャンは急いでジェルドに薬を握らせる。

「ひとまず下がりましょう。ここは暴動を起こした兵が多すぎます」

「うむ。ジャンこのまま私の補佐を頼めるか？」

「はっ、お任せを！」

ジェルドの頼みをジャンは快諾する。自身の今後のために。

（今あなたに死なれるとユミルとの結婚を承認する奴がいなくなるからな……あなたの奥さんは絶対承知しないだろうし）

本軍が集結してほどなく暴動は鎮圧されるだろう。だがこの間にペレジア側のシューターはすべて破壊されペレジア軍はギムレーへの攻撃に加わることはできなくなった。

そんなペレジアの陣の様子をある者が見守っていた。

（ペレジアの人間はラーズ神に帰依しつつあるか……）

壊滅したドルマの拠点におらず生きながらえたラーズ教団の生き残りの一人クライネである。

彼女はギムレーの計らいで戦鬪に出ず敵の偵察のみを命じられている。彼女は現代でギムレーが起こす破壊を防がれた際の保険とされているからだ。クライネの腹は幾分か膨らんでいた。

ほどなくペレジア軍に見つからないうちにクライネは姿を消し、以後も各国軍の前に姿を現すことは無かった。

イストリア陣地。

ふっ

セネリオのかざす杖から光が消える。トーチの効力が切れたらしい。杖の先端にある宝玉にひびが入る。

「……もうこの杖は使えませんね。どこかの軍の反乱も収まったらいいというのに。ならば松明は……」

セネリオは荷物袋をまさぐるがそれらしき物はない。

「皆さん！ 皆さんの中に松明を持つてる方は？」

セネリオは作業員や彼らを守る兵にそう呼びかけるが……。

「すみません。自分は持っていないです」

言葉を発した兵以外の者も首を横に振る。

彼らは皆松明を持っていないようだ。

そのときを狙ったかのように、

ブオン！

ギイン！

「ぐっ」

セネリオたちを守る兵の一人に屍が剣を振りかぶり兵は剣で受け止め鏢迫り合いとなる。

ググ！

だが体力を消耗した兵に比べ屍は新たに湧いて出て来たからなのかそれとも屍に疲労というものはないのか屍がにじり寄ってくる。セネリオは魔道書を構え詠唱の準備に入った。そこへ、

「はっ！」

ズガン！

アンナが鋭い剣さばきで屍を蹴散らした。

「あなたは！」

「はあいセネリオ君！ ララベルがいなくて寂しいだろうと思つてこつちに来てあげたわよ」

アンナはセネリオに向かって冗談交じりに手を振る。

アンナの言う通りララベルはこの戦いについて来ていない。アイクはそれを気にし

ていないどころかむしろ安心しているような様子を見せたのでアイクとララベルがどういう関係になったのか。セネリオもアンナもすぐにわかった。

アイクはララベルだけでなくもうララベルの中にいるかもしれない命の心配もしているのだろう。

「あいにく忙しすぎて寂しがつてる暇などありませんね。それで？ あなたも我々に加勢しに来てくれたんですか？」

セネリオは一応そう聞く。アンナの事だから商売がらみだと思いが返答次第では戦力として引きずり込めるかもしれない。

もつとも期待はできない。珍しくララベルのいない時こそアンナの独壇場だからだ。

「物資的な意味ではね！ 松明が欲しいのよね？ 1軍につき30個いかが？」

「ぜひください！ お代は後払いで」

値段を聞く間も惜しいセネリオは即答する。

交渉成立とみてアンナは30個の松明を置いて行く。

「次はアルバレアか……じゃあギムレーを倒して生きて戻ってくるのよー！」

「ご心配なく……アンナさんこそ合図が出たら速やかに商いを終えて一番近い陣に避難するように」

今回の策ではなるべく陣の外に出ない方がいい。他の軍の陣に行こうとするアンナ

を本当は止めた方がいいのだが今までの例からして聞く耳持たないだろう。それに他の軍では松明が底をつきているかもしれない。それになかった。

ヒイーン！

商品を積んだ馬車に乗ってアルバレア軍の陣に向かうアンナに返事をしセネリオは松明に火をつけて持つ。松明を持つのなら魔道士でなくてもできるのだがこの場では遠距離魔法が使えるセネリオが適任だった。

松明で視界を確保した作業員は直ちにシューターの組み立ての再開に移る。

(屍の攻撃は激化する様子はない。そろそろか……)

『ミラよ！ ふじようなるたましいをじようかしうけいれたまえ デイル』

ふとアカネイアの陣に侵入した屍が一斉に消滅した。

その直後に複数の騎乗した騎士とそのうちの一人にしがみついでここに来たシスターが陣に駆け込んでくる。

「チキ様！」

シスターは一心不乱に目当ての人物の名を呼ぶ。

「キット！」

「シスター殿！」

チキと彼女を守りながら指揮を執っていたカイルがキットの姿を見て驚く。

チキとキットが護衛とともに留守を預かっていたはずの船内で、キットが夕食に呼んでもチキは現れず、部屋まで行って毛布が盛り上がっていることからチキは昼寝から起きてこないのだと思い、彼女がくるまっっているはずの毛布をはぎとるとその中に入ったのは予備の毛布やら袋やらとにかく毛布を膨らませるために手当たり次第に入れた物ばかりだった。

その後キットは船を見張る最低限の人員だけ残し、護衛兵たちとともにギムレーの潜む山を駆け上がってきたのだ。

「チキ様！」

チキを見つけてキットは彼女のもとに駆け寄る。そして……、

パアン！

チキの頬を思いきりひっぱたいた。

「この危険な時に勝手なことを！……あなた一人のためにどれだけの人が迷惑していると思っっているんですか！」

チキが衝撃から立ち直るのを待たずキットは怒鳴るがチキはひるまない。

「いえ！……こんな時に船になんか籠っていられない。私もギムレーと戦う！」



「そんなひび割れた石ですか？　それで神竜になれたとしても本当にギムレーに通うと思うんですか？　私には足手まといがいいところだとは思えません！」

当然のようにキツトは譲らない。

「いいえ通じる！　キツト、ノーヴァの人たちこそわかつてない。神竜は人から崇められて遊んで暮らしているべき存在じゃないの。神竜の「霧のブレス」はすべての竜に通うする。地竜や暗黒竜さえも倒せるくらいに、ギムレーみたいな人を脅かす竜が現れた時こそ私たち神竜が戦うべき時なの！」

「いくら神竜でも人の姿に戻ったら私たち以上に無力です。それでチキ様の身に何かあったらチキ様を心の支えにしているバレンシア教徒は何にすげばいいんですか……それだけじゃない。チキが死んだら母様もチキをバレンシアに連れてきたことを後悔してしまう。何より私もチキに死んでほしくないのよ！」

バレンシアの信徒や母チエルシーそして自身の涙と本音を持ってチキを翻意させようキツトはまくしたて乞う。

チキはそんなキツトの涙をぬぐい手を握ってから言う。

「ごめんキツト。……それでもギムレーに大きな傷をつけられるのはファルシオンと私くらいなの。私が安全なところに隠れてカイルに任せきりにしてたら、この戦いには勝てないかもしれない……私だつてキツトやチエルシーに死んでほしくないんだよ」

「チキ……うう」

チキを意志を変えることのできない自分を悔やみキツトは嗚咽を漏らす。

「カイル様ご無事ですか？ ようやく屍の出現がおさまって……あらう！」

そこにカーシャとティアがやって来てチキとキツトの様子に戸惑う。

船で待っているはずのチキとキツトがなぜここにいて、なぜキツトは泣いているのか皆目見当がつかなかった。

そこへさらに状況の変化を告げる音が聞こえてくる。

パアン！

突然空から快音が聞こえてその場にいる全員が頭上を見る。

パアン！パアン！

空に向かって小さな火の玉が上がり夜を照らしている。

「合図だ！ 例の物を持って兵にあれを展開するように伝えろ！ 急げ！」

カイルはすぐに側近数名にそうまくしたてる。

「は、はい！」

側近たちはすぐに例の物とやらを持って兵のもとへ急ぎ駆けていく。

「カイル様、私とティアにもお命じくください。天馬ならすぐに飛んでいけます」  
すぐさまカーシャがそう志願してきた。

「…よし頼む。ティア…だったね。君もいいかい？」

カイルは初対面のティアの方を向き彼女に尋ねる。

「はい王子！ お任せください」

「ありがとう。二人ともくれぐれも弓矢に気を付けて」

「はい！」

ティアも強く応えカーシャと手分けして別方向の伝令に向かう。

ブオオン！ブオオン！

各陣地の端でセネリオから各軍に大量に配布した例の物、光の結界が発動する。

合図が出た後陣内の屍を掃討し終え、灯りの不安がない軍は光の結界を起動するよう  
に言っている。

戦いが始まって結界を発動させるまで時間を置かせたのは敵をできるだけ倒して  
きたかったからだ。

この結界が起動している間は敵味方共に結界を通って進むことができない。

そのため現在陣へ侵入するには結界が張られていない一本道を通るか、敵の天馬騎士  
やグリフォンナイトが飛んでいくしかない。

だが一本道には準備を整えた迎撃部隊が待っている。そして敵の飛空部隊にもすでに完成したシューターで対処できる。結界が張られている軍の陣は松明と篝火が燦々と灯っている。

この篝火によって陣内に侵入してくるような飛空系に対しシューターでも命中精度はよくなり、そのシューターの中で未完成の物を完成させるための視界も確保できる。どこの軍でも兵士たちが数少ない結界の張られていない箇所を強行突破しようと試みようとする屍に備え、作業員たちはシューターを完成させるべくせわしなく手を動かしていた。

屍たちは最初は細い一本道への強行突破を試みたがヴァルム大戦を潜り抜けた精兵に少数対少数で挑んでも勝ち目はなく、空から奇襲した天馬騎士もシューターや弓兵に撃破されていった。

こうして各陣地でシューターは次々と完成していつてる。試射する暇はなくぶっつけ本番となるのが気がかりだが。

防衛戦には勝利した。あとは残りのシューターがすべて完成すれば……。

だがそう甘くはないようだ。

グオオオオオオ！

すべてのシューターの完成を待たず破壊と絶望の竜ギムレーが火口から姿を現した。

バラン クラス：ジエネラル

「覚醒」のカラムの先祖。アカネイア王国軍の重騎士。実はカイルとカーシャとはワレーンの領主館を警備している時に何度も会っており、ヴァルム大陸への調査団にも属し第一次ヴァルム大戦では何度かカイルの護衛を務めていた。だがあまり目立つ容姿と声ではないためかカイルたちはバランと会うたび初対面だと思っている。

## 第4 2 話 神の力

山中の戦闘で目を覚ましたのか咆哮とともにギムレーが火口から姿を現した。完成したシューターは8割少しいったところだ。

「全ては作り切れなかったがこれだけあれば重畳だ。撃て…撃てええええ！」  
ペレジア以外のすべての軍の指揮官がシューター兵へ発射命令を出す。

ドオン！ドオン！ドオン！ドオン！ドオン！

砲台の内部に封じたサンダーの魔道書による魔道砲サンダーボルトを。

ガアン！ガアン！ガアン！ガアン！ガアン！

巨石を打ち出し多くの範囲を押しつぶすストーンヘッジを。

ズダアン！ズダアン！ズダアン！ズダアン！ズダアン！

シューターの矢では最も大きな威力を誇るエレファントを。

全砲台はギムレーの弱点の首元に向けて射出する。

全てが首元に当たってるわけではなく、狙いを定める前に撃つたため翼や胴体など首とは別の方に当たった矢もあれば首近くの頭部やその近くなどに当たった矢もある。

かつてない巨大な竜が的だ。標的の弱点には当たらずともあさつての方に飛ぶとい

うことは少ない。

アカネイア陣地。

「カイル様！」

「ああ！」

カーシヤから声がかかるとカイルは天馬のカーシヤが乗ってるところの後ろに乗り、カーシヤに捕まる。

攻撃が一段落した直後にギムレーの頭上にカイルを降ろすのだ。ペレジア（旧ドルーア）の時のように。

グオオオオオ！

砲撃による轟音の中ギムレーがうなる。

「……………」

ギムレーの様子を見てセネリオは魔道書を取り出す。

『ふきあれよ！ ふぶきのごとく！ ブリザード』

セネリオもシューターに続いてギムレーの頭上に吹雪の魔法を起こす。

これだけのシューターを受けてギムレーはまるでダメージを受けた様子を見せな

かったからだ。

『ミラよ！ ふじようなるたましいをじようかしうけいれたまえ デイル』

キツトもダメ元で唱える。

しかしデイルの魔法は古からあまりに強い魔物には通じない。千年前の解放戦争でも邪神には通用しなかった。——ドーマの正体を考えれば魔物と扱っていいとは思えないが——

そして今回の戦いでもあまりの屍の多さに単に消滅し損ねた屍も多く気付かなかつたが、実は屍の大將格には通じておらず彼らは最初からデイルによる消滅の対象外だった。

例によってギムレーにも効かないどころかデイルを唱えられたことにも気づいていないだろう。

『ひとときのみじつたいをもつてきをほろぼせ！ イリユージョン』

ガールは数千体もの天馬騎士の幻影を空中に召喚する。

「行けええ！」

ガールの号令を受けて天馬騎士は一斉にギムレーにかかる。

ギムレーは不気味に息を吸った。その直後。

ゴオオオオオ！



たった1回の黒い息吹で数千体の天馬騎士たちは跡形もなく消滅した。

ギムレーが息吹を吐いたのは天馬騎士たちがいた空中だったため地上に被害がないのは幸いだったが、

「そんな……彼女たちは歴戦の騎士と変わらない強さなのよ。たった一息で……」

ガールは愕然と地面にへたり込んだ。

グオオオオオオ！

シューターの総攻撃、セネリオの遠距離魔法ブリザード、キットの消滅魔法デイル、ガールの幻影魔法イリリュージョンのすべてを受け流し、ギムレーは上昇する。

もはやシューターや遠距離魔法の射程外だ。

「もう届かない。誰にもギムレーを止められない」「やつぱりこの程度じゃダメなのか」「もうだめだ。この世の終わりだ」

どの陣からもそんな嘆きと絶望の声がこだまする。

その中でペレジアの陣では絶望の声の他に。

「偉大なる神竜ギムレー様の世に栄光を！」「ギムレーさまー！俺たちはあなた様の忠実なしもべです」「どうか俺だけでもお助けをー」

暴動を起こした者や内心ギムレーにおののきながらぎりぎり自制していたペレジア兵もギムレーに向かって膝まづき、後方で拘束されていない兵は手を組んで祈りを捧げ

ていた。

アカネイアの陣では、

「くっ！ ……カーシャ、僕をギムレーの元まで」

これ以上待つてたら完全にギムレーを止められなくなってしまう。

そう思つてカイルはカーシャに求める。

「駄目です！ 今のギムレーはカイル様を近づける真似はしないでしようし、頭上まで行けても1度刺されたくらいで倒せるとは思えません。すぐに振り落とされますよ。今度は地面に叩きつけられて死んでしまうかも…」

「でも他に方法がない！」

拒絶しようとするカーシャをカイルは一喝する。

グオオオオオ！

その時ギムレーは動きを止める。

「……………」

上空から攻撃する気か！

全員がそう思いある者は身構え、ある者は覚悟を決め目をつぶる。

.....

だがギムレーは何もしてこない。人間たちに慈悲が芽生えたのではないようだ。現にギムレーは何かに抗うように身震いしている。

その頃、ギムレーの頭上では複数の精神体がせめぎ合っていた。

「邪悪なる者たちよ。これ以上は行かせませんよー!」

緑髪の女性の思念体はこの戦いの敵にしてすべての元凶たちにそう告げる。

元凶の片割れガルバザンは千年前のシエロ地下遺跡で暗黒竜になったグエンカオスを通してガルバザンとグエンを制止した声を思い出しつぶやく。

「まさか……ガーゼル神? 貴方ともあろうお方がまた俺の邪魔をしようというのか?」

だがガルバザンの推測はふたつの意味で違う。

千年前にガルバザンと彼の宿主グエンカオスを止めたのは竜族エミユの王女ミラドナ。もつともある歴史的経緯でゾーア人たちは竜の姿のままシエロ山の地下で眠るミラドナをゾーア人が信仰する暗黒神ガーゼルだと思い込んだので、ミラドナをガーゼラだと思ふこと自体は無理のないことなのだ。

ガルバザンの考えが違うもう一つの意味にギムレーの思念は気付きおののく。

「いやこいつは……まさか！ 貴様は私の原物だな。貴様がナーガか？」

「……とどまりなさい。この場に」

ナーガは彼らに応えず巨竜の動きを止め続ける。

グオオオオ！

身震いしながら動きを止めるギムレーに地上にいる全員が訝しむ。

「カイルもカーシャも押し問答をやめて頭上で制止する巨竜に見入っていた。

「なんだ？ どうしたというんだ？」

「……」

（覚醒の儀を行いし者よ！）

この場に突然緑髪の女性の幻影が現れる。

「うわあ」「ゆ、幽霊？」

ほとんどのアカネイア兵は驚き数歩下がった。

だがカイルとカーシャだけは彼女に見覚えがある。

「あの時の神様？」

カーシャはガルダ跡の地層で見たことを思い出しつぶやくように言う。  
チキも女性の幻影を呆然と見ていた。

「まさか……あなたが？」

カイルは天馬から降り、女性に歩み寄る。

「ナーガ様、もしやギムレーが動きを止めたのはあなたが？」

ナーガはうなずき肯定する。

（ええ、ほんの少しの間だけ私があの竜の動きを止めます。その間にあなたは少しの間とともにギムレーの首の上に攻撃を加えてギムレーを封じ込めてください）

「ええわかりました！　そういうことだ。カーシャ行こう！」

「はい！　カイル様しっかり捕まって……」

再びカイルは天馬に歩み寄り乗り込もうとするが、ナーガは二人を止める。

（いいえ、それでは間に合いませんしあなたとその方の二人では無理です。私がメガスワープでギムレーの上体の上に戻りますから覚醒の儀を行いし者は一緒に行つてほしい仲間を選んでください。今すぐに！）

「わかりました。ええと……」

「私も行くよ！　いいよねカイル」

チキが進み出る。

「チキ様……」

キットはこれ以上説得しようとしても無駄だと諦めチキを見送る。

「チキも行くのか……ナーガ様、ギムレーを封印したらあの巨竜は浮遊したままではありませんか。その時ギムレーの上体に乗ってた者は地上まで戻ってこられるんですか？」

ナーガはうなづく。

「ギムレーが活動を止めたらギムレーに乗っていた者たちは私がもう一度メガスレスキューで地上に戻します。そのくらいの力の余裕があります」

「そうですか。……あの、この場にはいない者は無理ですか？」

ナーガの力でギムレーとの戦いに複数人呼べるのはありがたいのだがこの陣にいる者たちでは心もとない。そう思ってダメ元でナーガに聞いてみる。

（もちろんそうしてください。特にイストリアの陣にいる異大陸の二人は人の子の中で最も優れた力を持っていますから是非加えてください。私とあなたの会話は他の陣にも伝わっていますので説明も不要です）

神とはいえ現実離れた現象を次々と引き起こせると言うナーガにカイルは少し引く。

「そこまでできるんですか。……では……」

カイルはともに戦う仲間を決めて念じる。言葉に出さずとも伝わったようでカイルの選んだ者たちは淡い光に包まれこの場から消失する。

カイルたちに遅れてチキが最後に光につつかれる。その刹那、

「ナーガ……私、神竜の王女としての責任を果たすためにも必ずギムレーを倒すよ。そのため……行つてきます！ お母さん！」

チキは精一杯の笑みでそう強く宣言し消失する。

「どうか気を付けてわが娘……チキ！」

ナーガはそんな愛娘に微笑み返し、彼女を見送った後罪悪感から心中で詫びる。

（チキ……千年も眠らせた挙句このような窮地に追いやることになってごめんなさい。……盾からオーブが失われても集め直すような者が現れると知っていたら……）

## 第43話 選択

カイルと彼の選んだ者たちが空高く浮遊したまま動けないギムレーの背の上に転移する。

「カイル様の進む道は私が切り開きます！」

天馬に乗ったままカーシャが告げる。

「俺がギムレー退治に一役買ったと聞いたたら親父たちも仰天するな」

斧を構えルツツがうそぶく。

「タグエルとラグズ、竜族……そして人間との共存をお前などに邪魔されてなるものか」  
ベルモットは獣石を握りしめ化身の構えをとりながらギムレーに布告する。

「ヴァルム騎士として最後の戦いか。相手にとって不足はない」

馬上で槍を回しフェイスは息巻く。

「ではやるか！ テリウスとアイク傭兵団、ララベル……俺の家族たちのためにも」

アイクはギムレーの頭部に首元をむける。

「あれがギムレーとともにこの事態を引き起こした邪悪な意志ですか……酷い有様です」



もう魔道士でないカイルたちにも見えるほど濃い瘴気となった赤いガルバザンの亡霊を見てセネリオはつぶやく。

「二度敗れながらも未だにヴァルム一の騎士と呼ばれるこの身、せめてカイル殿の戦端を切り開くぐらいのことはやり遂げて見せよう」

ギムレーの upper body に現れた十二体の屍を前にジーンは言う。

「ふっ！ まるで千年前のアルムとドーマとの戦いの再現だな。この竜に本当にファルシオン以外の獲物が通用しないのか試してみるか」

銀の剣を持ちファルスが息巻く。

「ギムレー、何としてもあなたを倒す！ ……この力をすべて使い果たしても」

ひび割れた神竜石のある懐に手を当てチキは覚悟を決める。

「ギムレー、ガルバザン、お前たちの暴虐はここまでだ。これで本当にすべてを終わらせるー！」

ギムレーの頭部とそこを守るガルバザンにファルシオンをむけカイルは宣言する。

「おのれええええええっ!!! 虫けらごときが赦さぬぞおおおお!!」

自らの体の上に乗れこみ無礼の限りを尽くす人間たちにギムレーは吼える。

その直後ギムレーの体内から出てきた黒き稲妻がカイルたちを襲う。

「ぐあああー！」

あまりの衝撃に彼らは全員膝をつく。まだ体中が痺れている。

衝撃を受けたのはカイルたちだけではない。

(うぐ……)

ナーガの精神体もうめきギムレーの制御を失い戒めから解かれたギムレーはあらぬ方角に飛んでいく。

(まだです……彼らを守るぐらいは……)

それでも懸命に巨竜を抑えカイルたちを真下に振り落とす真似だけはさせまいとあがく。

そんな中動けないカイルたちにとどめを刺そうと屍たちが殺到する。

『われらにおおいなるじひを！ リザーブ』

すかさずセネリオは杖を掲げリザーブの詠唱を唱える。カイルたちは光に包まれ立ち上がる。

「やあああ！」

ガシアアアン！

カーシャの槍が屍の一体を破壊する。

「ふっ！」

「はあああ！」

彼女に続いてフェイスとジーンも槍を振るう。

ガン！

ドシユ！

「今だ！ 奴の首の上まで一気に走れ！」

「ああー！」

アイクの掛け声とともにカイルたちと屍を倒したカーシャたちはギムレーの首めがけて駆けていく。

残りの屍たちもこれ以上進ませまいと彼らの前に立ちはだかる。

「おおおおおー！」

瞬時に大兎に化身したベルモットは屍を弾き飛ばす。

ズガアアアアン！

「うらああー！」

ガキーン！

ルツツの振るう斧が敵の頭蓋骨をかち割る。

『ふきすすさべー！ すさまじきたつまきよー！ トルネード』

ビュオオオオオ！

セネリオの起こす竜巻が屍たち3体を吹き飛ばす。

『なんじ、死のふちよりきたれり！ デス』

ガキイイーン！

ファルスの召喚した死神の幻影が鎌を振るい2体の屍の首を切り落とす。

「はあああああ！」

ズガアアン！

アイクの斬撃とそこから発生した衝撃波が残り3体の屍を蹴散らしていく。

「おおおおお！」

屍の全滅に目もくれずカイルとチキはまだ駆ける。

「うらあああああ！」

ズガン！

「ぐあああ」

だがギムレーの首元から来た赤い人魂が大剣の幻影を振るいカイルを斬りつける。

「ガーゼル神までが俺を見放したというなら二千年前同様俺自身がギムレーという器に乗っ取ってガーゼルとなるまで」

ガルバザンはついに神にまで憎しみの目を向けカイルたちを殺そうとする。

「チキ……離れろ……ぐおお」

大きな傷を負いながらカイルは懸命に立ち上がる。

「カイル少し待ってください……『かのものにじひを！ リライブ』」

リザーブこそ用意したもののリカバーまでは持つてこれずセネリオはカイルにリライブをかける。それでも治癒魔法の効果をセネリオの魔力が補いたいていの傷はふさがる。

「こいつは私に任せろ……はあああ！」

カイルの前に割り込みジーンが槍を握つて馬ごとガルバザンに向かって駆けていく。

「ふっ……だああああ！」

ジーンがガルバザンを突き刺す。

——かに思われた。

ピタ！

ジーンの前はガルバザンの前に止まりまるで動かない。

「フン、死ねえええええ！」

ズガン！

「ぐあああ」

ガルバザンは一撃でジーンの前を切り落とし、ジーンを馬から叩き落とす。

「ぐおおお」

背中を強打したジーンは立ち上がれない。

「とどめだあああ！」

『とべー！ われのもとへ！ レスキュー』

ブオン！

とどめに振り下ろしたガルバザンの斧はジーンに届かなかった。

ジーンはガルバザンの前から姿を消し仰向けのまま後方のセネリオのところまで転移する。

カイルたちは後方に戻り、ガルバザンから距離をとる。

グオオオ！

この間もギムレーは目的地も決めず飛び回る。そうすることで一層早く自身の動きを縛るナーガを消耗させようとしているらしい。

「攻撃できない？ なぜだ」

思わぬ現象にカイルはうなる。しかしチキは心当たりがあるようですぐにピンとくる。

「そうか！ マファーと同じだ」

「マファー？」

初めて聞く単語にアイクは聞き返す。アカネイア人のカイルたちやヴァルム人のファルスたちも知らないようでチキに耳を傾ける。

「昔アカネイア大陸に亡霊を操って相手に攻撃させない魔法があったんだけどあの蛮族は怨念の塊だからその魔法と同じ現象が働いてるみたい」

「相手に攻撃させない……：そういえば以前ギムレーの背の上で戦った司祭は僕に斬りつけられた時、驚いたまま倒れていったな。同じような魔法を使えたからか……：ならば！」

以前の戦いを思い出したカイルはファルシオンを相手に向ける。マフー同様の力を持つザツハークを破ったこの剣ならガルバザンを斬れるはずだ。

「はあああー！」

「ふん」

ギイン！

ガアン！

カイルはガルバザンと切り結ぶ。だが生前は屈強な戦士だったガルバザンの筋力はすさまじく軽くあしらわれてしまう。

「はっ」

ズガン！

「ぐあああ」

とうとうカイルは押し負けギムレーの背の上に叩きつけられる。

「とどめだ、死ねやあああ!」

ガルバザンは大剣を振りかぶる。カイルが死ねばガルバザンにもギムレーにも攻撃できるものはいなくなってしまう。しかしこの場にガルバザンに通用する武器を持つものなど……。

「ぬうううん!」

ズガン!

「何だど?」

思わぬところからの攻撃をガルバザンはたじろぐ。剣で受け止められはしたものの特定の武器とプレリユードというリーベリア大陸の光魔法以外ではそれも叶わないはずだが?

「ちっ、一撃与えられなかったか」

ガルバザンに斬り込んできたのはファルスだった。血を流しながら右手でバレンシアの聖剣ファルシオンの刃の破片を握りしめている。

この遠征のときからファルシオンの刃の破片を持ってきていたのだ。こんなことまで予想していたのではない、戯れにげん担ぎとやらを試みただけのつもりだった。

「ファルス……なんて無茶を」

チキはファルスに気遣う声をかけるが意に介している余裕はない。



「この大陸の竜を封じた剣か。だがそんな芸当がいつまで続けられるかな？」

グアン！

ギイン！

ファルスは激痛をこらえながら刃を離さず罅迫り合いを続ける。

「ぬうん……ぐあ」

ギシン！

「終わりだああ」

ザク！

「こ、小僧おおお」

ファルスの右手を切り落とそうとしたガルバザンの背をカイルが斬りつける。傷は深くファルス以上に創痕がひどい。

「よそ見をしている場合か」

その隙を見てファルスが挑みかかる。

グアン！

「く、くそ……ギムレーはまだ加勢できんのか？」

グオオオオオ！

同意するようにギムレーはうなる。まだナーガの縛りが解けないらしい。

グアン！

ギイン！

ガルバザンがギムレーに助けを求めた際にできた隙に二人は見逃さない。

「今だ……はあああああ！」

必死に痛みを意識の片隅に追いやりファルスは全霊をかけて最後の一撃を見舞う。

渾身の二撃を見舞おうとしているのはカイルも同様だった。

「いくぞ……はあああああ！」

ズギイイイン！

ファルスの奥義「月光」がガルバザンのわき腹を斬る。

「ぐあああああ」

同時にカイルの剣も。

ズゴオオオン！

「ぐあああああ」

カイルが折を見てアイクから稽古をつけてもらった時にやり方を教えてもらった「天空」の1撃目がガルバザンの右手を斬り落とす。

それと同時に、

ブシユウ！

ファルスの右手の傷から勢いよく血が噴き出て感覚がなくなる。しばらく右手が使えないどころでは済まなそうだ。

(無念……私の代で覇道はならずか……)

覇道の断念を悟った途端ファルスの意識は途絶える。

「これでとどめ……ああああー！」

ブシユウウウウウ!

天空の2撃目がガルバザンを両断する。

「そんな……馬鹿なああああ」

ガルバザンは赤い霧となり霧散する。今まで戦った屍と同様に。

だがガルバザンの意識は昇天せず未だ現世の空中を漂っていた。

「何故だ? 俺は我らゾーア人を迫害するユグド人に勝ち奴らに罰を与えていただけ……それなのになぜ同胞は俺を裏切り、我らが敬っていた神までもが俺の邪魔を」

「本当にそれだけでしたか?」

「お前は?」

ガルバザンは眼前に目を凝らす。

そこにはいつの間にか金髪の少女がガルバザンを憐みの眼差しで見ている。

「邪神皇帝と名乗って権威を振るい、ユグド人だけでなく同じ部族の人々まで奴隷とし、挙句神の力を得るためだと何十人も少女を魔獣に捧げた」

「な……なぜそんなことを知っている？」

「その結果100年後にカーリユオンは奴隷を率いてあなたと戦い、私が助けたユトナも彼と合流しともに戦った。……あなたに彼らを逆恨みする資格はありません。ましてや八つ当たりした後世や他の大陸の人々をも巻き込むなど」

「ま、まさかあなたはガーゼル神？ ではギムレーを止めたあの女は……？」

少女、ミラドナはガルバザンからの問いに答えない。

「あなたをみたび現世に放つわけにはいかない。ガルバザンであったころの記憶を忘れるまで煉獄の炎に焼かれなさい」

「ま、待て……お待ちを……」

ミラドナは詠唱も唱えずガルバザンの魂をいずこへ転移させる。

それを見届けるとミラドナの分身は悲しげな表情のまま消失した。

ガルバザンの魂は散った。後はギムレーを封じるのみ。

だがナーガの力が弱まったらしく、ギムレーは頭をカイルたちの方にもたげる。  
「全員避けるー！」

カイルの怒声でその場で意識のある全員が散る。

気絶していたファルスはベルモットが、ジーンはフェイスが抱えて逃げる。

ブオオオ！

ギムレーは己の首元にブレスを吐きかける。平気ではないはずだが弱点に辿り着かれて背に腹は代えられないのだろう。

ブレスを吐き終わると同時にルッツが斬りかかる。

「うらああああー！」

ガキーン。

ルッツの斧は首元に鋭く当たる。だが硬すぎる。

「くそ……本当にここが弱点なんだろうな」

「よし！ 私も……と言いたいところなんだが」

ルッツも続いてベルモットも攻撃に加わりたと思うも突進という己の攻撃手段ではかなわず己の背で気絶しているファルスを守ることに専念する。

そこにベルモットの背にもう一人押し付けられる。

「うお！ ……こいつも私が守れってかよ」

ベルモットに気絶したジーンを押し付けたのはフェイスだ。

「すまない。しかし彼を抱えたままでは思い切り攻撃できないのでな……おとおおおお！」

フェイスは馬を疾走させる。ルッツは慌ててその場から離れた。

ズガン！

月光の秘技も加えたので多少ダメージは与えただろうがやはり硬い。

「ならば魔法で……『きせきのかぜよ！ さけ！ しっぷうのごとく！ レクスカリバー』」

ブオオオオ！

グオオオオオ！

今までよりダメージが聞いたのか、シューターなどの遠距離からの総攻撃でわずかについた傷に響いたのかギムレーはどうとううめき声を上げる。

「効いている！ ……アイク今です！」

「わかつている。……あああああああ！」

アイクは剣を振りかぶりながら首元まで疾走する。

「だあああああああ！」

ズガン！ ズガン！

グオオオオオ!

天空の二撃にまたもギムレーはうめく。

「おおおおお!」

すかさずカーシヤも槍を首に突き立てる。

グアアアアア!

「よし……今ならこの一撃で……はあああ」

カイルは剣を掲げ首元に狙いを定める。

「今だ!」

「なっ?」

その時を待っていたようにギムレーの顔はカイルの眼前に迫る。

「しまった!」

ブオオオオオ!

至近距離からギムレーはカイルたちに己のブレスを吹きかける。

だが――

「な、何iiiiiiii?」

ブレスはカイルたちの誰にも届かなかった。たった一人を除いて。

「金色の竜?」

そこにはカイルたちをかぼうように金色の竜が立っていた。

「ま、まさかチキ……チキなのか？」

竜は答えず口を開ける。

ビュオオオオオ!

グオオオオオオオ!

竜はギムレーの顔面に思い切り霧を吐き出した。ギムレーは思わず顔をのけぞらせ竜から離す。

「今だよカイル! ギムレーにとどめを」

竜がチキの声でカイルに促す。

「ああ!」

カイルはうなずき剣を振りかぶる。

(ぐぬ……こうなつては最後の手段だ。竜の姿は保てなくなるかもしれないが過去へ行けばこいつらをやり過ごして何も知らん過去のこいつらもろとも世界を滅ぼすことができる)

その時ギムレーの前に青い円状をした何かが現れる。

「……? あれは!」

カイルは剣を振りかぶったままその何かを見る。



（いけない。ギムレーは時空移動の秘技を使うつもりです。そうなればギムレーを過去に取り逃がすことになってしまいます。カイル！ 急いでとどめを刺しなさい！）

いつもの神々しい口調も忘れナーガはカイルに早くとどめを刺すように催促する。

だがカイルの心中では、

（ギムレーが過去へ……あの中に飛び込めば過去に行ける？ ……これは好機なので  
は）

ファルシオンでもチキでもギムレーを滅ぼすことはできない。

でもギムレーを過去という異界に行かせれば奴はこの世界から完全に消失する。

そして自分もともに過去の世界とやらに行けばそこでギムレーを倒すこともできる。

危険な賭けでもある。そこにはすでにその次元のギムレーもいるのだから。

でももし仮にその世界では教団がギムレーの封印を解いていなければ、このギムレーを倒した後教団が封印を解く前に奴らを倒せばその世界もギムレーの脅威から取り除ける。

父も母もギムレーや教団に殺された多くの人が助かる未来もあるかもしれない。

青い何か、時空の門はすぐそこに迫っている。

僕はギムレーの首にファルシオンを……。

今すぐに突き刺す↓第44話へ

過去に行くために今は待つ↓第46話へ

正史  
✓

## 第44話 封印

↓すぐに突き刺す。

駄目だ。やはりできない。

ギムレーとともに僕も過去に行ってもギムレーを倒せなければ、過去に世界にはこちらの世界から来たギムレーと過去の世界のギムレー、二体のギムレーが存在することになってしまう。この二体が巡り合えばとんでもないことが起きる気しかしない。

それに僕が過去に行けばアカネイアの人々はどうなる。なによりカーシヤやエルスとマリアンヌに僕は新しい国を作りカーシヤを貴族に引き立てると言った。そんな大層なことを言っておいてギムレーを滅ぼせる確証もないのに祖国を捨て僕一人異なる世界へ行くのか？無責任この上ない最悪の王族だ。

もつともその二つの理由は正義名分という言い訳で本当は彼女と離れたくないだけなのかもしれないが。

ようやく相思相愛だと認め合えたカーシャ。これから何があっても彼女を手放したくない。

(僕はとんだ親不孝者だな)

ズブリ、

それだけの考えを刹那に浮かべカイルは今立っている場所、ギムレーの首の後ろとなる箇所一剑を突き立てる。

グワオオオオオオオ！(おのれえええええええ！)

ギムレーは大きな断末魔を上げ首をカクンと落とした。

その巨体は角度を大きく下げいずこかへ堕ちていく。

「うわああああ！」

カイルたちが悲鳴を上げた瞬間。

「あああああ！」

そこはアカネイア軍の陣地だった。もう夜も明け朝日が昇り始めている。

「カイル殿下！」

アカネイア兵がカイルの名を呼ぶ。

「カーシャさん！」

ティアがカーシャの名を呼ぶ。

「チキ！」

キットが転移と同時に人の姿に戻ったチキの名を呼び涙ながらに彼女を抱きしめた。その拍子にばらばらになった神竜石だった破片があたりに転がり落ちる。だがそれを気にするものはチキ以外いない。

「戻ったのか？」

辺りを見回すとアイクたちやファルスたちはいない。ナーガの大魔法メガスレスキューで各員元々いた場所へ戻されたらしい。

「……！ そうだギムレーは！」

しばらくしてギムレーの事を思い出したカイルは誰にともなく尋ねる。兵たちは顔を見合わせ、カイルの側近の一人が進み出て報告した。

「カイル様たちが姿を消した後どこかへ飛んでいきましたな。それ以上は……」

わかりませんとまでは言葉にせず首を横に振る。

「大丈夫！ もうギムレーは眠りについた。しばらくは復活しないよ」

「え……？」

ふと声の方へ視線を上げるとチキがそう言ってきたのがわかった。徹夜をしのいで今頃眠気が来たのか目を上げているのも辛そうだ。

キツトはチキの肩に手を乗せ促す。

「そうです。戦いは終わりました。ですからチキ様、もうお休みください。船まで……いえノーヴァまで私がお送りしますから。チキ様は好きなだけお眠りください」

キツトらしくない魅力的な提案にチキは首を横に振る。

「ううん。まだ伝えなくちゃいけないことがあるの。……今寝たらみんなが待ちきれなくなるまで寝たままになっちゃやうだろうから頑張つて起きてる」

「チキ、少しぐらいみんな待つよ。君のおかげでギムレーを倒せたんだ。ヴァルム皇帝にだつて文句は言わせない」

カイルの申し出にもチキはうなずかない。力ない声でカイルに懇願する。

「……いいえ待たせすぎて怒ることもできないくらい長く寝ちやいそうだから……だからカイル……早く各国……アカネイアの残り2つの国とヴァルムのどこか1国の王様を呼んで来て……お願い」

「わかった！ ……ええと」

ただ事でないチキの様子に大慌てでカイルは伝令を頼もうと適当な兵を探す。

「私が——」

「私が行きます！」

名乗り出ようとしたカーシヤを制してティアが進み出る。

「私が天馬や竜騎士を擁している国に知らせてその国に別の国への伝令をお願いしてここに呼びます。さあ早くご命令を！」

すでにある国の陣に行こうとしているティアは命令を催促する。

「わかった。ティア、アカネイアのどちらでもいい。その国の王にここへ来るよう頼んでくれ！ 大至急だ！」

「はっ！」

パカラ！ バサバサ！

ティアは大急ぎで天馬を飛ばし、ペレジアの陣へ向かう。あの国はギムレーのブレス攻撃以来天馬騎士は少なくなつたが竜騎士は多い。ペレジアからフェリアかヴァルムのどこかかの国へ伝令を頼むつもりだろう。

そんな中キツトはまだチキを気遣う。

「チキ様、本当に起きていて大丈夫ですか？ どうしても伝えたいなら私が代わりに伝

えますよ」

チキは首を横に振る。

「ううん。それより手を握っていて、気が緩むと寝ちやいそうだから痛いくらい」  
キツトはまだ何か言いたげだったがチキに言われた通り彼女の手を強く握る。

バサバサ！

ティアがもう一体の天馬に乗ったものを連れて戻ってくる。それは――

「よう！ ギムレーが動きを止めた途端、幽霊に連れられてイストリアから傭兵が二人消えちまったと聞いてどうなっちまうもんかと思っただけど、ギムレーは逃げたそうじゃないか。ひとまずこれでめでたしかな」

「カイル。戦勝を喜んでいる時に一体どうしたと言うんだ？」

天馬武者のナノハと彼女につかまって一緒に天馬に乗ってきたソンシン王リヨウヤだった。

その後しばらくして……。

「カイル！ ギムレーを倒したんだってな。アイネも後で礼を言いに来るってさ」  
フェリアの砂の王ザンザが息を切らせて駆けつけてきた。



ほどなくペレジアの司令官ジェルドも来るがその表情は晴れない。

「カイル殿すまん！ 我が兵の不始末で皆に迷惑をかけた。どうやって挽回すればいいものか」

ペレジア軍はギムレーに恐れをなした兵が起こした反乱の対応に迫われた結果、シューターの防衛や組み立てどころではなく、ギムレー討伐に役に立たないどころか造反部隊が他の軍にシューターの矢を撃ちこむわむしろ妨害行為まで働いた。ギムレーの手先だと言われても仕方がない。他国から攻撃されないだけ御の字だろう。

だがカイルはペレジアを責めるつもりはなかった。それより謝罪を聞いている暇も惜しい。

「いいえ、ギムレーは屍を蘇らせる現象を起こし、その巨体から放つ息吹で世界全てを破壊に陥れかけた。怖れを抱いても仕方がないでしょう。……それよりみなさん早く巫女殿のところへ！ 彼女が皆さんに伝えたいことがあるそうです」

チキの待つところにカイルは各国の首脳を連れて来た。その後ろにはカイルの臣下としてカーシャ、ルッツ、ベルモットが控えている。

「みんな……」

キットに手を握られ辛そうにチキは皆の方を見る。

チキの様子に呼ばれた各国の王は驚く。

たまらずカイルはチキのところまで駆けつけ話しかける。

「チキ！ みんな来てくれたよ。さあ早く君は何を話したいんだい？」

チキは緩やかに口を開きカイルの持つ盾を指さす。

「うん……カイルが持つてる封印の盾……そこにはまつているオーブをみんなに分けてあげて」

「え……？」

チキの言葉にカイルは驚く。

「でもこのオーブは封印の力の源泉で地竜や今やつとの思いでねじ伏せたギムレーを封印し続けるにはこのオーブがないと」

チキは首を横に振る。

「いいえ……今のオーブはギムレーを封印した影響で大きすぎる力を常に放っている状態なの……オーブをすべてはめた盾が悪用しようとする人の手に渡ったらギムレーを復活させることもできる」

「なんだって！」

やつとの思いで封印したギムレーも盾を悪用すれば復活させることができるという

事実にかイルだけでなく一同が仰天する。

チキは一度うなずいて続きを話す。

「うん。……だから1か所に集めておくべきじゃない。それにアカネイアのお宝を分けることは各国との友好の証にもなる。……大丈夫！ 言つたでしょ。今のオーブは盾にはめなくても封印の力を保つておけるつて……じゃあカイル。あなたはどのオーブを持つておきたい？」

チキに尋ねられカイルは5つのオーブを見て決める。

「これだ！ この光のオーブ……光を表すこの宝玉は僕が作る国の宝にしたい……いいかな？」

チキはこくんとうなずき手を差し出す。

「じゃあ残りのうち一つは私が……星のオーブをくれないかな。今度は星空が見られる夢を見られるように」

「……ああ！」

カイルは盾から青い星のオーブを抜き取りチキに渡す。チキは大事そうに懐にしまった

「恥ずかしいからあまり人に言いふらさないでね」

冗談ぶつた風にチキは言う。チキがオーブを持つてることを誰にも言うなという意

味だろう。カイルはうなずく。

「わかった。これから王になるうというのに大事な秘密を言いふらす口は持っていないよ」

「さあ！ 残りのオーブも他の王様に」

「ああ。さてと……」

カイルは盾を掲げながら皆の方を振り返り誰に何を渡したのかと考える。

「じゃあ俺には……その赤い……ええと命のオーブをくれ」

カイルとチキが話している間にキットが書き留め手渡された紙を見ながらザンザは申し出る。

「えっ？ ……いいけど一応理由も聞いていいかな。代々後継者に譲っていつてほしいから思い入れを持てる理由があればいいんだけど」

命のオーブを抜き取りながらカイルは尋ねる。

「……俺たちのいた砂漠は過酷だった。毎日死人が出るくらい。だから今アイネから任されている街に誰もが明日を保証できる国を建てたい。その象徴として命と名付けられた宝玉が欲しい。必ず大切に……。それにこんなことを言う資格があるのかわからないが俺たちが殺しちまった人たちを忘れない自戒の証が欲しいと言う意味もある」

最後は苦々しく言うザンザの言葉に納得したカイルは彼に赤い命のオーブを渡す。

「……そうか。カダインの人たちに報いるためにもあの町を必ず復興させてくれ」

「おう！ お前もカーシヤを泣かせるなよ。カーシヤが流しているのは嬉し涙だけだ」

「もうザンザ！ 何を言ってるのよ！」

命のオーブを手にとつてそんなことを言うザンザにカーシヤは口を挟む。

「ではカイル。俺たちソンシンには大地のオーブをくれ」

それからリヨウヤが進み出てくる。

「リヨウヤ殿らしいですね。やはり自然豊かな国にしたいと言うことでしょうか」

「うむ、赤いオーブも捨てがたかったがザンザからああ言われたら仕方ない。赤は俺が好きな色だったと言うだけだからな。……それなら緑色の、この大地のオーブが欲しい。ラム村の東はまだ森や谷が険しくてな。アルバレアやイストリアとの行き来は厳しい。村人の生活を楽にするためにもそこを整備して、安全に他国と行き来でき子供たちが駆けまわれる平地にしたい。そんな願掛けのためだ。駄目か？」

「いいえ。ソンシンのこれからの発展を祈っています」

カイルは快くりヨウヤに緑色の大地のオーブを渡す。

「無論だ。お前が作る国とどちらが豊かになるか競争だな」

そこへおぼえずとジェルドがやってきた。

「ならば私には闇のオーブをくれ」

「え？ ……確かにこれだけ余っていますが……いいのですか？ もう少し話し合ってもいいですよ」

アカネイアの歴史を悪しき方へ動かしたいわくつきのオーブを進んで受け取ろうとするジェルドにカイルは驚き本当にいいのかと念押しする。

「ああ。我が国ペレジアは宗主国のアカネイアを……カイル殿のお父上、クロス陛下を裏切つて作られた国だ。それに……どうやらこの島に上陸した時からギムレーを崇拜している輩が現れたようだな。あの忌まわしい竜を……かといってこれから国を盛り立てようという時にそんなことで一部の集団を弾圧するわけにはいかん。守護神ナーガも異教を否定しているわけではないし……そんなわけで我が国は先行きが明るいと見える状況ではない。ならばあえて今のペレジアに合った闇の名を持つオーブを手元に置いてそれをバネに今の状態から脱しようと言う気持ちを起こしたいんだ。どうだろうか？」

「ふむ……」

カイルは恐る恐る盾にはまったままの闇のオーブを触ってみて、それからそのオーブを抜き取りしばらく眺めてみる。

……。

以前チキから返された時同様自らの心に邪心が沸き上がる様子はない。

「わかりました。でももし何か異変があればすぐ知らせてください」

おずおずとカイルは黒い闇のオーブをジェルドに渡す。

「うむ。日々これを見ながら過去と現在への戒めとしてよりよい未来を目指すことを誓おう」

「ええ。我が国にもお手伝いできることがあれば言ってください」

できればチキの言いつけに背いてでも闇のオーブだけはどの国にも預けずにアカネイアにある神殿に奉納して権力とは切り離しておきたかった。

今から遠い後々の未来を考えればそうした方がよかったのかもしれないがカイルたちが知る由はない。

オーブが各国に分けられるのを見計らってチキは膝から崩れ落ちる。

「チキ様！」

キツトは慌ててチキを抱きかかえる。チキは薄く目を開けた。

「大丈夫。神竜の力を失った反動で眠くなっただけだから。……ちよつと長く眠ればまた元気になるよ」

カイルはハツとする。チキの足元は竜石だったものの破片が落ちていた。

「やっぱり……あれだけ傷ついた竜石での変身は無理があったのか……僕がふがない

ばかりに」

自らの無力を呪いカイルは拳を握りしめる。

しかしチキは首を横に振る。

「そんなことない。カイルもアイクもみんなよく頑張った。……ファルスもね。だからあの人を許してあげて……あの手の傷じやあもう戦えないし、侵略なんて起こせないだろうから」

「それはちよつと難しいな……あいつには恋人をさらわれたこともあつたし」

「カ……カイル様だったらこんな時に何を言ってるんですか！」

のろけるカイルにカーシヤは赤くなつて文句をつける。だが今はカーシヤに構わずカイルは続ける。

「でも国を作るにあたつてヴァルムとの交易は重要になるだろうし、これから次第だ。いまはそれでよしとしてくれ」

「ゴ馳走様……」

チキは苦笑する。もう目は半分以上閉じている。

「……キット……私、キットに会えて本当によかったよ。妹つてこういうものなんだつて、……王子様をお兄ちゃんなんて呼ぶ無礼者の私を怒るところかかわいがるマルスのお兄ちゃんの気持ちがあつたかも」



「チキ！」

キットは人目をばからずに涙をこぼし、チキにすがりつく。

「チエルシーにもお礼を言っておいて……あの人が生きてる頃にはまだ私は……」

「ええ伝えるわ！ でもチキの方からも母様に伝えなさい！ だから1日でも早く起きてきて……」

必死に懇願するキットにチキは力なく笑う。

「あははっ、……相変わらずキットは厳しいな。……私が起きるころにはせめてキットだけでも……」

「チキ！……チキ！」

それきりチキは目を閉じそれ以上何かを言うことは無かった。

キットはチキの肩をゆするがカーシャに止められしばらく放心した後チキを抱きかかえ陣に戻る。

そんな彼らを遠い木の上から赤毛の若者が見ていた。

「また永い眠りにつくことになっちまったか。……ざつと数百年つてところか。氷竜神殿にいたころとは違っていつかは目を覚ますのが確かな分まだいい方かねえ。……た

だいったん目を覚ました後も日々の眠りが深くなっちまうかもしれないねえな……」

赤毛の若者、チエイニーはギムレーの方に思考を切り替えしばらく考える。

「……これで一件落着かな。ただし千年後には必ず復活しちまうが……その時俺もいれ  
ばいいんだが、あいにく俺も暇じゃない。他の大陸でも竜が原因の災いがいつ起こつて  
も不思議じゃないから……じゃあなチキ。千年後に会えればいいんだが」

チエイニーはチキの方へ軽く手を振り一方的な別れの挨拶にした。

その後チエイニーの姿を見た者は誰もいない。もうアカネイア、ヴァルムのどちらの  
大陸にもいないのだろう。

## 第45話 終わり始まり

アカネイア軍の陣から他国の王を送り出して数刻後、日が昇り切る頃に陣を畳み終わり船を停泊させている地点に戻るとそこには各国の王が雁首そろえて待っていた。

先ほどの集まりに居合わせていないフェリアの氷の王アイネ、ヴァルム皇帝ファルスやアルバレア王子ユーリも一緒だ。

「我らに隠れてこそこそと何をやっていたのだ？」

開口一番にファルスはカイルに突っかかってくる。カイルは隠し立てせず堂々と言っただけのことにした。

他国はともかく自国ではファイアーエムブレムは国宝として飾るのだ。光以外のオーブが欠けているなどすぐにわかる。

「大戦やギムレーを乗り越えた国同士これからも協力していこうと約束し、我が国から贈り物をしたんですよ……この盾にはまっていた宝玉をね！」

そう言っただけでカイルは先ほどまで封印の盾と呼ばれるものだったファイアーエムブレムを掲げて見せる。もうすでに上部にあるもの以外のオーブは抜かれ4つの空洞が空いている。

「ほお……アカネイアの国宝の装飾品を他国にな……ふん、その玉を我が国に渡さなかつたのはあれか？　もう我が国とは国交など結ばんという意味か？　我は別に構わんが」

「いやそういう意味では——」

ファルスの言いがかりにカイルはたじたとなるがそこへユーリが割って入る。

「まあまあ二人とも……カイル殿、気にしないでください。ファルスはカーシャ殿に会える機会だった会合に呼ばれなくて機嫌が悪いだけです。ファルスもそうやって意地を張っていると本当に国交を断絶されてしまいますよ。カーシャ殿への思いを断ち切るために必要な二人の挙式を見届けることもできなくなってしまうです」

「な……何を言っておるか。あんな小娘などもう興味はないわ！」

「へえ、そうですか……それはよかったです。私の方はすっかり断る前に逃げ出してしまったらして皇帝陛下を傷つけてしまったのではないかと気が気ではありませんでしたから」

強がりにしても酷いファルスの言い方にカーシャは青筋を立てながらひきつった笑みで声をかける。

「カ、カーシャ、これはだな……」

ファルスは気を悪くしたカーシャに怖気づき思わず言い訳をしようとする。

「いえいえいいんですよ。こんな小娘に皇帝ともあろう方が本気になるはずありませんよね。私は母国に帰りますから陛下は皇后としてふさわしいお方とどうぞご幸せに……ね、カイル様！」

「……あ！ カ、カーシャ！」

カーシャはファルスに見せびらかすようにカイルと腕を組みファルスから顔をそむけた。それからしばらくしてカーシャはカイルの腕をほどき後ろに下がる。

ファルスはごまかすように咳払いをしてカイルの方を向いた。

「すまぬ。見苦しいところを見せたな。……宝玉のことはただの冗談だ。我には不要な物……大方シスターの腕で眠りこけている巫女と関係があることなのだろう」

ファルスはキットに抱かれて眠っているチキを見やる。

それに対してカイルもキットも今は何も言えなかつた。

「まあよい。貴国と我が国の国交についてだがな。……我が国にも利益のある交易なら望むところ。欲しいものがあれば言うがいい。格別の値で分けてやる」

「ははは……その時はどうかお願いします」

カイルは左手を差し出す。ファルスも左手を返し握手を交わした。

「これでアカネイアとヴァルムは一件落着ですな。アルバレアとヴァルムも早くそうなりたいものです。ひとまず束の間の友好を祝って私たちも……」

ユーリはそう言ってファルスに右手を差し出してきた。

「……我もたいがい人のことは言えぬがユーリよ。平和を願っているならうぬもさりげなく喧嘩を売ってくるのはやめたらどうだ」

「おや？ 何のことです？」

ユーリはとぼけて右手を差し出したままである。ファルスが怪我をして右手が使えないのは当然ユーリも知っている。

結局この二人が握手を交わすことは無かった。

そんな彼らの様子を見てリヨウヤは苦笑し、アイネとザンザの方に向き直る。

「ひとまずこれでヴァルム大戦は終わったな。大陸規模の戦争などもう起きなければいいが……アイネ、ザンザ。貴国らには本当に助けられた。復興に必要なものがあれば何でも言ってくれ。今回だけでなく我々白夜は過去にも風や氷の部族から受けた恩がある。我々にできることは何でもするつもりだ」

そんなことを言うリヨウヤをアイネがたしなめる。

「おいおい、気軽に何でも言うものじゃない。これが国家間の条約の場だったら付け入り放題だぞ。もう私たちもお前も一国の王だ。発言には気を付けた方がいい」

「王か。……俺は別に村長や里長でもいいと思ってるんだがな」

リヨウヤは決まりが悪そうに頭をかく。アイネはそんなリヨウヤに対して首を横に

振った。

「いいや！ ソンシンはもつと大きくなるさ。そしてあんたはヴァルムやアルバレアとためを張るくらいの大物になる。間違いない！」

「そうか？ 全く想像がつかないんだが」

まだかぶりを振るリヨウヤにザンザも言つてやる。

「いやいや、アルバレアはヴァルムと千年前からの歴史についていがみ合つてると言うじゃないか。平和を保つには奴らの争いを仲裁する者が必要だ。それはイストリアでもドルマでもない。アルムの肩書や大陸の名にこだわりのないあんたらソンシン人が適任だ」

「ふむ……確かに俺たちにとってはアルムが王だろうが皇帝だろうが、大陸がバレンシアかヴァルムかはどっちでもいいことだな。確かに両国の間に立てるのは俺たちくらいかもしれん」

二人に畳みかけられリヨウヤはついに納得する。

「そういうことだ。アカネイア大陸復興に必要な物資の貿易のためにもあいつらをうまく取り持つてくれ。交易に關しても適正な価格ならちゃんと払う。それならお互い問題ないだろう」

「ああ、お互いこれから頑張つていこう！」

そう言うってからリヨウヤはアイネと握手を交わし、その後ザンザとも握手した。

各国の王が友好的な関係を約束している中、彼らと離れたところである集団が別れの挨拶をしていた。

「団長、今まで世話になったな。新天地を探したいっていうラグズのはぐれ者の酔狂によく付き合ってくれたぜ」

ラグズ団員を代表して部隊長の一人ウーゼルがアイクに礼を述べる。

「本当に行くのか？ 教団を壊滅させてギムレー討伐に貢献したとなればラグズを見直すアカネイア人もヴァルム人も出るかもしれない。なんならそろそろテリウス大陸に戻ってもいいんじゃないか。スクリミル王もニケ女王も一度絶縁状を出されたからって根に持つような王じゃないだろう」

テリウス大陸に戻る。

その言葉にセネリオは顔を伏せ、ウーゼルは難しい顔になる。

「うーむ……まずアカネイアやヴァルムに残るつてのはないな。テリウスのベオク同様そう簡単に変わるものじゃない。むしろ今までラグズやタグエルを知らなかった分、排他意識は強いんじゃないかと思う……だからテリウスに戻るのはいりかもしねえな。」



やっとの思いでアカネイア大陸に来たのにギムレーなんてのが出て来て多くの犠牲が出たんじゃあ帰郷を希望する奴らも出てくるだろう」

ウーゼルの話にセネリオは複雑な表情を見せ、セネリオの様子に気付かずウーゼルは話を続ける。

「……は頭を冷やしてテリウスに帰り王に頭を下げるのが現実的……だが俺は別の地を見てみたいんだ。ベオクがいるかいけないかは関係なく！」

ウーゼルに続いてもう一人の部隊長オルンが言う。

「俺もだー。大昔テリウス以外の大陸は女神が起こした大洪水ですべて沈んだと聞いていた。現に今でもテリウスの他に無事な大陸は存在しないというのが定説なんだ……でも俺たちはテリウス以外の沈んでいない大陸を見つけた。それどころかアカネイアの民もヴァルムの民も大洪水なんて知らなかったぐらいだ。そんな地が他にもあるのか、そこにベオクはいるのかラグズはいるのか。俺も見たい」

興奮気味に話す二人にアイクは得心する。好奇心という意味では強いものを求めるアイクも同じような理由でテリウスを離れる気になった。

「そうか……わかった。気を付けてな。ただテリウスはお前たちの故郷だと言うことは忘れないでくれ。帰りたくなければあの王たちなら絶対聞き入れてくれる」

「覚えておく。団長たちも気が向いたらテリウスに帰って家族やクリミアの女王に顔を

見せてやるといい。元気でな！」

息巻くウーゼルの横でオルンはぼそりとつぶやいた。

「さて……コイたち妖狐は俺たちについてくるのか。それとも……」

こうして第一次ヴァルム大戦とギムレーとの戦いは終わりアカネイア大陸の民は東に、ヴァルム大陸の民は西へと船を進める。

アイク傭兵団もヴァルムの民同様ヴァルム大陸まで戻り、その1月後にアイク傭兵団は解散しアイクとセネリオ、専属商人ララベルはヴァルム大陸に残り、他の団員たちは他のラグズ移民と合流する。移民たちのある者たちはアカネイア大陸に築いた住処に戻り、ある者たちは故郷であるテリウス大陸に戻り、ある者たちはまだ見ぬ地を求めずこの方角の海へ繰り出した。

彼ら移民の中にラグズに近い種族タグエルの一種妖狐がいるのかは定かではない。ただし兎の民はどこにもいかず東の大陸を終の棲家としたことは確かだ。

## 正史エンディング 前

東の大陸最大の版図を持つ国となったフェリア連合王国は東を氷の部族が、西を砂の部族それぞれの指導者が東の王・西の王として治め、数年ごとに闘技大会を開き王もしくはその代理（のちに団体戦となる）同士が闘つて勝った王が統一王として国全体の方針を決める体制が取られた。

東フェリアの王都は旧オレルアンに、西フェリアの王都はカダインのあった場所から北のオアシスの街に作られた。

ペレジア王国ではジェルドが義兄ユルゲンが残した息子ユベルを養子に迎えた後旧ドルーアに王都を築き直し王に即位した。ユベルが成人すれば彼に王位をゆずり退位する予定だ。

だがペレジアではギムレーとの戦いにいた兵から、かの邪竜ギムレーを神竜として崇める風習が広まり、裏ではすでにギムレー教団なる組織も立ち上がっているという。

ヴァルム大陸ではヴァルム帝国は侵略を仕掛ける行動を見せず、各国は大戦前通り均衡状態を保っている。その中でヴァルム帝国とアルバレア王国を仲裁し独自の戦力を持つソンシン王国の発言力は年々増していき、数十年後には二国に並ぶヴァルムの代表

国となった。

そしてアカネイア王国元王子カイルは故郷へ戻り祖国の復興を成し遂げた後アカネイア王国の解体とイーリス王国の建国を宣言する。

これに反対する者は多くいたが有力貴族がほとんどいなくなり多くの民は自らの新たな一歩を示す出来事が欲しいと考え、新たな英雄となったカイルの幾度にもわたる呼びかけでほとんどの民が新たな国の建国に賛同するようになり、反対していた貴族もついに折れた。

そして国王カイルはイーリス王国の貴族に旧アカネイア王国の貴族たちに加え復興に功績のある者を加える。

その中には伯爵位を授かった天馬騎士カーシャもいた。

その数年後建国以上に沸き起こった反対意見を抑えカイルはカーシャと結婚し、彼女を王妃とした。

ここまでに至るまでイシュタルス侯爵エルスとテミス伯爵令嬢マリアンヌが陰で相当骨を折ったと言われる。

そして存命している間からイーリス中の人々から呼ばれたカイル王の尊称「聖王」は彼の死後に跡継ぎの女王に与えられ、以後は正式なイーリス国王の肩書となりそれに倣ってこの国の名もイーリス聖王国となる。更に時がたち「初代聖王」カイルの功績に

感銘を受けたフェリア・ペレジア両王国の推挙により、アカネイア大陸と呼ばれていた大陸の名もイーリス聖王国から取ってイーリス大陸となる。

これはカイルがまだ存命中で王に就いていた頃。

ギムレーとの戦いから25年後　イーリス王宮。

王宮の回廊を三人の女子が歩いていた。

「うーん疲れたー！　ルッツ団長厳しすぎー！」

一番背の低い赤髪の少女が手を頭の後ろに組みながらぼやく。

「団長はシャニーのためを思って言ってくださっているのよ。注意されるのが嫌ならもっとしつかりなさい！」

愚痴る妹を水色の髪の少女が厳しく叱責する。

「まあまあティト、シャニーも十分頑張ってるじゃない。団長はシャニーに期待しているから言い過ぎちゃうのよ。あの人叩いて伸ばそうとするから」

真ん中の妹を青髪の女性がなだめる。

「ねえさ……姉上は甘いんだから。だからシャニーが甘えん坊になるのよ」

ティトはフィオーラを姉さんと呼ぼうとしたところでここが王宮だと思い出し姉上

と言ひ直す。だがひとげがないからとシャニーは口調を変えずティトに言い返す。

「いや、フィオーラお姉ちゃんの言う通り私はちゃんと頑張ってるわ。団長とティトお姉ちゃんが厳しすぎるんだよ」

「シャ、シャニー、ここは王宮よ！ そんな言葉づかいしているとまた侍従長に大目玉を喰らうてしまうわ」

ティトは慌ててシャニーにくぎを刺す。侍従長の名前を出されてシャニーもたちまち口を閉ざした。

この3人は皆イーリス王国の王女。国王カイルと王妃カーシャの娘たちだ。

王女たちは15歳になった者から順に父王から言い渡された成人するまでの5年間イーリス自警団に所属して民のために尽くせという言いつけを果たすべく日々自警団で訓練と任務に、王宮では王族としての勉強に励んでいる。

シャニー15歳、ティト17歳、フィオーラ19歳

今は3人とも15歳を過ぎ自警団に所属している。

「これは王女方！ お帰りなさいませ」

そんなやり取りをする3人をその侍従長が呼び止める。シャニーは慌てて手を腰あたりの位置に戻し衣住まいをただした。すぐさま侍従長はシャニーに目を止める。

「シャニー様？ どうかなされましたか？」

「いいえ、王族とはいえ王宮を歩くのだからちゃんとしないとって思つて」

侍従長はシャニーのたどたどしい言葉づかいに目を細めながらも、

「それはよろしい！ シャニー様も王族としての自覚が出て来たようすな。……ところで陛下が王女方が帰還なされたらすぐにお会いしたいとおっしゃられています。私はすぐに陛下にお知らせいたしますので王女方は謁見の間へ赴くご用意を——」

「「えっ!?!」」

三人は一樣にぎよつとする。

相手が父とはいえ謁見の間で王に会うということとは王に対してひざまずくということだ。

だが今の王女たちは自警団での任務で動きやすい格好として、上は軽い鎧で問題ないが下は短いスカートでひざまずけば正面にいる相手からは見られたくない部分が見えてしまうかもしれない。

王女たちは父を信じているがそれと恥ずかしいから見られたくないという気持ちは別の問題だった。

私たちがドレスに着替えるまで待つてもらおうかな。三人ともそんなことを考え出す。

動揺する王女たちに呆れながら侍従長は続きを話す。

「……私はそのようにしたいと思ったのですが王妃様が執務室でも構わないのではとおっしゃられます、陛下もそれで構わないとの事です。……ですので王女方、直ちに執務室へ」

「「はい！ ただいますぐに」」

打って変わって喜んで執務室に向かう王女たちを侍従長は頭を抱えながら見送る。

「王族が自警団などと……やはりお止めするべきだったのだろうな。特にシャニー様を見る限り……王妃様は平民だったとは信じられないくらい気品を身につけられたというのに」

国王カイルの執務室。

「遅いな……執務室で構わないと言伝たはずだが」

国王カイルは椅子に座りながらもそわそわしながら娘たちを待つていた。

「あなた、自警団の勤務が終わる頃からまだ半刻も経ってませんわ。もう少し落ち着いてください」

隣に立つ王妃カーシャはそんな夫に呆れた視線をむけながらなだめる。

コンコン！

「お父様、フィオーラです。タイトとシャニーも連れて来ています」

扉を叩いた直後に愛娘の一人フィオーラの声が伝わってくる。



「おお……ゴホン……入りなさい！」

喜びの声を上げそうになりながらも妻の視線を受けてカイルは咳払いの後に入るよう促す。

すぐさま三人の愛娘が執務室に入ってくる。

「お父様ただいまもど……」

「ただいまー！ お父さん！ お母さん！」

フィオーラを遮ってシャニーが元氣よく帰りの挨拶をする。

「シャニーー！ こころは王宮だと何度言えばー！」

テイトは注意するがカイルは手で制してよいと言う。

「構わん、臣下の目もないのだ。テイトもフィオーラも普通に話してくれ。謁見の間なんかではそうもいかないからな」

「ええ!? よろしいのでしょうか？ ちちう……とう……さん」

父に言われテイトは今度は父上を父さんと言い換えようとするもためらいはある。

テイトを後押しするためにフィオーラの方が先陣を切ることにする。

「テイト、こころはお父さんの言葉に甘えましょう。ただいまお父さん、お母さん」

「姉さん……わかりました。父さん、母さんただいま戻りました」

フィオーラの後押しを受けテイトは改めて帰りの挨拶をする。シャニー同様形式に

とらわれない話し方で。

「お帰りなさい三人とも。今日もお仕事お疲れ様でした」

まずはカーシャの方から娘たちに笑顔を浮かべ挨拶を返す。

「お帰り娘たちよ。怪我はなかったか？ 自警団の中でお前たちに言い寄ってくる男はいない……」

「ゴホン！」

心配のあまり問いをまくしたてるカイルをカーシャが咳払いで遮る。

「い、いや……三人とも無事務めを果たして何よりだ。王としてそれ以上に父として誇りに思うぞ」

「は……はい」

母に気おされる父の姿に娘たちは戸惑いながらも返事を返す。

「時にフィオーラよ！」

「は、はい！」

ふいにカイルは表情を引き締め長女フィオーラを呼んだ。

「おまえに貸し与えたファルシオン。調子はどうか？」

フィオーラは腰に剣を帯刀していた。

彼女は王族のたしなみとして幼いころから剣の修練を義務付けられ、自警団に入るこ

とになってからこの剣を父から貸与された。

イリス王国の国宝の1つ「封剣ファルシオン」だ。柄にある大きな空洞が目立って宝剣と呼ぶには格好が悪い。

その宝剣は今普通の剣で傷がつかないこと以外は特別なところはないが伝承によれば封剣という名前が示す通りこの剣の力のほとんどは現在封印されており、大陸の最東端にある虹の降る山で覚醒の儀を行えば真の力が解放されると言うがにわかには信じられない。

父も母もこの伝承に関しては肯定も否定もしていない。ただ――

「ええ。問題なく使えます。……ただ妹たちは使えないようですが」

そう、この剣はフィオーラしか使えない。妹たちどころか他の人間にも使えないようだ。父はこれを振るってかの邪竜ギムレーを封印したらしいが、三人とも父がファルシオンを振るつてるところを見たことがない。

「そうらしいな。……聖痕が三人全員に顕れていると知った時はもしや三人ともこの剣を使えるのではと思ったが使えるのはフィオーラだけのようだ」

「聖痕……」

フィオーラは自身にある聖痕を見る。

フィオーラの半袖からあらわになっている右の二の腕には神竜ナーガから血とともに

に授かった聖痕と呼ばれる文様のような痣があった。父の右目にもフィオーラの聖痕と同じ文様があった。

そして父の言う通りフィオーラの妹たちティトとシャニーにも聖痕があった。

ティトは背中、シャニーは胸元にあり、当然二人の聖痕は今は衣服に覆われて見えな  
い。

「うむ！ フィオーラよ……おまえは第1王女で私以外に唯一ファルシオンを振るえる者だ。だからはつきり言おう……このイーリス王国の次の王はフィオーラになる。お前は女王となるのだ！」

「あのお父さん。そのことですが……」

今まで幾度か示唆され覚悟はしていたがこの大陸の歴史を学んだフィオーラは父に意見する。

「どうした？」

父カイルはこの成り行きを予想していたように表情一つ変えず聞き返した。

「今のイーリスでは王子はおらず私たち王女しかいない、だから私たちの誰かが王位を引き継ぐしかない。それはわかってますし、王位を引き継ぐ可能性が高い第1王女として心構えもしてきたつもりです。ですが……」

「なんだ？」

カイルは再度聞き返す。気分を悪くしたのではなく意見を引つ込めぬよう先を促すための問いかけだった。

「この大陸では長らくどの国も王女しかいない場合ほとんどは王女の婿が王になってその方に政治を任せ王女は妃としての役目に専念する。それに対して女王を立てたのは数えるほどしかないって教わりました。フェリアの前の東の王は女王でしたけどあの国は武芸で王を決める他国とは違う制度ですし」

「だからフィオーラ自身ではなくお前の夫を王にするべきだと？」

「情けないのですが私には自信がありません。せめて前例があればそこから学び取れるのですが……知りうる限りの前例が宗主国の傀儡となつて短期間で王位を放棄したグラの女王だけとあつては」

フィオーラの弱音にカイルはふむとうなる。

「確かにその女王から学べと言うのは無理があるな……だが逆に王女の夫が王になつて失敗した例なら知つてるぞ。我が国の前身アカネシアの前王朝最後の王女の夫ハーディンを知っているな」

フィオーラは強くうなづく。ハーディンの次の王が次の王朝の開祖で自身らの誇り高き高祖マルスなのだ。王族なら当然知つている。先ほど上がったグラ女王シーマを即位させ操つたのも件のハーディンだった。

「はい。臣下や高官に軽視されガーネフという司祭にそそのかされて暴君となったのですよね」

フィオーラの言う通りでカイルはうなずく。

「そうだ。そして父さんの母方の祖先にもハーディンと同じく王女の夫だったために皇帝となった方がいる。彼も国王の血を引いていないため一部の重臣の協力が得られず、正当な皇位継承者だった自身の息子を止められず息子の傀儡となってしまった。ここからは一部で広まっているセリスの伝記を読んだ方が早いな」

「あつ！ 知ってる。おばあさまと同じ大陸から来た人からはお父さんもそのセリスと同じ聖王なんて呼ばれてるんだっけ」

セリスの名前が出てシャニーが口をはさみ、カイルは照れくさそうに咳払いでごまかした。

「シャニー！ 今は父さんとフィオーラ姉さんがお話ししてる最中なのよー」

いつものごとくシャニーの不注意をティトが注意する。

「ま、まあ女王には政務に出られない時があるとはいえ王権のすべてを婿に任せたらとんでもないことになることもあると言うことだ。……それにこれは異大陸の話だから歴史学者も知らないことだが父さんの友人の出身だったテリウスという大陸では半分以上の国は女王が治めているらしい」

「それは！……その国々はうまくいっているのでしょうか？」

フィオーラは身を乗り出してカイルに尋ねる。

「うむ。中でもベグニオン帝国という国は600年以上代々女性の皇帝を立てて来たそう  
うだ。その皇帝自身が問題を起こしたことは友人の知ってる限りないそうだ」

「そうですか……その皇帝は無理でもお父さんのご友人という方からお話を聞きたいで  
すね」

「はは！……もし彼に会う機会があつたとしてもあまり込んだ話はしてやるなよ。彼は政  
治の話は苦手なんだ。戦争中に各国の王に会う機会があつただけらしい……ただ私も  
久々に彼には会つてみたいな。まだ傭兵を続けているんだらうか」

カイルが友人アイクのことを思い返している間もフィオーラは思索している。

「お父さん……いえお父様。私が女王になるという話もう少し考えてみたいと思いま  
す。今は自警団に身を置いて住民の皆さんを守つて、王宮で勉強を積む。それらを十分  
にこなせて自分の力量に自信がついたらいいお返事ができると思います」

「ああ期待しているぞ。……そうだな。その時までには私のことはお父さんのままでいい  
ぞ。いやそれまでに一度だけでもパパ——」

「あなた！」

カーシャに一喝されカイルは続きの言葉を引つ込める。

「大丈夫だよお姉ちゃん。フィオーラお姉ちゃんはしつかり者だもの。そこいらの男に王様を任せるよりお姉ちゃんが女王様になった方がいくらいよ」

そこへシャニーがフィオーラを後押ししようとする。

「珍しくシャニーに同感ね。それに私も立派な騎士になって姉さんを助けるわ。だから姉さんは胸を張って女王になってやるっていえばいいのよ」

「シャニー、テイト、二人ともありがとう」

フィオーラはそんな妹たちの頭を撫でて感謝する。

そんな風に最後まで仲睦まじい娘たちがこの部屋から退出するのを見送ってカーシャはカイルにこぼした。

「王女だと言うのに騒がしい子たちに育っちゃって……やっぱり私のせいかしら」

王妃になるにあたって必死で貴族としての作法、教養、文化を学んだカーシャは最初は王族らしく娘を育てようとしたが、自分をお母様と呼ばせようとするなど堅苦しい言葉づかいをどうしても強要できず、臣下の目のないところではお母さんと呼ばれても黙認することなどを繰り返すうちに家族だけの時はあんな話し方になってしまった。

だがカイルは首を横に振って妻の言葉を否定する。

「いいんだ。あの子たちはあれで。私たちの子を自警団という民に近い場所で過ごさせることを考えた時からこうなる予感はしていた。それを後悔していないよ」



「私もあなたも子供に甘いですね……フィオーラ、本当に大丈夫かしら？」

カーシャは女王になるかもしれない長女を案じる。

「大丈夫だ。シャニーも言ってくたろう。フィオーラの方が並みの男より優秀だって、生真面目なテイトもある。安心して次代を任せられる王になるさ」

カイルの言葉にカーシャは笑う。

「明るい未来が待っているかのような展望を予期しているからこそついカイルはこぼす。」

「あとはギムレーの未来での復活が間違いであってくれたらな。そうなってくれば言うことはないんだが」

「……そうですね。でもそうなるかもしれないからこそあの子たちには強くなってもらわないと、だから私も娘たちを自警団に預けることに賛同したんです！」

二人は祈る。ナーガの言葉は間違いでギムレーはもう永遠の眠りについたんだと、あるいは娘たちの国を守ろうとする意志と強さは千年後の末裔にまで受け継がれその末裔がギムレーを完全に倒してくれることを。

結局、前者の願いは叶わず、後者の願いの方が叶うのだがそれは別の話。

## 正史エンディング 後

かたや蠢く者たちがいた。

ペレジア王国南東部 竜の祭壇。

南西にある竜族の遺跡にして魔竜や地竜の墓場である本物の竜の祭壇とは逆の方向に作られその場所と同じ名前を付けられた祭壇で多くの黒いローブを着た信者たちが邪竜を模した像に向かって祈りを捧げている。

その祭壇に黒髪の若い男が妙齢の女を従えてやってくる。今年で齡25。

信者たちは祈りを止め、男を見、彼を迎え入れた。

「教主様!」「ギムレー様はいつお目覚めになるのです?」

「……………」

男は答えずに信者たちを見る。

顔を見ようとしているようだ。だが皆フードをかぶっていてうまくいかない。

「同士諸君。フードを外せ。ギムレー様を崇拜する同士の顔を覚えておきたい」

教主と呼ばれる男の命ずるままに信者たちはフードは外し顔をさらす。

「ふむ……………」

教主は信者たちの顔をよく見ていた。老若男女隔たりなく眺めるふりをしていた。

「……………ほお」

教主の目はある女にとまる。栗色の髪の美しい女だ。歳も20前後といったところだろう。

女から視線を外すと教主は信者たちに告げる。

「我らが神竜ギムレー様の目覚めを心待ちにしている同士諸君！ 諸君らには心苦しいことだが我々が生きてる間にギムレー様の目覚める時が来ることは無い」

「そんな……………」  
「我々に救いはないのか……………」

悲嘆にくれる信者たちに教主は続ける。

「だが時を重ねればギムレー様が目覚める日は必ず来る。……………見よ我が左手の甲に宿りし聖痕を！」

教主は左手の甲をかざして見せた。そこには6つの眼のようなまがまがしい文様のような痣があつた。

だがギムレーの姿を見たことがある者にはそれは紛れもないギムレーの6つの眼を移した聖痕だった。

「私の父もこの聖痕を持っていた。つまりこれから生まれるだろう私の子も、孫も聖痕を持って生まれる。……………ここにいる我が母クライネはギムレー様から神託を預かつて

いるそうだ。……途方もない時の果てに聖痕を持つ我が子孫がギムレー様の魂を宿す器として生まれると……だから私には子を産んでくれる伴侶が必要だ。その娘!」

教主は栗色の髪の女に近づくと、

「は、はい?」

「君はギムレー様の復活を望んでここに来たのか?」

教主の剣幕に女はすくんでこくこくとうなづく。

「は、はい!私の両親はギムレー様の息吹に焼かれて亡くなりました。そして私は多くの弟たちや妹たちを捨てながら生きてきました。……ギムレー様を恨んでいるわけじゃありません。ただなぜ私の両親は死に私は兄弟を見殺しにして泥水をすすりながら生きていかなければならないのかと、ギムレー様にお聞きしたくて」

女の懺悔に教主は一瞬失望したような表情を浮かべたがすぐに悲しそうな表情を作る。

「それは悲しい。だがギムレー様に何かお考えがあつてのことだろう。必ず……とところで君はずいぶん苦勞していたようだがもしや体を売つたことがあるのかね?」

「いいえ!この身は神の物です!どれだけ食べるのに事欠いてもこの身体だけは守つてきました」

「そうか……それはよかつた。ギムレー様は純潔と貞操を尊ばれるからね。ただ私には

聖痕を受け継ぐ子孫が必要なんだ。子供が……だから物は相談なんだが君が守つてきた貞操を、この場で捧げてくれないかね？」

「え!？」

女は戸惑い初めて教主を名乗る男を訝しむ。

だが――

他の信者たちは血走つた目で女を睨む。

(わが身恋しさに神の復活を邪魔する気ではあるまいな)

そう視線で訴えていた。

見れば女の周りは先ほどまでともに祈つていた信者たちと教主について現れてきた司祭たちに取り囲まれ逃げ場がない。

それに何より今の自分にはもうここしかすがる場所がなかった。

「わ、わかりました。私がギムレー様の復活のお役に立てるなら」

「そうかよく言つてくれた! ギムレー様復活の暁には君の名は聖女として新たな世に語り継がれるだろう」

教主は女の肩を叩きそれから残りの信者に告げる。

「それともう一つギムレー様の復活に必要なものがある」

信者たちは教主の言葉を聞き逃すまいと彼の方に顔をむける。

「それは命の力だ。この祭壇に身を捧げたものの命と魂がギムレー様に流れ目覚めさせるための糧となるのだよ」

「それって生贄——」

ギロリ！

「ひっ」

思わずつぶやいた信者を教主は睨む。

「生贄……まあ外れてはいないかな。……だが命を捧げた者の魂はギムレー様と共に生き御方の復活とともに新たな生を受けるのだよ……君はそんな新たな生に興味はな  
いかな？」

先ほどつぶやいた信者に教主は詰め寄る。

「い、いえ僕は——」

教主だけでなく他の信者まで彼ににじり寄ってくる。

「そうか興味があるか。いいだろう。では最初にギムレー様のもとに魂を送るのは君にしよう。さあ準備をしろ！」

教主は背後の司祭に生贄の儀の命令を下す。

「い、いや僕は……うわあああああ——」

目をつけられた憐れな信者は司祭に手を引かれ祭壇の奥まで連れていかれた。

教主は彼の不興を買った信者の末路に怯え切った女に振り向く。

「では君は私と一緒に別室に行こう。遠い未来にギムレー様を蘇らせるために」

「は、は……はい」

恐怖が染みついた女はそれだけ言うのがやっとだった。

この教主という悪魔の不興を買うわけにはいかない。

これで女は永遠に教主に逆らえなくなった。

そんな息子の蛮行をクライネは感情なく見つめていただけだった。

邪痕を持つ者を産み落とした以上彼女はもう用済みなのである。ただ自分を産んでくれたから側近として遇する。それだけだった。

カイルたちの願いとは裏腹にペレジアに潜むギムレー教団はこのイーリス大陸を絶望の未来へと突き動かしていた。

現世ではないある存在の精神によって形作られる空間。

そこに緑髪の女性と金髪の少女が相對していた。

「久しいですねミラドナ。別の大陸へ行かせた娘とこうして話をする時が来るとは、そしてチキにも……別れた娘たちに会える時代がこようとは」

「私も2500年ぶりにお母様にお会いできてうれしいです。リーベリア大陸に旅立ってしまい一度も会えなかった妹チキとも話をしてみたかったですけど間に合いませんでしたね」

残念そうな表情でミラドナはため息をつく。

それからミラドナはナーガに深く頭を下げた。

「申し訳ございませんお母様！ あれから千年経つとはいえ私の手元からガルバザンを取り逃がすとは。私の力を悪用されないように故郷を離れ眠りについたというのに、力の一部を奪われた挙句罪人を取り逃がすとはエミユ族の王女にあるまじき失態です」

ナーガはミラドナの謝罪を否定せず受け入れる。前者はミラドナを守る魔獣に問題があったとはいえ後者は明らかにミラドナの失態だった。だが失態をおかしていたのはナーガもだ。

「ええ。あなたも私も人間に血を奪われ悪用された。竜の王と王女二人揃って大きな不始末です」

錬金術なる竜族エミュも持たない技術を使ってナーガの血で自然界に存在しないはずの生物を作り出すなど、

そんなことが起こると予期していればナーガは人の踏み込む地で最期を迎えたりはしなかった。



「お母様……」

「ですから此度ばかりは私のせいでもあると思つて何度か人の子やチキに語り掛け、最後にはあれだけの介入を起こした。おかげでまだ疲労が癒えませぬ」

ナーガは片手で肩をもむ仕草をする。精神世界で効果があるものではないため罪悪感に沈むミラドナを和ませるための行動だろう。

ミラドナはぎこちなく笑い、本題を切り出した。

「ガルバザンは私が煉獄に送り定期的にあそこから抜け出すことがないか点検しています。ですがギムレーと呼ばれるあの生物は……」

「ええ。千年後には目覚めるでしょう。あの時あの王子がかの者と過去に向かえばかの者を滅ぼす機会もあつたでしょうが……ギムレーは他者を取り込む力を持つ。ギムレーがギムレーを取り込む……いえ融合してしまえば我が牙と盾など玩具ほどの役にも立たなくなる。危険すぎる手でした」

「だから確実に封印できるあの時に王子にギムレーを倒させたのですか。……そして千年後に備えてあの聖痕を受け継ぐのは一人だけという枷を解いた……数十年前パーハラ公爵に施したときのように」

ミラドナの話にナーガはうなずき補足した。

「ええ……本来はユグドラル大陸で聖痕を持つ家系の中で多くの因子を受け継ぐ者が子

をなす前に死んでしまった時のための非常用の手段でしたが今度ばかりは王子の血が断絶する可能性を作り出してしまふことも許されません。……だから私は今のうちから聖痕の枷を解くことにしました……ただヘイムに与えた魔道書と違って牙には私の意思を込めておりません。今の牙には制限を課したとはいえ不安は残りますね」

今のファルシオンは覚醒の儀を行いナーガから認められない限り真の力を引き出すことはできないうえ、ギムレーを封じた後はその力は再び封じられ、人や国との争いには用いることができない。だが脅迫するために使うことはできる。

ユグドラル大陸で起こった争いを思い出しナーガは視線を落とす。  
「お母様が心配されるのも無理のない話です」

ユグドラルに赴いた12体の竜同様に自身の血を悪用されたり利用されたりしたミラドナはナーガに同調する。

ガルバザンだけではない。カーリユオンの臣下だった貴族たちもユトナからミラドナの血と力を継いだ娘たちを担ぎ上げ争いに利用したのだ。

それらを思い返したうえでミラドナは続ける。

「でもお母様は人を信じることにしたのですよね。だからあれほど力を出し切ってまで人を助けた。わかります。私も人の持つ勇氣と真実の愛に心を打たれ人を助けることにしました……だからお母様——」

ミラドナの言葉を聞いてナーガはうなづく。

「ええ。今一度人間を信じてみましょう……竜の力を悪しき者を倒すためのみに使ってくれらることを」

そしてナーガとミラドナは再び長い眠りにつく。

ナーガは千年後に備えるために、ミラドナはこれ以上自身の力を利用させないために。

## 正史エンディング 後日談

初代イーリス聖王 カイル

イーリス王国初代国王に即位する。王女に王位継承権を与えたり、王女たちを一定期間自警団に入れさせるなどフェアリアほど型破りではないがアカネイアは元よりどこの他国にもない帝王学を子らに施す。その結果第1王女フィオーラは大陸で三人目の女王となり父の後を継いだ。この時からイーリス王は正式な肩書として代々「聖王」と呼ばれるようになる。

初代イーリス王妃 カーシャ

イーリス建国と同時に今までの戦いを評価され伯爵位を授かった後もさらなる努力を続けた結果カイル王と結婚し、初代王妃となる。平民の視点に立った助言でカイル王を助け、彼女の存在は身分で王妃を制限する旧来の方針を見直すきっかけを与えた。生前から王妃が天馬騎士だった頃の銅像を建てる話が持ち上がり王妃は必死で中止させたが彼女の死後に実現した。

イーリス自警団団長 ルッツ

帰国後アカネイア自警団の同僚や志願者を集めのちのイーリス自警団を結成する。

復興やイーリスの建国時の騒乱について現れた盗賊たちを赤子の手をひねるように叩き潰したという。かつてのカイル王の言葉通り20年後から彼の娘を部下に持つことになり、甘えたところのある第3王女シャニーに鬼団長と恐れられるがルツツはシャニーに一番期待を寄せていたらしい。

イシユタルス侯爵 エルス

旧アカネイアの名門貴族としてカイル王子を助けイーリス建国に力を尽くしそのままイーリス貴族となる。魔道の力や金銭で身分を問わず多くの同国人を助ける彼は人々から多大な尊敬を集めたが支出も多く、エルスの存命中はイシユタルス家の財政はこれ以上没落することはなかったが好転することもなかったという。

テミス伯爵 マリアンヌ

エルス同様、旧アカネイア貴族からイーリス貴族に名を変え自ら伯爵位を継ぎ、法服貴族として官職を得てイーリスの法律作成に尽力する。法律を重視し貴族の身分を利用した横暴を許さないため平民からも絶大な人気を誇った。王権さえ法律のもとにあると言わんばかりにカイル王にも法律の順守を守らせたという。

イーリスの学者兼魔道士 サリエル

大戦の後魔道士を辞し学者として研究に没頭する。常識が覆るような仮説をいくつも立て無数のメモや書物を残すもついにそれらの説を立証することは叶わなかったが

サリエルの研究は息子に受け継がれ吟味を重ねられたという。

イーリス王国軍天馬騎士団団長 ティア

故郷に戻ってしばらくはカーシャと組んで天馬騎士団の再結成に尽くし、伯爵位を持った団長として天馬騎士団をまとめるカーシャの副官となりカーシャが王妃になった後、親衛隊に入って王妃を守ったかどうかという王の提案を辞退し、新たな天馬騎士団長となる。生涯自分はカーシャを超えたと認めることはなかった。カーシャ王妃の銅像を建てられたのは天馬騎士団長となったティアの娘の働きかけが大きいらしい。

元アカネイア王国軍重騎士 バラン

大戦後復興作業に専念するため軍を退役する。優秀な兵士だったが彼を覚えてるものはかなり少なく、イーリス王国軍創設の際も仕官の声がかかることはなかった。

東フェリア王 アイネ

東フェリアを治めしばらくは統一王としてフェリア全体を束ねていたが数年後にザンザとの一騎打ちに敗れ彼に統一王の座を明け渡す。その後も東フェリアを治めていたが次の闘技大会の前に引退を表明し後継者を指名して東の王を譲ってしまったからは街で暮らし、時には商人を盗賊から守る護衛を請け負ったという。

西フェリア王 ザンザ

西フェリアを西の王として任され、フェリア統一王兼東の王アイネに従いながら盛り

立ててきたがその間も鍛錬を続け数年後に闘技大会でアイネに勝利し統一王となる。だが街の発展と他国との交易に力を入れる政策を変えることはなくイーリスともペレジアともヴァルム各国ともいさかいを起こすことはなかった。

草原の民代表　ザガット

フェリア連合王国の体制が整うとザガットは同胞を説得し草原の民という部族を解体しフェリアの一国民として同化させた。ザガット自身は王としては若く政務の経験が浅い歴代東の王の相談役として王宮に残った。

ペレジア王　ジェルド

帰国次第空位だったペレジアの王位に就き養子ユベル王子の成人までその座を守った。ただしユミル王女とジャンの婚約を認めギムレー教団なる集団を野放しにするなどの行いからはるか未来では諸悪の元凶だとジェルドをこき下ろす意見も多い。

ペレジア軍将軍　ジャン

戦争を生き延び戦勝への執念と向上心をジェルドに認められユミル王女と結婚する。品性がないと貴族の間では評判が悪かったが羽振りの良さから部下たちからは人気が高かったらしい。

ペレジア王妃　ユミス

王妃として王を支えユベル王子に次期王としての教育を施した。最後までユミル王

女とジャンの結婚には反対だったという。

ペレジア王女 ユミル

各国上級貴族との縁談を断られ続けた結果ジェルドに認められたジャンと結婚する。遊び癖が抜けることはなく息子の教育も使用人任せにした結果息子は父以上に粗暴な性格になったらしい。

タグエルのもとめ役 ベルモット

戦いの後奴隷から解放された同胞たちと里に帰る。同胞や子らにタグエルを人間と変わらないと言つて彼らを救つたカイル王の事を話し、一族を上げてでもあいつにいつか借りを返さなくちゃなと息巻く。ただし未来を考えればいつかのラグズの誘いに乗つて彼らの旅に同行する方が正解だったのかもしれない。ベルモットにとつて幸いだったのは人間たちのタグエルの里への襲撃が彼女が天寿を全うして数百年後に起こることだ。

ロザンヌ地方ヴィオール領主 ヴィオール

領主としての政務とユーリ王の補佐に励む。ノブレスオブリージュを誇りとして民を助け続けるが長子には届かずどんな時でも体裁を保つのが貴族だと曲解されてしまう。

アルバレア王 ユーリ



戦後すぐに病死した父に代わってアルバレア王となる。ファルス皇帝とはしばしば会談を設け両国の和解を目指すが無突然病に倒れ崩御してしまい世継ぎのいないアルバレアは跡目争いが起きることになる。はるか未来ではヴァルム大陸の混乱を狙うギムレー教団が毒を盛ったというのが定説だ。

神竜王の愛娘　チキ

神竜の力を出し切って長い眠りにつき一度ノーヴァの神殿に運ばれたが目を覚ます気配がないためミラの大樹と呼ばれる樹の頂上に神殿を建てそこに運ばれる。数百年後にいったん目覚めたとも千年後にマルスを名乗る女剣士に会うまで眠り続けたとも言われる。

ノーヴァのシスター　キット

戦後アルバレアのヴィオール領に移住しその教会に仕えた。子供は三人いたがどの子も聖職についたり店を建て商人になつたりしてヴィオール家に仕えることはなかった。定期的に休暇をとってミラの大樹に足を運ぶがキットの生きている間に姉にして友であるチキが目を覚ますことはなかった。

イストリアの魔道士　ガール

イストリア軍を退役しアイクが新たに作った傭兵団に入る。アイクが引退した後は自身もノーヴァで余生を過ごしたという。

ソンシン王 リヨウヤ

大陸の歴史やアルムとは縁が浅いがゆえにヴァルムとアルバレアのどちらにも傾くことなく中立を保つ。そんな彼はヴァルムとの外交には欠かせぬ人物だと評されそのおかげでソンシンは小国だからと侮られることはなかった。

ソンシン軍総大将 ナノハ

女ながらソンシン軍の総大将としてソンシンに盗賊を近づけさせなかった。

ソンシン宰相 タクマ

戦後宰相となってソンシンの発展と街道の整備に力を注ぎ外交の場に出されるようになったリヨウヤ王をよく補佐した。

ソンシンの巫女 スモモ

戦争の傷跡が深い他国を訪問し、治癒の神通力で人々を癒した。そして神竜の巫女チキの目覚めを祈る人々に感化されともに彼女の目覚めを祈るうちそれがソンシンにも伝わってチキはソンシンでも信仰対象となった。

妖狐族の長 コイ

妖狐の一族はソンシンに残ったとも、ラグズについて新天地やテリウス大陸に行ったとも言われるが定かではない。はるか未来で起こる戦争を考えたら後者であれば幸いだ。

ヴァルム軍將軍 ジーン

傷を癒し軍務に復帰する。時に若さゆえの暴走を起こしがちなファルス皇帝を諫めるが疎まれることはなく、ジーンあつてのファルス、ジーンあつてのヴァルムだとファルス皇帝を含めた誰もが認める。

ヴァルム軍元士官 フェイス

戦いの後軍を退役する。その後はバレンシア教や大陸を渡つてラーマン教、イーリスで新たに興つたイーリス教の施設を訪ねて歩いたがどの宗教も深く信じることはなかった。

ヴァルム皇帝 ファルス

戦いの後激しいリハビリを行い。日常生活で使えるまで右手の機能を取り戻し民や臣下の前でも積極的に右手を使いそれを誇示して見せたが戦いに出ることは二度となく、戦前とは打つて変わつて歴代で最も穏健な皇帝となる。ユーリ王の死で好敵手がいなくなったことと思うところがあるのかファルス皇帝の代ではヴァルム帝国はアルバレア王国に敵意を見せることはなくなった。

アイク傭兵団団長 アイク

ヴァルム大陸に根を下ろし、どここの軍にも属さずアイクに憧れる者や彼の技を盗もうと近づく者たちと傭兵団を組織し各国を転々とする。息子が団を継いだ後はアイクの

姿を見た者はおらずテリウス大陸に帰ったのではないかとの説もある。

アイク傭兵団元参謀 セネリオ

しばらくはアイクに付き従って新たな傭兵団の運営を一手に担っていたが、アイクが所帯を持つのを見届けたあとテリウス大陸に帰った。グラーヌ砂漠の混血人を集めた里が国となるまで大きくなったのはセネリオの知恵が大きいらしい。

アイク傭兵団元部隊長 ウーゼル オルン

戦後1月休んだ後アイクやセネリオと別れ新天地を目指す一派を率いて船を出す。彼らの楽園が無事見つかったのか諦めてテリウス大陸に帰ったのかは不明である。

行商人 アンナ

相変わらず行商に精を出している。戦前と違うのは彼女の活動範囲がイーリス大陸だけでなくヴァルム大陸まで広がったことだ。

行商人兼団長夫人 ララベル

アイクと婚儀を挙げ息子をもうける。所帯を持つても行商人を辞めなかったが主婦と行商人を両立する良き妻良き母であった。夫が傭兵を引退した後は彼女も同じく行方が知れない。

神竜族の生き残り チエイニー

大戦後宴が終わってから姿を消す。千年後のギムレー復活の際になぜ彼が現れな

かったのかは謎のままだ。

T o b e c o n t i n u e d 「フアイアーエムブレム覚醒」

I F  
√

## 第46話 消滅

↓過去に行くために今は待つ

ギムレーを確実に倒すにはこれしかない。

「ナーガ様、僕以外をここから地上へ戻してください！」

「カイル様？」

突然そんなことを言ったカイルにカーシャは戸惑いの声をあげる。

「……いいのですね？」

「早く！」

問い返すナーガに答えずカイルは急かす。

「カイル……まさかお前」

ルッツはカイルの意図に気付いたようだ。

「ルッツこれを頼む」

察しのいい親友にカイルは封印の盾を放る。盾には今も5つのオーブがはまつたまままだ。ギムレーがいなくなっても地竜は地の底で眠っている。これらをこの世界から消失させるわけにはいかない。

その瞬間ギムレーの背にいるカイル以外の者たちが淡い光に包まれ姿を消す。

「貴様……まさか我を過去で葬るためにもに行く気か？」

問いかけるギムレーにカイルは答えずファルシオンを抱え、手元の鱗に抱き付く。カイルの思惑に気付いたギムレーが取る行動は一つだ。

グルン！

ギムレーはすぐに巨体をひっくり返す。

「ぐおおおお」

カイルは鱗にしがみつき今度は落とされないように必死で耐える。

ズブ！

「おおおおお」

鞘に納める間も惜しく刃をむき出したまま抱えているためカイルの上腕部にファルシオンの刃が食い込み転落への恐怖に匹敵する激痛が走る。

ファルシオンを手放したい気持ちでいっぱいだ。

(ファルスはこんな激痛に耐えながらガルバザンと戦っていたのか)

改めてファルスの闘気に感心する。そしてふと思う。自分は右腕でファルシオンを抱えている。下手したら右腕が斬り取られてしまうのではないか？

カイルは今まで両手と利き手である右手で剣を握っていた。利き手の反対ではろくに剣を振るえない。

盾は手放したんだ。咄嗟のこととはいえ左腕にしておけばよかった。

だがもう遅い。腕が斬れないように祈りながらむき出しの剣を抱えしがみ続ける。

カイルがすぐに落ちるか途中で決心が折れてナーガに助けを求めると思っているのかあるいは時空の門を出現させる時間に限りがあるのか、ギムレーはカイルを振り落とそうとしながらも時空の門に向かって一直線に進んでいる。

時空の門はすぐ目の前だ。

「ごめんなカーシャ。どうか幸せに」

「ハイハイはっ」

一瞬光に包まれたと思ったたらすぐに地上のアカネイア軍の陣に景色が変わったことにカーシャは動揺した。だがすぐに先ほどのカイルの言葉を思い出す。

(ナーガ様、僕以外をここから地上へ戻してください)



「まさか……!」

カイルの言葉の意味と自分が地上に戻ったことに気付いたカーシャは上を見上げる。空中ではギムレーが逆さになりながら突然出現した青い円状の何かへ向かって飛んでいる。

こんな光景を一度目撃した。その時カイルはギムレーから落ちたのだ。自分が受け止めなければ地面に叩きつけられて無残な姿を見せながら命を絶つただろう。

だが今回は何かが落ちてくるようなことはない。

カイルもギムレーの行動を呼んでいたらしくどこかにしがみついたりして何とか耐えているようだ。

カーシャは首を左右に振って辺りを見回す。愛馬ケリーは自分のすぐ右にいた。

ヒイイン!

カーシャは天馬に飛び乗る。

「おいカーシャ! お前何をする気だ?」

すぐ近くにいたらしいルッツが呼び止めてくる。ルッツはカイルから預かったあるいは託された封印の盾を左手に持っている。

「私たちを置いて行くこうとするバカ王子を呼び戻しに行くに決まってるじゃない!」

「いや、あいつはきつと倒す方法がわからないギムレーをこの世界から消し去るために

……

「だったら私たちも連れていけばいいんだわ。本当に勝手なんだからあのバカ！」  
カーシヤはルッツを言い負かしそれでも気がおさまらずにカイルを罵る。

「ギムレーだろうがカイル様だろうが絶対に逃がさないんだから……はっ！」  
ヒイイン！

カーシヤが手綱を引くと天馬は翼を羽ばたかせ浮遊する。

「おいカーシヤ！」

ルッツは叫ぶ。

「何を言っても聞く気はないわよ」

カーシヤは呼び止めても無駄だと告げる。だがルッツの言いたいことは違った。

「カイルのこと頼んだぜ。見かけによらず誰より無謀なことをする奴だからな」

ルッツの激励にカーシヤは胸をそらす。

「任せなさい。……その盾はキットさんに預けなさい。ノーヴァなら神竜の巫女様の宝物だつて言えば悪いようにはしないはずから」

封印の盾についてそう言い残してカーシヤは猛速度で天馬を飛ばす。

目指すはもちろんギムレーが出現させたらしいあの青い何かだ！

「うわあー！」

ドスン！

時空の門に飛び込んだ途端カイルはどこかに真つ逆さまに落ちた。

口の中がザラザラする。

「うえ……」

思わず地面に唾を吐いた。その地面は砂だらけ。

(砂漠!?)

カイルが落ちて来たのはどこかの砂漠らしいところだった。砂漠に転がり落ちたせいでカイルは全身砂塗れだ。おかげで転落した時の傷はないが。

激痛に耐え必死に抱えて来ただけあって砂漠に落ちたくらいじゃ剣も手放していない。

「ちっ……まさかすべてを捨ててまで僕を滅ぼすためについてくるなんてね」

風に舞い散る砂ぼこりの向こうから声がしてくる。よく見ると何者かがいた。

「お前を滅ぼす？ ……まさかお前ギムレーか!？」

砂ぼこりで見えないが向こうにいるのはどう見ても人型だ。竜に見えない。しかし人型の姿をとる竜は2人知っている。あつちはどちらも神竜だが。

「ふん……だとしたら？ 僕が巨竜になる前に逃げ出すなり命乞いでもすれば。土下座してみせたらしもべにしてあげなくもないよ」

ギムレーを名乗る男は傲慢な態度で嘘をついた。逃げ出せば背中が空気に、そして万が一土下座の態勢をとれば剣を手放してすぐには動けない姿勢になる。そこを狙い撃ちにする気だ。

だがカイルはそのどちらの行動もとらず男に剣向けた。

やはり騙されないか。いやカイルは男が巨竜の姿になろうとも屈するつもりは最初からないのだ。

「ならばお前が竜になる前に倒さないと……今こそこの世界の運命を変える！」

「勇敢な王子様で結構だけど一人だけで僕を倒せるものか『やみよぬりつぶせ!!  
ゲータエア』」

ブオン！

「う……ぐあー！」

カイルは襲い掛かる黒い瘴気を避けようとしたが砂に足をとられて上手くいかず瘴気に直撃する。

「砂漠は魔道士の領域だ。大層なブーツを履いているロードが勝てるものか！『ゲータエア』」

勝ち誇ると同時に男は詠唱し、瘴気を繰り出してくる。

「カイル様！」

「え？ ……うわ！」

瘴気が迫る前に背後の声に振り返る間もなくカイルは何者かに襟首をつかまれ乱暴に何かに乗せられる。

瘴気はカイルを外れあさつての方角に飛んでいく。

ヒイイン！

カイルが乗せられたのは羽の生えた馬…天馬だった。

「カーシャ!？」

そしてカイルを天馬に乗せ今ともに天馬に乗っているのは地上に置いてきたはずの臣下にして恋人だったカーシャだ。カーシャは前を向いたままで表情は見えない。

「どうしてここに？」

カイルは思わず聞くがカーシャは答えずに下を見る。

「あの男……私たちの敵のようですね。もしかしてあいつがギムレーの正体？」

カーシャの声に眼下を覗くと白髪の男が頭上のカイルたちを睨んでいた。声のとおり若い男だ。自分たちとあまり変わらない年に見える。あんな男がギムレーの正体だったのか？

「ああ！ そうらしい。チキやチエイニーみたいに普段は人の姿をしているのかな？」

しかし竜人にしてはチキとは違い耳の形が人間のものと変わらない

そのことからカイルは疑問を思うがカーシャの反応は皆無だ。

「どうでしょうね？ ただ魔道士では天馬の行動範囲を捉えきれません。なのに奴は巨竜に変身しようとしなさい。そうすれば私たちなんて踏み潰すなり焼き払うなり好きに出来るのに」

いつもより低い声色のカーシャの説明でカイルは彼女の言いたいことがわかった。

「あいつは今竜に変身できない？」

カーシャは後ろを振り向かないままうなずきもせず返す。

「ええ。だから今のうちに奴を倒してしましましょう。……カイル様。あの白髪男を片付けたら……あなたにお話があります」

カーシャは一瞬カイルの方に振り向く。

「う……」

その表情は能面のような無表情。だが額の青筋はびくびくと立っている。

自分はこの後ギムレーより恐ろしいものに立ち向かわなければならぬのでは？

この時カイルはカーシャの本当の恐ろしさを思い知った。

天馬の眼下にいるギムレーは思案していた。

（天馬騎士とは厄介な奴がついてきたものだ。今は竜の姿になれないというのに……あの塔の地下にいるこの世界のギムレーと融合できればあんな奴ら……あいつらが来るのはいつだ？）

ギムレーは太陽の傾き具合を見る。だが前の世界でラーズ教団がギムレーの封印をとくのにかんりの手間と時間がかかったため教団がテーベの塔に向かうためここを通過する時間は全く見当がつかない。

（あてにできないな……やはり今ここで僕がこいつらを始末するか）

ブオン！

グツ。

フオン！

カーシヤは掛け声一つ上げず天馬を動かし瘴気を避けさせる。

ビュオオオ！

そして槍を構えそのままギムレーらしき男に向かって急降下する。

ギイン！

カーシヤの槍が男に刺さる。

だが話に聞いた教皇同様竜のうろこのように男の皮膚は硬く槍をはじく。

カーシヤの手はしびれる。だが口から出るのは苦悶ではなく、

「この……この後も予定があるんだからさっさとやられてなさいよ！」

ガン！ ガン！ ガン！

続けざまに突きを三撃くわえる。

「この女！ ……『ゲーティア』」

フォン！

瘴気が繰り出される直前にカーシヤは天馬の高度を上げかわす。

瘴気はまたもやカーシヤたちよりはるかに低いところを進んで霧散する。

「やはり普通の武器では無理だ。僕を降ろせ。僕があいつを倒す」

カーシヤの背にカイルは叫ぶ。

カーシヤは振り向かず低く言った。

「……そのようですね。ではカイル様を降ろすついでにあいつに大きなダメージも与えてしましましょう」

「え？」

「カイル様剣を構えて」

またもや空中に逃げた敵をギムレーは憎々しげに睨む。

「すばしい女と馬め！ 『』」

ギムレーはゲーティアの詠唱を唱えようとする。



そこへ——

「うおおおおお！」

天馬からカイルが降りて……いや落ちてくる。

「なっ？」

「おおおおお！」

ズバン！

「ぐああああ！」

カイルはギムレーの方へ落ちて来てぶつかると直前に剣を斬りつける。

ファルシオンはギムレーの竜の鱗並みの硬い皮膚をやすやすと斬り裂いた。

ポフン！

またもやカイルは砂浜に落ちる。高度から落ちたので今度はかなり痛い。

「この野郎おおお！」

頭に血が上ったギムレーは剣を取り出しカイルに斬りかかる。

ギイン！

カイルもすかさず剣で受け止め罅迫り合いの様相になる。

「く……剣も使えたのかよ。ファルスみたいな真似を」

「あんな虫けらと一緒にするなああ！」

ギイン！カキイン！

二人が鏝迫り合いをしている中、ギムレーの後ろから。  
ズギイン！

ギムレーの背中に槍が突き立てられる。

「女……また貴様か」

「この白髪……まだ倒れないの」

ズバアン！

「ぐあああー！」

背中への衝撃にうめく一瞬のすきを見てカイルが再びギムレーの腹を斬る。

「おのれ……『やみよ』」

ギムレーがゲーティアの詠唱を緩やかに唱える。

範囲を広げてカイルとカーシャを二人まとめて攻撃する気だ。

「カイル様、私の後ろに！」

「で、でもそれじゃカーシャに」

「早くなさい！」

カーシャは無も言わずカイルを自分の後ろに隠れさせる。

『ぬりつぶせ!! ゲーティア』

ブオオオオ!

ギムレーの周り一体を瘴気が覆う。

「おおおおお」

カーシヤと天馬は必死でこらえる。

「ぐおおお」

カーシヤと天馬の後ろにいるため被害は抑えられているが完全には防げずカイルも瘴気に襲われる。

「おおおおお」

瘴気が消えるころカーシヤと天馬とカイルは――

「はあ……はあ……」

三者とも五体満足で立っている。魔法に強い抵抗力を持つ天馬が主人とその主人を守ったのだ。

「なっ?」

「ああああああ」

すかさずカーシヤは突進し、

ズバシユウ!

槍をギムレーに突き立てる。カイルに斬られた傷が入ってる箇所へ。

「ぎあああああああ！」

「カイル！ 今よ！」

「ああ！」

カーシャの声を投げかけカイルはギムレーのもとへ飛び込む。敬称が抜けてることなど気にする暇もなかった。

「あああああ！」

ズバシヤア！

ファルシオンから繰り出される天空の一撃目がギムレーの胴体を斬り裂く。さつき  
の傷のある個所を巻き込んで。

「ぐあああああ！」

「これで……とどめだあああ！」

ズバシユウウ！

「がああああああ！」

天空の二撃目がとうとうギムレーの体を引きちぎる。

「僕が……我が……こんな虫けらどもに……あああああ！」

引き裂かれたギムレーからは汚らわしい液体と枯れ果てたハーブが零れ落ちその体  
はたちまちボロボロの布きれをまとった骨となった。今まで戦った屍たちと違い霧散

もしない。

「……一体ギムレーとは何だったんだ？」

巨竜の姿の時から予想だにしないギムレーの姿と顛末にカイルは呆然とする。だが新たな敵はカイルにそんないとまも与えない。

「さて……これで邪魔者はいなくなりましたね」

カイルは後ろを振り返る。

そいつはゲーティアの瘴気をまともに喰らった傷を残しながらなんでもないかのような素振りで天馬から降りカイルの方へ歩み寄ってくる。

天馬は主人が離れても逃げるどころか微動だにしない。ただじつと主人とその敵を眺めている。

「満身創痕のところ申し訳ありませんが先ほど言ったようにお話があります。カイル様！」

憤怒の表情でカイルを見据えるカーシャが迫ってくる。

ギムレー（フォルネウス形態） クラス：錬金術師

竜の姿でいられなくなり幼体の頃に取り込んだフォルネウスの姿になったギムレー。

口調も生前のフォルネウスのものになっている。フォルネウスの能力をすべて使えるうえ体も竜の鱗並みに硬い。だが時空転移した反動で蘇生する能力がなく一度死んだら完全に滅びてしまう。

## 第47話 異郷の旅人

「カイル様……なぜ私たちを遠ざけて自分だけで過去なんかへ？」

開口一番低い声色でカーシヤは問いただしてくる。

カーシヤの劍幕にカイルはどぎまぎしながらもなんとか答える。

「そ、それは……ギムレーを完全に倒すためだ。奴をあそこで倒しても千年間封印されるだけだ。記録を残したところで信じる者がどれだけ残るものか。ましてや千年もたてば王の箔をつけるための伝承だと思われるのは必至だろう。何の備えもされていな中であんな巨竜が復活すれば今度こそ世界は滅ぶ。備えをしていたとしても千年ちようにどに復活するとは限らないし必ず犠牲は出る。君もパレスが滅びた日のことは覚えてるだろう。だから例えあの世界に戻れなくなっても僕がこの過去の世界に来てここで力を失ったギムレーを倒すしか……」

「新しい国を作るんじゃないんですか……私を王妃としてめとつてくれるんじゃないかなかったですか！」

カイルの言い訳をカーシヤは悲痛な訴えで一刀両断に切り捨てる。

「それはすまない。……でもアカネイアにはまだ貴族も残っている。彼らの誰かが王に

なればいい。……アイクから聞いたんだ。テリウス大陸のデイン王国という国は元の王家が断絶した後暁の巫女と呼ばれる女性が王になったって、その国のようにアカネイアの王族がいなくなっても優れた人間が王になればうまくいくかもしれない」

カイルが言ってることは王族としては無責任なことだ。だが――

「そうかもしれないね。私には王家の血の重みなんてわかりません。誰が王になっても何代も続けば案外みんなそれが当たり前のことだって受け入れるものなのかもしれない。……アカネイアの最初の王なんて盗賊でしたしね」

カーシャはカイルの言い分を否定するどころか肯定して見せる。

しかしその後にはカーシャはカイルを睨む。

「国のことはそれでもいいです。でも私のことは？ 私を妃として迎えたんじゃないんですか？」

「ああそうじゃなかった。でも君を巻き込むわけには……」

「巻き込むわけには？ ……」

カーシャはカイルの言葉を反芻してわななき拳を握りしめ……

「ボゴツ！ ガスツ！ ボゴツ！」

カイルの顔を思いきり何発もぶん殴った。

「もう巻き込まれてるわよ！ 人の唇を奪って置いて。このケダモノ！ 好色家！ 色



魔！ 君が必要だとか王妃にするとか言っておいて都合が悪くなればあっさり捨てるんじゃない。何が王妃よそれこそ妾と変わらないわ。私の気持ちを弄んだのね。これならさらうくらい私に執着してくれる皇帝の方がましだわ」

カーシャにぼこぼこに殴られたカイルはよろめきながらも抗弁する。

「本当に申し訳なかったと思ってる。でも君には家族が」

家族の名を出されてもカーシャは動じない。

「あの人たちなら心配ないわ！ 父さんはまだまだまだ元氣だしもう少しすればライトも稼げるようになるでしょうし、私なんて運よく騎士見習いになって仕送りでお金を入れてくれる娘としか思われてないわ。そうでなければとくに近所の家の息子のところあたりに嫁がされてるわ……だから」

カーシャは一息ついた後カイルの首根っこを掴んで言いたかったことを吐き出す。

「私だけでも連れていきなさいよ！ 過去だろうが！ 帰れなからうが！ あんた私を縄につないでもでも繋ぎ止めておきたいんでしよう？」

「カーシャ……本当にいいの？ この世界ではガルダは健在で例の地層はない。ナーガがどこにいるのかわからないし、ナーガでさえ僕たちを現代に戻せるかわからない……いや現に僕だけがギムレーの背に残ると決めたあの時ナーガから本当にいいのかと念押しされたんだ。……もう僕たちは現代に戻れずこの過去の世界で生きていくしかない

いのかもしれない」

カーシヤはカイルの首から手を放して胸を張って言う。

「構わないわよ。あなたと結ばれるためにどんなことでも頑張るって決めたし……それにここにはアカネイアで王子として過ごしているこの世界のカイル様もいる。王子でなくなったあなたとなら王妃にならなくても一緒になれるでしょう」

カーシヤの言葉にカイルはハツとする。確かにこの世界のアカネイアにはすでにこの世界のカイルがいる。彼こそが正真正銘のアカネイアの王子だ。偽物がいるとしたらそれは自分の方だ。

「……そうだな。ここではもう僕は王子でも何でもない。カイルによく似た誰かだ」

そしてそれはカーシヤもだ。この世界ではこの二人は身分どころか家族も故郷もない異郷の旅人だ。旅人同士一緒になっても咎める者はいない。

「ええーそれに……」

カーシヤは空中のある一点に目を向ける。

カーシヤの視線につられてカイルも同じところを見る。

そこにはもう何もなかった。

「もう過去と現代を繋ぐ例のあれもとつくに消えてしまったわ。あれこれ言い合ってももうあそこには戻れないわよ。なら一緒にこの世界で助け合って生きていきましょう。」

宮廷育ちのあんた一人じゃあ不安で置いて行けないしね」

カーシヤの憎まれ口にカイルは苦笑して言い返す。

「なんの。僕だってあれから長旅で経験を積んだんだ。カーシヤを養うくらいやつて見せるさ」

「できるかしらねー」

お互い減らず口を叩き合い異世界で暮らす覚悟も決まったところでカイルは真剣な表情になってから切り出す。

「……さてじゃあどこかの街に入る前に……奴らを倒さないとな」

カーシヤも表情を引き締めて応じる。

「ラーズ教団ね」

ギムレーは倒したがまだ教団が「この世界のギムレー」を解放しようとしたところを通りかかるはずだ。彼らを放置したらこの世界もギムレーに荒らされてしまう。

「ただ……今の僕たちはボロボロだ。特に君にぼこぼこに殴られた僕はね」

恨めしそうにカイルはカーシヤを見る。

「自業自得でしょ！ なにも告げず婚約者を捨てようとしたんだからまだ優しい方よ。……でも確かにこのまま教団と戦うのは厳しいわね。ただでさえ二人だけだし」

幸いここから見えるテーベの塔のおかげで方角はわかってるし一番近いカダインに

戻って傷を癒したり傭兵を雇ったりして体勢を立て直すか。

その間に教団が塔へ侵入してギムレーを復活させてしまう危険、教団と鉢合わせる危険はあるがこのまま教団と戦っても犬死するだけだろう。

そんなことを考える二人に声が降りかかる。

「だつたら僕たちが手を貸そう」

「「え……？」」

二人は声の方を向く。言葉の意味を考える余裕はなかったのでこんな時に教団が来てしまったのかと身構える。

「ナーガ様が言うにはあなたたちと僕たち3人が協力すれば何とかなるそうなんです

……」

銀髪の傭兵風の男が言う。

「その前に怪我の手当てが先ね。怪我だらけだわ敵がいつやってくるかわからないわ。そんな状況で痴話喧嘩とか馬鹿なの？ あんたたちが喧嘩している間敵が来ないかあたたたちが周囲を見張っていたんだから感謝しなさいよね！ ……ああもう砂まみれ

！ 早く体を拭きたいわ」

赤髪の傭兵風の女が文句を言った。

「待っている。漆黒のオーデインとしての闇の力は失われてしまったがあああの戦いで余つ

た特效薬がある。えーと……あつた。さあ！ このソーマの雫——剣士が勝手につけた名前——を傷口に塗るんだ」

金髪の剣士風の男が荷物袋をあさり特效薬を取り出してカイルたちに差し出す。

「あの……あなた方は？」

「敵ではないようですけど」

カイルたちは呆然と聞き返す。言葉や素振りから敵ではないとわかったが。

## I Fエンディング 前

アカネイア王国 パレス王宮。

アカネイアの建国記念日にあたる今日。王宮前の庭園には大勢の民が国王の言葉を聞かため集まっていた。

王宮2階のバルコニーから国王クロスが現れ聴衆の歓声がおさまるのを待ち演説を述べる。

「王国の臣民諸君。我が国が建国された記念日にあたる今日この日を諸君と迎えられるのは余にとつてこの上ない喜びである。この近年オレルアンの北方から現れる蛮族に我々は恐怖し彼らと戦つてきたが氷の部族という一部族との間で、戦いを起こした前の部族長の処刑をもつて氷の部族からの謝意としその代りに誰も住んでいない未開の地の一部を彼らの居住地として認めるといふ交渉を交わすことに成功した。これは極寒の地に住み温暖な住処を欲する彼らが起こす襲撃行為を防ぐための措置であり、勝者である我々が彼らに与える慈悲である。……被害が出た中で家臣には当然反対する者もいたが幾度の協議を重ね最後には彼らが譲歩してくれたおかげでこうして氷の部族と和解することができた。理解を示してくれた家臣と臣民諸君には今この場を持つて礼

を言いたい」

クロスはここまで言つて言葉を切り聴衆から歓声上がるが先ほどの勢いはない。

蛮族を根絶やしにするまで征伐を続けるべきだと考える者も多いのだろう。

クロムもそう思っていないといえれば嘘になる。クロムの重臣にして友ジェイクスは蛮族との戦いで命を落としたのだ。

だが蛮族だからとは言え皆殺しにするまで戦いを続けていけばそれは紛れもない虐殺だ。

だからクロスは憎しみを飲み込んである部族と和解することを決意した。

クロスは対外政策の続きを話す。

「そして我が国の同盟国にして無二の盟友グルニア王国との結束を深めるため我が国はグルニアからかの国自慢の武器を購入し多くの部隊に支給する。そしてグルニアから講師や武官を招き氷の部族以外の蛮族に対抗するための演習を共同で行うことになった。その引き換えに我が国からは蛮族との戦いの勝利に貢献してくれたアイク傭兵団の雇用をグルニア軍に斡旋する。我らが誇るアカネイア軍、そして兵や武器の質において我が軍以上と言えるグルニア軍はアカネイア大陸の治安の向上に貢献してくれるだろう。それからグルニアから輸入される物品への関税を引き下げることを選定した。これを機にグルニアからの物品をどんどん買い求めてくれれば幸いだ」

クロスが最後に話したグルニアとの貿易に関する演説の最後の一言に一部から笑いが起こる。

場を弛緩させようとする狙いもあつたのでクロスも兵も咎めない。

「それと……余はユグドラル大陸諸国と国交を回復し交易を再開したいと思つている。諸君らの中にはあの大陸からどれだけの物や技術がもたらされたのか覚えている者も多いだろう。我が国、いやアカネイア大陸の更なる発展のためどうか考えてほしい……我が妃ユリナもグランベル王国との国交回復に尽力は惜しまないと言つてくれている」

名を呼ばれた王妃ユリナがバルコニーの奥から現れ聴衆に向かつてドレスの裾をつまみカーテシーの動作をとり一礼する。その頭部には何も装着されておらずナーガの聖痕が刻む額があらわとなつていた。

王妃の登場に再び聴衆から歓声が沸き上がった。

「では王妃も現れたところで最後に我が息子を紹介しよう。先日我が前で神剣ファルシオンを振るい王位継承権を得た……」

クロスが話す間に奥から青髪の少年が進み出る。バルコニーの下にいる聴衆には見えないが少年の右目には王妃と同じ聖痕がある。

「アカネイア第一王子カイルである！」

カイルは胸に手を当て聴衆に一礼する。



国王夫妻同様カイルの登場にも歓声が沸くが夫妻ほど高い歓声ではないうえ、18歳という若すぎる王太子にどよめきも上がる。

そんな反応にカイルは一瞬身をすくめるが勇気を奮い起こして演説を始める。

「ご紹介にあずかりました。アカネイア国王クロスが一子カイルです。親愛なる王国臣民の皆様。皆様のお力添えで王は我が国をここまで盛り立てることが出来ました。感謝の言葉ありません。どうかこれからも国の繁栄のため王に力をお貸しください。私も王位を継ぐ人間として恥ずべきことがないよう一層の精進を重ね父を助け王位継承に備える所存です」

カイルはそこまで言ってから再び一礼する。

途端聴衆はこれまでの歓声以上の拍手が起こった。

若き王子は不遜な様子を見せることがなく王への助力と自身が力をつけるまで待つてほしいと懸命に民に願ひ出た。

民はそんな王子に激励の拍手を送ったのである。

立场上クロスは息子に拍手を送る真似は出来なかつたが夫の分までユリナは拍手で息子をねぎらっている。

カイルはそんな両親の方を振り向き笑みを浮かべる。

そうして建国を記念する式典での演説を終えて3人の王族は民に手を振る。

「……あれ？」

そこでカイルは大衆の中に紛れ込んでいるある姿を見つける。

「どうしたカイル？ 民の前だ。弛緩するのは後にしろ」

手を振りながら口元が見えぬように下がりクロスはカイルに注意する。

「申し訳ありません父上、僕にそっくりな人を見つけたものですから」

クロスに注意されカイルは表情を引き締めるもののその話題にユリナの方が食いつく。

「カイル、その方の髪の色は？」

「青でした。だから余計に驚いてしまっただけ」

ユリナの問いにカイルは素直に答える。母の疑念には気づかないまま。

「カイルとそっくり……ということとはあなたとそっくりということにもなりますね」

ユリナのつぶやきにクロスは彼女の言いたいことがわかって顔面に冷や汗をかく。

「誤解だユリナ。……カイルその人は今どこにいる？」

カイルは自分にそっくりな人物を見つけたところを見渡す。

「………もういないみたいですね。どこかへ行ってしまったのでしょうか」

あらぬ誤解を晴らしてくれる人物を失ったことにクロスは内心嘆息する。今日一日妻の機嫌はよくなりそうにない。

「あなた式典が終わったからお茶にしましょうか……話したいこともありますし」

「……先に言っておくが私が愛しているのはユリナ、君だけだ」

衛兵として王族の後ろに控えていたカーシヤはそんなに3人の様子を見ながらため息をつく。

（こんな時だけ余計なものを見つけるんだからカイル様ってば……カイル様にそっくりな人ってやっぱりそういうことかしら。陛下は妃様一筋だと信じていたのに、これだから王族って……私は王族や貴族相手の恋愛なんて御免だわ）

カーシヤの中でクロスの品格が下がった瞬間だった。

後ほどカーシヤのほうも自分に瓜二つの少女が街中を歩いていたら知らされ上官からはサボりを疑われ、

それだけでなく建国祭を楽しむためにパレスに来ていた家族もその人物に遭遇してあろうことかその人物は自分がカーシヤだと認めしどももどろの言い訳をして去っていったため数カ月後に休暇で帰郷した際ちよつとした騒動になった。

「危ない危ない。見つからなかったかな」

「やっと撒けたわ。これだけの人ごみの中から見つけてくるなんて相変わらずライトつ

てば目ざといんだから」

この世界の自分に見つかりかけたカイルとこの世界の家族と遭遇し逃げてきたカーシャが街外れで新たな仲間と合流してからしばらく。

「もう一人の自分たちがいる街を変装もしないで回るからよ。特にカイルのお父さんが演説しているところなんて一番危ないところでしょうが！」

赤髪の少女が呆れながらカイルたちを叱る。

「ごめんセレナ。人が多いからこそ変装したら余計目立ちそうで」

カイルとカーシャは服装以外この世界の自分と同じ姿をしている。カーシャはともかくカイルは王子と瓜二つなので見つかると大騒ぎになるが右目を見せると別人だと納得してくれる。

その右目には聖痕らしき痣はなく、青い瞳があるだけだったからだ。

ラーズ教団を倒してカダインで一泊した次の朝に聖痕は消失した。この世界のユリナとカイル以外の人間が聖痕を宿していれば悪影響が生じると考えたナーガの仕業だろう。

「まあまあセレナ、前の世界ではこの頃にはもうパレスはギムレーに滅ぼされてたそうだし、見ることができなかったお父さんやもう一人の自分の晴れ舞台を見てみたいというのはよくわかるよ。僕だつてもう一人の自分が踊っているところを見てみたいと

思っていたし」

カイルたちを叱るセレナを銀髪の青年がなだめる。カーシヤはそんな青年に、「あらアズールさん？　もう戻って来てたの。こんなお祭りなら声をかける女性はいくらでもいるでしょうに」

「いやカーシヤ、むしろ成功したらまずいんじゃない。今のパレスには大陸中から人が集まってきているし自分のご先祖様がどれだけいることが」

驚き4割嫌味6割でアズールに声をかけるカーシヤにカイルは推測を語る。しかし

「その心配はないわ。私を誘った時も本当に食事を奢ってもらっただけだし。この間から練習してた出し物が終わったから戻ってきたんじゃない？」

金髪の女性が氷菓子を食べながらアズールを擁護する。

「踊りか。そういえば一生懸命練習していたな。男の踊り手なんて聞いたこともなかったからさぞ珍しがられただろう」

アズールがダンサーだと思いついたカイルは納得しアズールを案じる。

「確かに珍しかったようだけどね。僕たちの時代でも踊り手はみんな女の子ばかりだし、でも受けはよかったよ。歩みを止めて見てくれた観客は女の子ばかりだったけどね」

アズールは予想よりも評判がいいことに安堵していたが男にも自分の踊りを注目してほしかったようで若干残念そうな表情をする。

「そういうことなら応援するわ。そうだ！ 私たちにもアズールさんの踊りを見せてよ。カイルには女の子の踊り手を見せる気ないけど男の人の踊りくらいは許してあげるわ」

「ははは……まあ本当にアズールの踊りは見ていて元気が出るからよければ見せてほしいな」

カーシャとカイルの応援を受けアズールは照れくさそうに髪をかく。

そこでセレナは辺りを見回して尋ねる。

「……それで、あいつはまだ帰って来てないの？」

「うん。まだ盛り上がってるようだね」

アズールも呆れながらため息をつく。

「……」

そんな中カイルとカーシャは複雑な様子でうつむいた。

金髪の女性は仲間の様子を気にせず氷菓子を貪り続けている。

彼女はクライネ。リーベリア大陸で暮らしていたところをラーズ教団に拉致・洗脳され魔女として教団に入れられたらしいが、砂漠での教団との戦いの際にアズールの峰打

ちで気絶し教団で唯一生き残った。

その後カダインで治療を受けある仲間が頭の片隅で覚えていた呪術とカーシャの懸命な説得でなんとか正気を取り戻し事情を聞き出したカイルたちはクライネを街に引き渡さず一緒に連れていくことにした。

その時クライネが着ていた魔女の服は露出が多すぎるというカーシャとセレナの意見でカダインで新しい服を彼女に買い与えた。

当初はこの後ワーレンでリーベリア大陸に行けるような船に乗せて別れるつもりだったが……。

「俺こそ……異なる時間軸より来たる選ばれし希望の戦士……ウード！ かつてない巨大な邪竜だろうと智恵の神祖竜の邪心だろうとこの世界を好きにはさせせん！」

金髪の青年……ウードは子供たち相手に口上を述べていた。

そんな光景をアズールとセレナは呆れてジト目で見守り、カイルとカーシャは頭を抱えてうなだれる。クライネは我感せずだと知らん顔だ。クライネにかけられた術を解いたのは呪術師の力がわずかだけ残ってた彼女のだが。

彼の名はウード。初代聖王となったカイルとカーシャの子孫の一人だ。その証に腕

にはカイルと同じ聖痕がある。

（あれがもう一つの世界の僕たちの子孫なんだよなあ）（ギムレーを封印した世界のカイルと私は子供にどんな教育をしたのよ）

二人はもう一つの世界の自分たちを呪うが彼らのせいではない。絶望の未来において仲間や住民を元気づけ奮い立たせるためのふるまいが高じて普段の行動や言動にも現れるようになったのだ。彼の母リズが若干その性質を隠し持っていたのも原因かもしれないが。

不幸中の幸いにもウードの家系は傍系で聖王ではない。せめて聖王のほうはまともであつてほしいとカイルとカーシャは心から願う。

マーモトード砂漠でギムレーを倒した後喧嘩し和解した二人が出会った三人はアズール・ウード・セレナ。

カイルがギムレーを封印しイリス聖王国という国を作り聖王となった世界の千年後の未来から来た戦士らしい。透魔の神祖竜ハイドラからの頼みでアカネイアが建国される以前の「三国記」の時代で戦い、その帰りにナーガからカイルたちへの救援を依頼されてこの時代に来たという話だ。



砂漠で会った際聖痕を見てカイルを初代聖王だと実感した三人はカイルたちに敬語を使ったりしてたがここにいるカイルはもう初代聖王とは別人だと言ってやめさせた。

——ウードは血が騒ぐと相手が誰であれあいう口調になり、セレナは敬称の有無だけで言葉遣いは全く変わらないので振る舞いが大きく変わったのはアズールだけが――

その後ギムレーを開放するためにテーベの塔へ向かってくるラーズ教団を倒してからクライネを保護したカイルとカーシャは三人と行動を共にしこのパレスまでやって来た。この世界のクロスとユリナ、もう一人のカイルの無事を確かめるために。しかしそれももう終わった。

子供たちはウードの寸劇に飽きたようで別の出店に行き、ウードはカイルたちの方へやってくる。

「待たせたな。同じ英雄王の血を継ぐ者……聖王カイ、んぐつ！」

カイルはまだ人がいるにもかかわらずカイルの名を呼ぼうとするウードの口をふさぐ。この世界では聖王とやらは現れないらしいがこのパレスでカイルの名を出されるのはまずい。

「カイ……そう。僕の名はカイだ。そうだったね？」

コクコク。

見物人が去ってひとけがなくなったのを確認するとカイルはウードの口から手を放す。

「いやーすいません。まさか伝説の初代聖王と会える日が来ると夢にも思わなくて思わずテンション上がっちゃって」

反省して素に戻ったウードはカイルに謝る。しかしすぐに元に戻るので油断できない。

「だから何度も言ってるけど僕は初代聖王じゃないよ。それはギムレーを封印することを選んだほうの僕……別の世界のカイルだ」

カイルはそう言って訂正する。とはいえカイルもカーシャもまだ信じられない。あの時、ギムレーに剣を突き刺すか刺さないかで2つの世界が生まれることになるなんて。

「この世界線のカイルは初代聖王にあらずか……だが忘れるなよ。俺たちがいた世界線の初代聖王もまたお前自身だということ」

ウードはもう立ち直つたらしい。さらに意外な人物がウードに同調した。

「そうね。聖王様にならなかつただけでカイルはカイルに変わりはないじゃない。カー

シヤが初代聖王お付きの伝説の天馬騎士であることに変わりがないように」

セレナはそう言ってカーシヤと対峙する。セレナはカーシヤを慕っていたあのティアの子孫だという。

負けず嫌いな彼女は先祖のティアや母親が憧れるカーシヤに対抗心を燃やし、度々模擬戦を仕掛けている。

「そんなに目の敵にしないでよ。セレナさんかなり強くて負けることも多いし、もうセレナさんの方が強いってことでいいわ」

本心からカーシヤはそう言う。

それにカーシヤは自分がティアより優れているとは思っていない。

ティアは入隊した時から常に優秀な記録を残し続けた。だがカーシヤは訓練の成績は並みでカイルの付き人になったのも彼と年が同じというところがユリナの目に留まったただけだ。

伝説の天馬騎士というのはヴァルムでの戦いが過剰に評価されたに過ぎない。

だがセレナはそんなカーシヤを謙遜しているだけだと思っっているようだ。

「ふん、そうはいくもんですか。あの未来に帰ると決めた以上母さんには会え……ごほん、勝負できないし、こうなったら母さんが憧れた伝説の天馬騎士を完膚なきまで倒すことで母さんを超えてやるんだから！」

セレナは鼻息荒くカーシヤにまだまだ勝負は終わってないと告げる。

(二方的な) 火花を散らす二人をよそにアズールはカイルに尋ねる。

「カイル、本当に僕たちと一緒に行くのかい？ ハイドラさんという人のおかげで大地だけは再生したとはいえ千年後の世界はギムレーに滅ぼされかけて国はなくなり公共施設もない不便な時代だ。カイルにはもう聖痕もないしこの時代に残っても影響はないと思うけど」

アズールの甘言にカイルは首を横に振る。

「行くよ千年後の世界へ。一度はこの世界で骨をうずめる気でいたけど未来へ行けると聞いて気が変わった。この世界には本来ここに存在する僕とカーシヤがいる。どこの辺境へ行っても向こうが視察とかで来て偶然出会う可能性は皆無じやないしそうでなくても少なからず影響は起こるはずだ。その可能性を摘み取るためにも」

それだけではない。カイルとカーシヤはギムレーを完全に滅ぼすためとはいえ王や騎士としての責務を放棄してこの世界に来た。安穩とここで暮らすより滅びかけた世界へ行き困窮した人々を助けるのが自分たちの役目ではないかと思った。

だからカイルとカーシヤはアズールたちの持つ「転移の水晶玉」で未来に行く。パレスへはその寄り道で来たただけだ。ただ……。

そこでカイルはクライネの方を見て尋ねる。

氷菓子は全部食べて彼女の手元には何も無い。

「でもクライネは帰ったほうがいいんじゃないか。僕たちに付き合わなくても……」

カイルの言葉にクライネは首を横に振る。

「いいえ私も行くわ。言つたでしょう。私の家族は教団に殺された。今更故郷に帰つても途方に暮れるだけよ」

「しかし今から僕たちが行く時代は荒廃している。辛くても帰る場所がある君の行くところじゃ……」

カイルはクライネをなんとか説得しようとする。だがクライネは譲らない。

「だからよ！　操られていたとはいえ私もこの転移術で教団の蛮行に手を貸してきた。

この罪は許されるものじゃない。……まさかあなたカーシャの時のように私も捨てる

つもり？」

「うっ……」

クライネもカーシャからあの時のことを聞かされたようだ。それを言われると何も言えない。

「わかつたよ。でも戻ることとはできないらしいから後悔しないように行くかどうかはもう少しよく考えてみてくれよ」

そう忠告するカイルにクライネは笑みを浮かべ、

「しないわよ後悔なんて、もう私の人生は教団の奴らに奪われたんだから。それを全く知らない場所で1からやり直せるなんて願ったり叶ったりだわ」

クライネはなんと言われようとこの時代に留まるつもりはないらしい。

「そうか。今後ともよろしくクライネ」

カイルはクライネを正式に仲間に加えることにする。

ギムレーに殺されずにすんだ両親と彼らの後を継ぐだろう自分の姿を見て、そしてカイルの連れは誰一人この時代に残るつもりはないと確認した。これでここに未練はなくなつた。だからカイルたちはアズールたちの持つ「転移の水晶玉」の力で彼らとともに千年後の未来へ行く。

決意を新たにすカイルとクライネに腕をむけて（手のひらを上に向けるようなポーズを取っているため握手がしたいわけではないようだ）ウッドは言う。

「いいだろう。キング・オブ・ホーリー・ザ・カイル、ダークサイドマスター・クライネよ。お前たちを我らガーディアン・オブ・イーリスの一員に加えよう。同志として我々とともに悪を討とうではないか！」

「次にそう呼んだら二度と口を利かないからね」

「カイル、アズールこの人だけこの時代に残してはどうかしら」

「すみません。暗夜で仲間と別れて寂寥感を感じていたところ新しい仲間が入ることに

なつて有頂天になつてました」

カイルとクライネに一喝されてワードは委縮した。

## I Fエンディング 後

パレス近くの森林地帯。

人がいないのを確認してアズールは他の皆に確認を取る。

「ではみんな、特にカイルとカーシャ、クライネ。準備はいいかい？」

アズールの問いに他の皆はうなずいて続きを促す。カイルもカーシャもクライネももうパレスに残したものは何もない。カーシャの愛馬ケリーもパレスに来るまでの旅の間に野に放った。

アズールはそれを確認すると袋から小さな水晶玉を取り出した。これが転移の水晶玉だ。

「ではみんな水晶玉に触れて……そして念じるんだ僕たちの故郷……僕たちにとつての現代の世界を……カイルたちは想像できる限りの遠い未来を思い浮かべてくれればいい。行ける時代は一つだけだからカイルたちだけ別の時代に飛ばされることはない」

「ああ」「ええ」「うん」

アズールの助言を受けカイルたちは自分たちが想像できる限りの未来を思い浮かべる。



セレナはカーシヤの方を見た。

「やっぱりこの時代に残るとかなしだからね。絶対に勝負の続きをするんだから」  
「カイルも未来に行くつもりだし私だけ残る気はないわよ……まあ勝負の方はお手柔らかに」

セレナがカーシヤに釘を指していると5人は淡い光に包まれる。

「さあパワークリスタルよ。我らをはるか時の果てへ！」

ウードがそんなことをのたまっている間に5人を包む光は強くなる。

「うわー！」

カイルは思わず声をあげた。

「声を出すのは構わないが玉から手を離すな！ 君だけこの時代に取り残されるぞ」

アズールにそう言われカイルは強く水晶玉に手を押し付ける。

「……」

クライネは正気を取り戻したとはいえ記憶を失ったわけでもないので転移には慣れており光に包まれても全く動じていない。

途端、

彼ら5人は最初からいなかったかのように跡形もなくこの世界から消失した。

「……は……？」

「あれっ？ アズールたちは？」

光がおさまるとカイルとカーシャだけが野原にいた。

周りには花や緑があふれていてギムレーに滅ぼされる寸前だったと思えない。

アズールたちから神祖竜の一人ハイドラの力によって大地を再生してもらったと聞いたが正直あまり信じていなかった。

「……本当に未来なの？ 確かにさっきの森林とは違う場所みたいだけど……実は同じ時代の別の場所へ転移しただけだったりして」

目の前に大きな街があるわけでもなく千年後に転移したとは信じられないカーシャは思わず言った。

「どうだろうな。僕たちでは時空転移に失敗したかどうかもわからない。それよりアズールたちを探さないと……ただその前に」

「え……わわ……ちよつとカイル！」

二人きりだとわかったところでカイルはカーシャを抱きとめる。

「カイル……まさか二人きりになれたからってこんなところで！ せめてアズールたちを探してこの近くに町があるか確認してからにしてよ」

アズールたちとはぐれたらしいとはいえさすがに節操がなさすぎる。当然カーシャは抵抗するがカイルはそれ以上は何もしてこず――

「カーシャ……ここが今までいた時代と同じ世界だろうと未来だろうときつと楽に過ごすことはできないだろう。色々苦難があると思う。ただいつの日か今を振り返って大変だけど楽しい思い出だったと思えるようになるくらい君を幸せにするよ」

「カイル……なら私はいつかと言わず何年か以内にはあんたを幸せだと思えるようにしてあげるわよ。ここなら王子様や王様やつてるよりずっと刺激に満ちた楽しい日々を過ごせるだろうし」

「やれやれ……何日かで負けず嫌いになっちゃったな。セレナの影響かな」

「かもね!」

しばし張り合った後二人は自然と口を近づける。

ガサ!

「え?」

近くで草を踏みしめる音がして二人は音の方を向く。

そこには青い服を着て長い青髪を流した女性がいた。髪を束ねたり目元を隠せば男にも見えなくもない中性的な容姿だった。

カイルは女性を見て一瞬肖像画で見たマルスが現れたのかと思った。遠目でよく見

えないが左目に文様のような痣が見えるような…。

女性はまだ抱き合っているカイルたちから慌てて顔を背ける。

「す、すみません。……あの私何も見てませんからどうぞ続きを」

そう言いながらも興味があるのかこちらを横目で見ている。さすがに口づけから先をしようとすれば止めるか逃げるかするだろうが。

そんなカイルたちのもとに何人かが近づいてくる。

「カイル……人前で何をやっているの？ あの教皇もそこまでの性癖は持ち合わせていなかったわよ」

抱き合うカイルたちとそれを盗み見ている女性を目にして引いているクライネが、

「あつ！ カイルこんなところに……あれ、ルキナ！ こっちへ帰って来てたの？」

やつと見つけたカイルたちと知り合いらしい女性に声をかけるアズールが、

「おおホーリープリンセスにして我がソウルシスタールキナ！ あの世界で見ないと思つたら……まさか初代と未来の聖王が顔を合わせるとは、これも運命の選択か」

あいかわらず妙な言い回しをするワードが、

「あつ、カーシャ！ 私たちが転移したところにはいないから逃げたのかと思つたじゃない。ルキナそのミニスカ捕まええといて。気絶させてもかまわないわ」

カーシャを好敵手として逃がそうとしないセレナがやってくる。

「えっ！ みなさん戻って来たんですか？ アズールさんたちその髪の色は？ それにそちらの方々はみなさんの知り合い？」

ルキナと呼ばれた女性は思わぬ再会を果たしたらしい三人とカイルたちを見比べてどうすればいいのかわからず動けずにいる。

「……」

「……」

カイルとカーシヤは目を見合わせる。

ウードとセレナはともかくアズールとルキナさんとやらは男女間のことに興味津津な様子。この場で捕まったら根掘り葉掘りあれこれ聞かれるに違いない。

(カイルここはあれしかないわ)

(そうだな)

二人は言葉を出さず視線だけで意思を伝え一回だけうなずいた後、

全速力でその場から逃げた。

「あつ！ 待ちなさいよ」

「あ、セレナこういう時はあまり邪魔しない方が」

「待て待てカイル。せめてルキナにお前を紹介させてくれ。初代聖王のことを英雄王とクロム伯父さんの次に尊敬していたんだから」

微妙に低いな！

「この状況で転移を使ってカイルたちを捕まえるのも邪道ね」

千年後に来てカイルたちが最初に行ったのは仲間たちとの追いかっこだった。これから待ち受けている未来世界の復興作業の前の気晴らしと考えれば悪くはないかもしれない。

ルキナがカイルの末裔でこの世界での事実上の聖王だと知るのはこの日の夕暮れのことだった。

異郷の旅人 カイル カーシャ

ギムレーとの戦いの中ギムレーとともに第二世界から消失し最終的には第一世界の千年後に根を下ろした。その後の彼らのことは不明だがカイルとカーシャの二人はお互いを心から愛していた。それは間違いない。

元ラーズ教団の魔女 クライネ

第三世界のクライネはカイルたちに洗脳を解かれともに第一世界の千年後へ渡る。ほどなくその地で平凡な男性と知り合い結婚したという。

F  
I  
N